大正四年三月二十日印刷
大正四年三月廿三日發行

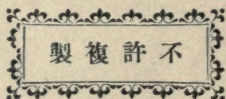
有朋堂文庫
淨瑠璃名作集下
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

さしき縫之介樣の御身代に、逞しき荒男の、畑介殿の首討つて實檢に入れ、大杉が逆意の工み見顯す、見出しの種の身代首、イザ是まで」と露散る光り、刃の下に畑介が、首は前にぞ落ちてけり。ハッとばかりに人々も、手向の一句表には、かねて合圖の尾上が迎ひ、首桶携へ入り來れば、「イザ此上は二方共、鎌倉へ御供して、大膳が方に奪取りたる、御綸旨を取戻し、再び御代に出し參らせん。恐れ有れど此乘物、時の用にはお赦し受け、お相輿に召しませい」と、殘る方なきはからひに、十内も氣色をかへ、「縫之介樣御生害、御檢使の尾上殿、お役目御苦勞〳〵」と、他人向なるおれそれに、首桶抱へ立出づる。聞きも及ばぬ女の檢使、惡びれもせずしづ〳〵と、別れを告げて出で行く振、内は回向の俱淚、外は勇みの揃への行列、振出す手先徒若黨、跡に引添ふ打かけの、姿も見事女文字、古鄕の晴は忠と義の、夜の錦や織替へし、花の身代世語に、殘す女の鏡山、別れてこそは出でて行く。

加賀見山舊錦繪　終

身を打伏し、前後不覺に取亂す、理せめて哀れなり。始終を聞いて縫之介、「心切なる汝が忠節、感ずるに猶餘り有り。扨又汝が今の詞、よつく思ひ合するに、忠臣無二と心に賴みし、源藏こそは心得ね、其方を謀り君を失ひ奉りし、其逆賊は大杉源藏、此上は油斷ならず」と、不審の詞姫君も、共に涙の聲くもらせ、「知らぬ事とて我君の、早まり給ひし今の其身、いとをしさよ」と御歎き、十內も泣く目を拂ひ、「御幼少より身持放埓、御舍兄にも御勘當、此年月の御艱難、いつ花實とて咲かずして、惜しや盛りを散らすか」と、遉三世の別れの涙、齒を喰ひしばり伏沈む、歎きの內に一間より、「御用意よくば縫之介樣、イザお腹召しませい」と、立出づる尾上の前、縫之介は差寄つて、「綸旨を失ひし其科人、我首討つて家の相續、偏に賴む」と首差延べ、思ひ詰めたる覺悟の體。「オヽ潔い御覺悟、花の方樣の御賢慮にて、お身代の首討てと、太刀取りかねし撿使の役目、主人尾上が名代として、心を盡し術を以て、先君の御敵を討亡し、主の尾上が志立てよと有る、重きお主の尾上樣の、御忠節を無にせじと、名聞の出世とも、譏らば譏れ名を捨てて、お志を立てたい爲」「オヽ此親も最前は、冥利に耽る不所存者と、勘當せしに樣子を聞き、安堵致せし身の大慶、御推量下さるべし」と、怒の涙引替へて、嬉し涙ぞ道理なる。日も黄昏の其時刻と、畑介が傍へ差寄つて、「此尾上が目利の身代、優にや

影に、身を潜め窺ふ所、大杉が追人と見え、險しく戰ふ其有様、時分はよしと川の面、水底を潜行き、馬に諸足切付くれば、たまりもあへず首掻切り、追人を遁れん其爲に、其儘首は水中へ、打込んで其場を遁れ、あれ是と見合す内、持氏卿にも御病死とや、力と頼む兄主膳も、御勘氣受けて行方知れず、時節を待つて歸參の願と、此鏡山へ尋ね登り、昔の好み十内が、情に依つて送くる月日、お二方の我をお頼み、エヽ天の與へ、我忠節盡さんは、此時節と思へども、エヽ口惜しきは其日を送るたつきとても、浪人者の相住居、お二方の御養育、何とせん角とせんと、迫る貧苦の剛敵には、力とても弱り果て、思ひ付いたる占やさん、十内と云合せ、愚な人を欺し衒り、盗賊よりも猶卑怯な、世渡りなして今日までも、心を盡す其折柄、今日はからずも上使の女、コレ此小柄を我に見せ、相撲川の其一件、聞いたる時の我悔り、天日を戴きて、片時の内も立つべきや、切腹とても武士の業、主を殺せし世の大法、竹鋸の此身の科、兎や角と案じ煩ひ、せんずる所君を欺かり、御敵と成つて、御手討をせめてもの申譯と、扨こそ斯くは計らひし。知らぬ事とは云ひながらも、敵の術にふはと乘り、三代相恩の御主君を、敵と思ひ討ち奉り、一つの功は立てたりと、今までも悦びしが、思へば思ひ廻はす程、弓矢神にも見放され、よつく武運に盡果てし、此身の上」と先非を悔い、せぐり上げたる荒涙、五體を震ひ

て、檢使に呼んだァ、軍平へ、今首にして渡す程に、覺悟せよ」と覺えの業物、如何は仕けん切りはづせば、刎返して縫之介、畑介が左の脇腹突通せば、うんとばかりに倒れ伏す。音に驚き十内も走出で、「コハ何事」と押隔つ。「妨すな」と打拂ひ、止め刺さんと立懸るを、「ヤレ若旦那今暫し、早まり給ふな只一言、申上げたき子細有り」と、云ふに十内詰寄つて、「イヤコレ畑介樣、日頃よりの貞節義心、夫に引きかへ此場の有樣、やうすなうては叶はぬ所、サア〳〵其子細何と〳〵」と問詰められ、「オ、其不審只今晴らす、鎭まつて聞いて呉れ」と、云ふより早く刀を拔き、左のあばらがはと突立て聲震はし、「非義非道を働いて、君を欺き奉り、御手にかゝる其子細、一通り申上げん。忠臣無二の紙崎が、弟とは生れたれど、若氣の至り身持放埒、兄主膳に勘當受け、所々方々と流浪の身の上、身にしむ秋も肌薄く、霜に臥し雪に立ち、何國を夫と身の佇み、飢に勞れて死なんず身と、成果てし其所に、仁木將監が逆意の樣子、聞くと等しくお館へ驅付きし所に、逆賊の源藏が計ひとは、露程も思ひ寄らざる此畑介、やみ〳〵と欺られ、相摸川へ落行くは、仁木なりと心得て、比は宵闇猶更に、降りしきる春雨に、川水高き相摸川、渡りも絶えて水音も、さも物凄く更行く空、雨夜の星とひらめく松明、遠目に夫と窺ひ見て、コハ源藏が詞に違はず、仁木將監此道を、落來るぞと心に悅び、としや遲しと松

難儀、何者とも知れず持氏卿の御召の馬の足を切り、御首を討つて立退さし、其曲者が取落せし、「二匹獅子の其小柄」「エヽ、スリヤ持氏卿には御病死ならず、相摸川にて御落命、ホイ」ハッと覺えの小柄睨み詰め、諸手を組んで一つ息」オヽ當惑なさんすも無理ではない、假初ならぬ命の心中、此場で夫と、ついちよつと心中も見せられまい、暮を限りにお前の心中、待つて居りますぞえ畑介樣」と、詞の目釘鯉口も、しめて小柄の判物、一間へこそは入りにけり。跡には一人畑介が、取つ措いつの一思案、暖簾の陰に縫之介、姫諸共に窺ふ體、夫と見るより思案を極め、「四も五も喰はぬ上使の女、縫之介が首討ちに來たと云立てて、實はおれを仕廻ふ氣で、爰へうせたアノ女、コリヤ大事に成つて來た。先を越されては後手に成る、ちつとも早く縫之介が首を討ち、かねて手筈の軍平を以て、大膳樣へ差上げん」と、大だら腰の不敵の畑介、奥をさして窺ひ足、イデ一討と納戸口、べつたり行合ひ顏見合せ、明いた口へ「二人が細首、覺悟ひろげ」と切込むだん平、さ知つたりと受流し、「主に刃向ふ人非人、切先に覺えよ」と、丁ど打つたる刃先と刃先、姫は危さ氣も絶えぐ、剛力の畑介に、切立てられて縫之介、ひるむ所を姫諸共、膝に引敷き剛氣の畑介、捻伏せく怒のどす聲、「ヤイ二人共によう聞けよ、十内初めわいら二人へ、貞節に見せかけて油斷させ、首討つて大膳殿へ進ぜる心で、鎌倉へ飛脚を立

ぞ悲しき。サア、其實の一つだになき花の、香は深うても實がなうては、先祖へ對し大の不孝」「アおつしやればそんな物、盛り短き人の身なれば、誘ふ水有らばいなんとぞ思ふ、世を萍の思ひのたけ、畑介樣、お前は何と思し召す」と、言はぬ色なる山吹の、口なし衣主や誰。畑介はうつかりと、現心に、「何が何と、身を萍の其のよるべも、誘ふ水有らば誘はれて、流れてくるお心かえ」「サア、マア心は心なれど、浮氣がちな男心、是ぞと見ゆる心中を見ねば」「返事のならぬも尤、イザ心中をお目にかけん」と、云ふより早く腰刀、拔きかくれば、「ア、コレ申し、そりや指をお切りなさるか、是は又お前も初心な、若輩な心中立、オ、阿房らしい」「ム指切るがお氣に入らずば、腕を突かうか股を突くのか」「イ、エイナア、私がお前にお望み申す心中は」「サア其心中は」「お前のお首が貰ひたい」「ヤア何が何と」「サア二つないお命が心中に貰ひたい」「ム、コリヤ面白珍しい、類のない心中ぢやはえ。其又命が心中にほしいと云ふ、其方の心は」「サア其心とて外にはない、コレ此小柄が其心」と、投出したる覺えの小柄、見るよりぎよつと畑介が、手に取上げて見て恟り、「ナニ此小柄が心中を、望むと云ふ其譯は」「ソレ其小柄御覽じたか、足利家の御重寶、家彫の二匹獅子、紙崎の家へ拜領有りしは、世の人の知る所、先君持氏卿御病死とは僞り、日外仁木が騷動の節、相摸川において不慮の御

めは是の掛人、畑介と申す居候。してお前樣は何御用で、お出でなされたお方樣」と、何喰はぬ顏知らぬ振。「ムウ此家の掛人と有るからは、アノマアお前樣が聞及びました、畑介樣でござりますか。存ぜぬ事とは申しながら、無禮の段はお赦し」と、會釋こぼして手をつかへ、敬ひかし付く其風情。「ア、申し〳〵、これはマア何とした迷惑、モシエ、私めは其樣に、お歷々のお前方に、結構な御挨拶受けまする者ぢやござりませぬ」と、身をうぢ〳〵とかゞみ居る。「子細お咄し申さねば、御合點の參らぬ筈、私事は十内が娘、初とまうします者でござります。樣子有つて取上げられ、この身分とは成りたれども、親十内が御主人、主膳樣の弟御樣、御流浪の御樣子も、よう存じて居りまする。人の流と水の行末、飛鳥川の淵瀬定めなく、御家來の娘が御主樣と肩を並べ、其弟御樣が、其家來の世話にお成りなさるゝといふも、時世とておいとしぼや、世は小車の浮き沈み」と、かこち涙の優しくも、心を汲みし詞の色、畑介もしを〳〵と、差俯向いて居たりしが、「テモ扨も〳〵御深切忝い、とは云ふものの昔は昔、今は今の其方の身分、家來あしらひはマア是切。ナニお女中樣、アノ水鉢の山吹の花、人の身に譬へていへば、やもめ女見る樣なもの、ナ、何と思し召しますえ」「アノ山吹を人に譬へ、やもめ女子見る樣なとは」「ムウ、七重八重、花は咲けども山吹の、實の一つだになき

奥女中、尾上殿とやらいふ御歴々、御上使とは身に取つて覺なけれど、イザ先あれへ御通り」と、刀引提げ不承々々、土下座を切つて控へ居る。「上使とて別儀ならず、其方事、お家の一家老紙崎が家に其昔、長役勤め居たりし高木十内といふ名苗字まで、子細有つて上には御存じ、然るにさいつ頃綸旨の紛失、御舍弟縫之介殿御申譯立ち難く、姫君諸共御行方知れず、所々方方御在家尋ね捜す其折から、此鏡山に蟄居なせし其方が方に二方共、かくまひ忍ばせ參らす由、事明白に注進に及ぶ。奥方花の方樣の御賢慮有つて、此尾上を檢使の役、京都への申し譯、縫之助樣の御首受取り歸るべき旨、ホヽヽヽ本にマア有られもない、女の役目不相應も、主命は背かれずと、是非なう申し上げまする、女だてらに子細らしい、鹿爪らしい口上を、ホヽヽヽ」と袖覆ふ。始終の樣子十内も、當惑せしが思案を極め、「ムウ委細の事注進有れば、陳ずるに詞なし。花の方樣の御賢慮、女中の檢使、此上は御諚のごとく、縫之介樣の御首、御檢使へ御渡し申さん。暫しの內、あれなる一間へ御休息下さるべし」と、胸と胸とを隔の襖、明けて言はれぬ親と子が、拔指ならぬ手詰の切刃、鍔目を合す一思案、伴ひてこそ入りにけり。門に立聞く畑介が、何氣ないふり酒徳利、勝手見廻す納戸口、此方は障子押明けて、出づる尾上を畑介が、不思議さうに打眺め、「是はまあどなたかは存じませぬが、ようマアお出なされました。私

い、控へて居よや」と押鎭め、制せられて附々も、鎭りかへつて控へ居る。尾上は猶も恐入り、「お腹立の一々、さら〳〵無理とは存ぜねど、是を斯うとの云譯は、親にも打明けて、云はれぬといふ大切な尾上樣のお志、立てる忠義は神ならで、外に夫ぞとしら露の、心の内のせつなさを、宜きに推量下され」と、涙に咽び詫びにける。「親に云はれぬ忠義といふは、ろくな事では有るまい〳〵、名聞欲の立身出世、出かし顏の忠義穿鑿、勘當ぢや、出てうせい」「エヽ」「イヤサ勘當したは大恩有る尾上樣の御兩親へ、せめてもの身が云譯、大切なお主を失ひ、娘めが其代に、褒美の出世致せしと、どの頰下げて何面目、勘當は愚な事、生替り死替り、五百生も生をかへ、又と面は合さぬぞ」と、義に凝りせまる一徹の、裏は子故の悲しき恩愛、見せじと隱す親心、裏の裏なる節義の涙、まぶたを洩るゝばかりなり。云詰められて詮方も、詞なく〳〵表に向ひ、「コリヤ皆の者、道々も云聞かす通り、大切な御用承り、尋來たりし其譯を、勘當請けしアノ父樣へ、一通り申し談ずる其間、次の村代官が方に控へ居て、暮を合圖に迎ひの節、云付けた品持參せよ」ハッと受けたる家來共、跡の村へと急ぎ行く。折柄戻る畑介が、來かゝる門に立聞の、内の樣子を窺ひ居る。尾上は詞改めて、「何申し十内殿へ、足利家よりの上使」「何御上使」「アイ、上使でござります」と、さも重々しき其勿體、「管領家の

身とも譽れとも、人も譽め名をも殘す、大恩受けし大切な御主人、敵の爲に自害なされ、其敵討つたはよけれど、御褒美とて取立てられし、其御主人は何人ぞ。儕が主人の又御主人、如何に御意が重いとて、陪臣の身分として、直參と成つて主人の跡役、主の名まで下されたとて、よし〳〵と其名を名乘り、いかめしげに忠義呼はり、第一が御主人へ無遠慮、コリヤヤイ、何程主の主ぢやとても、我が主ではない、其方が御主人ではない、我が主人と頼みし人は、自害なされた尾上樣なるわやい。外の主人に取立てられ、嬉しいの有難いの、譽れぢやの手柄のと、名聞振つた賣物忠義、心有る人々は、爪はじきして笑ふはやい。畢竟主の不仕合が、其方が爲の仕合と成るは、お主の災難が家來の身の吉事と成つた無理出世を、儕はきつく嬉しいかいやい。形は產めども其樣な、根性には產付けぬ。オヽ出かした忠義者ぢや、其性根から身に纒ふ、古鄕へ飾る錦の袖も、身共が眼からは綴と見える。乞食め、非人め、其腐つた魂で、ひけらかしにうせた人畜生、見るも中々忌ま〳〵しい」と、竝べ立てたる土產の卷物、立蹴にはたと蹴散し〳〵、一句一言道理の道理、云詰められて一言の、返す詞もなき入るばかり、淚の外に答なし。傍に聞きゐる附々は、「シヤ法外者赦されず」と、反打ちかけて詰寄るを、「アヽ是々慮外せまいぞ。今お呵りの其一々、此身の上にひしとこたへて、御返答に詞もない。騷いで見苦し

「ムウ驚き入つた出世の樣子、土産物の美々しさ、子細こそ定めて有るらめな」「アイ其子細と申しますは、大切な尾上樣、岩藤と申す局役に辱めを受け給ひ、アノ御自害なされましたわいなア」「ナニ御自害なされしとや、シテ〳〵其跡は如何ぢや〳〵」「大恩受けしお主の敵、其場を去らず御殿にて、岩藤を討止めましてござります」「何ぢや、當の敵を其場も去らず討止めしとや。ムヽヽ適手柄、出かした〳〵。扨又出世の其譯は」「サア其敵岩藤を討止めし御褒美とて、尾上樣のお跡役、中老役にお取立て、名をも二代の尾上と下され、冥加に餘る此身の出世、まだ其上に有難い御意には、お前の事までお尋ねの上、出世の姿親にも見せ、悦ばすが孝の道ぢや、諺にも古郷へ錦を飾る其本文、三十日の日數のお暇、遙々と尋ね登りし今日の今、何に譬へん嬉しさを、御推量遊ばせや」と、功成り遂げし悦びは、涙に含む其風情。聞く親の身は猶更と、思ひの外に十内が、顔色筋をあらゝげて、「スリヤ敵討つた其褒美、其身に咲かす花の出世、其方嬉しいか。人たる者の立身出世、願はぬ者はなけれどもな、爰な道知らずめ、今我が云並べたる忠臣顔の立身出世、忠の道に似た畔道の、是を名付けて横に歩行く蟹忠の道といふわいやい。コリャよつく聞け、誠忠義の譽といふはな、御敵を討亡し、御主人を助け參らせ、其身も君に取立てられ、君臣共に全うして、目出たく君に仕ふるを、立

いお客がとれて、今日は思はぬ好いまうけ、祝事にお神酒上げう」「如何樣まんの直つた目出た酒、肴は私がして置かう」「そんなら酒屋へ一走り、いて來ませう」と畑介は、勝手見廻し缺徳利、とつかわとして出でて行く。憂かりける、世も引替へし今の身の、花咲く春にあふみ路へ、鋲乘物の光りさへ、名も照添へし鏡山、古郷へ歸る唐錦、油箪掛けたる挾箱、對の六尺打物も、所目馴れぬ供廻り、駕脇の小侍、門口に小腰を屈め、「卒爾ながらお尋ね申さん、十内樣には御在宿下さるや。鎌倉より御息女樣、只今是へ御入り」と、聞くに驚く十内が、表を見れば美々しき其體、不審晴れねばにじり寄り、「見ますればお歷々の御女中樣を、娘に持ちし覺はなし、定めて夫は人違へ」と、云ふ間に夫と表の方、駕前にひざまづき、「御賢父樣御在宿、イザ御對面」と駕の戸を、明くる間疾しと立出づる、お初も今は咲く花の、世に開きたる出立榮、彌生時服の合白に、三千年祝ふ桃色の、打掛姿たをやかに、しづ〳〵と打通り、我家ながらも面映く、父の前に手をつかへ、「先何よりはお爺樣の、御機嫌のお顏を拜し、お嬉しう存じまする。付きましては私事、思ひ寄らぬ身の出世、譯はゆるりとお咄し申さん。遙々と鎌倉より、長の旅路のお土產とても、心ばかり」と詞の下、飾立てたる白臺に、沙綾縮緬の卷物を、目通りに並べ置く。十内は默然と、手を拱きて居たりしが、さも不思議氣に顏打眺め、

入つたる貴公のお詞、此上に何疑ひ、御存しの通り旅の空、有合せたる路銀の有るだけ、斯くの通り」と懐中の、打違より小判三兩、おづ〳〵と差出し、「是は至つて些少ながら、お初穂の眞似事、先何よりは急難の、首の所を御祈り」と、四角四面に相述ぶれば、畑介は不承々々、「コリヤ何ぢや、たつた三兩、大層な祈禱を云付けて、たつた三兩の目腐り金では、先此方は得致さぬ。脇をお賴みなされませ、おいとし樣や」と入らんとす。「ア、申し〳〵、是非々々祈禱を賴むぞとよ」「イヤ〳〵、とても是では祈られぬ」「夫は餘りお胴欲樣でござります」と、ぐんにやり軍平思案を廻らし、「ヤナニ、コリヤ〳〵、コリヤヤイ、家來共やい、わいらも今聞く通り、主人の災難救ふは忠臣、違背有るまい。其方共が嗜みの、路銀を何卒貸してくれ」「何がさて〳〵、主君の爲と有る事なら、何しにいなみ奉らん」と、てん手に出す懐の、壹歩貳歩を取集め、「御覽のごとく家來眷族、取集めました所がやうやく壹歩が、ハア一二三四五、ハイ六步ござります。御受取り下されて、よきに御祈念願上奉る」「オヽ此上は障りなう、武運長久御祈り申せば、お氣遣は少しもなし、目出たう受納致した」と、聞いて軍平氣も落付き、「ヤレヤレ今は心もさつぱり、少と夜の明けた心地せり。然らばお暇」「早お出でか」「委しくは鎌倉より、おさらば」「さらば」も門の口、きほひ勇んで立歸る。跡に二人は寄りこぞり、「テモ味

にて、わつと聲上げ泣出す。「ア、コレ〳〵、まだ有る〳〵、お前の祕藏になさんす三毛猫も」「夫が何と致したえ」「サァ六月二十九日の夜、犬に噛まれて死んだと見える。サテ〳〵氣の毒千萬」と、聞くよりいつそ淚も留り、ぎつく〳〵としやくり泣、雨氣上りの蟇、灸をするゑたる如くなり。「オ、道理々々、其樣に思はんす事なら、祈禱でも、ア、イヤ〳〵、まだまだお前の氣が直らにや」「ア、申し〳〵、モウ〳〵是切にとんと心を入れかへますわいな」「スリヤ眞實惡心を飜す心かえ」「是がまあ飜さずに居られませうかいな。イヤ申し、此首の落ちぬ樣、祈禱してさへ下さらば、死んでも御恩は忘れませぬ」「ム、其心なりや私も又、首の落ちる災難を、祈り退けて進ぜる心ぢやが、此祈禱は一通りの、安い初穗では祈られぬ。先神前の飾付、供物の數が日數に表し、三百六十四品を飾り、綾や錦の水引戸帳、神酒も並酒は成らぬなり、伊丹劍菱男山、菰被の數十二樽、是も十干の數に合せ、靑幣には靑ざし百貫、白幣には南鐐の、雪の白銀花を咲かせて、大三寶へ山盛に、是を獻じて米屋に酒屋、薪代家賃、節季々々の溜りおどもりくさ〴〵の、かより穢と科戸の風や八重の鹽路、日向のをどの橘の、甚だ早き潮を以て、祓ひ給へと祓はすれば、其罪科の災難障り、さつぱり祓ひ捨てさへすりや、首落の難受合うて、除いて進ぜる我法力、斯くの通り」と出放だい。「ハ、ア驚

は、蓍木取出し押戴き、暫し考へ居たりしが、横手を丁と驚く顔色、見るより軍平氣をいらち、「イヤ何先生、殊の外の御驚、如何の儀なるぞ、早く樣子を聞かし召されい」「サア、扨氣の毒千萬、全體此卦が首落損といふ卦で、變爻は離の卦に當つて中切れたり、何でも物の離れる心ぢやが、何ぞ心當がござりますか」と、問はれて軍平諸手を組み、小首傾け居たりしが、「ハア、奇妙〳〵、某鎌倉を蹈出す時、我等が女房は懷胎、又祕藏の三毛猫、こいつも懷胎、相孕は天地開闢の忌言と、孫子吳子も云はれしが、兎角是のみ氣に懸る、片時も早く卦の面、占召され」と氣を急いたり。「サア面をいへば斯うでござんす、お前は生得正直な、善い人で有るけれど、生れ付いて欲深く、惡人に一味して、大切なお主樣を、縛れ括れと鵜の目鷹の目、惡人に方人なさんす故、天道の憎しみで、遠くは三日、近くては今宵中に、お前の首は落ちるぞえ」「何と、すりやあの天道樣の憎しみ故、此軍平が首は今宵中に、すぽんと落ちるかな」「如何にも左樣」「スリヤ此首が、ハア、エ、能くも武運に盡き果てし」と、目に持つ涙ほた〳〵〳〵、齒の根も合はぬ風情なり。畑介猶も頭に乘つて、「オ、悲しいは尤ぢやが、まだ氣の毒なことが有る。お前の內儀もお前に似て邪見な故、殊の外な難產で、いかう苦しんでござるが、命の程が危い〳〵」「ヤア〳〵夫はマア本かいの、是なう〳〵」とばかり

が、聞濟まして立上り、押入の戸へ相圖の咳、戸棚の中をそろ〳〵と、後へそつと畑介が、廻つて出づる表口、何氣ないしよう通しの魂膽、內入機嫌にこ〳〵と、「ホヽウ作左衛門樣、お侍樣、どなた樣も御免々々〳〵」とお家の眞中、包おろせば十內が、「サテ〳〵今日は遲い戻り〳〵、此お二人も最前から、貴公の戻りをお待ちかねぢや」「ハイ、イヤモ今日は廓の門を這入るや否や、ヤレ待人よ失物よと、煙草一ぷく呑む隙なく、ヤレ〳〵えらう草臥れた」と、包解けば十二銅、見るより庄屋は呆れ顏、畑介は會釋して、「イヤ申し作左樣、先お前樣から見ませうと、算木取出し鹿爪らしく、「ハア、コリヤむづかしい卦ぢや、色道トチナンピンといふ卦ぢや。色事と見えますわいな」「ヤア、あの私が願が色事と見えますかいの」「見えるとも見えるとも。しかもコリヤ外から燒餠で、惡い病が有るというて、お前と緣を切らうとしたるやつが有る」「ヤア其燒餠まで見えますかいの」「見えるとも〳〵。其邪魔するやつの方角は、エヽ辰巳の方、武佐の邊の者で有らう」と、戸棚で聞いた一通り、云並べられ、「テモ扨も、氣疎いは、是程にまで合へば合物か、ヤレ〳〵怖い見通し、モウ〳〵お暇申しませう、皆樣是に」と云捨てて、我家を指して歸りける。跡見送つて軍平は、さもいかめしく膝摺寄せ、「見通しと有れば、此方より申すに及ばず、占ひ申す其一件、見通してくれめせ」と、賴みかくれば畑介

つとマア蒂と成り、ふが〳〵に成つては濟まぬが、若し又夫も外のやつが燒餅で、藁を焚いて邪魔するのか、そこがとんと分らぬ故、此占が見てほしいのぢや」「是は〳〵、先以て風流な面白いお願ぢや。シテ邪魔仕さうな其わろは、お心當がござりますか」「サレバ〳〵、其邪魔方めは武佐の宿の問屋めぢやが、心底行かぬやつぢやて」「ム、、武佐の者とおつしやれば、爰から方角はかう〳〵」と獨言、「丁ど辰巳へかよつてる」「コレ〳〵ソリヤ何事を云はしやるぞいなう」「ハイヤ、私も此間は、アノわろに八卦の稽古、夫で方角を考へました」と、ぬらりくらりも世渡りの、筈を合せる折こそ有れ、一目にしるき鎌倉武士、家來引連れ權柄眼、案内もなく内へ入り、「跡の村にて噂に聞いた、正銘見通し占者とはお身がことか、大切なる尋者、詮方盡きた折に幸、一算頼む、ソレ早く〳〵、サア早く占へ」「是は〳〵お歴々樣、お急ぎの樣子なれども、カノ占者只今は宿に居りませぬ、モウ今に歸りませう、イザ是へ」の挨拶に、遠慮荒しこ打連れて、上座にむずと押直り、「身が事は定めて音にも聞きつらん、鎌倉足利殿の御内において、原田軍平實永といふおれき〳〵、管領家の弟縫之介といふ徒者、細川家の息女操姫、夫婦連の駈落者、八卦の面に考へさせ、行衛尋出すにおいては、褒美はきつと山吹の、黄金の花を咲かせてくれん」と、髭撫上げし緩怠頰、始終の樣子十内

も氣の毒の、眉に皺寄せにじり寄り、「夫を私もいふ事ぢやて、行かぬ中へ此頃見れば、わいや〳〵と口がふえて、其仕がくはどうしやると、陰ながらも思うてゐた。ヤ夫はさうと、アノ貴樣と一所に爰へ見えた浪人殿、樣子を聞けば身過の占は上手ぢやと、村の者が噂するが、私も一算見て貰ひたいが、宿にならば賴んで下され」「サレバ此四五日は八卦も隙故、此鏡山の傾城町へ、辻賣の占やさん、モウ戻ります時分なれば、今少しお待ちなされ。ドレ澁茶なと御馳走に」と、爐へさしくべる一煎、自在の竹も眞直な、正直正路馬鹿律義、庄屋殿顏も打ちやつて、「イヤ何十内殿、考へて貰ひたいと云ふ其子細はの、へゝ、ホゝ、どうやらわしや云ひにくいわいの」「デモ譯おつしやらんと知れませぬ」「そんなら云ひませう、アノノ、色事の事ぢやわいの。ホゝ、オヤオヤ恥しうて云ひにくいわいの」「サアおつしやりませいな」「そんなら死ぬると思うて云ひませう。アゝよい年をして、貴樣の手前も面目中橋おまんが若後家、どう云ふ緣か惚れたが因果、村中へ對し、此樣なみだらがましい事しては、庄屋の役目がとんと濟まぬと、嗜んで見ても情なや、朝晩かのめが路次の出這入り、見れば見るほど彌增す戀路、一日逢はねば百の錢、續けて遣りたい私が氣を、知らずに暮す彼女、此中聞けばいやな噂、きやつめには瘡氣が有つて、前度大きに煩うたと聞いて、アゝイヤ待て暫し、何程戀は叶うても、自慢してゐる此鼻が、ひよ

かわ戻る我家の軒、内へ入るより邊を眺め、「コレハ〳〵畑介樣、嘸お待ちかね、かのお二方は」「アヽイヤお二人は今奥へ」「夫は重疊々々。扨内證の工面に、方々と歩いて見たれど、モ行かぬは金、兎角頼みはお前の占。ャとやかう云ふ内まう晝過、お客達も來る時分、御苦勞ながらいつもの通り」「オヽ合點ぢや」と押入の、戸を押明けてそろ〳〵と、這入り四這跡引立て、煙草くゆらす納め顏、折柄ひよか〳〵表口、ぬつと這入つて、「頼みませう、庄屋の作左でござる、十内殿はお宿にか」「ホコレハ〳〵御遠慮深い、萬事お世話に成りまする私、御案内とは」「イヤイヤさうでおりやらぬてや、何程今落ちぶれやつても、親父の代までは此村の長百姓、親御の代に身上仕縺れ、打續く不仕合に、親達始め内儀まで、ばつた〳〵死果てられ、乳呑子の娘を連れ、知邊が有るとて鎌倉へ下られたに、又此春は内儀の年忌と、奇特にも戻られて、終づる〳〵と在所住居。何とマア、アノ結構な鎌倉に居馴れた身で、片田舍の在所住居は、小淋しうて嘸わるかろ。ヤコレ、少し又此方の内へも咄しにござれや」と、奥底もなき深切咄し。「コレハ〳〵御馴染とて、御懇切なお詞、今おつしやります通り、私も鎌倉の縁者を頼み、あれ是とする中にも、娘一人を心の樂み、其娘めも成人致し、今は鎌倉の管領樣の、奥女中へ奉公仕りますれば、身がら一身の今の氣散じ、夫に又此程は、鎌倉の縁者共より、據ない夫婦連の掛人」と、聞いて此方

廡、門に懸けたる看板も、世のたつきなる占やさん、墨色薄きかせ世帯の、春の寒さを袖屏風、肘を片しき轉寢も、在所淋しき侘住居、馴れていつしか操姬、窶すとすれど自ら、鄙に目馴れぬ褄はづれ、差寄つて、「コレ申し、又お風召さうぞえ、申し〳〵」と搖り起され、やつと目覺す縫之介、「ヤア道芝か、死んだと聞いた其方がマア、何として此有樣」「イヤ申し縫之介樣、そりや何と御意遊ばす、ムウこりや夢を御覽じたの」「ヤ本に夢で有つたか」「道芝ぢやないかとは、マ面白さうな」「サア變つた夢ぢや聞いてたも、其方と私が鎌倉から、爰へ來る旅の空、越知川の渡場で、道芝が幽靈に」「オヽ怖」「オヽ怖い筈〳〵、其方と二人此私を、我夫ぢや我夫と、競り合うた夢見たは、執著深く迷うて居るか、可愛や」と、云ふ顏熟々うち眺め、「同じ女に生れても、思はるゝ身と思はれぬ、身は夫程に違ふかえ。道さへ分かぬ深山路の、木々にも花は咲くもの」と、ぴんと尻目は有りふれし、涙ぞ戀の戀ならん。聞くにもじ〳〵縫之介、手持無沙汰の折も折、立出づる畑介が、「イヤ申し若旦那、世を忍ぶお身の上で、端近の轉寐、今にも主が戻つたら叱りましよぞえ。又操樣も操樣」と、心付くれば縫之介、「本にさうぢや、十內の歸らぬ內奥へ行き、サア其方もおぢや」と手を取りて、わりなく見えし妹背中、打連れ一間へ入る跡へ、浮世とは、今ぞ身に知る十內が、心のしがく內證の、工面の胸も晝下り、とつ

の鳥と泣明す、籠の鳥かや恨めしや、秋の夜長に牡丹花の、燈籠踊の一節に、殘る暑さを凌がんと、大門口の黄昏や、いざ鈴虫を思ひ出す、つらい勤の其中に、可愛男を待ちかねて、暮まつむしを思ひ出す、蟲の聲々可愛らし。我が住家は草葉にすだく、露を枕にさはらば落ちよ、泣いて夜毎の妻ほしさうに、晝は物憂き草の蔭、冬は落葉に、戀の山道踏分けて、染木々々には、草葉も枯てサイナ〳〵、君が心に木がらしの、踏分て染木々々には、草葉も枯れて、サイナ〳〵、君が心は木がらしの、草に吹きしく朝の霜、木の間のしづく置きそへて、イザ此方へとゆふ暮の、茜さす日もそめいろの、山の端隱れ諸羽がひ、手に手をとりの夕告時、姫はやらじと留むる袖、引きぞわづらふ花と花、顏に照りそふ楓の綻び、裏吹く紅の夕紅、裳ほら〳〵散りかふ風情、はてしなは手の一筋を、二道かけしあだ櫻、散行く影の花の吹雪、花の鏡の川の面、跡しら浪ち夢の夢、覺めてはかなき　三重。

第九

夢の世に、年經ぬる身は老いにきと詠じたる、大宮人の言の葉に、鏡山の里離れ、軒も疎の片

道行く人の今教へし、越知川と云ふは是で有らうが、折も折と渡しも絶え、ハテどうがな」と見やる向ふ、岸に添うたる笘船を、是幸ひと嬉しさの、堤傳ひに聲はり上げ、「ナウ〳〵其船へ物申さん、急ぐ旅路の足弱を連れ、渡しもたえて難儀致す、浮世の情渡してたべ、なう船人」と呼子鳥、覺束なくも夕霞、一圓の心火炎々と、立覆ひたる笘舟の、内には花の立姿、世をうき船の梶枕、戀中川の深き瀬も、朝妻船と世の夢の、覺めてはかなき道芝が、馴れし廓の一つまへ、著つゝ馴れにし水馴棹、指す手引く手も全盛の、里の姿を其儘に、影を三つ瀬の渡し守、見るや二人も夢現。操「ア其方は道芝ぢやないかいの、ホンニさうぢや道芝殿、不思議な所で」道「ア、コレ〳〵必ず麁相云ふまいぞや」縫「ムウ何とも不思議晴れやらぬ、今は此世になき人の、此浮船に此姿は」道「夢ぢやわいな」縫「ヤア何と」夢幻の有りや無し、露置く日陰稻妻の、光待つ間の仇し夢、憂き川竹の底深く、浮みもやらぬ流れの憂き身、憂いぞつらいぞ勤の習ひ、烟草呑んでも喜世留より、咽が通らぬ薄煙、泣いて明かさぬ夜半とてもなし、人の詠となる身はほんに、しんくまんくの苦の世界、四季の紋日は小車や、先春は花のもと、手折りし枝を樂しみて、床に詠むる春の風、そより〳〵と花吹散らす、ちらり〳〵と櫻の薫り、野山を寫す里景色、夏の曙有明の、つれなく見えし別れ鳥、ほぞんかけたと囀るは、死出の田長や、冥途

第八　道行戀の幻

なき影の、絶えぬも同じ涙川、寄るべ定めぬ浮船の、甲斐なきえにし薄雲に、幻衣のはかなさも、餘所は眺めの櫻時、月と花との二人連、結ぶとすれど解け易き、撚片絲に縫之介、消えにし露の道芝が、なき魂慕ふ戀衣、思はぬ人を身にかへて、立てる心の操姫、ならはぬ旅の妹背鳥、鎌倉山の朝まだき、霞とともに日をこめて、世を忍ぶなる形振も、曇り勝なる花曇、胸の曇も晴れやらぬ、思ひの影の鏡山、近江路さして行く空も、片思ひなる中津川、樫上坂もいつしかに、漏らさぬ水の桶峽、戀の重荷のうき寝鳥、君におほ田の戀中も、深き鵜沼の宿越えて、末の松山長柄川、御影寺の誓蔭頼む、今の憂き身をくいせ川、六の渡りの舟呼ばひ、いつしか花の心とけ、互に思ひあを墓の、其中山のさゞめごと、言はぬ色なる床の内、實の一つだになき花の、氣強いお方と目に漏るゝ、涙にせぐり關川の、寢物語のうさつらさ、結ばぬ夢もさめが非に、番場鳥居本打過ぎて、流るゝ日脚よどみなき、越知川にこそ著きにけり。姫は猶更行き惱み、只さへ旅は憂き物と、其言種もまして又、人目忍ぶの憂き旅と、胸もせまりし露涙、しをるゝ花の一しぐれ、「オヽ道理々々實誠、踏みもならはぬ道もせに、世を忍ぶ今の憂き身、

ャ合點がいたか」と詞の謎、胸にこたゆる大膳は、空嘯いてさあらぬ體。敏きお初は心付き、「斯くまで深き御惠、御意を返すも恐有れば、宜しくお請お取なし、源藏樣」とわるびれず、おめず揚うてぬ取廻し、實に中老の役柄も、恥しからぬ風情なり。「いざ拜領の此小袖、早改めて」と、女中の口々。お初は面目身に餘り、「お請致せし上からは、早速衣服改めて、御禮申す筈なれど、せめて尾上が野邊送り、やはり此儘此の形で、供を御免の御願、偏に願ひ奉る」と、道を立てたる貞實心、花の方も感心有り、「オヽしをらしき初が願、聞屆けたり、勝手次第」と仰の下、大膳は不興げに、「ナニ源藏、落著の上は片時も早く、見苦しき女が死骸、御殿の穢片付け召され」と、云ふに源藏二の間の口、「イザ女中達、乘物をかき入れて、廣敷まで出されよ」と、詞に隨ひばら〳〵と、涙拂うてかき上ぐれど、昨日までも今朝までも、お情受けし尾上樣、いたはしさよと女氣の、又取亂す咽び泣。お初は跡に引添へど、涙も限り盡果てて、歩むも行くも夢の夢、胡蝶の夢は悟れども、悟りかねたる愛別離苦、會者定離ぞと定なき、夜半の嵐に花散りて、惜しや可愛や手向草、主は消ゆれど名は朽ちぬ、忠臣義女の道廣く、館をはなれ 三重 出でて行く。

きがらを、涙ながらに跡や先、女力のしを〳〵と、蒲團の儘に舁き出づる。源藏立寄り死骸引上げ、打返しとつく〴〵と改め、「相違なき自死、とく〳〵と見分仕候」と、申上ぐれば花の方、「ヤイ、初とやらん出かしたり、其場を去らず主の仇討留めしは、武士も及ばぬ忠臣の程、オヽ神妙にも健氣なり。其忠臣を感ずる餘り、今より取立て中老役、其名も直に二代の尾上、血汐に觸れし彼が衣服、改めさせよ」と仰の下、世も廣蓋に一重、お初が前に差出せば、思ひも寄らずお初は只、伏拜み〳〵、有難涙にくれゐたる。大膳がむつと頰、源藏は詞を改め、「君々たるの御はからひ、感じ入り奉る。イヤナウ尾上殿、殘る方なき御前の首尾、お羨しう存ずる」と、詞遣ひも早夫と、打つてかへたる折目高。お初は何と挨拶も、暫し控へてゐたりしが、恐入つて手をつかへ、「勿體なくも賤しい此身に、空恐しき御懇の御意、有難いとも嬉しいとも、申し上ぐる詞もなし。たゞ此上のお情には、せめて主人の菩提の爲、尼法師とも樣を變へ、跡弔ひたき御願、偏に願ひ上げます」と、眞實見えし主思ひ、並居る女中も俱涙、袖より袖や濡すらん。花の方も御聲曇り、「女たる身の鑑と成る、願の一條感ずるに猶餘り有り。去ながら、尾上が自害は私の意恨ならず、此の密書、イヤナニ此の書置、スリヤ其方が忠心も、仇を討ちしといふばかりで、主人尾上が志を立てやらずば、全き忠とは云はれまいぞよ。ナ、コリ

腕むずと取り、組ふせんと金剛力、押せども突けどもひるまず去らず、一心凝つたる主の仇、かよわき力にふりほどき、付け入り〱挑合ひ、「念力通す恨みの刃、請取り給へ」と名乗りかけ、柄も折れよと突通され、流石の岩藤七轉八倒。物音聞付け女中方、てんでに長刀引きそばめ、御前を守護し取圍む。次の間より大膳源藏、おつ取刀に駈け來り、此體見るより驚く大杉、大膳お初をはつたと睨め付け、「ヤア儕大膽者、御寢所間近く劍戟を振ひ、大老たる岩藤を手にかけし不敵の段々、一分だめしの刑に行ふ、覺悟ひろげ」と呼はる聲、漏れて奥より花の方、女ながらも天性と、備はる武威の功や、しづ〱と出で給へば、ハッとばかりに大膳大杉、仰は如何と控へ居る。お初は嬉しく岩藤を、心の儘にとゞめの刀、報は早き斷末魔、心地好くこそ見えにけり。遙か下りて懐中より、一通取出し尾上が同席、藤江が前に手をつかへ、「此書付こそ主人尾上、心を込めし密書なれば、憚りながら御披露」と差出せば、「ソレ此方へ」と花の方、手に取上げて封押切り、奥より端を繰返し、見給ふ體にお初が安堵、「もう此上は片時も早く主人の供」と、既に自害と見えけるにぞ、「アレ停めよ」と花の方、仰に人々立重り、「御意ぢや〱」にお初はハッと、恐入つたるばかりなり。花の方は氣色を正し、「ナニ源藏、思ふ仔細有るなれば、尾上が死骸目通りにて改めよ、早とく〱」の仰に連れ、變り果てたる亡

傍で見る目の齒痒くて、さつきにも淨瑠璃の譬を引き、お心を引いて見れば、鹽谷判官の短慮なも、無理とは思はぬ尤ぢやと、おつしやつた時の其嬉しさ、其お心に張が有らば、天晴お手はおろさせぬと、悦びは悦びしが、ひよつとお前が淨瑠璃の、鹽谷判官をなされてはと、態とお前をお宥め申し、透を見合せ岩藤を、一刀に刺通し、御恩を報じ奉らんと、思ふに甲斐も今宵の有樣。お書置の此面、追付け敵岩藤が、首引提げて御無念の晴らさしませう、必お待ち遊ばせ」と、意恨の草履手に取上げて、打詠め／＼、無念の涙血を灑ぎ、凝り固りし烈女の一念、義女の其名を末の世に、錦と替る麻の衣、女鑑と知られけり。夜も早初夜を告げて行く、お夜詰觸の音冴えて、鐵行燈の光りさへ、いとゞ淋しき長局、胸撫でおろし手を組みて、思ひ詰めたる其眼色、氣も張弓の三日月も、入るさの影の暗紛れ、手水鉢に差寄つて、柄杓持つ手もわなわなと、救ひ上げたる水一口、恨みの草履片手には、血汐滴る尾上が懐劍、片手片足の早ねたば、庭の千種に泣連るゝ、蛙の聲の物凄し。邊見廻し奥の間へ、眞一文字に 三重 駈り行く。忍び入りたる奥御殿、折節人もとだえしは、天の與へと猶奥深く伺ふ折柄、何心なく岩藤が、出合頭は最究竟、待設けたる九寸五分。「中老尾上が召仕、主人の意恨覺有らん」と突ッかくる。此方もしれ者身をかはし、「ヤア推參なる下司女」拉いでくれんと裲脫ぎ捨て、お初が利

辻占の今の咄し、烏啼の此惡さ、アレ〳〵けしからぬ胸騷、コリヤお宿へは行かれぬわいの。樣子は知るゝ此文箱、封じを開き見てのけう」と、思ひ切つて封押切り、見れば包みし草履片片、文取上げて押開き、「何ぢや、書置の事、コリヤ叶はぬ」と懷へ、一字も讀まず一散に、御門の内へと 三重 入相の、鐘も無常を告げて行く。轉んづ起きつ廊下口、半狂亂のお初が仰天、部屋の襖も案内なく、一間を見ればコハ如何に、朱に染みたる尾上が亡骸、抱上げて只うろうろ。「エヽしなしたり遲かつた、今一足早くばナヽ此御最期はさせませぬ。コレ申し尾上樣〳〵、旦那樣」と、呼べど答へも涙より、外に詞もなき沈む。「ふえのくさりを思ひの儘、かき切つてござる物を、何と答へが有る物ぞ。ナニ御前樣御披露、ムヽコリヤさつき、窺ひ聞いた岩藤が密書、是さへ有れば御身のあかりは立つ、有難い〳〵。コレ申し御無念の魂は、まだ家の棟にお出でなされう。エヽ聞えませぬわいなう〳〵、昨日鶴ヶ岡で岩藤づらに、草履を以てお打たれなされた、其取沙汰屋敷一杯、御家來の私が身で、口惜しう有るまいか、無念では有るまいかいなう。女子にこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤を晴しかねうか。夕べ一夜さまんぢともせず、今日とても思案とり〴〵、モウ打明けてお咄しなさるか、今打明けてお咄しかと、見合はせて見てもお隱しなさるゝ、エヽ不甲斐ないお生ぢやと、

樣、第一は御奉公大切に、又合藥の黑丸子、切れた時分と氣を付けて、モウ三年で御年も明く、御禮奉公を早うして、下りやるを指折つて待つて居ると、小さい子供か何ぞの樣に、成人の此私を、大事がつてござる其中へ、アノ文を御覽じたら、何と身も世もあられうぞ。常に氣細な母樣の、其場で直に死なしやんしよ。今死ぬる此身より、跡の歎を見る樣で、胸もはりさく悲しさは、何の因果の報にて、親子の緣の薄墨に、書置く筆の逆樣事、必ずお赦し遊ばせ」と、正體なみだせぐり上げ、身も浮くばかり取亂す。「ア、我ながら未練なり、女ながらも武家奉公、草履を以て面を打たれ、何面目に存へて、人に顏が合はされう、とは思へども大切な、御前樣への忠義を思ひ、今まではながらへしが、此書置に委細の譯、伯父大膳の惡事の密書、命を捨てゝ上への忠臣、只何事も宿世の約束、最期のはれの支度して、一遍の經陀羅尼、唱へん物」と一間なる、佛間へさして日も西へ、夕日まばゆき容色も、磨き立てたる練塀作り、足利家の門口、文箱抱へて出るお初、形振見ずにいきせきと、行く向ふより二人連、何かぶつくさ咄し合ひ、來るもおはつが心の辻占、行違ひ樣、「叶はぬ〳〵モウ叶はぬ、取つて返すがまだしもの事、可愛事をしました」と、聞く辻占にお初がはつと、見やる空には一群の、泊烏の鳴き連れて、最期を告ぐる魂呼ばひ、心細さも身にしみて、歩みもやらず立留り、「ア、氣にかゝる〳〵、

い〳〵。御機嫌に違うても、往た振して往くまいか。イヤ〳〵〳〵、どういふ急な御用やら知れぬ事をさうも成るまい。かういふ時の佛神樣、さうぢや〳〵」と塵手水、一心無我の手を合せ、「南無觀音樣〳〵、南無鬼子母神樣〳〵、お宿へ參つて歸ります中、主人の身の上頼上げます。ドリヤ一走に走つて來う」と、小褄りゝしく高からげ、錠口さして出でて行く。影見ゆるまで見送りて、こらへ〳〵し胸の中、思はずわつと伏沈み、消入るばかり歎しが、やう〳〵に顏を上げ、「まだ昨日今日、馴染もない此私を大切に、大恩受けた主人ぢやと、年はも行かぬ心から、大事に思うてくれる心、コリヤ、忝いぞよ、嬉しいぞよ。岩藤へ意恨を察し、さつきにも餘所事に淨瑠璃の譬を引き、私が短氣な氣も出よかと、云廻したる健氣な利發、今別れたが一生の、別れとは知らずして、嘸やとつかは戻つて來て、歎かん事の不便や」と、身も浮くばかりせき上げて、前後不覺に歎きしが、やゝ有つて顏を上げ、「父樣や母樣の、此年月の御不便がり、御恩は海も猶淺く、山より高き御惠み、片時忘れぬお二人樣、此中のお文にも、母樣の細々と、いかう此頃はおしなべて、引風の時行病、一しほ案じらるゝ程に、コレ此守は萩寺の、厄病除のお守、傍輩衆も多い事、惡い病の折見廻、移らぬ程に大事にかきや。又其上に身用心といふて外にはない、給物に氣を付けて、氣鬱せぬ樣に折節は、酒もたべて氣を晴し、煩はぬ

と、煎じ上げたる藥鍋、片手に茶碗携へ出で、「サアお藥」と差出し、見れば包と文箱に、きつと目を付け、「コレハしたり、お心惡いに何處へのお文、お氣が盡きように何事」と、問懸けられてさあらぬ體、「イヤ此文は母樣へ、急に上げねばならぬ文、此包大儀ながら、つい往て來てたも」と物がるに、云付けられてもぢ／＼と、どうやら濟まぬ今日のしだら、不承々々に、「アノ參れなら參りませうが、アレ御覽じませ、空合も曇つてくる、勝手がましう思し召しませうが、明日の事になされませぬか」「テモ初とした事が、如何に心安立とて、主の云付ける宿への使、明日の事にでもせいとは、如何に女の主なればとて、主の云付けを背きやるか」「イエイエイエ何の御意を背きませう、御持病の癪も發り、お顏持も惡い故」「イヽヤ癪氣はモウ直つた、日のたけぬ内早う行きや」「アイ」「何をうざ／＼するぞいの、行けといはゞ行かぬか」「ハイ、只今參りますわいの」と、文箱取上げ次の間の、案じに胸も張葛籠、明けて出したる生木綿の、在所染なる紋付も、部屋方者の一てうら、帶仕直して獨言、「今日にかぎつて此お使、行きともなうて／＼、尾上樣のお身の上が案じられてどうもならぬ。昨日鶴が岡の喧嘩の樣子、御殿一杯の取沙汰を御存じないか。私にまでお隱しなさるお心の程が、どうも私は案じらるゝ。眞實底から大切に思ふお主の大事を、蟲が知らするとやらいふのぢやないか、アヽ心元な

へ切懸けられし其所は、尤な事に思し召すかえ、但し又、不了簡な事に思し召すか、サマア何と思し召します」「さればの、御短慮には有つたれど、意恨に意恨重る上は、御尤にも有らうかいの」「イエ〳〵、憚りながら、ソリヤお前様の御贔屓口、鹽谷殿は大不了簡、ナぜと御意遊ばせ、大切な身を輕々しく、短氣に其身を亡し給ひて、親御様のお歎、本に私とした事が麁相な、鹽谷殿に親御はないもせぬ物、ナニ何と覺し召す、家國を亡し、奥様始め御家中散り〳〵、たつた一人の不了簡が、千萬人の身にかゝつて、御恩を受けた者共の、歎の程は何何ばかりと思し召すぞいのお情ない。オヽ阿房らしい何のこつちや、拍子にかゝつてお前様へ御異見の様に、オヽをかし。ドリヤお藥を見てこよか」と、何か詞に綾の絲、勝手へこそは立つて行く。跡に尾上は胸せまり、忍び涙の淵も瀬も、明日は亡き名を白紙に、硯の海のそこはかと、なき長文も跡や先、書置く筆の命毛も、露と散り行くはかなさを、絶入るばかり忍び泣き、涙と共に書留め、革の文箱も浦島が、明けてくやしき意恨の草履、文諸共に文箱の、紐引きしめて傍なる、手箱の中を形身分け、數も涙の玉櫛笥、細々しくも小文庫に、おもひ詰めたる憂き涙、包むに餘る小風呂敷、中結ひしめて玉の緒も、今を限りの空結に、封もしどろにかきくれて、思はずわつと泣く聲も、袖に包みし忍び泣。何心なく勝手口、お初は心いつきせき

を遣ふ物、其方の爺御は武士と聞いたが、世が世ならどのやうな御奉公も仕やる筈を、町人の娘の私が遣ふといふは、嘸や嘸心うくも思やらう。とかくに人は時節を待ち、花咲く春を待つのが肝心」「オヽ勿體ない事御意遊ばす、何事も大旦那のお咄しに御存じならん、私親子が受けし御恩は、口にも筆にも盡されませぬ。せめてもの御恩報じ、不調法な此私が、お傍で何卒御奉公と、お願申し此春から、初奉公の御面倒、有難う存じまする、其大切なお前樣が、御病身なを案じ申し、何卒お煩ひの出ぬ樣にと存じますが、年はも行かぬ私が口から、ませた事をいふ小しやく者と、お呵りも有らうけれど、兎角に人は氣を晴らして、物に屈托をさへ致さねば、煩ひは出ぬ物ぢやと、功者なお醫者の申されましたが、其御養生には物見遊山、アノ、お前樣も芝居はお好でござりませうなア」「オヽ成程私も芝居は好ぢやが、其方も定めて好ぢや有らうが」「イヤモウ好の段ではござりませぬ、さう申す中歌舞伎より、操芝居の淨瑠璃が、私は面白うござります」「オヽ夫なれば咄しが合ふ、私もきつい淨瑠璃が好、併したまたまの宿下りより外は、淨瑠璃本で樂しむばかり」「私もお屋敷へ上りませぬ其前は、よう見物に參りましたが、當り淨瑠璃も多い中に、アノ忠臣藏の淨瑠璃程、面白いのはござりませぬぞえ」「オソリヤ誰も同じ事、アノ師直頬の憎さ〳〵」「イヤ申し、お前樣のお心には、鹽谷殿の師直

忠節、アイヤ〳〵、證據も持たず、大切な事をなま中に、是を訴へてお主樣を科に落し、どのやうな御難儀を懸ける工の程も知れぬ。私が大事のお主といふは、尾上樣より外にはない、さうぢや〳〵」と一筋に、恩義に迫る主思ひ、待つ間もとけしながが廊下、しづ〳〵御殿を尾上が下り、夫と見るより、「オヽ御機嫌よう今お下り、いつ〳〵よりも遲いお下り、どうやらお顏持もすぐれず、お心惡うはござりませぬか」「アノ初とした事が、氣疎い物いひ、毎日々々の御前勤、下りの早い事も有り、御用が多けりや遲い事も有るは此上間々有る事、勝手知らぬ其方故、案じは無理ならず、サア供しや」と何氣なき、詞にそれと氣も付かず、上べを包む上草履、直す草履も昨日の意恨、思ひ惱みて一筋に、步む廊下も心には、羊の步み隙の駒、神ならぬ身の夫ぞとも、知らぬお初が物案じ、いく間も遠き長局、部屋の戸明けて内に入るも、常に變りし顏色を、悟らせまじと癪に紛らし、「正直はさつきにから、持病の痞が起つたわいの。夕飯も給べたうない、いつもの通りさすつてたも」「ハイ」とお初が差寄つて、「先お枕を遊ばしませ、お風召すな」とかい卷を、かひぐ〳〵しくも立廻り、「お癪の起るもお道理樣ぢや、夫に付けても輕い者は、奉公とても氣散じに、旦那樣やら御家來やら、お友達見るやうに、お心安うなさつて下さりや、病氣もござりませぬ」「オヽいやる通り、上々方の宮仕へは、いかう心氣

るアノ尾上め、思案借りたい大膳様」と、毒氣吹き込む一ッ息、焔とばかり身を焦す。大膳も諸手を組み、暫したゆらひ居たりしが、「ム、、はて扨しぶとい女め、並々の謀に乗せらるゝ女ならず、ハテどうがな」と思案のうち、襖の陰に婢のお初、様子窺ひためらふとも、知らぬ岩藤せゝら笑ひ、「ア、仰山な大膳様、此家を一呑にと企つるお前や私が、アノ小尼一匹が、何で夫程恐しいぞ。アリヤ堪へ忍ぶでも有るまいが、眞實生れついた臆病者、又これから模様をかへ、あいつを追出す其思案は、お案じなされますな、コレ爰にござりまする大膳様」「ムム然らば宜きに計らはれよ、きやつめ一人ぼひまくれば、跡は野の宮高砂の」「オ、アノ妾づらは心好し、大殿は死んで仕廻ふ、若殿の小びつちよ殿に、宛がひ扶持を喰せて置けば、此一家中はお前と私が」「シイ、聲が高い、壁に耳、岩の物云ふ世の譬、互の胸はとくと祕めして、岩藤吉左右を相待ち申す」と、浮べる雲の空頼み、奥と表へ時宜式禮、別れてこそは入りにけり。跡見送りて襖の陰、お初がそれと抜足差足、邊眺めて溜息つき、「テモ恐しい工み事、お下りの遲い故、どうかかうかと思ひ過し、陪臣の行く事ならぬ奥御殿、いて見ようとは思うたれど、咎めらりよか、呵られよかと、取つてかへした襖の陰、惡局の岩藤どのと、アノ伯父御の大膳殿、大それた惡事の相談、コリヤ大切な事ぢやわいの。尾上様に申し上げ、お上の御

「何にもせよ其方や我等が面白からぬ趣なれども、肝心かんもんの繼目の綸旨、ナ、ナ、我等が方へ隱し置けば、花若の家督相續思ひも寄らず。シテ〳〵兼ての首尾は如何」と、密々聲も人や聞くと、邊を眺め岩藤が膝摺寄り、「サレバ其事、大切なアノ密書、日外問注所で取落し、ハッと思うて、色々と捜しても見えぬ密書、尾上めが拾うたとは、鏡にかけて睨んで置いた。スリャ尾上めを其分に濟ましては、寢覺心がとんと濟まぬ。昨日鶴ヶ岡へ御代參、尾上めを同道、宜い折柄と思うた故、立ッつ居つにいじめかけ、ドウ喧嘩仕かけても、上手遣うて相手にならず、場所がらを辨へ、御代參の私へ對し、慮外有つては身の越度と、流す程に〳〵、煮ても燒いても喰はるゝ樣な、大抵利發な女めではないわいの。詮方盡きて人柄を崩し、私が履いた草履を持つて、尾上めが天窓をくらはせ、手向ひさせうと思うた所、聞いて下され恐しいやつ、夫をも辛抱しくさつて、手持無沙汰に其場を仕廻うた。時に尾上めが婢に初といふ小あま、年に似合はぬ才はぢけの差出者、また此奴めに手向ひさせて、夫から尾上めに付込まうと思うて、今も今とてさん〴〵にいじめかけたが、是も又同じやうな辛抱強い賢い奴、手向ひどころか誤つてばかり居つて、是も又壺へは行かぬ。此分ならばなか〳〵もない、あいつを遠ざける事は成るまい。兼て此方の工みの樣子、氣取つてを

しませぬ、お赦しなされて下さりませ」と、行かんとするを小腕取り、「モウ〳〵夫で知れた、奥聞かうより口聞けと、惡うぬかさぬ物を何赦す事が有る。アノ惡根性の尾上づら、主が主なら倚まで、惡工を仕さうな死人あま、佛性な此私を、ようも〳〵無い事まで拵へて、なぜ云ひやがつた引裂かれめ。ドレ顏見せよ、テモ好い顏ぢやナア、ム、好い器量ぢやなア」と、傍若無人に引寄せて、つめッつ突きついじめられ、おろ〳〵涙お初が思ひ、誤りましたも出でばこそ、只伏沈むばかりなり。お口女中の聲高く、「お上屋敷よりお使者のお出」と案内の、聲に岩藤きよろ〳〵目、「エヽうぬは仕合せ者、只置くやつではなけれども、好い時のお使者故赦してくれる、立つてうせい」と怒りの立蹴、口惜し涙押隱し、しを〳〵として立つて行く。程も有らせず長廊下、のつか〳〵と權柄眼、出向ふ岩藤、互に夫と表向、相口馬の會釋ほら〳〵、「オヽお使者と有らばどなたかと思へば大膳樣、御苦勞樣や」と互の目遣ひ、仕込む惡事の友烏、したり顏に座に直り、「其以來は打絶え申した岩藤殿、お使者の趣餘の儀ならず、持氏卿御病氣なりと世上へ披露し、御賢息二方の中、惣領たる花若殿は花の方の出生なれば、御家督との御内意、申し入れよと後室君景壽院の、今日の御口上、斯くの通り」と述べにけり。「ムヽすりや御家督は花若樣、申し、是まで色々の心盡しは仇事か」と、本意なげに問ふ詞を打消し、

じう相口といふが根からない。コレお初殿、昨日鶴ヶ岡の事聞いてか」「イエ私は何も存じませぬ」「マア〱聞きや、お局樣と尾上樣と御同道で、御代參にお出でなされた時、例のわんざんが出たかして、有らう事かはしたない、御用先で惡口たら〱、まだ其上に大それた、お中老もお勤めなさる、此方の御主人尾上樣のおぐしを、主の草履で敲いたといの。勘忍強い尾上樣、御代參なりやお上の名代、じつとこらへて祕し隱しに、其場は濟んで仕廻うたげなが、ナント思やる、聞いてゐる內、かけ構ひないこちとまで、腹が立つて〱〱、夕べは癪が差込んで、お夜永をたべなんだ。苦は色かはる松風の、評判物ぢや」と口々に、謗る折柄、奥の間より立出づるは、顏も心も直ならぬ、曲りくねつた局岩藤、邊見廻し〱て、「ヤイ〱女共喧しい、そりや何をいふ、次へ行かぬか、立たぬか」と、呵られながら婢共、我部屋部屋へ立つて行く。「コリヤ〱初、我にはちつと用が有る、爰へ來い〱、怖い事はないわいなう。來いと云はゞおぢやいなう。アノ其方は女共を集めて、一はな立つて何で人の噂いふぞ、サアなぜ自が事を惡ういやつた。何ぞ意恨でも有る事か、又は尾上殿が惡ういへと云付けたか、サアもちつと爰へおぢやいなう。どうぢや、どうぢやいなう」と、猫撫聲も氣味惡く、お初は漸傍へ寄り、「イヤ私はたつた今參じまして、何にも申す間はござりませぬ。何も申しは致

朝から晩まで、針打したりやり羽子手鞠、お雛煎腹のへるのも忘れた、ホヽヽヽ、御膳仕廻へばお櫛にかゝり、お下りまでの其内に、織物したり時分の身仕舞」「オヽお秋のいやるに違ひはない、人一倍精出しても、部屋方者と賤しまれ、好い奉公もする事ならぬ、皆面々の肩づくぢや。此春の出替には、出て退けうと思うたれど、アヽ何國も同じ鷄の音色と、重年をしたのぢや。どの白壁も同じ事、緣次第ぢや」とさがな事、口もはしたの姦しさ。主の噂も鳥影も、日脚も延びて八ッ下り、お下りのお迎ひと、お初が夫と氣も浮かぬ、小腰かゞめて、「コレハコレハ、皆打寄つてお睦じい、面白さうなお咄し、新參の私故、其仲間へは這入るまい、後にゆるりと逢ひましよ」と、御殿をさして行く所を、「コレ〳〵お初殿、其方も此方が仲間内、マアマア爰へ」と呼びかけられ、いやとも云はれず惣々の、中へすわれば差出のおなか、「ホンニ此方は仕合者ぢや、結構な旦那を取れば、勤ながらも骨は惜しまぬ。其方の旦那尾上樣の心よし、何から何まで御發明な御生れ、道理こそ育ちが育ちぢや、お宿といふは誰有らうぞ、鎌倉一番の大分限、舟が谷の坂間とやらいふ米問屋、少さい時からお姫樣育、此お屋敷の御金御用、一式親御が勤みやるげなの、人は氏より育ちぢや」と、陰口咄し腰打ちて、負けぬお冬が壺々口、一氣にはかきやんな、おなかが御主人お局の岩藤樣、此の廣い御殿の内、誰一人お睦

有る、以後をきつとお嗜み、サア〳〵行きましよ」と替草履、歩行路ひろふも氣晴しと、歸る岩藤殘れる尾上、髪も亂れて我ながら、口惜しいやら無念なやら、顔は茜とせきのぼし、こらへ〳〵したため涙、一度にどつと伏轉び、身も浮くばかり歎きしが、數多の女中立寄つて、「コレ〳〵尾上樣、アノ憎體なお局の、氣質は常から能く御存じ、お腹立はお道理なれど、いつもの事ぢやと思し召し、必お氣にさへられずと、先々屋敷へ御歸り」と、諫立つれば泣く〳〵も、かゝへ引きしめ立上り、女心の一筋に、又思ひ出す口惜涙、早寺々に暮の鐘、明日は我身も消えて行く、夕告鳥の泣く〳〵も、打連れ館へ三重急ぎ行く。

第七

星月夜、鎌倉山に風誘ふ、扇ヶ谷に棟高き、前の管領足利家の思ひ人、花の方の御館、咲續きたる花の御所、盛十寸見の奥御殿、色香爭ふ長局、武家とはいへどなまめかし。世の憂きを、空吹く風の有頂天、屈托なしの婢共、一つ所に寄集り、「オ、おなか女郎お冬女郎、軒から軒の隣部屋も事多い時は遠々しい、今更云ふに及ばねども、人目には樂に見え、奉公向のせつろしさ、人の樂しむ正月遊びも、御儀式事にかゝつてゐて、寶引一度引く事ならず。在所に居れば

達の、御歎は如何ばかりと、こたへるつらさ苦しさは、胸も張りさく血の涙、身もうくばかり歎きしは、傍で見る目も哀なり。「相手にならぬは此岩藤が恐しいか、但しは又おくれたのか。遉は町人の娘なれば、刃物三昧は恐しい筈、怖い筈、オヽ道理ぢや、〳〵、そんならコリヤ納めましよ〳〵。ドレ〳〵〳〵〳〵、歸りましよ〳〵。ホンニ〳〵〳〵、此方にかゝつて、コレ〳〵〳〵、これ見さつしやれ、足袋も草履も砂まぶれぢやわいの。イヤコレ尾上殿、ヤ何と此草履のよごれたのを、拭いて下されぬか」「アノ私に」「オイノ」「エヽ」「いやか」「ぢやというて夫がまあ」「ホヽヽヽ、臆病者の腰拔に、刃物汚ししようより、幸な此草履」と、足にかけたる土草履、尾上が頭を丁々〳〵、是はとばかり奥女中、氣の毒餘り立騒ぐを、尾上は聲かけ、「コレ〳〵〳〵、騒ぐまい女中達、岩藤樣が此尾上を、御異見の爲に御打擲、コレわしや有難うて〳〵、母樣の御折檻と思うて、此身のふし〴〵まで、有難うて忝い。イヤ申し岩藤樣、産みの親も及ばぬ御異見、エヽ有難う存じまする。此上は隨分と武藝をも心がけて、御奉公を致しましよ。又此お草履は、私がためには御教訓の此一品、申し受けまして私が守」と、懐中したる大丈夫、類希なる忠孝に、遉の岩藤呆れ果て、口をつぐんで居たりしが、「ヤア何ぢや、其草履を私に貰うて守に掛ける、アノ守にヤ、テモ恐しい辛抱な人、異見した甲斐が

狼藉者が奥向へ切入るか、又盜賊などが忍び入る其時には、役柄ぢや、女子ながらも御前の固、討留める器量がなければ勤まらぬ奉公ぢやが、此方も武家方の御奉公さしやるからは、長刀の一手も心得てござらうの。ソリヤアノ、誰に稽古さつしやつたぞ、ソシテアノ其お師匠様は何と云ひますヤ。コレ〳〵〳〵尾上殿、ア丶愛な人わいの、人にばかり口たゝかせ、此方は耳でも潰れたか」と、噛み付けられて尾上は只、赤らむ顏を押隱し、「お恥かしい事ながら、其心がけは」「無いといふのか。ヤレおとましや氣の毒や、重い役を勤めながら、役向の勤方を知らぬといふは、ソリヤアノ何ぢやぞや、オ丶夫よ、本の是が祿盜人といふ者ぢやぞや、イヤコレ知行盜人といふ者ぢや。盜人ぢや、〳〵〳〵〳〵、何とさうでは有るまいか」と、捲しかけたる雜言に、無念の涙たもちかね、齒を喰ひしばりこらへゐる。「オ丶何ぢや、泣かしやるか、オちつとこたへう、悔しかろ。町人の娘ぢやとて、今では武家の御奉公人、本にさうぢやわいの。最前もいはしやるには、心付かぬ事有らば、御指南頼むといはしやつたの、ウ丶ドレ敎へてやろ」と立上り、持つたる扇振上ぐれば、身をかはして打落す。手向ひなさば一打と、懷刀拔き放せば、是はと驚く女中達、尾上も今はたまりかね、共に拔かんと立寄りしが、思ひ廻せば廻す程、大恩受けし御主人の、御先途も見屆けず、我身に過有るならば、跡に殘りし親

障やしませぬか」と、味な所からしかける喧嘩、扨はいつぞや問註所にて、密書を拾置し事、氣どつて今日の此時宜と、思へば猶もそらさぬ顏、「コレハ又岩藤樣の痛入ります御挨拶、何のまあ私が氣にさへまするの何の彼のと、申す樣な事がござりませうぞ。おつしやる通り町人の娘、親共がお出入の御緣を持ちまして、御奉公に上りまし、だん〳〵とお取立、かやうな重い御奉公も、有難い此身の仕合せ、根が町人の私が事、嘸や不束な事ばかりでござりましよ。此上とても岩藤樣、憚りながらよい樣に、足はぬ事を御遠慮なうお呵りなされて、お指圖頼み上げまする」と、柳流しのしなやかに、云廻したる利發さよ。「オヽ、何ぢや、町人の娘故、足らぬ勝ちな勤方を、私に指圖してくれろ。ホヽヽ、オヽつべこべと薄い脣ぢやの。此方の若い其舌先で、こね返さるゝ私でもござらぬ。何のそもじの御發明で、私が指圖を受けさうな事かいの。コレ次手ぢやによつて云ひますが、此方の親元は、町人ながらも金持で、御屋敷の御金御用を勤めるといふ、其用達顏の高慢が、鼻の先へぶら付いて、コレ此顏に見えるわいの。コレ〳〵、上の事いふではないが、金の威光はきつい物ぢや、アノ其角とやらいふ誹諧師の發句に、コレ聞かしやれや、口切や汝をよぶは金の事、コレ、金持頬は此上とても止めにして下され尾上殿、其の御役向はお中老、此岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通りの事は勿論、萬一

樣に、群居る鷺の如くにて、賽しの鳥居の前、「イザお局樣、御一所に」と、云ふに岩藤不承不承、立上らんとする所へ、來かゝる鷲の善六が、兩手を土に、「イヤお局樣、最前申上げんと存じましたれど、かの事に取りまぎれまして、ナ申し、ぱつたりと失念を仕りましてござります。外の儀でもござりませぬが、此間仰付けられました金子の儀、ヘヽ、御受取り下さりませ」と、半分云はせず「コレ善六、何時もながら心遣は過分々々。しかし流石は町人の其方、奥向の事知らぬ筈は尤、コレ此岩藤は局役ぢやぞえ、むさくろしい物を取扱ふ役ぢやない。其金は針妙の澤に渡しや、宜きに」とばかり詞數、云はぬ色なる山吹の、包取出し善六が、「アヽ町人と申す者は、賤しい者でござります。神佛より尊く思ふ此金を、むさくろしい物なぞと、お手に觸れぬといふは、アヽ又格別なお歷々樣。うなる程金持つても、町人といふものは、アア賤しい物でござります」と、云ひつゝ金を懷へ、お屋敷さして急ぎ行く。跡打見やり局岩藤、「アノ善六とした事が、私がいふ事氣にもさへず、正直な生れ付、何と思はしやる尾上殿、町人には珍らしい氣恥しいアノ善六、町人は賤しい物と、感心した今の樣子、ヤヽこりや本に、ちつと此方には差合で有つた物。ホヽヽ、オヽ私とした事が、づか／＼と氣の毒な、イヤ本に尾上殿、アノこな樣の宿といふは、金持なれど町人、假親しての御奉公、スリヤ今私が言うた事、氣に

代參に來ました、ヤコレ味やらしやるなう。大切な御使に、道草の癡話遊びか、オヽ好い行儀ぢやの、イヤ結構な御身持ぢやわいの。不義はお家の堅い御法度、ふたり共に覺悟しや」と、俄に詞あらく〳〵しく、穗に顯れしは戀の意地、柊に咲く花ならで、二人は雪と消えたき思ひ、「イヤ申しお局樣、必麁相おつしやりますな。私が身に取りまして、更々不義の覺えはござりませぬぞ」「イヤおしやんすな〳〵、たつた今求馬殿と、吸付いたり引付いたり、抱付いたり取付いたり、イヤモしたゝるい事の有る條を、コレ此黑い目で見て置いた。何と夫でもあらがふか」と、齒に衣きせず云ひまくれば、求馬こらへず、「これ岩藤樣、人の不義を改める此方こそ不義の詮議」「ヤア何ぢや、此岩藤を不義者とは、コノぬつぺりとした顏わいの」「イヤコレ岩藤樣、其いやらしい目付で付けつ廻しつ、今も今とてコレ此文」と、出して見すればはつとばかり、赤面すれば早枝引取り、「こりや潔白なお局樣ぢやわいな。不義はお家のきつい御法度、サア此方より申し上げうかえ」「サア夫は」「但し拙者が言上致さうか」「サア夫は」「サア」「サア」「そんなら、モようござるわいなう、不義の詮議は互に是限、イヤ何求馬殿」「お局樣、スリヤ申し分はござりませぬか」と、早枝と目と目見合せて、別れてこそは立歸る。折柄告ぐる供廻り、「イザ御立」とゆふばえの、中老尾上先に立ち、多くの女中取圍み、對の帽子も一

コレハ善六殿、存じ寄らざるお取持、何が差置き、我等とても岩木にあらねば、お志何程か祝著、此文忝う受納めます。返り事は此方よりと、よしなに返事頼み入る」と、懐へ入るゝを見て、俄に作るあいそぶり、「扨も〳〵お前樣は、數ならぬ此私が一言を、お立てなされて下されます只今の御返事、有難い〳〵。主も嘸此返事待ちに待つてでござりませう。ヤ何お侍樣、必ず御返事待ちます」と、僭一人がでかし顏、肩怒らして懷手、宮居をさして入りにけり。斯くとはい跡に求馬は只一人、文の返事を兎や角と、思案に小首傾けて、暫し小陰に佇めり。ざやしらにぎて、緣の縒いふ結合す、人目をそつと蜘早枝、としやおそしと走寄り、物をもいはず求馬が顏、うらめしさうに打眺め、「エヽ聞えませぬ求馬樣、アノ意地わるの岩藤が、目顏を忍び轉寢の、其睦言の度々に、其方を退けてそもやそも、外に枕はかはさぬと、云はしやんした其時の、其一言を樂しみに、思うてゐるに胴慾な、つれないわいな」とばかりにて、かこつも戀のならひかや。求馬はほうど持てあまし、「コレハ〳〵又其方もマア嗜みやいなう」「イエイエ〳〵、よもやとは思へども、油斷のならぬは男心、私や夜の目も合はぬわいな」「ハテ疑ひ深い」と手を取れば、「アヽ嬉しや」と寄りそうて、わりなき仲ぞ睦じき。「不義者見付けた動くな」と、聞くより二人ははつとばかり、「オヽお局樣何の間に」「イヤ今日は私も御

事がたんと有る、委細の譯は神主の所で」「呑込みましたサアお出」と、人喰馬にも合口と、打連れてこそ行く跡へ、桃井求馬時房が、何の願の神詣、鳥居間近く歩み來る。引返して善六が、邊きよろ〳〵ねめ廻し、求馬が傍へ立寄つて、「イヤ申しお侍様、終にお目にはかかりませぬが、此鷲の善六といふ男が願ひ、初對面の天窓から、氣に入らうが入るまいが、是でも非でもお侍様、聞いてもらはにや男が立たぬ」と、何か根ざしの云廻し、求馬もむつと若氣のはやり氣、思ひ直して和らを入れ、「成程今御自分の申さるゝ通り、終に見もせぬ某へ、是非にと有る其頼み、一通り承らん」と詞の下、懐より文取出し、笑顔もち〳〵、「申し、今の様に云うた時は、小むづかしき事云ひかけて、喧嘩でもしかける様に、お腹も立たうし、御合點も參りますまいが、高が斯ういふ筋でござります。エヽアノお前に、モウ〳〵死ぬる程惚れてゐる、其女中が命にかけて私への頼み、私も又あた臭い事いうた事はない故、持前の喧嘩仕立て、お前を口説く文使の私、一ッ屋敷の傍輩同志で色事は法度ぢやげなが、命づくの戀の取持、お前ぢやとてまんざらに、餘り腹も立ちそもない事、其文納めて下さんせ」と、かさ押しにやる文使、荒木を切つて取持口、求馬は何の心もなく、文取上げて見るより恟り、投返さんとしたりしが、役柄と云ひ日頃の氣質、後日の當りも如何ぞと、一寸遁れと、「コレハ

の方の御代參、咲揃うたる花盡し、外珍しき女郎花、さはらば落ちん玉あられ、ふるや鈴の音大麻の、引く手に神も靡くらん。當社の一禰宜榊兵部、夫と見るより出迎へば、乘物明けて局岩藤、跡に續いて中老尾上、行儀も流石しとやかに、會釋こぼして立出づれば、神主兵部も共に式臺、「先以て今日の御代參、御苦勞至極」と挨拶の、詞に付いて局岩藤、「オヽ其後はお久しや、兵部殿、相替らず今日の代參、足利家の武運長久、御祈念頼入りまする。其次手には此局が、諸願滿足を精出して、御祈りなされ下されよ」と、苦み走りし空笑顔、仕濟し顏に相述ぶれば、尾上は夫とさし心得、一封の願書取出し、花の方取分心を籠めし此願書、御奉納下されよ」と、差出せば取納め、「イザ御神拜遊ばせ」と、詞の内に局岩藤、「イヤナウ尾上殿、ちと私用ながら、待合す人が有る程に、先へ往て下され」「左樣ならばお跡から。兵部殿御案内頼みます」「然らばお出」と榊兵部、先に立つて鳥居前、宮居をさして引連れ行く。折もこそ有れ向ふより、身中が欲の摑面、鷲と名うての善六が、きよろ〳〵眼うそ〳〵、見ゆる此方に岩藤が、「ヤレ待兼ねました、委細は昨日の文の通り、日外も大膳殿よりの密書を、問注所で取落し、樣々と探して見たれど、かいくれに見えなんだが、十が十尾上めが拾ひをつたには違ない。スリヤどうも其分に置かれぬ尾上め、夫故に今日の趣向、まだ其外に何や彼や、咄す

人の最後の此刀で、娘を殺し我も死す、因果の業は今果す、婆去つた、縁切つたれば赤の他人、如何に忠義なればとて、我子を殺し、また顔も見ぬ初孫を刺殺す、婆勘忍してく〳〵。科人のおれが爲に、必ず菩提やなど弔やんな、娘が爲に尼に成りと、心任せ」と一言は、今はの情も情ない、娘は殺し夫に別れ、死際になり退去りとは、何面目もないじやくり、心を察して紙崎主膳、「假にも殿の暫くも、御寵愛有りし道芝が、母には詮議のお構ひなし。姉が身の代百兩の、かねては妹が追善供養、跡弔ふが肝要なり、イザ歸らん」とゆふ闇に、出づるを遣らじと、犬淵藤内、心得主膳が小柄の手裏劍、丁ど來かゝる雪平が、一人も殘らず鏖し、切つて捨てたる老の髮、未來を契る友白髮、先立つ無情の鐘の聲、風にちり〳〵散る花の、盛は雪と消え果てゝ、月の出汐に立出づる、忍び編笠夜半ながら、不覺の歎戀ゆゑの、その亂れ髮俤に、涙の露を賤が家に、置き別れてぞ三重出でて行く。

第六

かけまくも、太敷き立てし宮柱、和光の塵も影淸き、ときはかきはの神樂唄、千代を壽く鶴が岡、弓矢取る身の守とて、群集は押しも分けられず、一際目立つ銕乘物、足利家の奥女中、花

ずして亡び失せ、其後行方知れざる名劍、是を所持する其方は、滿祐が餘類と見た目は違はじ。名劍只今手に入ると云ひ、謀反人赤松滿祐が忰、赤松三郎といふ者、大將軍に仇をはさむよし、何國に在るとも行方知れず、此行衛を知つたる者は、其方ならで外になし。サア眞直に白狀せよ、陳ぜざるに於ては、骨をひしいで白狀さす、サア〳〵何と」と詰寄せられて眼兵衞が、刀引拔き我腹にぐつと突立つる。コレハと取付く女房を取つて突退け、「女房泣くな、其方や何にも樣子は知るまい。反謀人赤松滿祐の足輕、嘉嶋權平といふ者、物數ならぬ者なれども、魂は誰に負くべきや。足利家に仇せんと、心を盡す此年月、我娘道芝が懷胎なせしは足利の種、一刀に差殺し、主人へ立つる寸志の忠義、今主膳殿に見顯はされしは運の盡、さりながら侍の數に入り、切腹するは我が本望、モウ何にも物申さぬ」と、きり〳〵と引廻す。「ヤレ待て嘉嶋、小身には似合はずハレうい者、娘道芝を殺したも、うはべは縫之介殿へ忠義と見せて、下心は足利家の胤を懷胎したる故、水子も敵の片割と、娘と共に指殺す、夫程の根強い性根、如何程に拷問するとも三郎が行衛は言ふまじ。最早尋ねぬ、安堵して勝手に死ね。コリヤ其方に遣した其刀は、我親紙崎兵庫、赤松滿祐を討取りし時、無念こつて刀に喰付きたる、赤松が最期の齒形、其刀で切腹すれば、主從一所に討死も同然ぞ」と、聞くに彌增す殘念さ、「主

ノ、此方の留守に足利家の追手が來て、妹を渡せとのつ引ならぬ手詰の難儀、一寸遁れに受合ひしが、縫之介殿の種をやどせし其樣子、私とても其昔は、足利家の恩有る者、似たを幸ひ、アノ姉を身代に賴みしに、何で又此方は妹を切つたのぢや。活かして戻しや、活して返しや」と、あやもなみだに伏沈む。眼兵衞も咽び入り、「尤ぢや〳〵、が妹を切つたは樣子有つての事、主有る姉に身を賣らせて、聟へ何と云譯せうぞ。身の代の此金戻し、姉のお來を取返す」と、駈出すを、「ヤア〳〵眼兵衞、申聞かす子細有り、暫く待て」と一間より、立出づる紙崎主膳、是はとばかり眼兵衞夫婦、更に不審は晴れやらず。紙崎は二人に向ひ、「ナニ眼兵衞、姉のお來が身を賣りしは、大磯ではないわいやい」「ムウ、シテ又姉が身を賣りし、其先は何處何方」「オヽ、妹道芝を其方に討たせたは殿の爲、我家來を曲輪の者に仕立て身の代を與へ、買取りし姉のお來は、此主膳が詮議有つて、我方へ召捕りしは子細有り。姉が夫の名苗字を聞くに、我推量少しも違はず、詮議の種の姉が身の上、樣子は追つて申し聞かさん。先づ何を差置きて不思議なるは此刀、眼兵衞、コリヤ以前より其方の所持なるか」「ハイ、其昔手一合取りました故、今に放さぬ鞨搔き」「イヤ〳〵尋常ならぬ名作の證據、此刀を振上ぐれば、最前死靈が消えしは、正しく武將の家の重寶午王丸の名劒、先年赤松滿祐此の太刀を奪ひ取り、謀反成ら

「ヤレ待て女房」と眼兵衛が、姉が手を取り引退くる。「イヤ〳〵切らねばならぬ譯」「切らしはせじ」と姉思ふ、冥途の魂魄眼兵衛が、「今は是まで南無阿彌陀」と、女房が刀引つたくり、すつぱと切つたる刃の下、形は消えて佛壇の、前に殘るは首ばかり。「ヤア〳〵〳〵親仁殿、何で妹を切つたのぢや」「父樣是は」と泣くお來、呆れ涙の折柄に、肝煎が高呼り、「サア〳〵姉樣、跡金持つて迎ひに來た。泣いて居てはいつまでも果てぬ、是から勤の大事の體、サア〳〵爰から直に乘つてござれ」と、泣入るお來が手を取つて、無理に連出し手を叩けば、聲諸共におろせ駕、門口に舁据ゑれば、「コレ〳〵娘を何方へ連れて行く、樣子を聞かう」と取付く眼兵衛、お來は涙の聲を上げ、「コレ〳〵父樣、久しう母樣の御病氣、其上ふがひない夫を持つた故、お年寄られて色々の御艱難、此身を賣つてせめてもの御恩報じ、此事を夫へも、くれ〴〵傳へて下さんせ」と、いふ聲共に伏沈み、泣くを泣かせず、「イヤサ樣子は跡の事、先づ娘子の身の代」と、投出したる五拾兩、「サア乘らんせ」と無理遣りに、駕におし入押込んで、道を早めて急ぎ行く。眼兵衛は金取上げ、「コレ〳〵婆、おりや一つも合點が行かぬ、主有る姉が勤奉公、定めて是には樣子が有ろ。サヽヽ、きり〳〵譯を聞かしてくれ」と、せきにせき立つ此方もうろ〳〵、「サヽ、私も姉が勤奉公に行く事は夢にも知りませぬ」「何ぢや知らぬ」「オイ

ろめん方もなき。一間の内も姉妹が、明けぬ心の闇深く、「ナウ妹、久しぶりで顔を見て、嬉しいも暫しの中、いふに云はれぬ譯有つて、此來は今宵から、遠い所へ行かねばならぬ。何時又逢ふやら逢はれまいやら、お年寄の二親に、たつた一人の妹、隨分達者で居てたもや。夫に付けても賴みたいは、親の爲に大磯へ身を賣りたれど、夫も行かれぬ譯に成り、行かねば母樣の用にも立たず、言かねた無心なれど、私が代に大磯へ、ちとの間往て下さると、其金で母樣の、アノ病が直りさへすりや、私や死んでも心は殘らぬ。只さへ其方は私故に、一度ならず二度の勤、賴むも此方に何やかや、樣子は跡で知れる事、一生の無心を又賴みます妹」と、今はなき身の道芝とも、知らぬ心根猶悲しく、「姉樣の爲なれば、火に入り水にも入るけれど、肝心の此體が、今日有つて、明日は果敢ない世のならひ、其上にお前まで、そんな便ない事いはしやんす。今から父樣や母樣は、誰を便りに、さぞ歎の上のお歎と、一倍弱らしやんせうと夫が悲しい。お前ばかりは何方へも行かずと、何卒二親の御介抱申してたべ。何いふ事も此世では、皆徒事と成り果てる、跡の悔みの悲しさ」と、親子一世の隔の障子、別れを急ぐ四つの鐘、南無三寶時移ると、母は一腰さし心得、「サア今切るぞ」と覺悟のお來、「ナウ姉樣殺させぬ」と、覆ひに成れば亡き人とも、知らぬ母親、「コレ〳〵大事の妹、怪我しやんな」と振上ぐる、

たとも死んだとも、夢になりとも知らせさうな物ぢやといふ事」「オヽ本に親仁殿、最前から妹が來て、イヤモウ氣遣さしやんすな、夫は〳〵達者で、今奥で姉と咄してゐるわいな」ヤアと恟り、「ドレ〳〵何所に」と、覗けば姉と差向ひ、「ソレ好い女房に成つたで有らうがの」「ホンニさうぢや、やつぱりさうぢや、アヽ南無阿彌陀〳〵」「エヽ忌ま〳〵しい、達者で戻つたに念佛は何ぞいの」「サイノ、めんよう年寄といふ者は、念佛が口癖に成つて、嬉しい事にもつい南無阿彌陀、餘り妹が大きう成つたで、嬉し過ぎて涙がこぼれる」「オヽソリヤ道理いの、嬉しい事さへ夫ぢやもの、嘸ぞ此方の事を聞かしやんしたら、ホヽヽ、オヽ私とした事が、ひもじからうに焚付けて、茶漬進じよ」と勝手口、泣きに立つこそ哀なる。「イヤひもじい所か、おりや胸が一杯に成つて有るわいの」と、いふ間なく〳〵女房が、附木燈して佛壇に、上ぐる御明いはねども、心合ひたる女夫中、花は手生と眼兵衛が、立つる具足の鶴龜も、短い壽命と觀念し、妻が撞木を取上ぐれば、「エヽ是婆、今夜は佛の日でもなし、其方が看經する事は無い、念佛はおれが申すわいの」「イヤ此方の看經はいつでも成る、今夜は私がお念佛の入る事が有るわいの」「イヤサ、おれも念佛申さにやならぬ事が有る」「オヽそんなら共に」と同音に、鉦打鳴し南無阿彌陀、〳〵〳〵、唱ふる念佛は變らねど、言はず語らず二親の、涙〳〵

病者な私、妹のお宮が傾城になりやつたも、其扱ひに入つた金、私が夫は浪人の不自由さ、何かに付けてお前方に、御苦勞かけるも皆私故、恩の有る妹の代りに成る事ぢやもの、成程潔う死にませう。道芝は何所にぞ、逢うて一言いひたい事が」「オヽそんなら死んでたもるか」「アイ」「エヽ忝い出かしやつた、よう得心してたもつたなう」と、死ぬる我子に手を合せ、「悦ぶ親は我ながら、さぞ氣遣とも人目には、かゝる例は何の罪、何の因果」と隱泣き、姉も後へ殘る目に、涙包んで奥へゆく。同じ迷ひの親心、眼兵衛はとぼ〳〵と、花の盛を切捨つる、子は三界の首枷と、肩に思ひの枯柴を、荷うて歸る門の口、「可愛や婆が朝夕に、影膳すゑて待つ娘、靈供とかはる世の有樣、思へば我家も這入りかね、佇む中にも女房が泣聲、「浮世の義理とは云ひながら、思へば酷い親の身で、現在我子を殺すか」と、くどくを門に聞き悔り、もしも樣子を聞いたかと、危みながら上り口、「コレ婆、今云やつたは何の事ぢや、誰が事ぢや」と尋ねられ、ハッとしながら當座の間に合ひ、「イヤナウ、此方の戻りの遲さに、思はずとろ〳〵轉寢に、我子を殺した夢を見て、ひよつとアレが本の事なら、悲しからうと思うて涙が」「何ぢや夢に見た、ホイ親子の血筋夢に知らせが有るも道理」「コレ親仁殿、夢に知らせとは何知らせ」「イヤ夫は、アノ妹道芝、廓へ往つてから便もせず、生き

母親は、詞なく〳〵顔を上げ、「其方にはまだ逢はさぬが、最前道芝が戻つて身の上咄し、戀故に科人に成つた譯、いふに違はず追手の侍、手詰に成つた詮の詰りは、お來、其方に母が頼みが有る、親子の中でも是ばかりは、餘り〳〵云ひかねた。逆樣な事なれど、妹道芝が身代に立つて死んでたも」「エ、イ」「オヽ恟りは尤ぢや〳〵、世の世界に、是ほど無體な無心はなけれど、胤腹一つの姉妹、可愛さに何のかはりが有ろぞいの。分けて妹が殺されぬ譯は、足利殿の弟御、縫之介樣に思はれ、我々ふぜい、娘が身は輕けれど、重いお胤をやどしてゐる、其子が大切さ、今の追人が見違へた程、似たが因果の此身代、若殿の代に立つと思うて、母に命をたもやいの」と、思ひがけない頼みには、思案とかうも涙ぐむ、難儀は二つ身は一つ、心一つに分けかねて、「成程尤な樣子聞いた上、さら〳〵未練ぢやないけれども、氣の毒な事は、私もこちらに樣子が有つて、少し命が入りまする。知つての通り義理ある夫、別れた時から身に持つた、胤は私も同じ事、尤お歷々と浪人と、位は違つて有るけれど、夫に預かつた大切さに違ひはない。命一つは惜しまねど、貧しい夫を持つた故、お中の子まで是程に、位が違ふかと思へば、口惜しうござんす。とはいへ妹の命も大事、何卒仕樣はない事か」と、身賣の譯も今更に、言はぬがましの投島田、身を投伏して泣居しが、「ア、さうぢや、幼いから

い」とはら〳〵涙、雨夜の月と疑がはる。折から表に犬淵藤内、うろ〳〵眼に戸口を覗き、「家來共アレ見たか、アノ女めは慥に尋ぬる傾城め、「さうぢや〳〵」と込入る主從、母はかけ出で立塞がり、「ア丶コレ、聊爾せまい、こりや何事」「イヤとぼけまい、手越の里の傾城道芝、足利の館へ男に化けて入込みし科、首討てとの御諚意」「エ丶イ、アイヤ〳〵そんな傾城が此方へ來た覺えはない」「ヤア狸婆め、隱しても隱されぬ道芝が親里、此内へ戻つてゐる事、見屆けて此詮議」と、聞くより母ははつとばかり、塞がる胸に思案を極め、「ハテ此上は是非に及ばぬ、迚も遁れぬ娘道芝、如何にも御渡し申さうが、暇乞する間」「ヤアなまぬるい、叶はぬ願、猶豫せば儕共繩打たうか、何と〳〵」とひしめく所へ、「申上げます、只今僕の雪平め、向ふの辻で見付けし故、引ッつかまへうと存じたれど、旦那を差置き慮外と存じ、御注進申上げます」と、聞いて悔り、「ナニ雪平めがそこらにをるか、エ丶邪魔なやつ。引縛るは易けれども、今出合うては勝手が惡い。コリヤ婆、首は後程受取りにくる。家來共、道をかへてかう參れ」と、ひるまぬ顏は長田の裏道、家來もしどろに立歸る。母は吐息をつく〳〵と、お來は何氣も、「ナウ母樣、そんなら妹は戻つてゐるかえ、何所に居やるえ。そしてマア、ひよんな事受け合うて、此納りはどう付く事、私や氣遣な〳〵」と、案じも眞身の姉妹思ひ、思ひ續けて

奥へ忍び足、ひそ〳〵として隱れ入る。斯くとはしらがの母親は、一間を出でて、「コレハ〳〵、お來も仕事は仕舞さうな、わしも今日は又鹽梅がいかう惡い。ア丶此親父殿は何してぞ、いつよりも遲い戻り、道で持病が發りはせぬか、ア丶氣遣な」と老の身の、案じに胸も休まらず。そよと吹く風いとゞ猶、身にしみ渡る妄執の、非業の刃に道芝が、消えし魂魄我ながら、形を假りのしよんぼりと、「母樣はそこにかへ」と、言ふに悔り、「ヤア其方は娘、思ひがけない何時の間におぢやつた」と、言ふも不思議の立姿、「母樣御久しうござんす、樣子有つてせつない苦しい憂きめに逢うて、心がかりな事有る故、裏からそつと只一人、父樣はお留主かへ」「オ丶親仁殿は今朝商物持つて往て、未だ戻らしやれぬ故案じて居る」「ム丶夫は幸、お前に密に咄したい事が有る、奥へ來て下さんせ」「ム丶久しう逢はぬ此母に、咄したい事が有る、そして夜中に只一人、竊に咄したいと有るは氣にかゝる、マア奥へ」「アイ、マアお前から行かしやんせ」「そんなら娘、サアおぢや」と、何のけんによもなんど口、打連れてこそ入りにけり。色香漏れくる破障子、移す鏡の柳腰、見かはすばかり髪形、木綿似合はぬ女房盛り、「ハア短夜のモウ初夜前、今宵四つが内の名殘、終に仕なれぬ曲輪の勤、八文字とやら如何するぞ。エ丶こんな事なら妹に、習うて置いたらよかつたに、ア丶どうやう小褄をかう取つて、エ丶口惜し

二人の親達には祕し隱しに、「此頃中お前を頼み、此身を賣つて其金で、母樣の人參代、思ふ程療治して、夫で行かねば念も殘らぬ。金の入る樣子、必ず沙汰して下さんすな」と、親を思ひの孝行に、お市も聞いて貰泣、「孝行なお前の眞實、惠みがなうて何とせう。お來樣、後に後に」と門の口、泣く目を拂うて出でて行く。お來は跡に獨言、「ア世の中は樣々ぢやな、夫源藏殿は出世の望で家出さしやんしたが、何所に如何して居さんすやら、よもや出世をさしやんしたら、厭別といふではなし、便のない事も有るまい。わしや置去りにあうても、更々恨みる心はない。神佛へ向うても、母樣の御病氣、二つには源藏殿の出世をば、祈らぬ神も佛もない。若し世に出でなば元の夫婦と、書殘さんしたを樂しみに、月日を數へ待つわいな。ア惡い事が重なれば、又此樣に重るものか、人の身の上と水の流程定まらぬ物はない。アヽ思ひ廻せば廻す程、兄弟ながら憂身の上、妹は手越の里に勤の身、此姉も同じ川竹、前生よりの約束と、思へば因果な身の上」と、又も涙にくれゐたる。斯る折柄表の方、大小立派の侍一人、内の樣子を窺ひ〳〵、小陰にこそは忍びゐる。漸う顏を上げ、「アヽ愚癡な事思ひ出してつい泣いた、我身の事に身を賣る者さへ有るに、況して親の爲ぢやもの、泣くまい〳〵。浮き沈みは七度と、いふを此身の樂み」と、心も髮も取上ぐる、勝手へ萎れ入る跡へ、忍ぶ破垣紙崎主膳、續いて

かいお世話でござんした」と、愛想笑顔に見とるゝ佐兵衞、「イヤコレ隣のおかみ樣、お前の言はんした代物は彼子かえ」「アイ彼子でござんす」「シタリ見事、そして金の望はえ」「夫はお前の目一杯に」「ム、、イヤモ百兩が物はきつと有るて、百兩で手を打とかい」「アイ、そんならさうして進ぜて下さんせ。成程々々、此方にも氣に入つた代物、今半金渡しましよ、跡金の五拾兩は、親父の戻られ次第、證文に印形さしやれば其時に渡します。おれが行て來る所が有れば、支度して待つていやんせ、つい戻ります」と詞數、言はぬは粋の商賣がら、好い代物と心には、獨笑して出でて行く。「お來樣、マアマア相談が濟んで目出度ござんす。樣子うすうす聞いた所が、お前も今は新婦にならんしたさうなが、不躾ながら、今分のお前の身で、大まいの金の入用とは」「アイ、成程ソリャ合點行かんすまい、其譯と言ふは外でもない、母樣のぶら病、物喰はんすと間もなう吐す、膈とやらほん胃とやら、むつかしい病ぢやげな。百日の内に直らねば、死なしやんす病ぢやと、聞く悲しさは身も世もあられず、方々の醫者衆に見て貰ふ度毎に、療治とてもないではないが、迚も貧しい身の上では、所詮養生も屆くまい。此病には人參を、飽く程入れて呑ませねば、内が衰へて有るによつて療治が屆かぬ。時節ぢやと諦めよと、聞いて悔しい今の貧苦、大まいの金才覺する、當も手當もないしようの詰り、

土橋はの、人の渡る度每、危いといふこと」「エ何の危いことがあろ、私が先へ渡るわいな」「ヤ何ぢや、先へ渡る、オヽさうぢや〳〵、どうで渡らにやならぬ其身、とつくりと覺悟して、お念佛申して渡つたがよい」「オヽ仰山な、橋一つ渡る事を、何の苦にする事があろ、サアござんせ」と先に立ち、知らぬが佛眼兵衞が、心は鬼の目に涙、堤傳ひの野邊送り、消ゆる間近き道芝が、憂身の果こそ三重。

第五

秋の山、紅葉の床に男鹿の寢たるしをらしや、經緯に露霜おりし、錦は山の紅葉ばの、渡らば錦なか絕えん、憂き世渡りの數々に、憂きを積りし雪の下、藁屋の軒の侘住居、娘お來が賃仕事、ぶんぶ綿繰くる〳〵と、絲より細き瘦世帶、拵に暇なかりけり。折から鄰の女房が、佐兵衞を連れて內に入り、「オヽコリヤお來樣、いかう精を出さんすの」「オヽお市樣ようお出、何程あたふた精出しても、高が細い此仕業、モ埒の明く物ぢやござんせん」「オヽそりや道理、シタガそんな細い仕事せうよりも、此中お前の言はんした、其相談が調うて、今其お人を連立つて、來は來たがお來樣、內方の首尾合は」「アイ、好いとも〳〵、何から何までお市樣の、モい

ふ其譯は、何を隱さう殿樣の、お種を宿してをりまする」と、聞いて悔り、「ヤア、そんならわりや懷胎してゐるか」「アイ、しかも左孕」「アノ男の子か、ハア」はつとばかりにどうと伏し、暫し詞もなかりける。道芝は面映く、勤に誠はない物と、いへども深い互の緣、若殿樣に思はれて、幾夜さ交す睦言の、其きぬ〴〵も重りて、可愛さ積るお情の、やゝを設けた二人が仲、父樣申し、へエ、餘まりつれない胴慾な、私が心も思ひやり、堪へて下んせ父樣」と、いふも涙の淵瀨川、戀の筣堰留めて、喞ち歎くぞ道理なる。親は胸までせぐり來る、涙呑込み呑みこんで、「コリヤ娘、オ丶夫なら我がのが道理ぢや〳〵尤ぢや。ハテモウ其身に成つたら何とせう、樣子を聞けば聞く程不便、是非がないと諦めて、可愛けれども切らねば」「エエ」「ア丶いや、サイノ、緣を切らねばならぬ所ぢやけれども、モウ切らぬがよからうといふことぢや」「ム丶そんならアノ聞屆けて下さんしたか、エ丶忝なうござんす」と、知らず悅ぶ子の心、親は不便と血の涙、「左右いふ中モウ日暮、今夜はこつちに泊つて、久し振ぢや、婆や姉に逢つたがよい」「アイ〳〵、そりや猶嬉しうござんする、そんならさうして下さんせ」と、いそいそ悅ぶ道芝が、先へ進むは無常の風、早誘ひ來る暮六ツの、「ハアモウ鐘が鳴る、幸ひ人の通りもない、向ふの土橋で一思ひ」「エ丶父樣、何いはしやんすぞいナア」「アイヤ、あの向ふの

は、縫之介様の事を思ひ切つて、持氏様の御殿へ、お伽に上つて貰ひたい」「エ、變つた事をいはしやんす、何でも是には」「オ、樣子がある〳〵、イヤモウ樣子が無うてなろかいやい。コレ若殿縫之介様は、そちと深う云交してござる故、姫君と御祝言なく、夫故細川家へ申譯立たず。二つには持氏様、お心を懸けなされたとある、差上げねば是も亦、縫之介様の御身の難儀、其方が心を取直し、若殿様を思ひ切つて、持氏様のお心に隨へば、われが身の爲、おれも出世、殿様も又御祝言なさるれば、お家も治まる何所もよい。サ爰の道理を聞分けて、得心してくれコリヤ娘、モこんな無理な事を頼む親、さぞ酷い親と思はうが、何ぞ譯がなうては頼まぬ。第一はわれが身の爲、何卒聞入れて下され」と、頼む涙聞く涙、倶に涙の淵ならん。「思ひ掛ないお頼、定めて是には様子がござんせうが、父様、是ばかりは堪忍して下さんせ。殿様の事思ひ切り、姫君との御祝言を、どうマア夫が見てゐられう。外の事なら何でも聞かう、此事ばかりは赦して」と、口說き歎けば、「エヽ聞譯のない、わりや親への孝行忘れたな、行かねば其方が爲にもならぬ。コリヤ泣かずとも得心してくれ、コリヤ泣くな〳〵。サヽ娘、賢い者ぢや、サ聞分けてくれ。コリヤ、手を合して親が拜む、コリヤ拜む〳〵」「エヽ是いな、勿體ない〳〵、段々の入譯を、聞入れぬ憎い奴と思うてぢや有らうけれども、外の男を持つ事の、ならぬとい

れて下さりませ」「エヽ滅相な人ではあるわいの。思案して居るどうぶくら、何やら好さゝうな思案も、恂で引込んだ、麁相なわろでは有るわいの。ヤヽ、娘ぢやないか」「さういはしやんすは、オヽ父様か」「娘か」はつと刀を後へ廻し、互に驚くばかりなり。「オヽ娘、其方に逢ひたうて逢ひたうてならなんだに、よい所へよう來てくれたなァ」「サア私もお前に逢ひたうて、アイヤ、此中不思議に姉さんにも逢ひました。母様もお健なさうな、マアお前も御無事で嬉しうござんす。久し振で逢ひましたれど、きつう氣の急く事がある、緩りとお目に掛りませう」と、行くを引留め、「コリヤ〳〵〳〵、マヽ待ちや〳〵、其方にはとつくりと、話さねばならぬ大事の〳〵用がある」「サア私もたんと話したい事があれど、何も叶はぬ大事の用、其内緩りと聞きませう」と、行かんとするを又引留め、「サヽヽ、マヽ待ちやというたらマァ待ちやいの。コレ、其方が大事の用といふは、若殿を尋ねるのか」「エヽ」「ヤコレ隱しやんな、知つてゐる〳〵。まだ其上に、わりやあの廓を駈落したであらうがな」「ムヽ合點の行かぬ、成程私は駈落しましたが、樣子を知つての其譯を、サ話して聞かして下さんせ」と、いふ顏眺め涙ぐみ、「何でいはねばならぬ事、がマァ是は斯うして置いて、其方には此親が、改めて無心がある、聞いてたもるか」「ムヽ久し振で逢うた父様、無心とは何でござんすえ」「オヽ外の事でもない、其無心といふ

へ參りますれば、何所も彼所もよいぢやござりませぬか。ぢやに依て娘に得心させます程に、此役目を私に、云付けさしやつて下さりませ」と、理非を分けたるさつぱり親仁、思案も深き眼兵衞なり。紙崎主膳打頷き、「スリヤ其方は道芝が親ぢやな、ホオ、神妙なる一言、併し女の一途の了簡、いか樣に申しても聞入れなき其時は」「ハテそりやモウ是非がござりませぬ、何で助からぬ彼奴が命、人手に掛きよより、私が手に掛けて殺しまする」「ム、緊と其詞に相違はないな」「ハテ親が子を殺しまするに、誰が何と申しませう」「ホヽウ出來した〳〵、ソレ此の一腰は當座の褒美」「エヽ此一腰を」「サ百姓の魂を、武士の性根に入れかへて、緊りとナ、得心さすが國の爲、又娘が爲、合點が往たか」「ハアいかにも、成る成らざるは刀の鯉口、切るか切らぬは生死の境、合點でござります」「其方が宅は」「雪の下」「名は」「眼兵衞と申します」「緊と詞を番うたぞ」と、心殘して紙崎は、雪平引連れ立歸る。後打眺め眼兵衞は、暫し思案に暮れけるが、「アヽ儘ならぬ浮世の中、切ないは身の難儀、人手に掛けさすまい爲に、俺が殺すと一寸遁れ、併し駈落したといへば、何所をしやうど、餘人の目にかゝらぬ中に、アヽ早う逢ひたい」と、案じる親の心が通じ、血筋の緣か道筋を、尋ねくるわの道芝は、殿に放れてうろ〳〵と、走り躓き小石道、ばつたり當るも緣の綱、「オヽ是は〳〵、餘り道を急ぎまして思はぬ麁相、お赦しなさ

付けられて砂まぶれ、「ヤアうぬは奴の雪平め、又しやくり出て邪魔ひろぐか、ソレ遁すな」と主從が、切つてかゝるを事ともせず、薙立て〳〵切り立つる、鋭き切先狼狽眼、「コリヤ叶はぬ」と軍平始め、ばら〳〵と遁行くを、「ヤア卑怯者遁さじ」と、追駈けゆく後より、「雪平待て」といふ聲に、はつと悑り振廻り、「ヤアお旦那、紙崎主膳樣」「オヽ最前より木影にて、樣子は殘らず見屆けた。ホヽでかした〳〵」「ハ樣子御存じの上なれば、早お暇」と又駈け出す。「コリヤ待て雪平、そちや駈出して何處へゆく」「道芝を追手の奴原、切散らさん其爲に」「ホヽ尤ながら先控へよ。大杉が手を假つても尋ね出し、持氏卿へ道芝を差上げずば御立腹、兎角妨げになるは傾城道芝、不便ながらも手に掛けずばなるまい、ハテどうがな」と主從は、思案取り〳〵なる所へ、「イヤ其お役目は私に、仰付けられ下さりませ」と、木蔭を出づる眼兵衛親父、樣子ありげに見えにけり。「ヤア終に見なれぬ其方、何を知つて小癪千萬」「アヽイヤ、其樣にお叱りなされまするな、私は其傾城道芝が親でござります。道芝事は幼い時、奉公に遣しましたが、今では全盛の大夫になりをつて、勿體ない、若殿が可愛がつて下さりますとの噂、よう聞いてをりまする。今お咄しを聞けば、若殿と娘と緣が深い故、姫君樣と御祝言もなされず、又御大將へ差上げいでは、やつぱり縫之介樣の御身の難儀。ハテ娘さへ得心して、持氏樣

や。月若殿は雪の方の腹に出生、是が伯父御大膳樣と、雪の方と密通なされて、設けられし御子故、惣領子を追退けて、月若殿に此家を遣りたいといふが伯父御の願ひ。實家老の和田左衛門、新參の大杉源藏、此二人がむつかしさに、色々工夫なさるれど、花若殿は御實母の、花の方の御殿にござれば、仕樣しがくの手段にあぐみ、所を我等枕を割り、案じ出した其趣向は、花の方の上屋敷へ、往來しやる其折柄、溢れ者をかたらうて、無二無三に切散らし、花若の母御を仕舞へば、跡は直に搔廻される。供廻りも女ばかり、ひよろ〳〵侍五人か十人、お身の手には行きそなもの。斯く大事を語つて聞かす上は、是非仕果せてくれねばならぬ、ナンと智慧ではあるまいか」と、取締なくばつとした、謀とは見えにけり。善六は跡先も、慾の一字にふわと乘り、「お氣遣なされますな、子分子方を此指で、數へて見れば三四十人、命知らずの下駄組あれば、きつと勤めてお目に掛けう」と、承けた此方も滅法彌八、安受合の慾の熊鷹、胸を据ゑて云放せば、「オヽ心地よいお身の一言、夫聞いて安堵致いた。委細は追て沙汰に及ばん、夫まではナニ善六」「軍平樣、互に祕すべし〳〵」と、邊見廻し善六は、別れてこそは急ぎ行く。後見送つて原田軍平、「ヤア〳〵者共、道芝が行衞尋ね捜さん、イザ來いやッ」と云捨て、駈行かんとする所へ、思ひがけなき雪平は、走りかゝつて軍平が、首筋摑んで二三間、投

何でお尋ねなされます」「ア丶仔細有つて密に尋ぬる、身は仁木將監が家來、犬淵藤内といふ者、大杉源藏が家來原田軍平といふ奴、此奴も倶々尋ぬる由、先を取られては身が一分が立たぬ。見付け次第早速に注進せば、褒美は望に任せん、必ずぬかるな。家來參れ」と目を配り、別れてこそは立歸る。跡に眼兵衛濟まぬ顔、「ム丶そんなら手越へやつた道芝は、欠落をしをつたか」と、いふを德兵衛が聞咎め、「コレ貴樣は其の傾城と近付か」と、問はれてはつと、「イヤ〳〵近付でも何でもなけれども、今甚う流行る太夫と聞いた故、名は疾うから知つてゐる。ヤ何の役にも立たぬ話して、隙入つては互の損。サアおぢや〳〵」と話をば、花で散らして花崎の、問屋をさして急ぎ行く。世渡りも、己が心の儘ならぬ、面も異名も一對の、上見ぬ鷲の善六が、何か工面の巧み面、肩で風切る向ふより、歩み來る原田軍平、邊見廻し、「コリャ〳〵善六、約束の時刻を違へて、よう待たせたな」と、いへば善六、「オ丶軍平樣、其お叱りは我等が覺悟、俄事が出來ました故に思はぬ隙入り。扨お頼みの一通り、仰聞けられ下されませ」「オ丶其丈夫を見込みし上は、話して聞かさん、大膳公よりお頼みの筋といふは、今御病氣と披露してある大殿の持氏殿は、疾うにごねて仕舞つたわやい」「エ丶」「病氣分にして置かねば、家督願ひの妨。時に二人の息子達の中、惣領の花若殿は、花の方に出來た子で、正銘正眞の殿のお子ぢ

此大變を深く隱し、御跡目相續まで、事穩便に計るべし。ソレ御乘物イザ早う」と、指圖に泣く泣く御死骸、皆々寄つてかき乘すれば、左衞門も跡に立ち、行列とてもそこ〳〵に、思ひも辿る玉鉾の、館をさして急ぎゆく。此方の岸へ曲者が、ぬつと出でたる其有樣、血刀ひつ提げ切首を、川へ打込みうそ〳〵と、邊見廻し〳〵て、徐々として落ち行く樣、不敵なりける三重。

第四

花の名所は、エヽソレ都に芳野、エズトセノセイ、井出の山吹、エヽソレ杜鵑に花萩よ、エズトセノセイ。「何と德兵衞、花崎の花問屋迄は餘程遠い、休んで一服呑まうかい」「オヽいかにも、そんなら休も」と荷を卸し、堤に腰掛け摺火打、「ナンと眼兵衞殿、今日の花はよかろがや」「オヽサ好い代物ぢや。アヽしたが日和が堅いので、花畑の水の世話、年が寄つてはしんどい〳〵」「サア何處も夫で迷惑な」と、煙管を銜へて商話。斯る所へ仁木が家來犬淵藤內、手の者引連れ出で來り、「ヤイ〳〵兩人、足利殿の御舍弟緣之介殿、細川家の御息女操姬、又傾城道芝、若し此道へ來なんだか」と、聞くより眼兵衞耳聳て、「イエ〳〵そんなお方は見えませぬが、其道芝と仰しやりますは、手越の里の傾城でござりますか」「オヽサいかにも〳〵」「ハテナア。して又其三人は

の中も事ともせざりし御召の名馬、恐るゝ物目にかゝらず、何を指してけし飛ぶやらん。夫馬は乘る人の變を知らす其の妙獸、察する所此邊に、君に敵たふ其の伏勢、隱れゐるに極つたり。立別れて叢を詮議せよ」と下知する折から、百騎ばかりの隱し勢、鬨をどつとぞ上げにけり。スハ一大事と左衞門が、眞先に進み出で、「何者なれば路次の狼藉、名乘れ〳〵」と聲掛くれば、一騎の內に其の有樣、大將分と見えたる一人、眞先に大音揚げ、「お大名のお通りと存じたる此我々、命惜しくば大將の、首を渡せ」と罵つたり。左衞門は嘲笑ひ、イデ物見せんと太刀拔き翳し、「爰は我等に御任せ、我君には此川を打越し給へ。御跡を取切つて、敵の大勢一人も此川は越させじ」と、群る中へ馳入つて、上段下段虛々實々、入り亂れてぞ戰ひける。君も御馬を早め給へば、お供の同勢えい〳〵聲、半渡ると見えけるが、樣子見濟し以前の曲者、水底を潛り行き、持氏卿の御馬の足、ずばと切たる覺のわざ物、「アレ助け參らせ」と、焦るばかりに眞の闇、そこしら浪と流れゆく、手ん手に松明照し合ひ、川下より御死骸をかき抱き、見奉ればコハいかに、御首は討たれたり。ハッと驚く其所へ、息を切つて馳け來る左衞門、呆れ果てたるばかりなり。思案を極め聲を潛め、「御首討つて立退きしは、一揆の業に相違はなけれど、横死とあればお家の滅亡、只何事も隱密々々。御病氣なりと世に披露し、家中の內より外樣へは、

將監が伏勢あるべし、相摸川より近道を、上屋敷へ御歸館あれ、跡は某計らはん。左衛門殿御供」と、呼はる聲と諸共に、燈し立てたる數の松明、手綱搔繰り召しの駒、和田の左衛門が引添うて、相摸川へと急ぎ行く。折もこそあれ一散に、駈來る畑介が、夫と見るより拔く刀、切込む切先しつかと留め、「ヤア心得ぬ此の振舞、樣子語れ」と氣を苛てば、「ヤア成上りの皰侍、うぬが舌より兄主膳、家は沒収君には勘當、汝が首を手土產に、兄への功の時到來、觀念せよ」と又切り込む、飛退つて、「早まるな、麁忽すな。汝が兄主膳殿を追失ひ、まだ其上に持氏公を、毒害なさんとせしは仁木將監なるぞ。謀計顯れ只た今、相摸川へ落行きしぞ、早く追掛け打取つて、兄への功を立てられよ」と、聞くより畑介立上り、「スリヤ兄を失ひ、其上に家國を押領せんと工みしは仁木將監とや。合點ぢや、まつかせ」と畑介は、川原をさして急ぎ行く。降り頻る、夜半の嵐に水音も、物凄まじき相摸川、ハイ〳〵と先を拂はせ、燈し連れたる松明に、前後を守護し押來るは、足利持氏卿、川端近く著き給へば、跡に引添ふ和田左衛門、御馬前に謹しんで、「水は高く見え候、上の二瀨は水勢薄く、此瀨より御渡し」と、申上ぐれば持氏卿、川原をさして打ち給へば、俄にけし留む駒の足、鐙一當あてさせ給へど、跡へ〳〵とたじ〳〵、御落馬危く見えければ、左衛門は駈寄つて、四方をきつと、「アラ不思議や、水火

まい〳〵、毒の印いで見せん」と、茶碗追取り庭前の、松の繁みに打ちかくれば、數多の小鳥一時に、落ちて果敢なくなりにけり。「御覽なされしか持氏卿、此毒藥は南蠻より傳はる祕法、豫て認め置きたる仁木將監、君を弑する謀叛の次第、眞直に白狀」と、きめ付けられて將監が、算用ぐわらりと、「イヤコレ大杉、毒の事は貴殿にも」「オヽ一味と見せたは詮議の種の、ふかふかと大事を明す大癡漢、主君の御罰應へたか」と、きめ付けられて將監は、まう是までと打つてかゝる。得たりと源藏突立てば、ソレ遁すなと將監が、下知に群る雜人ばら、右往左往に薙立つれば、立つ足もなくむら〳〵と、遁げるをやらじと追つて行く、透を窺ひ曲者が、縫之介と姬君を小脇に掻込み、駈行かんとする後より、慕ひ來りし道芝が、「コレ縫樣」と駈寄るを、踏倒し一散に、表をさして駈けて行く。群る中を切拔けて、駈來る奴の雪平、跡に續いて藤内が、大勢引具し追取卷き、「ヤア主なしの紙崎が、一合半の浪人奴、腕を廻せ」と犇めいたり。「オヽ好い所へ犬淵藤内、叱人なしの氣儘の仕事、イザ來いやッ」と仁王立、「ヤア緩怠なる毛奴め、物な言はせそ打取れ」と、藤内が下知に連れ、打つてかゝる雜兵共。「シヤ小癪な」と拔き翳し、多勢を屈せぬ手練の働き、目覺ましかりける次第なり、一間の内より持氏卿、和田の左衛門御供にて、立出で給ふ折からに、取つて返す大杉源藏、御前に向ひ手を支へ、「本海道は

やれば犬淵は、縫之介を伴うて、奥の間へこそ入りにけり。何思ひけん源藏、道芝が縄解きほどき、縁より下へ突落し、「心あつて赦し遣す、ソレ勝手次第に屋敷を立退け、早疾く〱」と詞の下、嬉しさ恐さ一散に、表を指して走り行く。一間を出づる仁木將監、大杉が傍へ寄り、「初より一物ある、御邊と睨んだ眼に違はず、本心聞いて滿足致した。然らば事を急になすべし、其手段とて外にもなし、濃茶を君に獻ずる時、毒藥を入れ人知れず、討取らん我が計略、悦ばれよ大杉」と、速り切つたる詞を打消し、「サレバ其毒藥、麁略の儀は有るまじけれど、互の大望分目の大事、仕損じては事の破れ」と、念を押されて「ナニサ〱、家に傳へし祕法の毒藥、其疑は無用々々。萬事はナ、斯う〱」と耳に口、牒し合せてゐる所へ、早御歸館と呼はる聲、何心なく持氏卿、立出で給へば仁木將監、胸に湛へし惡事の鴆毒、さも忝しく濃茶の手前、謹しんで奉れば、持氏御手に觸れ給ひ、「オヽしをらしや汝が手前」と、既に呑まんとし給ふ折しも、次の間より聲高く、「ヤア〱我君、其お茶暫く御控へあれ」と、呼はる聲に仁木は恟り、「コレサ〱大杉、何故お茶をお留めめさるゝ」「サレバサ、あのお茶は毒でござる」「エヽコレ大杉、ソリヤ何を云ひめす、たつた今此將監が、ナ、コレサ差上げた茶、毒があつて堪るものか」「テモ毒に極つてある、但し又毒でなくば、先づ其元毒味なされ」「イヤ其儀は」「ホヽウ呑まれ

からぬ大膳岩藤、あの兩人が立振舞、某に成替り、隨分心付けられよ」と、云はぬ色なる武士の、別れてこそは立つて行く。奥の方より大杉源藏、道芝を小手縛り、抱への帶を猿轡、引立て出づる足音に、縫之介も走出で、「ヤア新參の大杉源藏、其傾城を何とする」「イヤお騷ぎなさるな、道芝に繩を掛けたは、私ならぬ君の仰せ、細川家のお姫樣と御婚禮なさるゝならば、此傾城は拙者が計らひ、市中に隱し置き、誰れ憚らぬお妾樣、サア御得心か。御承知なくば道芝は、今此座にてたつた一討」「ア、コレ〳〵滅相な、夫斬つて堪るものか」「スリヤ御祝言遊ばすか」「サア夫は」「御承知なければ暇乞、サア〳〵」に口籠り、應とも否とも云はれぬ手詰、道芝は恨めしげに、見上げる目には腹立涙、只伏沈むばかりなり。大杉刀拔き放し、今が最期と振上げる、刀の下に縫之介、「ヤア〳〵待つて〳〵」「待てならば速かに、お受の返答承らん。如何に〳〵」と手詰の折柄、當番の侍あわたゞしく、「今日晝の見廻りに、何者とも相知れず、寶藏を切破り、繼目の御綸旨失せ候、早速注進仕る」と、息を切つて言上す。ハツと驚く縫之介、「我が預りの御綸旨は、何者が奪取りしぞ。時も時折も折、かゝる悪事も重るものか、こは何とせん口惜しや」と、無念の涙はら〳〵と、きこつを絞るばかりなり。大杉は聲高く、「ヤーア犬淵早參れ、其方は御舍弟を御供申し、君の御前へ來るべし」と、云付け

朝日の登るが如く、主膳は遙緣側の、麓に曇る村雨と、ふりゆく身こそ是非もなき。大杉は大紋の、袖かき合せ聲涼しく、「ヤアヽ紙崎主膳殿、我匹夫よりかゝる立身、貴殿には君の御勘氣受け、目前天地と別れども、榮え衰ふは世上の常、數ならねども此大杉、御前惡しくは計らふまじ、暫しの艱苦凌れよ」と、いへど主膳は答なく、表の方へと立上る。將監は罵聲、「ヤアヽ原田軍平早く參れ、ソレ紙崎主膳を追拂へ。イザ大杉殿、改めて我君へ御目見」と、左衛門諸共打連れて、前代未聞の出世の袂、飜してぞ入りにける。始終の樣子最前より、尾上は一間立出でて、あたり見廻し紙崎が、傍へ立寄り聲を潛め、「樣子は殘らず承りました、忠臣無二の貴方樣、御勘氣の此上は、心元なき御家の有樣、行末とても覺束なく、案じ彌增す世の中や」と、末賴みある詞の端、「オヽ優しくも申されたり、元町人の其元なれども、今中老とお取立て、其忠臣の魂見込み、賴み置きたき一大事、伯父大膳を初め、方人の仁木將監、花の方御親子を追ひ失はん謀、何卒貴所の忠臣にて、二方の御身の上、偏に賴み存ずる」と、忠義に凝つたる武士の、低頭平身なしにける。折から出づる奧使、尾上が前に手を支へ、「只今御出でなされませとの、仰せられでござります」「オヽ岩藤樣よりの使とな。イヤ申し主膳樣、最前奧にてお局の懷中より落ちし密書、拾ひ置きしも詮議の手がかり」「成程々々、心善

又手段がある、八郡の郡代知行、當年分一つに束ね、我君へ差上げられい」「何、銘々が當年の知行をな」「イヤサ驚くは未熟の至り、百姓を憐む所存ならば、身を捨てゝ武士道の、器量を出すは爰の事、何と得心が參つたか。將監殿の仰も破らず、百姓の心も養ひ、雙方治る武士の器量、天晴々々。身不肖ながら、此の大杉が申し受ける知行を以て、八郡の郡代へ褒美として分ち與へん、安堵召され」と押付けて、人の器量に仕立て上げ、事を治むる大杉が、器量の程ぞ類なし。郡代共平伏し、「ハヽ有難き大杉樣、御褒美どころではござりませぬ、武士の誠を道引きなされ、八郡の鑑と致さん。ャ仁木將監樣、當年分の郡代知行、經料に差上げます」「ホヽ夫では此二木も大慶」「ハヽ私共が譽れを取る、師匠は卽ち大杉樣、暇申して百姓共に悅ばさん」と郡代は、勇み立つてぞ歸りける。又も奥よりお傍の使、評定の間に立出でて、只今の決斷上聞に達し、大杉殿に御上意あり、我祿を捨てゝ國を治むる大慮の程、感ずるに餘りあり。今日より老分の役目として、中央の間へ出勤すべし、則ち烏帽子大紋を、此印に下さるゝ」と、臺の物差出し、「又主膳殿に御上意、其身の不才を顧みず、源藏を奥御殿へ入れまじとの願の條、不屈至極の次第なれば、大小を取上げ、門前より追拂へとの仰なり」と、聞いて遉の紙崎も、驚く顏色大杉には、又著せかへる動の、幅も大紋立烏帽子、中央の間へのツしのし、峯に

き左衛門も、無念隠して將監と、倶に大杉同座の禮儀、評定の間へ控ゆれば、此方も詞改まり、水際立ちし受答へ、取り〴〵挨拶ある所へ、當番の侍罷出で、「先刻申し達したる、相撲一國の郡代、將監樣へ直談の御願、今朝より相待ちをります」「ホヽ、郡代が願ひ裁判をして取らせん、只今是へ通すべし」と、將監が計らひに、相撲の郡代打連立ち、庇の間に畏り、郡代頭罷出で、「此度光明寺普請成就に付き、我々が領分は仁木殿の御支配故、大磐若經料として、高割の金子出すべき旨、先達て仰付けらるゝ所、領内へ屹度申付けしが、先年建長寺造營の節、經料出金致したれば、此度は御赦免と、領分の百姓ども我々が屋敷へ詰めかけ、歎きの願ひ一統す。權を以て押す時は忽ち事亂れ、いかゞ計らひ申さんや。仁木公の御意次第、我我も覺悟あり」と、思ひ込んだる願の筋、將監苛つて居丈高、「ヤア臆氣たる郡代共、百姓に欺されて、臆病風の腰拔武士、此將監が一旦申出せし事、違變あらば其方共、一々に首を刎ね、梟木に暴さん」と、睨み廻して罵れば、郡代共詞なく、事しらけてぞ見えにけり。大杉は立上り、郡代に打向ひ、「仁木殿の詞も立ち、其方達が百姓を憐む心も立つやうに、此大杉が差圖致さう」「ハヽ、有難き仕合、雙方治る御仕法は」「ハテ何の別の仔細はない、先づ百姓へ經料の金子、赦し遣したがよからう」「ハテ百姓へ赦し遣し、仁木公への申譯は」「ハテそこに

我君の不徳と成つて京都へ聞えし時、取返しは成りますまい。此道芝が納め方、私にお任せ」と、いふに將監横手を打ち、驚き入つたる源藏の計らひ、尤至極致した」と、此評定も源藏が、主君へ盡す忠義なり。重ねて奥より御傍衆、「將監樣へ御上意あり、只今源藏が評議上聞に達せし所、忠節の趣なれば、我君甚だ御感あつて、只今より苗字を赦し、大杉源藏と名乘り、評定の間を勤め、知行座席も各と同格、則ち衣服長袴、下し置かるゝ者なり」と、高らかに相述ぶれば、和田紙崎は口を閉ぢ、取持顔の將監も、呆れ入つたる氣色なり。大杉はつと白臺を、押戴けば小姓達、「イザ召されよ」と立ちかゝり、又著せかへる褒れの公服。同じく奥よりお側の使、「左衛門殿御上意あり、紙崎主膳こと、先達て光明寺の普請、只華美を表にして、役目の實儀を失ふ越度、續いて今日傾城を刑罰して、我に恥辱を與へんとしたる短慮の至り、只今より評定の間を下り、縁側を勤めよとの仰なり」と、聞いて悔り紙崎主膳、差俯むいて詞なし。やゝありて面を上げ、「委細畏り奉る、又改めて拙者が願、御取次頼み入る。大杉殿は才智を以て高祿を給はれど、氏系圖正しからず、仁木和田、此の主膳が家柄は、三老の格式にて、奥御殿を相勤める。大杉殿には此評定の間を限り、奥御殿の出仕を御無用になし下されと、我君への御願」と、詞を殘し徐々と、縁側の間へ引退り、どつかと坐せば件の使、言上せんと立つて行く。黑付惡

木様へ申上げます、相撲八郡の郡代共、御願ひの筋あつて、直に御對面申したき由、大勢伺候仕る、如何はからひ申さんや」「ナニ此將監に直談せんとや、暫く次に控へさせよ」ハッと答へて取次が、表へ急げば御殿より、御側衆立出でて、「只今のお盃、上覽に入れし所、酒の文字を書いたるは、御身の養生、源藏が發明以ての外御意に入り、向後侍に御取立、緣側の間を勤むべしと、上下大小を下さるゝ」と、臺の物差置けば、三老共に物をも云はず、源藏は悔り顔、「下郎の私勿體ない、御赦されて下さりませ」「イヤ辭するに及ばぬ御上意ぢや、御意ぢや〳〵」と小姓達、手々に著せる上下も、どてらの上へしやつきりぐわつたり、恐々紐の緊括り、差しこなしたる業物の、しやんと居直る袴振り、「此通りを言上」と、使は奥へ急ぎ行く。紙崎は目も掛けず、「只今申せし御舍弟縫殿、御身持放は、傾城が根ざしなれば、此根ざしを打切つて仕舞ふより外はない」「オヽ此左衞門も其通り、仁木殿如何致さう」「サレバ〳〵、傾城をさつぱりと、打斬つて仕舞ふも近道、此儀は御兩所いか樣とも、勝手次第」と意地ある詞、源藏はつッと寄り、「お見出しに預つた私、甲に著て申すではござりませぬが、傾城をお斬りなさるは、大根を切るより易けれど、最前から見受けまするに、あの道芝は持氏卿の御機嫌にも入つてあり、第一は傾城がお手討になるやいな、世上へぱつと沙汰廣がり、縫之介樣の御放埓が、

文字書付ける。紙崎主膳が賢人と、書いた心は賢きを、登げて用ふる君子の道、次には和田が國の字を、書きしも常に大將の、下を憐む仁者の道、各臺に直しける。源藏は伸上り、「申し申しどなた樣も憚りながら、私も些とばかり思はくがござりますが、幸ひ最前お上から下された此盃に、書いて上げたう存じます」と、ほつかりいへば仁木が引上げ、「ホ、コリヤ出來した、御機嫌に入つた其方、却つて興を催す事、存じ寄りの文字を書き早く上げい、赦す赦す」「ハ、有難し」と源藏は、飛立つ氣色懷の、矢立取出し疾く〳〵と、書認めて盃を、評定の間へ差出せば、左衛門は手に取り上げ、「ム、是は酒といふ文字、武門の大將常に樂しむべき物に、酒といふ字は甚だ不遠慮、御憤りの恐あれば、差控へよ」と止むれば、「ア、イヤ申し申し、憚ながら私が心は左樣ではござりませぬ。關八州の公事裁判、御一人の御思慮より、御政道を行ひ給へば、お氣の結ぼれは知れた事、御鬱散遊ばすこと、お藥の廻りより、直に驗のある御酒の德、世の譬にも酒の事を、愁を拂ふ玉箒とやら、兎角に御身健に、御養生は酒の一德、御無病なを肝心と、酒の文字を差上げます」と、當座の頓智に小姓達、源藏が書いたるも、君の興に差上ぐれば、四つの盃とり〴〵に、御殿をさして入りにける。後は三人聲潛め、御舍弟のお身の上、納りいかにと評定の、表の方より溜りの侍、罷り出で兩手を支き、「仁

盃、押戴き〳〵懐へ納むれば、持氏御機嫌麗はしく、「ヤア〳〵將監、先刻申付けたる事、いよいよ評議糺すべし。又源藏には用事あれば、暫く夫に控ゆべし」と、御諚の下に次の間より、遠侍罷り出で、「北の方より御使として、局役岩藤中老尾上、お次まで參上、通し申し候はんや」と、伺へば持氏卿、「ホヽオ兩人共是へ通せ、イザ疾く〳〵」と仰に連れ、軈てかくとぞ云ひつぐる。花の香の、隙洩る風に送られて、徐々出づる長廊下、遙下りて手を支へ、「北の方樣の御口上、今日は問注所へ御入り遊ばし、御政道の御評議是ある由、嘸かしお氣詰、右御伺ひとして局岩藤中老尾上參上」と披露につれ、持氏卿も御悦喜まし〳〵、「オヽ兩人共大儀大儀、二人の使者の饗に、此傾城は奧へ連れゆき、花月の間で一獻酌まう」「アイ縫樣のござる所へ、連れて往て下さんせ」と、憚る色も中々に、小姓姿をほら〳〵と、我君に引添へば、諸士は頭を下げ簾や、帳臺深く入り給ふ。後は窃と物音も、何かは思案の三つ鐵輪、緣側には源藏が、退屈顏にきよろ〳〵と、欠伸を隱す折柄に、奧より使のお側小姓、恭く白臺に、三つ盃を取載せて、評定の間へ差出し、「我君只今酒宴の中、各へ仰出さるゝは、武門の大將、常に忘れず樂しむべき物は何なるぞ。銘々此盃に書留めて奉れ」と、謎をかけたる御上意に、皆皆ハッと領承し、盃手ん手に硯箱、筆とり上ぐるもまんがちに、初筆は將監慾深く、金銀の

そんな覺はないわいな」「ム丶小姓に成つて入込みしは、其方が物好か」「テモいろ〳〵な事問ふお方ぢや、縫樣に逢ひたさに、足輕の源藏殿と連立つて來たわいな」「何足輕の源藏が連來りし女とや、將監に吟味させん、其源藏を呼出せ、早く〳〵」とのたまへば、ハツと近習は立上り、間每に傳ふる聲々に、まだ目にも見ぬ奥御殿、初めて上る緣側傳ひ、恐れ入つて平伏す。將監聲かけ、「ヤア〳〵源藏、今呼出したは別儀でない、是に居る小姓、見覺えて居ようがな。イヤサ女を小姓の姿に窶し、お館へ入れたるは、其方が所爲であらうがな」「ハア丶成程、今朝あの女中が途中で私を呼びかけ、此お館の殿樣に逢ひに行くのぢや、連れて往てくれいとある。此御殿の殿樣とあれば御前樣、何憚る事はなけれど、端手な傾城の姿で、御殿へ通つたと噂があつては、何やら惡さうな事ぢやと存じ、お小姓の姿に扮し、御目見えにして這入らせました。下郎の私、味行つたと存じましたが、不調法になりましたら、憚ながら幾重にも、御免を願ひ奉る」と、恐入つてぞ見えにけり。持氏卿打笑み給ひ、「傾城が戀慕ふを、此持氏と心得、世上の聞えを思ふは神妙、見所のある下郎、小姓ども源藏に酒をくれよ、それ〳〵」とのたまへば、銚子盃三寶を緣側に差置いて、「有難き御意の盃頂戴致せ」「ハアヽ、イヤモ有難いと申さうか、冥加に餘る御意の程、給べまするは猶慮外」と、三寶の御

へ道芝が、後にといふを目で知らせ、是非なく奧へ縫之介、姫諸共に入り給ふ。廊下の方より足音して、持氏卿御出ざふと呼はれば、小姓を側に將監は、禮儀正しく控ゆれば、立出で給ふ持氏卿、寛仁柔和の御骨柄、續いて出づる和田紙崎、御側小姓が御酒盃、中央の間に座し給へば、仁木將監取敢へず、「先刻仰付けられし新參の此小姓、とくと窺ひ候處、姿を扮せし女にて候」と、申上ぐれば一座の恟り、和田左衞門つッと寄り、「女を男の姿に扮し、御館へ入るゝこと怪しみの第一、屹と吟味遂ぐべき事」「アイヤ〳〵、將監そこらは脱りませぬ。今朝入込みし此小姓、合點行かじと思ふより、態と奧へ通せしが、御舍弟縫之介樣を戀慕ふ此女、さるに依て云號を嫌ひなさるゝ、若殿の其病の根は此小姓」「イヤ將監殿お待ちなされ、姫をお嫌ひなさるゝ事聞きも及ばぬ」「アイヤ麁相は申さぬ、元來物を諂ひ飾るは、此將監嫌ひ物、ありの儘に申すが實儀、扨々お笑止千萬」と、芥掻出す舌先に、根ざしありとぞ見えにけり。持氏卿氣色を正し、「弟縫之介事は追つて沙汰に及ぶべし。最前遠目に見たる小姓、ソレ目通りへ」と仰の中、アイとおめたる氣色なく、御前へ居直れば、「コリヤ女面を上げよ」と、ためつすがめつ持氏卿、「其方は梅澤の茶屋で逢うたる女ではないか、ハテ麗しい。まだ見ぬ花を尋ねんと、古歌を書いたる文の枝折覺えつらん」「オヽ殿樣の何を云はしやんすやら、

何の遠慮に及ばぬこと。イヤ縫之介樣、今更申すに及ばねど、義詮樣の仰には、お前と私は云號、疾うから此館へ來て、朝夕お傍に暮せども、遂に優しいお詞は、露ほど受けぬ情なさ。愚痴な愚鈍な身を悔み、よるべ初瀨の神祈り、肝腎儀式の新枕、いつ祝言がある事やら、月日を指にをり〳〵は、泣いて暮してをりまする」と、恨涙に暮れ給ふ。「そんならあなたが云號のお姬樣、疾うから來てござるかえ、そんな事であらうと思うた、エヽ餘りぢや〳〵、能う私に隱さんした、エヽ腹の立つ〳〵」「コリヤ〳〵新參の小姓、何を譫言」「イエ〳〵〳〵新參の小姓ぢやない、お前と深ういひかはした、道芝といふ傾城ぢや、此方やだんない〳〵。サアサア曲輪へござんせ」と、縫之介の手を取れば、「イヤ〳〵そんな慮外はさせまい」と、姬も取付く諸葛、彼方此方に引き纏ふ、後に立聽く仁木將監、「操姬樣御待ちあれ」と、聲に悔り三人は、手持無沙汰に見えにけり。「コレハ〳〵縫之介樣、此將監には何事もお隱しなさるに及びませぬ、此お小姓は私預り、品宜しく計らひます。お姬樣と諸共に、奧の御殿にお出でなされ」「アイヤ斯うなつてはモウ隱さぬ、此姬を嫌ひはせねど」「サア〳〵合點してをります」「夫でも祝言はならぬ〳〵」「是は扨何とお聞きなさるゝぞ、おいやならいやに致しますてや」「そんなら道芝は其方にきつと預けたぞ」「御安堵なされ先々奧へ、早う〳〵」と進められ、心は先

ア其名を言へ〳〵。此縫之介より外、枕は交す者はないと、能う僞をいうたな。放埓者徒者、人外め、手打にする覺悟せい」と、腹立聲に道芝は、恨めしげに顔振上げ、「エ、殿様胴慾な、過ぎし頃より御館に、免れがたき事ありと、只た一度の文使ひ、夫から頓と便なく、逢はぬ日數も七夜さ十夜さ、待明かしても晝さへ暗き胸の中、逢はれぬ事に定まらば、いつそ死にたいお手打に、遇ふがせめての思ひ出」と、身を摺寄せて恨言、眞實見えていぢらしき。「スリヤ俺に逢ふばかりで、小姓姿に扮したか」「アイ、何時も御供の源藏殿に打明けて頼んだら、此様に男に仕立て、目見えとやら嘘いうて、私や爰へ來たわいな。お前に逢ひたいばつかりで、女のあられぬ此姿、思ひやつて下さんせ」と、抱付いたる涙には、いかな大名高家でも、ほろりとさせる睦じさ、哀は後に知られけり。最前より物陰に、將監が窺ふとは、夢にも現縫之介、「まうよい〳〵、夫で疑が頓と晴れた。是から居間へ連れて往て、此間から懈怠した、用がたんと支へてある」と、手を引連れて立上る。奥の方より操姫、立出で給へば二人は愕り、俄に居行儀押繕ひ、「ホオ、是は〳〵操姫殿、何用あつて爰へ御出」「ハイ、いや申し殿様、あれに居るは見付けぬ小姓、御召使でござりますか」「オ、夫々、アレハ今日目見した新參者ぢや。コリヤそこに居る新參の小姓よ、ナ、こりや小姓よ」「小姓ぢやわいの」「ム、貴君のお傍使ひなら、

む胸と胸、明けていはれぬ暇乞、涙にくれの鐘の聲、空に知られぬ五月雨や、泣別れてぞ三重行くするの。

第　三

爰に鎌倉の守護職、管領足利持氏卿、三老と倶に、民の裁斷聞こし召されん其爲に、問注所に御入りあれば、相詰める人々には、老臣仁木將監、和田の左衞門紙崎主膳、其外昵近御傍衆、威儀嚴重に見えにけり。將監人々に打向ひ、「先達て京都よりの嚴命下り、細川家の御息女操姫樣を、我君の御舍弟縫之介樣に云號け、則ち御養子分になされ、疾くより館へ入らせ給ひ、かやう祝言甚だ延引。よく〳〵聞けば縫之介樣、當所手越の傾城にうッ惚れ、婚禮御承引なしと一家中の取沙汰、何にもせよ、取急ぎ御祝言調はずば、上意を背くの恐れあるべし」と、苦り切つて申すにぞ、紙崎は差寄つて、「何れにも評議の上、先は御前を伺はん」と、皆打連れて奥の間へ、徐々立つて入りにけり。廣間もひつそり夕日影、奥より忙しき袴の音、大將の御舍弟縫之介、何かは知らず小姓が胸先、引立てて突飛し、「今日目見えした小姓の噂、よく〳〵見れば其方、コリヤヤイ道芝、形を窶して入込んだは、此館に云交した男があるに極つた。サ

半へ夫の源藏、戻りかゝつて一思案。「オヽ好い所へ戻らんした、コレマア聞いて下さんせ」「オヽ樣子は皆知つてゐる。ヤ女房共、其方に談合する事がある、聞いてくれるか」「エヽ改つた事云はしやんす、マア何でござんすえ」「イヤ少し思ふ子細あれば、暫の中親里へ往んでたも」「エヽ夫やマア如何して、其譯は」「サヽヽ樣子云はねば驚きは尤、知りやる通り足輕位の切米では、いつかな出世の時は得ぬ。心當は、都へ立越え、奉公に有付けば、其時こそ立身出世、聞分けて給も女房」と、思ひ込んだる夫の顔、譯を知らねば氣にかゝり、「ムヽコリヤ如何でも深い心入れ、コレ女房の私に何に遠慮、なぜ言うては下さんせぬ」「ハテ其譯は後で知れる、得心して早う去ね」「イヤ〳〵譯を聞かねば何程でも、去ぬる事は私やいや〳〵、樣子を聞かして下さんせ」と、縋り歎けば、「エヽ聞分けのない、夫が出世の妨せば、夫婦の緣を切らうか」「サヽ夫は」「得心したら早う去ね」ハア、はつとばかりに胸迫り、暫し涙にくれけるが、良あつて心付き、オヽ夫よ、思ひ廻せば廻す程、私は爰にゐられぬ品、知つて夫がそれぞとも、云はれぬ譯ゆゑ親里へ、身を隱せとの事なるかと、いはず語らず心で納め、「成程是から直に親里へ往にまする、あり付き次第、無事の便りを聞かして下さんせ」「オヽ能う合點した、委細は早速知らせの狀」「必ず待つて居ますぞえ」「隨分健めで」「お達者で」と、互に包

行法師が芳野にて、花の名所を求めんと、幾重の山に分入りしに、道を尋ぬる人もなく、案じ煩ふ道芝の、木草に付けし白紙を慕ひ、花の名所を得たりし時、芳野山、去年の折枝の道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねん、夫より是を折枝と號く。今某が名も同じ、此花の姿に迷ふ道しるべの此枝折、ナコリヤ、サ合點が行たか」と古事を、花に擬へし御戯れ、差出し給へば、お來は夫と推量し、ハット驚き恐れ入り、「ハア、勿體ない恐れ多い、賤しい私がお茶の給仕、御褒美のお詞、又賤しい此花お手折りなされんとの御意、冥加ないと申しませうか、有難うは存じますれど、此花も主ある梢、折取ることは憚りながら、お赦されて下さりませ」と、恐れ入つたる詞の端、「ム、扨は其花には主あるとな。たとへ花守あるにもせよ、某が心の儘、根引にし館へ移し、詠めるは易けれども、木折にせんは無下なるべし。サとくと思案し返歌せよ」と、仰せに何とゆふひ影、やゝ時移る其所へ、紙崎主膳しづ〳〵と、家來引具し謹しんで、「今日京都入り上意の趣出來、御迎ひの爲參上仕る」「ホオ、紙崎大儀々々。ヤナニ女、必ず〳〵返歌を待つ」と、御乘物に召し給へば、近習若黨備へを立て、徐々と歩む後備へ、紙崎は訝しく、女に屹度目を付けて、心の要緊めて行く、扇が谷のお館へ、御供申し急ぎゆく。お來は跡を詠めやり、思はずほつと溜息つき、「テモ扨も悲哀な事、そして辛氣な物を貰うた」と、屈托

う、俺やちよつと往て來ようかい。ヤ道芝、是でお別れ申しまする」「そんなら必ず姉様、ではない女中様、モウお暇申しまする」「そんならモウお歸りか、隨分健で煩はぬ樣にお勤」おさらばさらばと盡きせぬ名殘、互に見返り見送りて、手越の里へ返りけり。かゝる折から持氏卿、忍びの御遊を輕々と、御乘物に召し給ひ、道を拂うて出で來る。お來はうつとり近習の侍、「ヤア女下れ〳〵」「はい〳〵私は此茶店の者、殿様の御通りも存じませず、不調法の段は眞平御赦されて下さりませ」「イヤサお通りのお目障り、片寄れ退れ」と引立つる。「ヤア〳〵者共暫く待て、其女に用事あり」と、仰にハッと近習の武士、威儀を正して控へゐる。持氏殿は徐々と、床几を假の御設け、悠々と御腰掛り、お來が容儀に愛でさせ給ひ、「コリヤ〳〵女、其方や此茶店の者よな、かゝるいぶせき所に似合はぬ、ハテ艶かなる縹致、某も不思議の緣、其方が手づから茶を持てやい」「ソレ〳〵銀のお茶碗」「コリヤ〳〵其茶碗では氣が替らぬ、やはり茶店の其茶碗、早う〳〵」とありければ、「夫早く持て〳〵」ハッと恐れて立上り、氣もわく〳〵と涌く茶釜、嗜茶碗淸水燒、茶臺に乘せて恐々と、面映げにぞ差出す。茶碗取上げ持氏殿、御機嫌よく打笑み給ひ、「ホヽ天晴なる茶の香氣、ハテ偖遠目に見るよりも、猶美しき此花香、ヤソレ乘物の歌書持て」畏つて近習の武士、取出し差上ぐれば、挾みし枝折を取らせ給ひ、「古へ西

入、父樣が此子なれば、手越の宿へ賣らしやんして、今の名は道芝と、其名をば聞いたれども、逢ふ事ならぬ曲輪の掟、懐しう思うてゐたが、久しう見ぬ間に、オヽ好い太夫樣になりやつたなう」と、いふもおろ〳〵涙聲、さすが親身の挨拶に、道芝も打萎れ、「思ひがけなき御目もじ、父樣にも御息災なと、餘所ながら聞きました。お前も御無事で嬉しうござんす。源藏樣を私が妹聟とは、知らぬ事とて澤山さうに、堪忍して下さんせ」「アイヤ〳〵互に知らねば其筈其筈、道理で面ざしが似たと思うた。若殿と云交じたお傾城が、賤しい女房の妹といふ事が、お耳へ入つては爲にならぬ、必ず此事沙汰は無用」「アイ夫は互に隱して濟ますが、濟まぬは祝言、縫之介樣が眞實お姫樣を嫌はしやんすが定ならば、私を館へ連れて往て、お傍に置いて下さんせ。さうない内は何程でも、疑ひは晴れませぬ。姉樣倶々宜いやうに、賴みまする」と涙含む、眞實見えて道理なり。「ウヽ其方の身の出世ぢや物、何の如才があろぞいの。コレ源藏殿、何卒思案はないかいな」と、いふに暫く差俯き、「ハテ其樣に疑はしくば、お館へ入れる工夫、萬事は私が胸にある。若殿と牒し合せ、明日に迎ひに行く程に、さう思うて待つたがよい」と、聞いて心もいそ〳〵と、「アイ〳〵〳〵、そんなら曲輪へ戻つて待つてゐるぞえ。繁野々々〳〵」と呼ぶ聲に、アイと返事も長暇、男も倶に立戻れば、「イヤ女房共、畑介樣が嘸ぞ待つてござら

前も知つてござんす通り、突出しの初より、互に變るな變らじと、云交したる二人が中、祝言さすこと私やいや〳〵、縫樣のお傍に居たい、連れて往て下さんせ」と、粋な育ちも色の道、愚痴の涙ぞ誠なり。「オヽ腹の立つは道理ぢや〳〵、さりながら、お前を館へ連立つては、夫こそは亂騷ぎ、コレ今暫し辛抱なされ」「イエ〳〵斯ういう内も氣遣な、早う行きたい、サア〳〵連れて往て下さんせ、是非に〳〵」と氣を苛ち、里氣の儘の癇癪は、留めかねたる折からに、お來はとつかは戻りがけ、見るより吃驚、徳利はつたり取落し、二人を押分け源藏を引立て、「コリャ我をれ、俺を酒屋へ出し拔いて、アノ女とこつてりちん〳〵、エヽマ憎體らしい男面」と、叩いつ喚く間違恪氣、源藏をかしく、「エヽ何吐かす、コリャやい、アノ女中は」と、いふを打消し、「イヤ〳〵古手な云譯此方や聞かぬ、マ厚皮な女面、どんなお顏ぢや見てやらう」と、背けし顏を差覗き、「どうやらこな樣は見たやうな」「私もお前は見たやうな」と、いふにお來は心付き、「もし稚名はお宮とは云はぬかえ」「アイ宮と申しましたが、稚名を知つてござんすお前は」「オヽコレ姉のお來ぢやはいの」「エヽ姉樣か」「妹か、ヤレ懐しや〳〵」と、取付き縋り姉妹は、嬉し涙にくれ居たる。源藏は不審晴れず、「コリャ女房、太夫樣を妹といふ子細は何ぢやぞい」「サウ樣子知らしやんせねば合點が行くまい、此お宮が九つの年、私が大病の物

太夫職、禿ども引連れて、茶店の元に歩み來る。立歸る源藏夫と見て、「是は〱道芝樣、思ひも寄らぬコリヤ何處へ」と、尋ねられて飛立つ思ひ、源藏が胸ぐら礙と取り、「オヽ好い所で逢ひました、エヽお前は聞えぬお人、縫之介樣も此頃は、曲輪へお越しない故に、お前頼んだ日文の返事、なぜ取つては下さんせぬ。逢ひたい見たい願參り、日頃念ずる長谷寺の、觀音樣へと志し、賴みに思うたお前まで、聞えぬ仕方胴慾」と、恨み詞に、「サヽヽ、尤ぢや尤ぢや、是には段々咄しのある事、コリヤ繁野、其人達を連立ちて、そこら一遍歩いて來い」「アイアイそんなら太夫樣、向ふの堤で遊んできやんしよ。サア〱ごんせ」と打連れて、足早にこそ急ぎゆく。道芝は心急き、「咄したい其譯を、早う聞かして下さんせ」と、せり立てられて、「サヽ、咄さねばならぬ譯といふは、此度京都義詮公の上意として、細川家の姫君と御祝言なさるゝ筈」と、聞くより吃驚り、「エヽ、そんなら御姫樣と御祝言なさるゝかえ、アノ祝言を。エヽ腹の立つ〱〱、コリヤ何せうぞいな〱。アヽコレ〱何せうぞい〱〱」「サヽサマア氣を緊めて聞いたがよいわいの。併し若殿樣はお前に義理を立て御承引なき故に、兄君持氏卿の御立腹、やつさもつさの其最中、此譯の納るまでは、曲輪通ひの御遠慮」と、聞くに猶更戀の意地、「エヽ縫樣も張の弱い、そこをぐつと押したがよいわいな。殿樣と私が中は、お

是を御縁、お近付になりませう。我等事は船ヶ谷の米問屋、坂間傳兵衛と云ひます者、親の代から仕合よく、今鎌倉の分限帳にも、乘つてある我等が身代、自慢ではござらぬが、十兩や二十兩お取替へ申したとて、さして困る身分でもなし。私が娘も三年以前、お出入屋敷足利樣の奧御殿へ、御奉公に出ましたが、お氣に入つて今お中老に出世しました。子を持つた身は相互に、娘御の孝行なに、私は泣いてゐましたわいの。不躾なことながら、此體でござつては、奉公口の出世も出來まい、慮外ながら一二年、私が娘にお預けなされ、勤方見習うたなら、私が世話して屹とした、御奉公人に仕立てて見せませう。入らぬ世話と思はしやろが、アノ娘御の孝行な心に、縁でがないとしうなつて、胸一杯をいうて見ます」と、奧底もなき眞實は、涙に夫と見えにけり。十内は只伏拜み、嬉し涙の隙よりも、威儀改めて兩手を支へ、「重々厚き御恩の程、娘が身の上まで、殘る方なき御惠み、此方より願うてなりとも、御恩報じの御奉公、望むところの幸ひなれば」「ム、スリヤ得心でござりますか、マア早速の得心で、私もいかう嬉しうござる。日柄選んで些とも早う」と、さくい詞に娘のお初、「旦那樣のお情、死んでも忘れ置きませぬ」と、いふも恩義の初一念、さらばとばかりそこ〳〵に、東西へこそ別れ行く。端手な取形抱へ帶、ぬめり姿も白綸の、古今帽子もしをらしく、道それ者の道芝は、手越の宿の

見ますが、十内が手をきつと押留め、「私や往來の者でござんすが、見まする所御浪人の、いかう御難儀な節と見えます。殊に又御病後とやら、お互に年寄は、只さへ家が古なつてゐりや、藥力も廻り兼ねる、其命を僅な金で死なうとは、ソリヤ御麁相、お近付ではなけれども、娘御のアノ孝行、貞節な今の樣子、御笑止に存じます。持合せた金子十兩、コレお貸し申す、御出世の上御返しなされ」と、詞と共に懷中より、取出したる小判十兩、「サア御返金なされよ」と、突付けられて親子は只、夢見し心地嬉しさの、何にたとへん樣はなし。十内は地にひれ伏し、「馴染好みもなきお方、御恩の金も此場の難儀、御辭退なしに拜借」と、ずつと立つて、「コレ善六、借用の金十兩、返濟すれば言分有るまい。借用證文イザ返せ」と、投付けられて善六が、工面の違ふ膨れ面、不承々々に懷より、一通を取出し、「ソレ借證文返してやります。ハテ扨物には變のある物、見ず知らずの通り違ひに、金十兩貸してやるとは、世には又樣々な醉狂者もあるもの」と、金請取つて懷手、のつか〳〵と出で行く。跡に親子は詞さへ、涙に噎び手を支へ、「只今も申せし通り、見ず知らずの我々親子、大難を救ひ給はりし、御恩は何と報ずべき。ヤイお初よ、倶々にお禮申せ」と親も子も、骨に徹えし悦び涙、只伏拜むばかりなり。「アヽコレ、其樣に何のマア、お禮に及ばぬ事、先何か差置いて

に似合はぬ肝太な親仁めぢやわいやい。死ぬる所を助けてやつて、まだ其上に恥面かゝされ、モウ夫で云分あるまい。是からは此方も意地づく、小判十兩ほいとはさせぬ、お代官へ訴へて、お定りの手錠掛けさせ、夫で濟まにや願うて水牢、待つてをれ」と駈出す。「ナウ悲しや」と娘のお初、取付き縋り泣沈み、「お前樣の仰しやる事、無理とはさら〳〵存じませぬ、父樣の大病で、今日か明日と思うた時は、假令此の身を賣つてなりとも、取留めたいと思うた所、お貸しなされた五兩の金、千萬兩の金よりも嬉しかつた其御恩、まだ其上に不束な、私の面倒見やうとある、お志の厚いお前、父樣は昔形氣、當人の私が合點すりや、どうなりとなるわいな」と、含む涙の流し目は、泣くよりもなほ哀れなり。善六は身中もぐにやく〳〵、臍の緒切つて初物の、色身臺白に指打ちくは〻、「アノ肝心のそもじが夫なりや、親父殿はわしが親、假へ此身は天秤棒で打叩きに逢ふとても、何の其猷はうぞい、善は急げぢや」と、引立てる腕もぎ放し、胸ぐら取つて「ヤイ善六、年端もゆかぬ子心にも、此親へ孝行と思やこそ、そもやそも我がやうな山猿と、夫婦となろといふわいやい。高が五兩で繋いだ命、俺も武士ぢや、今戻す金の代りに命をやれば、帳面はさらりと消ゆる」と、云ひも敢へず刀を腹、「ナウ悲しや」と娘のお初、縋り付いて止むるにぞ、「放せ」「放さじ」せり合ふ後、人立つ中

能ういうてくれたなア。サアわさ〳〵と氣を活かして、明神樣へお禮申し、我が身が出世奉公口も、懇にお願ひ申す。サア〳〵おぢや」と親子共、いそ〳〵として行く後へ、「オヽイオヽイ十内殿、浪人殿」と、うなり呼はるどす聲に、ハット思へどそ知らぬ體、行過ぎる間にすた〳〵と、息を切つて、「コレ十内、イヤ爰なずるや先生、其耳をかつ淩へて、今いふ事能う臍の下へ聞いておくれ、先づ斯うぢやは。お身樣が長々の御浪人できつちく〳〵、其中へ貴樣の大病、お娘一人が立つたり居たり、餘り見る目が氣の毒故に、此鷲の善六、世間が並の分相を減らして、五兩一分に二割の禮金、無利息のやうな安い金、人參代の五兩の金、元利積つて金十兩、おがら達の貴樣の内へ用立つた此善六、宛のない金は借さねば、コレ此お初を我等が目當、コレ十内殿、今日初立の其祝儀に、聟定の祝ひ事、サア一つ打ちませう、打つて下され親仁殿」と、髭撫上げてへし付ける。傍にはハット悲しさの、何と詞もなき入る娘。十内は膝すり寄せ、「イヤナニ善六、借りた金は借りた金、娘は娘格別の事、人參代の五兩の金で、娘の初を買切りにするのか。出世抱へた大事の娘、ならぬ事置いてくれ」と、老のいらくらずつかりと、いうては見れど命金、借りたは定のおろ〳〵涙。ソリヤ喧嘩よと人立の、見る目もさすが娘氣の、泣くより外の事ぞなき。善六は大息つき、「テモ扨も見掛

す。ヤアほんに久振ぢや、氣晴しに酒なと買うて來うかいなア」「ヤソレハ御馳走、ナコレ、とてもの事にソれ諸白を」「アイ、そんなら買うて來やんせう、德利は借りて戻らう」と、夫に一つもろはくの、酒屋をさして急ぎ行く。源藏は後打ながめ、「酒買うて來る其内に、久し振ぢや、産神へ參つて來う」と獨言、隣村へと出でて行く。世を憂しと、浮世の中を並々の、身には思ひの花姿、娘と見えて十八九、形も所體もしほたれし、生地の儘なる美しさ。「コレ申し父樣、今日初立の願解き、モウ此樣な嬉しい事はないはいな」と、親を思ひの優娘、心も對の容貌、聞く親の身は猶更に、「オウ嬉しい道理々々、常から其方の孝行、私が又今度の大病、生藥師の玄伯殿も、匕を投げた其所を、我身の精力、神佛の力ばかりで療治仕果せ、今日初立の神參りも、皆其方の介抱の蔭、其惠冥利とやらでも、何卒我出世の行末、祈るより外望とてはない。親の慾目と我ながら思へど、器量押立どこへ出しても屹とした御奉公人、見る影もない其形させ、ヘエ、口惜しい、無念なはいやい。貧の病は藥もなく、助けてくれる佛神の、力にも及ばぬか」と、瞼を洩るゝ涙聲、聞くに娘も悲しさを、見せじと作る空笑顔、「アノ父樣の譯もない、愚痴らしい事いはしやんす。世の中の浮き沈み、昨日に代る今日の出世は、世にたんとある事なりや、氣をめいらした物でもない」と、親の心を慰むる、心遣の眼に涙、「さうぢや〳〵、

バ其事、私も切身に鹽が染み、思ひ當つた今日此頃、志を改め、兄貴の勘當を赦して貰ふ一つの功を立てたいと思ひ、色々と工夫すれど、是を斯うとの分別も立たぬ、いかう凝つてめいつて來た、コリヤ内儀と二人差向ひ、しつぽりとエヽうまいな〳〵。アヽおらは樂しむ相手はなし、白犬なと抱いて寢て、こたつの代りにするがせいさい。今日はおれも腐れ拔きに、此梅澤に此頃仕出しの麥飯と出掛ける趣向、幸ひな所で逢うた。サア貴樣も一所におぢや往かう」「イヤ私は叶はぬ用事がござりますれば、お跡から參りましよ」と、いへば畑介早合點、「アヽコレ〳〵、皆までいうな込んだ〳〵、わりや彼の白米を喰ふぢやな、爰は我等も大通を見知らし、先へ往てやらうが、仕出の所はアレアノ向ふの松、我等が色は眞黒な、麥飯嶋を賞翫」と、ちやり散らかして出でて行く。後にお來は吹出し、「ホヽヽヽ、モいつでも〳〵じやや、今でこそ天竺浪人、實の所はサ誰あらう、御家老職紙崎殿の弟御、若氣の至り身持放埓、カノ堅藏の主膳殿の勘氣受けて流浪の身の上、御歴々ぢや程に、さう思うて此上とも、心を付けて物いや」と、聞いてお來が、「テモ扨も、水の流と人の行方、モウ能ういうた物でござん

肝要たり」「アヽイヤ、其儀は豫て持氏思慮を運らし置きし所、斯く申す和田左衛門紙崎主膳控へあれば、日を待たず切鎭めん、御心安かれ」と、申上ぐれば頼之卿、「オヽ、各の忠勤も悉く言上申すべし。イザヤ歸館」と立ち給ふ、薫も深き武門の袖、花を比ぶる禮儀の形、大將はじめ並居る諸士、見送る行列小松原、緑榮ゆる君が代の、御遊の御狩勇しく、八十氏川の末廣き、譽ぞ高き三重久方の。

第二

五月半の花菖蒲、爰も名に負ふ東路や、梅澤村に足休め、茶店女房の器量よし、よしや葦簀の茶の花香、色を含みし優姿、折柄來る足輕の、源藏と見るよりも、「オヽこちの人、何としてござんした」「ホヽ女房共、日和がよさに店出したな。若殿のナヽソレ御内用、今日一日お隙を貰ひ、内へ往て見れば、店出してゐると聞いた故、直に爰へ出掛けて來た」と、聞くにお來は會釋して、此間は鹿狩で御用も繁く、休まんす隙もあるまい、今日ゆるりと休まんせ。コレ出花一つ」と汲んで出す、夫婦が中の濃茶なり。世を拗ねて、浮きつ沈みつ瓢簞の、流れ渡りの畑介が、ぶら〳〵爰へ來かゝりて、互に夫と顔見合せ、「ホオウ畑介樣、此間はお物遠、ア何時が

川殿には御一門同然なれど、御遊の裝束禮服に改め、御對面あるべし」と、申し上ぐれば持氏卿、實尤と諸士引連れ、「イヤナニ源藏には休息」と、仰も重く幔幕を、絞らせてこそ入り給ふ。程もあらせず此方より、行列美々しく出來るは、京都の執事細川頼之、御入なりと道芝に、各足を止むれば、幔幕の內より持氏卿を初とし、續いて出づる和田左衞門紙崎主膳、威儀を正して出迎へは、悠々として細川頼之、狩屋の床の設けの座、互の禮儀ことをはり、「此度義詮公御代參として、伊豆箱根に幣を納め、其道々噂を聞くに、先達て亡びたる赤松滿祐が殘黨、邊鄙の在鄕に隱れ住み、豫て事を計らふ由、下々の沙汰大方ならず。正しく君は義詮公の御連枝、鎌倉の柱石たれば、此事申上げん爲、道を過つて此狩場へ、態々參上致せし」と、申上ぐれば持氏卿、「先達て貴所の御息女操姬を、我弟縫之介に娶せよと、則ち養子と定められ、疾くより我方へ引取りしが、內緣ある此持氏、外ならず思召し、御內意の親切忝なし」と述べ給へば、此方も夫と打寬ぎ、「我娘操こと、貴君へ差上げし事なれば、御心任せたるべけれど、詮意の上は遠からぬ中、婚姻の儀式御調へ給はるべし」と、親子の道の慈しみ、いづれ劣りはなかりけり。「オ、御尤なる御仰、近々に日柄を選み、弟が婚姻調へ申さん、御安心下されよ」と、事を分けたる御詞、頼之も笑を開き、「此上は赤松が殘黨の、其逆徒を治め給ふが

「末々の御奉公とは云ひながら、君恩に二つはなし。ヤア〳〵下郎め、御意を背き子鹿を射ざりし申譯仕れ」と、席を打つて尋ぬれば、ハットばかりに恐れ入つて居たりしが、稍あつて顏を上げ、「私事元は獵人、鐵炮達者とお聞きに達し、御足輕組へ召抱へられ、則ち今日も勢子の其中へお雇に選ばれ、只今子鹿見遁せし御咎、恐れながら一通り申上げん。私儀幼少より殺生を好み候へども、親たる者申置きしは、畜類ながらも生ある物、親を討たば子を助け、子を討たば親を助く、親子共討つ時は、根を斷つて葉を枯す不仁の至と、亡き親めが常々戒め、只今まで助け來りし所、今日只今恐れ多き君命とは申せども、止む事を得ず御諚を背きし身の罪科、遁るゝに所なし。御咎は覺悟の上、イザ御政法御行ひ下さるべし」と惡びれず、恐れ入つて申すにぞ、持氏卿感心ましし〳〵、「下郎には似合はぬ心底、奧床し頼もしゝ。鳥類畜類も恩愛の至極の心は同じ、父が詞の節を守つて命を背き、身の咎を顧みざる仁義の一言、感ずるに猶餘りあり。イヤ何紙崎、歸館なさば源藏に、早く褒美得させよ紙崎」と、仰にハット土膳がお請、面目餘る源藏が、悦びいはん方もなし。折もこそあれ遠見の侍、御前に頭を下げ、「京都將軍家の御執事細川殿、伊豆箱根二所權現へ御代參の歸りがけ、君の御遊を聞し召され、此狩場へ御入あつて、御內談の趣ある由、早速に御注進」と、言上申し立歸る。和田の左衞門取敢へず、「細

加賀見山舊錦繪

頃は延文夏の空、鎌倉の官領足利持氏卿、六浦金澤山々の、獸狩あるべしとて、今日思し立つ朝霞、召しも定めぬ玉鉾の、草踏分ける武者草鞋、出立は君臣別ちなく、皆一様に怪しの姿、並行く跡に勢子の者、あらゆる獸荷ひ連れ、豫て構への御休所、暫しと腰を掛けらるゝ。和田左衛門謹しんで頭を下げ、「今日の狩倉は近頃に覺えぬ獲物、君にも嘸御滿悦」と、申上ぐれば持氏卿、愈々御機嫌麗しく、いざ折よしと紙崎主膳、御小筒盃を、取敢へず捧ぐれば、和田左衛門倶々に、打混じたる主從が、賤しき業を興とする、貴人ぞいづれ貴人なる。遙向ふの山合より、勢子に追はれし小鹿一匹、狩出さるれば持氏卿、「ソレ討留めよ」の御諚の下、紙崎はつと立上り、「アレ討留めよ源藏」と、あせれどハット平伏し、猶豫なす内一散に、子鹿は遁れ走り行く。持氏卿御機嫌損じ、「イヤコリヤ〳〵主膳、彼奴如何なる所存あつて我詞を用ひず、子鹿を遁せし其仔細、具に尋問ふべし」と、御氣色惡しくのたまへば、紙崎も不審をなし、

壇浦兜軍記　終

を琵琶に語つて、片時も昔を忘るべからず。萬事は根井親子の者、宜しく計らひ得さすべし。箇樣に上下和すること、念彼觀音の御力、我が大慶是に過ぎず、いざ歸らん」と立ち給へば、夫婦兄弟箕尾谷父子、首を天地に平伏しく、詞はなくて有難涙、伏拜みく、君を傅き立歸る。佛道武道の助けとして、治まり靡く源氏の政道、萬々歳の末かけて、盡きせずつきぬ八千代の松、變らぬ色は呉竹の、節を重ねて葉も繁る、五穀成就民安全、治る國こそ 三重 目出たけれ。

ふ君には君の情有り、打たれんと云ふ景淸は、二君に仕へぬ忠義有り。中を取つて此惡七兵衞景淸が腹切る上は、情も忠も是までなり」と、太刀を逆手に取直す。重忠御覽じ、「ヤア〳〵十藏、景淸が事は此曉、洛陽淸水寺の觀世音、君の御枕に立たせ給ひ、命を助け得させよと、御臺所も目のあたり靈夢を蒙り給ふ。それ故是まで御馬を出されたるとはよも知らじ。假にも景淸と名乘つて生害せば、大慈の加護に背く理、名代の切腹、尤ながら無益なり」と止め給へば、「然らば御家人岩永を、手にかけ打つたる其誤、伊庭の十藏に立歸つて切腹せん」と、肌押しぬいで身繕ふ。賴朝扇を上げ給ひ、「やをれ十藏、左衞門を打つたる其科を糺明せば、安穩に腹切らすべきか。我此の曉景淸を助けよと、觀世音の靈夢を蒙る、さればこそ左衞門が、盲目の景淸に刃向ひしを制せんとは思ひしが、大慈大悲の擁護ある景淸、やはか過は有るまじと思ふにたがはず、却て主從手にかゝりしは、景淸十藏が殺すにはあらず、二人に千手の手を貸して、惡人を殺させ給ふ、是こそ還著於本人、經文あらたに誤なき、大悲の誓ひと覺えたり。然るを汝切腹せば、菩薩の勸善懲惡の、心にたがふ大惡逆、恐るべし〳〵。今より我に奉公し、譽れを末世に殘すべし。又景淸は扶持すべき平家もなく、賴朝が祿も受けまじければ、飢に疲れん不便なり。兩眼は暗くとも、心ざしは日に向ふ、日向勾當の官を蒙り、馴染の平家

なし。尤々、ならばサア首取つて見よ、梟鴟は土を圓めて我子とし、海月は鰕を以て眼とすること、楞嚴經に有りと聞く。我其の如く阿古耶を以て眼とせん、後より我を介抱し、刃の向ふ其方へ、引き廻して敎へよ」と、杖打ちふつて立上れば、「源五手傳へ、盲目とてぬかるな」と、左右に別れ切りかゝる。根井親子は景清に、緣有る顔を憚つて、餘所には知らぬ氣を揉上げ、心を冷して控ゆれば、十藏は又景清が、詞の意地を立てさせんと、留めず指出ず縛られながら、眼を配り、すはといはゞ飛びかゝらんと、打つ太刀先に氣を付けて、「そりや〳〵右よそれ左よ、拂へ薙れ」と辭を懸け、我手をもつて戰はぬ、心の刃のしのぎを削り、頭に上る息烟は、火花を散すごとくにて、瞬もせぬ程もなく、岩永主從太刀打落され、二人一度にしがみ付き、取つて伏せんと身をもがく。景清ちつともたぢろかず、二人が首筋兩手に摑み、ぐつと締むれば眼を見つめ、弱る所を取つて伏せ、膝にひつ敷き、一息ついだる心の內、嬉しさ譬へん方もなし。其隙に阿古耶立寄つて、十藏が縛切りほどけば、「なう〳〵景清、一人に二人は手柄過ぎる、岩永は我に呉れ」と、取つて引立て、「科は儕が心に問へ」と、首えいやッと捻切れば、景清悦び、「儕も主の供せよ」と、源五が首も一時に、ちよいと引拔き捨てたるは、手習子供の書捨てし、筆の首拔くごとくなり。十藏側への太刀押取つて大音上、「助けんと云

る我ならねば、所詮此牢蹈碎き、關破りの科を拵へ、害せられんと心づきしが、思へば其日の警固の侍、牢を破られ取迯がし、我故咎に預らんも罪作りと、一日々々延せしが、昨朝よりは岩永が番に代つて、顏を見るよりあら嬉しや、遺恨有る左衞門、咎に逢ふが殺されうが、往にがけの駄賃とやらん、今宵ぞ牢の破り時と、何の苦もなく脱出でしは、外に科を拵へて、誅せられんとの我念力、もう助けては政道立つまじ、急いで、我を誅せられよ。又兩眼を抉りたること、今鎌倉の繁昌、賴朝の威勢を見るに付け、二たび仇をなすまじと、思ひ捨てゝも凡夫心、見ずば怨みも起るまじと、賴朝を二たび見ぬ分別、未來遙々仇をなすまじ、恨みを殘さぬ心の誓ひ、抉り捨てたる兩眼は、賴朝殿へ景淸が、今生未來の寸志ぞや。サア首打つて安堵あれ」と、首さしのぶれば賴朝公、「あつぱれ武士よものゝふよ、平家の恩を忘れぬ如く、又賴朝が恩をも忘れず、月日に象る兩眼を、我故抉つたる健氣や」と、勿體なくも御大將、御落淚ぞ有り難き。左衞門一人むくりを起し、「オ左程厭いた首ならば、左衞門がさらへ落し、牢を破られ取逃した申分にする」と呼はれば、餘りのことに御大將、兎角の御掟もましまさず。阿古耶怺へず、「あの言うた頰はいの、目の見えぬ人の首取つて、言分に成るか、手柄に成るか、阿呆くさい」と恥かゝすれば、「女房だまれ、岩永が手に合ふ者は盲目か聾か、子供ならで外には

何の爲、牢を破つたる景清に科はなし、番を怠り牢を破られ、取逃したる僻こそ憎い奴、諸士の見せしめ、急度刑罰に行へ、重忠」と、御立腹大方ならず見えたる所へ、箕尾谷四郎汗を浸し駈來り、「牢を破り落失せたる景清、是へ參上仕る」と、申す詞の下よりも、妻の阿古耶に手を引かれ、片手は杖をつく〳〵と、見れば兩眼くり出し、東西わからぬ其風情、十藏驚き走り寄り、「御身が事を聞いたる故、何とぞ奪ひ返さんと來る所、景清牢を破り、落失せたりと尋廻る、嬉しや好い所へ出くはせし、かねて命に替らんと、念願はこゝぞと悅び、景清是に在りと名乘りて安々と生擒られしは、其間に落延びさせん爲、是まで來る十藏が、志は無になつたか、直ぐに何處へも落ちてくれぬ、側からも何故氣を付けぬ妹、エヽ十藏が思ふ程にない、曲がない景清」と、地團駄踏んで泣きければ、「なう其氣も付いたれど、儕が知つたことぢやないと叱られて、泣いてばかり」と縋り付き、重て袖を絞りける。重忠御覽じ、「珍らしや景清、牢を破り遁れ出でたる身の、如何なれば立歸り、殊に兩眼を抉つて盲目と成りたるは訝しよ。賴朝公も聞し召す、心底を明かされよ、承らん」と宣へば、「ア、宣ふは秩父殿候ふな、お尋ねなくとも申上げんと存ずる所存、餘の儀にあらず、斯く御敵と成つて付狙ふ我なれども、兎角命を助け、御味方に召されん爲の御情、申すに及ばず、海はあせて山と成るとも、二君に仕ゆ

婚禮、何やかやのお悦びに免じ、是非お賴み」と手を摺る所へ、荒木源五息を切つて駈け付け、「惡七兵衞景淸を、三个村と申す所にて生擒り、只今是へ引いて參る」と訴ふれば、岩永いきいきいきり出し、「ヤア根井、賴むこと何もない、追付け景淸渡し申す」と、手の裏かへす舌も引かぬに、前後を圍み、警固嚴しく連れかへる。根井の太夫きつと見、「ムウ是が逃げた景淸か、ハヽヽヽ、箕尾谷が生擒つて差上げし景淸に、似は似たれどもさうでない。察するに是は彼の伊庭の十藏、景淸にして此根井受取ること罷りならず。刻限うつる、此通り言上せん」と立出づる。「ア、親仁樣せはしない、まあ半時待つてたべ、追付け誠のが來ますはいの。やい者共、追々に又往けく」と追つかけさせ、「扨は儕講釋師めか、下河原でも取違へ、一度ならず二度ならぬ妨奴、何として腹癒ん」と、立蹴に撞と踏倒し、足に任せてさいなむ所へ、誰訴へしか賴朝公、重忠に轡とらせ、蹄を飛ばせかけ付け給へば、岩永大きに敗亡し、頭に天の落ちかゝるかと、土に平伏し恐れ入る。「只今言上仕らんと存ずる所、御駕を苦しめ奉る。夜前景淸牢を破り脫け出て候、言語道斷の憎い奴」と、言はせも立てず、馬上ながら御聲高く、「牢に入れたるばかりにて、逃げうせぬ物ならば、警固を付けるに及ぶべきか。長く一人に番させては、怠る油斷も有るべきかと、一日一夜を限つて、かはるぐ警固せよと云ひ付けしは

お聞きなされ、牢を脱けついと致した」「とは入口の錠下さずか、但しは水道厠などより脱け出でしか、いづれの道にも不念なり」と、肝つぶせば頭を掻き、「それなれば下々の不念と申す分も有らうが、聞いてたべ、櫟白樫栂の木の、長さ一丈有る物を、大地へ七尺掘り入れ、上三尺の詰牢、欅で蛛手格子を切り組み、一尺二寸の大釘、うらを返さずひつしと打ち、足を牢より外へ引出し入れ違へ、七十五人して引いたる楠にて上げほだしを打たせ、十挺詰鐵たう樞、大盤石を積み重ね、是には根掘の大竹、筒に切つて擔かせ、身動もならぬ、是御覽なされ、此牢を破りました」と、幕引きのくれば立寄り見て、びつくりし、「是程丈夫に拵へたを破る音が、御邊の耳へ入らざるか」「面目もない、側に居て微塵も耳へ入らず、くツつりと寢た間の夢程も存ぜなんだ。只今より明朝までは貴殿の御番、此通り言上なさるれば此岩永、好い仕合で遠嶋は見えて有る。御了簡と申すは餘の儀でない、方々へ追手をかけたれば、召捕つて歸るは早うて五つ、遲うて四つまで、沙汰なしに成され下さるれば、大名一人御取立て、ハテ目に見えぬことに堂塔建立さへなさるゝぢやござらぬか、根井殿、ナ申し」と、甘へかゝれば、「何さ〳〵、箕尾谷といふ臆病者の子を持ち、とばしりのかゝつた此太夫に頼む事は無いはず、ハヽヽヽ」と苦笑ひ。「是は術ない、それを此處で仰られては消えたい〳〵。白梅殿御

て、惜しむや春の星月夜、鎌倉さしてぞ三重急ぎける。

第五

百戰百勝、勇士の名を定がたし、死を易くして名をあらはすといへり。上總の景清、自ら賴朝の手に渡れば、扇が谷につめ牢をしつらひ、取つて押入れ、警固は在鎌倉の諸大名、一日一夜づつ、番代りに預りて、嚴しく非常を警めらる。根井の太夫希義、當番にて未明に相詰め、見れば門々當所の幕、海扇の紋所、「昨朝より今朝までは、岩永左衞門當番よな、根井の太夫番代りに參つたり」と、言入るれども、役所を渡す體もなく、走つて出づる人、息を切つて戻る人、足を飛ばせ、櫛の齒を引くごとくなれば、何事やらんと根井の太夫、不審ながらも立ちやすらひ、返答おそしと待ちゐたる。しばらく有りて、「御通り有るべし」と案內させ、岩永左衞門悄々と立出で、「ヤア根井殿、早速の御番代り御大儀千萬、お目にかゝつて詞もない、先以て箕尾谷殿、景淸を生擒り、高名比類なく、貴殿も昔に立ちかへり、御親子並んでの御勤、目出たいと申さうか、御大悅推量致いた。扨其景淸に付いて、ちと御了簡に預らねばならぬ譯有り、

りて一門一家、廻り逢ひたる月も日も、其元曆の八島の戰、取りも直さず三月の十八日、信ずる佛の御緣日、臨刑欲壽終、念彼觀音の力を得んこと疑なし。急げや急げ」と先に立ち、勇むは繩付繩取は、心悄れて立ちかぬる。阿古耶は夫に恥ぢらひて、涙呑込むくもり聲、幼き娘を抱き上げ、「是なう今の父樣が、鎌倉へござらしやる、目出たう頓てお歸りと、サ、さう〳〵してたもふ。其次手に元の父樣、顏の見納め見せ納め、永いさらばの、サさうをしや」と、我身の心かこつけの、詞も涙に咽び入り、身を打ちふして歎くにぞ、かゝるあはれにおほ彌太も、涙湛ゆるしば〳〵目、「浮世の中に武士程、義理の悲しき物はなし、云ひたさ泣きたさこらゆる辛さ、なぜに二人は兄弟の、左官や大工に生れなんだ。職人の身ならばなア、斯うしたことは有るまい物」と、有繫は老のくりごとに、白梅阿古耶も顏見合せ、包みかねたる歎の色、わつと涙の糸櫻、庭の立木に紛ふらん。景淸わざと怒りをなし、「ヤア未練なり愚なり、源氏育ちの侍は、會者定離をも辨へず、妻子を忘れ親を忘れ、弓矢の義心も知らざるか、恥を恥とも思はずや」と、聲あらゝかに言放せば、大彌太歎き押留め、「實に誤つたりそれよ〳〵、音に聞えし景淸を、搦め取つたる箕尾谷が、譽れは朽ちせぬ石疊み、根井の太夫が家名をつけん」と、門出壽く言の葉に、深き涙を忍びの緒、兜も昔に立ちかへる、錏の星の花の兄、勝つ色見する

契つて兄と成る、惠も有るに弟は、七度の結び返しもせで、結び搦むる縛繩、天の照覽空恐ろし。よし御勘當あらばあれ、いで縛めを」と立寄れば、振放つて、「愚々、弟と知らず兄と知らず、知らぬ昔は歸らぬ道、互の因果は綯へる、繩目と思へば悔もなし。女房ももう吠えな、豫てかくと語りなば、心落さん不便さに、是までは隱し居たり。鎌倉へ引かれなば、大方永い別れならん。何云ひ殘すこともないが、娘を無事に」とばかりにて、餘所目遣ひに紛らす涙、阿古耶はとかうの返答も、なき沈みたる憂き思ひ、察し遣りて白梅が、「わたしが繩をときますれば、何處へも障りはなし」と、又景清に取付けば、「ヤア小ざかしき弟嫁、此繩解いて侍捨てさせ、誠の左官と成り下らせ、土に夫の顏汚せか。サア一時も早く鎌倉へ、伴へやッ」と立上れば、「情ない兄人、某が身にも成り、思ひやつて」とかきくどく。「ヤア聞分もなき男子」「イヤ御身こそ聞分けなし」と、爭ひ果しも、なげきに沈むは二人の女房、根井太夫横手を打ち、「仁なる哉義なる哉、先刻より感涙に目を泣腫し候ふよ。箕尾谷が心底のせつなさ、推量はしつれども、景清の志、深き辭退は却て不孝、せめての恩を報ぜんは、阿古耶殿を身に引受け、妨き娘を養子とせよ。此大彌太が初の孫、時しも三月十八日、今日の祭の神堅く、人丸娘と名を呼びて、育てる老の樂み」と、歎の中の悅び顏、景清あつと頭を下げ、「賴もしき御詞、望は足

矢神の御託宣、八幡座より錏まで、書下したる父が筆、則ち愛甲の名字の因縁、愛する甲は家の重寶、是を著せし箕尾谷は、我弟にて有りける物を、あゝらよしなき手柄達と、悔むにかへらぬ浦波の、泡と消行く平家の果、我一人殘りしは運强き景清、賴朝を討つべしと、不敵にも思ひ立ち、根氣を碎くに甲斐もなく、無念の月日を暮す中、箕尾谷四郎國時が、我を狙うて尋ぬると、是なる阿古耶が物語、つく〴〵思ひ廻らせば、實の父が形見と云ひ、廣い天地の其中に、たつた獨の弟、憐をかくるは兄の道、所詮賴朝を討つたるとて、昔の平家と取立つる、公達とてもあらばこそ、此上は我身を捨てゝ、弟に高名させ、弓矢の家を起させんと、思ふに幸ひ、緣を引いたる此屋敷、御邊に尋ね逢ふ物か、二つには又運に叶ひ、賴朝に出つくはさば、本望とげんと入込みし、鎹思案の拔目なく、廻り逢うたる我弟、命を惜しまぬ働きを、感ぜし故に景清が、褒美の繩目に及びしぞや。只今返す其錏、兜に繼いで家も繼ぎ、手柄は輝く星兜と、武士の名を照してたべ。此上に兄なりとて繩を解かば、直に勘當他人と成り、景淸取逃しては、恥辱に恥辱重るが合點か」と、裏釘かへす詞詰、心にこたへて賴もしき。箕尾谷はつと飛退去り、頭を地に付け淚をながし、「親の御慈悲兄上の御情、何と報ぜん詞もなし。知らぬ上とは云ひながら、勿體なくも組伏せて、昔の武士に歸らんと、笑を含みし淺ましさ。六度

は兄、一腹一生の兄弟なるは」と、云ふに人々顔見合せ、是はと驚くばかりなり。箕尾谷更に信用せず、「我が父母に離れしは八歳、はや東西も辨へたれば、對面はあらずとも、兄有りと云ふこと噂にも聞くべき筈、いか樣仔細もあらんが、先づ父母の住所、名字系圖は如何に〳〵」「チウ父の名は愛甲の太郎國久とて、源氏武士の浪人、母の氏は平家の侍上總の一統、住所は相州箕尾が谷、其時我は十一歳、御邊は二歳、母の由緣の上總の家より、某を養子にせんと只管の懇望、父國久の仰には、よしみ有る上總の家、筋なき事と云ふにもあらず、養子と成つて平家に仕へよ、去ながら、今より後は親子兄弟音信不通、それを如何にと云ふに、二歳の弟が人となり、父が名字を受けつがば、兄弟源平と引分かり、一戰に及ばん時、平家の方に兄有りと知るならば、恩愛に逼り義理に迷ひ、思はぬ不覺を取りもやせんと、行末思ふ親の慈悲、弟が爲と思ひ、一生不通にしてくれるが、却て親への孝行と、理に當りたる父の詞、我はそれより平家と成り、御身は未だ二歳にて、何辨へもあらぬ上、父母深く隱せしなれば、兄弟有りとも知れぬ筈、我も御身の面體は覺えず、愛甲の家の名字、改めしとは元より知らぬ、箕尾谷四郎を弟と知つたる證據は、こりやい女房、我懐の一包、人々に見せてくれよ」と取出させ、壇の浦の戰に、引斷つたる兜の錏、我高名の印ぞと、取つて歸り能く見れば、「裏書に記せしは弓

げたりけん、妻の阿古耶甲斐々々しく、幼子背にしつかと負ひ、上帶しめて腰刀、息をはかりに駈付けしが、夫の繩目に目もくれて、胸は涙の闇ながら、そも何者の所爲ぞと、邊りを見廻し、「ヤア此方は箕尾谷殿、京から下り先々へ、付けて廻つて聞えぬ人、又ぬつぺりの口上手に、此方の夫をたばかりしか。サア千も萬も入らぬ、彼の繩解いて主返しや、否か應か返事次第、女子が指いても刀は刀、覺悟の魂違ひはない」と、反を打つてつめかくる。箕尾谷騒がず、「有繋は女血迷うたな、都にて逢ひし時、景淸に廻りあはゞ、必ず本望遂ぐるぞよと、番ひし詞忘れしな。何事も定まる運と思諦め、はや歸れ」「いや〱いや〱諦めまい、恩も情も義理も法も、夫には換へられぬ」と、すらりと拔いて打ちかくる。どつこい爲せぬと白梅が、中に隔つる長刀の、鎬をけづる女同士。惡七兵衛立上り、戰ふ阿古耶に押隔たり、後手ながら引つすゆれば、「なう情なや景淸殿、此の期に及んで妻子の命、構うての仕業か、せめて女の念晴し、針でついた程なりとも、箕尾谷に手を負はせ、死にたいはいの」と齒がみをなし、身を悶えたる叫び泣、さすがの景淸もてあつかひ、しばしあぐみて居たりしが、「ヘツエ是非もなや面目なや、某息の通ふ中、詞には出さじと、思ひ極めしことながら、是なる女が方々を、敵よ仇よと付け狙ひ、道に背かん不便さに、仔細を語る聞いてたべ。ナニなう箕尾谷、御邊は弟、こりや我

もお知らせ有り、健で居る氣遣ひすなと、つい一筆の便して、落付かせうと云ふ氣もなく、あんまりな氣强さ、聞えませぬ」とかきくどく。「尤の恨ながら、惡七兵衞景清に、廻り逢はざる其内は、面目もなき箕尾谷と、忍びくらせし甲斐有つて、今日只今景清に、廻り逢ひしが結ぶの神、運つきて打たるゝとも、未來の契違へじ」と、云ふに悦ぶ父の大彌太、「頼もしく〳〵、其詞が取りも直さず婚禮の盃、我手に入つた景清を、御邊に任すが聟引出、舅が寸志受取り給へ」「ハァ忝き御賜、祝ひ納むる緣の綱」と、捕繩手繰り大音上げ、「上總の七兵衞景清は何處に在る、去る元暦の戰ひに、見參したる源氏の武士、箕尾谷四郎國時、汝に廻り逢はん爲、假に扮しの左官が泥鏝先、勇氣の荒塗打ちこぼち、三寸繩に括り上げん、覺悟々々」と呼はつたり。景清こらへず進出で、「珍らしや箕尾谷、昔の弓矢引きかへて、汝も我も職人業、庫の鉢巻引きしめて、首の骨こそ强くとも、此七兵衞が腕先に、受取普請の力業、手並の手間賃覺えあらん。猶も恥辱の上塗せよ」と、互に付け寄る身の構へ、眼を配り氣を配り、踏む脚代の壇の浦、八島の戰今此處に、見るやとばかり挑み合ひ、しばし勝負も付かざりしが、互に引組む脚代の、板踏碎き廣庭へ、どうと落ちたるはづみの拍子、景清上に重なりしを、えいやと返す箕尾谷が、一念力の一筋に、絡むる繩は勇士の意地、時の運命是非ぞなき。誰かは斯くと告

りなん」と、親子うなづき梯の子に、駈上らんとする所、「しばし〳〵根井殿、お待ちあれ」と聲を懸け、跳り出づるは以前の左官、大彌太焦つて、「ヤア緩怠なる妨げ奴、おのらが出る場所に非ず、退去れしやッ」と怒るにぞ、「オ、名乘らねば實に尤、斯く申す某こそ、聟舅の契りをなし置く箕尾谷四郎國時」と、詞も引かぬにはつたと睨め付け、「しら〴〵しき紛れ者、儕れ誠の箕尾谷ならば、疾くより名乘つて出で、惡七兵衛景淸を、搦めんと思ふ氣はなくて、三里下つて箕尾谷とは、ウヽム聞えた〳〵、扨は景淸が一族な、我々に心をゆるさせ、此場を遁さん計略、娘構ふな捨置け」と、又駈出すを抱き留め、「御尤の御詞、付け狙ふ景淸と名を聞きながら、躊躇ひしは知し召さずや。日本に惡七兵衛二人有り、內一人は似せ者にて、伊庭の十藏と云ふ男子、樣子を語れば事長し、其實否を正さん爲、最前より差控へ、事の樣子を窺ふに、豪氣の働き手竝の程、正眞の惡七兵衛に極まつたり。然る上は箕尾谷が、武運を開くは此處ぞと思ひ、罷出でたる某が、誠の扮裝御覽あれ」と、搔投り捨つるたちつけの、菖蒲革には引換へて、勝負に益有る肌著の小具足、家職にあらぬ小手脚當、兜頭巾を覆ひたる、下は誠の星甲、錏はきれてと謳はれし、名は源平に隱れなき、箕尾谷とこそ知られけれ。白梅嬉しさ飛立つばかり、「扨はお前が箕尾谷樣、縱へ御身の恥辱は有りとも、連れ添ふ女房に何遠慮、疾くに所在

が、昔を慕ふ詞の端、疑ひもなき惡七兵衞景淸と、立聞に知つたる故、普請に事寄せ脚代へ上げ置いたり。年頃日頃親子が賴み、夫の仇聟の意趣、晴さん時節到來せり。不便や聟の箕尾谷が、未だ此世に存らへ居て、斯くと傳へ聞くならば、嘸本意なくも口惜しからめ。とは思へども手に入る敵、やみ〳〵と逃がしなば、月夜に釜のぬかり武士と、世上の譏恥しく、番手はかねて定め置く、はや踏込め」と下知やるにぞ、心は一致の信濃育、木曾の梯それならで、上る梯の子村鳥の、羽音もかくや脚代の、踏所もしどろに寄せかゝる。惡七兵衞景淸は、心に豫てまうけの敵、土藏を小楯に突立つて、「ヤア物々しや事をかしや、景淸を搦めんとは、大黑柱を蟻の髭」と、嘲笑ふ隙間を見て「捕つた」とかゝる一番手、はつしと蹴られころ〳〵〳〵、勾配するどき瓦屋根、巴に並んで三方より、駈寄ればまつかせと、手斧にちよんと首飛んで、こけらを風の吹きしくごとく、遙かに投げてやり鉋、遁さじ者とひよつと出の、頭はつしとさい槌に、目を白黑と三ッ目錐、此世の息をはなし鑿、手竝に鐵鎚鋸の、目に立つ相手もあらばこそ、一度に哄と群るを、當り任せに引抓み、ばらり〳〵と投げはふるは、大工のわざとて棟上の、餠撒き散らす如くなり。大彌太今はたまりかね、「ヤア娘我に續け、惡七兵衞景淸が、鬼神にてもあらばこそ」「オウヲ父樣さうでござんす、人と人との勝負づく、命を捨てば易か

聞かねばこそ、冗口やめて早う往ね、道でお尻を抓られな」と、おどけに紛らし目遣ひの、往ねよく／＼に女房は、娘を抱いて立ちかへる。奥より主の聲として、「最前の大工、それに居るか、背高々々」と呼びかけて、庭に出づれば、「ハッ是は殿樣、御用いかゞ」と畏る。「最前女子共へ吩咐けた、御殿へ見越す庫の窓の目塞ぎ、如何にしても鬱陶しい」「成程其儀は御意の趣、お臺所で承る、申さば僅のはした仕事、明朝でも致しましよ」「いや／＼年寄は氣が焦つ、今日中に仕舞つてくれい」「其儀なら只今」と、形に似合はぬ尻輕さ、彼處に置きたる道具箱、しやんと擔げて脚代の、十二の梯子大またげ、上る大工はさもなくて、見上ぐる方の危なかり、心ぐれつく丸太の上、板は幾重の架橋を、遙奥へと歩み行く。大彌太ほく／＼打首肯き、上の小袖脱ぎ捨つれば、下に腹卷軍場の扮裝、袂より呼子の笛取出し、吹き立つれば、合圖に隨ふ日雇大工、上張なぐり立ち出づる、姿は勇々しき武士の、腰に捕繩十手携へ、大彌太が前に居並んだり。續いて内より娘の白梅、捕繩しやんと玉襷、長刀押取りすうわりの、腰も裳裾も引きしめて、心を配る二皮眼、凛々しくも又媚めかし。大彌太勇む顏ばせにて、「オヽ潔し方々、本國信濃のよしみを忘れず、愚老が指圖に姿を扮し、力となつて給はる段、祝著せり」と禮儀を述べ、「扨此間心付け、試し見る彼の大工、最前かれが妻女とて、用有りげに來りし

「コレこちの人ぢやないかいの」「ム、女房共か、坊か、よう來たなァ」と手を取つて、「是は是はきつい熱、丸子でも呑ましたか。此樣な事なら、晝飯持つて來るには及ばぬ、子の育て樣が大よそな、以來をきつと嗜めく」「なうひよんな事言ふお人、どの樣な寶にも換へまいと思うて、育上げる女夫が樂しみ、粗末にするとはなけれども、廣い世界を狹う暮し、大事を抱へた主のお身、大工の家業は是非もなく、朝内を出しましても、如何か斯うかと案じられ、晝の日あしを待ちかねて、辨當急ぐも顏見たさ、サア機嫌好う參つて」と、風呂敷包取り出せば、「いやく今日は晝飯入らぬ、思ひがけもない事が殿樣の御意に入り、お臺所へお召しなされ、結構なお振舞、諸白を引受けく近年の榮耀、こちとが內のたんぽ酒、賣場のちりとは違うた物」と、言ふ顏つれぐ打守り、「いとしぼや時世とて、心も詞も品下り、昔には似ても似付かぬ姿容、思ひ出せば味きなや。人々多い其中に、御一門の用ひも強く、酒宴亂舞の座敷にも、肩を竝べ膝を組み、さも羨まれた立身の、ほんに麒麟も老いぬれば、駑馬におとると云ふ譬へ、人に手を下げ機嫌を取り、わづかの酒を尊がり、諸白の賣場のと、昔は夢にも言はぬ詞、覺えさしやつた悲しさ」と、思はず仰つ憂き淚。「ヤイこりや何を馬鹿つくす、人に以前を芳しがらそと、男の外聞つくらひの僭上置いてくれ。假令誰も

ますれば、其御褒美に作料は、五人前づつ御拜領、頼み上ぐる」と願ひける。「成程々々、其方が言ふ通り、忝くも鎌倉殿、御光臨有べきと仰下さる有難さ、過ぎし比鶴が岡の八幡宮、御造營の御時、忝くも頼朝公、氏神への御馳走とて、御手づから石を運び砂を持ち、だんかづらを築き給ふ、其例しを思つてな、身も手づからの下地窓を、差別も知らぬ左官めが冗口、如何にしても心にかゝる、祝ひ直してくれまいか」「是は〳〵お易い御用、鶴が岡の緣につれて、此窓は龜の形、萬年の齡にて、内の葭簀は吹寄せ格子、富貴を寄せると云ふ心、お庭の花は糸櫻、結びを長う頭をうなだれ、下々が靡き隨ふ眞盛、お目出たう存じます」と祝儀をのぶれば、「出來たく、こりや嬉しい。ヤレ女子共、此大工勝手へ伴ひ、料理喰はせ酒呑ませい、身も晝寢酒過さう、白梅來よ」と打ちつれて、ほた〳〵悦び奥に入る。「サア御意の出た大事のお客、殿樣御機嫌のひづみを直す大工殿、つゞくり普請の名人」と、女中のおどけ賑々しく、臺所へぞ通りける。憂しと見し、昔を今は慕ひ草、世を忍ぶ草しげる身の、憂きが中にも妻や子を、心一つの寶の玉、阿古耶が名のみ甲斐もなく、辛き世帶を鹽鱈と、子持姿に古の、派手をくろめるお方振り、晝間の辨當夫の爲、運ぶ心ぞ誠なる。普請小屋差覗き、「細工場を未だ仕廻はずか」と、奥を見入つて伺ふ中、お臺所の御馳走に、顏の日和も好い機嫌、いそ〳〵と出て來るは、

太元より昔人、只管氣にやかゝりけん、「ヤイ女郎めら、此窓打額つて仕舞へ、早く〳〵」と呵りの聲、奥へ漏れてや娘の白梅、する〳〵と立出で、「何事をお氣に違ひ、父樣にお腹立てさせます、是と云ふも、自が、お側に居なんだ第一の誤、樣子は知らねどお機嫌直され、おこごの御膳氣をかへて、妾が部屋の庭の躑躅、咲いたもあれば咲かぬのも、有るが一種の御肴、酒事初めてお遊び」と、物和らかに詫ぶるにぞ、子にほださるゝ親心、顏色直して、「オヽそりや氣が替つて宜しからう。惣じて心にかゝることは、祝ひ直しが大事の物。いやそれに就て思ひ出した、數多入り來る大工の中、人に優れて背の高い男め、つく〴〵見るに細工の手捷さ、萬事物馴れた奴と見た、其奴呼べ、此窓の祝儀祝ひ直させ、心よう酒呑まう、其大工呼んで來よ」はつと答へる返事の内、「お召しなさるゝ背高めは私でござります」と、出合頭の拍子よう、鉢巻取つてつくまへば、「あれ見たか白梅、先づ追取つて機轉利き、こりや背高近う寄れ、其方が育ち柄、都の生れと目利したが、此近江へは何故に來た」「是は有難いお尋ね、もと私は飛驒の國の出生、幼少の時分より、五畿内を經廻りて、去年より此お國へ引越して參りしが、此度の御普請は、賴朝樣のお成とやら、お出とやら、其御造作に雇はるゝは、大工冥加に叶うた有りがたい事と存じて、微塵のらを仕らず、一服のむ煙草を半服に減じて、一無盡に精出し

篠竹斑竹、纏ふ葛の永き日も、はや九つか普請場の、拍子木かち〳〵晝休み、槌も手斧もしづまれば、「ムヽウ普請小屋の晝食時分な、晩までもかゝらうと思うた此窓、半日には捗行き捗行き、扨此壁はどの左官めに吩咐けうぞ、數寄屋の上塗晴れの物」、と獨呟く目通りへ、小腰屈めて、「慮外ながら、此壁を塗らんず者、拙者ならで外になし」と、泥鏝ひらめかしすきみ口、壁訴訟とぞ見えにける。有合ふ女中笑止がり、「是々壁塗、殿樣のお側近う、頭巾もとらず憚千萬、下りや〳〵」「ハヽァさすが女中とて、物の作法知らずぢやな、若衆の紫帽子、嫁御寮の綿帽子、虚無僧の編笠、左官の頭巾は脱ぐが不躾、脱がぬが禮儀でござります」と、云ふに大彌太打頷き、「是はさもあらんこと、して其方は此間に見馴れぬ者ぢやが、今日初ての左官か、得て我が樣なひやうげ者は、口ばつかりで細工はあか下手、圍の上塗合點がいかぬ」「是はお情ない御一言、正眞の口も口、手も手と申すは拙者が事、先御細工の下地窓、見た所が地黄丸屋の看板形、水のへりによござりましよ。葭簀の模樣は頽れ格子、此取合には瀟洒と、淺黄か桔梗か丁子茶か、栗梅花色濃鼠」と、言ひならぶれば、「默りをろ、姦しい、普請も未だ滿てぬ内、頽れ格子とは忌々しい、彼奴明日から寄せなと言へ」と、以ての外の不機嫌に、言はれぬ數寄屋の壁塗ろより、晝飯の白壁頽つたが百貫優しと、左官は不首尾に内に入る。大彌

餞せん」と、道具箱の底よりも、隱し置いたる一腰取出し、田舍大工の七兵衛が、嗜道具のだん平物、鎌倉表普請の晴れ、指いてござれ」と差出せば、忝しと押戴き、腰にぼつ込む讓の道具、細工は流々侍の、名を萬天に上普請、勇む心の内普請、追付け手柄を立て揃へ、家わたり粥の豆の數、喰ひ當て嚙み當て高名せんと、心も似れば形も似る、二人が姿緣の蔓、瓜を二つの景淸十藏、立別れてぞ三重行水の、漣波の國とも詠みし近津江、所の名さへ長濱と、御代を祝ひし家造、主の心廣庭に、移し植ゑたる糸櫻、今を盛りとはびこりし、根井の太夫大彌太が、隱居とはいへど古への、氣質は殘る大名普請、數々多き作事の內、圍は主の物數寄とて、物に念者の根井の太夫、舩婢に手傳はせ、手づから結ぶ壁下地、「オヽオヽ是で葭簀、此處へ一本靑々と、此竹節の付けやうが至極々々。こりや出來た面白い」と、機嫌にこ〳〵わらび繩、しやんと結んでふッつり鎌、「既に指をやらうとした」と、差置けば口々に、「遊ばし付けぬ下々の手業、お慰とは云ひながら、お怪我が有つては、お姬樣のおきもじ、もう是でお仕廻ひ遊ばせ」「ムウわいらが事の道理を知らぬによつてさ、此度の普請はな、忝くも鎌倉殿御上洛のお次手、此爺が隱居へお腰かけらるゝ有難さ、壁下地でも自身にするがせめてものもてなし、も些つとぢや手傳へ」と、叉吩咐くる主命に、いやとも伊豫簾携へて、辛氣

ぱれ貞節過分々々〳〵」「なう其お詞たつた一つ聞かうばかりの辛抱、連添ふ女房に過分とは、勿體なや忝なや。此子も心に悦ぶやら、乳味さうに呑んうでゐる、顔見てやつて下さんせ」と、云ふぞ妹背の誠なる。景清重て、「是なう聞かれよ、某が日比の願望、追付け成就の幸ひ有り、此長濱の片邊、根井の太夫大彌太が隱居屋敷へ、源の賴朝上洛の次手に立寄らんとの風說、聞くとひとしく飛立つばかり、何とぞ根井が普請に入込み、事の樣子を伺はんと、思ひ付くより俄大工、すうきを以て此程より、毎日普請に雇はるゝは、身の幸と悦ぶ矢先、方々に廻り逢ふも不思議の吉相、思ひ込んだる念を以て、根井が館の案內覺え、やす〳〵狙ひ賴朝が首取つて、平家に手向けん七兵衞が積り普請、疊みこんだ胸の一圖、氣遣ひ有るな」と語るにぞ、「オヽ潔し賴もしゝ、それに付けて十藏が、一つの計略思ひ付きたり。是より某東國へ赴き、賴朝が上洛の道中へ出つくはし、惡七兵衞景淸と名乘つて狼藉に及びなば、供先守護の大小名、我討ちとらんは必定、景淸は亡びしと、賴朝も心をゆるし、根井が館に入來らん、所を狙ふ誠の景淸、本望をとげ給はゞ、繫がる緣の某まで、共に高名の數に入り、武士の大慶是に過ぎじ。阿古耶を御身に渡す上は、兎角の噂隙づひえ、是より直に罷り立つ。妹さらば、景淸おさらば」「アヽ天晴の心ざし、身を捨てゝの親切、此上は止むるとも、とまらぬ氣質の十藏殿、旅立の

い兄弟の、お世話の甲斐で嬰兒まで生み、親子兄弟一所へ、寄るに付けても母様の」と、詞を殘す曇り聲。景清外は耳にも入らず、「年よられたる母人、同道なきは第一の氣懸り、して〳〵仔細は十藏樣」「されば〳〵、我母女には稀なる最後、いやもう是は順の道、仔細は阿古耶にゆる〳〵と御聞きあれ」と、愁を餘所にくろむれば、景清はハアハッと膝を打つて「エヽ殘念、其日陰の身ならずば、都に在る内對面遂げ、聟姑の御盃、せめて戴くものならば、是程には思ふまじ」と、男淚の繰言に、阿古耶も今更十藏も、つきぬ歎を押しかくし、「扨まあ何から申さうやら、難儀の中の悅びと阿古耶が平產、あたり近所の介抱にて、漸とすくだたせ、產神詣でと僞り、京はすいと脫けたれど、貴方の行方近江とばかり、何處をしやうどと思ひしに、不思議にも廻り逢ふ天道の御惠、此上の珍重は、愛らしう生れた此子、手渡し申すが我等が土產、指似を置いてきたはそこもとの細工のわざ、アレ彼の樣ににこ〳〵と、笑ふ程にそだて上げたは伯父が自慢、是ばかりは恩に被てもらはにやならぬ」と、笑うて見すれば、「其元への御禮、景清が口では申さぬ、かくの通り」と頭を下げ、手をつかへ、「扨出かしたは阿古耶が心底、六波羅へ引出され、拷問にあふぞとは、人の噂に聞きつれども、心に悔むばかりにて、憂き目を救ふしがもなく、無念の月日をくらせしが、今日只今廻り逢ふは操の德、あつ

藍修覆に付き、大工中間一統に、手間を御寄進申すが、名々の冥加の爲、一年に六日づつ頭役に廻つてくる、おらが番に當つたら、戻り土産は名物の干蕪買うて來う」と、笑ひも哄つとはれ渡る、雨のあしもと弱々と、旅に阿古耶が兄弟づれ、濡れみ乾きみ菅笠の、辻堂にさしかゝれば、互に見合す顔と顔、景清ちやくと、「エヘン〳〵、はあ旅のお衆さうなが、雨に逢うてさぞ御難儀、まあ此處で緩りつと、日の暮るゝまで休んでござれ、お連も急かずと〳〵」と、目で知らすれば呑込む十藏、「お詞に甘へて申しかねた事なれども、火打があらばお貸し下され、一ぷく吸付け申したし」「いや〳〵火打は持ちませぬが、好い事を存じ付いた、幸ひ有合ふ檜の切、錐揉にして進ぜう」と、道具箱あぜかへせば、朋輩共口々に、「いや背高めが煙草の火で、旅の女中ごまづける、あの抱いた子が目に見えぬか、歴とした男を鼻の先に置きながら、ふづくりかける大膽、猫の五器へお見廻ひ申す鼠ぢやまで」「それ〳〵、猫で思ひだした、口明いて居る蚵へ、ほでほしを突つこんで、迷惑するを見るやうな、構はずと置いて來い」と、笑うて皆々立かへる。跡は三人詞も口々、「ヤア是は無事で」「健固で」「よう健でゐて下さんした」と、阿古耶は夫に縋り付き、暫し涙にくれけるが、「なう此樣に廻り逢ひ、御無事な顔何時か見ようと、只つた今まで案ぜしに、是と云ふも年頃日頃、觀音樣を念じた驗、一つはいか

「ヤァたつた今までくわん〳〵した空で有つたが、エ、聞えた、狐の嫁入のそばえ雨、晴らしていかう」と辻堂に、立ちよる内の高咄し。中に頭と思しきが、張肱かまへ分別顔、「おらが出入の仕事旦那、根井の太夫大彌太樣、お名が大彌太といふによつて、滅多やたらの大屋敷、此度の御普請は、鎌倉の賴朝樣がお腰かけうと仰しやる故、物入構はぬ結構ずくめ、正眞の大名普請、皆も隨分精出しやれ。手間賃はまうけ次第、ナウ背高、さうぢやないか」「いかにも此方の言はしやる通りぢや。扨あの根井の太夫殿は、何う見ても阿呆ぢや、それを何故といふに、鎌倉の賴朝樣が、お腰かけうとおつしやるなら、つい上り口を一間程普請して濟むこと、それもやかましいに、床机一脚あてがうたら、ゆつくり腰はかけらるゝに、いかに金が澤山なとて、あだづひえな大普請、但し賴朝樣のござるといふは、世間への言觸らしで、あの內にござる娘御に、聟殿取つて御祝言、其晴れの普請ぢやないか」と、餘所ながら裏問へば、「ハテ文盲な、お腰かけらるゝと云うて、常體の人間とはちがうて、頭さへ大きい賴朝樣、腰の廻りは思ひやらるゝ、でつかちない物で有らう。此樣なことで普請がなけりや、こちとが中間も立たぬてや。したがまあ悅びやれ、奈良の大佛は建立成り、是から段〳〵興福寺の元興寺のと、大工の秋が入つて來る、近年にない摑み取、是といふも番匠の始り、太子樣のお蔭、此度七堂伽

とばかりしらま弓、何處をさして行きなんと、案じ迷ふも道理なる。十藏ふつと思ひ付き、まだ幼き嬰兒の、心は正直正路にて、神や佛の惠にも、叶ふ御籤の氣結び、辻占とはんと立寄りて、心に右を尋ぬれば、顏を自然と反向けたる、かぶりたこのよしなしと、又問うて見る左の道、につと笑顏の鏡の山、映る心にまかせんと、行く道もせは初花の、吹雪も深く森山の、梢殘らず色めきて、いとしをらしき里の若嫁、小娘達か、春の物とて流行唄、唐も大和も、鄙も都も濡れの沙汰、サヨエえゝ優し、ちんないろ〳〵、オヽオ粋や〳〵、宿は鏡の、男子和女郎がによす談合、サヨエ市河越て高宮の、町に鳥井の二柱、おたがじやくしの森繁み、遙其方と額づきて、夫の命長かれと、守袋をかけまくも、忝しとゆふつけの、鳥元の宿櫓橋、渡り〳〵て瞰上ぐれば、雲を縫ひ行く磨針の、峠遙に夕霞、旅の心の急しさ、一人打つたり舞うたりの、かはを過ぎ行く長繩手、たつ辻堂を目當にて、辿り行く身の便なき。住吉の橋の反つたは、大工からかや木からかや、木を削り、鉋かくれば、鉋からかも知らぬえ、知らぬ田舍も住めば又、我身一つの都ぞと、心の急ぎのばし置く、惡七兵衞景淸が、人に不審を打たれじと、普請通ひに身を扮し、在所大工の中間に入り、背高々々と異名を呼ばれ、流れ渡りの手間仕事、今日も朋輩打連れ立ち、普請場をはやさるの刻、暮るゝに遲き春の日の、ぶら〳〵かしこに立歸る。

第四　道行旅寢の添乳歌

箒木の、有りとは見えて逢はぬとは、代々の眺めの種なれど、我が身一つは無情きと、思ふ心の松の名や、世にも阿古耶が夫思ひ、勤めの中の誠より、まうけし胤の稚櫻、初の子持のかいしよなき、姿を人の譏り種、さがなき口もおのづから、七十五日はや立ちて、今日忌明の壽や、産神詣に假付けて、餘所の人を尋行く、當所も長の旅なれど、つい菅笠に草履がけ、案じるよりもやすやすと、思へば輕きさんでうの、橋も後に遠ざかり、京の名殘と見返れば、跡に追付く十歳が、日傘片手にふりつゞみ、まだ玩弄物知らぬ子に、甘やかしかる叔父樣と、互に笑ひあはた山、越えてぞ此處に追分や、大津給召せと旅人の、心をしばし繫ぐにぞ、さてし惜しまぬ膳所の町、瀬田の長橋かゝる身の、重き思ひを祈れとや、そなたに立てる石山寺、南無觀世音菩薩、大慈大悲の惠にて、刃に沈む母上の、未來の闇も晴れ渡り、眞如の月の彼の岸に、迎はせ賜へと伏しをがむ、袖も露けき春の野に、おのが在所を知れよとて、妻戀ふ聲はけんけんほろゝ、子を思ふ身はねんねんころゝ、泣くなな泣いそ我ふところに、遲々たる春の日影を受けて、育て上げなん姥が餅、草津を早く出離れて、右と左へ二筋の、道は別れし我夫も、近江

典、死人に手向ける上からは、禮を受けう樣もなし、恩にもきせぬ來世金、受け悦んで成佛あれ。扨某は參り申す」と立出づる。「ヤアくく箕尾谷、母に手向の情はあれども、景清を狙ふ御邊なれば、此十藏何時までも妨げ入れる合點か」「オヽ言ふにや及ぶ、老母が愛心に免じ、狙ふまじ討つまじと云ひたけれども、我も根井の太夫と云ふ親有り、我ゆゑ江州へ蟄居の身、景清を討つて會稽の恥を雪がずんば、孝行も武道も立てがたし。汝等兄弟景清に廻り逢はゞ、斯く付狙ふと云ひ聞かせ、必ず用心怠るな」「オヽサ十藏が頰を篤くと見置き、人違へして悔むなよ」「何さくく、千體佛程あるとても、一念の眼力、誠の景清討つて見せうぞ」「見事討つか」「儕見事妨ぐか」と、思はず兩方反打つて詰懸くる。阿古耶立出で、互に宥め宥められ、別れ出づるも止まるも、共に甲斐なきはよき木の、有りとは見えてなき骸を、古い葛籠に法の道、心は網代の葬禮輿と、兄が歎けば妹は、まそつと貧しい野送りでも、燈籠なりとも有る物をと、暗む心の燈火を、法の光にかゝき立てて、泣くくく荷ひ諸聲に、爾時無盡意菩薩、卽從座起偏祖右肩、合掌向佛而作是言、世尊觀世音菩薩、大慈大悲を引導に、此世を離れ行く旅と、人を尋ねに行く旅と、道は二筋かはれども、涙はひとつ一筋の、誠の道こそしるべなれ。

ぐつとつツ込み、乳の下かけて引廻す。「悲しや是れは」と驚きさわぎ、「そも何故の御自害」と、兄弟縋り取付けば、こは〳〵如何にと箕尾谷も、呆れ果てたるばかりなり。母は苦しき息ながら、「やれ兄弟よ、其金を路銀にして、景清の所在を尋ねに、母が命の有る内に、ちやつと往け〳〵。アヽ嬉しや、まんまと仕おほせた。斯う云うたら箕尾谷様、嘸やさぞ憎からう、身を切刻み砕かれても、元より知らぬ景清の所在、數へやうと僞しは、兄弟を尋ねにやる路銀に金とらう大騙りの大盗人、あの婆々め寸斷々々にもと思し召さうが、かはゆうて〳〵何うもならぬ子供の爲聟の爲、騙りに成つて死ぬる母が心、子を持つて後思ひやり、其時恨を晴れてたべ。ヤア兄弟よ、千日千夜云うても名殘は盡きねど皆仇言、かまへて〳〵心を合せ、景清を見立てくれ。是を云うてしまへば、心にかゝることと浮世にない」と、詞は涼しく、心は弱る息も切れ、此世の別れと消えはつる。阿古耶は更に夢現、辨へ知らず取亂し、わつとばかりに伏沈む。十藏は箕尾谷に、泣面包む櫨紅葉、胸は時雨よ雨や小雨、岩木ならねば箕尾谷も、敵は敵金は金、死なずとも是しきに、了簡も有るべきを、不便の母が最期やと、餘所目遣ひも頼もしき。やよ有つて十藏金押取り、物をも云はず箕尾谷が前に置く。箕「オヽ、返辨の心尤なり、此上は遣ると云ふともよも受けまじ」と、立つて死骸の前に置き、「七日々々の弔金、七々四十九兩の香

聲に呼はつて駈入り、「ヤア珍らしゝ箕尾谷、見忘れしか、壇の浦にて見参せし景淸、汝弓箭の恥を思ひ、付狙ふとは疾く聞いたり。今廻り逢ふは優曇華、鬱憤を晴らせ、相手に成つて得さすべし、サァ抜け、勝負」と詰めよつたり。敵に詞をかけられて、箕尾谷なじかは臆すべき、抜放さんとはしつれども、壇の浦の戰は、互の姿甲冑の、昔にかはる形姿、それかあらぬか訝しと、躊躇ふ氣色、十藏焦つて、「ヤレ臆れしか箕尾谷、又臆病が起りしな、性根を付けてくれんず」と、閃りと抜いて打ちかくる。母も阿古耶も心暮れ、わつと叫び泣くばかり。兩方互に祕術をつくし、打つぞと見えし十藏が、刀の金や冴えたりけん、鍔本よりほつきと折れて飛びちつたり。十藏柄をからりと捨て、「景淸が運命是までなり、サァ首打て」と指しのぶれば、「オオ神妙なり景淸」と、振上ぐる刀の下、眼を閉ぢたる頰魂、つく〴〵と打まもり、「ムウヽ主君の仇を報ぜんと、鎌倉殿を狙ふ景淸、刀が折れたらば指添も有る、命の懸換も有る樣に首さしのべしは、ムウ〳〵、いや〳〵〳〵、箕尾谷が一腰は、正眞の景淸が首を打たでは叶はぬ刀、紛者には得汚すまい」と鞘に納め、「儕、景淸まう取り置け」と、一分別有る其の有樣、一器量有る男子なり。母は手を打ち、「オヽ好い分別や眼力や、其男は十藏と云ふ我息子、誠の七兵衛景淸が隱れ住む所は、淸水の後堂より、本堂へ是斯う廻る左の方」と、折れたる刀押取つて、

阿古耶殿と緣が切れ、退けば他人の景淸、身はくづれうと隱し遂げうと、思ふは五十年先の氣質、當世は川流、さらり〳〵、合點かお袋」と、氣を寛させたらしける。「ムウ、合せ物は離れ物、言はしやれば其處も有る。當代は昔とちがひ、弟子の器量のあるなしも構はず、弓矢打物の大事さへ、金次第で傳授するげな、氣のさばけた世ぢやござらぬか。水心あれば魚心有る、問樣に心あれば、敎へ樣にも心が有りさうな物の樣に思はるゝぢやござらぬか」と、詞の謎をとく呑込み、路銀の財布取出す。ぢつと尻目に懸けながら、猶見ぬ顏の空とほけ、「いやなうお袋、知らぬ所へ初て參り、踏荒し煙草を荒し、忝い」と一包、膝元にそつと置く。苦もなく取つて指先に捻つて見、「誠に是は茶の金さうな、戴く程の重みでもなし。」コレ人の所在を訴人すれば、囑托の大法さへ判金七枚に極まつた世の中、茶の錢ばかり何故極らぬでござるぞいの」「おつと茶の金呑込んだ、判金七枚」と、財布の包取出し、前に竝ぶる折こそあれ、阿古耶十藏に尋ね逢ひ、互の悅びいそ〳〵と、立歸る庵の内、見なれぬ武士に見なれぬ小判、這は如何にと、迂闊に兄弟得這入らず、内の樣子を窺ける。箕尾谷悅び、「サア望みのごとく此金を渡す上は、景淸が在家を知らせ、我に討たせ、此箕尾谷が願かなへてくれ」「オヽ神佛より貴い金を大ぶん取るからは、敎へませいでなんとせう、上總の七兵衛景淸が所在は爰に在り」と、十藏大音

の松へと急ぎ行く。爰に過ぎつる元暦元年、源平の戰ひ壇浦にて、上總の七兵衞景淸に出會ひ、不覺をとりし源氏の侍、箕尾谷の四郎國時、其身の恥辱を顧みて、陣所に歸らず、直に逐電してけるが、景淸世に存らへ、都にさまよふと聞きしより、鬱憤を遂げ、弓箭の恥を雪がんと、所在を探す京巡り、今日しも此處を尋ね來り、扇の端に書付けたる、心覺え開き見て、「ムウ岡崎の村はづれ、北を受けたる一軒屋、西に藪垣、入口に井の字の印、あるぞ〳〵」と打首肯き、內の樣子を窺へば、主の老女が年格好、是こそと突と入り、上り口に踞げ、「ヤア老女、阿古耶が母は儕よな、聟の景淸、八島の浦にて箕尾谷と軍物語聞き及ばん。我こそ其箕尾谷四郎國時、景淸が所在を探す、又鎌倉よりも詮議嚴しく、秩父岩永が承り、阿古耶に所在を責問はる所、白狀せしともせぬとも取々の噂、それはともあれ、儕が知らぬことよも有るまじ、眞直に吐かせ、知らぬなどと僞らば、皺首捻ぢて言はせん」と、威しかゝれば悔として、イヤ知らぬとも存じたとも、兎角の返答呆れ果て、顏を眺むるばかりなり。彼奴知つて咥けるか、荒氣では行くまじと分別し、面色を和らげ、「老女こゝを合點せよ、箕尾谷慘い心持ちたれば、無體に連れ歸り、人質に取り景淸が心を澁らせ、聞出す仕樣も有る。又すつぱりと切殺し、景淸が外姑の敵と名乘つて出る仕樣もあれど、咎ない人を殺し、卑怯を働く我ならず。手近う言へば

の身の上詮議落著致すによつて送り歸さるゝ、併し胎内に子を宿せば、平産までは他國叶はず。男子出生ならば決斷所へ訴ふべし、女子においては構なしとの諚意なるぞ」と、阿古耶を引いて渡さるれば、「なう懐しや母樣」と、縋り付いたる嬉し泣き、母は仰天氣を狼狽へ、「ヤア健で戻つたか、嬉しやの悲しやの、こんなこと知つたら遣るまい物、六波羅は何方ぞ、まだ十藏が日は暮れまいか。よう戻つてくれたな、入相が死んだら何とせう、兄が鐘は鳴るまいか」と、何を云ふやら氣もそゞろに、餘所には鳴らぬ暮六つを、胸にごんごんつくばかり。「母樣それは何おつしやる、いかいお世話、六郞樣へお禮々々」と氣を付くれば、「ほんにほんに」と手を合せ、伏拜むより外ぞなき。「オヽ久々にての對面、うろたゆる程嬉しい筈、阿古耶を渡せば他に用なし」と六郞は、下部を引具し立歸る。「母樣悦びは道理ながら、其樣に何故うろうろなされます」「うろうろせいでは、兄は腹切りに往つたはやい」「エイそりやまア何所へ、何として」と驚けば、「和女の命助けう方便、景淸に成りかはつて、六波羅の松の下、日の中は淸水で暮し、入相の鐘と一時に腹切る筈。ヤ斯う言うては居られぬ」と、駈け出しては撻と輾け、嘆きに弱る足弱車、阿古耶悲しさ遣る方なく、「戻ると其儘何故云うて下さんせぬ、女の足でもつい一走、わしが往て暮れぬ内、兄樣つれまして立ちかへる」と、はや駈出すおのが名の、阿古耶

れ、まさかの用と嗜みし、晴小袖召させん」と取り出す、心の闇の眞黒々、縞隱れ行く伊達羽織、行長合ひてのつしりと、大小さすが浪人の、昔輝く金作、十藏忽景淸と、見かはす計り見えにける。物數言はゞ老人の、もしや心も亂れんと、門に出で、「是まで養育の御恩、海に比ぶれば蒼海淺く、山に譬ふれば須彌山低しと申せども、命は又義によつて輕しといへり。妹がことは申すに及ばず、申上げたき數々は來世の事、日の內は淸水に暮し、切腹は暮六つの鐘を限つて、逆さまなことながら、御回向賴み奉る」と、云捨てつゝと走り行く。母はつゞいて走り出で、「ヤレしばし待て物言はう、おういく」呼べど答へず俤も、淚と年の疎き目に、其行方は見えざりけり。あつと大地に伏轉び、「鬼にもせよ蛇にもせよ、死にに行く子を往て死ねと、歎かぬ親の有るべきか。女なれども侍の、親に生れた身の因果、泣きたいを得泣かず、理窟言うたり笑うたを、誠の心と思ひしか、狂氣半分半分は、死んで居たはやい。扮裝つた姿いつ忘れう、千騎二千騎の大將と仰いでも、不足ない子を可愛やな、一生貧苦に埋もらせ、鎧甲著せなんだが悲しい。いつそ不孝に有つたらば、是程に思ふまい、孝行にしてくれたが、今では結句恨めしい」と、淚の限り聲限り、泣いてはくどき立つては轉び、やる方なみだに伏沈む。かゝる所へ榛澤六郎成淸、阿古耶を駕籠に勞はり來り、「ヤアく老母、阿古耶

の髪剃は、ほんの月額、逆剃にせうかいの」「アいや、若いが先立つも老いたるが殘るも、此方こそ逆さまと存ずれども、皆前生から定つた、直剃になされ下されかし」「オヽ心得し」と老の手の、顫ふを見せじ顫はじと、二剃三剃顏と顏、互に移る鏡の内、「いやなう十歳、幾歳に成つても面影の、殘るは昔の幼顏、あてにならぬは額の黒子、見通しの法印が、六十八まで請合ひし其命、まだ半分も立たず、こんな事が有らうとは、神佛のなされた八卦にも、間に虚が有るかいの。ハヽヽ、をかしいことでは有るはいの」「いや私は八卦の合はぬを、いかう嬉しう存じます。先年國元で御大病お煩ひなされた時、百人の醫者は百人、陰陽師山伏、名僧智識の占にも、御本復と申す者は一人も無かりしが、御快氣に間もなく七十二まで御息災、此樣な目出度い事はござりませぬ」「オヽ言やればそれもさう、其時參つたら、今日廣い國へ主づいて行きやる嬉しい月額は剃るまい物、長生してこんな目にあふめでたいぞや。ヤ何か云ふ間に時うつる、月額剃つて仕舞はう。ホヽこりや何時の間に揉直しやつた」「いや揉直しは致しませせぬ」「でもひつたりと濡れて有る」「それはお前の」「あの虚はいの、おれが何の、徹塵も泣きやせぬ〳〵」と、言ふ聲曇る鏡の内、互に顏を見合せて、笑ひを作る氣は立つる、老の手業のかよわきも、剃刀早に剃りなせり。「是からは聟の景淸殿、大國の所知入

か、御身が爲には甥か姪か、胤は景清の預り物、それ殺すまいばつかりに、死ねと云ふ合點か。幸ひと其盃、又歸る旅なれば、母が呑んでさすべきが、再び戻らぬ死出の盃、一つ呑んで母にさせ、進ぜん」と立上り、胸と一所に踊る鯉を鉢に入れ、十藏が前に据ゑ、「今死ぬる身に入らぬ咄なれども、物は聞いて置かうこと、わごぜが祖父樣、妾を縁に付け給ふ時、切腹人の今際には、鯉の濱燒をするゑ、飯櫃の蓋で給仕すること故實なり、聞いて置けと物語、人の上でも有ることとか、我子の役に今立つた、此鯉の今日釣にかゝりしも、思へば天の與へぞや、祝うて居わつて早う往て、奇麗に死ね、さらば〳〵」と目を閉ぢて、重ねて詞もなかりけり。「ハア有りがたや、望み叶ひし我大慶、死後の見苦しからぬやう、とてもの事にさつぱりと、自剃に月額仕らん。剃刀砥石は何所に」と尋ぬれば、「オそれよからう、今生未來の晴れの月額、母が剃つておませうぞ、髮揉みやれ」「こは冥加なや、生々世々の御形見、御辭退は仕らぬ」と、盥取る間も有りやなし、走の水にさしかゝれば、母は末世の手本となれ、武士の龜鑑と鏡立、砥石剃刀携へ出で、磨ぐも礎くも弓取を、子に持つ親は皆これと、思ひ流しの合水、今日別れては逢ふことの、鐵よりかたき合砥や、力なみだを押包む、袖よ袂よ手合せし、「サア十藏」と有りければ、思ひ亂るゝ黑髮を、揉んで鏡に打向ふ。母は後に立廻り、「なんと十藏、親が子供

誕生日を祝ひ納めて後の事と、今日まで色にも出さず、思ひ初めし其日より、一日を千日萬日と、のッつ反ッつ待ちかねし、今日只今より、誰か我に代つて勞はり養育み奉らん。尤妹は有りながら女の事、片々の手の落ちた樣に思召し、歎きが積つて御身のくづをれ、それが高じて又妹が悲しい目を見ようかと、案じ續くれば身も世もあられず、悲しけれども、初から無い十歳ぢやと思召し諦め、不孝の罪をゆるされ、命のお暇下されば、有りがたからん」と跡云ひさし、胸までぐッぐと突懸くる、涙知らせじ泣き顏見せじと差俯伏き、疊に喰付き願ひける。母は萎るゝ氣色もなく、「ヤレ其詞遲かつた、十歳、今日は云ふか、晩には云ふかと、毎日々々待ちかねて思ふには、心が付かぬか、いや拔かる者でもないと、心の內でとつおいつ、親子の中も侍に、死ねと敎ゆるは恥も有り、遠慮も有る。何時云うてくれることぞやと、今まで和御前が立身出世を待つたやうに待ちかねし、母は誰が無うても、飢ゑもせず凍えもせぬ。況て妹が居るからは、跡案じること微塵もない。未練な心を殘さずとも、潔う腹切つて、景淸の恩も報じ、妹が命も助けてくれ、というとて妹が助けたさに、死ぬと云ふでは更々なし。端折かどみの眞實の我子兄弟、月日と力に暮せしもの、夜ばかりがよからうか、晝ばかりでよからうか、夜晝があればこそ立つ世の中に老の身の、可愛さに隔てはなけれども、妹が腹には男孫か女孫

進、御酒は御氣根、毎年謠ふお肴、今年缺かんも心がかり、世上の聞えも候へば、隨分と聲低に、謠母は千代ませ〳〵、と繰言を、祝ひ謠の、謠面白の時代や」母「嘉例の肴めでたい〳〵、取るぢやに母も一つ受け、呑むことはならず、是れつけざし」「ハア是は有りがたい」と、戴き〳〵ずつとほし、「然らば御意に任せ盃は是まで、餘り御機嫌好いに付き、近比不孝な願ひなれども、申上げて見ませうが、御聞分け下され」と、飛退去つて手をつかへ、「阿古耶が今度の苦しみは、景清に緣を結んだる故、というて重々の大恩有る景清が行方、知つても云ふまじ、況て存ぜねは、責殺さるゝは案の內。私つく〴〵存ずるに、阿古耶が腹はナ、是々と承る、いかな〳〵殺させては、母も我も景清に、何と面を合すべき。然れども力わざには動しも助けもならぬ、所を何の苦もなく助ける、極上々の分別を極めしは、某阿古耶が責められし彼阿古耶の松と京童の異名を付けし六波羅の松の下にて、腹十文字にかつさばき、上總の七兵衛景清運命拙く、とても賴朝を討つこと叶はぬ故、腹切つて相果つる者也 如件などと、似つこらしく書置を殘し相果てば、ヤレ景清切腹する上は、阿古耶に用なしと命助くるのみならず、京都鎌倉心をゆるせば、油斷を窺ひ景清殿、易々と本懷を達せられんは、掌を見るが如し。一日切腹を急げば一日、妹が苦患を助ける、疾つく申上げんと存ぜしかども、親子一世の此世の別れ、せめて快う御

きたい。雪の中の笋氷の魚、唐土人の孝行にも、劣りはせぬぞやれ十藏、とは云ふ物のいぢらしげに、鱗の數と我年と同い年、如何にしても殺されまい。御身が出世も此鯉の、龍門の瀧を上るごとく、あやかつて命助けてやりや。コレ此盆を斯うすゆれば、幸ひ蒔繪の鶴の料理、心で祝ふ千代八千代、親子目出度う盃せん、ア、酒がな」と有りければ、「ハア詫言とは勿體ない、お心とくれば此上の大慶なし。酒も則ち用意せり」と、簀の内より取出す、德利に餘る悦び貌、「とにもかくにも御心に、背かぬを今日の御馳走、ヤ亭主方ま一人有る」と、下屋に駈け入り、羽織片手にあたふた計の食籠も、土盞に事のかけ盃、わびしき中に假初も、禮儀亂さぬ親と子の、昔の育ち奥床し。「ハア是は懐しや、景清の御身にもらはせし羽織ならずや」「されば其時申せしは、是を打懸け、景清が孝行も一所と頼み置きたれば、此座に置けば是は景清、今日の壽、亭主二人と思召し、先盃お取上げ、いざお酌仕らん。日頃は聞こし召されねど、今日は半盞、ハア忝い忝い、酒は愁の箒と申せば、暫しもお氣晴し、其お盃サア景清戴いて、直に返進申さし召せ」と、言ふも酌ぐも形ばかり、「さらば盃お取次、肴はなくとも聟殿の盃、まあ錢の廻り程、是はくく、つぐまいと存じながら又半盞、したり、靜にはあがらいで、誠に下戸の無意氣呑、すぐに私御頂戴、手酌は恥の物、是御覽ぜ」と、さらりと酌んでついと乾し、「憚ながら又返

の命を助け、慈悲善根の果でなりとも、助けたい此時節、面白さうに釣どころぢやおぢやるまい。かはいや其鯉が和御前に釣られ、俎板に乗る苦しみも、阿古耶が六波羅で責めらるゝ苦しみも、人と魚との名は違へど、苦しむ所に二つない。鯉のお蔭で息災延命、おりや否でおぢやる。年頃日頃の孝行も、愛想もこそも盡き果てし」と、身を捻ぢ背けて恨み顔、「左様に思召さば、御叱御尤千萬、全く慰の釣殺生に候はず。阿古耶が事に頓著有り、御忘れなされしか、今月今日は御誕生日、浪人の後も形のごとく貧しき中に、頭尾の有る鹽物なりとも調へ、目出たうお盃頂戴致さぬ年もなし。殊に今年ははや七十二、祝ひは申し納め、來年の今日は不定の世の中、相かはらず祝ひ奉らんと、此間心懸くれども、遠慮で講釋は仕らず、雜魚一疋調へん價に盡き果て、殺生とは存じながら、小鮒でも釣つて御肴にと存じたれば、御覽の如く三年物の鯉二こん、鯉の鱗は三十六枚有ると申す、二こん合せて七十二枚の鱗、母の御年も七十二、都合目出度う、是で母の誕生日を祝せよと、八大龍王の賜と、嬉しく持つて歸りし。十藏も木石てずら、詞には出さねども、たつた一人の妹が苦しみ、母の歎き悲みが悲しかるまいか、思ひやつべたな母人」と、歎かば母の歎きぞと、泣かでこま〲語りける。「なう恥しやサア十藏、早う其鯉料理して、母が誕生祝うてたべ。悔しや叱つた侘言に、悲しい中で莞爾と、笑うて膳がいたゞ

三絃、かしこき例引いたりちよつかい、ばち利生有る糸さばき、直なる道の三重言の葉や。侘びぬれば、親慕ふ子の片鼈、身を立てかぬる音をぞ泣く、憂き身を此處に岡崎の片邊、伊庭十藏一幸が、老母を養育む藁屋の軒、母は何をか思ひ寐の、彼唐土の顏回に、樂みは似ぬ臂枕、世に附合ぬ氣散じは、引立つる戶の隙間より、風のみ通ふばかりにて、稀に言問ふ人もなし。憂節を身に添持ちし釣竿の、いとま有りげに見ゆれども、母の一人居氣遣と、心は急ぐ伊庭十藏、腰には須の重たきを、足元かろく立歸り、「ハア是は母人、何時にない晝寐なされしな、定めて妹が身の上を案じ寢の、夢程もお心休めは珍重々々、此間に釣た此鯉を調味して、御膳上げん」と取出す、片足たらぬ俎板も、元浪人の錆庖丁、棚からぐわつたり落ちたは何んぞ、其響きに目覺めて母は起上り、「ヤア十藏戻つてか、何として遲かりしぞ。阿古耶が彼の身に成りしより、講釋も打ちやめ、一寸內を出ぬ人の、適の留守なれど、心細う待ちかねる、今日は先何處へぞ」「さればふと存じ付き釣に參り、御覽なされ、此鯉を二こんまで、終に覺えぬ獵の利きやう、是も母人御息災延命の徵と思へば、大分嬉しう存じます」と、聞いて不興し、「何、釣に往て其鯉取つたか、それが母が息災延命の徵だ。是は又十藏とも覺えぬ、常さへ母が嫌ひの殺生、殊に阿古耶が今の苦しみ、人並に世を經る我ならば、其處の祈彼處の祈禱、生有る物

「ヤア〳〵重忠、白いとも黒いとも片付かぬ詮議を、阿古耶めに僞なしとは、何を以て申さるゝ、此岩永は呑込まぬ、不埒々々」と云ひほぐす。「オ、其仔細いうて聞けん、鼓は五聲に通ぜずといへども、糸竹の調は五音四聲に能く通じ、直きを以て調子とす。曲り僞る心を以て此曲をなせる時は、其音色亂れ狂ふ。就中此琴、音有る物の司として、人の心を正しうし、邪を禁しむると、白虎通にも賞じ置きたり。こゝをもて重忠が、女の心を引見る拷問、十三の絃筋に、縛り絡めて琴柱にくゞめ、科の品々一より十迄、とゐぎんずるを曲事とは申されまじ。琴の形を竪に見れば、張り落つる瀧の水、其水をくれる心の水責、三絃の二上りに、氣を釣上げる天秤責、胡弓の弓の矢殼責と、品を換へ責むれども、いつかな亂るゝ音〆もなく、調子も時も相の手の、祕曲をつくす一節に、彼が誠はあらはれて、知らぬことは知らぬに立つ、調べを糺して聞取つたる詮議の落著、此上にも不審有るや」と、道理に叶ひし詞のしらべ、ぴんともしやんとも岩永は、撥鬢頭かくばかり、眞面目に成るぞ心地よき。重忠重ねて、「阿古耶が詮議落著といへども、猶此上に某が尋ね問ふ仔細有り、隨分勞り屋敷へ引け」と、仰を蒙る榛澤六郎、「いざ阿古耶立ちませい」と、伴ふ情数々の、惠を思ふ女心、「有りがたう存じます」と、詞につきぬ悦び涙。岩永は拍子もなく、調子に乗らぬ勃と頬、秩父は宮商角徵羽の、五つに叶ふ琴

跡夢もなし。去にても我つまの、秋より先にかならずと、あだし詞の人心、其方の空よと眺むれど、それぞと問ひし人もなし」「オウもう好いは、三絃やめい、班女が閨のかこちぐさ、絕えし契りの一節、時に取つての一興ながら、分疏は暗い〳〵。西海の合戰に命を遁れ、都に折々紛れ入る景清、其方は度々逢はうがな」「平家御盛の時だにも、人に知られた景清が、五條坂の浮女に、心を寄すると言はれては、弓箭の恥と遠慮がち、殊更今は日陰の身、妾はもとより河竹の、有るが中にも無情い親方、目顏を忍ぶ格子の先、編笠越しに健に有つたか、アイお前も無事にと只つた一口、言ふが互の比翼連理、さらばと云ふ間もない程に、忙しない別路は、昔のきぬ〴〵引きかへて、もめん〳〵と零落れし、身の果哀れな物語、アヽおはもじ」と差俯伏く。「いかさま是は斯くもあらん、景清程の勇士なれども、實に色は思案の外、思案の外、如何思案仕直しても、此通りでは濟まされぬ。それ胡弓すれ〳〵」「あい」と答へて氣は張弓、歌は哀を催せる、時の調子も相の山、「吉野龍田の花紅葉、更科越路の月雪も、夢と覺めては跡もなし。あだし野の露鳥邊野の、烟はたゆる時しなき、是が浮世の誠なる一誠をあらはす一曲に、重忠ほとんど感に堪へ、「阿古耶が拷問只今限り、景清が行衞知らぬと云ふに、僞なきこと見屆けたり、此上には構ひなし」と、仰に阿古耶は忝け涙、盡きぬお禮を伏拜めば、「ヤア

云ふも月の緣、淸しと云ふも月の緣、かげきよき名のみにて、映せど袖に宿らず」重忠耳をそばだて給ひ、「今彈ぜしは蕗組の唱歌を我身の上に取り、景淸か行衞知らぬとな。まア知らずんば知らぬにせよ、して景淸と其方が、馴初めしは何時の頃、如何なる事の緣により、深い契りの中とは成りしぞ」「是は又思ひ寄らぬ變つたことのお尋ね、何ごとも昔となる恥しい物語、平家の御代と時めく春、馴れにし人は山鳥の、尾張の國より永々しき、野山を越えて淸水へ、日每日每の徒詣で、下向にも參りにも、道はかはらぬ五條坂、互に面を見知り合ひ、何時近付に成るともなく、羽織の袖の綻び、ちよつと時雨の傘、お易い御用、雪の晨の煙草の火、寒いにせめてお茶一服、それが高じて酒一つ、此方に思へば彼方からも、功德は深い觀音經、普門品第二十五日の夜さ必と、戯れの詞を結ぶ名古屋帶、終なければ初もない、味な戀路と樂しみしに、壽永の秋の風立つて、須磨や明石の浦舟に、漕ぎ放れ行く緣の切れめ、思ひ出すも痞の毒、ア、疎まし」と語りける。「オ、さも有りなん情の道、聞屆けしが詮議は濟まぬ、この上は三絃彈けい」「エ、イ」「いやさ、此方の尋ぬる仔細を聞かぬ內は、何時までも」と、猶望まるゝ三絃の、どう成ることか知らねども、思ひ込んだる操の糸、今更何とたがやさん、心の天柱引きしめて、「翠帳紅閨に、枕竝ぶる床の內、馴れし衾の夜すがらも、四門の

て白洲の内、直す梯子を見るにさへ、心は上る枕の横槌、底のかだへの井戸屋形、深くも軋る絞車の、胸に響きて氣を冷やす、阿古耶が心の濁水、今しも呑むやと覺悟の體。重忠庭に下り立つて、「ア、仰々し靜まれ〳〵、阿古耶を拷問の責道具は、某かねて拵へ置きたり。誰か有る持參せよ」と、仰に隨ひ持出づるは、最も優しき玉琴に、三絃胡弓取添へて、音〆も嘸と白洲なる、阿古耶が前に並べ置く。岩永も悔とせしが、樣子如何と打まもれば、「是さ女、其琴彈け、重忠が是にて聞く」と、刀の杖に頤持たせ、「岩永殿もお聞きあれ」と、打解けて見えければ、「こりや何ぢや興がるは、責道具々々々と、何ぞ嚴しい事かと思へば、エ、聞えた、拷問に托せ、自分の慰み氣晴しをやらるゝな。天下の政道を取捌く決斷所での琴三絃、神武以來無い圖なほたへ、實に誠世界の有樣、天に口なし人を以て言はしむとは今思ひ當つた。阿古耶めが懷胎、もしもや此子が女の子なら、琴でやぐわん〳〵、三絃でなんとやらと、京中が諷ひしは此前表、此上の破れ次手、ちよく〳〵げなんどもよござんしよかの、ハヽヽヽ」と嘲哢す。重忠耳にも入れ給はず、「ヤレ阿古耶、なぜ初めぬ、琴を彈かねば景清が所在を言ひ明かす所存か」と、詞もしげき重忠の、底の心は知らねども、是非なく對ふつま琴の、行衛を何といはこすに、絲も心も亂るゝばかり、聲も枯野の船ならで、かひなき調べかき鳴らし、「影と

景清殿の行衛知つてさへ居るなら、お心にほだされ、ついぽんと云うてのけうが、何を云うても知らぬが眞實、それとても疑ひはれずば、ハテ何時までも責められうはいな。責めらるゝが勤のかはり、お前方も精出して、お責めなさるが身のお勤、勤と云ふ字に二つはない、アヽ浮世では有るぞいな」と、云ふに側から怺へぬ岩永、「ヤアべり〳〵とはつしやいだ頤骨、是非白狀をせぬに於ては、此間の拷問に品をかへて憂き目を見する。聞けばうぬは懷胎とな、よいよい、急度思ひ付いた、腹に子の有るかざみの格、鹽煎責にしてくれう」と、威しかくれば、「ハヽヽヽ、そんな事怖がつて、苦界が片時ならうかいな。同じ樣に座に並んで、殿樣顏してござれとも、行きかたは雪と墨、重忠樣の計ひとて、榛澤樣の今日の詮議、繩も懸けず責もなく、六波羅の松蔭にて、物ひそやかに義理ずくめ、さま〴〵と勞はりて、サア景清が行衛はと、問はれし時の其苦しさ、水責火責は堪へうが、情と義理とに拉がれては、此骨々も碎くる思ひ、それ程せつないことながら、知らぬ事は是非もなし。此上のお情には、いつそ殺して下さんせ」と、とんと投出す身の覺悟、持て餘してぞ見えにける。重忠榛澤を近く召され、「箇程心を盡せども、誠を明さぬ上からは、目通りで拷問せん、それ〳〵」と仰せ有る。詞の尾に付く岩永左衛門、「やあ〳〵者共、阿古耶めに水くらはす、用意々々」と呼はるにぞ、あつと答へ

の手並見せつけ、景清が所在ほざかして見せう。侍共やい、彼の女め、岩永が屋敷へ引け」と、例の粗忽を重忠押しとめ、「いや先待たれよ岩永、縄をゆるし拷問をゆるめしも、榛澤が私ならず、某が了簡、其上に今日の暮までは此方の計ひ、其元のお構ひない筈、入らぬ世話御無用御無用。こりややい阿古耶、今日もまだ白狀せぬ由、はて扨しぶとい、なぜ言はぬ。去ながら、それもなア無理とは思はぬ、義理と情を表に立つるが遊君の慣ひ、いかに責めらるゝが辛いとて、馴染を重ねた夫の行衛、つい應とも明されまいサ。さなきだに流を立つる女は、誠なき者と一むきに心得し輩もあれば、それらが譏もうたてく思ひ、又は同じ憂き節を勤める友朋輩の顔汚し、などと思うての事ならんが、此處をとくと合點せよ。景清が行衛存ずべき者なればこそ、搦め取つて詮議もする。有りやうに白狀すれば、忝くも鎌倉殿の御意を安んじ奉り、天晴の御奉公、萬人の譏を受けても、君一人の心に叶はゞ、其身の冥加惡しかるまじ。こゝを能く辨へて、サアさつぱりと景清が所在、此重忠に聞かせい」と、物和かに理をせめて、然もこたゆる詮議の詞、阿古耶は聞いて、「さつてもきびしい殿様、四相を悟る御方とは、常々噂に聞いたれど、何の仔細らしい、四相の五相の、小袖に留める伽羅ぢやまでと、仇口に云ひながせしが、今日の仰に我が折れた、勤の身の心を酌んで、忝いおつしやりやう、何ん〱の誓文で、

に、彼景清は一人當千、可惜しき武士、假へ搦め捕ればとて、無下に一命を斷つべきや。何とぞ彼が心を和らめ、源氏の幕下に付け置かば、勇者の胤を日本に、永く殘さん國の寶、臥龍先生が孟獲を七度まで助けかへし、終には蜀の味方となしつる、例をまねぶ寸志の忠義、景清稀に入り來らば、此道理を演說有つて、源氏に仕へ存命せよと、諫めの教はお僧の役、必ず賴み存ずる」と、敬ひ深く宣ふにぞ、轟御坊はつと感じ、「今に初めぬ秩父殿の仁愛、一見阿字の佛教も外ならず覺えさふらふ」と、歡喜の領掌なし給ひ、「はや御暇」ともぎどうに、出家氣質の濁なき、淸水さして歸らるゝ。秩父の郎等榛澤六郎成淸、遊君阿古耶を拷問の、時刻もかぎる未の刻、六波羅より立歸り、御門におろす囚人駕籠、簾を上げて引出す。姿は伊達の裲や、縛の繩引きかへて、縫の模樣の糸結、小褄取る手も儘なれど、胸はほどけぬ思ひの色、形は派手に氣は萎れ、筒に活けたる牡丹花の、水上げかぬる風情なり。榛澤六郎御前に出で、「仰せに任せ繩をゆるし、樣々宥め不便を加へ、尋ね問ひ候へども、何分景淸が行衞存ぜぬとばかり、外に出す口も是なき故、召しつれて候」と、披露半ばに岩永左衞門、つか〳〵と立出で、「ヤア不念なり榛澤、科人に繩も懸けず、其上見れば拷問に勞れたる氣色も見えぬが、エ、聞えた、扨は御邊が今日の拷問、生緩くやられしな。よい〳〵、明日は拙者が受取、さう〳〵家來任せにも成るまじ、自身

付き、もとより御坊は景清が檀那寺、心を許し參詣せまい物でなし、所を瞞すに手なしとやら、搦め捕つて出されなば、褒美は一廉、お寺の爲と存ずるから」と、言はせも果てず、「こは怪しからぬ致達の御仰、我眞言の密法は、五輪種子、周遍法界、鬼畜人天、皆是大日と說かれて、廣大無邊の大慈大悲、景淸來つて我を賴まば、一命にかけて匿ひは申すとも、搦め取つて出すなどとは、耳にふるゝも穢らはし。假しそれが曲事とて、沒收せられば傘一本、沙門の身に厭はぬこと」と、詞を放つて申さるれば、岩永も云ひがかり、「ヤアねちくさい老僧、大日やら大熱やら、それは存ぜず、景清が肩持達、後日に屹度沙汰に及ばん。旣に以て近い手本は五條坂の遊君阿古耶と云ふ女を、六波羅の松蔭に引出し、景清が所在を訊ぬる每日の拷問、昨日は拙者が承はり、今日は是なる重忠の當番、家來共に吩咐けて、憂き目を見すると云ふこと京中に隱れなく、則ち其松を阿古耶の松と、異名まで付くる程の大詮議、知られぬと云ふこと有るまい。事によらば法師の身とて、拷問せまいものでなし、轟坊を引きかへ驚坊にしてくれん。ヤアよしないお坊にかゝつて、御用どもを怠る」と、指したる事もなけれども、仕廻付かねば座を立つて、次の一間に入りにける。重忠法印を近く招き、景清が詮議の事、重忠が胸中口外に出さぬ事ながら、貴僧は格別、明かし申さん。平家の方にも誰彼と名有る弓取は多き中

鳧の脛短しといへども、是を續がば憂ひなん、鶴の脛長しといへども、是を斷たば悲みなん、民を制すること此理にひとし。されば治る九重に、猶も非常をいましめの、水上淸き堀河御所、當時鎌倉の嚴命にしたがひ、秩父庄司次郎重忠、禁裏守護の代官として、兼ねては民の公事裁判、私のはからひなく、道に曇らぬ十寸鏡、智仁の勇士とかゞやけり。同席に相並ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建立より、直樣都に押留り、重忠の助役と號し、惡七兵衛景淸が、所在をさがす邪智佞奸、表は忠義に見せかけて、己が遺恨をさしはさむ、心の底の二股竹、虎の威を藉る狐とは、きよろつく面にあらはれたり。當日の取次役、兩人の御前に出で、「淸水の轟御坊、御出なり」と披露につれ、大廣間より入り給へば、「はや〳〵是へ」と請ぜらる。法印重忠に向ひ給ひ、「平家の侍惡七兵衛景淸　轟坊に入り來らば、搦捕つて出せよと、先達ての御使者、尤平家盛の時節は、彼の景淸觀音を信じ、七十五里の境を隔てし、尾張の國より日參せしは、世の人の知る所、然るに壽永の戰に西國へ赴き、それよりは音信不通、よしんば忍びて觀音へ、參詣を致すにもせよ、出家法師の手に及ぶ彼にもあらず。搦め捕らるゝ仔細あらば、それこそは武家の役、出家には不相應、此儀を辭退申さん爲の參上」と、憚る色なく宣ふにぞ、重忠不審の氣色ばみ、岩永左衛門詞をすゝめ、「いや是は秩父殿の御存じなきこと、某が存じ

た、去とては能うは切つたぞ殺したぞ。此親が老に耄れ子に迷ひ、埒もない分別違ひ、恥の有りたけ吐出したに、おことが死んでくれたので魂がさつぱり、景清殿のお聞きやつたら、嘸嬉しかろ褒美であろ。今の立派な最後の體を、見せぬが残り多いはい。健氣な娘を持つたと思へば、心がいそ〳〵するはやい」と、死骸をしばし押動かし、「ほんに和女は死んだもの、生きて居る者のやうに、くよ〳〵と囈語、また愚痴未練が直らぬと、叱つてくれな笑つてくれな。最う如何もこたへられぬ、一生の未練納を、心のたけを泣かせてくれ」と、湛へ〳〵し涙の溜り、わつと叫びて撞と坐し、前後不覺に見えけるが、「ハッア左樣ぢや、誠に左樣ぢや、娘が最後の一言に、我身の納を知らせしを、浮世の塵に交はりて、神に仕ゆる齢もなし。神道より佛道に、赴く手本は聖德太子、今より法の修行に出で、四天王寺に參詣し。諸人に勸化をすすむるこそ、娘が菩提我身の爲、有り難し〳〵」と、差添拔いて髻打切り、末打立てて立出づる。箇程涼しき佛の道、何とて熱田の神垣と、隔てはあらじ此世の迷ひ、祓ひ給へ淨め給ふも、利益は同じ南無阿彌陀ぶの、六字は六根淸淨と、悟り行く身ぞ一三重　頼もしき。

第　三

隙かさず押隔たり、「ヤァ騒がれなお侍、其元の相手には此皺腕」と鍔元寛げ、拔かば切らんず勢に、氣を呑まれてぞ控へ居る。戸平次は深手ながら、しがみ付かんと身を悶く。起しも立てず乘つかゝり、ぐつと刺いたる留めの刀、女所爲には甲斐々々し。大宮司聲を掛け、「父が讓りの固意地、是までは見屆けたり、して其跡はなんと〳〵」「アイ此跡は斯樣に」と、持つたる刀の鋩を、咽にがばと突立つる。「オヽ左なくては叶はぬ筈、死損ふな立派にせよ」と、瞬もせず目もり居る。衣笠顏を振上げて、「アヽ有りがたや父上の、未練のお心翻り、健氣のお顏見て死ぬれば、親子の緣も切らぬと云ふ、大宮司が娘こそ、景淸が妻なりと、末世末代いはるゝは、我身の上の諸願成就、神の敎の高天が原、佛の道の極樂淨土に、今ぞ赴く嬉しさ」と、苦しみ包む笑ひ顏。阿古耶は詮方うろ〳〵涙、手負は次第に息弱り、今こそ娑婆の黃昏時、終には萎む夕顏や、五條あたりの白露と、消え行く身こそはかなけれ。父は歎きの色目もなく、「口論によつて戸平次を討つて捨てたる娘の衣笠、自害したれば算用濟んだり。此上にも言分あらば」と、苦り切つたる面色に、「ハテ相手同士死ぬる上は、此方に構はぬこと」、と歎に沈む阿古耶を捕へ、物をも言はせず引立て行く。大宮司は本意なげに見送つて、死骸に寄り、「ヤハ娘出かしてくれた、去りとては能う死んだ。エヽうぬ〳〵戸平次め、能う訴人しをつたな、好い氣味な目に逢ひをつ

狼狽へたか女房共〳〵」「エイ嫌らしい、女房とは誰が事、五條坂の阿古耶は景清が妾と、世間に隱れない中を、人聞きの悪い、女房呼はり置いてもらほ」「イヤ其筈ぢやあるまいがな、花扇屋のお內儀樣、打つて置くしやん〳〵を忘れたか。媒人の兄は何所へ往た、兄公々々」とうろたへ眼、源五にばつたり行當るを、はつたと睨め付け、「阿古耶を女房とは大きな僞、倚とても遁さぬ奴、此上は二人の女、連れ歸つて拷問する。サア〳〵大宮司娘を渡され、忝くも鎌倉殿の御代官、岩永左衛門が下知を受け向うたる某、身不肖の侍と侮つて、頤くひ違へ、後悔ばしせらるゝな」と、權威に任す理屈詰、返答もせず默然と、しばし思案にくれ居たる。「ヤア人にばかり物いはせ、うんともすんとも答へぬは、諚意を嘲る科人、其方とても遁しはせじ」と、詞あらゝに責めかゝる。老人ほつと息を吐き、膝を打つて、「ホヽウ左樣ぢや、愚痴に歸つた老耄、今眼が覺めた」と持つたる刀、娘の前に投出し、「倚も前大宮司通夏が娘ぞよ、父が今まで立てぬいた固意地、むだごとにせぬ樣に、合點したか狼狽へな」と、以前の未練に引きかへて、詞も涼しき目の色に、衣笠刀押戴き、「親の讓りの固意地、受繼ぐは娘の役、其固意地を見て置け」と、すらりと拔いて戸平次が、肩先ずつぱと切下ぐれば、うんと反氣に伏しながら、撓まぬ剛氣に武者振り付く。源五もさすが武士の役、刀に手をかけ支へん風情、父は

も心残れども、先も恩有る義理の道、立別れてぞ出でて行く。阿古耶は思ひの胸押下げ、「アア我ながら愚痴涙、なんとして泣いたぞ」と、心に心恥ぢしめて、奥の一間を窺へば、はや表には挑灯の、光も權威のはいく〳〵はい、戸平次は先に立ち、鬼の首を取つたる心地、「女房共〳〵、阿古耶は何處にぞ、代官樣がお出ぢや、奥のお客はなんとした」と、問へど返事もうろつく内、庭に入込み代官が、さも横柄にいかつ聲、「熱田の神職前大宮司通夏は何處に在る、かく云ふは岩永左衞門が家隷荒木源五と云ふ者、御邊の娘衣笠、惡七兵衞景淸に緣を組めば、お尋ね者の一類、尋ね問ふ仔細有り、急ぎ此方へ渡さるべし。違背あらば理不盡に踏込み、繩打つて連れ歸る、返答如何に」と呼はつたり。前大宮司通夏少しも驚く氣色なく、刀提げ娘を圍ひ、しづしづと立出で、「岩永左衞門殿の下知として、わが娘衣笠を召しつれて歸らんとは、景淸が所在尋ねん爲な、それならば無用になされ。西國落に別れてより、景淸が行衞ずんど存ぜぬ、隙費えを言はんより、立歸つて此通り、岩永殿に聞かされい。はれ御大儀で有つたな」と、嘲詞に荒木もむつとし、「イヤ知らぬとて知らせずに置かうか、それ戸平次引立てい」と、云ふに阿古耶が、「いや〳〵、彼方が御存じないと云ふ證據には妾が立つ、かんまへて聊爾せまいぞ。親方の戸平次殿」と、云ふに愕り氣疎貌、「こりや如何ぢや女房ども、親方とは何の事、

置け、しやん〳〵。シイ、奥のお客を迯がさぬやうに、御馳走申しや女房共、たつた今合所へ往て、褒美の十貫擔げて戻ろ」と、脩獨が胸算用、はき違ひたる足もとは、草履下駄やら雪駄やら、心も付かず走り行く。十藏跡を見送つて、「是々妹一寸延びれば尋延びると、僞りは僞つたが、宿の仕廻は思案が有るか」「アヽ兄樣には似合はぬ案じ、此間に衣笠樣、何處へなりとも落しまし、代官所へは潔よう、此阿古耶が捕らはれて、責殺されるがせめてもの、景淸樣へ心ざし、わしもお前の妹ぢやもの」「オヽでかしたり神妙なり、其心底を聞けば安堵、某は今宵の内、景淸に追著き件を語り、一時も早く都を遁さん。落著く所は知邊有つて」と、語ればちやくと兩の耳に、手をおしあてて、「アヽ是々、景淸樣の落著く所、わしに聞かせて下さんすな。聞くまいと云ふ其心は、如何なる火水の責に遭ふとも、性根亂れぬ其内は、隱し拔かうと思へども、心の底に覺えあらば、身のくるしさに氣も弱り、口走るまいものでもなし、わしやそれが悲しさに、乞求めても聞きたい知りたり夫の行衞うはの空、世界の女房の風上にも、置かれぬ私は因果人、お腹に宿した此嬰兒も、能々の業人、哀れと思うて下さんせ」と、忍び淚ぞはてしなき。十藏も心根を、不便としをるゝ氣を取直し、「ヤア最前の詞に似ぬ、未練の歎に隙どりて、衣笠樣にあやまちあらば、心の操皆むだごと。ぬかるな妹、十藏はや往くぞ」と、跡に

屋の商賣がならねば、呼屋の衆も迷惑、そこで味をやつたの、いえ〳〵此方の阿古耶にそんな客はござりませぬ、其上疾うから私が女房に引上げ、今で勤はさせませぬと、ぬつぺりとやつたが代官も賢い、兎角阿古耶を連れ參れ、直に尋ぬると手詰の詮議、此所が談合の要所、能う聞きや、是を幸におつと云うて、女房に成つてたもれば、景淸が詮議、マアそもじにはかゝらぬの、兄公左樣ぢやないか。それでも代官が呑込まぬか、其所に一つの上分別、此處が又談合の要所、あれ今奥へ往た大宮司が娘、阿古耶が代りに此奴を捕へて御穿鑿なされませと訴人したら、褒美は少なく〳〵錢十貫、それを資本に女夫づれで、きんごして遊んだら、面白かろでは有るまいか。十藏殿は小姑、妹聟の戸平次が、講釋さして置くまいぞや。サア此談合否か應か、應なら極樂否なら地獄、如何ぢや〳〵」と氣を焦つ。二人は目まぜに首肯き合ひ、「是は段々尤の御分別、何の是が談合どころ、あつと申せ妹、花扇屋のお内儀樣とは、氏なうて玉の輿」と、きほうて見すれば、「ム、ウ兄公好い合點、いや見かけに似合はぬ埒明ぢやはいの。サヤ阿古耶如何しやる」「さればいな、私ぢやとて、木でも石でも作らぬ身、まんざら憎うは思はねど、兄樣や母樣の、心を今まで氣兼の遠慮」「おつと讀めた、皆まで云ふまい、そんなら女夫に成る氣ぢやの」「はて扨、兄の十藏が水入らずの媒介」「ほんに左樣ぢや、祝うて三人打つて

極め、生れ付きの頑意地ごかしに、是程までは遣り付けしに、娘が誠の心底に、感じ入つたる今日の景清殿、尤とは思ひながら、父が心も思ひ分けて、衣笠を去つてくだされい、恥を捨ててお頼み申す」と、神に仕ゆる身ながらも、子故の道に踏迷ひ、胸の岩戸を引立てて、常闇の夜と知られける。衣笠は猶悲しく、「お年は扨も寄らせまいもの、それ程までにお心の、愚にも成るものか、親を人に笑はせて、子の身として嬉しからうか、思ひやつても下さんせ」「オヽそれ程のこと辨へぬ某ではなけれどな、儕等が爲め世話煎るに、親にも違ふ胴張者」と、氣を揉み焦つ老泣に、たぐり上げたる持病の痰火、せき上げ〱せき入れば、「それ〱それがお世話かうと、倍しの頑意地や」と、背撫でおろし、「まァあれへ」と、元の一間へ勞はれば、十藏兄弟明いた口、塞ぎかねてぞ呆れ居る。今まで萎れし戸平次が、樣子を聞いて氣はいそ〱、「是は阿古耶の兄公、好い所へ好うわせた、二人ながら近う寄りや、一大事の談合が有る。先高が斯うぢやは、代官所の侍が會所へおれを呼付け、抱への阿古耶を此方へ渡せ、景清が所在を責めさいなんで言はすと云うた、談合とは此所の事、阿古耶能う聞いてたも、兄公の前で言憎けれど、疾うから和女に惚れて居るは、其人をいとしなげに責めうと云ふ、所へおつと云うて如何遣られう。其上にたつた一人の奉公人、花代なしに屋敷へやつては、口を天井へ釣つて置

衣「オヽ左樣でござんす、いつまでも縁は切らぬ」「いや此親が是非去らす」十「いや去らぬ」と三方論議、更に果しもなき所へ、會所を戻る主の戸平次、何時にかはりてぐんにやり首、途方に暮れし其風情、思案中戸にさしかゝれば、奥には三人せり合ふ聲、大宮司の景清のと、噂ちらりと聞耳立て、鼻息もせず伺ひ居る。内には斯くとも白髪の父、「何時までかくと爭うても詮なき事」と、詞を和げ、「十藏殿、阿古耶殿、我一通りを聞いてたべ、衣笠もよつく聞け。惣じて世界の女の子は、生れし親の家を離れ、夫に任す身の上なれば、子とても親の儘ならず、去によつて、親の科を娘にかくる法もなく、娘の科は勿論親の身にかゝらぬこと、天下一統の式目、景清を聟に持つたるとて、鎌倉殿の御咎有るべき筈はなけれども、此處に一つの誤りは、景清西國に赴く時節、戰場まで女を具せんも如何なり、預け置かんと頼みし故、今の難儀は氣も付かず、うか／＼と預り置き、疑ひかゝる聟の縁、エヽ一生の不調法、悔しい事をしたなあと、破つたる茶碗をついで見るにひとしき愚痴に立歸り、そゞろに子供の可愛さ不便さ。鎌倉殿の祟にあはゞ、如何なる憂き目に遭はんも知れず、アヽ恐ろしやと思ふより、所詮我身の義心を捨て、衣笠に縁を切らさば、三方四方の爲よしと、思ひ詰めたる老の思案、臆病者の義理知らずと、笑はば笑へ共の爲、弓矢取る身にもあらず、長袖の身ぢやものと、得手勝手に分別

めた胸、變ぜぬが神道の第一、サア景清の一體分身、娘衣笠に暇をくれめさ、一家の因がきりたい」と、詞するどにこねかくる。十藏も恂とせしが、憎い心底、恥かゝせて腹癒んと、「オ、神道の一體分身面白し、我世渡りは軍書の講釋、樊噲を語れば樊噲が魂、張良を說けば張良が意氣、其理を以て七兵衛景清が性根に成つて返答する」と、老人が願先、顏突き付けてはつたと睨み、「神は非禮を受けずと云ふに、穢れ不淨の魂にて、頰の皮の熱田の糟禰宜、そつちから望まいでも、此方に添はぬ女房、去つた〳〵」と、詞も引かぬに衣笠娘、「イヤ推參な十藏、澤山さうに人の女房、去つた〳〵としこなし顏、しや本にをかしい。寄るも〳〵氣違の有る條、此衣笠は相手にならぬぞ」「相手にならうが成るまいが、舅が心見下げし上は、男のかうけ離別離別」「オ、此父が呑込むからは、如何にもさつぱり緣は切つた」「いよえ、なんぼ仰しやつても、景清殿は金輪際我夫、斯う言うたらてつきりと勘當、親子の緣を切らうで有らうが、親子の緣を切らうより、此首切つて下さんせ。夫故に死ぬる命、塵とも思はぬ、是程に思ふのに、景清樣の返答は、どうで有らう講釋殿」と、理に責められて十藏も、感ずる心に面を和らめ、「オオ出來したり女房共、其心底を聞いては、如何にも去れぬ、やつぱり元の女夫々々」「いや此な男は、ぐれり〳〵と心のそろはぬ景清、一旦舅がもらうた暇」「いや左樣言つても約束變改」

たれども、今の身柄の景清樣、お爲如何と心を隔て、時の拍子の言懸り、深うお隱し申せしが、衣笠樣聞いてたべ、景淸樣の御事は、今兄樣の御咄、鎌倉よりの詮議強く、都の住居も折惡しければ、暫し他國に身を隱すと、暇乞さへ言傳わざ、日蔭のお身のおいとしさ」と、語るも聞くも涙なり。父の老人十藏に打向ひ、「景淸ははや京地を立退き、行方もさだかに知れぬとな。べん〳〵と尋ね歩くも、正眞の闇に礫、幸ひかな、其元の形格好、景淸に似たる上、定紋の居わりたる其羽織を著されしは、我神道の一體分身、取りも直さぬ七兵衞景淸、此前大宮司が逢ひたい用事外ならず、娘衣笠に暇をくれ、夫婦の緣を切つてたべ、賴み申す」と差付けに、思ひこんだる一通り、聞いて驚く衣笠姬「父樣それは何仰しやる、お心の亂るゝ程御酒は上らず、そもやそも俄に狂氣もなされまいが、夫婦の緣を切らさうとは、國元で仰しやつたお詞とは天地の違ひ、わしやつんと合點がいかぬ」「オヽ合點はいかぬ筈、都に上り夫を尋ね、連歸らんというたはな、此父が虛ぢやはやい。世になき平家の討漏されに、緣に繫ぐは身の滅亡、切腹か遠島は鏡にかけて、いやゝの〳〵、義理も情も背中に腹」と、云ふに悲しさ遣る方なく、「日頃は義理も惠も有る、父上と思ひ暮せしに、何時の間に其樣な、卑怯なお氣に成り給ふ、淺ましさよ」とかきくどく。「ヤア〳〵くど〳〵と叶はぬこと、是でも非でも景淸に、緣切らさうと極

寢轉ぶにぞ、「オヽ何時までなりと氣根次第、勝手次第、勝手に〳〵、座敷へは差合ぢや」と、心を碎く言廻し、十藏何んの氣も付かねば、次の座敷に人待顏、「アレ未だ往なずぢやヱヽ辛氣、氣に喰はぬ座敷、べら〳〵とは勤めぬ」と、ずつと立つて間の障子、ばつたりさすがに衣笠は、おぼこ育ちの氣も弱く、何と詞をかけ造り、下の座敷と隔して、心を明かさぬうたてさよ。阿古耶は次へ立つや否、「時も時折も折、ひよんな所へ景清殿」と、縋り寄つて「ヤア兄樣、十藏樣、さつても似たり、横顏なら形振なら、瓜を二つ。其上に此羽織、如何して召して」と不審顏、胸なで擦るばかりなり。「されば〳〵、似たに就て今日は既に危い事」と、耳に口よせこま〳〵と、暫く語る其内に、垣間見したる前大宮司、娘引き連れ、「やあ〳〵聟殿、見付け申した、お隱れ有るな」と聲かくれば、衣笠も後に寄り、「是なう聞えぬ景清樣、如何程忍び給ふとも、手づから仕立てし此羽織、見違へて好い物か」と、身を引廻し顏を見て、「ヤア此方は今日の講釋殿か、ハツ恥し」と差俯伏き、しばし詞もなかりしが、「此羽織召すならば、景清殿のお行方、此方が知つてに極りし、わしに聞かせて給はれ」と、賴むにも又涙なり。十藏も重ね〳〵、取違へられ氣もとまぐれ、挨拶しどろに呆るれば、「いや〳〵兄樣合點が往くまい、彼方はな、尾張の熱田の大宮司樣、お娘御の衣笠樣、誠有るお方とは、常々噂に知つ

武士の行儀、其娘の衣笠が、何の卑怯な妬みが有らう。夫の噂の樣にもない、見ると聞くとのお女郎」と、心の蔑しみ穗に出づれば、猶も勤の氣質を見せ、「妬が有らうが鼠が有らうが、知らぬから構ひはせねど、素人女子の癖として、流を立つる身とさへ言へば、さもしいとのみ心の嘲り、口へは出ねど顏へ出て、はしたない本妻呼ばはり、本妻ぢや妾ぢやとて、夫を思ふに二つはない」「オヽ其思やる夫の行方、否やでも應でも知らさにや置かぬ」「こりや新しい、をかしいはいの、面々の夫の行方を、此阿古郎に無理に知れか」「まだしらぐしい彼の顏はい」「エヽつべこべと彼の口はい」と、互に募る女の意地、煙草の愛想も引換へて、二人が燃すゆらをの烟管、かつちかちく灰吹の、口もさゝけるばかりなり。折しも伊庭の十藏は、講釋の場の人達へ、不慮の難儀を遁れし上、景淸が情の程、妹阿古耶に語らんと、心ざしたる宵の間の、人目にかざす扇屋の、内に通れば下女小女郎、「是はマア久し振、珍らしい御出」と、言ふに阿古耶が氣の配り、尻目遣ひ簾越し、見馴れし羽織の紋所、兄十藏とは露知らず、顏は反向けし灯火の、景淸と見るよりも、惡い所へうとましと、思ふ心に思はず知らず、「まあく今宵は往んでく」と頭振る、「いや此兩人罷り歸らぬ、夜が明けうが日が出ようが、尋ぬることを聞かぬ間は、いつかなことにじらぬ、ヤアえいとこな」と床の間の、木枕取つて

都に歸りましますと、慥な便り聞きながら、終に一度の便宜もなし。そもじのことは豫てより、聞いて知つたる深い中、七兵衞殿のお身の上、御座り所も御存じならめ。姫御前は相互、語つて聞かせて給はれ」と、打付けに問ひ懸けられ、扨はと彌々心にをさめ、「其お尋は何のこと、七兵衞さんやら八兵衞さんやら、一座流れのお客の名、當座は覺えて居もせうが、跡が跡まで、それがまア、寺方か何んぞの樣に、過去帳に付けては置くまいし、わしや知らぬはいな。殊に深い淺いのと、微塵此方に覺えの無いに、そんな事聞きや遣る瀨がない」と、流行詞で紛らかす。父の老人側より引取り、「いや是は御尤、世間存ぜぬ田舍女、我胸ばかり合點して、藪から棒の尋ねやう、なんの有りやうを答へ召されう。斯く申す拙者は、尾張の國熱田明神に仕へ申す、前の大宮司道夏、これなる娘は衣笠とて、彼の七兵衞が連添ふ女、露程も隔て心ない中、前大宮司通夏とは、豫て沙汰にも御聞き有るべし」「ナアニそんなむづかしい、歌骨牌に有るやうな、永い名は今が聞初め、衣笠樣でも塗笠樣でも、知らぬことは仕樣ことがない」と、けんもほろゝに言ひ放せば、「そんなら如何でも我夫の、景淸樣は知らぬぢやまで。エヽさもしいぞや穢いぞや、流石は浮かれ女一夜妻、我心に引きくらべて、本妻の衣笠が、悋氣嫉妬の氣もあろかと、疑うての事ぢやの、慮外ながら熱田の大宮司、長袖とばかり思うてか、二腰差いて

へ捺せば濟むこと、留守ぢやとは吐かさいで、胴因果な猿松め、サア失せをろ」と先に立ち、膨れ頬して出でて行く。白波の、寄する渚にあらねども、こゝも流の假枕、跡なき夢はつい覺めて、送り迎ひの袖の露、伊達にふつ〱あこやとは、浮世に拗ねし戀の闇、照す廻しが挑灯に、それとしるしの花扇、主が許に立歸る。奥の座敷に只一人、待つも久しき宵の月、あやしの簾かけ造り、障子半蔀押明けて、隔てぬ中の親子づれ、前の大宮司通夏は、娘相手の氣晴し酒、人の氣を汲む小女郎が酌、「お待ちなされた阿古耶樣、今お歸り」と知らせるにぞ、國元までも隱れなき、花の都のお女郎、さあ〱是へ」と老人の、不束ならぬ挨拶に、樣子有り氣の一座とは、見て取る阿古耶が胸の中、上べの伊達の勤振、「ほんに浮世は味な物、こんな侘びた所さへ、色里の數に入り、遠い國まで隱れなく、阿古耶を見ようの呼ばうのと、心づくしに預るは、苦界するの身に取つては、忝いとも本望とも、萬の事はさし置き、飛んでも戻る筈なれど、心に任せぬ憂き節とて、立ち破られぬ先の座敷、斷りたら〲漸々今、遲いは赦しなさんせ」と、烟草吸付け差出せば、女中は烟管いたゞきて、「花も實も有る仰、先づ盃とも申さうが、父樣とても自も、尋ね聞きたい分有つて、心がせけば」と差寄りて、「平家の侍七兵衞景清殿、過ぎつる壽永の秋の頃、御一門の御供し、西國に下り給ひしが、御身の上に恙もなく、

てん〳〵舞ひ、お料理よ吸物よと、上を下へとかへして居るに、今頃戻つて、内外の者は何んに成れ、アレお手が鳴る、ア、イ。お林、ちやと往てたも」と忙がしがれば、「何んぢや、客がとれた、町人か二本か、喰ひ度い物喰うてずいぢやないかよ」「いえ〳〵歴とした旅のお方、お供の衆に問うたれば、尾張の國に去るお方、今度京へ忍びの御行き、内方の阿古耶樣を、聞き及んでのお望み、隨分御馳走申せと現銀の仕拂ひ、昨日の晩の丁字頭が、こんな小判に成りやした」と、一包差出せば、「こりや出來しをつた、天晴忠義」と、金に逢うてはほや〳〵顏、障子の隙より奥差覗き、「さうして阿古耶は座敷に見えぬが、こりや何處に何して居る」「いえいえ、阿古耶樣は晝過から、祇園の佐野屋へ送つて、それから直にいつもの淸水參り、ほんに奇特なおさんで」と、云ふを打消し、「何が奇特、嬉しがりもしられぬ觀音樣へ參らうより、此おれに靡きをつたら、なんぼ利生が有らうぞ。イヤ好い事を思ひ出した、淸水へ逆寄せして、戻る所引捕へ、日頃の思ひ晴してくりよ」と、言捨て出づる門口へ、町の歩使が「申し〳〵、何事が起つたやら、お代官のお使が、名主樣を會所へ呼付け、日の拔ける程叱つた上、花扇屋の戸平治を連れて來いと、焦立ての口上、サアちやつとござりませ」「ハテきよと〳〵しい彼の頰はいの。高が何ぞの言渡し、ちよぼいち張るな。畏つた、第一の宿成らぬ、心得たと、判さ

老母のお目にもかゝるべきが、世をも人をも忍ぶ身の、無禮御免と傳へてたべ。随分健固に又對面、お暇申す」と立出づる、袖にすがつて「なう暫く、心は千萬留めたけれども、忍ぶも且は智略の一つ。してく落行く先は何處、言ひ殘されよ」「さればく、今宵は上の醍醐に一宿し、其行先は又其處にての思案次第と思はれよ」「オヽ尤々、何をいふも、此處は途中恐れ有り。詳しきことは跡より追付き物語、我行くまでは必々逗留あれ。是れ斯うく」に耳に口、外には誰もきく水の、井戸を隔てゝ囁き合ひ、「先それまではさらばさらば」「オヽさらば」と、互の目禮思はずも、映る姿の水鏡、「それ十藏殿、其の顔が此顔と」「なう景清殿、其面體が我頬と、似たではないか」「似た段か、思へば半澤六郎が、見違へたるはハヽヽ」笑うて互に別れける、勇者は離別に歎かずとは、かゝる事をや 三重 ゆふ間ぐれ、物の黒白も見ぬあたり、小家がちにとすさみぬる、筆の跡には引きかへて、町の模様も風俗も、得ならず見えし五條坂、黄昏時を戀ひわびる、懸行灯の灯影さへ、白く咲きたる軒のつま、花扇屋と隱れなし。家名ばかりは人めきて、主人を問へば戸平次とて、こゝら名うての横著者、色と慾とを二道に、稼ぎ歩きて歸り足、表の口より喚き聲、「こりや何奴も店にけつからぬ、只た今日が暮れたに、何處へすつ込み臥つてをるぞ、竹め、林め」と呼立つる。下女も小女郎も所ずれ、「オウヲ結構な旦那様、内はお客で

我心底を打明け、緣者の因を結ばんと、わざ〳〵是まで參りたり、十藏殿」と、思ひ侘びたる面色に、餘りのことに呆れもせず、「扨は阿古耶を不便に思召す方よりと、老母が方へ度々のお心付も貴公よな、ハア」はつとばかりに差俯伏き、暫し詞もなかりしが、「エ、くやしや、此事を昨夕にも今朝にも存じたら、半澤が來りし時、我こそ上總の景淸に成り濟まして、仕樣模樣も有つた物、おそかりし殘念や」と、拳を握り身を顫はし、目を揩り擦するばかり。「なう其心底聞いたる故、逢はで行かんも本意なさに、是までは來たつたり。構へて〳〵我事は、心の端にも懸けらるゝな。骨柄と云ひ器量と云ひ、奉公すとも易かるべき身なれども、老母の末期を見屆けんと、諸人に面をさらし辻講釋、三錢五錢の志に命を繫ぎ、恥を忍ぶ親孝行、感じても猶餘り有り。阿古耶が緣につらなる我なれば、貴殿の老母は我母なり、七十に餘り給ふと聞く、此世の逗留末近し、起臥心を付けられよ。著古したれども此羽織、是を貴殿へ參らする、今まで贈りし合力は、塵塚に捨つる塵埃、泥に投げる石瓦に劣つて、恩にあらず情にあらず、是ばかりこそ景淸が、誠の心を染羽織、朝夕肩に打ちかけ、一所に孝行賴み入る。心せかずば立寄つて、

其時まで思ひ詰めし物語し、我惡念空恥しく、一生赤めぬ此頰を、燃え立つやうに覺えしぞや。知らぬ内はそれも是非なし、知つては片時も捨て置かれず、今宵立退くを明日へ延ばし、

段有る、一時に肝つぶすまい。今日半澤六郎が召捕に來りしも、御身が形格好、此景清に能く似たる故、其似たる故、某かねて思ふやう、天下の武將賴朝を狙ふ我なれば、却て我を詮議も嚴しく、用心も又さぞあらん。賴朝に心ゆるさせ、油斷を窺ひ討たんには、此講釋師をこまづけ、退引させず腹切らせ、景清運拙なく、切腹せしむる者なりと、書置を添へ置かば、すは景清こそ腹切つたんなれと、京鎌倉心ゆるし、油斷は必定、其虛を窺ひ討たん物と分別し、折々與へし金銀は、和殿を殺さん命の價とは知らざるか」と、聞いてぎよつとし、驚き顏の色ちがへば、「いやぎよつとせらるゝな、未だ驚くことが有る、花扇耶の阿古耶が兄の伊庭の十藏殿」と、いへば大きに仰天し、「してく私の本名、阿古耶と兄弟と云ふこと、何として御存じなされた」と、興さませば、「面體格好の似たる貴殿さへ、景清かと詮議有る我なれば、嚴しさを推量せられよ、都に足は留め難し、一先立退かんと思ふに付け、五條坂へ立越え阿古耶に出逢ひ、右の段々を語れば涙を流し、其講釋師甚内と申すは、伊庭の十藏と云ふ我兄弟なりとの物語、我も聞いて興さめしが、假初ながら馴染深く、子まで懷胎せし其中に、今までそれとは何故知らせざりし、其心では我事も、兄には咄すまじと尋ぬれば、大望有る御身の上、兄にも心置かれ、露ばかりも知らせずと、我をかばふ阿古耶が貞心を聞くに付け、我が禍を貴殿に塗らんと、

立てたる淸水の、賽錢箱へ投げこんだり。「なう其義心を見るに付け、彌々粗忽面目なや。此旨主人に言上すべし、又對面せんいざ去らば」と、一禮述べて立歸る。權威に募らず誤り入つたる六郎が、淳も秩父の家柄を、却て譽めざる人はなし。十藏跡を見送りて、「エ、花も實も有る武士や、萬一外の役人ならば、倚が粗忽を包まんと、何の分ち聞き入れず、今時分は後手に、オ好かぬことく」、こんな時は早く歸つて、母者人のお顏を見るが身の祈禱」と、一人呟き、「是は扨、小屋を粉灰に打ちめいだ」と、散りちろばひし木や竹を、拾ひ集むる折こそあれ、深編笠に世を忍ぶ、浪人めけども鰭有る男、菊水の邊に立ちやすらひ、「なう講釋殿く」と小手招き、「ヤ誰ならん」と、立寄つて差覗き、「是は御浪人樣、此頃は見えもなされず、今日は觀音の御緣日、定めて御參りなされうと、今朝から心待ち致した。今御參詣かお下向か。お聞きなされて下さりませ、私を惡七兵衞景淸ぢやと申して、重忠の家來半澤と申す者、只つた今參つて召捕らるゝ所、人違ひに極り歸りしが、御覽なされ、小屋も打ち碎かれ、お腰懸けられと申す所が無い」と、氣の毒がれば、「それ餘所ながら見申した、なう其惡七兵衞景淸とは身共が事さ」「エ是は思ひ懸もない、其景淸樣が何故に、去る秋お目にかゝりしより、御不便を加へられ、今頃拂底な金銀を、毎度々々何故下されたと肝潰せば、「いや未だ跡に段

けば氣もほどけ、扨はと安堵してけるが、飛びしさつて手をつかへ、「是は却て恐れ入つたる御詫言、日本一の剛の者と聞及ぶ、景清に似たる故、御疑に預りしは、身に取つて恥辱にあらず。重忠の御内に、誰あらん半澤六郎成淸殿、繩解いて下さる上、何を不足に一言のお恨み申すべき。殊更身の上御尋ね、申さねば結句憚有るに似たり、關原甚内と申すは今日渡世の假の名にて、誠は伊庭の十藏一幸と申す浪人者、一人の老母養育みの爲、面をさらす辻講釋、物給べなうと請はざるばかり、世に住む甲斐もなき身の上、御尋ねによつて物語、御恥し」と俯伏き、涙ぐみて見えにける。六郎下部に持たせたる鳥目、十藏が前に置かせ、「和殿古き文にも見つらん、龍も池中に在る時は、蚯蚓に類を同じうすれども、上天の氣を得る時は、勢ひ宇宙に溢ると見えたり。今浪人の世渡りは、何をしても恥ならず、立身出世は頓てのこと、隨分老母に仕へられよ。輕少ながら此鳥目、老母の方へ進上申す、必ず〳〵人違に、渡世の邪魔せし心付などと思はれそと、聞きもあへず、「いや〳〵、只今一錢でも申受けては、人違の勘忍代となり、詫言の料などと、雜人の口に懸けられては、貴公も我も一分立たず、無用なり」と、戻さんとせしが待てしばし、老母に下さるゝ志、突返しては不禮の至、申受けては快からず、ハテ何とせんかとせんと、あたりを見廻し、「それよく〳〵、此奉る觀世音、老母の二世を加護し給へ」と、側に

一人がかりは叶はじと、大勢四方を取廻し、亂れ蒐るを事ともせず、脛骨肩骨、當る所を幸ひに、力有りたけ人有りたけの、節を碎き手を碎き、心を碎いて凌ぎける。されども防ぐは只一人、終に大勢折り重なり、押へて繩をぞかけにける。物頭半澤六郎成淸駈け著くれば、組の小頭罷出で、雙方の働き具に相述べ、目通り近く引つすゆる。六郎立ち寄り、面體より形格好、とつくと見屆けなれとしつぺい彈き、棍棒からりと投捨てゝ、べつたり土につくばうたり。「扨こそ〳〵、早まつたることしたりな、似は似たれども、御尋ねの者にはあらず人違ひ、それ繩解け」と有りければ、捕手共ぎよつと互に顏見合せ、解きかねて立ちかねれば、繩付も共に驚くばかりなり。「ヤア關原甚内とやらん、繩懸けし間もなく解けといふ、嘸不審立つべし。我主人の相役岩永左衞門殿、夜前對顏の節和殿が噂、下河原にて辻講釋する甚内と云ふ者こそ、平家の侍惡七兵衞景淸に極つたり。月番なれば重忠の手より召捕り給へと有りし故、某を召され、召捕り來れ、去ながら世には似たる人も有る、粗忽の仕方すべからずと仰を受け、實否を聞きつくらふ其内に、組の者共手柄を爭ひ此仕合、彼等が粗相は六郎が誤り、手を摺り申す宥免せられよ。去にても一腰を帶しながら、上を恐れ刃向はざる神妙さ、ホウ働の健氣さ奥床し。甚内と云ふが實名か、名乘られよ、披露して爲惡しくは計らはじ」と、立寄つて繩解きほど

問へば隱れがない」「是れは〳〵忝ない、去ながら、名も家名も覺え憎い、筆がおらば貸してたべ」「いや筆は有合せず、其お持ちなされた扇子を鼻へ斯うお當てなさるれば、花扇つい思ひ出さるゝ」と、座興も老の律儀に受け、「此扇を鼻へ當てれば花扇、コリャ出來た、講釋なさるる程有つて、頓智發明覺えた〳〵、御禮は重ねて〳〵」と、娘をいざなひ尋ね行く。かゝる所へ、「捕つた〳〵」と聲高く、檢斷所の捕人の役人、ばら〳〵と駈來り、講釋小屋を追取り卷く。思ひがけねど豫ての覺悟、甚内床几をひらりと飛び、後の高垣小楯に取り、小屋の柱の節間近き、陣竹取つて押撓め、身構へし、「ヤア人違ひか名の誤か、講釋は致せども、召捕らるゝ覺えなし。上を恐れ奉れば、刃物に手は懸ねども、仔細を聞かぬ其内は、繩もかゝらず、サア仔細を言へ聞かん」と、八方睨んで控へたり。「ヤアこざかしき咎め、上意を背くか、仔細は御前で直に聞け。物な言はせそ、打ちすゑて引つ括れ」と一番手、十手振り上げ突つかゝる。さしつたりと飛びちがへ、歪めし竹の片手を放せば、眞額より片鼻かけ、はつしと彈かれ、眼暗んでたぢ〳〵、蹌ひ辿り引つかへす。二番手は叉鎗を、捕つたと突き出す狙ひを外し、沈んで裾を反ねさすれば、向脛をあいたしこ、眞逆樣にでんぐり返り、隙もあらせず三番手、棍棒取りのべ、卷いて捕らんと突き出す。心得たりと身をかはし、つゝと入つてすてつぺい、微塵に

それ縛れといふやいなや、がらり後手三寸繩、牢屋へついと引いて參つた、其處で供先がもやつき出した、彼處ではちよびくさ、此處ではぶつくさ、なんぞと聞けば、樊噲殿さへ彼の通り、況んや我等韓信を大將軍になさるゝこと、御無用なりと言うたら最期、だまれ〳〵と幾千萬の大將士卒、皆韓信が手下に付いた、何んと我身一人縛られて、大勢の口をとめ、韓信が下知を聞かせた樊噲は、力ばかりでない、大分別者ではござりませぬか」と聽衆も聞取り餘念なく、心空なる空かきくれ、俄に一群降りくれば、やれ大降りとゆふだちの、足もとまらず聞く人の、皆ちり〴〵に逃歸る。殘るは甚内只一人、邪魔な雨やとゆふ立の、跡晴れ渡る講釋小屋、又人寄を待ち居たる。降る雨は、とてもかくても凌ぎなん、涙の雨は晴間なく、凌ぎかねにし衣笠は、父大宮司に誘はれ、親子潛に古郷を出で、心ざす方そんじよそこと、音に聞きつゝ音羽山、清水を尋ね來りしが、側へを見れば、講釋小屋に人待つ風情、幸と立寄つて、「是れ物問はう、五條坂は何處ぞや、阿古耶と云ふ遊君の、所を知らば敎へてたべ」「ハア、是はお連も女中方、遊與なさるゝでも有るまい、ハテめんような人をお尋ねなさるゝな」「されば阿古耶と云ふ女に逢はで叶はぬ我々故、尾張から遙々尋ね參つたり」「はてそれは遠方から御大儀千萬、是れ此道を南へ行當り、左へ上る道が有る、それを一丁半程いて、花扇屋の戸平次と尋ね、阿古耶と

清水や、大慈大悲の眞如海、誓ひを結ぶ御緣日、其佛閣の下河原、菊水の邊の辻講釋、漢楚軍談三國志、講師關原甚内と、紙に記し柱にかけ、紙子の長も行き詰りし、浪人らしく一腰ぼつ込み、聽衆を引き受け見臺にかゝり、本引き開き素讀する。「此時漢王自ら丞相府に到つて迎ひ給ふ、大將軍を見れば韓信なり、樊噲色を失うて、御車の前に拜伏して申しけるは、韓信は漂母の食を乞ひ、市に胯をくゞりし者なり、今大將軍に拜し給はゞ、項羽聞いて大きに笑ひ、天下の諸侯も漢中に人なしと嘲らん、必ず止り給へと申しければ、蕭何走り出で、樊噲無用の舌を動すことなかれ、我れ不才なれども、丞相の職にゐて大將軍を薦め、事既に定つたり、樊噲を縛つて獄に下し給はずんば、諸大將皆不禮に倣はんと申しければ、漢王武士に命じて樊噲を縛らせ給ふと、扨昨日の講釋は漢楚軍談五卷目、張良が割符を以て、蕭何曹參兩人が、韓信を大將軍になされと進め申した所でござります。今日は其次、漢王壇を築いて韓信を拜すと云ふ下、扨只今素讀致いた樊噲が人柄は、各々方の思召しは、定て色眞赤いに頰髭荒れ、我儘氣隨の大力、日本で申さば、アノ坂田の公時か、公平抔が樣に有らうと思召しましよ、中々强いばかりでござりませぬ、智慧第一と言ふ張良、陳平にも劣らぬ大分別者と聞えました。時に分別と言へば、此本文のごとく、樊噲が韓信を大將軍に拜なさるゝことは無用なりと止めたる咎、

へるか、我等岩永樣の御蔭にて、知行にも召し付く筈、羨ましくば降參せよ。傍輩のよしみ、取次いで得させん」と罵つたり。景淸眼を赫と見開き、「逢ひたかつたに能うせた、僞ばかりには殺生も佛も入らぬ、手並は豫て知りつらん」と、大白黑氣の其勢ひ、長刀柄長く押取りのべ、微塵になさんと渡り合ふ。百獸の洞の内、獅子の暴れたるごとくにて、はらり〳〵と薙ぎたつる、其勢ひに岩永左衞門、人一番に逃げ失せたり。主人が逃げれば手の者共、影さへ見せぬ其中に、五郎一人が勝手は知らず度に迷ひ、狼狽へ廻るを引捉へ、「せんずやうもなき人非人」と、大地にぶち付けしつかと踏まへ、一捻ねぢてぐつすりと、首引拔いて突立上り、見れども假舍靜まつて、手ざす敵もなかりけり。よし〳〵今度は遁すとも、我が見込んだる一念力、岩にも入り雲にも乘り、鎌倉山に籠らば籠れ、山を劈き岩を破り、終には本意を達せんものと、長刀小脇に搔込んで、しん〳〵と出でて行く。道狹からぬ天が下、敵を助くる仁者の道、古主を忘れぬ義者の道、歩むも道の道ながら、誠の道は世々にひく、弓矢の道をしるべにて、行方定めずなりにける。

第二

「ヤア景清、我君を平家の仇、主人の敵と狙ひ奉るは、以ての外のひがごとなり。太政入道朝恩を忘れ、やゝもすれば天子を惱まし、民を苦しめし其積惡、後白河の法皇院宣を賜はり、平家を亡ぼせよとの 勅 諚なれば、平家の敵は身の奢り、我身を我身の敵とは知らざるか。良禽は木を見て棲み、忠臣は君を選んで仕ふ、心を悛め只今より、賴朝公に奉公せよ」と呼はれば、「ヤア賴朝に奉公せよとは何んの囈言、一言と吐かば捻り殺してくれんず」と頰齗をなし、「エエ口惜しや今度の供養、賴朝上洛したれども、斯く云ふ景清を初め平家の餘類を恐れ、御臺と世上へ思はせん爲、態と女輩を召連れたりと、薩摩五郎が注進を、彼が我を誘出す計略とは心付かず、嬉しや大意を達せんと、忠を一途に姿を扮し忍び入り、由なき骨を折つたよな。景清が心ざす敵は賴朝一人、臆病風引込んで、鎌倉に隱れ屈めば力なし。女輩本多風情、五萬十萬切つて罪作り、本望のはの字にも屆かず、先此度は返る〳〵、時節を待つて、賴朝が頭は景清が手裡に在り、かねて名殘を惜しんで置けと傳へよ」と、しんづ〳〵と立出づる、所へ手の者引具し、岩永左衞門哄と押寄せ、「ヤア不甲斐なし近經、景清を何故返す、手に餘らば左衞門が受取つた。薩摩五郎は無きか、あれ討ちとめ」と呼はれば、本多は左衞門に打任せ、皆々制して假屋に入る。身輕に扮裝つ薩摩五郎、飛んで出で、「なんと景清、五郎が計略段々とこた

すて歩み行く先の、幕をひらりと押上げて、裲襠漏るゝ押取刀、秩父の奥方玉房御前すつくと立つ。思ひ懸けなく景清は、又びつくりして立ちとゞまる。「ヤア〳〵唐綾、誰を見て景清呼はり、其景清どれ何處に」「ハアそれこそ」と敎ゆれば、「いや〳〵是は所の衆徒、あの扮裝が唐綾目にかゝらぬか。景清ならば平家に取つても、仁義を兼ねし勇者と聞く、我君を狙ふとも、尋常に名乘りかけ、神妙の働こそ有るべけれ。卑怯なさもしい姿を變へ、女計の此假屋へ、大人氣無う何んと來られう、必粗忽言やんな。是れ坊樣、今度の供養に賴朝樣は上洛なされず、此處は御臺所政子樣の御假屋、坊主の來る所でない、歸らしやれ〳〵、但し方角に迷うてか。ヤア〳〵大衆の馳走人、本多次郎近經道しるべせよ」と有りければ、はつと答へするする〳〵と立出で、「箇樣の御用も有るべきかと、疾くより木陰に待受けたり。我等本多次郎近經、賴朝公の御諚を請け、大佛供養の內、大衆方の御馳走、又猥なる仕方あれば、禁めも我等の役、方角に迷うての推參ならば道の案內せん、狼藉ならば計らふ旨有り、サア返答を承らん」と、空知らずしてにぢりかゝれば、「ヤア忌ま〳〵しい何の坊主、姿を變ゆるは一旦の計略、賴朝を討つに二つはない、上總の七兵衛景淸見て置け」と、頭を包みし袈裟かなぐつて捨てければ、扨はと二人の女も詰めかけ詰めかけ、眼に氣を付け油斷なし。近經しばしと奥を諫め、女房を制し、

目、しげ金物の大鎧、草摺長にざつくと著、上に衣の玉襷、袈裟を結んで鉢巻し、敵を冥途へ送りやる、十王頭の脚當に、我身を守護の毘沙門小手、重大の痣丸、脚緒長に結び提げ、跡に續きし女房の、心しめたる高褰げ、油斷せぬ氣は一腰の、鯉口早く拔きかけて、附き從ふともしら柄の長刀、小脇に搔込み見渡せば、廻廊諸堂こと〴〵く、家々の幕兵具を飾り、警固嚴しく見えたりける。音せで通らば惡しからんと、所々に大音上げ、「警固怠り給ふな」と、呼はつて斷通る。此處ぞ賴朝の假居と思しく、襞白の大幕、風に靡いて優々たり。「サア仕おふせし嬉しや」と、のッさのッさと步みしが、「いや〳〵内も用心さぞあらん、千里の馬も躓き、侮つて不覺をとらば一期の瑕瑾、不敵達は無益ぞ」と、汀のさきの小鮎を覗ふ忍び足、「待て」と一聲かけければ、さしもの景淸悔りし振返る。「なう肝の太い景淸、我君を討たうとは、溫か饅頭屋の女房と思やつたら、餡の外の食ひ違、誠は本多の近經が妻の唐綾、夕べ逢うた覺えてか、一寸も奧へは遣らぬ、返せ〳〵」「ヤァ小癪なり、女相手にする景淸ならず、すつ込んで居よ」と取合はず。「いや〳〵、其方にせいでも此方に成る」と、ずはと拔いて打懸る。詮方なぎなた取直し、鐏にて受けながし、結んづほどいつあしらへども、女に奇特の太刀さばき。「ヤア隙入る、面倒なり」と鐏取りのべ、ぐつとあてみに本多が妻、眩暈いてたぢ〳〵、打ち

が事、言ふこともう無い」と、汗水に成つて身を悶く。「言ふことなくば是れ見よ」と、左右を一度に腕がへし、ころ〳〵轉び打ちながら、「生擒には叶ふまじ、首にして連れ行かん」と、拔合せ、挾み立てゝ切りかくる。得たりや應と渡り合ひ、互に磨きし刃の光、月に嘯く春日野の、飛火を散して切りむすぶ。大日坊が頰顧、顧かけて切付くる、其太刀風に薩摩五郎、一人立では叶はじと、跡をも見ずして迯失せける。「エ、大腰脫け奴、討ちもらせし腹立」と、大日坊に乘りかゝり、吭のくさりをぐつ〳〵と、突きならす鐘の聲、「一イ二ウ三イ四ウ五ッ、早七ッか、八ッ九ッも我耳へは入らざりし」頓て店出す饅頭屋が、葭簀の蔭に忍び居て、疾くより窺ひ見るとも知らず、衣引剝ぎ袈裟もぎ取り、ずんぼろ坊主に剝ぎむくり、一色殘さず掻抱き、死骸を蹴散らし忍び行く。叔父の首切る其のかはり、名字の上總も言切つて、惡七兵衞景清とは、此時よりぞ申しける。女房葭簀を跳り出で、「扨こそ〳〵、景清と見た目は違はぬ、君を狙ふに疑ひない。斯う云ふ內も御臺樣の御前が氣遣、假屋へ往かうか、但し夫に知らせうか。いや景清が落先を、見居けて置くが肝心關門、饅頭屋が蒸立見よ」と慕ひ行く、留もよし又思案よし、健氣成りける三重。春日山、鹿立つ峰の朝風に、敵の榮華や散りぬらん、上總の七兵衞景清は、今度の供養に賴朝を、討つて濛霧を散ぜんと、扮裝つ衆徒の似姿、素肌にきたる伏繩

互に主君の御爲と、堪忍せしももう是まで、觀念せよ」と挫ぎ付く。「ヤア待て景清、些つと緩めて言ふ事いはせい。倚叔父を殺したらば、じうらいが好う有るまいぞ。近い證據は左馬頭義朝が子の源太義平、叔父帶刀先生義賢を殺した故、惡源太と異名を付けられ、六條河原で首斬られしを知らぬか。倚も我を殺したら、惡七兵衛と笑はれん、能う分別せよ」と減らず口。「オオ惡七兵衛は愚の事、鬼七兵衛、蛇七兵衛とも言はゞ言へ、何ともない」と腮に手を懸け、首捻切らんとする所を、薩摩五郎飛んで出で、利腕取つて引きのくれば、隙をあらせず大日坊、弓手の腕しつかと取り、うんと聲かけ景清が、兩手を二人が土に捻伏せ、「やい景清、いかに二相を悟るとも、薩摩五郎が此體は、合點が行くまい。大日坊と某、終に對面はせぬとも、書狀を以て牒し合せ、此度の大佛供養を幸ひ、賴朝を討たう、いざ往かう〳〵と某が進めたは、賴朝を討つではない、倚を先づ斯うせん言合せ、深い工思ひ知つたか。なう大日坊、我が出るを待ち兼ねたで有らうの」「待ちかねた段ではない、景清が名を聞き、貴殿も御出とは知つたれども、顏見ぬ内は幾瀨の案じ、書狀も岩永の御目にかけ、見え次第同道申す筈、幸ひの土產、サア繩打つて連れ行かん」「尤」と、腕捻廻すにちつとも動かず、景清〳〵と吹出し、「もう吐かすことそれまでか、死人に成つて物は言はれぬ、言うて置け〳〵」「ヤア死人とは誰

聞きすまし、立出で、「貴僧は大日坊にて渡らせ給ふな、我こそ只今岩永に頼まれ給ひし、上總の七兵衞景淸」と、聞いて俄に仰天顏。「イヤ驚き給ふな、悉く承はる、岩永に御返答は間に合せの僞か、眞實の御所存なれば手は見せぬ。御出家と申し、叔父甥のよしみを存じ、下手くろしう念に念を入れ申す」と、云はせも立てず、「扨々面目ない、佛祖冥理、いまの返答が眞實でたまる物か、否といへば卽座に命をとらるゝ、それ悲しいではなけれども、存へて善果を積まん僞、間に合はせとも〳〵、御一門の滅亡聞くとひとしく、案ぜしは和殿が事、健固の對面滿足せり。今宵此處へ來りしは、深い願ひ有つてのこと、打明けて語られよ、何れの道にも疎略なし」と、無二の詞に心解け、手をつかへ、「貴僧の僞にも平家は主君、たとへ出家の御身なりとも、敢なく賴朝に亡され給ひし鬱憤は殘る筈、あはれ景淸に力を添へ、賴朝が假屋へ忍び入る、手引をなされ下され」と、思ひこんでぞ賴みける。「オヽ易いこと〳〵、手引せん」と拔打に、はつしと打つをひらりとかはし、其手を取つて引つかつぎ、大地へ撞と打付け乘懸り、「ムウ叔父ながら實の入つた惡人ぢやの、懸替もなき弟の儕を勘當なされ、追拂はれし我親の忠淸殿は目水晶、ヤイ親程こそあらずとも、景淸が底の根性見ぬくまいか。最前かくと知つたるゆゑ、眞二つにとは思ひしが、叔父は親の孝も有り、禮義も有る、とかく云ふ中心を飜せば、

「オ大日坊か、身は御臺所の旅館へ參上し、只今退出申す、夜中只一人何方へ參らるゝ。元來和僧は平家の譜代、上總の忠淸が弟、景淸が叔父なれば、我君のさす敵、疾く誅せらるゝ筈の所身が取持ち、兄弟共不通致し、只今は平家の由緣なし。御疑はるゝ程の御奉公申上げさせんと、請合つて繫いだる首、何が打捨て、平家の餘類を尋ね、一手柄無うては、此左衞門まで虛言者に成る、隨分心がけめされ、ヤ其に付け和僧の甥の景淸、存へて此世に在り、及ばぬ仇を報ぜんなどと、かやうの時節心懸け、和僧を賴み來まい物でなし、さあらば快く賴まれ、潛に知らされよ。討つてなりとも搦めてなりとも、岩永が高名にせねば、武士道立ちがたし。其遺趣は、景淸に遺恨はなけれども、箕尾谷の四郎と云ふ者、景淸を付け狙ふと聞く、其箕尾谷に討たせては、根井の太夫が娘を我手に入ること叶はず。景淸を我手で仕廻ひ、箕尾谷にも鼻明かせ、根井が娘を我手に入れたさ、事を分けて賴み申す、合點か」「是は何より安い御用、些つともお心苦しめ給ふな。かやうな御用有らうとは存ぜず、我等が高名に仕らんと、工面致し置いたれども、其許元へ奉る、安堵なされ」と、懷中の一通取出し手に渡せば、「提灯もて」と火影に照し、見ては悅び讀んでは頷き、戴いて懷中し、「出來たく御坊過分、委細は其時、さらばく」。提灯參れ」とゆふ露の、草踏散らし通りける。後に立ちて景淸は、始終とつくと

の口、塞ぎかねてぞ見えにける。景淸五郎をかたへに招き、「聞かれたるか五郎殿、賤しき女の口すら斯の通りなれば、御一門の身の上を、世上の嘲弄思ひやる、主君の仇を報ぜんと、死すべき命を存ゆれば、死に増る恥を聞く。此山門に鏃矢幹を其儘置いては、末代平家の譏を殘す、賴朝を討つは、是を取捨てゝ後の事とは思はずや」と囁けば、「實も〳〵、口づから傳はることは中絕する折もあり、直に見するは情なし、というて夜の手業には取捨ても成るまじ。人間を窺ひ晝のこと」と、云はせも立てず、「ヤア まだるし〳〵、一心の眼力を以て捜さば、眞の闇も晝同然、幸ひ人も靜つたり、御邊の足首をつかんで差上げば、門の冠木に手は屆かん、それを傳うて二階へ上り、垂木を一々探して見られよ」「なう其段は御免あれ、御存じの我等眩暈病み、高い所へ上れば 忽 發る、地の上の働きは、何なりと指圖には背くまじ。アヽ聞いてさへふら〳〵と、目が眩ふやうな」と頭を抱へ、胸押撫づれば、「よし〳〵人は賴まじ」と、草鞋ぬぎ捨て身を固め、柱を傳ひ上らんと立寄る所に、上り大路の松蔭より、人聲足音高提灯、見え來れば、「折あしよ、なう五郎殿、やり過し後又こそ」と打つれ木蔭に忍びける。山門の內より只一人、長刀を杖につき、のつさ〳〵と來る大衆、雙方行逢ひ、それと見るより、「ハア 岩永左衛門殿候ふな、御家來にも仰付けられず、御大身のかろ〴〵しく、御自身の御勤御苦勞なり」と挨拶す。

んせ。左様に段々と惡行の積りつもつた果は、平家の今の態、主にも家來にも、頭を差出す者一人もない。此山門に手も付けず、其儘殘し置かるゝは、末代平家の惡逆を、人に知らせて嗜ません、世の見せしめぢやとの物語、私が樣な何にも知らぬ者でさへ、尤さうに存じます」と、それと知らねば女の口、齒に衣きせぬ長咄、餘所に聞きなす景清が、本意なさ悲しさ口惜しさ、胸も碎けるばかりにて、忍び涙にくれければ、なま中のこと問出して、五郎も返答あぐみはて、「得て過ぎた事には、かならず付けつ添へつが有るもの、なんの平家ばかりがさう惡うも有るまい」と言消せば、「いえ〳〵此樣な事ではない、まだ大それた惡事が有る、咄しましよ」「いやもう承るに及ばぬ」と、聞かぬ先から耳驚かす四つの鐘、響き渡れば、「あれ四つが鳴る、店仕廻ひ時、各樣も宿取つてお休みなされ、其處退いて下さんせ」と云ふを幸ひ、「過分過分」と立退けば、土竈に水打ち行灯消し、道具一つも取直さず、側への葭簀さら〳〵と引廻せば、五郎見かねて、「是女中、土藏へ入れた物を盜み取る世の中、それは近頃不用心、まそつと念を入れて置かれよ」と氣を付くれば、「いえ〳〵、盜人の徘徊したは平家の代の時、今の源氏の慈悲深い靜謐な世に、そんな氣遣ひ些つとも無いこと、戸ざさぬ御代とは今の時代でござんす」と、口も手元もしやん〳〵と、仕廻ひて別れ立歸れば、よしないことを又言うて、一度の恥に二度

夫し返答せず、五郎店借る追從に、「尊い寺は門からと申すが、そもじの風俗で饅頭の味も思ひやられた。見れば暖簾にも行燈にも書いて有る、家名は十一屋か、此心推量致した。饅頭を十買へば、一つ添ゆるといふ心で、十一屋と付けたのか、さうか〳〵」「眞に是も好い御推量、成程左樣と申したいが、此方の心は左樣でない、朝七つから店出して、夜の四つに店仕廻ひ、七つと四つの時を合せて、十一屋と申します」「是も尤、賴朝上洛召されしと聞く、付々も嘸ぞあらん。其外の參詣諸國の入り込、左程精出さいでは賣り居くまい。なんと斯程結構に諸堂廻廊以下再興し、肝心の此山門ばかり殘したは、心有つてか但しは始末か、音に聞いた程にもない、賴朝は吝い奴だ」と打笑へば、「いや〳〵、此山門は其昔、聖武皇帝樣と云ふ王樣の御建立なされたを、平家の惡坊主淸盛入道が、此大佛を燒いた時、殘つたは此山門ばかり、能登守敎經と云ふ大惡人が、大佛樣へ射懸けた矢が反れて、此山門の垂木に當つた、矢の根矢殼が今に在る、晝能う見さしやんせ。如何に怖い者が無い、惡事が仕たいとて、日本第一の佛樣を燒きくづすと云ふやうな惡人が、ま一人と有らうか。佛ばかりか彼の堂では、五百人八百人、此堂では千人二千人、人ばかりも四千人程燒殺した其報、火付の大將頭中將重衡、京鎌倉を引渡され、果は衆徒の手にかゝつて、七日暴され首切られた、其跡が山門の脇に在る、これも明日見さしや

らん」と、娘々も笑顔を作り、「隨分御無事で」「御達者で」「おさらば」「さらば」と立隔つ。唐土人も仲麿の、歌をしるべにふりさけて、今や見るらん春日なる、御笠の山にいづる月、空も五つになる鐘の、世上に響く東大寺、大佛供養も今日明日と、諸國の人の參詣を、待つや町筋狹しとて、山門の片邊、取葺屋根に置く露に、月の光も澄める茶の、暖簾の紋は釜敷に、土竈の煙絶間なく、買うて行く人賣る人は、女主の顔貌、むつくりとして味さうな、蒸し立饅頭買はしやんせ、世間に類は多けれど、歌には靑丹よしと詠み、奈良饅頭の餡もよし、殊更神の御誓ひ、慈悲饅頭の蒸し〳〵は、御笠の山に咽が鳴り、五重甑に立つ湯氣に、春日の里は賑へり。こゝに平家譜代の忠臣、上總七兵衞景淸、薩摩五郎信忠と云ふ者有り。一門御落命の折から、ともかうも成るべき身の、生は難く死は易し、長生して主君の仇を報ぜんものと、山林に身を委ね、時節を窺ひ居たりしが、今度大佛供養の爲、賴朝上洛と仄に聞いて、心を合せ隱れ家を、ゐでの玉水日は暮れて、急げど初夜になら坂や、饅頭賣る家の床几の端、暫し御免とたゞずめば、「是は何處より御參詣なされしぞ、夜に入りて御苦勞や、緩りとお休み遊ばせ」と、挨拶片手に煙草盆、「お二人ながら酒のなりそな御風俗、お嫌かは知らねども、所の名物、お慰に」と差し出す、饅頭より先づ女房の、笑顔ぞ一口喰はまほし。景淸は只一心に、術を工

「ハア御疑御尤誤り入つたり、根井殿、聟の不便も娘の可愛さ、子供等が流浪に換へ、所領に換へ、何しに包み申すべき。ア、淺ましや、神に仕へても凡夫心、今日のことを知らざりし。平家の一門都落の時、此娘景清と一所に落行かんと云ひしを、船に浮き波に伏し、憂き目にあはん不便さに、預けんと云ふを悦びて預りし其時、夫婦の縁切らせて、預かるか取戻さば、今の疑は受けまじきに、好い年をして智慧なしと、根井殿は笑ひ給はん、恥かしや面目なや」と、はらはらと翻るゝ涙を押ゆれば、「なう私も西國へお供せば一思ひ、なま中に預けられ、夫は生きて有りながら、二年三年便りもなく、捨てられし我が命、惜しいではなけれども、若しやと卑怯な心から、段々御苦勞させまする、赦して下され父樣」と、がつぱと伏して泣き居たる。「娘泣くな分別有り。なう根井殿、我先祖は尾張の國の造、明神を戴き祭りて千百年、假にも曲らず僞らぬ、誠を以て仕へし身の、大凡俗と等しく誓言立てんは、口惜しとは思へども、恥も人目も子供等には換られず、只今誓言立て申す、疑惑の念をはらひ給へ淸め給へ」とつい立上れば、「ア、暫く」と根井の太夫、走り寄つて抱き留め、「よしなき所望誤つたり、もう誓言に及ばず〳〵、今の悔の御一言、我心魂を貫いて、貴殿を疑ふは神を疑ふ勿體なし。とかく長居も神慮の恐れ、早速ながらお暇申す」「疑晴れてござらうか」「參る〳〵大宮司殿、再會必ず期あ

日此所通行せしを幸ひ、景清は和主が聟なれば、隱し置かんと我にも知らせず此仕儀に及ぶ、殊更景清、我君頼朝公を狙ひ奉る御敵、かたぐ見遁しては通られず、隱して館を捜されば、大宮司の浮沈たるべし、サア景清を出されよ」と、退引させず詰めかけたり。「ム、扨は聞き及ぶ根井の太夫殿よな、最前御息女、景清の妾なりと僞りも、問ひ落さん爲とは知らず、娘は悋氣に取込み、拙者は却て御息女に、景清が所在を尋ねんと存ずる所、いやはやこちらあちらの仕合、長々返答申すも旅行の妨、手短に申さう、平家の一門滅亡の後、景清はかた切つて參りもせず便もせず、此方の娘も懷しがり、若し在り所聞出されば、お知らせに預りたし」と返答す。「オ、一旦の陳じは尤、能く分別して見られよ。一樹の蔭の雨やどり、一河の流を汲んでさへ、人の情は捨てられず、況んや多年の聟舅、女房を預くる程の景清、便もせず參らずといふとも、誰か左あらんと思ふべき。鎌倉殿御不審のかゝらん時も、其分疏で濟むべきか、よい仕合で歷代の神職沒收せられ、子供の流浪笑止々々、此理を辨へず隱し通すか、根井の太夫惡い癖あり。斯樣のこと詮議しかゝり、云はずば可しとて搔い遣りには捨て置かず、館を捜さうか、但は隱し置かず、存ぜぬと言ふ證據、當社明神は云ふに及ばず、天神地祇を驚かし、誓言立つるか、二つ一つの返答あれ、「大宮司」と些つとも心赦さぬ面色、大宮司横手をはたと打ち、

う」と、愛想なけれど云懸り、「衣笠樣そりや卑怯な、慥に此處に居る人を、連れて來いとは、こりや悋氣でござんすの」「オヽ好い合點、さつきにから此胸の內、くら〳〵とにえかへる、本の妻ぢやも悋氣せいでは、とても悋氣と見らるゝからは、逢はせますことふッつりならぬ。詮ないことに隙入れずと、往なしやんせ〳〵」「ムウそんなれば景淸殿は、實正構うて置かしたの」「ハテ入らぬ念を入れる人、夫が女房と一所に居るが珍らしいか」「いや珍らしうはない、其一言を聞かう爲、サア女子共合點か」「心得ました」と一樣に、隱し差したる一腰の、鍔を鳴して聲々に、遁しはやらじと詰めかくる。大宮司娘を押圍ひ、「ヤア誰なれば女のざいに此の體は與がつたり、遁げ走りする我々ならず、仔細を語れ、名を名乘れ」「ヤア小癪なこと云はずとも、景淸を此處へ出しや、其上では言やらいでも名を名乘る」「それは無體、景淸は三年以來所在を知らず」「いや知らぬとは云はせぬ」と、爭ふ中へ根井太夫走り著き、娘を制し、附々を押沈め、「大宮司通夏と云ふは御邊よな、我等は根井の太夫稀義と云ふ者、是は我が娘、此度鎌倉をお暇申し江州に蟄居する、其儀は云ふに及ばず、過ぎつる源平八島の戰、和主が聟上總の景淸、箕尾谷四郞と合戰の勝負、それも聞き及ばん、其箕尾谷と申すは某が養子聟、是が夫、其場の恥辱面恥かしくや思ひけん、今以て行方知れず。夫を思ふ女心、景淸に遺恨を含み、今

まじりの惣髪、大小差いて、女中が一人付いて見える、あれが通夏樣衣笠樣、社々拜なされて、頓て此處へ」と敎ゆれば、「お姬樣聞いてか」「聞いたく、願うてもない首尾、待請けて詰開かう、ヤイ下々も乘物も、鳥居の外に待つて居よ。父樣お見えなされたら、此處にと申せ。未だ見えるには間も有らうが、其間に自もいざ神前へ」と引きつれて、一禮言はせ詣でらる。春色花漠々たり、鶯の百囀、擯俗の地無何の鄕、心自得すれば壽疆なしと口吟んじ、娘を侶ひ、花に誘はれ浮れ來る、前の大宮司、「掃除は誰ぢや、福太夫か、此頃逢はぬ、變ることもおりないか」「アいや別にかはることとも、それよ、たつた今旅の女中が、二人樣を尋ねて參られ、追付け此所へお出でなさるゝと申したれば、其間にお宮へ參つて來うと云うて往たが」「ハテ誰ぢやな、見えたらば逢ふまでよ、休めく。身は折ふしの他國あるき、近付も有る、尋ね來まい物ならず、娘を尋ねて來る女中は、ハテ誰ぢやな」「いや私でござんす」と、立出づる白梅、「イヤこなたなれば猶見知がない」と、親子いぶかる許なり。「そなたに御存じなされいでも、此方は景淸殿と譯有る中、お前の方に忍び有ると、折々の文玉章に、お二人の事能う知つてゐる。久々顏も見ぬ故に、はるぐ尋ね參りたり、早う逢はせて下さんせ」と、心せかせてうら問へば、父は驚く衣笠は、惡う呑込み早合點、「其景淸殿連れてござんせ逢はせ

を開く白梅は、父に誘はれ古郷を出で、先は近江の長濱へ、長道中を是ぞ此の、尾張の熱田と聞くからに、態とも參らまほしかりし、いざと付々お供にて、乘物つらせ參詣有る。「やい皆の者、此お社こそ、楊貴妃の所在を尋ね、唐土の方士が渡りし常世の島、蓬萊山とは此處ぞかし。奇瑞尊き御神樣、皆信取つて能う拜みや。それに付き、此お社の禰宜の娘は、景清が妻なれば、此處に隱れ忍び居まい物でなし。我夫の箕尾谷殿行方知れず、親子夫婦の名は有りながら、得逢はぬも又父樣の、知行差上げ住みなれし、鎌倉を立退いて此の如く、旅他國なさるゝも彼が所爲、景清と見るならば、搔きむしつても恨いふ心、其時は誰々も、力を付けて賴むぞやいの」と宣へば、「乳人の澤田が、「御尤々々、此人衆が一口宛喰ひ付いても、景清の一人や二人お氣遣ひ遊ばすな」と、力を添ゆれば、「オヽ嬉しい〳〵、大宮司と問へば隱れないとや、住家は何處、誰に尋ねうぞ。あれ〳〵彼處に人こそあれ、大儀ながら乳母問うて見や」「何の大儀」と立寄つて、「是れ物問ひましよ、禰宜殿なれば知つてゞ有らう、大宮司殿は何處ぞ、數へて下され」「ムウ扨は旅のお人か、大宮司と申すは我々がお頭殿、今では二人有る御子息は、夏茂樣とて今の代取、社の後な大門作りがそでござる。親御は通夏樣、近年隱居なされ、海山を見晴して濱面に館を建て、衣笠樣と云ふ娘御と一所に、あれ〳〵、あそこへ白髮

るゝ涙を袖に隱し、御前に向ひ、「先年系圖に書きのせ、上覽に入れたる悴行方知れず、不奉公者の親として歴々に立交り、座並を穢する恥かしきに、況て御臺所の御供恐少なからず、御掟違背仕るには候はねども、此儀は餘人に仰付けられ、某は本國に浪人の願、所領を差上ぐると申すは冥加なし。悴が安否を承はり居くるまで、暫く預け奉り度く存候」と、恐入つてぞのべにける。賴朝始終を聞召し、「子によつて親々の名をも上ぐるに、老人のこゝろづかひ不便なり。上洛の供を赦し、望みの如く、所領を預り置く上は、返すことも亦望みによるべし。浪人の住所は心の儘、勝手次第逼塞すべし。本多は後備へ、岩永は上洛の先手に進み、直に都にとゞまり、重忠に加はり、萬事沙汰せしむとも、指圖に背き、我意の仕方有るべからず。就中上總の景淸は、平家無二の忠臣、國士無雙と聞く、あへなく討たんも殘多し。兎も斬うも重忠と計ひ、穩便の沙汰あらまほしけれ。心得たるか岩永本多、罷り立て」と、簾中深く入御成り給ふ。佛法王法此君より、再び榮ゆる秋津國、盡きぬ惠みぞ　三重。月日立つ、春も漸くをはりの國、夏になるみや熱田の宮、聞えは人の國までも、隱れな高き御神にて、萬の願取分けて、惡氣厄難災難を、祈れば奇特をみやつこの、散敷く花を搔寄せて、神の御庭の朝淸め、散殘りたる木末より、土に春有る風情なり。春の旅、暖ならず寒からで、思ひ有る身も折々は、心

つての思ひ違ひ、をかしゝ〳〵」といはせも立てず、「オ其戰ひは壇の浦、船と陸との詞戰、俗にいふ川向の喧嘩にひとしく、箕尾谷四郎廣言放つて居たりしが、兵船一艘漕ぎ寄せ、上總の七兵衛景清とをめいて馳く、始の詞には似ざりけり、かい振つて迯げて行く。景清長刀押取りのべて討つならば、眞二つに成るべきを、能く〳〵の臆病者、刀物汚し、なぶり物にせんとや思ひけん、長刀小脇にかい込んで、箕尾谷が著たりける、兜の錣を取りはづし、てんがうまじくら無手と抓んでうんと引く、身を遁れんと前へ引く。互にえいやと引く力に、鉢付の板より引きちぎつて、輾けつ轉びつ口減らず、去にても汝恐ろしや、腕の强さと云ひければ、景清は又箕尾谷が、首の骨こそ强けれと、敵も味方も物笑ひ、なんと臆病者で有るまいか」と、嘲笑へば膝立直し、「其時の軍奉行は土肥の眞平、箕尾谷は大太刀、景清は長刀、手を碎いて戰ひしが、何とかしたりけん、箕尾谷太刀打折つて力なく、少し水際へ引き退く、臆したるにはあらざる故、御帳面にも其通り、記したりとの物語、御帳面が證據よ。但し貴殿は左樣の時、太刀打折つた軍は是まで、サア首きれとて切らするか、蒐るも引くも軍の習、畢竟の勝を克と云ふ、殊に景清世に存へ、君を狙ひ奉る風聞有り。吾倅又景清を附狙ひ、恥辱を雪ぐまじき物ならねども、それは後の沙汰、必々今の詞忘るゝな岩永」と、包む無念の目に洩れて、こほ

上洛し、萬麁忽なき樣に、心を合せ計らふべし」と宣へば、根井ははつと當惑顏、岩永左衞門進み出で、頭を下げ、「聊御掟を背くには候はねども、かゝる目出たき御上洛に、臆病の飛汁掛つたる老人と相役仰付けられ、心を合せ供奉仕らんこと、身に取りて不祥の至り、此儀は餘人に仰付けられ下されかし」と、根井の大夫を尻目に懸け、憚なく言上す。根井の大夫氣色を損じ、「ヤア口荒涼なり岩永殿、あつと申さうや否と申さうや、未だお請もせざる内、臆病のとばしり掛つたる老人と相役、不祥なりとの言上、オヽ推したり、我娘白梅を婦妻に所望ありしかども、愛甲の前司太郎が子を養子聟の契約せし故、承引せざるを憤つてのわんざん卑怯至極」と、はつたと睨めば、「ヤア左樣の私の宿意を以て、御用を妨ぐる岩永にはあらず、何と成りとも言はゞ言へ、臆病者の相役には、得ならぬ〳〵」「オヽそれも推したり、彼悴相州箕尾谷村の谷陰深く生立ち、熊猪は猫の鼠ともてあつかひ、かたの如くかけ鳥などはすれども、未兵法の奧義を知らず、弓矢鍛錬の後家を知るべしと、武者修行に出で、過ぎつる源平の戰、義經公の御手に屬し、實父愛甲の名字は勿論、我方へも未だ來らねば、根井とも得名乘らず育ちし箕尾谷村の在名を取つて、箕尾谷四郎國時と名乘り、「平家の侍上總の七兵衞景淸に出會ひ、少し汀へ引退きしを、引く矢不鍛鍊の者共が、臆病なりと取沙汰を聞き誤

有り。「重忠は佛智にも叶ひしか、我が思ふ如く造進せし條、嬉しや解脱の善根を植ゑたり」と、御嬉しげに見え給へば、近經はつと恐入り、「こは冥加に餘る御詞、主人重忠造營の功を得たること、偏に君の洪福によつてなり。太政入道淸盛は、伽藍を燒いて衆類を族滅す、君は伽藍を再興有る、天地懸隔の違ひ、恐れながら御子孫の繁榮極あるべからず。鎭護國家の御基、此上や候ふべき」と、祝し申せば一同に、皆萬歲と壽きける。大奧の間の廊下口、鈴の綱音なひて、重忠の奧方玉房御前、御座の間近く手をつかへ、「誰ぞお取次」と伺へば、賴朝御覽じ、「珍らしや秩父の妻女、くるしからず直に申せ、何事ざふ」と御諚有る。「いやお願は私ならず、御臺樣の御使、只今奧にて承れば、此度の大佛供養、かねて君御上洛との御事、御臺樣も御參詣有るべき御立願、くるしからずば御一所に、御上洛遊ばしたく思召し候へば、伺ひ奉れとの御事なり」と述べにける。賴朝打頷かせ給ひ、「今四海一統すといへども、木曾が餘類平家の殘黨、義經錦木戶が打洩され、隙を窺ふ此時節、迂濶に鎌倉は明けがたし。我は皆成就の後上洛すべし、此度は政子ばかり上洛し、供養を遂げ給へと申せ、さあらば玉房付添ひ用意せよ」と、御返答有りければ、玉房悅び、「是は〳〵お嬉しや、御臺樣も嘸ぞ御機嫌、お悅び申す爲」と、勇みて奧へ入りにける。賴朝重ねて、「如何に根井大夫、岩永左衞門、兩人共に政子が供し

壇浦兜軍記

第一

宵に起き旰けて食し、夜に念ひ朝に行ふ。故に虞舜の居は三年にして都をなし、仲尼の政は朞月自ら治るとは、今此時よ武將の中興、源の朝臣賴朝卿、順はざるを禁め賞罰を糺し、絕えたるを繼ぎ廢れるを起し、民を安んじ衆を和す。七德八敎谷七郷、賑ふ民の鎌倉御所、大藏の鄕に營居有る。さしもさばかり手强かりし、木曾の冠者義仲は、江州粟津の泡と消ゆ。平家は亡き名を文字が關に殘し、治國泰平天下の功古今に秀で、未だ家に先蹤なき大納言の大將、六十餘州の惣追捕使、日本弓馬の棟梁と成り給ふこと、併し佛神の擁護なりと、神祇を禮し百靈を懐け給ふ餘り、秩父の庄司重忠を以て、さいつ比より南都東大寺大佛殿を再興あり。旣に伽藍成就せりと、本多の次郎近經を以て訴ふれば、根井の大夫稀義、岩永左衛門尉致連、其外當日の諸役人、膝を屈し相詰めらる。陪臣なれども本多の近經、召しによつて百分一に寫せし伽藍の繪圖、御座近くしつらひ掛け、佛閣の高廣莊嚴の次第、外に記し捧ぐれば、逐一に上覽

えせぬ瀧口が、仁あり義有り道を立て、運も開くる傳兵衛おしゆん、昔に還る其噂、目出たき末の代々までも、筆に任せて三重書き殘す。

おしゆん傳兵衛近頃河原達引　終

とまであの様に、葬らるゝもあるものを、都の中でも指折の、町人の子があさましい、見苦しう死んだ體を巷に曝され、あと〳〵までも、恥をさらしのながら川、水の流といひながら、人間の身は船に似て、心の船長柁取の、悪いばかりで末の世まで、因果の業を果さぬか」と、悔み歎けば諸共に、抱き合うたるもろ涙、森の落葉や浸すらん。はや明がたの鶏のこゑ、こゝには無常の使かと、心せかれて死用意、とり〴〵急ぐ其所へ、一文字に驅け來る與次郎、南無三寶と迯出すを、兩手に取り付き、「殺さぬ〳〵もう殺さぬぞ。斯うあらうと思うたゆゑ、方方と尋ね歩行いた、様子が有る」といふ聲も、息切れしたる後より、瀧口左内喜左衛門を同道し、勘藏萬八に繩をかけ、十助に引立てさせ、「ヤア早まるまい〳〵、横淵官左衛門は役柄にて自由を働き、是まで殿の御用金を掠め遣ひ、多くの御金を引負ひしたる條、明白に死後に露見に及び、不屆たる旨お咎め強く、きやつは死にぞん殺しどく、これなる萬八勘藏も、彼が手さきを働き、贋金まで遣ひし子細、悪事の段々一々白狀、彼等を直に代官所へ引き渡し、久八が出牢を願ふばかり、安堵せよ傳兵衛」と、言葉の中より喜左衛門、「おしゆんは直に身請して、波風もなく事すんで、治まる家の花嫁と呼迎へん、喜べ」と、聞いてみな〳〵勇みたち、親のお慈悲とありがた涙、嬉し涙に喜びを、かさね重ぬる千代八千代、羽を伸す鶴や龜山に、音は絶

いふはいな」と、膝に凭れて泣きくどく。「ア、愚な事ばかり、逢初めた其晩から、互にほんの女夫ぢやと、約束したに違ひはない。斯く成り果つると知らずして、我命を助けんと、久八が身に覺えおき人殺しと成つての獄舎の住まひ憂き苦しみ、親人にお歎かけ、現世の罪に罪重ね、來世の苦患も恐ろしい。親の御恩を忘れぬため、家の定紋の小袖は血汐に汚さじ」と、とある傍へに直し置き、「サア夜が明けては恥の上塗り、此傳兵衛を御不愍が餘つてより、そなたを請出し添はせんとの親人の御情、思ひがけなく其晩に、事を仕出せし河原の喧嘩、詮方なさに官左衛門を切り殺したる身の災難、不孝に不孝重ねたる我が身の上、是まで不孝の詫言や、暇乞には拜むばかり、そなたも堀川の親兄へ、暇乞して禮云や」と、心を付けられ身を震はし、「エ、忘れて居たものを、ひよんな事言ひ出して、また泣して下さんずか。宵に別れて出るまでも、いかなる國のはて、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて夫婦となり、無事で暮せとかよ樣ののたまひしに、明日は死んだと沙汰あらば、さぞや母樣兄さんの、歎き給はんお命も、續くまいと案じられ、それが悲しい〳〵」と、わつとばかりに取亂し、前後正體なかりしが、やうやう淚おししづめ、「アレ〳〵〳〵、向ふのあかいは夜の明けるのぢやないかいな」「イヤイヤあれは在の墓所、亡者を葬る火の光、同じ人と生れても、疊の上で死んだ身は、あとのあ

打ち眺め、「ヤァおのれは手代の十助ぢやな」「オヽ二人とも動くまい、最前惜しい所を取り迯して是まで跡追はへて來た。此處で逢うたが百年目、傳兵衛樣の難儀も贋金も、おのれらが皆仕業、片つぱし引つ縛つて、ぐつと詮議を仕拔くのぢや」「ホヽォ斯うなるからは此方も死にもの狂ひ、それ萬八」「オヽ心得た、まうやけむちやに締殺せ」「してこい」と、右と左に萬八勘藏、武者ぶりつくを、心得二人を小手がへし、又組付くをすくひ投、挑灯消えて眞闇がり、どれがどれやら當所なく、聲をしるべに摑みつき、投げつ投げられ根競べ、迯ぐれば追つかけ追ひ戻し、堤をすべつてころ〳〵〳〵、落ちては上りあがれば落ち、命限りと摑み合ふ。斯くともしたより弓張挑灯、火かげにすかして、「ヤァ十藏、左内が來た氣遣ない」と、いふ聲聞いて驚く萬八、落ち散る雪駄かい握み、挑灯へばつたり當てれば火は消えて、俄に闇の心地する、畑を傳うて迯げ出す一人、何國迄もと追駈くる。こなたの森はしん〳〵と、傳兵衛は傍へに座をしめ、「サァこれが我々の露の命の捨てどころ、書きおく事も云ふ事も、もう此の段には皆繰言、二人手に手を取りかはし、死出三途を伴はん、心強く死んでたも」と、涙ながらに勸むれば、お俊も涙に聲曇り、「嬉しうござんす傳兵衛さん、夫があの世の樂ぞ、もう今生の言ひをさめ、女房おしゆんと唯一言、いうて殺して下さんせ。わたしもこちの旦那どの、傳兵衛さんと

しや歎かじ色ゆゑの、憂さもつらさも猿廻、おさるはめでたやな、婿入りすがたものつしりと〳〵、コレさりとは〳〵ナウあるかいな、さんなまたあるかいな、復とあるまい二人が中、涙耕す畑道、にげ來る二人おひくる二人、挑みあらそふ人影の、夜の目にそれと小さうも、さだかに見えぬ霧の中、見えつ隱れつかくれなき、二人が中は櫻木に、鏤められて唄はれて、色の譯しり戀しりと、仇名殘すが亡きあとまで、ほんにせめての思ひ出と、慰められつなぐさめつ、行くも涙の道もせや、二人が命はかなくも、森のこなたに 三重 著きにける。

聖護院の段

こなたの畑道いつさんに、迯げ來る勘藏其あとより、同じく走つて萬八も、吐息つき、「ヤレヤレ危い、ひよんな所で出くはしたる瀧口左内め、アノ又井筒屋の手代十助めも力強、なか〳〵手に合ふ奴等ではない」「オヽサ〳〵、何でもおしゆん傳兵衞二人の奴ら、引捕へてくれんと思ひの外の今宵の時宜、さて〳〵ひどい目に逢うた」「イヤまう此萬八が體は大方粉になつた、よもや此處まで追つかけても來はせまい。捉まへられてはむづかしい、マア息休め」と芝の上、へたばる後の樋の陰より、ずつと出でたる手代十助、隱せし挑灯差揚ぐれば、吃驚しながら顏

かゝる身となりて、智慧も器量も身代も、みな淡雪と消失せて、かはせし言のかず〳〵に、切るにきられぬ中々に、しがらむ緣のいとしや」と、云へば傳兵衛身を悔み、「人々の氣やすめと、猿廻しと姿を變へ、堀川を落ちては來たれども、人を殺した我身の上、存へる心は無い。そなたはあとに生殘り、母御へ孝行盡してたも、往んでたも」「コレ傳兵衛さん、そりや胴慾な氣の惡い、かゝさんや兄さんにも、替へぬお前を先立てゝ、生きて居さうなわたしぢやと、思うてかいな愚癡なぞえ。死なば一所と云ひながら、世にも尊き靈場の、森の中にて死ぬるなら、回向のかずに後の世の、闇も照さんこなたへ」と、手を引き立てゝ行く空の、星も逢ふ瀬の天の川、それにはあらで織女の、錦の小路綾もなく、過ぎる向ひにちら〳〵と、見ゆる火影は誓願寺、嵐にさゆる鐘の聲、「なまいだなむあみだ、世は定めなや去年の秋、閨の隙間の小夜あらし、アゝよい月と眺めてし、今宵は二人月影も、面恥かし此姿、わたしももとは突出の、ふと逢ひ初めし戀の種、エゝ儘ならぬ浮世ぞや。おいとしい此姿、わしと云ふもの無いならば、お内儀さんを呼迎へ、中よう添うてござんしよと、思ひ廻せば勿體ない、誓文わたしや未來でも、あなたを退けて浮氣はない、二世も三世も其先までも、どうした因果の緣ぢややら、堪忍して」とばかりにてわつとひれ伏し泣沈む、露の横顏吹きかはし、帶のしやら解け引きしめて、よ

で機嫌が直つたぞ、エヽヽ有るかいな、さんな又有るかいな、くるりと返つて立つたりな、立つてくれ。コレ〳〵〳〵立たしやませ、次手に日和を見てたもれ、よい女房ぢやに、〳〵、ナウあるかいな、さんなまた有るかいな。日よりを見たらば落ちてたも、〳〵、コレさうぢや〳〵、おさるはめでたやめでたやな」「サア〳〵、きり〳〵此家をさるまはし、まさるめでたう何時迄も、命全うしてたも」と、目は見えねども見送る母、言葉も此世で聞きをさめ、心の中の暇乞、あすの噂となりふりも、窶す姿の女夫連、名を繪草紙にしやうごゐん、森を當所に三重辿り行く。

下之卷

道行涙のあみ笠

なまなかに、染めて眞紅の縺れ糸、結ほれしより白糸の、昔を忍ぶ世の憂さや、今は浮名もたちばなの、花の姿もいつしかは、萎れがちなる目にもろき、露の命と消えに行く、深き契りの傳兵衛は、おしゆんを連れてをちこちの、たつきも知らぬ夜の道、あとやさきなる縺れ髮、むすほれそめし緣のはし、人目を包む編笠に、姿は窶し變れども、心の誓紙いつまでも、變らじものと手を取りて、心細くもたゞ二人、すぎし廓のきぬ〴〵に、送られしとは引替へて、「我ゆゑ

母ぢや人の今の言葉、御合點が參りましたか。エ、コリヤわれも得心してくれたか、合點がいたか。サ、、、合點したらば、どうぞ此場を立退く分別、しかし其形では人目に立つ、京の町を離れるまで、此編笠に顔隱し、幸の猿まはし、まめで二人が末永う、めでたう女夫に成り遂げる、門出の祝ひに此與次郎が、おはつ德兵衞が祝言の壽、こなた衆も別れの盃、イヤ〳〵祝言の盃」と、祝ふ唄ふも聲低に、「お猿はめでたやな、婿入姿ものつしりと、〳〵、コレさりとは〳〵ナウ有るかいな、さんな又有るかいな。オ、德兵衞樣こざんせ、餘りこな樣が來やうが遲いによつて、おはつ樣は顔眞赤にして腹立てて居やんすはいなう。コレお初樣、聟樣が盃をしたいといなう、機嫌直して盃を戴かんせ、コレ〳〵〳〵戴くなう盃を、さんな又有るかいな。ヤ、コレむこ樣、足で盃をさすはあまりつれない、夫では嫁ごが戴かんせぬはいなう。乾反らずとほんまに指してやらんせ、さうぢや〳〵、そこでお初がいたゞいた物ぢや、コレいただくなう盃を、さんな又有るかいな。コレ嫁後の晝寢もころりとせい、〳〵、ナコレエ有るかいな、さんな又有るかいな。コレむこ樣、あまりつれなうさんすによつて、おしゆんよめご樣が起きさんせぬはいなう、其處らでちよつと起したり、〳〵。エ、コリヤ、コリヤ、ヤイ、コリヤ、さりとは〳〵ナウあるかいな、さんな又あるかいな。起きたら互ひに抱き附きやれ、オ、それ

た傳兵衞殿より、今ではわれが方が手强うなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞ」と、いふもおろ〳〵母親も、「オヽさうぢや、我子が可愛い〳〵と、子ゆゑの闇の傍ひら見ず、是までおしゆんがお世話に成つた、恩も義理も辨へず、一途に中を引き別けうと、思うた母は義理知らず。賤しい勤する身でも、女の道を立て通す、娘の手前面目ない、そなたの心に恥入つて、何事も云ひませぬ、傳兵衞樣と一所にの、コレ死出の道連しやいなう。したがコレ申し傳兵衞樣、定めて親御樣たちもござりませうが、親の心といふ物は、人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも、子の可愛さに變は無いもの、おゆん傳兵衞と言はす氣か。若しやお前が死なしやつたと、親御たちが聞かしやつたら、悲しうて〳〵、此世に殘つてゐる氣は有るまい。何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ。娘が心に恥入つて、天にも地にも賭替ない、可愛我子を心中に合點して遣る親心、こゝの道理を聞き分けて、コレ拜みます賴みます」と、手を合したる母親の、子ゆゑに迷ふ闇の闇、二人は何と言葉さへ、淚に淚むすぼるゝ、血筋の別れ與次郞も、淚の雨の古布子、袖くひしばりしやくり泣き、「アヽ傳兵衞樣の歎かしやるも道理ぢや、又おしゆんの泣きやるも道理ぢや、母ぢや人の泣かしやるのも猶道理ぢや、道理ぢや〳〵、道理〳〵というては、根から葉から何時までも分からぬ道理ぢや。ガコレ二人ながら、

きどきと、サア〳〵あとを讀んで下され」「さきほど傳兵衛樣退狀と申して認めしは、此事申し上げたきまゝ、退狀と僞り書遺しまゐらせ候。何事も〳〵、先世よりの定まり事と御諦め下され候。申上げたき數々は筆にも盡しがたく候へども、心せくまゝ申し入れまゐらせ候。扨はさうした心か」と、驚く傳兵衛、親子はうろ〳〵、「エヽ氣遣な、コレ兄や、娘を內へ、早う〳〵」と、母があせれば與次郎も、戶口を開くれば走り行く、妹を無理に四人が、顏見合して溜息つき、淚は更に別ちなく、なんと言葉もでん兵衛が、泣く目を拭ひ、「一旦言ひかはした言葉を立て、共に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節、忘れはせぬ嬉しいぞや。思ひまはせば廻す程、われこそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、共に死んではお二人の歎、命ながらへ亡き跡の、とひ弔ひを賴むぞ」と、言葉にはつと泣出し、「そりや聞えませぬ傳兵衛樣、お言葉無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末のすゑまで云ひかはし、互に胸を明かし合ひ、何の遠慮もないしようの、世話しられても恩に被ぬ、ほんの女夫と思ふ物、大事の〳〵夫の難儀、命の際に振捨てゝ、女の道が立つものか。不孝とも惡人とも、思ひ諦めコレ申し、一所に死なして下さんせ」と、隱せし剃刀取り直す、「マヽ、マア待て、待ちをれやい、是で死ぬると命が無いぞよ。コリヤ何の事ぢや、とんと分からぬやうに成つて來たはい。殺しに來たと思う

ひかはした詞を誠と思うて、迷うて來たが無念なわい口惜しい」と、齒を喰ひしばる男泣、恨を聞くも隔る戸口、心はさうぢやないじやくり、「オ、さぞ腹が立と、道理ぢや〳〵、マアとつくりと氣を鎭めて、退狀を見て下さんせ」「オ、それでよい、長う物言やんな屑が出るぞ、傳兵衞、おれが讀んで聞かしたうても、皆目おれは祐筆ぢや、サア〳〵早う」と封じめ切り、突付けられて目にたまる、涙を拂ひ、「ナニ書置の事」「ヤアなんぢや書置」「コレ〳〵兄正直な、吃驚する事はない、そなたは無筆私は盲者、書置ぢやと讀違へ、狼狽さして門へ出で、娘を存分にせうとの工。そんな虚言は喰ひませぬ、サア〳〵ほんまに讀まつしやれ。コレ〳〵與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや」「オ、呑込んでゐる、こゝにはおれが蔕ばり付いてゐる、サア早う讀め。物こそはよう書かね、聞く事は無筆ぢやないはい。サア〳〵讀んだ〳〵」「是までの御養育、海山にも譬へがたき親の恩、ことさら不自由なる御身のうへ、何とぞ首尾よう勤を脱れ、世を樂に過させまし候はゞ、せめて少しの御恩報じ、孝行の片端にも成り候はんと、それのみ朝夕祈りまゐらせ候處、二世までと云ひかはしまゐらせ候傳兵衞樣、思はず此度の御身の難も、皆我ゆゑに候へば、今さら見てゐ候ては、女の道立ち申さず候。不孝とは思ひながら、共に覺悟を極めまゐらせ候」「母ぢや人、どうやら風が變つてきた樣な」「サイナアわしも胸がど

と、言ふもがた〳〵胴震ひ、「コレナア兄様、わしや表にゐるはいな、ヤア其こわ色おいてくれ、そんな事喰ふおれぢやないはい。母ぢや人〳〵、傳兵衛がおしゆんを殺しに來たゆゑ、今表へ立て出した。おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され。加勢〳〵」と、うろ〳〵〳〵うろたへ騒ぎ、母親も、「何ぢや傳兵衛の加勢、ム、まだ外に同類でも有るのか」と、探り寄つたる傳兵衛がそば、「コレ〳〵おしゆん、顫ふ事はない、兄や母が付いてゐる、マア氣を鎭めや」と撫でさする、背中の手障り合點ゆかず、「コレ〳〵與次郎、どうやらコリヤ娘ではない様な」「ヤア闇がり紛れに材木が紛りやせぬか、此方つかまへて居て下されや」と、探る手先に火打箱、がち〳〵震ふ付木の光り、「コリヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや」「おふくろ、兄御、エ、面目もない此姿」と、猶も小隅に屈みゐる。「コリヤヤイ、其やうにしを〳〵して見せて、おいらを欺して、おしゆんを突かうとするのか、其手は喰はぬ」と、懐より一通取出し、怖々ながら傍に寄り、「コリヤ傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれぢやによつて、妹まで難儀する。それでさつきに妹に得心さして、退状が書かして有る。コレ是を見い、これぢやによつてモウ〳〵〳〵、おしゆんが方に殘心氣は離れて有るはい」「ム、、スリヤお俊が其のき状を」「コリヤどき状ぢや〳〵」「エ、其心とは知らず、云

の分るやうに、書いてやるがよいぞや」「アイ〳〵此狀にとつくりと、御合點の行くやうに、あに樣、此文お前からお渡しなされて」「よし〳〵、此狀さへあれば千人力ぢや、マア〳〵母ぢや人も落著かしやれ」「とやかう云ふ内九つまへ、お前も奧でまう寢やしやんせ」「ソレ〳〵今夜こそゆつくりと、心よう寢るであろ。兄もそなたも其處に寢や」と、奧底もなき隔てをば、押明けてこそ入りにける。「サアおしゆん、こちらもこゝに往生いたそ」「アイ」とおしゆんが共々に、暫し此世を假蒲團、薄き親子の契やと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更けゆく鐘も哀添ふ、頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れの云ひかはし、死なば一所と傳兵衞が、忍ぶ姿のしよんぼりと、彳む軒は目覺えの、慥にこゝと門の戸へ、障る合圖の咳拂ひ、聞くにおしゆんは飛立つ思ひ、上る枕もうちはづす。與次郎は側に高鼾、心も共に行燈の、ともしび吹き消しさし足に、心急くほど明きかぬる、戸口のかけがね表にも、「おしゆんぢやないか」「傳兵衞樣、よう逢ひに來て下さんした」と、云ふ聲寢耳に與次郎が悔り、起きると明ける門の口、妹が姿も暗紛れ、捉へる袖の振合せ、おしゆんと心得傳兵衞を、無理に引きこむ取り違へ、戸口を内からぴつしやり引立て、「コリヤこそ突きに來をつたぞ、おしゆん必ず外へ出まいぞや。戸口はおれが押へてゐる、門にゐるは傳兵衞ぢや、おのれを入れてよいものか」

む頼む」と正直一遍、母の心と兄の言葉、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸のうち、所詮死なねばならぬ身の、此場を脱けて其上でと、心一つに思案を極め、「嬶さん、兄樣、お二人のお言葉よう合點致しました。殊に又傳兵衞樣、つい一通りで逢うた客、深い譯でもないはいな。しかし勤の習ひにて、人の落目を見捨てるを、廓の恥辱とするはいな。とても末のつまらぬ事、わしや得心をさせまして、品よう譯の立つやうに」「イヤ〳〵其やうに譯立てると言やつても、あつちに得心せぬ時は、それ〳〵、往にがけの駄賃馬で踏殺し、アヽイヤ〳〵、無理殺しに仕ようもしれぬ。コリヤ滅多に嚙合はされぬ」「オヽ兄の云やるとほりぢや、そなたに怪我でも有つては、傳兵衞殿とやらも難儀、思ひ切るのがあつちの爲、わがみに心引かされては、つい捕へられるは知れた事、退狀を遣つたら、そなたの事も思ひ切つて」「切れるとも〳〵、遠い國へでも影を匿したら、身を遁れまいものでもない」「ソレ〳〵むつかしかろともひと筆。兄、硯箱取つて遣りや、サヽ早う〳〵」と母と兄、言葉にいなもなき顏を、隱す硯の海山と、重なる思ひのべ紙に、筆の立所の後や前、涙に墨のにじみがちなる胸のうち、書き遺すとはつゆ知らぬ、與次郎が傍から、「コレ其やうに長たらしう書かずとも、つい退きますと書いても濟みさうな事ぢや」「イヤナウ書いたものはあと〳〵まで殘る物、男の去狀と同じ事、とつくりと譯

其夜から傳兵衞の行衞もしれず、其相方の女郎はおしゆんといふ事、お上にもよう御存じで、親方の方へも色々と御詮議が有れど、是も行衞が知れぬと云ひ切つて、今探めて有る最中ぢやと、とりぐ〳〵の噂評判、おりやもう聞くたびにびく〳〵する」と、聞くほど迫るおしゆんが胸、其夜の起りも皆わしゆゑ、何處にどうしてござるやら、心もとなさ逢ひたさも、言ふに云はれぬ此場の品、いかゞと胸も塞りし。母は一途に娘の可愛さ、「コレおしゆん、何にも案じる事はない、併し突詰めた男氣で、ひよつと此方の内へ來て、刃物三昧でも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに寢られぬまゝの物案じ、世間にたんと有る格な、心中やなど仕てくれたら、此母は目界は見えず、兄はアレあのやうな臆病者、若しもの事が有つたらば、跡で母はどうせうぞ。袖乞物もらひに歩いても、そりやもうひツとつも厭やせぬけれど、そなたの體に凶事でも有つたら、おりやモウ直に死んで仕舞ふぞや。若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てゝはと、つまらぬ義理を立てぬいで、年寄の此婆に、つらい目見せてたもんなや」と、可愛さ餘る親心、「アヽなむあみだぶつ」も涙聲。兄ももと〳〵、「コレおしゆん、今母の言はるゝ通り、何の義理もへちまも入らぬ、退いて仕舞へば赤の他人、またおれも氣にかゝつて、好の飯さへ喉へ通らぬ。母ぢや人の氣休め、僕が腹助けぢやと思うて退いてたも。や、や、賴

お方もあり、羊羹、饅頭、生魚、近所隣へさう〳〵裾分も仕られねば、鯛赤貝の類は横町の鮓屋へ卸賣、モ案じる事は微塵もないぞや。それにまだ〳〵氣の毒なは、此家主が此家を居なりに買うてくれぬかと頼まれる。ヤレ厭やの〳〵、アヽあた世話な家持よりは金持が、遙ましでも有らうか」と、母に案じを掛けさせぬ、虚八百さへ一貫に、足らぬ節季の言譯を、いふ下稽古やこれなるべし。うそとは知れど老の身は、子に從ふが習ひぞと、機嫌よげに頷き、「オヽそれ聞いて落付きました、ガ落付かぬは娘が事、此間も親方が、おしゆんを預けに來て云はしやるには、コレ傳兵衛殿といふ客の事で、ちと內に置かれぬ事が有る、たとへ傳兵衛が尋ねてござろとも、おしゆんが歸つて居る事は、包み隱さねばならぬぞやと、くれ〴〵も云はしやつた」「サアわしも其入りわけを聞いた故、おしゆんが心根を思ひやり、思はず涙が、ドレマア火を點そ」と棚の隅、こて〳〵取り出す行燈の、火影も漏るゝ暖簾ごし、「おしゆん〳〵」「アイ」と返事もしを〳〵と、思ひ惱し顏容、「マア〳〵こゝへ」と小聲になり、「門の戸はかけて有る、見る人も聞く人も無い。方々で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩は、殺人はわがみの客の傳兵衛殿なれど、大恩受けた久八と云ふ者が、代に捕られて往たげなが、其場に落ちて有つた小柄が、カノ傳兵衛殿がお屋敷から、拜領した小柄ぢやゆゑ、天命遁れず御詮議最中、なれども、

はマアそこまで、精が出るほど有つて、きつう手も廻り出した。もう〳〵何處で彈きなさつても、恥かしい事はない」と、聞いて笑顔のかたをなみ、又明日といふしほに、おつるは立つて歸りける。母を大事と油斷なき、身すぎも輕き小風呂敷、肩に載せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前、與次郎は息急き門口から、「母者人今戻つたぞや」「オヽ兄戻りやつたか、さぞひもじかろ。茶も沸いて有る、膳もそこにして置いた。オヽとくよ戻つたか。今朝から子猿めが親を尋ねて喧しい、ちやつと傍へ遣つてやりや」「アイ〳〵さうでござんしよとも。ソリヤちやつと乳を呑ましてやれ」「イヤナウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるにつけ、わしが此の長々の病氣も、いつ本復する事で有らうと思へば、疲れの上に猶つかれる。僅な弟子衆の餘情やわがみの働きで、この養生がなる物かと、思へば藥も毒となり、母ではなうて子供の爲には、呵嘖の鬼と思はるゝ。鬼は冥途に有るものを、つれなの老の命や」と、身を悔みたる咽泣、哀れにもまたいぢらしゝ。「アヽコレ母ぢや人、ソリヤ何を云はんすぞいなう。其樣にひそやかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入りした米屋の息子殿から、永々おふくろの煩ひで、嘸かし勝手も惡からうと云うて、雪か花かと申すやうな白米の仕送り、店々の旦那衆からは、何なと用が有るならば云うておこせ、もし出養生さしますなら、幸ひな隱居所も有るほどにと云うてくる

け」「ハア」

堀川の段

おなじ都も世につれて、田舍がましの薄烟、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手縺れ氣縺れを、保養がてらの藥風呂、煽ぐも我を澁團扇、目さへ不自由な暮しなり。「おつる樣、待遠に有らうなア、そして何やらのさらへで有つた、オヽそれ鳥部山、アリヤじたい心中事、會にでも彈くのなら、お前は女子の方、おしげ樣は男の方、掛合ひに唄ふがよいぞえ。ドレ〳〵おしげ樣の代りに、わたしと掛合に唄ひませう」と、おいてひく手もしをらしき。「唄女肌には白無垢、上に紫藤の紋、中著緋紗綾に黑繻子の帶、年は十七初花の、雨に萎るゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黑綸子に色あさ黃裏、二十一期の色盛をば、戀といふ字に身を捨小舟、どこへ取りつく島とてもなし、鳥部の山は其方ぞと、死にに行く身の後髮、ひく三味線は祇園町、茶屋の山衆が色酒に、亂れて遊ぶ騷合、あの面白さを見る時は」「イエ〳〵しをれがない。あの面白さを見る時は」「あのおもしろさを見る時は」「よし〳〵、染どのそなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこ付けて、忍び逢うた事思ひ出す」「けふ

のないためのお計ひ、そこをよう聞分けて、止まつて下さりませ」「それ聞きわけぬにもなければども」「そんなら落ちて下さりますか」「夫ぢやてゝ此死骸」「ハテ跡は我等にお任せあれ。おしゆんさまも此所に長居して、人目にかゝつては、傳兵衛さまの爲にならぬ、早う内へ戻らんせ。序に傳兵衛さま、こつそりと送つてやらんせ」と、言ふにおしゆんも心急き、「サア〳〵サア傳兵衛さん、早う退いて下さんせ。もし死ないで叶はぬ其時は、わたしも一所に死出の旅」「ハテサテおしゆんさま、お前までがそんな事、千の萬のと言葉數云うてゐるうち隙がいる、何をうじ〳〵、早う〳〵」と、せき立てられて傳兵衛は、心ならずも遁れ行く。星の光に後影、見える間は延び上り、やれうれしやと始めて吐息つく、折から向ふへ萬八が、しらども引き連れ走り寄り、かくと見るより悔し、無二無三に締めかゝるを、ひらりとかはして身繕ひ、「方人つれたる泥坊めら、久八が手並を見よ」と、左右前後を相手どり、手を盡したる手練の働き、コリャ叶はぬと萬八はじめ、這ふ〳〵逃れにげて行く。勘藏が訴へにて、所の代官捕手引具しかけ來り、「勢州龜山の御家來、横淵官左衛門を切り殺せしと、注進あつて召捕りに向つたり、尋常に繩かゝれ」と、呼はる聲に久八が、科をわが身に引きうけて、捕手の前にどつかと坐し、「人を殺せば覺悟の前、御苦勞ながら」と手を廻せば、早くも掛けたる縛り繩。一囚人引

ぬ覺悟、親人さまの御歎も、さぞかしと思ひはすれど、此期になつては詮なき繰言、不孝の段段、よきやうに詫してたも」と、又取り直すを久八は押止め、「河原に喧嘩があると聞いた故、お前の事が心もとなく、おしゆん樣諸共走つて來た。人を殺せば死ぬるとは、尤の事ながら、喜左衛門樣や、これなるおしゆん樣の、歎かしやる心をも思ひやつて、邊に人の居ぬこそ幸ひ、早う此場を立退いて下され、サア落ちて下され」「久八さんの云はんす通り、喧嘩と聞いて胸騷ぎ、かういふ時宜も有らうかと、脱けて來たこのおしゆん、わたしが事から起つての、人殺しの科何とせう。さういふ事なら死ぬる覺悟は道理ながら、親御さまの歎きや、わたしが悲しさを推量して、どこの山奥いづくの浦にも、遁れるだけは迯げ隱れても、どうぞ死なずにくださんせ。死ぬる事ならおまへ一人死なしはせぬ、わたしも共に死ぬ覺悟、おまへを先立てわしが身が、一日生きてゐられうか。親孝行と氣を入れかへ、未練卑怯な心をも、ちつとは持つて下さんせ」と、身を投伏して泣きゐたる。「サア親への不孝やそなたの歎き、思はぬにはあらざれど、人を殺して此傳兵衛、存へる所存はない、止めずと放して殺したく」「はてさて聞譯のない、おまへの恩に成つた此久八、悪い事云ひはせぬ。たつた一人子のお前を、家の血筋と喜左衛門樣の大切がり、後先見ずの不了簡も出ようかと、おしゆんさまの身請なさるも、悲しい事

されいで、腹立つまゝのぶち打擲、武士に似合はぬ篤されかた」「ホヽオその金が出來るくらゐなら、贋金のぐら事騙はせぬはいやい」「スリヤあの八橋の鍔の折」「オヽ是なる中賣勘藏、手代の萬八と肌を合せ、三百兩物したのぢやはいやい」さてこそさうと傳兵衞が、無念に無念重る思ひ、睨みつけたるはら〳〵涙。官左衞門はせゝら笑ひ、「ハヽヽヽ、ホヽヽヽ、口惜しいか、大聲あげて常吠えろ。腹一ぱいさいなんだ、あとで息の根止めてやる。これが此世の泣納め、泣け〳〵ほえろ、大べらぼうめ」と立ちかゝり、又踏みかゝれば、もう是迄と官左衞門が、肩先すつぱり切下ぐれば、勘藏は氣も狂亂、「ヤレ切つたは」と呼りながら、一散にこそ遁げて行く。深手ながらも官左衞門、拔合せて切付くれば、ちやうど受けとめ、鋩鋭にちやうちやう〳〵、危かりける有樣なり。痛手に堪へかね官左衞門、河原へどつさり倒るゝを、疊みかけて切りつくれば、殘念無念のうめき聲、のた打ち廻るをなぶり斬、數ケ所の疵に官左衞門、狂死こそ心地よき。をりから來る人影に、既に自害と傳兵衞が、覺悟の刀取直すを、「ヤレ早まるまい傳兵衞樣」「マア〳〵待つて下さんせ」と、聲かけられ、「ヤアさういふは久八おしゆん、そなたの事を根に持つて、最前より官左衞門が非道の打擲、堪へるだけはとこらへしが、どうもかうも成らぬ時宜になり、胸に餘つて手にかけたれば、人殺しの此傳兵衞、すぐに此座で死

衞門は、汝が出入屋敷の重役人、身が惚れたと聞かば、おしゆんと手を切り離れべき筈なるに、親喜左衞門までが一つになり、身請して內へ引きずり込み、官左衞門に鼻明かせんとは、言語道斷憎き仕方、おのれといふ色男が有るゆゑに、おしゆんめに振附けられた腹いせに、思ふ存分さいなんだ其あとで、息の根止めてこますのぢや。たとへじたばた騷いだとて、所詮埒の明かぬ事、我手に合ふおれぢやない、諦めて泥水喰へ」と、雨の溜りへどうど投げ、「あた忌ま忌ましい」と、鍬平足に踏み附け蹴飛しさいなむにぞ、傳兵衞も齒ぎしみ齒ぎり、無念の胸を撫でさすり、「イヤ何官左衞門樣、此傳兵衞は卑しい町人、蹴られても踏まれても苦しからねど、此脇指の小柄は、殿樣より拜領したる祐乘が作の三疋獅子、この小柄を、御家來の身として、土足に掛けても勿體なくもござりませぬか」「ヤア置け〱いふな、たとへ以前は殿の物なりとも、おのれが手に渡つたからは、素町人の家の道具、踏んだとて蹴たとつて、何の勿體ない物か、小柄ぐるみに踏みにじつてさいなまん」「オヽ此勘藏は元より小柄に掛合ない、おのれがやうな愚鈍な奴は、鰛飩ぶみにしてこまさん」と二人して、踏むやら蹴るやら、河原へ投げ付け踏付けられ、「エヽ餘りといへば非義非道な官左衞門樣、出入屋敷の重役人と、無念を堪へて手向ひせねば、附け上つたる非道の打擲、さほどおしゆんに執心ならば、夙くにも身請はな

アそこな蚊蜻蛉、假令人目無けりやこそよけれ、大きな聲で吐かすなやい。贋金の吟味がしたうても、所詮わが手に合ふ此勘藏では無いはいやい。あた忌まくしい」と踏飛す、足首取つて拂ひのけ、「心得がたき官左衞門樣、かゝる惡者を手に附けて、何ゆゑ此傳兵衞に狼藉をさせ給ふぞ」「ホ、オその子細云うて聞かさん、汝が親喜左衞門が身請して連歸るおしゆんを、待伏して引つさらへ、擔げて退かんと最前から、待つて居た此官左衞門、駕籠に乘つたはおしゆんぞと、思ひの外に傳兵衞、サヽヽおしゆんは何處へ片付けた、サヽそれ吐かせ、ぬかせく」と嵩高なり。こなたは故と逆はず、「イカニモおしゆんは親共が身請を今夜中に致して連歸るべき筈なりしが、御國より急の御用金申し來り、おしゆんが身請は明日と約諾致し置き、親共儀は瀧口樣の御旅宿へ先刻參上、これによつて某事も、跡より唯今參りがけ、瀧口樣もあなた樣と、御判談も成されたかろ、早々御歸宅然るべし、身も親共が待ちかぬべし。心急かれ候へば、御先へ參り候ふ」と、言捨て立つを引き止め、「何處へく、一寸も遣ることならぬ。スリヤ身請は明日へ延びたとな、いまくしい、手筈違つた今夜のしだら、己れに知られたからは、此儘では戻されぬ」「オ、さうぢやく、そ奴を還していけ口叩かれては、此方とらが身は破滅、いつそ旦那一思ひに」「オヽサく、この官左衞門も其の了簡。イヤ何傳兵衞、此橫淵官左

名に高き、四條河原も冬ざれて、川風寒く吹きすさび、往來もなみの石ばしる、水音までも夜は猶、最としん〳〵と物凄く、曇る空より我胸も、戀路に暗む官左衞門、萬八勘藏引き連れて立止り、「何でもおしゆんを引さらつてと出かけた所、たいこ持の久八めに邪魔されてさんざんの仕合、すご〳〵と戻る所、汝等二人に行き逢うたこそ幸ひ、今夜中に請出して、喜左衞門めが連れて戻ると吐かしたおしゆん、此河原に待ち合はして、面を隱して引つ擔げ、何處へなりとも退く了簡」「ホヽヲそれよごんす、何か無しにお前のだんびら、ずばと引き拔いて閃つかせたら、他の奴等駕籠を投つて逃げるは定、そこで件を擔げて退くのぢや、萬八ぬかるな」「オツト合點ぢや呑み込んだ、もし邪魔する奴はしらども賴んで片付けさす。我等にお任せ、ひと走り往て賴んで連れてこう」「コリヤ出來た、そんならちつとも早いがよい、走れ〳〵」に萬八は、逸足出して驅り行く。かゝる工の有りぞとは、知らぬ井筒屋傳兵衞は、わが家へ戻る辻駕籠に、道を急がせさしかゝれば、「そりやこそ來たは」とぬつと出で、提灯ばつさり切り落せば、駕籠舁ども、わつと驚き逃散つたり。「コハ狼藉」と駕籠よりも、飛んで出でたる傳兵衞が、顏見てびつくり、「ヤアわりや傳兵衞か」「お前は横淵官左衞門樣。ヤアおのれは中賣勘藏め、よくも〳〵何時ぞやは贋金を摑ましたな。おのれに逢うて此詮議がしたかつたはい〳〵」「ヤ

人知れず、引つさらつて退くより外の思案はない、さうぢや〳〵」とつぶやく所へ、奥より此方へ出て来るおしゆん、物をも言はず官左衛門、じつと小脇にひん抱かへ、駈出す後へ久八が、「どつこい遣らぬ」と引戻せば、「邪魔ひろぐな」と踏飛す、足首執つて久八が、縁より下へ眞逆様、踏み付け〳〵踏みのめされ、命から〴〵官左衛門、這ふ〳〵迯げて立歸る。皆々此方へ走り出で、「テモ好いざま好い氣味」と、笑ふ折から走つて来る手代十助、「唯今瀧口左内様より急の御使」「トハ氣遣はし」と喜左衛門、狀箱取上げ、封押切つて讀み終り、「お國許より急ぎの御用筋申し来る、急に談じたき筋あるによつて、只今旅宿まで来いとの此文體、何御亭主、身請の事を今夜中に埒明けてと思ひしに、今聞かるゝ通の譯なれば、私は是から直に御出入屋敷の御役人の許へいぬる程に、御用筋の濟み次第こゝへ戻つて、明日は早々後金おこして埒明けましよ。傳兵衛は跡に殘り、何か相談極めて戻りやいの、皆の衆賴みます」「そんならお歸りなされますか」おさらばさらばと聲々に、仲居が見送る前垂の、あかりを照し出でて行く。

中之巻

河原の段

道を立てゝ、男俠の濡髪に成つての頼もしい今の入譯、忝なうござる、嬉しうござる。そんなら斯うしませう、此身請の一卷は、おぬひどのに預けるから、御世話ながら突込で、世話やいて貰ひませう、是では道も立ちましよがの」「スリヤわたしが言葉を立て、身うけの世話させて下さんすか、エヽ忝ないと禮云ふ場なれど、濡髪の長五郎が預りました、請負うたぞえ、必ず今宵中に其身請を」「ホヽオ違はぬ證據、おしゆん女郎をこゝへ呼んで下され」「アイ〳〵」あひから樣子を立聞くおしゆん、傳兵衛は親のお慈悲とありがた涙、おしゆんを連れて出る久八、「思ひがけない親旦那、ざつと捌けた御取捌」「ホンニまう拜んで居やんすおぬひさん」「オヽわしや厭いの、おしゆんさん、世話するは濡髪が役、これでわしも立ちやんした」「ざつと臺詞が治つた、サア〳〵是から奥へ行て酒にせう」「ほんに〳〵旦那さん、さうぢやいな」唄兎角浮世はいろぢやえ、騒ぎにつれて打連れて、入るや其夜も後夜近く、奥からそつと横淵官左衛門、樣子立聞きこなたへ出で、「あの喜左衛門めが今夜中に、おしゆんを請出しをるとは思ひがけない事、兎角爰の亭主めも、幇間の久八めも、傳兵衛が贔屓して、身どもが詞は取合はぬ。いつそ親方を直に呼んで逢ひたいとは思へども、三百兩の身請の所へ、此百兩ばかりでは所詮埒の明かぬ事、國許へ云うてやる間もない急な事ゆゑ、金の才覺難儀至極、いつそおしゆんを

喜左衞門樣は慈悲深い生れ付、エヽ惡うも育たぬ風體、不便な事と呼込んで、こちが成長の話を聞き、讀み書き算用の出來るを取柄に引上げて手代格、エヽありがたい忝い、どうぞして此恩をと、商賣に憂き身を窶し、一つ呑んだ酒も止め、煙草は固より鼻紙は、紙屑籠から取り遣ひ、足袋はかず頭巾きず、十八年が間惣嫁一つ買はどこそ、花の都に住みながら、芝居は何をするものやら、親方大事家業大事と精出したが、御一家衆の目に留り、先喜左衞門殿死去の後、此跡式を立てかねぬ其方と、家の娘にめあはされ、我名も直に喜左衞門と改めて、大名高家のかけやとは、成上つたるわしが果報、其後悴傳兵衞を產み落したは、女房といへど昔の主なり家筋と、心一杯介抱したれど、十年以前につい往生、わが子ながらも傳兵衞は、此家の眞の血筋と、大事々々が餘つて甘く育てしが、親の眼を眩まして、多くの金を傾城買に遣ひ棄てる身持放埓、どうぞしたら直らうかと、心を痛め暮せしが、つくづく思案した上で、それ程あれが好いた者なら、おしゆんを請出し、女房に持たせてやろ、添はしてやろ、マアどれほど染み付いた中かと、やうす見るため親ながら、よい年しての揚屋這入、もし傾城は持たされぬなどと選り嫌ひして、心中事の世話物になど作られるやうな、無分別などした時は、井筒屋の血筋はとんと絕えはつる、それが悲しいと、また不便が餘つてよりの急の身請、おぬひ女郎の

ひ、こりや何ぢや」「イヽエわしやぬひぢや無い、濡髪の長五郎ぢや。おしゆんが身請は此ぬれがみがさゝぬ、アイぐつと長五郎が邪魔するのでごんす」「イヤこれ、此方が身請して連れていぬるといふおしゆんに、何ゆゑ邪魔しめさるぞ」「サイナ身うけを待つてもらひませうといふ譯は、あのおしゆんには傳兵衞というて、深い間夫がござんす。それを又何してわしが世話やくと思はんしよが、其傳兵衞樣にはわしもちつとした譯がござんす。それぢやによつて、おしゆんさんと傳兵衞さんの中を裂たがると思はれては、わしが女が立ちやんせぬ。金輪際世話やいて、おしゆんさんと添す氣、それ故男伊達のぬれがみの長五郎になつて頼みます。こゝを聞分けて、おやぢさん、マアその身うけ止めて下さんせ、頼みました」と立役の、せりふも所の徳ぞかし。おそめは手を打ち、「あつぱれ女子ぢや、富十郎が女伊達其處退けぢや」と、いそいそすれば、此方は仔細聞き屆け、「此親父がよい年をしての色狂ひと、一通りはをかしく思はしやろが、わしが身うけせうといふも、外の手へ渡すまいため。こなさんの其頼もしい心底を聞くからは、私が所存も打明けて話します。聞いて下され、わしは其傳兵衞が親でござるはいの」「エヽ」「ホヽ、恥を云はねば理が聞えぬが、わしが出生は遠州濱松、だん〳〵と身上し縺れ、とう〳〵果は紙子の身の上、子供の時覺えた東北の曲舞を、謠うて立つた非筒屋の門口、先の

ホンニあの官左衛門めが、祇園での三百兩も、てつきり言ひ合せた騙り事、手代の萬八めを吟味して、事のしだらを質さうかと思へども、その場より彼めも駈落、あの官左衛門めが外の者なら仕様も有れど、何をいうても出入屋敷のお役人、それ故手出しもならず、殘念無念を胸を擦つてこらへてゐる」「ホヽオ道理いな、尤ぢや。それ程ぬしの憎んでござんす官左衛門、何しに從はう、帶解くものでござんす。急に話さにやならぬ事がある、マア〳〵こちへ〳〵」と手を引いて、しんき辛苦をわくせきと、伴ひてこそ入りにけり。奥から亭主が、「おそめ〳〵、おそめは居ぬか」「アイ〳〵〳〵」と勝手から、「旦那さん、奥にござるがおしゆん樣を身請なさるゝお客かえ」「オイ〳〵座敷が淋しい、ちやつと行きや」「イヤ御亭主、それへ參つて御意得ませう」と立出づる、年も六十ぢの親父客、「おしゆん〳〵と名を聞いて、焦れて來たこのおやぢ、身請して連れて往ぬる氣、今宵中に賴みます。あと金を宿もとへ、いうて遣る間の手つけ金」とさし出せば、「ホヽオこちらにも先約が有れど、こよひ中とあるからは、あなたの方へ首尾なるやうに、相對して參じましよ」と、立上れば此方より、「その身請まあ待つてもらひましよ」「ソリヤマア誰ぢや」「イヤわしでごんす」と聲をかけ、娘のおぬひが狂言仕立の大前髮、肩から歩く大嶋の、襖小短き草履下駄、強さうな顏かはゆらし。「おぬ

ず氣も澄まず、案じに胸を痛めしが、「互ひに變るな變らじと、言ひ交した言葉を反古にして、奥の客に受出され、傳兵衛さんへ濟むべきか。どうぞ逢ひたい知らせたい」と、おしゆんは涙の獨言、逢瀬もしばし途絶えして、君ゆゑ心痛むなる、傳兵衛が内さし覗きつッと入る。「ナウ傳兵衛さんか、逢ひたかつた」と、抱き付けば取つて突退け、「イヤコレ古めかしいその身ぶり、此頃は官左衛門が揚詰で、おれが事は忘れ果てくさつたろ。あたぶが惡い穢はしい」と、仕掛ける口舌、おしゆんは顏を振り上げて、「恨めしのお言葉、なんの私につゆほども、外へ引かるゝ心は無い。お前に別れたその日より、揚げづめに官左衛門、振つて〳〵振りつけて、内へ戻ればそのあとへ、茶屋からの附け屆け、親方樣には叱られる、それも誰ゆゑお前ゆゑ、あまりたよりが無いゆゑに、どうぞお顏を見るやうにと、神さままでをせびらかし、無理な願もおまへに逢ひたさ、粋な臺詞も打越して、愚癡に成つたも誰が業ぞ。義理も恥辱も外聞も、忘れ果てゝも忘れぬお前、それを外氣も有るやうに、疑はしくばお前の手にかけて、殺してやいの」と膝の上、身を任せたるおほこさは、里に馴れてもかはゆらし。傳兵衛も心解け、「ホヽ、ォ疑ひはれたもう泣きやんな、堪忍しや。日ごろから惡いと思うてゐる官左衛門めが揚詰で、一倍に氣が揉めて、常から外心の無いとは知りながら腹立まぎれ、口へ出るまゝ云うたのぢや。

ござる時、天滿祭で喧嘩仕出し、相手をあやめて、直に牢舍する所を、わしを傳兵衛樣の引かしやつて金出して扱うてくださつて、それから京まで連れてござつて、きつい世話、大恩のある旦那なれば、どこまでも世話せにやならぬ。イヤ〳〵もうそりや事ぢや〳〵」「サア、ぢやによつて思案了簡をちやつと〳〵〳〵〳〵」「ア丶其樣に忙しういふと、出かゝる思案も引込んでしまふはい、サアかうぢや」「どうぢやいな」「有るぞ〳〵、こいつはどうであらう」「どうぢや〳〵」「たかゞあの客は此の丹波屋の内の客、爰の亭主が呑込んで、相談の出來ぬ樣にちやちや入れたらじやみさうな事」「その亭主を抱込みやうは」「チ丶娘のおぬひ、むすめのうちでの立者、きやつ呑込んだら出來る事、ずつと氣の捌けた通り者、頼んだら否とはいふまい」「イエイエ〳〵そりや惡い、その思案惡い〳〵」「おそめ、そりや何んとして」「サイナア、おみよどんは知らずか、あのおぬひは傳兵衛さんと譯が有るはいな」「ヒヤア」「それぢやによつて、おしゆんさんの身請と聞いたら、ありや喜ぶで有ろぞいな。言ひ出して結句惡かろ」「ホイしまうた」サアどうがなと三人が、小首傾け智慧袋、一度に絞る折も折、奥にはおぬひが聲として、「久八さん用がある、何處にぞい」「アノ聲は娘のおぬひ、爰へ來ては話の邪魔、二人ともに此方へおぢや」と、連れて一間へ入るあとへ、おしゆんは、しを〳〵立出でて、心も浮か

よつとなりと、逢はしてくれと斷つての頼み、おぬひさんも一所にこちへ」と、おたよは二人を伴ひて、入る奥座敷、茶屋の繁昌奥口の、取り締もなく忙しき、折ふしおそめがとつかわと、「おみよどん〳〵」「ホヽオ何ぢや」と勝手から、「何ぢや所か、きり〳〵ごんせいなう。大抵や大方ひよんな事ぢやはいなう、奥の客がおしゆんさんを、今宵中に身請するといふはいなう」「ヤア、サア〳〵事ぢや〳〵、どうぞ傳兵衛様へ知らせたいものぢやが」「イヤ〳〵それ知らしたら、どんな事が出來ようも知れぬ、どうぞまあ太鼓持の久八どんに逢ひたいものぢや。あの久八どんは、傳兵衛さんの大分恩に成つた人ぢやといふ事ぢや、それゆゑ傳兵衛様の贔屓方、呼んでこうか」と二人して、思案かひなき女子同士、折から此方へ出る久八、二人は見るより、「何して居さんすぞい、サア〳〵ちよつと思案出して下さんせいなう」「イヤもう、さつきにから思案してゐれど、えい狂言の趣向はない」「オヽしんきそんなき、そんな事ぢや無いはいな、ドレ〳〵耳おこさんせ、斯うぢや〳〵はいな」「ヤアそいつは事ぢや〳〵、アノ官左めが身請の手附け〳〵と吐かしくさるに厭果てたに、今宵中に身請するとは、ソリャ事ぢや〳〵。太鼓持つが役なれば、客の呼ぶ時は何のやうな座敷でも務めねばならぬゆゑ、官左衛門めとも附合うては居れど、此久八は何處までも傳兵衛の味方、こちはもと新町の幇間、傳兵衛の大坂へ出て

來た、サア〳〵是から奥座敷、娘どもはどつちへいた、おぬひお國」と呼び立てゝ、亭主は伴ひ奥座敷、勝手の方には氣のはらぬ、酒も茶碗でお縫がほろ醉ひ機嫌、「おたよどん一つ呑まんかい」「またおぬひさん醉はんすなえ、島田髷へ蓑かけて、髪も衣裳も出來てあるに、狂言の腰が折れ、お前の濡髪の長五郎を見いで殘念ぢやはいな。ホンニ大たぶさの前髪で、肩振つての身鹽梅、艶退けて仕手は無いぞえ」「又おたよどんのいらいぢやよ」「ナアニお前をいらひては何處ぞに有ろぞいな」「誓文わしや誰もない、おしゆんさんにあやかつて、傳兵衛様のやうな面白い間でも有りや好けれど」「何云はんすおぬひさん、此おたよが取つてゐるはいな。ホンニもう此おしゆん様もなぜ遲いこつちやぞえ、いつそおぬひさん何ぞ彈かんか」「アイ〳〵何にせうな、道行にせうかいな」「それよかろ」「そんなら愛護の若ぢや聞かんせ」と、音〆やさしく彈きなして、唄 逢ふことは、なほかた糸のよるとなく、晝とも分かぬ閨のうち、枕ひとつの床の海。おしゆんは戀に面瘦せて、餘所の文句もわが身には、いとゞ思のまさりぐさ、「おぬひさん今參じた」「ホヽオおしゆんさん、二日醉といふ色ぢやぞえ」「アイ二日醉やら三日やら、日さへろくに得覺えぬ」「ホヽオ道理いな、あの宮左衛門づらが、おまへのお出が遲いとて、喧しう吐しくさつて成らぬはえ。そして奥座敷のお客が、お前と盃がしたい、どうぞち

ひを嚙みて機嫌取り、「イヤもうお相手になつた此久八、叶ひませぬ。今歌舞妓で刃金を鳴らす三五郎や十藏に、お前の藝がやりたい、いらぬ所に藝者が有る」「フヽムえらいもので有つたろがの、今宵は身が思ひ付きで、仲居交りのしの字狂言、此あとが二蝶々で、娘のお縫が濡髪の長五郎、其間の狂言に、我等が踊りに仕らう。サア〳〵何ぞ唄つてくれろ」「マアお一つ上つてさ」「チツトこぼれる、おたつ殿替銚子、それ高調子で、ナント立田川では紅葉を流す、我は君ゆゑ浮名を流す」「イヨ〳〵、やんや〳〵」「どうだ〳〵、きついものか〳〵、まだ有らうが〳〵」「ホンニもう眞とも〳〵、ホンマニ猿でござります」と、云ひすて遁ぐれば、「につくい仲居め、了簡ならぬ」と荒れ出す。亭主は陰より手すりたいはう、久八も押止め、「女子共の仇口に腹を立つとは、旦那不粋々々、マア〳〵下に御出でなさりませ。そしてもうおしゆんさまが見える時分」「ホヽオ兎角きやつが事ぢや、揚詰にしてくどけども、帶解かぬ情張者、この横淵も精が盡たれど、そこが意氣張、是非とも傳兵衛と手を切らせ、女房にせにや顏が立たぬ。コリヤ六左、かねて相談して置いた、身請の手附百兩は、すなはち今宵渡さんと持參致いてをる。肝心の狂言は、國の飛脚で間拔がする、踊は女子共にはんでふを打込まるゝ、何とやら氣が滅入つて面白ない、座敷をかへて酒にせう」「ホンニそれ〳〵、いかう座敷がめいつて

揚屋の段

「其元は、主人鹽谷の讐を報ずる所存はないか」「氣も無い事〳〵、家國を渡す折から、城を枕に討死といううたのは御臺樣への追蹤、時に貴樣が、上へ對して朝敵同然と、其場をついと立つた。我等は跡に鯱張つて居たはいかいたわけの、所で仕廻は附かず、御墓へ參つて切腹と、裏門からこそ〳〵、今此安樂な樂しみも貴殿のお蔭、昔の好み忘れぬ〳〵、堅みを止めて碎けをれ」「いか樣此九太夫も、昔思へば信太の狐、化露していつこん汲まうか、サア由良殿、久しぶりだ御盃」「また頂戴と會所めくのか、さしをれ呑むは」「呑みをれさすは」「狂言のお邪魔ながら、官左衞門樣へ申し上げます、御國元より御狀が參りました」「何々國元よりの書狀とや、どれ〳〵亭主是へ〳〵。フヽム、イヤもうこりや何でもない見廻の狀、何事かと思うたに、家來共も氣の附かぬ、爰まで持たせておこすに及ばぬ。はずみ切つた狂言の、大事な所で腰が折れた、殘念至極」と拳を握れば、仲居藝子も氣の毒さ、「ホンニもう御家來衆の不粹なから、いらぬ狀おこして、大事な所で間が拔けた。なうおさよ殿、おそめどん」「サイナ、官左衞門樣の由良之介はえらいもの、尾上梅幸そこ退けぢや」「ソレ〳〵大抵うまいこつちやない」と、笑

て急ぎ行く。苦り切つたる瀧口左内、「ヤア萬八め、儕よう傳兵衛をそゝり上げたな、此一巻詮議の仕様もあれど、科人も出來、且は諸方の掛り合、何にも云はずに濟してくれる。イヤ何傳兵衛、身も喜左衛門に逢ひながら、同道して立歸らん、いざお行きやれ」と瀧口が、伴ひかへる傳兵衛に、底氣味惡く萬八も、跡に付添ひ立ちかへる。道引ちがへうそ〳〵と、來かゝる横淵官左衛門、こなたよりも勘藏が、ちらと見付けて立寄れば、萬八も走り著き、「今日は互に上首尾〳〵。シタガ左内めがほくあげかけ、さて冷い目」「オヽサ此官左衛門も氣を冷した、其代りにはまんまと三百兩、冷いな目に逢はぬは勘藏われひとり」「イヤもう出替、お前を待合して、さつきにから其處らあたりをぶら〳〵〳〵、サア八橋の鍔戻します」「オヽ此方からも分け口」と、百兩づつを二人に渡し、「さて身が當り前の百兩を、おしゆんが手附に渡し、其内に金の工面、是といふも皆萬八、その方の蔭」「イヤ私も勘藏も、お前の手先を働くは、分口の金が欲しさ。シタガ左内めに穴を見られたから、尻尾の出ぬうち、爰から直に駈落」「オヽサ此勘藏も當分は、影をかくさにや成るまいかい。何に付けても此百兩、ホヽオうまい〳〵」と三人が、立別れてこそ行くすゑは　三重。

りや〳〵六左衞門、何をうた〳〵〳〵と、喋らずと早く歸れ」「是はしたり官左衞門殿、入らざるお世話、コリヤ其客は何國の誰、名は何と」「サア其お方は、どうも此處では申されませぬ」「オヽ其はず〳〵、サアもう何にも用はない、ちやつと往ね〳〵」「ハテ其元にはいらぬお構ひ」「イヤ何官左衞門殿、我々國元を出立の砌、遊所へ足ぶみ堅く停止と、御家老中より嚴しく仰渡されたは、貴殿にも覺えてござらうがの」「いかにも」「夫にまた彼の者が名を、六左衞門とはどうして御存じ」「サアそれは、アノ物でござる」「ハテとぼけた顔めさつても、遊所通ひは明白々々」「ハレ滅相な左内殿、身はついにあの者が所へ入りこんだ覺えもなし、逢ふたもたつた今が初め」「イヤサ言はるゝな、初對面のあの者を、たつた今六左衞門と、彼が名を知つて呼ばるゝ筈がない。此趣を本國へ申し遣はせば其元の御身の上、サアそこを朋輩の好みに今日の所を聞きのがしに仕り、其代り傳兵衞が今日のしだら、此場限りに風聽御無用、ナンと御得心か、若し不得心なら、おしゆんが身請の客の名までも詮議しぬいで」「アヽ、いや是れ左内殿、何のまあ不得心、傳兵衞はもとより、親喜左衞門は出入の町人、懇意の中、何事も此座切りにさらり〳〵、とかくかやうな所に長居はおそれお先へ參る」と、云ひ捨てに立かへれば、跡に揚屋も立場なく、「こちも長居はおそれ有り、早ういなう」とこそ〳〵と、我家を指し

あらば、云ひわけは何と成さるゝぞ」「サア其の儀は」「如何にお急きなされたとて麁忽千萬、百兩の手形の出來るまで、取り置かれた手附證文、それなる男へお戻しなされて、彼めを歸して遣はされい」「そりや成りませぬ、拙者が賣つた鍔代の三百兩、誠の金請取るまでは此質物、返す事存じもよらず」「フヽム、コリヤ成程御尤、傳兵衛いつぞや其方より借用した三百兩、只今急度返濟する、此金を鍔代に、官左衛門殿へ進ぜれば、贋金遣ひの名を免れるではないかと、サヽヽ敎へはせぬがともかくも」と、取り出し渡す三百兩。「イヤ申しあなた様へ三百兩、御用立つた覺えは」「ハテさて物覺えの惡い男」と、目顏で知らせ敎へられ、はつと戴く有りがた涙、「是官左衛門様、中賣めにのめ〳〵と、騙り取られた八つ橋の鍔、にせ金を取つたは此傳兵衛が誤り、左内様の御蔭にて、三百兩をまどひます。夫れ請取つて最前の、手附けの證文お返しなされませ」「オヽ眞の金請取るからは、戻してくれる」と證文投出し、「どう見ても中賣めと、肯き合うた手錬事、其儘では濟まされぬ、吟味する所で吟味させう」と、底意地わるき詞の針、六左衛門は手附の一札、取りあげて引裂きすて、「アヽ氣の毒な様子なれど、我れら風情の何と判斷、どなたも是に」と立上る。左内は聲かけ、「コリヤ〳〵揚屋、ちと尋ねたい事が有る。おしゆんを身請せんといふ客の名が聞きたい」「ハイ其お客は」と、云はんとするを、「コ

る通り此間、わが身が世話近付きに成つたあの勘藏、そなたは馴染の事なれば、町所も知つてゐやろ、引きずつて來て此譯を」「エ、申しわしぢやてゝ馴染といふでもなし、お前が直々つばめの相對、マアそれをわしがどうして知るものぞい。根が大枚の金を、粗末に取遣なさるゝから」と、取りあへもせぬ顏付に、傳兵衞は口惜しさ、駈出さんとする所、「コリヤ待て傳兵衞動くな」と、聲をかけて官左衞門、「コナ似せ金遣ひの大騙め、大切なる道具の代金、此樣な似せ物を授けようとしをつたな、晝強盜の泥坊め」と、たぶさ握んで引倒し、金の包を目鼻の間、打ち付け〳〵投付くる、無法の打擲、覺えなき身も言譯なく、齒を喰ひしばる無念の淚、「ホヽオ無念でも口惜しくも、手向ひならぬ身の邪ま、似せ金をつかまされ、祕藏の鍔を騙られた上からは、旅宿へ引きずりぶちはなす」と、引立つる手をもぎ放し、ぐつと捻ぢ上げ突飛せば、振りかへつて、「ヤア左內殿、御手前にはマア何時から是へ」「アヽイヤ先刻より樣子一々見聞いたした」「フヽムお聞き有つたら申さいでも知れた科人、引立つるをなぜ留めさつしやるぞ、なぜ邪魔しめさるぞ」「イヤ此瀧口が止めましたは貴殿のお爲」「ナヽヽ何と」「サアたとへ傳兵衞、まことの騙り贋金師にも致せ、左樣の吟味せいたうは、當地の御代官所より有るべき事、何ぞや他國仕官の身を持つて、いはれざる吟味仕置、若し代官所より御察度

那、途中でそりや間に合はぬ、はて今六左衞門から請取つた手附證文、手形するまで百兩の質物」「オ、サ〳〵、夫で此場を取りはからひ、手形認め、晩になりと引き換へに來たがよい」「然らば左樣」と、件の一札手に渡せば、「身は近邊の兩替屋で、金改めて直に旅宿へ、兩人共跡から」と、別れてこそは歸りける。跡見送つて手代萬八、「官左衞門樣のお蔭で、どうやらかうやらおしゆん樣は繫ぎ留めたで、此萬八までも大安堵、何とお嬉しうござりますか」「イヤもう嬉しうなうて何とせう、是も皆そなたの働」「ハテお主の爲ぢや物、働かいでよござりやしよか。是からまだ跡金の工面じふめん、これも又此萬八が、見んごと働き出してお目にかけよ」「オ賴む〳〵」と悅こぶ折から、息もすた〳〵六左衞門、大汗になつて馳けもどり、「アヽ御人柄に似合ひませぬ、お顏だけに沙汰はすまいが、かうした金を人に摑まし、手附とは橫道な」と、皆まで聞かず手代萬八、「ヤア何とお言やる、おらが旦那、似合はぬの橫道のと名を立てゝ、手附の金に何云分、麁忽な事ほざき出すと、その分には濟まさぬぞよ」「是御手代殿、濟ますの濟まさぬのとは、そりや皆此方から言ふ事、今請取つた手附の金、往にがけに念頃中の兩替屋で改めさせたればみな贋金」ヤアとびつくり包みをほどき、見れば最前渡した金、「さては中賣𢬵藏めが、ほつかり一杯喰はしたか、惡い奴」と氣もそゞろ、「コレ〳〵萬八、知りや

れ、身は一先いて來る」と、立ち別れゝば此方の道へ、來るはたしか揚屋の六左、「オヽイ〳〵」と傳兵衞主從、招けば程なく六ざゑもん、「ホヽオ傳兵衞樣、このごろ内申します通り、おしゆん樣を身請せうと、望みのお客が手附を御渡しなされうと有るゆゑに、則ち其お客が今日は爰へ見えてなれば、今相談に參りがけ、お笑止な事なれど、何をいうても皆金盡」「イヤ是六左、おしゆんと深い中といふは、人に知られた此傳兵衞、外へやつて立つべきか、時宜によつては生きては居ぬ、また死ぬるからは一人は死なぬ」「ホヽウそれ〳〵、此萬八が腰押ぢやないが、身請を取り持つ六左衞門、一番斷にしやつぷりと」六「アヽ氣味たが惡いはいな、首筋元からぞつとするはいな。若ししやつぷりと言はされては、マア好の酒も呑めぬはいな。若し又急にお前の方で」傳「ホヽオ身請せう、おしゆんが身請せう、世話を賴む六左衞門、それ手附金百兩渡す、是で其方らの談合は」三「イヤまう何がさて〳〵、お前が身請なさるれば、おしゆん樣もよろこび、私もしやつぷりを脫るゝ、何處も好しぢや」と懷中より、矢立取り出し手附の證文、「まづ此金をちつとも早く親方へ、傳兵衞樣、お出を待つ」と、金請取つて六左衞門、活々として引つかへず。跡へ橫淵官左衞門、「サア〳〵證文請取らう、出來て有るか」「ホンニなあ、はつたりと忘れてゐた。殊にこゝには判もなし、手形せうにも矢立の用意は」「アヽこれ若旦

ず。夫れに付きちとお咄しと申すもマア御無心の筋、委細は萬八に」「オヽ、サ委しく承知いたしてをる、隨分三百兩なら拂ひ申さう。それがしも入用の金子なれど、平日懇意の其方の無心、否といふも何とやら氣の毒、當分百兩は用立ち申さう」「夫れは近頃有りがたい仕合、イヤもうあなたもお手づかへなればこそ、大切な道具をお手放しなさるゝに、餘儀なき御無心申せしに、御得心有つて用事を足すといふも、偏にお蔭」と、禮の八百三百兩の、金ふり擔げいきせきと、申うり勘藏同道して、手代萬八、「ヤアよい所に若旦那、幸ひ官左衛門樣もお出でなされてぢや、萬八殿を伴うて參りました」「オイノこちも見える時分と最前から待ち心、マア〳〵此處へ」と居並ぶ茶見世、傳兵衞は懷中より、八橋の鍔取り出し、「コレ勘藏どの、こちの手代萬八とは馴染さうなが、わしが逢うたは此中初めて、其折もいふ通り、出所の確なは、即ちあなたの御所持の鍔、今御相對申して、三百兩で手を打つた」「イヤもう家にこそよれ、井筒屋の若旦那が世話ぢやもの、何の粗末の有るものか、サア是れ代金三百兩」と、包渡せば萬八もろとも、金改ためて渡す鍔、たがひに引き換へ取りをさめ、「幸ひ去歷々の旦那衆が、乞ひ望まる此鍔、買人の有る內急に見せねばならぬ代物、其內お目に」と申うりは、とつかわ急ぎ立ちかへる。官左衛門は二百兩、懷中して立ちあがり、「念のため百兩の預り手形、認めて置きや

相談もしたがよい。此左内が恩を受けた井筒屋の息子の身の上、聞きずてに致すべきか。とくとく内へお行きやれさ、諸事は晩ほど、早く〱」と立ち上る。傳兵衛は忝なみだ、「お馴染とて御懇な度々の御意見、用ひませぬ不屆をお叱もなう、事を別けての今のお詞、中々わるうは受けませぬ、有りがたう存じます。殊にあなたが當お役にお成りなされてより、諸色算用廉直にまかりなり、惣掛や仕入れ方、取りわけて親共が悦び、此脇差の小柄までも、殿様より拜領なしたる程の我々が身の首尾合、これと申すも皆あなた様の御高恩御取成し、さら〱徒には思ひませぬ」「ハテ其禮云ふには及ばぬ〱、身持を改めさへすれば、此左内も嬉しい忝い。ちと又晩など身が旅宿へも來たがよい」と、心つく〲瀧口は、宮居をさして別れ行く。あと伏拜み傳兵衛は、涙のうちにもくど〱と、「他人の身でさへ目に餘っての意見、親父様の心根をさぞとは知れど、勤の身にておしゆんが貞節、馴染むにつれて可愛さ増し、退くにのかれぬ二人が中、これも因果のひとつか」と、身を悔みたる一人ごと、後の方より官左衛門、しづしづと出で來り、「ヤア傳兵衛待ってゐた」と、聲かけられて泣きがほ隱し、「これは〱官左衛門様、よい所へお出でなさりました。此間お賴みなされた鍔の儀、三百兩に付けてが有るゆゑ、いよ〱お拂ひなされまするならば、おッつけ是へ仲賣を、手代萬八が同道致して參るは

成るとて、おまへに別れ片時も、生きながらへる心はない。いとしやきつう苦が有るか、此まあ色の悪い事はいな、其の苦もみんなわしゆゑぞ、こらへてくだんせこらへて」と、手を取りかはし泣きくどく。折りから後へ瀧口左内、夫れと知らする咳を、聞いてびつくり立ちのく傳兵衞、「エヽコリヤ左内樣、爰へはまあ何時の間に」と、隱れもならぬまじめ顏、左内も片頬に苦笑、「見れば遊所の女中さうなが、密な用でもこゝは往來、人めに掛れば何のかの、社へ參詣有るならば、はやう〳〵」と追立つる、詞に否とも云はれねば、おしゆんは別れ行きすぐる。

「ナニ傳兵衞、お身にも兼て存じのとほり、拙者もと關東浪人漂泊の内、僅な好みに御親父喜左衞門殿の世話をもつて今の主取り、龜山へ有り付いて新參奉公、だん〳〵御前の首尾合よく、間もなく勘定頭仰せ付けられし、恩顧譜代のめん〳〵とも、肩を並ぶる身の立身、これといふも龜山へ、代々出入の喜左衞門殿の世話下されしゆゑと、恩を讐には存ぜぬ此瀧口左内、心にかゝる其方の身持放埓、御國へ出るたび親父の噂、某此度上りしを幸ひに、意見を加へ、心腹を嬌め直さうと、是まで意見したは幾度か。したが若い時は誰しも有るならひ、とはいふもののの見た所が、よつぽど染み付いた體たらく、得手勝手な義理盡に、無分別など出す時は、第一が親への不幸、世間の人の評判誹、夫れ程の事辨へぬ身でも有るまい。ハテつまらぬ事は

ちつれてこそ行きすぐる。人目は目立つ風俗は、祇園の町に名も高き、おしゆんといへる戀知りが、二世の誓を神かけて、願ひは重く足輕く、仲居まじくら歩みくる、向ふの方よりすた〳〵と、來かゝる男が目早くも、「テモマア妹、よい所で行き合うたな」「ホヽオ兄樣與次郎樣、よい所で逢ひました。案じらるゝはかゝ樣の御病氣、別にお變りもないかいな。殊に目さへも不自由なお身、聽お前のお世話でござんせう」「イヤモウ別に變りはないけれども、いつとてもふらふらと、たゞ引立たぬ母ぢやの病氣、したが物を苦にしやるな、追付けさつぱり本復さしやろ。こちもけふは此邊へ用が有つた故、序ながらの祇園まゐり、又是から外へ寄つていぬる所もあれば、此頃ゆるりと逢ひに行きませう、さらば〳〵」と小短き、羽織打ちふり別れ行く。氏よりも、育ちにつるゝ人心、男ぶりさへ常ならず、來かゝる井筒屋傳兵衞と、遠目に見ても焦るゝ人、それとおしゆんがさし招く、手に走り付き、「そなたも今日は祇園まゐりと聞きたりしが、よい所で出くはした。マア氣を急いたは身請の事、互ひに深いといふ事は、人に知られた二人が中、外へ遣つては此傳兵衞が男も立たず、マア當分百兩ばかり手附をやつて、金の鎖で繫いで置く事を、手代の萬八と喋し合せ、大方に手附けの才覺」「サイナ文でもしらす通り、わたしを身請したがる客が有るのと、ほんにまう氣の揉める事ばかり、どんな出世の身に

傳兵衞(おしゆん)　近頃河原達引

近頃河原達引

上之卷

祇園の段

七重八重、けふ九重に匂ひぬる、花の都の川東、祇園の社年ふりて、和光の影もいちじるく、參り下向の人群集、咄し萬歲居合ぬき、えいとう〳〵諸見物、げに繁昌の靈地なり。ものゝふの、身はいとゞなほ難からめ、瀧口左内と聞えしは、龜山の勘定、役人も心をおくじまの、折目たゞしき長羽織、それには似ざる相役の、橫淵官左衞門、紛ふ方なき惡者づくり、しばしは爰に立ちやすらひ、「何と官左衞門殿、我々が國元などとは違うて、繁華の地と申す物は、まあ賑やかな事ではござらぬか」「さればく、此度貴殿我等役用にてまかり出で、しばらくの都住居、いつ來ても厭ぬ賑はひ、是を思へば田舍にぐづ〳〵暮すといふは、申さばめん〳〵の不仕合せ、何と左內殿、さは思さぬか」「ア、其お詞御尤にはござれども、譬にも申す通り、花はみ吉野人は武士、たとひ田舍にをるとても、心に引けの有るべきや、いざ神前へ」と兩人は、打

御所櫻堀川夜討　終

神の惠」實に面白や魂膽の、〱、色の世ぞと悟り得て、望をかなへかへりけり。義經悦喜限なく、「御代を祝する靜が舞、面白し〱。是も偏へに京鎌倉、和睦をすべき瑞相」と、悦び御座を立ち給へば、伺候の諸士も壽きて、靜御前の御臺なり、三國一の名將に、隨ひなびく武士も、勇有り智有り仁義有る、三々九郎判官の、御威勢御果報夜に倍し日にまし年にます、實に動きなき源氏の御代、五穀成就民安全、百億萬歲末かけて、治る國こそ　三重　めでたけれ。

と手鞠は喜作が預、千年ついても取りはづさぬはお前方のたしなみ、お二人の悋氣あらそひ、拙者がとんと扱うて、互ちがひのさゞめ言、かはゆがつたりがられたり」「それは露情が望む所、誓文ぞ、おりや變らぬ」冬「ハテ主様さへかはらずば、夏花様」夏「冬菊様」二人「二人して大切に、いとしがらう」と寄り添へば、「目出たい〳〵、是で御中睦まじし。御祝儀に一踊、旦那諸共サアお立ち」と、喜作が文作高々と、唄鼓太鼓三絃の、なりよや見よやな、袖振る姿ふりもよき、四季の榮華の一踊、是を來て見よかしのえ、音頭先揚屋の座敷には、西の三十疊には、黄金のとさん盃に、太夫天神居流れて、園には不老の櫻を咲かせ、春の榮華ぞおもしろや、東の座敷は三十疊に、おねまの屛風ひきならべ、白い肌をあらはして、睦言なんども聞えたり。筒には五色の菊をいけ、秋の景氣に色そへて、廓に花をぞ咲かしける。榮耀にも榮華にも、實に此上や有るべきかと、君と手に手を取りかはし、障子開けばこは如何に、謡晝かと見れば、月又冴けく、春の花さけば紅葉も色濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季折々の榮華も夢なれば、今まで騒ぎし女郎、太鼓の聲と聞きしは窓打つ風、揚屋の座敷も皆きえ〴〵と失せはてゝ、有りつる昇夫が假の宿、魂膽の枕の上に、眠の夢はさめにけり。露情は夢さめて、「ハア、南無三、扨は夢にて有りけるか、能々思へば、手管諸譯の道辨へる此枕、是も偏に岩本の

た、是で二人が恨も有るまい、太夫とおれが二人前」左六法右小褄、姿もしやんと振分けて。唄限知られぬ、六法アリヤコリヤ 唄思の淵よ、いつそ沈まば此身もともに、六法沈む里はどこ〳〵、上の町下の町、中の〳〵中の町を通 掛に、なんと太夫、久しや〳〵。お前も御無事で嬉しや〳〵、唄アヽ鳥もなけ、鐘もなれ〳〵。六法二人寐し夜は往なしたうもまだ〳〵、ハッア無いがさ。喜「よいや、露情様の振分姿たまらぬ〳〵。何をかくさう、お前の事で二人の君も修羅のたね、唐土の玄宗皇帝は、雙六の勝負にて、楊貴妃、虞氏君の后定め、例を引いて二人の君に、手鞠つかせて相方定め」「よからう〳〵、おれを抱かうと抱くまいと、ほんのふたりが肩次第、精一ぱいにつかせい〳〵」あつと障子を押開けば、かねて趣向の夏花、冬菊、色を爭ふ眞紅の糸、鞠の心もはずまして、勝たば否應いはさぬと、悋氣妬の千鳥がけ、手玉もゆらにつきそむる。喜「旦那は鼓弓、我らが三味も、不調ほうげたたゝき次第〳〵」出次第の、音〆に合す手鞠歌、唄とん〳〵〳〵、とんと諸國の戀のわけ里、數へ數へりや、武士も道具を伏せ編笠で、張と意氣地の吉原、花の都は、歌で和ぐ敷島原に、勤する身は、誰と伏しみの墨染、煩惱菩提の撞木町より、難波四筋へ通ひ木辻に、禿達から室の早咲それがほんに色ぢや、一ィ二ゥ三ィ四ゥ、夜露雪の日しもの關路も、ともに此身を、馴染かさねて、中は丸山たゞ丸かれ、と彈き唄ふ。喜「おつ

出で入る人までも、色どる風の粧は、誠や名に聞きし借錢の都、機嫌上戸の樂も、かくやと思ふばかりの氣色かな。夜晝通ふ露情大盡、色と酒とのもんじが座敷、醉狂閣や阿呆殿の、常附の間に入りにける。爰に喜作が才覺にて、心を引き見る二通の文、手拭かけにかけ置いたり。「ア、恐ろしの傾城の心や、おれが心を見ん爲に、正眞の狐罠、思ひ〳〵べく候の油揚がぶら〳〵。なんぢや冬菊より、夏花より、又憎うはない物、開いて見よう。いや〳〵こちらを見ばこちらが恨めよ、あちらを見ばこちらが恨みん。所詮此文見ずに歸らう」往のやれ、我住む宿へ歸ろやれ、足中を爪立て、ちよこ〳〵ちよこと爪立て、「ア、思へば二人の君が心のたけを書きたる文、ア、儘よ、いや〳〵只恐ろしい、ふッつと止めよ、イヤやめまい」と、行きては歸り歸りては、足もしどろに行惱む。喜作いそ〳〵、「ヤア旦那、白藏主のお身振どうも〳〵、中々罠にかゝらぬ、お前は狐の骨頂、扨此お小袖はお二人の太夫様から」「皆までいふな、是も露情を引見る爲か、外に心は空蟬の、もぬけのから衣、君が移香誰にか被せん、脱ぎはやらじ」と引寄せ抱寄せ、喜「そこを喜作がおつ取つて、互に悋氣の花摺衣、片袖ばかり打ちきせて、きせて雉子の雌さま、片袖は雄さま、比翼の取形所望〳〵。我らは又下男」と、餌刺箒に路次笠も、待てば甘露の日傘、機轉利かしてさしかくれば、「コリヤ出かし

えいさ〳〵えいさつさ、榮華も夢とは島原の、揚屋をさしてぞ 三重うかれ來る、今此里に川竹の、身をば流に島原の、ヨイヨイイサヨ、出口の柳ふりわけて、戀と情のヨイサヨ二思、結ぶ契は仇人へヨ、今の妬は誰ゆゑぞ、サイ、世渡るわざの假枕、勤の身こそたよりなやと、便もとめて又爰の、里に名うての太夫職、ぬき八文字の連道中、今日もかはらぬ花の宿、もんじが許に入來れば、幇間の喜作立出で、「ヨウ見事々々、夏花樣、冬菊樣、二季相並びしお姿、月花は磯一對の珊瑚の玉、色を競べる二人の君は、露情樣のほだしの種、いかな天女もはだし裸で迯げさんしよ、やつちや〳〵」とほめ詞、ふたりもにつと笑顏して、「又わるがうな事ばかり」と、炬燵にとんと腰打ちかけ、庭の紅梅咲分けて、紅白妍を爭へり。喜「又露情樣を爭うてか、お二人の顏がわるい」夏「はて惡うても如何しても、夏花は先の逢方」冬「先でも萬でも此冬菊は心意氣」夏「いや左樣はなるまい」冬「たれが」夏「わしが」とせりあふ中へ、喜「おつと見えた、合指合投とたんの割喧嘩はもらひ、爰で我らが智の字を振ひ、お二人樣のお文を、是れ此樣に」と緣先の、手拭かけにくゝり付け、「是でお敵の心を知る狐民、露情樣の見えるまで、奥で飲まう」とそゝり立つ。唄 深い淺いは、うへからサマ見えぬヨイナ、底の心は寐にや知れぬ、寐て〳〵しれる、歌ひ打連れ入りにける。座敷には金銀の襖を立て、四方の女郎の貸借に、

い」「されば其張枕は、此里の妓樣方、紋日の催促身請の相談、付文投文、或は付合ひ間夫狂ひ、憎いかはい嬉し悲しの、種々無量の文どもを一つに集めて、嗅が仕事に魂膽の張枕、是をなされてまどろみ給ひ、來方行末の悟を御開き候へ。我等は其間、酒の燗して參らん」と、布團引被せ入りにける。「エ、きさく者ぢや、是非に紙花と出たい所、今はやう〳〵鼻紙にも」紙子の袖を枕にあて、げにや廬生が見し榮華の夢は五十年、我も此一睡に、昔の夢を見るやと、魂膽の枕に臥しにけり〳〵。明廓通は皆駕籠で押す、おれも通へど駕籠舁いておす、押手勝手も紛ひなき、舁夫が門に駕籠かきすゑ、爰ぢや〳〵と內に入る。「いかに露情に申すべき事の候」「そも如何なる者ぞ」「いや私でござります」「手代の彌六か、こは何故」「とは御吉左右御勘當のお詫かなひ、お迎に參りて候」「來たか、てんとぴやくらい嬉しや〳〵、イヤまた己が親父程有つて、餘程にもてる〳〵。扨思ひがけもない、どうして急に御免された」「是非をばいかではかるべし、御身勘氣を赦さるべき、其瑞相こそましますらめ。早々駕籠にめされ候へ」「おつと心得」のり移り、「宿へ歸らば來る事ならぬ廓の見納、是れより直におせ〳〵〳〵」と、簾上ぐれば紙子の袖も、故鄕へ歸る錦の袂、昔の姿にたがやさん、折に幸ひ三絃の、ねじめにつれてもてるか〳〵。いき杖の音二上に、乘せて合せてもてるは〳〵、駕籠もてますはい〳〵〳〵、

はひこめし、岩本の社へ歩を運び、諸分手管の道を辨へ、ついでなれば島原の、舁夫が方へ立寄らんと存じ、謠只今彼里へと急ぎ候」通ひなれし、道は昔にかはらねど、變る姿と口の端に、いゝ編笠の一文字、西にかたむく日影さへ、しゆじやかの野邊に照添ひて、謠行けば程なく出口なる、こんたんの宿に著きにけり〳〵。「ハア、昔にかはらず三枚肩でおすは〳〵。コリヤたまらぬ、ア、浦山しの廓通ひ」と、人目忍ぶの軒の下、笠かたむくる暖簾のかげ、主の舁夫内より出で、「ア、是々、謠なら聞きたうない、通りや〳〵」「いや苦しうもないおれぢや」「どなたぞい」と笠を覗いて、「エ、イお前は、扨てもお前は露情様か、是はしたり」「なんと久しや〳〵、命あればぢや」「先御息災」「そなたも無事で重疊々々」「扨此お姿は」「はて愚智な事を問ふ、いはずと姿で推量しや。とかく傾城買と灰吹は、靑い中に賞翫なされ、粹に成ると追出さるゝが一時、てつきりと廓へ行かば、色の褪めた灰吹男と、唾吐きがなするであらう。そちは辛い顏もせず、はつぱすつぱ、忘れぬ〳〵」「扨は左樣か、ハテお笑止や、それは氣の毒せんばいりで出來合を上らぬか、エ、折惡い御臺の留主」と、獨打つたり舞ふを見て、「イヤ〳〵只今は所望にない、心づかひ無用々々」「然らば一種拵へて、久しぶりのお盃、どりやお伽上げませう」と、押入より枕取出せば、「コリヤ珍しい色めいた文枕、いはれが聞きた

原が家來ながら、昌俊と嘘をつき、自業自得果、終には轉りと素首を落され畢んぬ。ア丶悲しきかなや、今日只今昌俊が名を藉つて殺さるゝは汝が損、其損を名に取つて、正尊と付けてこます、喝」と言うて打つ太刀に、首は飛んでぞ死してける。扨こそ賢と正眞の、土佐坊昌俊土佐坊正尊、二人の土佐が名の紛れ、義經公に敵たひしは、此正尊が事なりけり。判官御悅喜ましく\て、「家來といへどもさす敵なれば、梶原を討つたも同然、勇めやく\」と宣ふ所へ、女中の預黑井の軍治罷出で、先達て靜御前に仰付けられし今様の女舞、早御舞臺も成就し、役人殘らず相詰め候。直に御覽有るべうもや」と申上ぐれば、判官彌御機嫌能く、「老中が今度の勳功、勞をも晴す爲、早始めよ」と、御諚も君が御代長き、末廣扇今様舞臺、賑ふ御所こそ三重。

花扇邯鄲枕

謡　浮世の戀に迷ひ來て、く\、思をいつか晴さん。「是は色里のかたはらに住む者なり、我好色に身をやつし、太夫、天神、あるひは夜發の假寐にも、露の情を受けしより、露の情の文字を直に、名をも露情大盡と、もてはやされしも今ははや、親の勘氣に肌寒き、紙子の皺のよるとなく、ひるともわかず通ひしに、いまだ色道の悟を開かず、誠や在原の業平を好色の神にい

第五

明渡る、野邊も山路も照る空に、敵の心はくらま道、夜とも晝とも辨へず、迯ぐるを追掛けほつ詰めて、土佐が乘つたる駿足逸物、おろしも立てず飛乘つて、相合馬の二人乘、居喰は武藏坊主の好物、尻馬に打跨り、馬歷神の暴れたる勢、鞭振り上げて丁〱〱、人と馬とを砧の拍子、しつていからころさつ〱さ、はい〱沛艾打立て追立て、辻も小路も飛越えはねこえ、室町通横切りに、堀川御所の門前に、乘留めて大音上げ、「土佐坊昌俊生捕つて參つたり」と、呼はる聲に義經公、源八兵衛伊勢駿河、一樣に躍出で、「コレ〱武藏、そりや違うた、土佐坊は義盛が親の敵、夜前手にかけ本意をとげた、そいつは贋者番場忠太」武「ヤア道理で滅多に面を隱す」と頭巾を取れば、武「ハア番場の忠太、昌俊を出しにつかふ土佐の贋ぶし、此生ぶし三人中へ振舞ふぞ」と、馬上にぐつとさし上げて、「受取れやッ」と投付くれば、腰も折れぶし足立たず、蠢きながら手を合せ、「土佐に似せたも梶原の皆指圖、忠太が命助けて」と、吠えぬばかりの見ぐるしさ。武藏坊馬乘放し、忠太が背骨をしつかと踏まへ、「助けるは坊主の役、己に似合うた戒名付け、引導渡して得させせん」と、三尺五寸をしやにかまへ、「汝元來梶

らん跡まで、汝が譽を殘す爲、祇園のお旅に隱なき、官者の宮に相殿せさせ、誓文の神に崇むべし」と、御感の詞末の世に、十月二十日の誓文祓、此昌俊を祭るとかや。「ハヽヽ、恐れ有りや有りがたし、人數ならぬ昌俊、命一つ捨てずんば、古今無雙の御大將の、かゝる情を聞くべきか、未來の譽此上なし。サア義盛、首取つて父に手向け、年來の本望をとげられよ」と、ずつとよつてどつかと坐す。義盛も此上は、辭退申すに及ばずと、太刀拔き放し後に廻り、「伊勢の左衞門俊盛が一子、同名三郎義盛、親の敵只今討つ。昌俊殿御免有れ、弓矢擁護の八千矛の神、許させ給へ」と振り上ぐれば、首は敵へなくをちかたに、重ねてつくる鬨の聲、敵かと見ればさにあらで、源八兵衞、駿河の次郎、鎌倉勢を追拂ひ、勝鬨あげて立歸り、今夜夜討の大將を、討漏しては候へども、武藏が追掛け候へば、追付け召連れ參るべし」と、申上ぐれば御大將、「ヤア今夜は鷄望喜速の日、戰を急ぐべからず。夜は何時ぞ明方近し、一番鷄の鳴くを相圖に軍を出し、迯げ潜む奴原を、片端より切盡せ、是れ義經が軍慮の大事、旁其旨心得よ」と、御下知智謀は吳子孫子、張良陳平韓信に、諸葛が術を暗んじ給ひ、しかも劍術早業は、雲にも翔り水にも入る、龍に翅や虎の卷、七書を胸に疊みこむ、御大將の御勢、恐れぬ者こそ　三重　なかりけり。

文、判官殿へも起請文、二通の起請を反古にせじと、夜討に寄せたる昌俊が、心を見する此箙」と、重籐と共に投げ出すを、伊勢三郎押取つて、見れば弓には弦もなく、矢尻を抜いたる箙の矢殼、げに敵對はぬ證據ぞと、大將を始め義盛も、心を深く感じ入る。昌俊重ねて、「是伊勢の三郎、日の岡にての約束違へず親の敵、土佐坊昌俊討つて本望とげられよ」と、襟押しくつろげ待ちかくれど、義盛はなかなかに、昌俊が忠義を感じ、討たんず氣色はなかりける。義經深く感心有り、「かくまで我に忠義の土佐坊、伊勢が討たぬも理なり。此上は存へて義經に仕へよ」と、仰せも果てぬに呵々と打ち笑ひ、「昌俊が主君は鎌倉殿、討手に向ひし判官殿へ刃向はざるは義者の道、奉公せよとは愚の御諚、昌俊が此體、堀川の土とならずんば、鎌倉殿への誓紙は反古、生きては武士の名の穢、此御所の庭を借つて、義盛の手に掛れば、不忠と呼ばるゝ事もなく、二枚の起請も武士も立つ。さりながら判官殿、我を我と思召し、存へと有るお詞は、生々世々に忘れまじ。心にかゝるは御兄弟、御中和睦を此世にて、見奉らぬ殘念々々、此上ながら御中よく、未來の御父義朝公、我にも見せて給はれ」と、目にては泣かぬ武士の、詞が直に涙なり。大將御目うるませ給ひ、「今の世の人心、士農工商に限らず、誠に立てゝ誠に書く、誓言誓言皆反くに、汝は夫に引きかへて、僞に誓紙を書き、誠に命を捨つる事、亡か

を知る武士と思ひしに、僞をもつて命を助かり、今此所へ寄せ來るは、取り所もなき表裏者、刀汚しと思へども、義盛が親の敵、一分試にためしてくれん。いざ來い、勝負」と身繕ふ。「オウ義盛が疑尤千萬、それにこそ仔細有り。先此一通、大將の御覽に入れてくれられよ」と、鎧の引合より取出し、差し出すを取次いで、義經に奉れば、いぶかしながら押開き、見れば牛王に血判せし、野心なき起請文、大將猶も不審はれず、「イヤ昌俊、此起請の文言は、義經に弓引き敵たはゞ、日本大小の神祇の御罰を請はんと書きながら、今宵夜討に寄せたると、起請とは相違せり、心底如何に」と仰せける。「さん候ふ、鎌倉殿、梶原父子が申すに任せ、彼奴を君の討手と有る、元來とがなき義經公、梶原ばかり上しては、御大事と思ひしゆゑ、某遮つて望みしは、討手に言よせ罷上り、御兄弟の御中、日月の如くせんものと、思ふ心を梶原に見すかされ、其場の爭ひ武士の意地、義經の首取つて罷歸るか、さなくば昌俊が骸を堀川の土に埋むか、二つに一つは違へじと、一通の神文、鎌倉にて書きし故、賴朝卿は申すに及ばず、梶原まで疑晴らし、肌ゆるさすより工を聞き、かれが盜む平家の廻文、先へ廻つて奪ひ取り、義盛へ渡せしは、君に難儀をかけまい爲、我は澁谷金王丸とて、義朝公より譜代の家來、賴朝卿も判官殿も、頭の殿の御形見、大切に思ひ奉れば、何れに贔屓依怙もなし。鎌倉殿へも起請

切りはらひ薙ぎ廻る、勢に避易して、寄手もたやすく進み得ず、しばし支へて居る所へ、武藏坊を始として、源八兵衞、伊勢、駿河、追々にかけ來り、御大將に引添ひしは、天帝修羅の戰に、須彌の四州の四天王、帝釋天を守護せしも、是には過ぎじと謂ひつべし。寄手は臆せぬ土佐坊昌俊、采配振立て諸軍の下知、辨慶いらつて進み出で、「坊主の相手は坊主が好い、引くな昌俊、逃ぐるな土佐」と、聲をかけて飛懸れば、擬勢にも似ぬ土佐坊昌俊、逸足出して逃行くを、何處までもと追うて行く。源八駿河も拔連れ〳〵、殘る軍勢一人も、餘さじ物と 三重 切立つれば、さしもの廣き堀川御所、塵灰もなく逃散つて、御所もひつそとしづまつたり。かゝる所へ御門の脇より、武者一人寄來り、「土佐坊昌俊是に有り」と、弓矢たづさへ突立つたり。伊勢の三郎とつくと見、「辨慶にぼつかけられ、跡も見ず逃去りし、其昌俊とは扮裝の、そくばくかはりし鎧直垂、但し鎌倉殿の御内には、土佐坊二人有るやらん、實否を申せ」と詰掛くる。「オヽ、不審尤なり。先達て我名をかり、寄せ來りし土佐坊は、梶原が郎黨番場の忠太、只今向ひし某こそ、左馬頭義朝公より鎌倉殿へ二代の忠臣、澁谷土佐坊昌俊なり」と、直平頭巾脱捨つれば、げにも疑ふ所なし。伊勢の三郎ゑせ笑ひ、「いかめしき忠臣呼はり、いつぞや日の岡にて出合ひし時、退引ならぬ親の敵、討つ場を討たぬは判官殿、お爲〳〵を誠と思ひ、義

より相圖の鐘、かう〳〵とこそ三重響きけれ。靜小褄をかい褰け、凛々しげに聲を上げ、「夜討が寄せて候ふぞ、起合ひ給へ」と呼はれば、奥口取々女中のさわぎ、「何ぼ起しましても酒の醉、殿樣のお目が覺めぬ」「覺めいで是がよい物か、わしに任しや」と立掛り、御具足箱の蓋押明け、鎧取出し重たげに、提げるやら曳きずるやら、御寢所の障子押明けさせ、お枕元へ投げやれば、天性其器備つて、武勇にさとき御大將、御鎧の金物の、からめく音に忽然と、御目も酒の醉もさめ、むつくと起き、鎧引さげ端近く立出で給ひ、「如何に〳〵」と宣へば、有りし次第をこま〴〵と、申す内から手ッとり早く、鎧直垂小手脚當、金作の御佩刀、弓矢甲の次第よく、取つてあてがふ機轉の靜、「天晴御身は弓取の、持つべき妻よ」と御戲れ、さわやかに出立ち給ひ、「誰々も休息せよ」と私宅に歸せば、宿直の武士も有合ふまじ。假し義經が手をおろさば、何萬騎有りとも皆殺し、馬引け」と呼はつて、緣の上に突立ち給へは、靜長刀かいこんで、お側をはなれず引添ふ所へ、時も移さず夜討の大將法師武者、表門を込入つて、廣庭に駒駈けするゝ、「義經の首給はらんと、土佐坊昌俊向うたり。最早遁れぬ、御腹」と、聲々に罵るにぞ、「ヤア義經を討たんとは、しをらしき土佐が夜討よな。相手には不足なれど、此世の暇とらせん」と、太刀拔きそばめ廣緣より、ひらりと飛鳥の早業さそく、靜長刀かひ〴〵しく、

し、父の名を母に讓り、勘當を赦さんとの、御恩を無下にするのみか、天の冥罰二親の、御手にかゝる不孝者、元此の館へ入込みしは、梶原と心を合せ、京の君の實否を糺し、義經公を科に取つて陷さん爲、二つには番場忠太、京都に殘し置く間、牒し合せて夜討の手引、大將の首とらば、梶原が取持にて、大名に仕てやらうと、欲心に親の慈悲を忘れ、御手にかゝりし今此時、一生の非を改め、善心になつたれば、最期にせめて寸志の忠義、是れ靜、今宵鎌倉武士どもが、夜討にせんとの仕度有り、必ず御油斷なさるゝなと、義經公へ申上ぎや。言ひ置く事も是まで」と、貫く刀に手をかけて、拔けば絶え行く息の往來、生死の道ぞ定めなき。「エヽ仕成したり殘念や、其根性をまあ三寸、早う直してなぜくれなんだ。辨慶殿の娘御は、女なれども、父の手にかゝつて忠義の死、我も母が手にかゝつて、死ぬるに二つはなけれども、根性の直り樣が遲さに、犬猫の死んだ樣に、此死にざまは何事」と、空しき死骸に取付いて、老の繰言親と子の、別はつきぬ歎なり。靜は涙のひまよりも、「いうて返らぬ御悔、鎌倉勢寄すると有れば、歎きは無用。是れ母樣、もう何時でござんせう、今宵も夜半、あの太鼓は、時うつ數とも思はれぬ、ほんにせはしい鐘太鼓、如何やら世上も物騷がしい、必定夜討に疑ない。此次の間に釣つて有る、鐘をならせば御家來衆が、馳け付ける豫ての相圖」「滅多無性に撞鐘は、此母が心得し」と、走り行く

といへば突き殺す」と、胸に刀を指付くる。物音奥へ聞えてや、母は裝束脫ぐ間もなく、走り出でて拔打に、兄が肩先ずつぱと切る。うんとのッけに反りながら、「死にぞこなひの老耄め」と、親に刃向ふ極惡人、寢ながら靜が諸足搔けば、どうど倒れて立上らんと、蠢く藤彌太起しも立てず、胴腹ぐつとさし通す、老女の手なみ早業に、手足を張つて苦しみしは、心地よくこそ見えにけれ。母が心はゆはり弓の、藤彌太が髻片手に摑み、ぐつと引上げ面打守り、「コリャ此刀を拔けば命がない、息の有る中言ふ事有り、眼が未だくらまずば、此親が扮裝を見よ。烏帽子水干男の裝束、母と思ふな父親の磯の前司、エ、汝淺ましい、本心に立歸らば、爺が勘當悔みをろと、母に前司が名を讓り、待ちに待つた甲斐もなく、惡に惡を積み重ね、現世後生を迷はす故、磯の前司が蘇生して、手にかけたを覺えしか」と、烏帽子裝束かなぐりく、藤彌太に礑と打付けて、「是までは父の役、前司といふ名を力にて、思ひ切りは切つたれども、母が身にもなつて見よ、現在我子を手にかける、母も因果己も因果、憎けれど佛に成りをれ」と、わつと叫入るを見て、靜も共に泣きくづをれ、「言うて返らぬ此有樣、せめては最期に心を直し、親子兄弟睦じい、詞をかはして死んでいの」と、取付き歎く其聲の、藤彌太が耳にや入りたりけん、むつくと起きて眼をひらき、「ハッア誤つたく、親を親とも思はぬ我を、親は我子と思召

と寄せ抱付いて、腹帯を慥に見た」「夫れ見付けて如何さしやる」「鎌倉へ注進する」「エイ、フウ扨は勘當の詫言とは」「オ、嘘ぢや、梶原と心を合せ、伊勢路から付込んで、靜が兄が味方顔、釋迦でも喰はす臘梅よし、かうした思案はまた田樂、義經の首を串ざし」と、驅出すを引止め、「エ、曲もない兄樣、惡事に與して身が立たうか、恐ろしい工の段々、聞いた者は妹ばかり、外へは聞えぬ奥の囃、鼓や歌にまぎるゝも、お前の仕合、親の慈悲。サア舞の終らぬ内に惡心を飜し、善心に成つて下され」と、兄を思ひの眞實心、涙は詞に先立てり。「ヤア兄が出世に不吉のほえ頬、ぞつこんしみ込む此大望、いつかないかな飜さぬ。ばれ出すからは一時勝負、いで注進」と又かけ出だす、先に靜が立塞り、「やらぬ〳〵、何處へもやらぬ」「エ、面倒な女郎め」と、ずはと拔いて切りかくれば、得たりや紫檀の延棹に、はつしと受け、「妹を殺さうとは、人でなしの猫の皮、不幸の上塗ばち當り」と、拂ふ刀を又付込み、「此世のいとまを取らさん」と、太刀筋血筋の遠慮もなく、兄は强力刃物わざ、妹はかよわき無刀のあしらひ、三味と白刃の鍔音倘鳴、いらつ懸聲二上りに、心もめいる三下り、三世の緣の糸筋も、斷れてふたゝびかへらうび、天柱、糸藏さん〴〵に、亂れちつて爭ひしが、終には三絃切折られ、迯ぐる靜を藤彌太が、取つて引敷く膝の下、びつくとも働かせず、「サア此兄と一つになるか、否や

出入、咎められてはむづかしい、ハア、どうせうな」唄深き思の淵となる。「ホウそれよ、せいては事を仕損ずる、此藤彌太を犬ともしらず、味う參つた判官殿、ヤア奥へ往て勘當の、いやいや〳〵、妹が今の素振、」唄見るに付け聞くに付け、胸にせまりし數々の、袖もかわかぬ沖の石。歌の唱歌に引換へて、一筆知らせの硯石、床の料紙を幸ひと、蓋押明けてする墨より、歪む心を試さんと、三絃たづさへ靜御前、空醉つくる千鳥足、「唄ゑうたとさ〳〵、土手の細通危ない、合點ぢや、危ない〳〵。兄樣何を書かんす」と、聲かけられて恟りし、あたふた袖に狀押し隱し、「其方は三味の役ではないか、爰へ來ては間が缺けう、サア〳〵奥へ」「イヤ大事ござんせぬ、母樣の舞も一番濟んだ、我君の御機嫌、酒一つ飲め、も一つ飲めとひら强ひに强ひられて、唄酒の上句に亂るゝかたを波、彼方へざらり、此方へざらり。彼方よりは此方さんの、唄ざらり〳〵、さら〳〵さつと、書かしやんした今の文、隱すは曲者、其れ見たい」「いや其文とは、アノ物よ。隱した譯は彼信夫に、思ひら〳〵べく候」「唄いよし御げんと書いたるは、ほだしの種か、花薄。ほんに誓文、戀ぢや有るまい、欲と見た」「慾とは妹、何を見た」「まだ直らぬ心を見た、人には漏らさぬ兄妹中、サア有樣に言はしやんせ」「オヽ言へならば言はう、我も言へ」「わしに言へとは何の事」「ヤアとぼけまい〳〵、信夫といふは京の君、濡にこ

な侍になつたれども、なう〳〵同じ指物でも、田樂串とは違うて、刀脇指は指しにくい。是信夫殿、此樣に身の恥を打明けて言ふ正直男、恥の次に心の思はく、恥かゝさうとかゝすまいと、信夫殿のお返事次第、此屋形へ來てちらりと見るより、首だけ惚れて居まする」と、ほうど抱付き振袖の、肌へ手を入れしなだるれば、「こりや兄樣てんがうばかり、勿體ない」と引放せば、「いやてんがうぢやない、眞實惚れた、妹のつかふ腰元に、兄の惚れるが勿體ないとは、如何して信夫が勿體ない、勿體ない譯聞かう」と、問詰められて南無三と、驚きながらさあらぬ風情、「エヽ尖々しい詞咎め、勿體ないというたはな、親の勘當願ふ身が、其訴訟はほつて置いて、脇道の小いたづら、親の冥加に盡きさしやろ、勿體ないというたが誤でござんすか。母樣は奧の間で、御所望の今樣一さし、お裝束も出來たやら、笛も鳴る鼓も調べる、お前も餘所から拜見して、舞も濟んだ其上、目出度う親子の御對面、わしも信夫も三絃の役人、心もせけばお先へ」と、言紛らして急ぎ行く。藤彌太は兩人が、詞のはし〴〵素振まで、ぐつと呑込む頰魂、鎌倉よりの忍とも、奧にはしら髮の母の舞、聲の細りも今樣當流、琴三絃の音も戀に、唄寢衣の衣の肌薄し、辛いぞ憂いぞなんとせう。藤「フウ扨は京の君を信夫にして、信夫が首を、けうといく〳〵、やつちやしてこい、此通り注進せうか。いや〳〵〳〵、まだ暮れきらぬに御門の

の方様いざ此方へ」と、座をたち給へば抱きとめ、「其お心根が猶おいとしい、上々様に苦はない物と思ひしに、こんな災難も有る物か。人の名も多いに、信夫とは誰が付けて、今では北の方様の、お身を忍ぶ、世を忍ぶ、いま〳〵しい名で有るはい」と、返らぬ事をかきくどく。遣戸口に咳拂、兄藤彌太が立歸れば、靜は色目を覺られじと、「コリヤ信夫、兄様の今お歸りと、母様へお知らせ申せ」「アイ」といらへて立給ふを、藤「ア、これ〳〵、先待つた信夫殿、母人の詫言は早うても遲うても、いや應言はさぬ義經公の取持、理窟くさい母人も、今度の鼻が手柄を聞いて、四も五もいはず合點で有らう」「イ、エお前や私が思ふ様に合點なりやよけれども、物事に念入る母様、假へ大將のお詞がかゝらうが、どんな手柄をなされうが、夫れには乘らぬ日比の氣質、ぬらりくらりの間に合者、心の直つたを、とつくりと見とゞけ、其上の事とおつしやつた」「ハテ小むづかしい、心の直る直らぬは、嗅いで知れるか、見て知れるか、其固意地に懲りはてゝ、今朝からの神參、上加茂下加茂祇園の社、母の固意地止め給へと、祈る程にける程に、日脚も傾く腹も傾く、幸の二軒茶屋、立寄る鼻ももと豆腐屋、田樂串から出世した、二本指の身祝酒、俄武士の尾も見せず、微醉機嫌で立出づれば、おい〳〵と跡から呼ぶ、歸つて見れば面目なや、指付けぬ悲しさ、とんと刀を忘れて置いた。何もかも殿が下され、此様

退は却つて慮外、さあ〳〵」とせり立てられ、「是非もない、そんなら舞ひましよ、色も香もない此母が、扇取る手もしわだらけ」と、突と立つて押開き、唄 北嵯峨の踊は、葛籠帽子をしやんと著て、踊る振が面白い、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たい物ぢや、所々お參りやつて、とう下向めされ、とがをばいちやが。「ホヽヽヽ、ヽ、オ、恥かしやお笑ひ種、此舞直しはあれにて」と、微笑み行けば義經も、打ちつれ奥に入給ふ。跡に靜は兄弟思ひ、「母樣お出ではしれて有るに、此兄樣なぜ遲い」と、氣を揉み焦る後より、「北の方樣靜樣、我君の召します」と、腰元姿見すぼらしく、立出で給ふ京の君、靜ははつと恐れ入り、涙と共に御手を取り、「定つた御本妻、京の君樣ともあらう身が、鎌倉の聞えを憚り、信夫が名をかりそめに、腰元姿の勿體なさ。お身の爲とは言ひながら、賤しい靜が上に立ち、信夫何せい斯うせいと、人目をつくろふ主顏も、只ならぬお身の上、お腹にござる兒樣を、產むまでの辛抱と、堪忍して下さりませ」「なう斷に及ぶ事かいの、辨慶の心つれなくば、今は世になき我命、誠をいはゞ尼法師とも樣をかへ、先立ちやつた信夫の跡を弔ふが道なれども、輪廻穢い女の心、夫までは得思ひ諦めぬ。斯うして殿のお傍に置いて下さるが、皆の衆の情忘れはせぬ。構へて〳〵、遠慮なしに押しこなして、信夫々々と頼むぞや。かく言ふ内も人目有り、北

育てあげたれども、兄が性根はまだ直らぬか、詫言にはなぜ來ぬか、待ちに待つた母なれど、立歸つて見る時は、詫の仕樣が氣にいらぬ。靜何故というて見や、我君のお由緣へ御奉公申せしも、和女や母へ繋がる緣、何かさし置き先母が方へ來て、今度の樣子は斯う〳〵と、言うたらおれが呵らうか、待つ所へは來もせいで、お館へ來て手柄顏、殊に前司が來るを知つて、爰に居ぬは出逢うたか。なんぼ父親の遺言でも、性根を見ねば赦されぬ。斯う急入れるも其方が大事、又彼奴が無法出さば、兄にかゝつて妹まで、君の愛想も盡きやうかと、彼方此方を思ひ子の、性根をしかと見るまでは、お返事暫く御容赦」と、女ながらも後先思ひ、道理を立てゝ申せしは、磯の前司と男名を、よばるゝ器量と知られたり。「ホヽウ母が詞尤々、此義經が謂はれざる挨拶より、落ちぶれたる昔の咄、座もめいつて氣も浮かぬ。今いふ通り靜は本妻、姑の磯の前司、重ねて舞も望まれまい。何と此座をわつさりと、其儘一さし扇の手、所望々々」と有りければ、「アヽつがもない此年寄、舞うたとて謠うたとて、何がわつさり致しませう。是非御所望なら裝束して、衣裳で化かす老の舞、此處ではお赦し下され」と、辭退も聞かず、「いやい〳〵、裝束の舞は奥で見る、年寄ればとて捨てられぬ、伊勢物語の業平は、九十九に成る婆とさへ、寢られた例も有れば有る、平に〳〵」のお詞に、靜もそばから、「これ母樣、御辭

思ひがけなき對面も、兄弟の緣の深さ」と、聞くに驚く母の前司、「フウ何といやる、兄の藤彌太が此御所へ來て居るとや」「アイ戻らしやつたは一昨日、此度の働も、底の心は勘當が赦されたさ、我君も感じ給ひ、親子の中を直せと有つて、刀まで下さりました」「なんぢや、刀まで賜はつた、是は〳〵冥加ない。して其兄は何處に居るぞ」「サア兄樣は刀の冥加、武士に歸つた身の悅、神詣して來うと、今はお留守、追付け下向なされう程に、勘當赦してしんぜて」と、靜が願ひに義經も、「赦してやれ」と御挨拶。「ハア恐有りや、我々しきの悴が勘當、あつと申す筈なれど、其處を得言はぬ此母が、磯の前司と申す名は、死別れし夫の本名、連合も古へは武士の數にもいりし人、彼の兄が惡黨にて、武士を忘れし賭博好き、世間を嘘で言ひ掠める、其おどもりが親にもかゝり、浪人さした不孝者、かたはな子は猶可愛と、親の貧苦は厭ひもせず、七年前の臨終にも、念佛は申さず、此のらめは何處に居る、根性を直しなば、爺が勘當悔しかろと、思ひ死がいとしさに、ハテ案じさつしやるな、連合の死後に此母が、磯の前司と名を呼べば、夫婦此世に居る同然、心さへ直つたら、二親一所に赦すも同然、オヽさうぢや嬉しうおぢやると、夫れで浮世の思をはらし、迷はぬ正念大往生、連合に約束の、詞も反古にならぬから、女にあられぬ男の名、磯の前司と世にうたはれ、今樣指南のいとなみに、靜は

け今日より義經が、北の方に直すれば、琴の調子も一際勝れ、我妻琴の位の高さ、母を呼寄せ悦ばせいと言付けしが、未だ來ぬか、早う〳〵」あい〳〵と重ねて急ぐ召使、しき浪よする磯の前司、「只今是へ」と立出づる、京に名うての扇の指南、夫に離れて髱もなき、ひつこき髪の二つ折、色はなけれど香は殘る、昔を思ひやり梅の、花の姿のあたら物、惜しや老木とひねぬらん。「母樣お上りなされたか、我君のお待ちかね」と、水入らずの親子の取次、「磯の前司參上」と、手をつけば義經公、「ア、堅いは〳〵女の三つ指、物にたとへて見る時は、延紙に書いたる一筆啓上、堅いも理、神代以來承らぬ、女の名に磯の前司、其かたみを取置いて、向後は義經が姑御寮、斯うばかりでは合點がいくまい、お知りやる通り、賴朝の咎めによつて、あつたら花の京の君、散された閨の淋しさ、靜を今より北の方、本妻とさだめねば、鎌倉殿の疑はれぬと、家老どもが勸によつて、今日より靜は奧樣、此目出度さを言聞かせ、老の身の悦に、重ね〳〵の悦を」靜にはなせと有りければ、「申し母樣、自が身の上は、冥加に餘る君のお情、まだ此上のお情は、お前の勘當遊した、兄磯の藤彌太樣、緣といはうか、不思議といはうか、京の君のお袋樣、御參宮の下向道、梶原が見咎めて、危き所を身にかへ、比類もなき大手柄、おけがもさせずお供して、此館へお歸りなされ、顏見た時の恟り嬉しさ、

在兒、親礒の前司に勘當受けし藤彌太と申す者、是から跡は追付いて、道次申しましよ。一足も先へお出でく」「扨は靜の兄御よの、靜どころぢやござりませぬ、急にく」と主從三人、都の方へ落しやる。平時景高取つて返し、「ヤア下主め、ようもく邪魔ひろいで、三人共に迯したな。代に己が首こそげ落す、觀念せよ」と一文字に切つて掛る。「シヤ、まつかせ、心得し」と、朸で丁ど受留むる、擬勢ばかりに梶原が、刀を其儘豆腐屋が、朸も動かず暫しが程、相手と相手が顔見合せ、前後を見合せ兩人が、耳と耳とに互の口、何やら囁きうなづき合ひ、「出來たく、此上仕おほすれば、コリヤ藤彌太、約束の通り大名ぢやぞ。都には身が家來、番場の忠太を殘し置く、言ひ合せて首尾能くせよ」「ハヽア天晴梶原樣、斯うした仕組で付込むからは、義經の首は我手の內、都の首尾を氣遣あられな」「オヽさうぢやく、此上ながら、人に共謀ぢやと悟られな」心得たりと又立向ひ、二打三打義經を、騙かる僞の仕組の切合、遠い術を藤彌太に、追はれて態と迯げて行く、梶原平時が恐ろしき、工の程こそ三重○唄扨も泰平長久の、弓も袋に納まれば、矢竹心の武士の、敵に後を見せいで、戀に腰をぬかした。名におふ靜が一奏、祕曲の底を堀川の、御所は酒宴の表座敷、いつにすぐれて賑はへり。御酒の譏嫌もよしつね公、靜が膝に寄添ひ給ひ、「何時聞いても美しい、器量につるゝ琴の音色、取分

りになげかるれば、平氏景高ぐつと睨め、「京の君が母めとは、好い處で出くはせた、己も一つ首にして、鎌倉へつれて行く。あれ引ッくゝれ家來ども」承ると一度に寄るを、「どつこいさせぬ」と田樂屋が、荷の朸押取つて、薙立て／＼叩退け、御臺の世話を燒豆腐、後に圍うて立つたるは、鹽梅よしとぞ見えにける。「ヤアいはれぬ味噌めが肩持だて、彼奴からまづ繩かけい」と、聲で威せばせゝら笑ひ、「商賣の豆腐屋が、田樂料理の鹽梅見よ」と、朸のつく／＼竝んだる、主も家來も一くるめ、撲惱されてせんかたなく、一度にはつと迯げちつたり。御臺を始め附々まで、「思ひがけなき田樂屋が、身にひつかけての働は、知るべの人かどうぞいの」と、言ふ間程なく大童に成つて立ち歸れば、「コレ／＼此方は何人で、御臺樣の御介抱、名は何といふ人ぞ」と、せはしげに向ひかくれば、「エヽ急な所で名の鑿穿、いふ間もござらぬ。義經樣の由緣と聞いて、世話するからは、何ぞで有らうと思はしやませ。アレ爰へ、敵の奴ばら、一度で懲りぬ手籠の鹽梅、二はい三ばい八はい豆腐、ざく／＼豆腐に刻んでくれん」と、追ひまくりぼッ拂ひ、又立歸つて、「コレ／＼／＼、爰には居られぬ早お退き、跡は拙者が受取つた、早う早う」とせき立つる。「いやコレ重ねて禮いふ爲、そもじの名をばついちよつと」「エヽ此瀨戸ぎはに根問ひ葉問ひ、是非言へならかい摘んで、かく申す某は、義經樣の妾、靜が爲には現

けんしたるお方には、雉燒にて參らする、いつかな不食なお人でも、此太鼓飯つぎの、底を叩いてでん〳〵田樂、脣に障へるや否や、吸込み飛込み、咽は鎌倉街道の名物なり」としやべりける。在り合ふ人々どつと笑ひ、「豆腐の因緣聞いたれば、心もはれやれよい慰」と、皆々別れて通りける。京の君の御母上、伊勢參宮の歸り足、姿は地下に窶せども、供の女中の取なりも、ぼんじやりとして可愛らし。荷かたづけ田樂屋は、不思議さうに立寄つて、「ヤア何れもは、なみ〳〵のお人ではなささうなが、男切もつれず、伊勢參宮でごんすか」と、問ひかけられて御臺所、「さればとよ、遙か西國方の者にて候ふが、是なる二人を伴うて拔參り」と、半分いはせず、「ぬけ〳〵とした嘘つかしやんな、尤身の廻は田舍めいた參宮人に見えれども、物ごし爪はづれは都も都、內裏上臈のひんぬき」と、星をさゝれて、はつと三人顏見合せてためらふ所へ、先走りの侍鐵棒ひきずり、「御上使梶原殿、義經の北の方京の君、めのと侍從太郎主從が首持たせ、お通りなるぞ、片寄りませい」と呼はらせ、鎌倉へ歸る急ぎの道中、御臺は斯くと聞くよりも、梶原が前に轉出で、聲も涙にせぐり上げ、「自は京の君が母、平產祈りの甲斐もなく、身二つになりもせで、刃に罹り死ぬるとは、天照神にも捨てられしか、宿世如何なる報ぞや。姫と侍從が死顏を、此世の名殘に只一目、見せて給はれ梶原殿」と、消入るばか

種の錦古郷に、かへすも暫し名に高き、草津の宿にぞ 三重 著給ふ。唄 今年や世の中よいとのよいとの、浦々里々、參宮道者の家々の家印、ござれ〳〵、是についてござれの、よいとの〳〵。長閑に治る君が代の、お禮參の人群集、鎌倉參勤京上、往來の人に荷ひ賣、「目川仕出しの田樂、鹽梅よし〳〵」と賣る聲に、物見だけいは道者の癖、我も〳〵と立集り、「なう〳〵皆の衆、豆腐の始り、田樂の由來聞くまいか」「コリヤよかろ、所望々々〳〵」と立ちかゝれば、頰作言ふも商ひ口、しかつべらしく團扇を上げ、「東西々々〳〵、豆腐の因緣堅くとも、耳をすまして聞し召せ、昔々〳〵天竺の達磨大師と申せしは、顏に似合はぬ豆好で、座禪豆と名付け、常に賞翫有りけるが、初めて豆腐を思ひ付くとて、壁を睨んで九年めに悟をひらき、なむおみとうふ〳〵と、奈落の鍋へ落入つたる湯豆腐も、終には浮み上る所を、南無あみ杓子のすくはせ給ふ誓願なり。扨唐土二十四孝の唐夫人といふ嫁御は、豆腐の姥に孝行者、それより和國辨當にひろまつて、煑染に成り、竹輪に成り、縮緬豆腐は細きをいとはず、お壁とは、白きを譽めたる大内言葉、お公家方には小野の道風、武家方には敵陣へ寄せ豆腐、名を萬天に揚げ豆腐、別きてこの〳〵田樂と申し奉るは、忝くも白河院より始つて、都に祇園二軒茶屋、難波に生玉島の茶屋、菜飯に田樂ひんよよいと、神勇めにも成るぞかし。それにまさりし目川の田樂、けん

目元は成る眼元え、晩にかならずまつ坂と、しなだれじやれて行く雲出、これぞ津の町かうの彌陀、太神宮と御一體、佛神水波と分れども、隔てもなみの水たまる、窪田も越えて嬉し野や、はてしなが野も打過ぎて、都の方へむく本の、木蔭にしばしやすらひ給ひ、參の時は一足も、早う願のかけたさに、何處が何處やらわくせきと、せく心より此關の、尊き地藏もそこ〳〵に、拜みし事のおろかさよ。あれ〳〵其處へ乘りかけの、馬士が小唄も外ならぬ、關のお地藏は親よりも、ましぢやにあひのつまたもる、其一節も御慈悲の、餘りて深き其中に、わけて女の姙帶、五月目を守らんと、此御佛の誓なれば、心に願かけまくも、忝しと伏し拜み、心も足もいそ〳〵と、坂の下より鈴鹿山、山又山の土山に、誘ふや嵐、ちるや紅葉の亂れ〳〵て、空にちりぬる散らし書、こゝは硯の水口や、田面におつる雁金の、一行列るごとくにて、跡や先やと子供の參宮、お蔭での、拔けたとさ、えい〳〵〳〵、さつ〳〵さ、さつと流るゝ橫田川、淺く渡りて深きを知る、神の惠の動なき、石部の宿より梅の木村、藥も花の香に匂ふ、よう御所風となぶられて、人目まばゆく袖おほひ、忍ぶほど猶聲々に、唄 あれは慥に都の上臈、姿優しくしをらしく、さういうて派出ならず、移氣な人心、かい取褄のなりふりに、しんぞ此身を打込んだ、オヽ笑止〳〵。うたふを聞けば聲の文、さすがに都遠からず、心勇みの花摺衣、千

さぬ、觀念有れ」と拔放し、ひらりと見えし刀の影、首は前へぞ落ちにける。直に袂を押切り押切り、二つの首を包むに餘り眼にもろき、涙よ歎き果しなく、さらば〳〵と、首を左右にかき抱き立上れば、「是なうしばし」と取付いて、「我は未來の約束せん」「我は親子の一世の限」「共に名殘に今一度、亡き顔見せてたべなう」と、泣けど慕へど焦るれど、心强くも振捨てゝ、見せぬも辛し見ぬも憂し、返らぬ道に憧るゝ、夫の別子の別、二つ歎を一筋に、見捨てゝ御所へぞ三重かへりける。

第四

道行伊勢土產

思ふ事、内外の宮に曳く鈴の、鳴らずばよもやさばかりの、參宮同者はよもあらじ。義經の北の方、京の君御懷胎、御產の紐もやす〳〵と、時忠の御臺所、娘思の御願立、二人三人の御供にて、どれが主やら下部やら、皆一樣の染浴衣、著連れて笠のヤアこれの、肩にお祓伊勢土產、包む人目や風呂敷や、旅立つ比は曉の、明星が茶屋を跡に見て、馴れし都へ下向ある。櫛田の宿は名のみして、髮に擬へるぬめ帽子、其色艷も行く人の、袖に縺るゝ伊勢比丘尼、唄今の

の袖、八つの時計を打ちまぜて、悲しい事の數々を、言ひ盡すこそ果しなき。辨慶はつと心付き、「南無三寶、歎に紛れしか、半時の時計も聞かざりしに、早八つ、御首討つて渡さんと、梶原に契約の刻限、時移つては事むづかし。サア太郎殿、京の君の首討つて渡されよ、是より我は檢使の役」と、席を改め坐しければ、「實に〳〵、公事に私の歎換へがたし、只今京の君の御首討ち申す」と身づくろひ、信夫が死骸引寄せて、敢なく首を打落し、「サア受けとられよ」とどつかと坐し、返す刀を我身の弓手の小脇に突き込み、きり〳〵と引廻す。物に動ぜぬ武藏が驚き、妻はあわてゝ縋り付き、兎角の詞もなくばかり、「ヤア騷ぐまい武藏殿、我切腹御合點が往かぬか、是なう御邊が細工の京の君の此贋花、尤大概は似たれども、實は雲の上人と、地下人の色香の違、梶原が邪智強き眼に見咎め、詮ない事になつてはと思ふに付け、京の君の傅とは、鎌倉殿もしろし召したる此侍從太郎が首添へて渡さば、天地を見ぬく梶原も、よも作り花とはいふまい、誠の花と見せう物、信夫に犬死もさせまい物と思ふ故、御邊が細工に添へて遣る、心計の色香ぞや。吠ゆるな女房、是まで御存じない事を、それ泣いて奧へ知らするか。萬事武藏殿の差圖を受け、おわさと中好ふ、御平產の跡々まで、心を付けるが良人への忠節、心得たるか、泣くな〳〵。サア武藏殿、時移る、首うつてたべ」「オヽ、理を聞く上は、辭退申

まなか見つ見せては、未練の心もおこらんかと、生きぬ樣に剞りし物、一たまりも堪へうか。辨慶とても木竹ではなし、生れてより此年まで、跡にも先にもたつた一度、てんがうな事して生れたる、我子と聞いて憎からうか、可愛かるまいか。其樣に泣くを見て、太郎御夫婦の居らずば」と、泣くより泣かぬ苦しさは、鳴蟬よりもなかく〳〵に、泣かぬ螢の身をこがす、小唄も我身に知られたり。「是に付いても、親の恩の深き事、今取分けて思ひ知れ。唐土の樊噲が、母の小袖を母衣と名付け、戰場まで持つたりといふ、夫を學ぶにはあらねども、此下著は母の手づから縫ひ仕立てゝ下されし、汝に片袖を取られたれども、亡き母に添ふ心して、縫ひも直さず振袖の、此儘四國九國の戰場、今日の今まで肌を放さず持ちたればこそ、名も知らず顏も知らぬ親と子の印と成つて、十七年めに廻り逢ひ、主君の絕體絕命の、大事のお役に立つる事、偏に亡き母の此小袖に手を通し、親子を一所に引合せ給ふ、廣大無邊の親の慈悲、子故に親は名を上げる、能う死んだな出かしたな。とはいひつゝも息ある內、是こそ尋ねた父ぢやはやいと、こんな頰でも見せたらば、嘻嬉しがらうもの、是ばつかりが殘多い。親も一生子も一生、言ひ初めの言ひ納め、せめて一口父樣かいのと言うてくれ」と、生れた時の產聲より、外には泣かぬ辨慶が、三十餘年の溜涙、一度にせきかけたぐりかけ、侍從夫婦が貰ひ泣、四人の涙八つ

第にせぐりきて、早玉の緒も切れ果てゝ、此世の緣は絕えにけり。「ハア悲しや、最早息がせぬはいの」と、聞いて皆々立騷ぎ、見れどもほとほりばかりにて、其甲斐さらになかりけり。母は膝に抱き上げ、「扨も〳〵淺ましや、如何なる因果な生れ性ぞいの、父御を尋ね初めたは五つの時、申し母樣、餘所の子供衆には、父樣も有り母樣も有る、私にはなぜ父樣がござらぬ、逢はせて下されと言ひ初めて以來、一年々々智恵の付くに隨ひ、譯を聞いて猶逢ひたいとせがむ故、在所にも有るにあられず、其夜は都の衆も有つた物、もしやと都へ上つて尋ねても、知れなんだこそ道理、此方樣で有つた物。可愛や此子は、一生父御を戀慕ひ、一生物を思ひ詰め、今日といふ今日尋逢ひ、せめて一時半時も、我子か父樣かと、一所にも居る事か、詞もかはさず、しかも父御の手にかゝり、辨慶が傍に居て、母樣も殺されなと、いうて死んだ心の內、如何ばかり苦しかりつらん。父御の仕方も慘たらしい、同じ殺す道ならば、互に親よ娘よと、顏も見たり見せたり、納得させての上ならば、是程には思ふまい。ヤレ娘よ、父御前こそつれなくとも、母に恨は有るまいに、たつたま一度母樣と、言うてくれよ」とばかりにて、空しき死骸を抱きしめ〳〵、くどき立て、聲も惜まず泣きゐたる。辨慶も諸共に、咽ぶ淚を押しかくし、「よしない母が悔み事、咄を聞くと等しく、扨は我子と飛立つばかり、生頰も見たかッしが、な

練でない申譯、永々と嘸お氣がせかう、サアお入りなされ。娘立ちや、お暇申さう、コレ立ちやいの」と、いへど立ちかね見捨てかね、親子心の隔の一重、誰とは知らず信夫が脊骨障子越、ぐつと指いて一刳、うんと悶ゆる苦しみに、是はとおどろく母の親、侍從夫婦も仰天し、「ヤア殺人は武藏坊、かゝる狼藉心得がたし、如何に〳〵」と詰めかくる。母は泣くやら氣は狂亂、「扨は夫婦の衆とぐるになつて殺しやつたの、聽かぬ〳〵、本の樣にして返しや」と、縋り喚けば、「こりやく、聲低に物を言へ」「いや高う言ふ、何故切りやつた」「夫れは段々仔細が有る、まあ手負を勞り介抱せよ」「何んぢや、勞はれ、いたはれといふ程なら、切らぬがよい」と放さねば、「待て〳〵、見する物有り」と、肌押脫げば這は如何に、下著の衣の紅に、大振袖の伊達模樣。「これ見たか、此片袖は其方に有らうが、播州姬路の福井村、十一兵衞が所の月待、二十六夜の假寢は、其方で有つたな」「エイ、其時のお前の名は」「オ書寫山の鬼若丸」「すればお前は娘が父御、其父御が又娘をば」「オ殺したは身代り、お主の役に立つるはい」「ハア悲しけれども、夫ならば恨はない。これなう娘、尋ねた其方の父御といふは辨慶樣、御對面申し上げやいの」と、抱き起せば起されて、「母樣何ぞおつしやるさうなが、耳が聞えぬ、もう目が見えぬ、必ず辨慶が側に居て、お前も殺されて下さんな、アヽ術ない苦しい」といふ聲も、次第次

立上る。「なう申し、マヽ待つてたべ、僞者といはれては、親故此子が顔汚し、顔も知らず、名も知らぬ、夫を尋ぬる印は是」と、上の一重を押脱げば、右は替らぬ詰袖に、左ばかりが振袖の、濃き紅の染模樣、橘ならぬ袖の香の、昔ゆかしく忍ばしく、「是を御覽なされても、仔細を言はずば御合點が參るまい。娘が聞く前恥かしき、昔咄なれども、私はもと西の國の在所者、親は所の何がし、十八年以前、頃は夜も長月の、二十六夜の月待の夜、私が所は諸方の入込、誰とは知らず袖をひかれて、あのゝものゝを言ふ間もなく、暗がり紛れのつい轉び寢、つらや人の足音に驚いて其人は、おき行く袂を捉ゆる拍子、斷れて我手に殘りしは此振袖、假寢の情は、たつた一度の淺けれども、妹脊の縁や深かりけん、其月より身も重く懷胎し、友達衆の介抱にて、產み落せしは此信夫、父なし子產んでは家の恥、子を捨てゝ嫁入せよと、親々の意見、御尤とは思ひながら、二人の夫は重ねまじ、縁有ればこそ子まで產んだ物、此袖を知るべに尋ね逢はんと、國を出でて十七年、水兒を抱きかゝへさまよひ、種々の憂き艱難、あの年まで育て上げても、此子が縁の薄いのか、我身の縁の薄いのか、今に尋ねあはねども、此上にまだ五年でも十年でも、女の念力、是こそ娘よ父御よと、名のり逢はするそれまでは、蚤にも喰はせぬ大事の娘、相應に物の道理も忠義も知つたれど、お役に立てぬは右のわけ、卑怯でない、未

報には夫婦の者を、八つ裂にもなされちつとも惜まぬ。惜まぬ命は二つ有れども、一つも今日の役に立たぬ、本意なさ無念さ悲しさを、推量有れ」とばかりにて、はら〳〵と泣きければ、信夫進出で、「扨も〳〵、神ならぬ身はそんな事とは存ぜいで、年に似合はぬ恥しらずと思ひ侮りし、十年二十年の宮仕も、たつた一日御奉公申しても、お主様に違ひはない。其御難儀が何と聞いて居られうぞ、私が様な者の首でも、お役にさへ立つならば、願うてもお身代に立ちたい、サア首切つて御用に立てゝ下さんせ。申し母様、四年跡の大煩、聾程薬は利かず、死ぬる命をお前の精力たつた一つで助かつたれど、其時死んだなと諦めて下さんせ。私はお身代に死にます」と、聞きも敢へず飛びかゝり、抱きしめ〳〵、「これつか〳〵と物言やんないの、默つて居よぞ。これ〳〵此子はな、一人で出來た子ではござんせぬ、顔も知らず名も知らねど、父親が有る、其人を尋ねて渡すまでは指もさゝせぬ。卒爾に斬らしやつたら、聞くこつちやござんせぬぞ」「コリヤやい〳〵、如何にうろたゆればとて、母親ばかりで出來る子が、三千世界にあらうか。其上顔も知らず名も知らぬ父親を尋ね手渡するとは、何を證に尋ぬるぞ。僞者、表裏者。得心せぬ者、無理やりに身代に立てうとは言はぬはい。子心にさへ主從の道を辨ふるに、見限り果てたる女め、娘を連れて早歸れ、心急がし、立つてうせう。女房此方へ」と

の。お小いから夫婦の者が手しほにかけ、育て上げた彼のお子、畏つた、御勝手になされと、そもや首が切らされうか。殊更只ならぬお身の上、辨慶殿も斬りかねて、とつおいつ思案の上、昔より無いならひではなし、人の見知つたお子でもなし、身代を立てまいか、其身代は誰彼と詮議の上、年頃眉目容も相應した此信夫、夫とても、お家譜代相傳の人でもなく、命を下されといふ程の、恩を見せたといふではなし、無體には殺されず、合點してはよも死ぬまい、何とせうどうせう、斯うせうでは有るまいか。幸ひおわさも來て居やる、大人氣なけれど太郎殿、信夫に執心なといひかけて、無理に女房にお貰ひなされ、そこで私が悋氣するは、憎い奴ぢやと隙が出る、心得たと隙取るは、サア今日の只今から、信夫は侍從が女房ぢやと、獻々の盃した其上で、女房どもまづ斯う〳〵ぢやと譯をいうて、我女房に成るからは、其方が爲にもお主の身代、死んでくれと退引きさせず、命をお貰ひなされぬか、是宜からうと談合づく、不調法な女夫喧嘩も、お主の命助けたさ。そんならおれが娘は殺しても大事ないか、身勝な事をいふ、道しらず物しらずと、蔑しみも恥かしけれど、正眞の脊中に腹とやら、コレおわさ女郎、了簡は有るまいか、夫婦の者の苦しみを、思ひやつて」とばかりにて、かつぱと伏して泣きければ、夫も坐したる膝を改め、「浮世の中の無心といふに、是に上こす無心も有るまい。其返

筋走り寄り、「なんぢや花の井は隙くれる、何をどうして隙下さる、仔細が有らう。譯聞かねば自も武士の娘、ついぐづ〳〵と暇はとらぬ、其譯聞かう」「ヤアしやらくさい、昔より女房は衣服に譬へ、厭いたれば何時でも脫ぎかへて、外の著物を著るはい。是より外の仔細はない、小言いはずと歸れ〳〵」「ムウ聞えた、厭かれて添うては面白うない、隙とつた、實正信夫を女房に持ちやるの」「くどい〳〵」「持つて見やゝ」「持つて見せうぞ」「見るぞや」「見せう」と我を張つて、負けず劣らず爭へば、見かねておわさ押隔て、「呆れて太郎樣にはいつそ手が付けられぬ、慮外ながらはしたない奥樣、假令如何樣におつしやるとも、お前を去らせてそんならばと、娘を進ぜさうなおわさぢやと思召すか。女御后に成るとても、道ならぬ榮華を悅ぶ樣な私どもではござんせぬ。氣遣ひせずとも、早う仲直らしやんせ。悉皆氣狂の沙汰ぢやまで」と嘲れは、「スリャ氣狂の樣に見ゆるかや」「樣な段ではござりませぬ、ま氣狂でござりますはいの」ハア、はつと夫婦は顏見合せ、暫く詞もなかりしが、やゝ有つて花の井、「實にや思内に有れば色外に顯るゝ、氣狂とも狂人とも見ゆる筈、心は疾うから氣狂に成つて居る。其譯は、今日武藏殿の參られしは、京の君の首討つて渡せと、鎌倉よりの御難題、其爲に梶原平次景高、土佐坊昌俊の上洛、討つて出さねば叶はぬに極り、悲しや京の君樣のお首を取りに見えたはい

を言ふも身を大事に、煩うてばしたもんな」と、手を取りかはし撫でかはし、心を盡す親と子の、わりなき風情ぞ道理なる。やゝ有つて侍従太郎、奥より出づる屈托顔、おわさ目早く、「是は是は侍従様、お顔の色悪う、お目の内も潤んで、氣の浮かぬ御容體、御内談といふは何ぞ」「いや〳〵、氣遣ひの氣の字もない、氣の浮かぬ事微塵もなく、心がしよぎ〳〵と盆を待ちかねる。ヤ好い次手ぢや、態と往ても逢はうと存じた、幸ひぢや、ちよと物語致さう。別の事でもない物でござる、拙者そもじの息女、此信夫に大執心」「エイ」と親子が興さまし、娘は母の後かげ、小さう成つて身を忍ぶ。「是々、さましてもらふまい、惚れて〳〵今日は八つまでの内に貰はねば、此方の工面がぐわらりと違ふ。今奥の時計を見たが、九つ過、半時にはまだ成らぬ、秋の日は短い、八つに成るは手間隙入らず、サアおつと言うて貰ひたい。時忠の執權侍従太郎、年に不足もない男、浮氣でない、虚言申さぬ、サア下さるかサア如何ぢや」と、眞面目になれば、けら〳〵と嘲り笑ひ、「ア有難い忝い、深山の斧のこけら屑、誰れ取上ぐる人もなく、徒に埋るゝ我娘を御執心、進ぜましたら何となされます」「ハテ女房にしますはいの」「あの花の井様といふ美しい奥様の有る上に」「いやてや、花の井は隙やつて、信夫を奥様にするはいの。侍冥利愛宕白山、偽ない」といふ後に、立聞く花の井嚇とせき、顔は上氣の爪紅血

敵ござんなれ、のがすまじと引組んで、首を取るか取らるゝか、好い子をうむか得産まぬか、生きるか死ぬるか生死の界、爰を能う御合點なされ、かねて無き身と思召せば、その期にのぞんで不覺をとらぬ、ナウ御夫婦、左樣でござらぬか。ヤ我申す事ばかり、肝心關門の御內談遲なはる、爰は端近、密に御意得たし。女中方も遠慮めされ、奧へ參らうか」「いざお通り、御案內」と、京の君を誘ひ先に立てば、「なう御夫婦、豫てなき身と存ぜねば、其跡に必ず未練か出るではござらぬか」と、鎌倉殿の難題を、つい打明けていへばえを、暫く心おくの間に、打つれ作ひ入りにける。年若けれども利發者、信夫差配し、「ナウ皆樣、何事の御內談、お隙が入らうも知れまいに、お盃でも出してはの」「それ〳〵、マアお烟草盆、お茶持ていくぞや」「宜からう〳〵」「お菓子もついでに賴むぞや」「さらば此間にちよつと母樣、此比はお顏も見ず、お懷しや」と立寄れば、「和女も息災に有つたの、明け暮れ傍に引きすゑて、見れども厭かぬ一人子を、手離して置く親心、親懷しと思ふより、百千倍とは知らぬかや。假令御前の御意に入るとも、必々傍輩衆を袖にすな。陰口告げ口たしなんで、諸事を內端に控目に、出かし立てして猜まるゝな。林の中にも高い木は、風が枝をば折るぞとよ。一人寢覺めの度每に、逢はゞ如何言はう斯ういはうと、溜て置いた數々も、逢へば嬉しうて口へ出ぬ。何を言ふもか

れば、いつもとは違ふぞや、必々嬲るまい、先連合を呼んで下され。おわさ女郎、辨慶とい
ふ人見てか、未だなら此處にゐてお逢ひなされ、かんまへて皆の衆、くつ〳〵吹きだすまいぞ
や」と、夫諸共に出向ふ。何時に勝れて武藏坊、へりぬり取つて打かづき、大紋の袴ふみしだ
き、しづ〳〵と奥に入り、むずと坐して一禮し、「オヽ存じたと違うて、御顏色もみづ〳〵と
御機嫌の體、先安堵仕る。是と申すも夫婦の衆の御介抱、大切になさるゝ御苦勞の甲斐が見え
て、祝著に存ずるよ」「是は〳〵忝い御挨拶、御主人ながら御平產有るまでは、此所に預り
の京の君、殊に御存じのごとく御母君、娘が平產祈の爲願ひを立て、伊勢參宮の留守の內、
彌々我々が心遣ひ御推量、義經公の御前幾重にも御執成」「いや〳〵執成に及ばぬ、物事の
とりなしといふは、かなれ八合な事を十分に言ふが執成、辨慶はそれ嫌ひ、見た通を罷歸
り、眞直に申さば、君も嘸御滿足。扨是は御夫婦への咄ではない、後學の爲京の君への御
物語。總じて勇士の戰場へ赴く時は、三忘と申して、忘るゝ事三つ有り、國を出づる時家
を忘れ、堺を過ぐる時妻子を忘れ、敵陣に臨んで我身を忘るゝ、婦人の懷胎もまつ其如く、
一氣腹に含る所、とりも直さず勇子の國を出づる時、御腹帶をなさるゝ所が、勇士の妻子を
忘るゝ所、既に月滿ち、すは御產の紐をとかるゝは、勇士の敵陣へかけ入つて、これぞよき

秋でござりますげな。是と申すも、義經樣が京にござなさるゝ故ぢやと申すを聞けば、弓も引きがた判官樣贔屓、嬉しいやらめでたいやら、お悦びにあがりたい、今日よ明日よと思ふ内、娘が方から帶のお祝ひもすんだ、何故お悦びに參らぬと、𠮟つておこした文をろくに見るや見ず、何が捨置き取りあへぬお悦び、何ぞ上げたいと思へど、結構な物はあなたに有り餘る、せめて是を」と差出す、袂の内の袱紗物、「是は海馬と申して、文字には海の馬とやら書くげな、めんよう希代の御產の兕ひ、私が曾祖母が十九人、祖母はおとつて十三人、母から私が手に傳へ、あの信夫を產むまでに、一度も不覺の產をせず、滿足に產みならべた、腹覺えの有る捧げ物、追付御產の月滿ちて、此海馬にひらりとめし、檢非違使五位尉、源の義經樣の若君我なりと、大手の門をさつと開き、やす〳〵と御誕生、おめでたや〳〵、へゝゝ、ホゝゝ、ハアしんどや」と饒舌りける。「ほんにつべこべ〳〵と長口上、息がはずむ、娘お茶一つくんでたも」と、申せば君もをかしさの、「氣輕にわさ〳〵と物いやる、おわさとは能う付きやつた」と、袖打ちおほひ給ひける。かゝる所へ奥使の女中、「申し〳〵花の井樣、君よりのお使に、辨慶樣がお出でなり」と、申上ぐれば女房達、「サア〳〵女嫌ひの武藏殿が見えたといの、濡れかけて嫌がらせ、お慰みにせまいか」宜かろ〳〵と立騷ぐ。「是々皆の衆、君よりのお使な

ろさいが死にしやッたら、梶原が受取りに參るべし、罷歸る」と突立てば、昌俊もつゞいて立ち、「必々京の君に犬死させぬ工夫が大事、合點か」と、善惡二人が詞詰、獨の心に取納め、辨「氣遣有るな」　景「北の方の御首必ず討てよ」　辨「念にや及ぶ」と、目禮するも睨み合、反打ちかくれば眞中に、義有る土佐坊、佞有る梶原、忠有る武藏ばう然と、立別れてこそ　三重行
空の、天ざかる、鄙にはあらぬ京の君、雲井を出でて何時しかに、義經の北の御方と、なれて榮え有る武家の妻、殊更に御懷胎、御腹帶の御祝儀も相濟み、お上屋敷は公の事繁く、お心にさはる事もやと、御乳人侍從太郎が館に、暫し假居の先々まで、公家武家方の見舞の使者、門前市をなしにける。爰にお腰元信夫が母親、おわさといふお物縫、御機嫌伺ひとて來りける。侍從太郎が妻の花の井女房達、「能くぞく上られし、今日はことなうおさもじさう故、誰ががなお伽にと思ひしに、嬉しやく、いざ」とてお前へ連れ出づる。「珍らしや、此程は何として見えざるぞ、定めて四方の紅葉見に、彼方此方と、嘸面白き事ばかり、浦山しや」と宣へば、「御意の通、高尾栂の尾嵐山、わけて今年は稻荷山の薄紅葉が、いつくよりも見事な事と世上の噂、ほんにく針のみょずで聞くばかり、あなたからは早う來い、此方からは疾う來いと、參るもく紅葉見の、お晴小袖の仕立物、夜を晝に京田舍が打ちまじつて、夫はく賑やかな

御佩刀に手をかけ給へば、辨慶中にかけ隔たり、「ア、御短慮なる御振舞、梶原に御遺恨は私事、鎌倉への御返答、苦しからずば御免を蒙り、某宜しく仕らん。君には先々御座の間へ、いざさせ給へ」と諫むれば、尤とや思しけん、「オヽ忠臣は危きに顯るゝ、汝が振舞、主の難儀を身に引受けんと、健げなる心ざし、然らば我になりかはり、萬事よきに計らふべし。義盛來れ」と引連れて、帳臺深く入給へば、梶原平次笑壺に入り、「サア辨慶、燒いた廻文は是非もなし、其代には明日とも言はせぬ、京の君の首討つて渡されよ」と、又ねぢかゝれば、「イヤサ、先達て時忠卿を能登國へ流されし上は、最早京の君にはおかまひない筈」と、いはせも果てず、「ヤア其言譯暗い〳〵、平家方の娘を具せらるゝからは、鎌倉へ對して謀叛といはんに、ぬきさし成るまい。京の君の首討つて申しひらき有るか、但し判官殿に痛い腹切らせるか、二つ一つ、手短い返事承らん」と、詰寄せ〳〵、遁れぬ手詰ぞ是非もなし。辨慶は拳を握り、思案にくれて居たりしが、「ハヽア夫よ、愚夫顚倒迷之と聞く時は、善も惡も迷ひの前、北の方の御首討つは、不忠に似て主君を助くる大忠臣、いかにも詮意の趣、相心得候ふ」と述べければ、「オヽ其筈々々、流石天台坊主程有つて、尤な氣の付け所、然らば今日八つの鐘を相圖に、め

ぞや。いやといはせぬ證據は是見よ、自筆にて梶原平三景時、同源太景季、同平次景高と、親子三人の血判有る。かゝる舊惡を隱さんが爲に、詫意ごかしに此廻文、奪取らんとは、ふてぐしき工よな。此外の連名讀むに及ばず」と一つに丸め、前なる火鉢へ打込み給へば、折ふし誘ふ山風に、焰々として連判は、忽尉と成りにける。せきにせいたる義盛辨慶、詞を揃へ、「鎌倉殿へ御中開きの種とも成るべき一卷を、燒捨て給ひしは訝しき御賢慮」と、憚なく申すにぞ、「オヽ驚くは理、問ふまでもなし、我心腹を明さん、昌俊是へ」と近く召され、「只今燒捨てし廻文の事は、疾くにも鎌倉へ渡すべきを、某が手に留め置きしは、全く舅時忠をいたはるに非ず。今源氏に隨ふ東國の大小名の中にも、連判したる輩少からず。事治りし上なれば、御咎なきにもせよ、廻文御手に入りしと聞かば、身に覺え有る者どもは、自然と心隔り、終には鎌倉の騷動とならん。鎌倉の騷動は天下の大事、其處を思うて燒捨てたり。是も我誤にならばなれ、天下の爲兄の爲、是程迄に思ふ弟を、佞人讒者の僞にまどはされて、兄ながらも鎌倉殿のつれなき御所存、誠に他人の始りとは、能くも譬へし世の諺、今義經が身の上に、ひしと思ひ當りし」と、猛く勇める御目の內、淚うづまくばかりなり。切なる君の御悔み、思ひやつて伊勢武藏、感淚催し土佐坊も、とかう答へもなかりける。梶原は減らず口、「某親子は平家を欺く智略の連判、誠

の昌俊、「イヤ此上に御返答延引致さば、由々しき御大事、指を數へて近きに有り。右二箇條の御不審、今日中に申開き有るべし。了簡強い梶原はとも有れ、某は用捨仕らぬ」と、口にはつれなく心には、我手より渡し置きたる廻文にて、申開きを立て給へと、言はぬばかりに言ひ廻す。「ヤア此景高を了簡強いとは、熟柹を笑ふ澁谷の言分、手緩し〳〵。詮意を守り京の君の首討たうとの仰なければ、此通を鎌倉へ申遣す分の事」とずんど立つを、末座にひかへし武藏坊、「ア、暫くお待ち下されよ」と、押沈めたる其所へ、伊勢三郎義盛、華麗に裝束改め、廻文の一巻をうや〳〵しく臺にすゑ、御前に直せば、判官座上に移らせ給ひ、「ヤア梶原、上使の一通り相濟んだれば、あれへ下つて、平家へ一味したる者どもの、名を一々に讀み立てよ」と宣へば、「鎌倉殿の上覽にさへ供へられぬ廻文を、拙者に」「イヤサ讀めといふには仔細が有る、早疾く疾く」と仰に景高立寄つて、連判狀の紐解き開き、「コリヤ如何ぢや、口の文言、我等が寺にはすつきり無い字、年號月日も知れた事」と、繰り明け〳〵、「東國八平氏の旗頭大場の平太景信、同次郎景兼、古郡の左衞門保忠」と讀みさしてぎつちり詰れば、「シテ其次の名は」「サアそれは」「サアなんと」と、問詰められてうろたへ廻れば、判官こらへず廻文もぎ取り、「去ぬる一の谷の合戰の時、某に不覺をとらせんと、おのれ一家が勸めにて、平家へうらがへつたる侍幾許

郎義盛が、平家の廻文盜みとらざる正直心、是御覽ぜよ」と、既に燒鐵手に取る所を、「ヤレ待て辨慶、早まるな義盛、疑ひ晴れて元の如く、主從なるぞ」と宣ふ聲に、二人は夢の覺めたる心地、ハ、ハツト飛びしさり、悅び勇む折こそあれ、當番の奏者罷出で、「鎌倉の御上使、梶原澁谷同道にて、只今是へ」と申上ぐれば、大將暫く御思案有り、「ヤア伊勢の三郞、察する所、此廻文渡せと有る催促ならん、其時に汝心得持參せよ、先夫までは休息すべし」と君の御機嫌、義盛はつと領承し、伺候の人々諸共に、御前を立てば花の井嬉しく、「此樣子を京の君樣へお咄も申したし、鮋鮧と颱には、逢はぬがとく〳〵お暇」と、お里をさして立歸る。鎌倉の上使梶原平次景高、澁谷土佐坊昌俊を伴ひ入り來れば、禮儀正しく義經公、辨慶諸共出向ひ、「上使と有れば方々は、鎌倉殿も同然」と、上段の間へ進めやり、御身は席を下り給ひ、饗應殊にこまやかなり。梶原平次會釋もなく、「先達て仰越されし二箇條の御不審、日逝き月來れども、便便と御申開き無きによつて、右大將家以ての外の御怒、急ぎ北の方京の君の御首討つて、廻文に相添へ渡されよとの御諚意なり」と、苦々しく相述ぶれば、物に騷がぬ御大將、謹しんで聞召され、「去る比腰越にて、神文まで指上げしに、御疑ひ晴れざるによつて、暫く時節を見合せ、申開きを立てんと思ふ所に、存じの外の諚意、追つて返答申上げん」と、仰もあへぬに澁谷

の罪に落ちる。所詮討たれぬ敵討とあきらめ、倶不戴天の父が仇を忘るゝからは、武士を立てても益なしと身退き、縊れても死なんず命を、老いたりし母が爲とながらへ有しは、弓矢神の控へ綱、此程誠の親の敵に廻り逢ひ、敵にてなき御主人を、暫しと疎みし天罰の勿體なさ、身にしみ／＼と思ひ知り、御詫願ひ奉る」と、涙にくれ／＼言上す。花の井も取繕ひ、「何かはしら木の此箱入、歸り新參の手柄始めに獻上」と、御座近く差出せば、御手づから蓋押開き、一卷を御覽有るより御氣色變り、「ヤア是こそ詮議する平家の廻文、我館へ忍入り、盗み取し曲者は、扨は三郎おのれよな」と、思ひがけなき咎に義盛、「コハ情なき御疑ひ、其廻文某が手に入りし仔細、他聞を憚る密事なれば、最前御式臺にて武藏坊辨慶に、密に語置き候ふ、追つて御聞き下さるべし」「イヤ猛々しき僞り、誰か有る、アレ引立てよ」と御諚の下、西塔の武藏坊辨慶、梨打烏帽子引立て、輪棒摺つたる大紋の、袖まくりにて御廣間の大火鉢を携へ、しづしづと御前に出で、「コハ仰々しい御憤、先刻廻文持參仕ると、此御疑ひ有らんと存じ、彼が面晴れの用意致し候ふ。コレ／＼義盛、古の高良の臣は、湯起請を取つて君の御疑ひをはらしたる例も有り、御目通りにて鐵火を握り、身の申譯立てられよ」と、火鉢に燻べたる鴈股の大矢一本、鏃を火焔に燒立てゝ、飛びちる火花を打ちはらひ、指出せばいさぎよく、「伊勢三

誤りを御赦免有り、元の通御家來となし下されかし。此間毎日々々お里へ來て、お詫びなされて給はれと、あの一人當千な侍の、身すぼらしいを見る目も氣の毒、いとしさにお次まで同道致しました。お腹帶の祝ひに持ちかけ、伊勢殿の歸參の願は大きな吉左右、伊勢の二字を偏と傍を引きわくれば、人平に生まるは丸が力とよむと有れば、當る十月にずる〳〵と御平産の瑞相」と、色も香も有る花の井が、言葉に花を咲かせける。判官始終を聞給ひ、やゝ默然としておはせしが、「傳へ聞く伯夷叔齊は、其罪を憎み其人をにくまずと言へり、すげなく追ひかへすも物の哀を知らぬに似たり。殊に武盛といひし比より、一方ならぬよしみの者、先々是へ呼出せ」とありければ、花の井額を疊に付け、「有りがたい御仁心、使のきぼも立所に、御對面有らんと有る、サア〳〵是へ」と、知らすに程なく立出づる、伊勢の三郎義盛が、主の威光に跼り、身に緋もなき鮫小紋、麻上下に垢づきし、縕袍布子も打しほたれ、携へ持てる一つの箱、案上にすゑ置きて、遙下つて平伏す。「オヽ珍らしや義盛、汝主に暇を乞はず逐電して、一旦見限りし義經を、又候や慕ひ來る、所存如何に」と宣へば、伊勢の三郎承り、「恐有る申開きなれども、君牛若の御曹司たりし時、五條の橋にて千人斬の刻、我父伊勢の左衛門俊盛といつし者を、御手にかけられしを鬱憤に思ひ込み、恨を晴さんとすれば、三代相恩の主殺

第三

風の勢は大海の浪を動せども、井の内の水を動す事能はず。九郎判官義經公、梶原父子が讒言にて、御舍兄右大將家の御不審日々に彌增し、京鎌倉と隔たつて、親々矛盾の折からに、北の御方京の君、はや五月の御懷姙、御腹帶の御祝儀も、外樣の聞えを憚りて、御譜代昵近の面々ばかり、思ひ〳〵に出仕有り、めでたき例を取結ぶ、帶の祝ひぞ賑はしき。お次の間より女中の聲、京の君の御乳人、侍從太郎森國が妻の花の井、裲襠姿しとやかに、列座をおめず打通り、御前に手をつかへ、「サテ我君樣へ申上げます、今日の御祝儀、幾千代かけて末ながき、お腹帶の儀式も相濟み、京の君樣にもお里にて、それは〳〵事ないお悅び、御乳人の役なれば、夫侍從太郎參らるゝ筈なれども、今鎌倉より意地惡の梶原が上洛して、有る事無い事、かはい男へ忍び妻が、日文を書いてやる樣に、賴朝樣へ知らするげな。夫故に目立たぬ樣に、私が參上いたしました」と披露する。「オヽさも有りなん〳〵、此義經、梶原づれを恐るゝには有らねども、鎌倉殿を敬ひ補ふ心より、今日の壽もひそかにと言ひ付けたり」と宣へば、「夫に付き、此おめでたを幸に、京の君樣のお願ひは、去年の春より行方のしれぬ、伊勢三郎義盛殿の事、

進上申す」と、手に渡せば押しいたゞき、「あつぱれ是は何よりの賜物、我子が奉公歸參の願ひ、義經公への土產物、此上の有るべきか。斯ばかり心有る昌俊殿、申すには及ばねど、我君の御事を、くれぐ〳〵賴み參らする。敵討の儀は格別、夫までは義盛昌俊殿と中好うして、君への忠義を忘るゝな。命有らば又お目に、かゝる所に長居して、人の疑ひ受給ふな。歸らせ給へ昌俊殿」「實に能く心付けられたり」と突立上り、「伊勢三郞義盛と、澁谷土佐坊昌俊が契約金石の如く、預の大事の我命、只今持つて歸り申す。さらば〳〵」「さらば〳〵」と立出づれば、義盛も突立ち上り、「天に不時の風雲有り、人に不時の煩ひ有り。病氣ならば養生加へ、早速に知らされよ」「何が扨何がさて、御邊より預る命、我身に換へて疎略はない。隨分健固に勝負せん」「オヽ嬉しゝ賴もしゝ、さらば」「さらば」と立別るゝ、鎌倉の義者都の勇者、東よ京よ娑婆冥土、「なう母樣の御臨終」と言ふ聲に、立寄る甲斐もなき俤、わつとさけべど歎けども、歸らぬ死出の片便り、情は情仇は仇、見るにたへかね忍びかね、こぼるゝ淚押つゝみ、南無阿彌陀佛彌陀佛と、心でいふも誓願力、長き闇路や三重照すらん。

に鎌倉より御不審かゝり、一大事の今此時、立歸つて御用に立たうと思ふ所存はなく、結句お爲に成る昌俊殿を殺して、梶原めが思ふまゝに、義經公を取りつぶさせて仕廻うたら、嘸冥土の父御前が出來したとお譽めなされうぞ。武士は町人百姓とちがうて、なんぼ親に孝行でも、忠義と武勇を忘れては、弦なき弓も同じ事。恥しや昌俊殿、君の爲に我を忘れ、頭を下げ手をついて段々の斷、敵同志は猶恥有る物、義理を忘れて、何ぢや、此座を立たせぬ、オヽ見事な武士道、此上は留めぬぞ。サア討て、振上ぐる刀の下、母が先へ死んで見せうぞ。エヽ悲しや、其心では一生其身で埋もれ、伊勢の名字も是限り、是を思へば昨日にも死したらば、此憂きめは見まい物、ながらへて憂き命や」と、我身を喞ち子を恨み、かつぱと伏して泣きさけぶ。三郎大きに身を悔み、「御存生の内、敵の首お目にかけたいと思ふ一途に、主君を忘れし誤、眞平御免下さるべし」と妻諸共、五體を投伏し詫言し、「ナウ土佐坊殿、仔細はお聞きなさるゝ通、母の心を休むる爲、梶原が鎌倉へ歸るまで、此方は敵討を延す所存、貴殿も愈延べて欲しき御所存か、何と〳〵」「是は〳〵忝い、必定延べて下されうか」「おんでもない事」「ハア祝著仕る。是と申すも老母のお情、お禮の申様は、夫よ〳〵、幸の物こそ有れ」と懷中より、錦に包む一軸を取出し、是こそ梶原が手より奪取りし、平家一味の連判狀、是を老母に

是ばかりは御赦されう。昌俊が命は五年三年延べても、ちつとも氣遣ひござらぬとも、結お受合なさるゝお前のお命、明日も知れぬ御大病、其病の起りはと申せは、此奴が親父様を殺した故、十三年の御歎き物思ひ、又某此方より暇を取つて浪人し、世の諺にも、老の入りまいとこそいふに、餘命なき御身に貧苦をさせましたも、此奴が千人斬の中へつきまぜた故、勿體なや、咎ない義經公を討たれぬ敵と、くい〴〵思召されたおどもりが、つもりつもつて此度の御大病、すりや親父様ばかりぢやない、お前を煩はせるも此奴が業、一方ならぬ憎さ〴〵。年來の濛霧を散ずる今日只今、首取つて莞爾のお笑ひ顔が見たさに了簡は得致さぬ。女房奥へお供申せ。サア昌俊立つた〳〵」昌「了簡ない」と裾端折つて身繕ひ。母「コリヤやい〳〵、今昌俊を討てば、父の供養、母へも孝行にはならぬぞよ」「とは〳〵如何に」と褰げを下ろし、驚き側へすり寄れば、母「父親は宗盛を一矢射んと忍び出でて、再び返らぬ昔語、かね〴〵母がいうたと、昌俊殿の物語違うたか。討つた此人も、討たれた父御前も、同じ源氏の爲を思うて味方打、親に掛換への有る物なら、此敵は討たいでも、人が卑怯者とはよも言ふまいと思へども、其處は女の智慧に及ばぬ。今討つて父の供養、母へ孝行にならぬといふ譯はな、まそつと先まで、義經公を親の敵と思ひつゝも得討たなんだは、三代相傳のお主故ではなかりしか。其お主

は是非もなし、知つては半時も同じ天は戴かれぬ、サア勝負〳〵」「夫は曲もない、所存の本意を達せんと思はゞ、返り討ちに討つ事も有るべきか、夫れは道ならず。なう御内所、仔細はお聞きなさるゝ通り、歩に首を提げられ、鎧をかたにかけぬ法も有れ、僞りなし、梶原を返すまでの宥免、お取なし賴入る」「何が扨、人にこそよれ昌俊樣、其處に僞りは有るまい。三郞殿、申し〳〵」といへども聞入れず。「いや〳〵〳〵、女の知つた事ではない、だまつて居よ。コリヤ昌俊、返り討ちに討たれうが討たれまいが、それや互に時の運、裏釘かへすな一寸も待たぬ、此座は立たせぬ、サア立上れ」といぢばる聲、「三郞待て、義盛まてやい」と、母は寢處を立出でて、嫁を杖とも杜とも、引かれ纒はれ二人が中、ヤアエイと座をしめて、苦しき息をつぎあへず、「つれあひを討たしやつた昌俊殿は此方か、オヽ健な能い器量や、義經樣を御大切に思うて、上京さつしやれた咄聞きました、いかい御苦勞、サア緩りとなされ。コリヤ義盛、餘り物が了簡過ぎる、夫では思はぬ間違が有る物と、日頃叱つたそなたが、昌俊のわけてお申しやる段々の斷、今日に限つて何故聞入れぬ。但しは生死不定の世界、日を延べて其內に死にやつてはと思うてか、夫は人による、梶原が都の逗留も、長うて百日か百五十日、昌俊の命、それまでは母が受合ふ、了簡して先往なしましやいの」「ハア、畏つたと申上げたいが、

お相手に成り、御本意遂げさせたい物なれども、あつといはれぬ其仔細、物語る内先刀を引かれよ。今度鎌倉より義經公へ二ケ條の御不審、平家一味の連判狀と、京の君の首取つて來れと、梶原平次景高を都へ上さる、彼梶原父子逆櫓の遺恨によつて、義經の御事樣々に讒言すれば、都へ上り如何樣に事を破り、御兄弟の中惡しく、御身のひしに成つてはと思ひ、鎌倉殿の御前にて一通の起請文を書き、梶原と一所に此地へ赴く、案にたがはず堀川の御所へ忍びを入れ、彼連判狀を盜取り、義經の誤りにせんとたくむ、扨こそと某姿をかへ忍び寄り、念なう其連判は梶原が手より奪ひ取り、密に義經公へ渡さんと折を待つ、是此の疵は其時の疵、梶原と一所に住む居形の内、療治の取沙汰聞えては、返答むづかしく、御邊が名を聞いて、是まで療治を賴みに來たり、思ひもよらぬ對面、我こそ親の敵よと、名乘つて討たるゝは安けれども、爰を能く聞かれよ、今御邊に本意をとげさせ討たれては、誰か殘つて義經の御身の上、事なき樣に取はからひ、鎌倉殿とも御仲よく、梶原を鎌倉へは歸すべき。かく親の敵の顯はるゝ上からは、御邊も義經公に恨みなく、主從の禮儀よもや忘るまじ。梶原を鎌倉へ返すまで了簡し、此敵討を延べて給はれば、某が初一念も立ち、義經の御身も立つ、聞分けてたべ三郎殿」と、低頭平身手をつかへ、淚をながさぬばかりなり。「ヤア聞分けぬく、知らぬ中

はづしと受け、「コリヤ早まるな、扨は只今物語りし老人が忰よな」「おんでもない事」「さも有らん、せかずとも名を名乘れ、いかに〱」「義經公の御内に然る者有りと呼ばれたる伊勢三郎義盛、千人斬につきまぜし其老人は、我父伊勢の左衞門俊盛、親の敵遁さぬはい」「どつこい先待て、其伊勢三郎は義經公の股肱の臣、何故に此有樣、それ聞きたい」「オヽ汝が今の物語、父を討つたる其時、我は駿州にさすらひ、都に殘せし此妻が方より知らせに驚き、早速都へかけ上つたれども、千人斬も早事濟んで、誰を敵と討つべき樣なく、又本國へ下つて無念の年月を送る所に、不思議に義經公の家臣と成つて、西海四海の戰ひにも、影身を離れぬ我なりしが、五條の橋の千人斬は我なりしと、去春初めて御物語、討てば主、討たねば親への孝立たず、奉公は猶ならず、母を養ひころしての、跡は浮世を捨坊主と、合點して暇を取り、其の上盜賊せし時に習覺えし此營み、昨日敵は外に有りと、女房がつきまぜの譯を聞出しても其名を知らず、再び心をくるしむる所に、思はぬ今日の對面は、親人が是討てと、手を取つて連れてお出でなされたか、ハアヽ忝い有難い。優曇華は拜んで折る、親の敵は拜み打、立上れ、サア參らう」と詰めかけたり。「待て、早まるな言ふ事有り。ヤア家來ども尾籠千萬、何を立騷ぐ、此家を遠ざけて歸るを待て、往け〱。扨々、承つて御心中察し入る。いかにも爰は

入か強盗か、如何で碌な事では有るまい」「ハテ迷惑な、さう問はれては、語らずばかなふまいものでおぢやる。此疵は十三年以前、其比は平家の世盛、身が譜代の御主人は、仔細有つて東國に漂泊の御身、京都の便を窺はんと、某一人都へ上る、比は三月初めつかた、地主權現の花盛、太政入道の次男平の宗盛、湯谷といふ女を倶して終日の花見の歸、是ぞ能き折節、見参せんと、六波羅密寺の小藪の陰、立忍ばんとすれば人有つて、狼藉なり、何者といふ。木にも萱にも心置く身の悲しさは、平家より付置く忍の番と心得て、返答もせず拔打にてうど斬る。彼奴もさる者、心得たりと拔き合せ、したゝかに切付けしは此疵痕、されども難なく切殺し、見れば六十餘りの老人、側に弓と矢有り。扨此人も源氏の餘類、宗盛の歸りを窺ふ我同腹中と、跡で心は付きたれども詮方なく、早追々に警固の提灯星の如く、見付けられては事むづかしと、死骸を引提げ、程近き五條の橋に捨置きしは、其比如何なる者やらん、五條の橋にて千人斬、跡で聞けば、義經公千人斬の十三年、追善供養なされしとや。夫とはしらず、其仕業にせん物と、一時の計略、今源氏一統の世となつて、恐るゝ方はなけれども、好事すら無きには如かじ、必々他言は無用」「何が扨人には語るまい、して其時の御假名は」「澁谷金王丸昌俊、今は澁谷土佐坊昌俊」「親の敵遁さぬ」と、ずばと拔いて打ちかくる。飛びしさつて拔合せ、

を、此上の心づかひ、御苦勞なさるが悲しい」と、涙催す折からに、表に人數多足音して、「頼乘物舁きする立出づる其行粧、頭は薙髮の大男、足利樣の長羽織、平柄の刀提げ立出で、「頼入らん」と案内請ふ。女房立出で、「何方ぞや」と答ふれば、「南蠻の骨接、郷右衛門といふは此家とな、在宿ならば御意得たし」「ハヽ何方か、幸ひ宿にをりまする」「然らば罷通らん」と、しづ〳〵と奥に入り、「未だ不知案内御免有れ、郷右衛門とは和殿よな、仔細有つて我名は申さぬ、骨接金瘡の療治御巧者と承つて推參致す、頼入りたし」とありければ、「功者と御聞きなされし上は、下手と申すも諂がまし。某が癖として、名も處も聞かいでも、お頼なれば療治致す。シテ其お痛みは」「療治してくれめされうか、忝い〳〵」と、弓手の片肌押脱いで、疵さし向ければ立寄りて、包みし袱紗物解きほどき、とつくと見、「ムウ疵口は僅なれども、鎧骨に當つて、しかも手の内定らぬ鈍刀疵、是は嘸お痛みなされうが、療治致さば早速御平癒。女房膏藥箱持つて來い。ホウ肩先にも古疵の痕、こちらの切口とは違うて、オヽ天晴な刀の痕、此時は嘸御難儀、御人體に似合はぬ、さい〳〵斬られさつしやるの」「されば〳〵、其疵は十三年以前、身も未だ浪人の時で、養生に迷惑いたいたさ」「何として又切られさつしやる、浪人の時ならば、辻切追剝でもなされての事かい」「イヤ左樣でない」「さうでなくば押

もなく、耆婆や華陀がわせても、切放して何と接がるゝ物ぞ、臆病を見込みて身を引く拍子、手をさへずに本復させる、是が南蠻祕密の療治、此膏藥で膨も減る、何と奇妙な療治か」と、聞いて皆々恟りし、「扨も頓智、御發明、頓ての内に天下道具、怪我せうならば今の内、神か佛か長居は恐、是々腕が動きます、足が自由に成りまする、ハア有難い忝い、サアお暇」と女房の側、面々謝禮差置いて、悦び打連れ歸りける。夫は奥を窺ひ見て、女房を小隅へ招き、「母も未だお目が寤めぬ。此間に夕べ道すがら咄した事を、今一度聞きたい。彌夫れが治定で、義經殿がお討ちやらねば、親の敵は外に有る。嬉しや義經殿と違うて、討つに義理も遠慮も要らねば、その敵誰ぢやといふ、夢程も心當がない、雲に汁が出來た樣で、又雲をつかむ樣で、分別に能はぬ。萬に一つ、聞いた内、手掛に成りさうな事はなかりしか、今一度語れ」と念入るれば、「サアさう存じて段々念を入れたれば、駿河殿も繰返し〳〵帳面の御吟味、何月、幾日の夜幾人、何の物著て、幾歳ばかりで、如何で斯樣でと、小袖の模樣年恰好、刀脇指の拵まで明白な帳面、都合九百九十九人は、其所緣の衆が皆施行戴いて歸り、千人目は武藏殿で、帳面さらりと打濟み、微塵も胡亂な事もなく、手がかりに成る筋は猶なし。おいとしや、誰が殺して千人斬の内へつきませ、科ない義經樣を疑はせ、大事のお前は埋らせ、是までさへ有る物

藥に及ばぬ、退いたく。次は見しつた、六地藏の捨鞭の三藏ぢやないか、なんとした」「アイ旦那殿、あたほつこしもない、さきをとゝひ、鎌倉行の二十二三貫有る荷を付替るとて、此腕がほつきりというてから、痛んでから、かゞまいでから、此樣に膨が來てから」「もう好いは、からくいふな、診てとらせう爰へ來い。ホヽウ、したりなコリャ大事、肘の骨が齟齬うた、嘸痛う。惡うすれば死ぬれども、南蠻の骨接、鄕右衞門が祕密の療治、立所に癒してやらう。女房、細引もつておぢや。オヽ好い時見せて仕合者」と、痛む腕を引きよせて、柱にしつかと括付け、羽織引脫ぎ身輕に成り、手水鉢にさしかゝり、ずばと拔いたる大刀物、水さらくと汲みかけく、鼻の先を閃めかせば、見るに生きたる心もなく、「申しく、夫で如何なされます」「腕打放して繼ぎ直すはい」「なう悲しや」と大聲上げ、エヽくくと男泣、「馬鹿なしやツつら、吠ゆれば癒るか、今切放して接ぎ直せば、本の如く役に立つ、捨置けば次第々々に腫上つて、終には一命を果す基と成る。切放す間は一思、役に立つは身一生、人も聞く、吠えまいく」「でも慘たらしい」「慘うなければ療治にかゝらぬ、サア今切るぞ」と振上げて、てうど切る眞似おつと飮む、呼吸のはずみ引く拍子、腕の番がつくりと、「もう好いく、違うた骨がとつくとはまつた、最早痛が止まうがな」「ほんに止んだは、スリャ切り放しはなされぬか」「ハレやくたい

いたみさへ癒れば、取られた錢は一精出せばつい戻る。どうぞお慈悲でござります、御療治なされて下さりませ」「直しておませう。女房ども、あぼすとろんに、あるまんすを些と混ぜて付けておましやれ。次は誰ぢや」「イヤ私でござります」と、きどく帽子に手綿被せ、頤かけて引つくゝり、目ばかり見せたは何女、親父めく者連れて出で、「私は山科の挽物師、此奴は嫁でござりますが、コレ此樣に」と、綿も帽子もかなぐれば、頤はづれてぶら〳〵と、翁の面見るやうに、鼻から下の面長さ、「聟が達者で甘い物食はせ過し、頤が落ちた、蠅も得追はぬ樣に成りをつたと舅の歎、轆轤で骨を削らる樣な、御療治頼上げます」と、おろ〳〵涙いぢらしゝ。「いや左樣でない、此名を落架風というて、男女に限らず、仕事するか物を見るか、なんでも有れ氣を盡かすか、或は阿呆氣に欠などすれば得て有る事、此儘で置けば物も得食はず、段々と頤が重うは成る痛はする、死なうより外はない、其方は一大事、此方は心安い療治、癒しておませう。女房ども、風呂敷よこしや。エ、殘多い、京中の腹膨どもに是が有れば、一かど禮銀してやる物、しぼつても痩親仁、よもや汁はたるまい」と、戯れながら風呂敷すつぽり打被せて、頭抑へて頤を、いらふ手品の一はずみ、「サアかゝつたは」と風呂敷とれば、嫁は會釋し手をつかへ、「扨も〳〵有りがたい」「コレ物言ふまい、二三日もあしらはねば、又はづれる。

得」たち出づる鄕右衞門、紙子羽織の大廣袖、金氣はなれし柄廻、內でも不斷大だらを、さすがに武士の浪人と、いはねど見ゆる其風情、「オヽ皆待遠にござらう、身共が老母大病今晚もしれず、療治どころぢやなけれども、折角わせられたもの見て進ぜう、一番は誰ぢや」「私でござります」「なんと召された」「夜前京からの戻りがけ、松坂の成敗場を通ります時、かねて追剝が出る物騷なと申すに違はず、太山の樣な、てうどお前樣の樣な」「ハテ迷惑な、身は追剝は致さぬぞ」「イヤ〳〵お前樣とは申さぬ、樣な男でちやうどお前樣の樣な怖い聲で、酒手をよこせと申しました。私も見掛と違うて、腕に覺は有り、今一倍怖い聲で、大津池の端に隱ない針右衞門知らぬかい、剝いだ物が有らば此方へよこせと、いふやいなや剝ぎにかゝる、まつかせと引擔いて、深田の中へ眞逆樣に、投込みは込みましたが、此胸ががつくりというて痛出し、やう〳〵杖に縋つて參りました、療治賴上げます」と、卽ち剝いだ其人に、まつかいさまの物語、をかしさこらへて鄕右衞門、「夫れはいかいお手柄、どりや疵見て進ぜう」と、脛押しまくりとつくと見、「コリヤ投げた物ぢやない、お身手痛く投げられたな」「アノ夫が見えますか」「投げられたばかりぢやない、剝れたまでが見え申す」「ハテ面目もない、何を隱さう、したゝかに投げられました。されども心有る追剝で、財布に遣ひ殘した錢ばかり、著物はたすかつた。

能うも〳〵、此様な怖い事」「オヽ思付いたも母を助くる營、武士の落目に切取强盜恥にもならず、それゆゑ非道の銀はとらぬが、さう言ふわれや母の病氣の介抱を、隣の嚊に誂へて、今まで何處にはひつて居た」「サアわしぢやとて母御の側、常は一寸放れねど、今日は父御の御命日、せめてお墓へ水なと手向きよと、參つた戻に五條の橋、千人供養の所へ往ての」「ヤアおのれや施行受けにうせたな」「ハテなんのいの、イヤサ夫れ受ける程なりや、此態になつては居ぬはいの。コレそんな事ぢやない、大切な今の事」「ヤ今の事とは」「ハテ彼の相手が違うたはいの」「ヤアそりや如何ぢや」「サレバ、段々譯は有れども長い事、爰で咄すも內が氣遣」「オヽそれよ、道々聞かう、サア〳〵來い」と、打ちつれて、歸る夜嵐山颪、梢木の間もさらさらさつと、吹けば散るてふ身の住家、急ぎてこそは三重越えわぶる、浮世の峠瀬苦しき、大津と京の世渡り道、向脚から出る日の岡に住む浪人有り。南蠻の骨接鄉右衞門と名を記し、桐の古木の看板も、琴の音ならで世にひゞき、つめかくる療治人、切疵、打撲骨違、或は脚氣願外れ、其それ〳〵の膏藥を、妻は見馴れて習はねど、のべて離れぬ女夫中、人の痛は直せども、夫の老母の御大病、藥も術も盡きはてゝ、夫れ故心の痛みには、付けう藥もなかりけり。女房膏藥延べしまひ、奥を覗いて、「申し〳〵、御療治人が二三人も待つてござる」「おつと心

を叩き身を悶え、只わつ〳〵と、泣くより外の事ぞなき。「ムウ何ぢや、親の大病、人參が呑ませたさに、妹が給分借つたのか」「アイ漸と拾匁、夫れをお前にしてやられて、親父樣は死にやります。悲しい目を見やうより、寧そ殺して下され」と、歎けば共に涙ぐみ、「ム丶身共も煩ふ母一人、孝行は同じ事、コリヤ銀戻す、大切な場に成つて、髭位では届くまい、大人參で養生せい」と、板銀一丁投出せば、「エ丶イ是をわしに下さりますか」「オ丶孝行を感じておのれにやる。人の親も我親も、大事に思ふは同じ事、親の爲にする追剝、惨い銀は取らぬはい」「エッエ忝い、慈悲深い結構な盜人樣、お銀を下さる冥加の爲、せめては布子を脱ぎましよか」と、帶ときかゝれば、「ヤイ馬鹿め、剝ぐ程なれば銀はやらぬ、隙入らずと早うせて、養生しをれ」とつきやられ、「是はまあ夢ではないか、追剝樣に銀貰ふは、命冥加な親父樣、人參が切れたらば、又剝れに參りましよ」と、銀戴いて歸りけり。「エ、吠えをつたばつかりに、板一丁ついもめた」と、跡振返ればしろ〴〵と、雪かと見ゆる雪洞綿、引きしめ着なす女の所體、「味い〳〵、眞裸にしてこまそ」と、歩みくる先突張つて、「コリヤめろさい、褞袍脱げ」といふに驚き、「ア丶怖は」と、跡へ逃ぐるを引捉へ、顏見合せて、「ヤア女房どもか」「郷右衛門殿か、是は扨、此方はまあ如何して爰へ、ム丶聞えた、此間毎夜々々出さしやるを、合點がいかぬと思うたが、

らう、了簡なされ」と、言捨てゝ迯げんとす。「どつこい遣らぬ」と飛びかゝり、肩先摑んで引けひよろ〳〵、「アヽこりや如何ぢや、引戻すはあざきりか」「ヤア動くな、四民をはづれ野ら遊のほでてんがう、おのれらに金銀持たすは國土の費、とても口先では渡すまい、手短にばらしてくりよ」「ア、其ばらすはきつい禁物、まゝよてんとれ金四郎が不運、唄七里八里は馬でもこすに、越すに越されぬ姥が懐、我らが懐是非がない、どうだいに三つを見た」と、皆捲け出して迯げて行く。爰へいきせきくる男、暗さは暗し氣はいらつ、行當つて、「あいたしこ、御許されて下さりませ、少と急用が有れば、氣のせく儘の麁相」「イヤ麁相は赦す」「アイ〳〵」「其代に酒手せうはい」「エヽイ」といふより身はわな〳〵。「サア出せ」「アイ〳〵」「出さぬか」「アイ〳〵」「出しをるまいか」と引捕へ、わつと叫ぶを無理無體、懐探し、「コレ〳〵、これ程有る物を、強い奴ぢや」とつき飛されてどうど伏し、涙はら〳〵大聲上げ、「テモ扨も情ない、たゞさへ術ない暮らしをするに、一人の親が大煩、今をも知らぬ危い命、せめて髭人參でも進ぜたら、取止める事も有らうと、心はせけども、何を如何とのあだてもなく、せん方つきて京の妹が給銀の內、拾匁借つて貰ひ、一足も早う往んでと、力に思うた甲斐もなう、此樣な目に逢うて、すご〳〵戻つて何とせう。見す〳〵親を見殺すは、テモ扨も情ない」と、大地

の惡口、相手に成つて入らぬ物、赦してこまそ」と、退いて見てもむしやくり腹、思へば無念と又取付く、腕もぎはなし、素首弱腰引摑んで、深田の中へどうど投ぐれば、「あいたゝ、さつてもひどい、コリヤ酷い」と、身内を撫でて「南無三寶、今の拍子に財布を落した、ア、儘よ、其處等に有つても臭しやせまい。エ、こんな事なら、構はなんだが勝ちやもの、力だてして錢出して、痛い目するは盗人におひ、されど布子は助かつた」と、はふ〱迯げて歸りける。財布取上げ「是は扨、足りにもならぬ目腐錢、無駄骨折つた」と呟く向へ、「來るはく、此奴は慥に實の有る奴、遁しはせぬ」と咽づんばい、先はそれとも知らねども、心から吹く臆病風、ぶう〱者はをらぬかと、こはさ紛らす高念佛、「なまいだ、なむあみだいやほう」ほうど出くはせ、「コリヤ遣らぬは、其懐な物置いて往け」と、聲かけられて、「ア、恐は〱、持合がありや如才はない、いかな〱一錢も」「ヤ無いとは言はさぬ、とぼけまい。體に似合はぬ奴が足音、重い輕いで、有る無いは目をかけた程知つて居る。錢も有らう、金もしつかり持つてをろ」と、星をさゝれて、「コリヤ奇妙、ア、目高に逢うてゝめはならぬ。我等は三條釜の座の、金四郎といふきん五好、夕べ大津で引つかけたりや、勝つ程に〱、板銀一丁錢三貫、汗水流して取つた物を、又物せうとはそりや胴慾、今夜の所は圍うて貰ほ、重ねて進ぜるしびんも有

て」と強請の胴聲、聞いて悩り飛退きしが、「ム、合點々々、爰は名代の姥が懐、狐狸のわざでも有るまい、剝奴等に極つた。望む所」とずつと寄り、「大津八町に隱れもない、池の端の針右衛門知らぬかい。待てと吐すは何奴ぢや」「オヽ針右衛門聞及んだ、おりや見えた通の稻村」「ヤ此奴滅相な、橙子が物言うたは見世物に有つたれど、稻村が口利いた例がない。馬鹿つくさずと、用が有らば出さつて吐かせ」「オヽ出なというても頰見にや置かぬ」と、によつと出でたる大男、力士の如く突立てば、ぎよつとせしが怯まぬ顏、「コリヤヤイ、われが用は聞くに及ばぬ、酒手で有らうが、温かに此男、鼻紙一枚やりやせぬはい。退いて通せば其方の仕合、惡う働きだてすると、身内が鐵の針右衛門、くつしやくしや突いてくりよ」と、力みかゝれど見向もせず、「ハテ姦しい、頤たゝかずときり〳〵脱げやい」「ヤア何ぢや脱げ、ハヽヽヽ、此奴こりや寐とぼけたか、相撲ぢやないぞよ。裸にしたくば、腕先でならばさあ取れ、サア剝げ」と、身構しても動かばこそ、「ヤアをさめ過ぎた盜賊奴、此ぶつぶとふきでる力、此方から見せ付けん」と、胸づくしをしつかと捉り、「何と嚴いか、どうも得せまい、所をずつと斯う差込み、引つ擔いで、コリヤ可かぬは、めんよう、常は能ういくが、さあと言ふと場うてがする、ムヽ其筈勝手が違うた。今度は斯う取る、うんと、是でもやられぬ、やられぬ物は乞食

の一々言へ、聞かう」「イヤ小癪な、汝が聞いて何んと判斷なすべき」と、手綱掻繰り乘出す、尾筒を摑んで、「待て〳〵、言はぬは曲者、何分主君の館へ參れ、異議に及ばゞ鞍つぼに括り付け、引きずつて行く、覺悟せよ」と、一二三間引戻し、尻居にどうど投付くれば、梶原馬上に反橋形、「エヽ憎くき淸重、上使に向つて重々の狼藉。それ引くゝれ」と、聲に隨ひ數多の家來、ばら〳〵と立ちかゝるを、駿河次郎、得たりや應と取つては投退け、摑んでは打付け打付け、梶原目がけ飛んでかゝる。こはかなはじと一鞭あて、一散にかけ行けば、家來もはふはふ迯げちつたり。何國までも遁さじと追ひかけしが、「いや〳〵、一先主君に申上げう、思へば憎い梶原め」と、駈出しては立戻り、「よし〳〵、生けて歸すも千人供養」と、心一つでとつおいつ、思案の底を堀川の、御所をさしてぞ　三重歸りける。都の出口來て見れば、愛宕參りや伊勢參宮、引きもちぎらぬ往還も、夜は旅行の跡絶えて、人音まれに粟田口、木々の梢も若草も、名殘の霜に照添ひて、姥が懷物凄く、星の光も曇る夜の、黑白なき道をのつさ〳〵、歩み來るは大津の町、古き老鋪の店を張り、みゝずも通る名も通る、往來もとうて池の端、針右衛門とて遠目にも、光る鬢付頭がち、强い事好く腕自慢、覺もなりより力より、心ばかりの浮氣者、京の得意を駈廻り、日暮れて歸る道の邊の、側へに積みたる稻村より、「ヤイ待て待

と、御蔑しみも耻かしや。外に殺人有らうとは、夢にも思ひがけもなく、せいた儘の惡口雜言、御赦されて」と立上れば、「オヽ疑ふも尤、親を討たれし夫が心根推量せり。身共は駿河次郎清重、用事有らば館へ來れ」と、慈愛の詞に一禮のべ、春の日脚も八つ頭、暮れるにはまだ程遠き、日の岡さして立歸る。折から梶原平次景高、頼む鮫島藏人は、義經に討取られ、盗取つたる廻文も奪はれ、若しは尋ぬる手がかりもやと、詮議のあてども雲をつかむ、雲雀毛に打跨り、清重をちらと見付け、惡い所の出合頭、駒の頭もうなだれて、知らぬ顏に乘過ぐる、見ぬ顏させぬと駿河次郎、向うにすつくと立ちはだかり、「ヤア珍らしや梶原、汝上洛せば、早速主人の御館へ參るべきに、面出しもせず、洛中は主君の膝元、馬の蹄にかけ乘打するは、フム合點合點、平家亡びてより、鎌倉殿と御兄弟御中睦じからず、汝親子が讒言にて、討手に來たるに違はぬ〳〵。サア堀川の御所へ參つて、有の儘に白狀せよ」と詰掛られ、返答ぎちとつまりしが、弱身を見せじとから〳〵と嘲り笑ひ、「景高は大名、左樣の禮儀をしるまいと思ふか、此度鎌倉殿より御不審の條々、一々承つて上洛したる梶原は御上使、汝等風情が乘打を咎むるがまづ緩怠、一つには又判官殿、言譯の筋も立ち、御兄弟の御中、御和睦も有る樣にと、加茂祇園北野の社に祈誓をかけ、只今參詣する所」と、口から出次第神集め、嘘八百に言廻せば、「サア其御不審

らみも人により時によると、思ひくらせし年月も、十三年のお弔ひ、是はまだしも奇特な事、望み有る舅の命、外々よりも經念佛、たんと唱へて冥途の妄執、晴らして進ぜて給はれ」と、目には涙を持ちながら、言ふ程の事しとやかに、武士の妻とはしられける。語る中より駿河次郎、只フウ〳〵と小首をかたむけ、「先待て女、見る通り、千人供養も最前の三人にて、九百九十九人の人數悉く揃ひ、千人目は武藏坊辨慶にて、お帳面もしまる所に、思ひもよらぬ只今の物語、一圓に合點ゆかず、其の又月日は」「アイ、則ち今日が舅御の祥月命日、齋米持つて墓參りが慥な證據、見す〳〵切られて逝た人を、覺えないとは御卑怯、良人は武士の浪人と聞き、お主思の僞か」と、せきにせいて詰めかくれば、「默れ女、天下晴れた千人供養、そちが夫を鬼神にもせよ、武士の虚言を言ふべきか、我君の手にかけ賜はぬといふ證據、せかずとも心を鎭めとつくと見よ。月の三日は休日と、日次の控へに記し有るは、御父義朝の御命日、人は勿論魚鳥の殺生さへ戒め給ふお精進日、其日に限り汝が舅、何故殺し給ふべき、ナ合點がいたか」とくゝめる樣に語れば驚き、「エヽイ、そんなりや外に殺人が」「ある〳〵、察する所、老人に意趣有る奴、切殺して千人切につきまぜ置きしに疑なし」と、聞いて女はハアはつと、しばし詞もなかりしが、「御覽のごとく身分貧な私、無い事も有る樣に言ひなし、施行のお銀を貪るか

かに切られたは一昔、土用八專寒の入は、慥にうづきの十八日、お觀音の下向道、淸水坂に契を結び、安物に通ひ樽、ころりと明けた醉機嫌、しやつぷり一太刀、劒も折れるは大悲の誓、まさかのときはかなはぬ、夫れから再び此橋へ、紺のだいなし看板を、うたぬばかりの迹疵痕、御施行も疵相應に、ずつしりでごはりませう」とかツつくばふ。駿河次郎は月日刻限、一々に引合せ、「汝らが詞に違はぬ、是で九百九十九人の帳面濟む、必々お上の御恩、仇疎かに存ずるな」と、銀子も一枚平等に、足り不足なく與ふれば、「やれ忝や有りがたや、お銀子貰うて尻切らるゝとは、正眞の聾の裏、斯樣の事なら、千人切にまあ五六度もあうたらば、閏の有る大晦日の拂の足しに」と打笑ひ、別れ〳〵に歸りける。跡へ來るは誰ぞとも、三十餘の女房、綿帽子眉深に顏かくし、世帶染みても爪はづれ、只ならぬ日の物詣で、樒に念珠繰り添へて、假屋の前に手をつかへ、「私は日の岡に住む浪人の妻、連合の父御、わらはが舅、其時はまだ六十に足る足らず、春の日の長きを暮しかね、都は花の最中、氣延しに見物と、浪人の錆刀、衣裳は汚れ垢づきても、心は汚れぬ武士の浪人、嫁女、留守能うおもしやと暇乞なされし、其俤が此世の見納、知らせによつて駈付け見れば、此橋に切殺され、敵なき御最期取りませて、夫は奉公稼の留守、姑御を始めわらはが歎を御推量、跡で切人は判官樣と聞きたれども、恨みつ

参おそなはる、さらば〱」と源八兵衛、別れて御墓へ詣でける。駿河次郎日次の大帳押開き、「コリヤ〱、汝ら最前も言ふごとく、我君の覺書に、少しにても相違有らば、御施行は渡されず、銘々其夜の物語、早とく〱」と有りければ、雜色供人いかつけに、「出ませ〱」の聲に隨ひ立出づる、年は四十の肩で風、「ぶう〱仲間の立者と、人より先に鳥羽の里、車遣の其中で、腕に覺の若盛、往來をなやます天狗の若衆、出合うて見たさにわざ〱と、一里餘をきさらぎの、晦日の夜に暗がりから、牛若樣とは重荷に小附、祝ひ額を此の如く、切られましたは丑の時、まうとう違ござりませぬ」と、語りける。チヽ其詞も合鮫の、古びた一腰さつするに、禰宜の中でもかすけの天窓、頤かけてきられしは、口先ばかりで世を渡り、商賣とてはせん本通、軍書歌書の講釋師、「其頃は地主祭、夜講釋して歸るさ、しかも春雨しきりに降つて氣味惡く、たゞ一人橋臺に差しかゝれば、暗さは暗し、墓地に討つてかゝる、受けつ開いつ、追ひつまくツつ、判官樣は欄干傳ひ、擬法珠に片足立て、慥切つたと思うたは違はず、草履の鼻緒踏切つて、輾けつ轉びつ、なう悲しや人殺と、たつた一聲ゆふ顏の、五條あたりのしるべへ駈込み、あまの命を拾ひし」と、おのが家業の仕形咄、今見る樣にしやべりける。それに違も「ないない〱、身共は御所のお道具持、御覽の如く奴めが、髭と尻とは晴れ道具、其尻をしたゝ

施は財と法と無畏の三つ、權者の詞盛んなるかな。九郎判官義經いまだ牛若たりし時、五條の橋の千人斬と、世の取沙汰も年月も早十三年、千人供養遂ぐべしと、橋詰に假舍をうたせ、幕の中には駿河次郎淸重、斬られし者の月日刻限、日次の扣に引合せ、御施行をひかるべしと高札を立てければ、洛中洛外の町人百姓、聞傳へ〳〵、おれも切られた、娘も切られたと、毎日五人十人宛、疵言立に笹原を、橋詰にこそ詰めかけたり。かゝる所へ源八兵衛廣綱、「御廟參の次ながら、お見舞申す」と假舍に通れば、「是は〳〵廣綱殿、今日は頭と殿の命日、御菩提所へ御代參か、嘸御苦勞」「いや〳〵何の苦勞、誰あらう義朝公の御命日、源氏の祿を食ふ者、月の三日は、廟參せではかなはぬ。して御自分の役目の千人供養は」「されば〳〵、日を逐つて漸くと、人數の都合も今少し、あれへ詰めたる三四人、九百九十九人、さりとは我君、御若年の時なれども、僧正坊に習ひ給ふ劍術の手ひどさ、いつかな〳〵、刃向ふ奴もないと見えて、毎日々々來る人に、手疵おはぬ者はなく、其時は平家の世盛り、往來の剛臆を見て味方に付ける御所存なれば、一命を果す程の深手もなく、萬一死たる者には、親類によらず、緣者の端にも格別に、弔料下さるゝ」「フウ、したり〳〵、今草木も靡く源氏の御代、斯樣の施なされぬとて、誰がぐつと言はねども、下を惠む御仁心、天晴源氏の好き礎、ヤア何か言ふ間に、御代

なければ、鎌倉への聞え、旁々以つてかなはぬ願ひ、いたはしながら、御臺はこなたへ伴ふべし」と、簾中さして入り給ふ。斯くと聞くより鮫島藏人秀氏、一味の惡黨從へて駈け來り、「ヤアヤア駿河源八兵衛、何もかも皆聞いた。主人時忠の無念晴さん其爲に向うたり、覺悟ひろげ」と呼はるにぞ、「ヤア時忠卿に謀反をすゝめし親粒の鮫島め、束の間もゆるしは置かぬ」と、二人は夜叉の荒れたるごとく、猛勢一度に切つてかゝるを事ともせず、弓手馬手へ薙立て〳〵追捲れば、言甲斐なくも鮫島藏人、逃惑うてうろつく所へ、駿河源八一散にかけ付けて、腰ぽんとふみのめし、「此奴が樣なへろ〳〵侍、刀で殺すは大人氣なし、鮫島なれば片身づつ」と、兩足左右へ引張つて、ヤアエイ〳〵のかけ聲にて、さら〳〵さつと引裂き捨て、勝色見する梅の間松の間柳の間、御殿々々をかり立て〳〵、爰は所も櫻の間、緋櫻ちらして、彼岸櫻のちりぢりぱつと、逃散る敵の犬櫻、一重櫻蒲淺黄、天狗櫻や虎の尾の、勢有りあけ月花の、都の外の外までも、二人が武勇の譽は高き山櫻、枝をならさぬ源氏の御代、浪靜なる堀川の、御所の櫻ぞさかんなる。

第二

き上げ、「エヽにつくき女め、夫の訴人好くしたな」と、言はせも果てず義經公、「ヤア其一言が謀叛の證據」駿河源八、「承る」と雙方より、「捕つた」とかゝるを御臺は目もくれ、氣も狂亂のごとくにて、「其繩目が悲しさに、幾度か〳〵、妾が留めし異見諫も用ひなく、過去りし平家の一門、非道奢の天の責にて、亡びしとは氣も付かず、仇よ敵と狙ふは聟の判官殿、連れ添ふ娘が難儀と成るも顧みぬ謀反の企、愚な女の思案より訴人して、其訴人の恩賞に、夫の命たすけてと、詞を番ひし甲斐もなく、此縛は何事ぞや。殺さでかなはぬ道ならば、自らを代に立て、連合をゆるしてなう判官殿」と、前後不覺に嘆かるれば、時忠卿も今更に、御身の惡事の數々を、思ひしら洲に差しうつむき、面目なみだにくれ給ふ。大將しばらく御應もなかりしが、「オヽ女氣の一途に恨まるゝはさる事ながら、今鎌倉には梶原有りて、やゝもすれば讒言をかまゆる時節、聟舅のよしみ有る故、結句用捨成り難く、繩かけさせたは政道の一條、契約の通、訴人の功に命を助け、能登國鈴の御崎へ流しつかはすべし。早とく〳〵引立てよ」との御諚に隨ひ、警固嚴しく左右を圍み、配所をさして追立て行く。御臺は有るにもあられぬ風情、「如何なる沖つ島守とも成らばなれ、夫婦諸共やつてたべ」と、せき入り〳〵くどかるれば、義經公聞召し、「そも流殺の法は、黃帝の御代に始つてより、妻子を相添へながしたる先例

くおほすらん」と、仰もあへぬに時忠卿、から〱と打笑ひ、「扨はかゝる仰々しき有樣は、靜にたはむれし事共を、聞きはつゝての疑よな。それしきの儀を取上げて、謀叛とは近比粗忽粗忽」「イヤ此期に及んで言ひぬけんとは、未練の一言、昨夜平家の廻文を盜まれ、申譯の爲に腹切つた鎌田の藤次を、靜と不義の體にもてなしたも、其元の巧見出さう爲の僞、廻文の行方も、此方の胸に覺が有らう。然れども此詮儀は所存有つて用捨いたす、差當つて謀叛でないとの申開承らん」と、席を打ちて宣へば、「イヤサ先達て娘京の君を遣し置いたが、某に二心の無い好い證據」と、あらがひ給へば源八兵衞、「然らば最前の謀に載せられ、義經公を亡さんと有りしは如何に」「イヤそれは」源八「サアなんと」と問ひかけられて、「ホヽ、それこそはよき糺明、靜を我手に入れ、判官と娘が中を睦まじくあらせん爲に、戀路の闇と見せかけて、誠は子故の闇なるぞや」源八「ヤア戀路でも子故でも、闇盡の言譯暗い〱」と、いふに氣ばやき駿河次郎、「最早御詮儀には及ばぬ、叛逆に極まつた。アレ搦めよ」と下知すれば、又ばら〱と詰寄るを、「ヤアはやまるな」と、判官捕手を制し給ひ、「かくあらがひの上からは、招き置いたる訴人を是へ呼出せ、はやとく〱」との命に應じて、源八兵衞廣綱が、伴ひ來るは時忠の御臺所、兼て覺悟の心にも、かはる浮世の數々に、思ひなやみ立ち給ふ。時忠見るより嚇とせ

れて、施のお銀いたゞかせう」と、惡口たら〱、主從打つれ奥に入る。跡に靜はたゞ獨、涙にくれて居たりしが、藤次が死骸の一腰追取り、既に自害と見えける後に、「ヤレ待て」と馳出づるは時忠卿、「むだ死するか」と押しとめられ、「無駄死とは曲もない、なんと是が生きて居られう、留めずと死なして下さんせ」と、振りはなすを猶抱き留め、「最前よりの始終、物蔭にてとつくと聞いた。あつぱれ汝は女に稀なる心中者、其心底を見る上は何をかくさん、元來京の君を義經に嫁せしは、餌にかゝうて肌をゆるさする一つの方便、今死ぬる命を存らへ、兼々くどく此時忠にはなぜ從がはぬ、命取め」としなだれ給へば、「エヽイそんならお前は義經公を殺すお心か」「アヽ音高し、人や聞く」と、前後を見廻し給ふ所へ、とつた〱と捕手の役人、十手打ちふりおつ取りまく。上段の御簾さつと捲き上げ、九郎判官義經公、有りしにかはる御出立、裝束改め、源八兵衛廣綱、駿河次郎淸重、左右の翼と隨ふにぞ、飛龍の氣を呑む御大將、悠々と床几に直らせ給ひ、「ヤア靜、覺えなき身のしばしが間も不義者といはれ、嘸いぶせく思ひつらん、斯く計ひしは時忠の惡逆を顯さん爲、罷立つて休息すべし」と宣へば、扨はと悅び靜御前、袖は涙に濡衣の、面目すゞぎ入りにける。「ヤァ時忠殿、京の君を餌に、此義經に肌をゆるさせしと宣ふが、此方は又靜といふ餌にかゝり、巧まれし謀叛を見すかされ、さぞ本意な

押つ取り、繊弱き脊骨をちやう〳〵〳〵、銚子の酒に身はひつたり、花を粧ふ衣紋も亂れ、わつと涙にむせびしが、「エヽお情ない氣の廻り、そもや君の目をぬいて、悪性しさうな靜ぢやと、思し給ふか曲もなや。身の言譯は有りながら、證據になる相手は切腹、何をいふとも死人に文言、不義淫の名を取つて、先だつ命はいとはねども、老いたる母の磯の前司、兄様は有りながら、親に不孝な生れ付、わらはが死んだ其跡では、嘸母樣の便なかろ、未來の迷は是一つ。二人の衆、なぜに留めて下さんす。いつそ君の御手にかけ、殺してたべ」とばかりにて、恨仰ちて歎きける。「オヽ望の通、鎌田が冥土の供させん」と、白洲へはつしと蹴落し給ひ、「駿河次郎あれ計らへ」と有りければ、源八兵衛憚なく、「コハ御短慮なる御仰、流の女の僞表裏は天下晴れたお定、それを何かと御遺恨に思召すは、智勇兼備の名將に似合はぬ、御心がせまい〳〵。殺さず痛めずあの儘に捨置いて、死骸の番をさするのが好き成敗、皆々引け」と人をよけ、「先御入」と諫むれば、靜は堪へかね、「コレなう申し」と立ち寄るを、駿河が隔てゝ、「何處へ〳〵、もう泣言は叶はぬ、我君に見はなされて、身の立てらいがならずば、近々に五條の橋へ來たが好い、千人斬の時お手にかゝりし者のゆかりへ、御施行が有る筈、其役目は此清重、此方も君のお手にかゝつた人なれば、千人斬の施行の人數に入

へば靜もをかしさに、「禿のはれはもの言ひが第一、こいよ」次「ナアイ」靜「もうそれが禿でない」と打ちこまれて、次「ホンニさうぢや、奴の返事と取違へた。ヤア〳〵女房達、靜樣の花のお入、お盃を持參あれ」と、呼ばれくるわに品かはり、島田笄髷長な女中方、銚子島臺取揃へ御前に出で、「御舅時忠樣夜前より御出有つてお待ちかね、御對面もや」と伺へば、義「ウム夫れで聞えた、最前の一節も、時忠殿を汝等が慰よな。我等に逢ひたいとは、廓通をやめにせよと、例の異見煩しく〳〵。ナウ靜、此程は揚屋々々の暇乞に、全盛の大酒盛、其處をとんと氣をかへて、あの堅くろしい腰元共を、相手にするも面白かろ、飲んで獻しや〳〵。禿よ早う酌をせい」アイと返事も長柄の役をする河の次郎、君が仰につぎかくる、玉の盃底ひなき、御酒宴半に廣間より、「源八兵衞尉廣綱、御見參」と披露して、切腹したる武士の死骸、戸板に載せて庭上に舁きすゑさせ、「今日某、御所の御番に相當り、早天より出仕いたし候所に、昨晩の御留主預り、鎌田藤次政經、あのごとく自殺仕る、樣子は此書置に明白たり」と、一通を差上ぐれば、繰返し〳〵披見有るより、忽怒の御顏ばせ、飛びかゝつて靜を捻ぢふせ、「ヤイ女め、汝鎌田藤次と忍び契りしな、今日の館入を無念に思ひ、彼通腹切つて、書置に不義の段を顯したるは己への頰當、かゝる後めたき事を隱した天罰の程覺えよ」と、長柄を

か味方か暗さは暗し、後に來たりし侍が、兩足かいてのめらせば、命冥加な手負の忍、廻文大事と逃げて行く。跡には兩人組合ひ捻合ひ、四つ手に成つて、互の頭巾と頰被に、一度に手をかけひつたくつて顏見合せ、「エヽイ藏人か」「ヤア忠太か」二人「こりやどうぢや」と、興をさめ島うろたへ廻れば、「イヤサ是、盗み取つた廻文は、ナヽ、なんと」と、問ふも語るも氣はいらだて、「サヽされば、紛者の心は付かず、今の奴に」「エ謀られたか無念々々。程は行くまい、追つかけん」と、二人つれ行く取りなりは、阿呆烏のかあ〳〵と、夜は明渡る三重。戀をする身はいよ伊達らしや、おも白無垢に染小袖、裾吹きかへす朝風に、揉まれもまるよはぎの露。義經「コレ靜、廓と違うて、四角四面な屋敷の内で、あの風流な唄と三味、てんとたまらぬ道中姿、可愛らしい」と抱付き給へば、「オヽ辛氣、御所の女中方の見さんして、我君を手に入れ、自慢と思はんす所も氣の毒」と、ぴんとする河の次郎が引取り、「イヤ申し、其お氣遣なされますな、京の君樣は、御懷姙ゆゑお里歸、そこでお前を根引にして今日の御館入、鴇婦禿も連れられぬが一趣向、はやお忘れなされしか」と、心を付くれば、義「オツト誤つた。今日某、鴇婦のお芳」常とは違うて、小褄搔取りちよこ〳〵と、義「申し太夫さんえ」次「オヽそれでこそ鴇婦ぢや。扨是から拙者めが禿の役を仕る、眠らぬを取えに、嵩高なは了簡あれ」と、い

ず今宵は過されず、手筈を違へな氣取られな」と、主従囁きうなづき合ひ、御門外に立寄つて、
「判官殿へ火急に申入るべき仔細有り、平の時忠推參」といひ入るれば、門番の侍飛んで下り、
貫木扉ぐわつたりひしめき海老錠の、腰折りかゞめ出向ひ、「夜更けての御出、何とも申し兼
候へども、折あしき主人の他行」と、聞きもあへず、「イヤサ皆まで申すな、婿義經某が娘
京の君は懐妊せしとて、此方へ戻し置き、毎日毎晩九條の里に遊興と聞き、異見の爲に來りた
れば、たとへ明日まで相待つとも、對面せずんば有るべからず」と、鮫島諸共入り給へば、跡
は御門もしめやかに、拍子木の音いちはやく、更行く空の影冴えて、衆星北に拱し、明方ちか
き白壁に、映る姿は影法師か、それかあらぬか、見上げるばかりの大男、頭も足も眞黒に、包
む人目のせき拂ひ、相圖と思しく築地の上に、鮫島藏人顯れ出で、「番」と一聲呼びかくれば、
「忠」と答ふる相詞、「扨は番場の忠太殿か、刻限違へず能くぞお出で、首尾よう廻文盜み出し
た。お渡し申す」と一卷を、包む服紗の錦さへ、闇は黒白なやあやふき思ひ、受取りかへる向
より、同じ出立の黒装束にて、又によつこりと出來り、番といへども以前の忍、忠とも答へず
すりぬけるを、「扨こそ曲者ござんなれ」と、道を遮り拔討に、弓手の肩先切られながらかいく
ぐり、拔身をもぎ捨て逃げ行くを、後抱にしつかと組めば、藏人すかさずひらりと飛下り、敵

義經が手に有る彼の廻文、密に奪ひ取つて給はらば、夫を越度に責め付けて、義經に腹きらせ、貴卿御父子の御命は、此梶原が受合ひて助くる所存」と、そやしかくれば、「ホヽそれこそ手前が願ふ所、義經が滅亡せば、日比某が心をかくる靜も自然と手に入る道理、召しつれし此鮫島藏人は忍びの名人、主從心を合す程ならば、廻文はおろか、龍の腮の玉なりとも、奪ひ取つて渡すべし」と、額と額摺合ふばかり、密々咄、障子の隙間に昌俊が、見るとも聞くともしらばこそ、梶原主從猶すり寄り、しかし大切なる廻文、中々輙く奪はれまじ。但手がかり手だてもありや」「オヽ其儀はちつとも氣遣ひ遊さるゝな、案内知つたる此藏人、盗み出すは明六日の丑三比、御所の高塀見越の松を目印に、忍んで待たれよ忠太殿。相圖の詞は此方から、番かといはゞ、チ合點、忠と答へて受けとらん」それよ〳〵と、互にうなづきあふみ路や、深き工の湖も、「洩らすなぬかるな、同道するも危な物、時忠卿はお先へござれ、此方は勢田へ廻道、必ず見ぬ顏知らぬ顏、氣取られぬやう合點か」と、互の契約釘鎌鎹、念に根つぎの石部の宿、別れてこそは三重。かはる世や、昔は平家の小舅君、今は源氏の大將を、婿に取つたる身の威勢、平の朝臣時忠卿、譜代の家の子鮫島藏人秀氏一人めしつれて、工も深き堀川の、大下馬前にさしかゝり、「ヤア〳〵藏人、兼約のごとく、梶原の郞黨番場の忠太が來りなば、日比の大望、必

手をつくしてぞもてなしける。相役といひ、心へだてぬ昌俊景高、家來番場の忠太諸共、打寛いで奥座敷、勞を晴す折こそあれ、取次の侍罷出で、「平の時忠樣、家來鮫島藏人を召連れられ、密に御逢ひなされたき旨、通し申さんや」と伺へば、昌俊聞いて眉をしわめ、「是さ景高、此度我君判官殿に御咎は、則ち時忠父子の儀なるに、其時忠是へ參られしとは訝しゝ」「オヽ不審尤、彼時忠卿とは、某かねて懇意の中、折入つて賴む仔細、先達てあらまし申遣せども、出合へば幸ひ、貴殿にも引合せ、打寄つて內談せん。それ〳〵忠太、案內せよ。是へ通せ」と、いふにしたがひ立つて行く。さとき昌俊、詞のはし〴〵聞取つて、「ホヽウ何かは知らず、內談とあれば聞內、しかし旅づかれか、何とやらしきりに心地あしければ、座に列なる事思ひもよらず、貴殿が樣子を聞かるれば、某が逢うたも同然、無躾ながら病氣の事、御容赦有れ、暫く次にて養生せん。委細は後刻承らん」と、障子押明け入りにけり。忠太が案內に打ちつれて、時忠主從しづ〳〵と席につき、「先達て書狀に言越さるゝ趣、他聞を憚る密事なれば、上著なき內、篤と內談いたさん爲、參つたり」と宣へば、「是は〳〵御苦勞千萬、此度鎌倉殿の御疑、誠判官に別心なくば、預り置かれし廻文を差上げ、貴卿御父子の首討つて渡されよとの御諚、某承るといへども、麁略にならぬ貴卿の御事、御命に恙なきやうと存ずる某が一分別、

岡の正八幡大菩薩、氷川、烏越、根津權現、總じて日本の大小の神祇、冥道請じ驚かし奉る。殊には氏の神、全く昌俊討手に上り、義經の御首を給はらずんば、骸を堀川の御所に埋み、再び鎌倉へ歸るべからず。此事僞有るに於いては、此誓言の御罰を蒙り、來世は阿鼻大地獄に墮罪せられん者なり、よつて起請文此の如し。文治元年今月今日昌俊」と、筆を振うて書きたるは、身の毛もよだつばかりなり。賴朝御機嫌なゝめならず、「賴もしき土佐坊が心底、假へ都の土と成るとも、子々孫々の末までも所領を與へ、些か疎略有るまじ。平次景高も一所に上り心を合せ、義經に出で逢ひ、二ヶ條の非義を糺し、越度に極らばゆめ〳〵いたはるべからず。斯く言はゞ人々の我を情なしとや思ふらん、叛逆野心有る者は、兄弟とてもゆるさずと、我より手本を顯して、下萬民に訓ゆる事、源氏の威光長久のしるしぞかし、時節を移さず打立つべし」と、沙汰こまやかに御諚有り、簾中に入り給ふ。治極つて亂に入り、亂極つて動きなき、賑ふ民の鎌倉山、嶺に立つ木や這ふ草も、隨ひ靡かぬ方もなし。鎌倉殿の諚意を受け、直に打立つ土佐坊昌俊、梶原平次景高、上使の威勢かさ高に、路次の行列美を盡し、夜を日に次いで東海道、伊勢路も跡に水口や、石部の宿の本陣に、泊り賑ふ勝手の混雜、料理拵へ俎板の、音もてき〳〵亭主が馳走、

昌俊、判官殿の叛逆、事極まつて評定の上仰付けらるゝ討手、御邊は何と聞く、其咎をしらためるに、和殿風情は賴まず」と一口に言ひ消せば、居丈高に成り、「是梶原殿、其評定の衆は誰々、其人こそ心得ぬ、斯くいふ昌俊は金王丸の昔より、累代源氏の御家人、鎌倉殿も主、判官殿も主命によつて主の討手、大體で向はるべきか」「ヲ、其詞で知れた〳〵、遙々都へ上つても、誠らしく言譯を聞かば、首を給はるまでもなく、素手振つて歸るは知れた事、いやたゞ討手は景高に仰付けらるべし」と、遮つて申せば膝立直し、「ならぬ事〳〵。昌俊が望みかゝつては、頭が舍利に成つても餘人は上さぬ、義經の御首は、此昌俊が給はる」「和殿しかと取るべきか」「くどい〳〵」「ハア、天晴の忠臣、然らば君の御心を休むる爲、一紙の起請文違背は有るまい。ヤア景高、君にかはつて文言を望むべし。誰か有る、熊野の牛王、硯を昌俊に參らせよ」と、退引ならぬ手詰に成り、よし〳〵誓詞は書くとても、神は非禮を請け給はず、我が一命を忠義にかへ、都に上つて義經の、御爲あしくは計らはじ」と、些とも辭退の色目なく、景高が望むに任せ、筆押取つてさら〳〵と、一紙の起請かくばかり、「謹しんで申す起請文の事、上は梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、下界の地には伊勢天照大神を始め奉り、伊豆、箱根、富士、淺間、熊野三所、金峯山、鎌倉の鎭守鶴が

て、誰参れと下知はせず、覺有らん者討手にのぼり、義經が首取つて高名せよ。恩賞せん」と宣へども、「恐ろしく〳〵、摩利支天の再來といふ判官殿の御討手、我々が力に及ばず」と、目を見合するばかりにて、誰上らんといふ人なし。こゝへ兼ねて梶原平三景時進み出で、「斯樣の時の御役に立てられん爲、身に過ぎたる莫大の所領を給はりながら、名を指いて誰参れと御諚なきは、恐れながら如何なる御所存、お請申さぬ方々一々見知り置く、此返報の時節待たれよ」と睨め廻し、「ヤア人までもなし平次景高、汝討手に罷上り、御心を安め奉れ」畏つて領掌す。末座に候ひし澁谷土佐坊昌俊、「南無三寶、彼奴を討手に上せては、義經公の御大事」と分別し、御訴訟々々と聲をかけ、御座に向ひ、「御兄弟の御中と申し、歴々さへ口を噤ぎ給ふに、我等式の御討手と申すは憚りながら、某罷上り、御首を給はらん。さりながら、事あたらしき申し事なれども、木曾の强敵、平家の大軍を一時に責亡し給ひしは、君の武威全き故とは申せども、一つは義經公御身を捨てゝの御働、酒宴遊興に溺れ給ふは、實は御年若き故、よりより御諫言を加へ給はゞ、直させ給はで候ふべきか。又平時忠の婿に押成り給ふ事、尤彼時忠平家の何某とは申せども、降參を聞き請け、命を助け置かるゝ上は、娘を召さるゝ程の事は、さして御誤とも申されず。就中平家一味の連判狀」と言はせも立てず平三景時、「ヤア詞多し

御所櫻堀川夜討

第一

恩は春のごとく、威は虎のごとく、訓は父のごとく、愛は母のごとしと、李嚴を謠ひし史民の詞、今此時に當れるかな。六十餘州の總追捕使、右大將頼朝卿、仇を討つこと爐上一點の雪のごとく、流れをたゞす氏の再興、世はうごきなき鎌倉御所、威嚴四海に凝形せり。されば兄に宜しく、弟に宜しうして國人を教ゆといふ。御舍弟九郎判官義經を都にすゑおき、兄弟東西に立別れ、民を撫育ましませば、御中水魚の如くなるべきに、月明かなりといへども、光を雲の覆ふがごとく、梶原父子が支へによつて、忽御中吳越とへだたり、穩ならぬ世の聞え、萬民心意を惱せり。重ねて討手を上さるべしと、召によつて在鎌倉の諸大名、問注所の廣庇に相詰むれば、頼朝仰出さるゝは、「扨も義經色に溺れ酒に長じ、禁裏の勤を怠り、我儘の行跡、剰へ平の時忠の婿に押成り、平家の連判狀頼朝見ようず、鎌倉へ下せと再三いひやれども、兎角事によせ隱し置く心底、景時が申すにたがはず、一定叛逆に極つたり。所存有れば名を指い

騎、皆一同に祝しける。

蝶花形名歌島臺 終

山口の絶所を塞ぎ、久吉の歸路を立切る武者之介、先を爭ふ陣頭に、自ら進む其勢ひ、只烈風の如くにて、群がる中へ割つて入り、縱橫無盡に突廻る、尖き槍先當りかね、引色立てゝ諸軍勢、四方へぱつと迯げ散つたり。かゝる所へ加藤正淸かけ來り、「コレ物に狂ふか武者之介、實の失せしは柴田が後家、小谷の方が爲す所、事明白に分かりし上、眞柴大内の和睦調ひ、目出度き歸國を支ゆるは、いかなる所存と云はせも立てず、「ヤア和睦とは云ひがひなし、たとへ主人は承知有つても、此仁木は不得心、勝負も決せず此儘に退いては、西島にてつがひし詞は反古、一旦合戰と極めし心は金鐵。サアこい勝負」と詰め寄る所へ、大内義廣、出海井上引連れて、後れ駈せにかけ付け給ひ、「ヤア武者之介、久吉公は稀代の名將、小田の正統信若君を守り立てんと有る誠心を感ぜし故、弓矢の義を捨て和睦の上は、眞柴大内は水魚の因、但し某が詞を背き、譜代相傳の恩を忘れ、此義廣に弓引くか」「サアそれは」サア〳〵と理に詰められ、流石の仁木も屈伏したる其折から、小坂部和三郎大友を生捕つて、家來に引かせ出で來り、「寶を盜み讒を構へ、眞柴大内の兩家を亡ぼし、天下を奪はん下工み、殊に新左衞門は倶不戴天の親の仇、討つて本望遂げられよ」と、聞くより井上飛上り、三郎が首討落し、「惡人誅罰せし上は、互に目出たき御歸陣」と、心解けあふ諸軍將、兩家の因萬歲と、野山に滿つる百萬

まつて夫の菩提、君の御先途見遂げるも、天照神の神勅なるぞ。違背有るな」と久吉の、切拂うたる頭の霜、「一句に服する餞別」と、天子の御旗はた竿に、さつと揭げたる月日の光、久吉重ねて大内に向ひ、「互の寶失せし故、云合せずして暫しの確執、小田の正統信若君を守奉れば、今より水魚の交たらん」「ホヽウ我とても白鳩の、導く靈驗神慮の和平、爰に納まる軍の始末、義廣の明察違はぬ兩家の因」此家をさして「御注進」と呼はり來る雁金は、お傍去らずの曾呂利が女房、「御兩家和睦太平と、諸軍も勇む歸陣のお先、塞ぐは仁木武者之助、久吉公に見參と、無體に軍を始むる結構、例の荒者其儘では、敵も味方も內證軍、マアお知らせ」と訴ふる。「ホヽ仁木が麁忽の合戰は、互に和睦を知らざる故、義廣向つて制すべし、久吉殿には跡より」と、召馬引寄せゆらりとのりの門出せし、其大隅が亡骸を、よきに印の石の下、傾城塚とも末の世に、呼ぶ追善や御祝言、蝶花形は春嶮の、輿入國入若君を、守護する御武運久吉公、見送る老の一奏。千代に八千代を細石、巖に殘る涙の種、姥が窟やもみぢ葉を、踏分けてこそ　三重下山ある。

十一冊目

瑞、在所は是」と庭に飛びおり、件の大石かろ〴〵と、取つて引きのけ、「土中の印、再び我手に入つたり」と、につこと笑うて立つたる所へ、又も此方の谷蔭より、「小田三代の武將信若君、眞柴久吉守護せり」と、抱き參らせ出で給ふ。お供に付添ふ以前の婉、「我々は福島小西が妻女共、此君樣のお迎ひに、疾くより入込み奪取つたり。柴田氏の奥もじ樣、我慢を止めて日月の、御旗を返し給ひなば、信若君は四海の武將、春姫君は大内家へ、和睦の印お取持、生れしお子はお世繼樣、三國一の大將の、捌きは斯う」と諫むれば、聞く無念さも遉の老女、思ひ定めてどつかと坐し、「信若君に麁略なきは、其身の冥加恩には被ぬ、わらはが恨は夫の仇、春永薨じ給ひし後、久吉に心合はざる我夫柴田勝家殿、時にあはづを餘所に見て、比良が嶽に引き籠り、互に爭ふ運定め、終に賴みもなつこだち、朽果て賜ひし修羅の妄執晴さんと、我も自害と云ひ觸らし、年月謀りし念願も、今ぞ叶はぬ身の終り、久吉仁義の心あらば、若君姫君兩君の、納りよきに計らへ」と、覺悟の刃を止むる婉、「是まで厚い御介抱、御恩送りは此の水子、我身にかへて養育も、成らう事なら存らへて、教訓賴む伯母御前」と、涙の袖を振放し、「ナウ意地を立つるは武の表、夫へ云譯兩將の、疑ひ晴す自害ぞ」と、突込む刃は段々壞、折れて遙に飛散つたり。「ホヽウさこそ〳〵、日月の旗懐中有れば、其身に劍は立たざる筈、死を止

くしがた、名のみ殘して消ゆる身に、母は取付き、「可愛やなァ、望有る身の悲しさは、可愛い娘を三つ四つで、いつを逢瀬の生別れ、今死ぬる期に母が手へ、戻つて來たも因緣かや。長の年月行方さへ、尋ねぬ母を明暮に、さぞや恨んで居たで有ろ。夫子の名殘云ひたい事、岩間に朽ちる秋の草、苔の雫と成つたか」と、取亂しては正體も、涙々に誰々も、歎き數添ふばかりなり。哀れを告ぐる鐘ならで、谺に響く攻太鼓、老女は心つく〴〵と、傍に聞居る二人の女、何思ひけん目くばせし、奥の間さして駈け入つたり。「ハテ怪しや、此家を取卷く寄鼓、我身の凶事か何にもせよ、姫君々々、春姫樣」と、呼ぶ聲共に走出で、「コレ〳〵申し、今まで付添ふ三人の女は、久吉方の廻し者、若を奪うてどつちへやら」「ヤァ〳〵〳〵、それは」とばかり氣を逆立ち、かけ出す懷赤子の泣く聲、足手まとひ、「エ、〳〵たばかられて信若君を、奪取られたり口惜しや」と、立つて見居て見無念の齒ぎり、猶もかけ行く後の方、「ヤァ〳〵江州比良が嶽の城主、柴田修理進勝家の後家小谷の方、大内島の冠者義廣逆意の證跡見居けたり」と、立出で給ふをはつたと睨め、「我を小谷と呼びかけて、逆意有りとは何を以て」「ホ、ウ近江倉宮島にて、絹笠三位と勅を僞り、表は和睦內心は、好みを斷たん汝が姦計、其時加藤へ送りし短册、柴田が辭世とまがはぬ同筆、其守り故大隅が、不便の最期蘇生して、平産守る寶の奇

はと老母が胸は板、「守りを添へて別れし娘、宿せし種の初孫も、倶に殺すか不便や」と、日には泉の涌きかへる、心のせつなさ義廣に、緣有る樣子名乘りもならず、せめてと千々の思案を定め、「オヽそれよ、庭に祭りし此石は、大内家に由緣の名石、先祖の守護神子孫の安產、守りは外に泣入りし、手負を取つて石上へ、假の產家と抱き寄せ、血脈にこぼす血の淚、雨と注ぎて淸めの手水、猶も寶の靈驗を、見せしめ賜へ」と額に當て、心に願ひ掛けまくも、神に祈りの眞實心、名家を助くる御奇特、空にありく白鳩の、伸羽ゆたかに飛廻り、擁護の神力平產の、初聲高く聞えける、末の榮ぞいちじるし。老母は覺えず聲を上げ、「ハヽァ有りがたき寶の奇瑞、傳へ聞く右大將賴朝公の御公達、石上にて平產有る、住吉の誕生石、氏はかはれど男子の出生、吉例目出たき水子の榮え、隱すにも隱されぬ、此ばゝが孫ぢやはいなう」「エヽそんならわたしが」「オヽ證據の歌は母が手跡、家來に預け其後の、便に送りし形見の短冊、廻り廻りてけふの今、逢ふと其儘死ぬる娘、安堵の往生させたさに、今まで包みし名乘合、眞實眞身の親子ぢやはいなう」「チエヽ忝い我君樣、守りの主が知れたはいなァ。モウ目が見えぬ、息有る内に殿樣に、來の緣が結びたい、母樣に問ひたい事、我子は彼所にぞ。此事を申上げ、未逢うて此子が渡したい、逢ひたい見たい」の其人は、爰に有りとも知らぬ火の、餘所に心をつ

血汐の穢れ若君に、あやかし有つては倘大事、姫君倶に一間へ」と、氣を配る内殘りの媵、こは〳〵死骸を引上げたり。老母はおつ立ち疵口より、六脈看相とくと改め、「早事切れし急所の痛手、所詮存命叶はねども、一度蘇生させし上、樣子を尋ね見ん物」と、錦の袋取出し、押戴いて死骸の肌へ、納むる寶の奇瑞にや、服せし水を吹出し吹上げ、うんと一聲、「ソりヤこそ」と、秋雨鴈金耳に口、「女中樣、女中樣いなう」と呼び生くる。無慘やな大隅が、かひなき魂も夫したふ、愛著心に引かれ來て、息吹きかへし目を開き、「殿樣々々、我君樣」と、死んでも忘れぬ煩惱の、迷ひ〳〵て這ひ廻るを、「コレ〳〵女中、心を慥に。尋ぬる仔細、此守りに入つたる短册、持主はこなたか」と、手に持たすれば探り取り、「エヽ親の形見の此の短册、見るに付けても恨めしい、是故にこそ捨てられて、早瀨を渡る蔦かづら、二世の縁まで切れ果てゝ、岩に裂かれし身の苦しみ、八寒地獄劒の山、焦れ死ぬるは厭はねど、ま一度逢ひたい義廣樣、此身ばかりか腹な子も、十月の今に持孕り、非業に殺すが可愛やなア。皆樣のお情には、死んだお胎を切りあばき、身二つにして其跡の、亡骸よきに賴み上げます。萬に一つも生れ子の、お腹で無事に有らうかと、それはつかりが今際の樂しみ、顏見ぬ先に死ぬ母が、心を推量してたべ」と、苦しき中に子を思ふ、親の心の三瀨川、浮む瀨さらに見えざりし。扨

としき方は此君の、齢は千代も變らじ」「さても見事お上手」と、口々ほむるを耳にも觸れず、「ハテ心得ぬ琴の音色、常に變りて殺伐の、調子は此家へなう姫君、妾が留主に何人ぞ、男子でも參りしか」と、問はれてはつと心の驚き、傍から引取る名月、「アヽイエお留主に來たは其菊ばかり、花のお蔭で珍らしい、後室樣の舞振を、今一度見たい。雁金、秋雨、木の實でも草花でも、流れてこぬか」と谷川へ、「まーつこい婆に遣ろ、イヤアノ後室樣へ上げます」と、昔咄しに紛らす氣轉。「オヽ何やら流れて來るぞ〳〵、是はめでたい松さうな、後室樣へ」と掻き寄せ〳〵、「コリャ何ぢや守袋が掛けて有る、御覽じませ」と差出すを、老母手に取り、「此裂は花兎、ハテ心得ず」と紐とく〳〵、開けば中に覺えの短册、「夏の夜の、夢路はかなき跡の名を、雲井に上げよ山郭公。此歌は夫の辭世わらはが手跡、此谷川へ流れ寄りしは、ふしぎ〳〵」と打守り、いぶかる氣色にいぶかる姫、「聞覺えし其歌の、爰へはどうして媼ども、なほも流れに氣を付きや」と、さし圖に皆々寄り集ひ、「もーつこい姫樣の、お待ち遊ばす川上に、あれ見や今度は美しい、大きな物が流れてくる。あれよ〳〵」とどよめく內、宿世の緣か川岸へ、流れ寄りしを見て恟り、「ヤア疵だらけの女の死骸、これは〳〵」と立騷ぐ。老母もそゞろ氣にかゝり、「捨身か但し人の所爲か、何にもせよ死骸を岸へ、早う〳〵。

らうかと、かこち涙の折からに、えいさらさら〳〵えいさら〳〵此車、眞紅の綱手引く婢子女が、紅深き上の衣、木々に照添ふ艶姿、錦帳かけし輦の、内より出づる此家の老女、そぐはぬ朱の小打著や、袖に抱きし稚子は、並々ならず見えにける。「オヽ皆大儀々々、大事の和子の御疱瘡、紅葉の色は出物の藥、山あげから水もつ、かせ口に成つた婆が嬉しさ、オヽ姫君にも嘸お待ちかね。ヤアえい〳〵」と石段を、上るひあいさ心得て、「和子樣是へ」と抱取る。姫も涙の色目を隱し、「オヽ伯母御前今お歸りか、若の機嫌もよい樣子。雁金、最前の品こなたへ」と、仰をきくの一枝は、「此谷川へお留主の中、流れ寄りしを和子樣へ、お慰に」と差出せば、「オヽ是は〳〵彭祖が保てし八百歲、御壽命目出たき其の一枝。アヽ昔の若い折ならば、祝うてばゞも舞の一手、ホヽホヽヽ有られも無い事言うた、是も少しは菊水の、酒の科ぞと赦し給べ」「イエ〳〵常から聞いてをりまする、昔は舞のお上手と、名を取つた後室樣、是非に御所望姫君の、琴の調も若樣を、祝してちよつと」とほのめけば、「アヽ譯もない事云出して、迷惑ながらアヽ儘よ、若やいだ此姿、必ず跡で笑ふまいぞ、扇がはりは此菊の」枝取持つて立上り、「オウオ和子もにこ〳〵をかしい筈よ。唄そも扨も此君は、誰人の子なるぞ、天下一人の花の皃よ〳〵、眞柴を除けて、連れておりやろにや上方へ、吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、い

誠は大内、アイヤサ落人となる我身の上、迷ひ來りし山奥に、思ひも寄らぬ閑居のしつらひ、ムウ導く鳩の宿といひ、此家はむざと動かれず」と、座に著き給へば姫は悅び、「ほんにあなたは落人樣、軍にお負け遊ばして、たつたお一人、ようまあお負けなされたなア、是程嬉しい事は無い。名月、鴈金、何をうつかり、追付け和子のお歸り時」明「エヽ迎ひに行けでござりますかえ、日頃のお噂ナウ鴈金、あなたのそぶり合點かや」雁「皆まで言やんな請受つた、山の神樣おゆるりと、そこらを宜しう。ナウ申し、お賴み申上げます」と、笑を殘して二人連、出づる間を待ちかねて、「お懷しや」と縋り付く。すげなくも振拂ひ、「假初の戲れも、互にかはる此姿、迂闊げな事仕給ひそ」と、咎められては今更に、恥かし振の袖几帳、「姿形は變るとも、名にしおほちの君樣と、知らいで仇に戀草の、種蒔き初めてよいものか。焦がれ〳〵しけふの今、床しいお顏みち年の、花より稀の逢瀨ぞや、過ぎこし方の契りをも、忘れ給ふは胴慾」と、鎧の袖に縋り寄り、淚の露は緋縅に、朱の玉散る如くなり。「ホヽウ恨は理さりながら、心得がたき山住の、由緒を聞かねば心の疑念」「スリヤ自が身の上を」「承知の上にて末の契約」「申し上げねば」「契りも是まで假の宿、とくと思案を致されよ。後刻」とばかり云殘し、心をおくに入り給ふ。姫は始終に胸迫り、明けて言はれず明さねば、二世の契も薄紅葉、はかない緣に成

し此の家の軒、「我を導く白傷の、爰に至りて止まりしは、ハテいぶかしき館の構へ、聞ゆる調は想夫戀、いかなる人の閑居ならん。我も豫ては好ける道」引合より取出す名笛、吹きしめして琴の緒に、和する祕曲は戀々と、斷腸の聲をなし、呂律は風に飄り、谷の水音松の風、心してもや吹きぬらん。内へ洩れしか琴の音も、絶えてひそ〳〵婢子女か、「ナウ雁金、人里遠い此山中、變つた音色ぢやないかいの」「ォヽ名月の云やる通り、狐か但しお姫樣の琴の音に浮されて、山の神が來たので有ろ」と、おづ〳〵二人は差覗き、「今の笛はあなたかへ。爰へはどうして、アヽ紅葉狩の御趣向、惟茂樣でも有るまいし、女を鬼と取違へ、必ず聊爾なされな」と、ざれも云寄る詞の品、「ホヽウ一陣の敗將、少しの勞休めん爲、暫時の宿り御免有れ」と、駒繫ぎ捨て大やうに、しづ〳〵通る大名風、二人は頓て押隔て、「アヽ顏に似合はぬあつかましい、後室樣の留主の内、山の神でも天神でも、内へはならぬ」と支ゆれば、「ナウ暫く」と御簾の間より、留むる蘭奢の一薰り、振の姿もいと淸く、月の洩れづる其風情、「女ばかりの山住居、宿こそならずとも、音色やさしき笛竹の、ゆかりは暫しの御休息、いざこなたへ」に女共、「サァお通り」と媚めけば、「心有る琴の調、主の御芳志忝し」と、作ひ入る顏見合す顏、「ヤァこなたは」「あなたは日外宮島にて」「實も逢見し啞の女中、岩國屋といふ町人姿、

ら菊や小萩原、薄の穂にも落人の、跡を慕ふや女郎花、走著いたる大隅が、「エ、あの山陰を廻るまで、お姿見えさせ給ひしに、いづれへお出でなされたぞ、義廣樣我君」と、呼べど答もなく鹿の、倶に夫戀ふ聲ばかり。「エ、聞えませぬ殿樣、道さへしらぬ山中に、捨てられし身のつらさより、お胤はいとしう無いかいなう。思ひやりなき胴慾も、印の守父母の、守は無くて筐こそ、仇」と投込む谷水の、あはれを告ぐる身の行方、誘ふ嵐に吹送る、遠山松の葉隱れに、「義廣遁すな生捕れ」と、君を取りまく木の葉武者、「アレ〳〵ひあいや只お一人、人も梢も紅葉して、空に焦るゝ我思ひ、渡る瀨もなき谷川の、狹き流れに程もよく、さしかゝりたる古木の松が枝、二世三世、緣をからみし葛城の、粂の岩橋中絕ゆる、契りと知らで一筋に、帶引きしめて攀登る、女心の一念力、懸れる苔に踏みすべり、足手もさける花ならで、蔦の錦をさながらの、いともあやふし 三重。

十冊目

山又山更に幽なる、秋の調や琴の音の、御簾の隙もる殿造、梢の錦立田姫、衣織る家とも疑はる。風も悲しむ戰場より、島の冠者義廣は、したふ敵を追ひ散らし、谷川づたひ白鳩の、跡を求め

づる、君の御跡おほすみが、危さ怖さ別ちなく、猶も慕うて、三重 迷ひ行く。

道行山路の轡蟲

岩たゝむ、嶺の嵐も秋暮れて、物騒がしき氣色かな、遙けき山路羊腸たる、嶮岨を凌ぎ義廣は、思はず爰におちこちの、たつ木の蔭も白雲は、別け入る跡を埋むかと、心細さも只一騎、殘月に鞭を揚げ、暫しは曇る身なりとも、何時まで斯くは有りなんと、勇む驛路の鈴の音、ふり返り見る陣雲も、やゝ收まりて靜かなり。義廣馬上に頭を廻らし、「樹間の殺氣は猿冠者が、爰にも兵を伏せつるな。シャ何程の事あらん」と、獨言して行く先の、茂みに秋の聲ならで、金鐵皆鳴る鎧武者、「落人遣らぬ」と犇めいたり。「ホヽヽしをらしやさしや」と、例の鐵棒振上げて、はつたりちやう／＼きり／＼す、我をまつ蟲鈴蟲も、蹄にかくる轡蟲、露の玉蟲消え／＼に、鳴く音殘して螽勢、跡に見捨てゝ行くとなく、心急るゝ岩波の、苔の下行く水の音、難所の渡早瀬川、「ア、此駒よく／＼、如何はせん」と佇む内、何處よりかはしろ鳩の、兜の上を二三遍、廻り／＼て谷を越し、飛行くさまを見やり給ひ、正八幡の遣はしめ、鳩の行くへは神明の、導き給ふ淺瀬ぞと、一鞭くれて跳り越え、劉玄德が檀溪の、例も斯くと三重いざし

し甲斐もなう、二世の君には疑はれ、何とて生きて居られうぞ」と、覺悟の刀しつかと押へて、「ヤレ待て女、腹な悴がかはゆくば、コレ此の守を添へ、幼少にて別れし親を尋ね求め、我に知らさば變らぬ契り、時節を待て」と手に渡す、守に込めし大將の、さすが情の詞には、こゝろ弱りて泣くばかり。「いで曠軍の用意せん」と、目には別れの一雫、ふり捨て奧へ入り給ふ。名殘惜しさも女氣に、心引かるゝ小車の、我身につらき憂き思ひ、座を立ちかぬる折こそあれ、柵外響く鯨波、遠見の軍卒馳參じ、「正清和睦を受合ひしも、味方の虚を打つ敵の計略、西島の門戶兵衛か悴、兒島元兵衛政次が案内にて、岩國山の間道より、勢を廻して山口の本城を十重廿重におつとり巻き、出海殿の歸路を立切り、不意を打つて陣外まで、大軍押し寄せ候ふ」と、云捨てゝこそ引返す。障子をさつと冠者義廣、怒りの面色髮逆立ち、「謀るゝと思ひしに、眞柴が智謀に陷入りしな。此上は本城の寄手の奴原一拉ぎ、馬引けやッ」と大音聲、心得引出す月毛の駒、ひらりと打乘り丈餘の鐵棒、苦も無く打ち振る四天の勇、「我身も倶にどこまでも、離れはせじ」と大隅が、縋る手綱を振放し、「ヤア戰場へ女を召連れ、我を愚將と誹謗さするか。アレ〳〵寄手も込み入つたり、早立退け」と仰の內、どつと駈け入る上方勢、得たりと鐵棒追取りのべ、五人七人一みしやぎ、怒れて遁げ散る先手の勢、駈立て蹴立て馳出

實も大内の兩家老、類稀なる忠臣なり。始終洩れ聞く加藤正淸、歩み出で、「遉は出海尤の切腹、義廣の降參は勅命を守る所、別心なき條見屆けたり。是こそは宮島にて、衣笠三位と名乘りし贋者、和を計らひし自筆の短册、何ぞの御用に立つべき品、和睦の印」と手負に渡し、「イデ此通り言上」と、一家の義理をにべもなく、心に殘し立歸る。手負は遙かに見送り〳〵、「殿御計略の降參、誠と心得歸りし正淸、此上味力の手配りはな」「ホヽヽヽよくも悟りし左衞門宗定、降參と油斷させ、敵の不意を討たん僞、惰弱と見せし我が本心、察せし汝も空腹ならん」「ハッハヽヽ主從心一致の上は、本城へ馳せ歸り、諸卒を引連れ逆寄せん。是まで思はぬ敗軍の、お家の寶失せたる故、最前奧にて大隅が、父母の形見と見せたる短册、ナコレ此守りこそ詮議の緖、加藤が渡せし短册と、引合して御覽あれ」「オヽ豫て知つたる其守、合點行かずと大隅を、留め置きしも心有る、衣笠三位が自筆の短册、彼が工みと知りながら、武道の意地と久吉に、鋒先を爭ふも、勘合の印紛失故、違勅の咎を受けまいと、天理に任す家の興廢、眞柴を破るは今宵の一擧、ぬかるな左衞門」「合點」と、心の勇みに屈せぬ疵口、腹帶しつかと出海は、山口指してかけり行く。樣子立聞く大隅が、走り出るより取縋り、「名をさへ知らぬ父母の、形見の守は何にもせよ、お胎のやゝは產月の、けふかあすかと顏見るを、樂しみ

に、恩を仇なる汝が返答、此方より望むにあらず、降參は心次第、併し正淸使して、其返答では歸られぬ。主從とくと評定して、命にかけがへ有るならば、勝手々々」と大膽不敵、臆めず一間へ打通る。跡打見やり出海は、無念涙をふり拂ひ、「御先祖代々武威を落さね家筋も、かばかり敵に侮られ、降參との思し立、君には天魔が見入りしな、但し御所存有つてか」と、怒り歎いて問ひ詰むれば、義廣は答へもなく、あさりの弓に大雁股、番ふ目當は庭前の、松の下枝かつきと射切つてほや〳〵笑ひ、「左衞門々々々、我心底はアノ一枝」「ム、松の木の下久吉を、まつ此の如くの御弓勢、ハアおでかしなされた、夫でこそ我殿」と、悅び勇めば、「ハレヤレ夫は惡い合點、邪魔になる下枝を、取つた木振を見たがよい。久吉へ降參して、免し無ければあの松の、木篇は直に死罪の道具、作りを分ければ公と讀む、公の磔柱といふ事、木に曝されても軍はせぬ氣、長い物には負けいぢや」と、又も手酌に續け呑、呆れ果てたる左衞門は、胸にとつくと極むる覺悟、鎧脫ぎ捨て座を占めて、諸肌くつろげ物をも言はず、引拔く短刀腹に突立て、「エヽ見下げ果てた腰ぬけ殿、さは知らずして肉身の、悴を殺せし忠節も、皆むだ事と成りけるよな。君辱しめらるゝ時は、死をもつてする臣下の道、命を捨てゝ諫める詞、少しは御用ひ下されかし。數代傳はる家國を、敵の馬蹄に穢さん事、口惜しや奇怪や」と、怒りの涙はら〳〵、

しばし御休息」と、いふ顔眺めて「いか樣はや、西施を五湖に沈め、楊貴妃を馬嵬に斬る國の敵はムヽ、成程々々、差扣へる内折入つて、そもじに尋ね問ふべき仔細、暫くあれへ」に何氣なく、「お目が覺めたら呵られうか知らねども、默止がたない仰、然らばこちへ」と先に立ち、伴ひ別間へ入りにける。折ふし陣門打騷ぎ、「眞柴家よりのお使者なり」と呼れば、大將義廣枕を上げ、「其使待ちかねたり、早く通せ」もめれんの下知、呼び次ぐ内に加藤正淸、軍中の姿引きかへて、長上下も優美の骨柄、目禮して上座に著き、「珍らしゝ義廣殿、及ばざる戰ひに、自己の勇威を慢じて拒み、勅命に敵せられしは、滅亡を招くにあらずや。漸く利害に心付き、降參を望まるゝ條相違なきや、相糺せよとの上意なり」と演べければ、義廣廻らぬ舌打して、「ホウ誰かと思へば加藤氏、御苦勞々々々。始めはおのれと我を張つたが、久吉の軍配、旗下の强勇ヤモ嚴しい物、叶はぬ〳〵。所で降參仕る」と、袴の褶のおれそれも、居ずまひ惡しく平伏有る。始終窺ふ出海左衞門、つッと出で、「ヤァ舌長なり正淸、久吉實に勅を重んじ、忠勤を盡すぞならば、禮儀の使者を越すべきに、人も無げなる今の演舌、大内の家は御先祖より、天子へ背きし事もなく、他國の軍馬を領地に入れず、汝一旦の運に乘じ無禮の一言、我國に聞き用ひる者有るべきか。早く歸つて寄せ來れ」と、筋をあらゝげ云ひ放せば、「ムヽハヽヽヽ、仁慈を以ての御使者なる

くれ。風で夜討と定めたり、めたりぬる夜の睦言に、むつ言に目出たうさむらひける。べんべんがべれ〳〵〳〵」べん〳〵だらりの底抜ども、さいつ押へつ、「ハヽヽ、イヤコリヤ面白いはく〳〵、ま一踊をどろで無いか」「ヤア、さらば爰らで鎧武者の、腑抜け踊が所望ぢやが、合點か」「危い軍は取置いて、好な酒をば呑み次第、敵の首を討たうより、鎧兜を打殺し、討死せうより呑討ぢや。ソレ〳〵〳〵〳〵そこらでせい」夢中に成つて踊の最中、苦り切つたる出海左衞門、かけ入る目先の醉ひどれども、投げのけ突きのけ打通れば、一座の興も醉もさめ、底氣味あしく尻込みする、士卒をはつたと睨み付け、「追つけ寄せ來る敵を引受け、馬鹿々々しき此の有樣、銘々持口大切に、早行け〳〵」と鋭なる、詞に皆々顏見合せ、「扨ても堅い御家老の、折々しかつい御異見に、さつぱり困つた鎧武者」と、あだ口々へ出でて行く。左衞門無念の膝突つかけ、「再度の戰ひ久吉が、武威に碎かれ思はぬ敗北、口惜しながら君を誘ひ、本城山口へ引籠り、軍議評定せんものと、飛歸りしに御陣の有樣、酒色に耽り淺ましき御身持、油斷とや申さん、不覺とやせん。サヽヽ、早く御用意々々々」と、忠義の一途出海が、諫むる詞もしら川に、夜船漕ぎ出す酒機嫌。「ムヽ、熟醉に正體なきは、ホイ、是非なし」と屈託を、我身一つに主思ひ、見聞くにつらき大隅が、「何を言うても此のお姿、後程お目が覺めてから、夫まで

の破れ城、正清先陣蒙らば、一摑みに拉いでくれん、吠頬かはくな左衞門」と、互の廣言雙方が、詰めより詰めよる勇者と勇者、女房々々は正體も、涙ながらにいたはれど、枯るゝ老木と諸共に、惜しや翠の松太郎、あへなく息は絶えにける。わつと一度に聲立てゝ、妻が歎きに目もやらず、互に睨みあひ聟同士、又も聞ゆる攻太鼓、哀を跡に三つ羽の征矢、射るが如くに兩人は、戰場さして三重出でて行く。

九册目

「ソレ〳〵やつとせい、こちの殿さま軍を止めて、軍慮帷幕に廻らす物は、間のおさへの盃ばかり、吸付くお敵に夜軍を、誰も來て見よかしのえ」「オヽ出來た〳〵」と大將の、譽める卷舌大隅が、肩に御手を掛鯛形、「イヤナニ、こりや軍兵ども、切ッつはッつの軍せうより、色と酒とが浮世の味。ナウ大夫」「サア其御機嫌は嬉しいが、大事の御身を酒びたし、ちつとはおひかへ成されませ」「ハテ異見とは堅いやつの。サ汝等も此盃で一つ呑め〳〵、ソレ」と投げやる大盞を、笠に戴く軍兵ども、「ヘヽ有りがたい大將の御下知背かず、察兵衞芋六、まあ身どもが」と一息に、「呑んでの風は荒けない風だなア」「何だそりや口合か、ドレ〳〵是へ注いで

が孝心舅の情、命を給はる返禮は、再び結ぶ聟舅」「ホヽヽ、正清とてさの如し、大内義廣征伐に、小坂部が討死と記録に殘さば、松太郎舅の追福此上なし」と、聞くよりにつこと打ち笑みて、「ハヽ、仁有り義有り、味方は名のみ相果つる、兵部が末期の置土產、笹市に與へし太刀こそ我重代、北辰の二字を彫りし、武運守護有る七星丸、萬夫不當の正淸に、劍の威德加はりて、和漢に美名を殘されよ。此上賴むは末子三郞、小坂部九郎音近と、我が若年の名を繼がせ、厚恩有る久吉公、御子孫の時に至り、スハ御大事と見るならば、粉骨盡し忠義を立てなば、草葉の蔭より悅ぶと、傳へておくりやれ聟殿」と、末期の一句孫娘、「ナウこれ今が別れか」と、歎けど更に其かひも、嵐が告ぐる螺太鼓、遠音に響き物凄し。加藤が郞等木村和田藏、かけ來つて大音聲、「大内が本城山口は、要害堅固の絕所なれば、數日の對陣時を待ち、計り知つたる海手より、足利慶覺西國へ、下向と流布せし六字の旗、武器を隱せし兵船に、押立て〳〵押し渡る、味方は必勝破竹の勢ひ、急ぎ御出馬然るべし」と、申し捨てゝぞ引返す。「一大事」と左衞門宗貞、劣らぬ正淸雙方が、忍び裝束脫捨つれば、肌には小具足身をかため、勢ひ込むる軍場の出立、「やおれ正淸慥に聞け、久吉樂毅が術をなすとも、味方は臥龍が備へを立て、只一戰に追ひ散らさん。早く歸つて猿冠者が、首を堅固に用心せよ」「シヤ案外なる非禮の過言、山口如き

い。コレ松太郎聞きやつたか、そなたが死ぬるは爺御の爲、負けたのぢやない勝ぢやといなう」「アヽ嬉しうござる、そんならお前も緣切らず、元の通りにとゝ樣と、中よう添うて下されや。かゝ樣、かゝ樣は何所にぢや」「オヽ爰に居る〳〵、悲しや其方はまう目が見えぬかいなう」「アイ、侍の子が未練なと笑はれうか知らねども、死ぬる今はにとゝ樣や、お前の顏がたつた一目、それが〳〵」といふ跡は、舌もつるゝ斷末魔、「オヽ苦しかろせつなかろ、其苦痛より此祖父が、切ッつはッつの度々を、謠鼓で紛らしても、肉骨を裂く苦みは、一百三十六地獄の、呵責を一度に請くるとも、此上の有るべきか、可愛の孫や」と取亂し、歎けば姉は急き上げ〳〵、「孫子の爲にお命を、捨てゝ惠みの父の恩、船車にも積まれうか。そればかりかはいとし子を、義理の刃に殺すのが、悲しう無うて何とせう、こらへてたも」と妹に、手を合したる詫淚、「アノ姉樣の勿體ない、斯う成り行くも先の世の、約束事と諦めても、こんなゆゝしい子を殺す、其日も更へず父上まで、同じ刃の憂き別れ、神も佛も無き世か」と、手を取りかはし姉妹が、返らぬ悔み宗貞も、加藤が手前恥ぢらひて、爰にとだにも得も言はぬ、胸の苦しさ目に餘る、淚見せずと喰ひしばる、心を察し正淸も、たもちかねたる共淚、眞は泣寄り眞實の、淚々に暮近き、秋や哀れを添へぬらん。左衞門悲歎の淚を拂ひ、「一子を殺し、二心なき我誠忠を表はすも、悴

から、大事の役目を仕損じた。憎いやつぢやとと様に、呵られうかとそれが悲しい。もし尋ねてなら、笹市に負けはせぬ、怪我につい切られたと、言うて詫して下され」と、今はの際も名を惜しむ、稚心のいぢらしさ。こたへ〳〵し祖父兵部、以前の刀抜くより早く、腹へがはと突立つれば、「ナウ何故の御最期」と、右と左に姉妹、取付き歎けば氣丈の手負、眞弓が顔を打眺めて涙を浮め、「オヽ恨は尤さりながら、何をか包まん松太郎へ、最前渡せし一腰はな、刃引も同然なまくら物、さるによつて笹市が手疵は薄手、斯く計らひし一通り、本意ならねど云聞かさん、姉の葉末は先立ちし、我兄元胤が忘れがたみ、某とは生さぬ中、同じ血の緒と云ひながら、義理有る孫の笹市が命を助け、肉身の松太郎を殺せしは、指す敵加藤正淸に、緣を引いたる親左衞門、返り忠もあらんかと、主家義廣の疑念を晴すは、骨肉の一子を殺す義者の潔白、此上なしと思ひ寄りしも、義理といふ二字が劍と成つたるかや。月にも花にも換へぬ程、いづれ劣らぬ不便さも、生みの娘が生みの緣、分けて可愛い松太郎、コリヤ空死とばし思ふなよ。年こそ寄つたれ無雙の勇者、小坂部兵部音近を、そちが刀で此の如く、小腕に仕留め潔く、討死せし手柄者、出かしをつたと爺親が、賞めこそすれ呵りはせまい、心殘さず臨終を」と、義理の孫子と恩愛に、捨つる命の有りがたさ。姉は元より妹が、「さうとは知らず父上を、恨んだが勿體な

詞の助太刀牛角の手練、切ッつ切られつ逆る、血汐染めなす秋草も、色を爭ふ修羅の場、勝負いづれと氣を配る、父と父とは千萬無量、母は外面に血の涙、祖父は早むる諸の責、「諸君は船、君は船、臣は水、水よく船を浮べ〳〵て、臣よく君を仰ぐ御代とて、返す〴〵もよき御代なれや、〳〵、萬歲の道に歸りなん〳〵」深手に弱る松太郞、氣嵩の笹市捲り立て、とゞめ刺さんと立寄るを、「ヤレ待て勝負見屆けたぞ。娘どもは手負の介抱、早く〳〵」に母と母、我身をしづに東西の、鉦はづれ押明くる、としや遲しと駈け入つて、我子〳〵に縋り付き、「オヽ嬉しや笹市、そなたは淺疵、神や佛のお蔭ぞ」と、姉は悅ぶ妹は、手負にひしと抱付き、介抱愚なきさけぶ、「ヤァ武士の家に育ちながら未練至極、笹市勝負に切勝つ上は、兵部音近今日より、久吉公へ味方ぞ」と、聞くにいそ〳〵姉葉末、お馬の先の高名にも、まさつた手柄と譽めそやす、餘所の悅び子心に、聞くも無念さ松太郞、「エヽわしや負けたか口惜い、今一勝負」と刀を杖、立上れどもよろ〳〵〳〵、見る目に母はたへかねて、「オヽ道理ぢや〳〵、道理ぢやはいなう。武士の意地とは云ひながら、孫は子よりも可愛いと、世の諺も有る物を、見殺しにする固意地は、むごいつれない父上」と、恨の數矢かぞへ立て、いふも眞弓が子に迷ふ、悔みにいとゞ苦しさの、引入る息を張詰めて、「アヽかゝさま、祖父樣に恨はない、負けたはわたしが未熟

劍の勝負を試み、勝つたる方へ祖父が味方、心覺えの此の二腰、是を以て立合へ」と、渡せば取つてめい〳〵が、腰にさすがは武士の、こ太刀の目釘くひ濡し、股立りよしく身拵へ、戸の透間より差覗く、母と母とは在られぬ思ひ、「年端もいかぬ二人の子供、命にかゝる眞劍の、勝負さすとは餘りな、むごいはいの」とかきくどく、親の思ひぞ遣る瀬なき。耳にも懸けず音近は、床に直せし鼓取上げ、「我壯年の頃、武將足利義晴公、數度の軍功御賞美有り、尙も武名を鳴せよと、谺と號けし此鼓を下し賜はり、年賀每に打つが吉例、今六十の賀を祝す、謠終らぬ其中に、用意よくば」と打鳴す、鼓のしらべ、白刃の刃、拔放して立向ふ、互の懸聲鼓の矢聲。「謠 有りがたや、治る御代の習ひとて、山河草木穩かに、五日の風や十日の、あめが下照る日の光」劍の光打合ふ刃音、見る目ひやいさあぶなさに、こらへかねて駈け入るを、何時の間にかは物陰に、忍び姿の宗貞加藤、制し留むれば詮方も、泣けど叫べど白砂を、一足去ず切結ぶ、武士の扇の直燒刃、付入る刀請けはづし、弓手の肩先松太郎、切込まれてたぢ〳〵。母は見るより悲しさの、心あせれど詮方なみだ、「謠 さも潔き山の井の水、山の井の水、山の井の」手疵も屈せぬ松太郎、尖き刃先笹市が、高股四五寸切付くれば、「アレ笹市が切られたはいの、ソレ〳〵油斷仕やんな」「アヽあぶない、必ず負けてたもんな」と、あせりながらも親々が、

子を褒めるは聞きにくい、それ程の事仕かねる様な笹市では無いはいの」「アイ祖父様が味方に付いてくだされずば、死ぬる覺悟に極めてゐます」「オヽさうで有ろ〳〵、早う用意」と上下の、紐を解くやらほどくやら、上著脱がせば同じくも、下は無紋の死出立、見るよりはつとは思ひながら、「オヽ出かしやつたなう、眞實極めたそなたの覺悟、誰も口では立派にいへど、まさかに成ると臆病風、出やすい物」と初の嵐、吹き戻されて「コレ姉さん、臆病風とは誰が事、儀に依つては命を惜む松太郎ぢやござんせぬ」「ソリヤこちの子も同じ事、父上のお返事次第、立派な覺悟見物しや」「イヤ松太郎が覺悟を見せう」「見事そなたが」「お前が」と、我子贔屓に取りのがし、詞しどろに爭へば、「ヤア無益の論談、左程離緣が悲しくば、切れたる緣を繼合す工夫はさま〳〵、さりながらわれ達は此座に叶はぬ、早く立て。うじ〳〵と立ちかねるは、父が詞を用ゐぬか」と、老のいら立是非もなく、出づる心のしをり門、親子の中も隔つる切戸、鎹かけて、「申し祖父様、久吉方へお味方有らば、わしや侍が立ちませぬ」「オヽ武士が立たうが立つまいが、祖父様はこつちの味方」「イヤさうは成るまい」「して見せう」「オヽ出かす〳〵、適勇者の悴ども、しかし大内に付けば笹市が恥辱とならん、と有つて眞柴に從はゞ、松太郎が身の上、いづれを捨ていづれを取らん、彼獅子の子を試すに等しく、此場に置いて兩人が、眞

る、帶も眞身のおとゞひ思ひ、「ヤア緣切つたれば他人向、無禮の挨拶仕るな。身も禮服に改めん」と、いひつゝ立つて奥深く、入る間に程も長廊下、「加藤虎之助正淸」と、親の名を假る笹市が、まだ十才の腕白盛、年も相生ふ松太郎、「父左衞門」と是も亦、名は芳しき栴檀の、みばえゆゝしく打通れば、思ひがけなき母と母、「ヤア左衞門殿と思うたは松太郎か、ようおぢやつたの」「笹市もとゝ樣の御名代ぢやの、長上下の著こなしぶり、よう似合うた事はいの。サア〲お使者の口上此母へ」「イエ〲とゝ樣と緣が切れた、お前は餘所の伯母樣ぢや」「オヽ笹市殿の云はしやる通り、コレ餘所の伯母樣、祖父樣へのお取次、お賴申し上げます」と、云合さねど兩方が、利發に困る母親も、何と答へも口ごもる。一間にかくと洩れ聞く兵部、老の氣丈の長袴、左右に小太刀携へて、作法亂さず歩み出で、「久しく對面せざる中、ハテ大人しく生育ちしな。娘が緣に引かれざる、小坂部が性根を知り、緣を切つて孫共を、使者に差越す發明々々。ガもし此祖父が承引せずば、其儘では歸られまい、とくと思案を定めよ」と、詞も待たず松太郎、「此役目仕おほせねば、生きて屋敷へ戻るなと、とゝ樣のお詞」と、云ひつゝ手早に上下上著、脱げば白無垢麻上下、母は見るより、「オヽさう無うてはならぬ筈、大人も及ばぬ健氣さを、眞似が成るならどなたでも、仕て見やしやんせ」と聞けがしの、詞も耳に當り障り、「コレ妹、親の口から

「イエ〱姉樣まんがちな。申し父上、義廣樣へお味方せうと、つい言うて下さんせ」「ハテ姦しい、是非返答が聞きたくば、雙方共罷りならぬ。此上はそち達が、持參の品を改めよ」と、取出し渡す以前の箱、心濟まねどめい〱が、あたふた明けて取出す、樣子は何かしら布に、「ムウけふの細布胸合はずと、古歌の下の句、手跡は夫正淸殿」「わたしが方はコレ此扇、ドレ〱秋來月を視て歸思多し、自ら籠を開いて白鷴を放つ。ムヽコリヤコレ古郷を思ふ詩の心」「娘共、とくと工夫を仕れ」アイとはいへどおとゞひが、夫の心しら布と、かけし扇の判じ物、解けぬ色目を見て取る音近、「眞柴が招きに從はざる、舅も聟も心々、けふの細布胸合はずと、一家の緣も此ごとく、斷切る布は離緣の印」「エヽそんならわたしは正淸殿に」「オヽそちばかりでない妹も、古郷を慕ふ詩を、扇面に書し送りし左衞門、要をはづせし其扇、親骨子骨ばら〱に、因を切つたる扇の去狀」ハアはつとばかりに詞なく、目には淚の玉手箱、明けてくやしき思ひなり。時しも次より近習の武士、「眞柴家より使者として加藤正淸、大内より使者として出海左衞門宗貞、只今是へ」と知らすれば、萎れし葉末も露持つ心地、「オヽよい所へ夫の使者、子中なした夫婦間、合點もさせず去られた樣子を」「オヽさうでござんすとも、わたしとても同じ事、お使者で有らうが此恨、賴むは姉樣」「呑込んだ」と、初めのもつれ何所へやら、ほどけ合うては引締め

夫の指圖、御思案願ひ上げます」と、同じく傍に差置けば、「ムヽ眞柴大内兩家より、是まで再三招くといへども、所存有つて從はぬ、我に見せよと兩人の、犁と犁とが送りし此箱、とくと思慮して否應の返答、それまでは預り置く、萬事は後程先づ奥へ」と、納むる父も一思案、夫思ひの姉妹が、上べに笑顏つくれども、胸は蝸牛の角隱す、心々を三方へ、引別れてぞ入りにける。秋は殊更物さびし、千草にすだく蟲ならで、臺子の釜の音澄みて、數寄屋待合前栽の、露路と勝手を忍び足、隔て合うたる姉妹が、心も先へ飛石づたひ、それと眞弓が「姉さんが」「オヽ、爰へは何しに、エ聞えた、わしを出し拔き父上を、大内方へ味方に付けうと思やるのか」「さう言はしやんすお前こそ、先へ廻つて久吉方へ、勸める心でござんせう」「エヽ、つべこべと口答、そこ退きやらぬか」と突きのけて、行くも姉甲斐隔つる眞弓、邪魔仕やんなと振りほどく、風に屏風の柳腰、帶際取つて引戾す、腕もかよわき糸薄、亂す黑髮兩方が、摑み合うたる姉妹喧嘩、爭ふはずみ緣側へ、こけるる拍子にばつたりと、思はず開く障子の內、閑を樂む音近が、臺子にかゝり獨服の、濃茶の手前他念なく、「出海加藤が妻と言はるゝ身を以て、はしたなき振舞、さりながら、主家を思ふの貞節、さのみは呵らぬ、中直は幸々、姉妹中も濃茶の盃、サ爰へ〳〵」と機嫌よき、父の詞に葉末差寄り、「今四海一統に、久吉樣へ從ふ時節、理を非に曲げてお味方を」

が右左、願ひ有りげに座に著けば、「ホウ兩家雌雄を爭ふ時節、事繁き中姉妹共、打揃うて來りしは、我賀を祝せん爲ならん。思はざる合戰より、葉末が夫加藤正淸、眞弓が嫁したる左衞門宗貞、聟と聟とは敵と敵、去りながら武士の常珍しからず。シテ孫どもは堅固で居るか」と、尋ねに姉は會釋して、「賀の悅びを幸に、參りし樣子は久吉樣へ、何とぞお味方有る樣と、是までお勸め申せども、お聞入れない父上樣、御勘當遊ばした弟の和三郎、今では眞柴の御譜代同然、聟も娘も子も孫も、一家一門睦じう、同じ味方に有るならば、モウ此樣なお目出たい嬉しい事はない。昔氣質を取置いて、朝日と昇る大將へ、お味方なされ弟が、勘當赦すとつい一口、いうて給はれ父上」と、我身の上と弟が、詫も一つに取交ぜし、姉が願ひを打消す妹、「オヽ身勝手な姉樣、私が來たのも同じ願ひ、大内の家の兩家老、武者之助か出海かと、言はるゝ勇士も眞柴の家臣、正淸に緣有りと、義廣樣のお疑、軍のお供も叶はぬ悔しさ。父上さへお味方あらば、夫の明りも立つ道理、孫子不便と思すなら、大内方へのお味方を、偏に願ひ上げます」と、いふも涙に曇り聲、流石の父も姉妹が、同じ願ひに默然と、答なければ猶すり寄り、「御返答なされぬは姉樣に附くお心か、若しお聞屆けない時は、此箱の封を切り、改め見いと夫の云付」「ソリヤ姉も同じ事、お返事の品に寄り、此箱を父上に、見せて心を定めよと、樣子有りげな

は愚々」と取り合はぬ、詞に三郎膝すり寄せ、「弓矢取つては西國に、人も手を置く小坂部殿、わづか當城の主と成し置くは殘念至極、拙者に力を添へられなば、眞柴大内も討亡し、六十餘州を手中に握らば、九州一圓四國を添へ、進上申す」と宛もなき、雲を便の空頼、聞きも敢へず打笑ひ、「ハヽヽヽ甲に似せて穴を掘る蟹侍とは貴殿の事、我鉾先にて切取つたる一國一城、恩に被るべき主も無ければ、刃向ふべき敵もなし。足る事を知つて此城に、世を我儘の隱居親仁、國郡望みにおり無い、由なき音物穢はし」と、齒に衣被せぬ老人の、詞にべ無く言放せば、短慮の三郎ぐつと詰めかけ、「ヤァ一大事を口外させ、否ならよいはで濟まさうか、胸を定めて返答せよ」と、切刃廻せど見遣りもせず、餘所に吹きなす煙草の煙、さわがぬ丈夫に氣を呑まれ、怖氣立てども負けぬ顏、「かほど言うても相人に成らぬは、エ扨は某が武勇に恐れしものならん。老人相人も大人氣なし、賴聞かずば此進物、持歸るに云分有るまい。留めて見ぬか」と足早に、犬の逊吠家來ども、頬眞赤に枝珊瑚珠、琥珀の塵灰付きほ無う、しよげに成つてぞ立歸る。跡に兵部は眉を皺め、「鹿を指して馬といひし、馬鹿の上行く三郎景澄、數代續きし大友家も、斷絶なさん笑止や」と、仁なる悔きくの間の、襖押明け正淸が、妻の葉末に引添ひし、眞弓といへど弦も無き、胸は眞紅に結びたる、文箱携へめいくに、父の兵部

鼓、音に紛れて目ざましき、勇力無雙の働きに、腰骨肩骨いたやの霰、ばら〳〵ばつと迯げ散つたり。「ホヽヽヽ神慮を恐れ雜人原、助けて返すが放生會、味方の武運長久を、猶も祈りの太祝詞、義心岩戸を押開く、神の勇力加つて、時におほちの勝鬨と、勇んでこそは　三重諷でける。

八册目

老いぬれば、麒麟も駑馬と身退き、我領國に引籠る、小坂部兵部音近、眞柴大内の戰ひで、寄らず障らぬ老將の、胸の器も廣書院、案内と倶に入り來たる。大友三郞景澄、斯くと知らせに館の主兵部音近、家に杖つく岩疊作り、刀引提げ出で向ひ、互に挨拶事終り、「今隣國大内を責討たんと、眞柴久吉大軍を催し合戰最中、簱下の大友何用有つて、入來なるや」と不審顏、「成程貴所にも存じのごとく、某始め列國の諸將、久吉の幕下に從ふも時の權威、武勇自慢の大内さへ、攻付くる勢ひなれど、足下の武名に恐れてや、手指しもせざるは適家柄、殊に長壽の賀を祝し寸志の品、早く〳〵」の詞の中、家來が運ぶ白臺に、巻絹黃金美酒佳肴、お髯の塵とる琥珀の硯、珊瑚の杖突熨斗包、廣緣狹しと並ぶれば、「ムヽ眞柴久吉冠者義廣、二虎戰はしめ、一虎は亡び、一虎は勞るゝ虛を討たんと、賄賂の麥飯を以て、蓮葉の我を釣らんと

返り忠も有らんかと、疑がゝる返り咲。又一つの頼みは、其元の父小坂部兵部義廣公、豫ての懇望、味方に歸伏致されなば、自然と晴れる主人の疑念、汚名を雪ぐ花となるや、歸り咲の不忠不義と後指さゝるゝや、善惡二つは一つの返答、とくと工夫を致されよ」と、花によそへし井上は、實朋友の信なり。聞くに眞弓は胸迫り、とかう辭も無かりしが、思案極めて、「オヽさうぢや、命に懸けて父上を味方に勸め、二心なき夫の忠義を顯はさば」「ホヽウ御前の首尾は元晴が、刀にかけて麁略はなし。必ず吉左右相待ち申す」「おさらば」「さらば」と目禮式禮、夫思ひの一筋道、操に心張り詰めし、眞弓は別れ立歸る。時分よし簀の茶店より、出づる丹次が合圖の呼子、笛の音に寄る鹿ならで、こゝかしこより一時に、現れ出でたる數多の力者、「井上遁すな討取れ」と、追取り圍めば、「ヤア何やつなれば此狼藉、すされやッ」ときめ付くる。「ヤアどこへ〳〵、榮來丹次と假名して、此國へ入込みし某こそ、大友家の勇者と呼ばれし瀬戸坂兵藏、主人を一ぱい嗾らした、鐵砲鍛冶屋の俄武士、覺悟ひろげ」と罵つたり。元晴かんらハヽヽからと打笑ひ、「軍乏しく事がなと、相手ほしきどうぶくら、しをらしき拔斷呼はり、成らば手柄に仕留めて見よ」と、股立きりゝと肩衣刎退け、大手を擴げて突つ立つたり。「ヤアにつくい廣言、ソレ者共」「まつかせ」一度に組付くを、取つては投げのけ人礫、折に神樂の笛

い」千里が竹の林より、太郎の話の聞人ども、笑うて歸れば榮來丹次、葭簀の陰へ立つて入る。折から先手の家來ども、「片寄りませい片よれ」と、道を拂はせ井上新左衞門元晴、折目高なる上下衣服、二腰さすが國取の、家臣と見えし其の勿體、來かゝる向ふへ年ばへも、廿の上は六つ七つ、出海左衞門が妻の眞弓、神に願ひを掛けまくも、忍び詣の下向道、夫と見るより、「ヤ是はく宗定殿の御内室、暫くはお物遠」「あなた樣にも御息もじ」「成程々々、此間の合戰より、敵も味方も軍を止めて日を送るは、扨々退屈、氣晴しがてらの御代參、心もせけばお別れ申す」と、挨拶そこく行かんとする、袂を控へて、「まづ暫く、申すまではなけれども、此度の贐軍、譜代外樣はいふに及ばず、末々の者までも、命をお主に拋つ戰場、夫左衞門只ひとり、軍評議の席へも召されず、出勤無用と御前の仰は、意趣有る人の讒か、神の力に曇りなき、身の云譯も立つやうと、日毎々々の歩詣、あなたのお目に掛るも御利生、お上へよしなのお取なし、偏に願ひ上げます」と、餘儀なき詞に新左衞門、「ナニ家來ども、社參の樣子神主方へ早く案内」と下部を遠ざけ、あたりに咲きたる山櫻の、枝を手折つて傍に寄り、「拙者が返答此通り」と、さし出す一枝打眺め、「時ならず咲く此花を、御返事とおつしやるは」「ホヽウ當春宮島千疊敷において、正清を見遁し歸すは、妻女の緣に繫がれて、親しき一家の出海左衞門、

しやる殿様、神も納受なされたやら、あれ見やしやれ、時でもないに、神木の櫻の盛り、見事ぢやないか」と我一の、咄し半へ講師の丹治、席へ直つて聲づくろひ、「扨唐軍ばかりもあまり珍らしうござらぬから、後席は此間より、當世眞世話噺講釋を仕ります。則ち昨日は團七九郎兵衞一寸德兵衞、攝州住吉霰松原にて口論の一件、つひに片袖を取りかはし、兄弟の約を成しまするは、カノ桃園にて義を結びし、玄德關羽が心に同じ。右九郎兵衞が舅三河屋義平次を切殺し、既に召捕らるべかりし所、一寸三分などが厚情によりまして、備中玉島へ下りまするまでゞございます。又其頃浪花の市中をあぶれありく、五人男といふ者あり、所謂袖ふり男達是なり、其首領を鴈金文七と申し、身の丈七尺、面皮清らかに致して力飽くまで強く、從ふ手下正九郎、たけ拔群にして、眼は照れる星の如く、一聲雲に轟くが故に、世擧つて雷の正九郎と號けたり。其外あんの平兵衞布袋なんど、いづれも一騎當千にして、無雙の豪傑、武士町人の分ちなく、投倒し踏飛し、あたかも群れたる羊の中を、猛虎の駈けるに異ならず、四角八面にあぶれ廻る。理なるかな此鴈金文七、宅間流の奥義を極め、智謀軍術たくましく、賤しき紺屋の悴なれども、後に宇治の常悦と變名仕り、夫より大明の味方となり、千里が竹に分け入つて、酒呑童子を亡すは、「又明日」と出次第に、云ひ廻したる口拍子、聞人も呆れて、「こりや氣疎

ひ寄る、英智の大將隨ふ兒島、「仁木が船の行先こそ、誠の間道ござんなれ。アレ是居けよ兒島元兵衞」ハッと手早に小具足を、身輕に脫捨て飛込む水術、浮きつ沈んつ　三重慕ひ行く。

七冊目

神と君、直なる御代に周防の國、一の宮の鳥居先、參り下向をまつ蔭に、茶店半分片店は、時代世話事讀分講釋、榮來丹次と墨ぐろに、張紙べつたり聞人ども、毎日押しも分られず、一席仕まひ休息の、間もわやくや、甲「ナウいづれも〳〵、扨今の前講は、聞事ではござらぬか」乙「ソレイこちとらも張良が謀に習うて、節季々々掛乞どもが取巻く時、笙の代に輕業の、ちやるめらでおだてかけたら、九里山とあちらこちら、陽氣に成つて逝におろかい」甲「こいつはよいはいの、ヤ其謀で思ひ出した、此國の殿樣大内樣と、久吉殿との大いくさ、先度も岩國山ですつての事、眞柴殿は燒討に逢はれる所、俄に大雨が降つて來て、討ち洩したげなの」乙「サアさうぢやといの、夫から兩方軍も止めて、睨み合うてるるばかり、殊に町人百姓にはお構ひなく、隨分金儲けして賑はしうせいとのお觸ぢや。そこでおれが思ひ付、近年は何でも角力の番附にする事がはやるによつて、軍の勝負附〳〵と賣りあるいたら錢になろかい。兎角下々を慣れま

とゝ様の、未來のお供」と、懐劍咽に貫けば、「娘出かした、潔よう死んでくれ。仁義を守る久吉の、此神文に違はぬ樣、跡に殘すが國の爲」と、探る手先に以前の竹、先に挾んで緣側の、柱にしつかとくゝり付け、よろめきながら親と子が、往樣來樣の通ひ路も、滿ち干る汐の寄せ返る、浮身の終り、「なむあみだ佛、〳〵」今ぞ引きとる波打際、倶に落入る荒海の、哀ばかりぞ殘りける。磯打つ波の眞砂地を、踏立て蹴立て武者之助、駈戻つたる阿修羅の勢ひ、「舅殿、女房共、親父樣」と、呼べど答へも、「緣先に、滴る血汐は二人とも、此海底に沈みしよな。殘りし一書は久吉が、和睦を誓ふ自筆の神文、奇怪至極」と引裂き捨て、「縱橫無盡に尋ぬれども、討ち洩したる大領久吉、我も海手の間道より、一先退き時節を待ち、眞柴が首取り手向けん」と、心に誓うて立つたる所へ、櫓を押切つて上方勢、士卒に交はるきかん坊、船端に大音上げ、「ヤアうつそりの武者之助、我を誠の同宿と、思ふはそつちの當の土、佐々木盛政が家來、粕谷の藤治、有りがたやから取入つて、そつちの工みはへこ蛸坊主、手並を見よ」と下知する矢襖、「ヤア舌長なるうず蟲めら、此世の暇くれんず」と、袖先に手をかけ周處が勇、「打返したる大灘に、藻屑と成つて鏖、フヽヽヽ、ハヽヽヽヽ」少しは心晴れ渡る、月は西島苫洩る船へ、乘移つたる其跡の、血汐に名殘有りあけの、嵐に連れて漕ぐ船の、末しら浪路を窺

坊、勢ひ込んで馳來り、「ヤァ〳〵親仁殿、檀家の頼みに大將を、とつくりやつて山道へ、村境から勢揃へ、えいさつさつとたつた今、往たを見付けた穴賢。モウよい時分仁木樣、早うお出かけなされませ。しかしかはいや大勢が、皆一時に燒殺され、朝には紅顏有つて追付け白骨のみぞ殘れる、歸命無量」術ない山坂へ、汗を流して引つかへす。仁木は開くる喜悅の眉、雲間をきつと打眺め、「我國の火精を以て、東に列る敵の木曜、一炬の焦土と成さんず計畧、水生木と北方より、助くる水氣は味方の凶事、ハテ怪しや」と伸上る。岩國山に雲覆ひ、忽ち降りくる雨の足、雷光隙なく鳴る神の、響き渡つて悽まじし。孝鄉怒りの齒がみをなし、「思ひ寄りなき此天變、謀は人に在り、功を成すべき天運は、久吉に及ばぬよな、無念々々」と降る雨に、爭ふ涙はら〳〵〳〵、妻もうろ〳〵門戶兵衛、「悴を殺し身を捨てゝ、計りしも皆空事、何とせう」倉「どうせう」と、騷ぐ二人を押ししづめ、「此上は無二無三、久吉が首取るか、叶はぬ時は切つて切死、舅殿。女房さらば」と、ゆう者の別れ、一振ふつたる鎗の柄に、風を切つてぞ驅出でたり。親子はハア〳〵心も空に、雨か涙の幾しきり、すはや合戰半と見え、螺の音太鼓人馬の聲、倉「アノ大勢に只一騎、いかゞして防ぎ給はん」戶「聟はいかに」「夫は何」と、早討死の時刻かと、見やる渚も吹く風に、逆浪打込む藁屋の軒、內も生死の汐境、「夫の先がけ

の成敗は、此竹鎗のお仕置に、かゝる因果の罪亡し、大將の御情には、國の相續其の次手に、不忠不孝な悴めを、行先賴み上げます」と、恩愛餘る親心。久吉殆ど感じ給ひ、「卑賤に惜しき親子が心底、實武者之助が妻舅、兒島が親にて有りけるよ。跡氣遣はず成佛せよ、さらば〳〵」と愁涙を、袖に拂うて出で給ふ。諸軍も隊伍嚴かに、間道さして急ぎ行く。泣入る娘も是までと、覺悟の刃止むる父、「イヤ〳〵放して下さんせ」と、あせる此方の苫船より、「舅の命捨てられし故、今こそ死地に陷る久吉、適妙計成就せり」と、云ひつゝひらりと緣側へ、上るは仁木武者之助、凛々たる勇氣の骨柄、「ヤァお前はこちの人、是は〳〵」と二度悔り、手負は傍に這ひ寄つて、「聟に取つた始より、只人ならぬ浪人と、思ふに違はぬこなたの素姓、きのふ陣所で名のり合ひ、教へを守りし今宵の手段、そつちの用意はいかに聟殿」「ハヽア御氣遣ひ下さるな、海手を廻る間道を、反つて山路へおびき入れ、地雷を以て鏖、希代の勝利は瞬く内。去るにても親仁樣、其身ばかりか肉身の、我子を見殺す御心底、嘸や便なく思されん。此家へ忍んで猿冠者を、討取るは易けれども、卑怯未練に身を隱し、欺し討ちしと云はれんは、大家に仕へる武名の恥辱、是よりぼつ付き戰場にて、眞柴が頭を得ん事は、國の洪福舅の賜、ハヽヽヽ嬉し〳〵悅ばしや」と、勇立つたる猛將の、聞えは末世に隱れなし。表へすた〳〵きかん

くぞく後影、「我子ながらも、生れ勝つたりよしいやつ、此感状に姓名とは、何と名を付けをつた」と、親子は行燈引寄せて、「國を出づる時は、親兄弟を忘るゝにはあらねども、弓矢の義理は私ならず。ハテむづかしう書置いたなア。明智の残黨と申すは僞、誠は養父の古主に隨ひ、久吉公の下知によつて、間道を聞取らば、是を功に大内家と和睦の願ひ、國に仇して國を助け、不孝に似て孝を立つる和睦の神文、慥に御落手下され度候。親人樣へ、兒島元兵衛政次」と、讀む度々に親子が驚き、戸「ヤアヽヽ扨は頃日名に高き、兒島元兵衛といふ若者は、悴元次で有つたよな。アヽ久しぶりで戻りやつたは、間道を習はう僞か」「とゝ樣」「娘」ハアはつと鞆れてどうと坐し、しばし詞も無き折から、始終見屆け久吉公、欣然と立出で給ひ、「仁木に緣有る門戸兵衛、一應では敎へぬ間道、聞取る方便は兒島が誠心、感じ得させし其神文、間道より攻入つて、勝利は得るとも大内家の、本領相違有るべからず。案内知るれば直さま出陣、知らせの相圖」と狼煙の一煙、待設けたる諸軍勢、早御迎ひと滿々たり。門戸兵衛は答へもなく、以前切つたる竹鎗の、穗先を腹に突立つれば、取付く娘が氣も半亂「賴みに思うた弟は、義理故隔たる敵味方、死ぬるお氣なら後れはせぬ、早まつた事なされた」と、歎き沈めば息ぐるしく、「古今無雙の名將を、山かせぎの猿智恵で、計らんとせし身の天罰、國の破れを引出した、極惡人

拵へ、「急くまい姉人」倉「心得し」と、忍び寄つたる一間の内、人影目當に突込む竹鎗、切取る手ごたへ「仕損ぜし」と、蹴放す障子の内には爺親、思ひがけなき兄弟は、誤り入つて跡じさり、親は惚れ〴〵何氣なう、「漸〳〵夕べ戻つた弟、海山かけての獵師商賣、知らずに居ては口が干上る、其繩爰へ持つてこい。マア山の案内から、教へて置かう」と差圖して、「ソレ〳〵姉が持つた繩の端、東の尾崎を入込んで、さう、斯う西へ引廻した、二間ばかりが十四五町、見上げる樣な石のかはり、ソレ横槌を上に置け、其石を左へ取り、樹木茂つた谷間を十丁ばかり、此緣側へ上る樣な、切岸高い岩山を、木の根にすがつて攀ぢ登れば、敷居の流れ小瀬川の、上を渡つて又爰に、數百間に餘る大岩、煙草盆、印に付けし枝折を尋ね、右へ廻つて高山を、上りつ下りつ、凡道法貳百丁、岩國の本城へ、急げ〳〵」と云ひければ、「スリヤ御教は山口の間道とな」「オヽ兩人彌猛にはやるとも、いかな〳〵討たれぬ大將、今教へた間道より、武者之助を手引して、久吉が首討たさう爲、事にかこつけ留置いたも、聟に手柄がさせたいばかり、今宵の中に」と、持つたる一腰投げ出せば、元次ははつと押戴き、「コハ有難き御本心、是こそ主人に受けたる感狀、我身の姓名成行まで、一書に詳しく認め置く、事急なれば」と、取出す一封取り次ぐ姉、「難所の夜道怪我せぬ樣」心得用意の陣松明、道を照して驅けり行く。親もぞ

夫の身の上は」「オヽ今大内家へ歸參して、仁木武者之介と云はうがな」「エヽそれ知りながら抜道を、敎へる心でござんすな」「ハテ日本一の久吉殿、下司仕業の奉公も、下を憐む名大將、相人に取るは危もの、こちの内に留めて置くは、國の爲聟が爲ぢや。ドレ裏へいて大將に、米なりと踏ましてこう」と、提くらべせし煙草盆、脇へ押しやり入る跡を、見送る目さへ涙ぐみたる女氣も、案じに暮れの「かねてより、夫を仁木武者之助と、本名知つてとゝさんが今の口ぶり、敵方へ抜道を、敎ゆる心はやつぱり慾か、但しは武家に望有る、弟が出世を願うてか、何にもせよ此事を、夫へ告げん」と駈け出せしが、「イヤ／＼、知らした上で憎い奴と、たつた一人のとゝ樣を、國の仕置は知れた事、親の訴人に行くも同然、こちらも大切あちらも大事、兎にも角にも睦じう、して下さるが親の慈悲、中に立つ身の悲しさを、思ひやりなき胴慾」と、親と夫の二道に、迷ふ心ぞいぢらしき。時分を窺ふ弟元次、直に生立つ竹藪を、手頃に切つたる引削鎗、奥を目がけて寄らんとす。姉は驚き、「コレ弟、勢ひ込んでコリヤどこへ」「シイ音高し姉者人、幼少より武門を望み、上方にて主取せし、亡君明智の敵は久吉、恨を返す此の竹鎗、さすれば大内の國恩も、倶に報ずる今この時、そこ退き給へ」と血氣の若者、「オヽ其心を聞く上は、女ながらも夫の名代、國に仇する眞柴大領、餘しはせじ」と、かひ／゛＼しくも身

が下といふ大身代、持つて見ての其の術なさ、イヤすぢつたはもぢつたはと、訴へて來る度々、四六五六に分けねばならず。ア丶今年は豐年か、凶年か、米が高いは安いまで案じて見るは、其日過しと同じ身の上、町人が笑へば武家が脹れる、在が好ければ叉此方と、思ふ樣には成らぬ世界、なう〳〵いやの天下取、按摩取にでも成りたいと、明暮願うてをりました」「いか樣コリヤさうも有らう、そんならやつぱり樂しみは、夕顏棚の下涼か」「ハイ、無うて事足る身こそ安けれ、ム丶ハ丶丶丶、ドレ一服仕らう」心得小姓が、たばこ盆さへ目八分、長い煙管の上も無き、煙くらべの富士淺間、お倉は始終もぢ〳〵と、「氣の輕いお方なれど、仰山なあのお姿」尸「ほんになア、奥へ連立ち張込んで、おれが著換の古布子、著せかへてやつてくれ」久「ヤソリヤ有りがたい、久しぶりの洗濯物、お辭儀なしに申し請けう」尸「オ丶勝手見がてら休んでおぢや」久「小姓どもは當家を放れ休息いたせ」「後程お目にかゝりましよ」と、上と下との分隔、そぐはぬ藁屋に長袴の、裾引別れ入り給ふ。跡には一人佛壇の、扉押明けぶつ〳〵と、ゆふ時の勤終る頃、お倉は心も心ならず、「申しとゝ樣、我を立拔いて久吉樣を、留めさしやんしたお前の心、間道とやらを敎へる氣か、但しは外に思案でも有つての事か」と心問へば、「そりや心底を見屆けた上、どうせうと儘な事」「イエ〳〵惡うござんせう、御領分に住むお前、殊に

つかと庭に畏り、「何事によらず教るは師匠、習ふからは弟子分の奉公人、遣うて見て下さりませ」「ハヽヽ夫でちつとは誠らしいが、こつちの内に遣ふからは、米も踏んだり木も割つたり、それ合點なら遣うて見よ」「ア、とゝ樣めつさうな、あなたは今誰有らう」「ハアテ大事ない、あのわろも元成上りぢやはい。少さい時には子傅したり、味噌こし提げて走つたり、下司仕事は苦にも成るまい。幸に綯ひかけて置いた其の繩、目見えにやつてくれぬかい」「何が扨安い事、五十尋や百尋は、つい朝腹」と尻輕に、取つて手品も下司近う、塵に交る藁仕事、坊主は傍に伸び欠び、「ヤレ〳〵〳〵、競ひかゝつた數金は元の鞘、反の合はぬは愚僧一人、せめて一ぱい親仁殿」「オヽコリャ道理ぢや、娘よ酒屋へ一走り」アイ〳〵〳〵と立つお倉。「オット待つては蟲がきかん坊、おれが代つて德利と、道々口からあて呑みに」咽を鳴らして出でて行く。煙管くはへて門戸兵衛、「よつ程下地が有るかして、藁のこなしが味い物ぢや。昔の業をさすに付け、一飛の立身出世、マア何から仕出したぞいの」「さればこそ、因果物語をお尋ね、仕業しながらかい摘んでお咄し申そ。小姓ども、湯を一つ」ハヽアと用意を白銀の、器に立てる臺子の溜、おつ取つてがぶ〳〵〳〵、「のみの息さへ天上すれば、男は氣で食へ、生れ付いて小さい事が大嫌ひ、口から出次第いふ事も、一つ拍子が向いて來ると、我も知らぬ運が手傳ひ、天

吉、名乘らぬ先に氣を呑まれ、親子は鞆れ詞なし。近習小姓は戸外に殘し、通り給へばきかん坊、「何と肝がひしやげるか、聟といふは久吉樣、冥加に叶うた嫁舅、氣遣ひなしに歩一の外、働き代の御再興、志早う〳〵」と慾頬坊主、「だまらしやれ、御大身の久吉樣が、獵師の聟に成りたいとは、外に樣子の有りそな事、呑込まぬ緣組は、こつちから變改します。娘も得心せぬからは、連立つて往なしやれ」と、けんもほろゝに雉子と鷹、恐れ氣もなきむくつけ親仁、「ホヽウ利慾に迷はぬ門戶兵衞、推量に違はず、賴入りたき四海の大事、此度當國大內家と、屢合戰利ありといへども、要害堅固の岩國山、本城への間道有るよし、絕所の案內賴まん爲、わざわざ是まで來つたり」「成程其拔道を知つた者は、猪猿の外國中に、今一人と無い此親仁、夫を習うて大內家を、潰してしまふ心であろ」「イヽヤ左にあらず、本道より責詰めなば、兩家の死亡少なからず、智計を以て歸服させ、名家を長く立置く心底、必ず疑ふ事なかれ」と、仁慈の仰にお側附、「お受け〳〵」と有りければ、「ムヽヽハヽヽヽ此國を切取らふと、問に合噓は此親父が、兀あたまに映つて有る。夫ともに、四海の爲と云はしやるが誠なら、物習ふには法の有る物、大將風取り置いて、見事習うて見やしやるか」と、一理窟有る詞のはし、尤とや思しけん、「皆の者、心に叶はぬ金子を取持ち、手廻りの外は船中へ」と、遙に遠ざけ久吉公、つか

持參の敷金、えらぢやはいなう〳〵。サア〳〵皆の衆、ずつと内へ頼みます、えらぢや〳〵大事ぢや」と、わめく間に、人歩が持込む千兩箱、間狹き庭にみちのくの、黃金花咲く寶の山、門戶兵衞ぎよつとし、「是は又どめつさうに持込んだは、此箱は皆金か」「知れた事、えらぢやはいなう〳〵、十箱で丁ど壹萬兩、愚僧も步一の千兩をせしめたら、還俗して花やる心、マアあたまは跡へ廻し、麻上下の仲人役、是がほんまの三國一、聟に取濟した顏で、親父隨分奢らしやれ」と、いきり切つたる坊主天窓、もたへのない年寄質氣、「コレお坊、深切ぶりは忝いが、御本山へ上げるやうに、金出しながら悅んで、こんな內へ來る聟なら、コリヤモ何でもろくな奴ぢや有るまい。マアとつくりと糺した上」と尻へ手の、廻り氣はもつけの幸、「ムヽとよさんさうぢやはいな、盜人か海賊か、跡の捌けがむづかしい、きり〳〵持つて往なしやんせ」と、何がな往なしたがる女房、「エヽ、譯もない、此金に尻宮は、禁中樣でも來す事ならぬ。聟がわせて名を聞いたら、悔りして目を廻さぬ樣、氣付の用意もして置かしやれ。ソレ〳〵そこへ聟殿ぢや」と、立つたり居たり出つ入りつ、譯しろ妙の濱傳ひ、先手の行列ふり込めさ、其勢ひは泰山の、わきはさみ箱輝く金紋、きり鎭めたる天が下、持筒持弓引馬も、萬里に羽うつ大鳥毛、風もなぎなた、枝を鳴らさぬ松の木の下蔭より、今は大樹の德高き、乘物出づる大領久

手廻し親父殿、料理拵へして置かしやれ、コレ濱燒は古いぞや、たつぷり芥子で刺身がよかろ。吸物ならば西島の鰡汁が名物ぢや」と、獨呑込みぬらくら坊主、出て行く隙を待ちかねて、「申し爺さん、聟を入れると云はしやんすは、誰が聟でござんすえ」「オヽ知れた事、我が聟ぢや。尤由有る浪人とて、去々年の冬から、こちの内へ來た五郎作、緣でがな聟に取つて、我と女夫にして置いたが、又跡月國元へ、ちよつと返して下されと、出て往たなりに置去同然、是では濟まぬと思ふ内、お坊の世話でこちの聟に、望んで來る上方者、相談しめて何か無しに、けふ連れて來る筈ぢや」と、聞いてはつとは思ひながら、「アノとゝさんのわつけも無い、何ぼう音信ないとても、漸三月立つや立たず、どうまあ男が持たれる物か、止めにして下さんせ」「イヤイヤ段々と寄る年に、我ばかりでは便がない」「サイナア其便りには夕べから戾つてゐる弟の元次、旅勞で休まして置いたれど、いやといふわたしが無理か、起して來て相談せう」と立上るを、「是は扨、弟めは幼少から侍に成りたがる故、備前の鄕士へ所望せられて遣つた悴、しくじつて戾つて來ても、三つに付いた癖は百まで、便りに成ろやら成るまいやら」「アレまだやつぱり聞分ない、モウ云出して下さんすな」と、つんと背ける門の口、內の樣子はきかん坊、墨の衣も取つてのけ、橫すぢかひに麻裃、「來たぞや〱、花聟を連れて來たが、顏見せぬ內

六冊目

周防長門の浦境、名におほ島の西東、爰は西島西方の、南無阿彌陀佛せぶらかす、在所質氣の門戸兵衛、有り難やとも家名せり。佛事仕まうて平僧の、かき込み茶漬端近に、大胡座してぐわッさぐわさ、給仕人は娘のお倉、「在所料理でお口には合ふまいけれど、よう上つて下さりませ」「ムニヤ〳〵〳〵獵師の内と樂しんだに、いけもせぬ精進物で、やう〳〵茶漬七八杯、仕まひの付かぬ腹鹽梅、コレモウ膳取つて下され」と、箸投捨てれば、主は庭に綯ひかけた、繩もしつかり達者作り、「ムヽ何と云はしやる、扨はこなたは精進嫌ひか」「オヽテヤ、寺にゐる時は、一向一心が据わる故、けんによもない顏して居れど、何に寄らず喰ひたい物は、遁さぬ所できかん坊、ハヽヽヽ併し、コレ親父殿、腥物が一つも無うて、今夜の事はどうさつしやる」「ムヽ今夜の事とは何の事」「ハテ物覺の悪い、咄して置いた聟の事ぢや」「夫忘れてよい物か、精進日で海山とも商賣は休んだが、其の心當はして置いた」「オツトよし〳〵、斯ういふ内へ聟入するも、何やらこなたに頼みたいと、望んでくる上々聟、アヽ心當と言はしやるので、どうやら咽がこそばう成つた。晩まで待たず其聟を、今から往んで連れてくる。何も

戸兵衛といふ方へ尋ねて參るに違ひはない。どうぞお赦し下され」と、おろ〳〵したる云譯を、傍からつく〴〵聞取る親仁、「コレ若い人、其西島の門戸兵衛へは、どういふ由縁で何の用、其譯を言うたがよい」「ハイ〳〵何を隱さう私は、元次と申して、其の門戸兵衛が實の悴でござります。六つの年備前の國へ養子に往て、其後音信不通なれど、此度内を追出され、便らう方は實親を、尋ねて參る道筋で、かゝる繩目の難儀するも、不孝盡した親の罰、御めん〳〵」と泣く涙、落ちあふ緣の門戸兵衛、「ヤア〳〵そんならそちが我子の元次か、門戸兵衛はおれぢやはやい。ドレ顏見せい」と、取付いて、「オヽ稚顏、さうぢや〳〵、マヽ何より無事で嬉しい」と、繩目にかゝる血脈とて、互の淚睦じし。左太夫手を打ち、「扨は貴殿の子息よな、ソレ繩とけ」と下知すれば、無駄骨折つた軍兵ども、手持あしくも緩める繩目、門戸兵衛手をつかへ、「御聞きの通り悴に相違ない上は、どうぞお赦し下さりませ」「何が扨疑念はない、連立つて歸られよ。併し又途中の氣づかひ、村境まで軍兵共、送つて參れ」に總々が、「取違へた言分には、道賑やかに囃して行かう。ヤアけふの軍に負腹立て、何でも手柄としめ付けた、繩さへ違うた左まへ、右の通りの詫言に、送つて濟すが鎧武者、ヨイ〳〵ヨイ〳〵〳〵」よい折からに親と子が、名乘り合うたる小瀬川の、水の流や人の身の、一緣に連立ち 三重 歸りける。

頃日噂の兒島元兵衞、上の瀬を渡し、横鎗に辟易しての此のざまさ。年にも似合はぬ手ひどい智慧な奴では無いか」「イヤ智慧ばかりでない、その鎗先のえらさ、此後兒島と見るならば、必ず用心したがよい」「ナイ埒明かぬ事いふな、御家老仁木武者之介樣、長々浪人してござつたれど、御歸參が叶つて、アレ見よ、向ふの陣所にござれば、兒島でも大島でも、出合うたら一摑みだ。併し負嫌ひの仁木樣、此儘では往なれまい、勝軍に拔けがけして、追ひくろ奴らを一人でも、首を取らずば國の恥」「尤、ぬかるな早急げ」と、喧嘩過ぎての防州勢、小瀨山さして引つかへす。仁木が家來岩田左太夫、六十餘りの老人引連れ、陣外遙に歩み出で、あたり見廻し小聲に成り、「拙者は是にて御別れ申す、密事の樣子は存ぜねども、彌主人が賴みの一儀を」「ハテお氣づかひなされますな、御領分に住む私、殊にあの大切に存ずる御方のいはしやる事、何の如才がござりませう」「然らば御苦勞」「おさらば」と、立別れんとする所へ、以前の軍兵どいやどや、土民と見えし角前髮、高手に縛め引立つるを、左太夫見るより詞をかけ、「ヤア軍兵ども、若輩者に繩かけしは、仔細有つてか何事」と、尋ねに皆々出かし顏、「此どえらい軍場の、跡にうろつく前髮め、何でも敵の廻し者に極つた、それゆゑ斯くの仕合」と、口口いへば件の繩付、「申し〳〵只今も申す通り、うろんな者ぢやござりませぬ。此國の西島、門

び勇むその所へ、あまたの軍卒かけ來り、「ヤァ大藏の卑怯者、相圖を違へ主人を背き、大内へ味方の返り忠、遁さぬ遣らぬ」とおつとり巻く。新左衛門うち笑ひ、「ハヽヽヽ返り忠とは案外なり、古主に仕へる新左衛門、手柄始め軍の手始め、命寢腐る大友勢、火藥の試み幸」と、以前の丸がせ取出し、かしこへ投ぐれば忽ちに、大地は一面炮烙火、あつと叫んで軍兵ども、皆一同に倒れ伏す。「ハヽァ氣味よし〳〵心地よし、始て知つたる火藥の妙、地雷を以て久吉に、泡吹かせんは手裏に在り。汝が首も其時に、取つて得さす」と軍の廣言、「オヽ汝が首は此の小坂部、勝負は互に戰場」と、表を立つる勇者と勇者、娘は今を斷末魔、いたはる母親姉葉末、此家を出づる歸國の道、冥途の旅と戰場と、三つに別るゝ三惡道、心々に 三重出でて行く。

五冊目

岩國に、地名も高き小瀬川筋、天地に響く鯨波、兩陣初度の戰ひも、軍破れて大内勢、思ひ〳〵に落集り、「ヤレ兵內無事に有つたか、悑右仰介怪我はないか。ヤレ〳〵けふの軍は何と思ふ、國始つて圖の無い負けやう、エヽ口惜しい事ではないか」「オヽサ小瀬川を隔てゝ先手の奴等を打ちすくめ、十分味方の勝で有つたに、何として斯う成つたぞい」「アヽ我達は知らないな、

形、スリヤ最前の鐵砲は」「ホ、夫こそは汝が母に手を負はせ、祕書を奪取り逃行く曲者、討留めたりし鐵砲を、我最期ぞと思ひつめ、不便のおゑんが有樣」と、見やれば葉末も涙にくれ、「いとしの人の身の果や」と悔れば手負は息をつぎ、「御最期と思ひ詰め、早まつたわたしが自害、あなたが此世にござるなら、冥途の道を歩み兼、迷ふはいな」と聲をあげ、歎けば母は這寄つて、「オヽ道理ぢや〳〵、是が迷はでなろかいなう。死んだと思ふ其人は、此世に殘つてゐやるもの、何と冥途へ行かれうぞ。エヽ思へば此母が淺手が結句恨めしい」「イヽエせめては母樣の、お命恙ないのが嬉しい」「何のなう、死ぬる程なる深手なら、迷はぬやうに諸共に、三途の川を手を引いて、渡らうものを可愛や」と、老の悔みの數々に、親子が涙紅の、血汐あやなすばかりなり。哀れをよそに新左衛門、涙拂うて突つ立ち上り、「ヤア久吉方の小坂部信鄕、眼前敵を置きながら、此儘にては歸られまい。いざ來い勝負」と犇めけば、小「ホヽいふにや及ぶ、緣は內證敵と敵、某が手練の程受けて見よ」と、いふより早くはつしと打てば、しつかと受留め手練の井上、小坂部重ねて、「夫こそは火藥の祕書、某が手に入れど、汝へ返すは母への義理、領掌有れ」と、聞くより早く祕書の一卷押開き、讀んでは頷く心の會得、「ホヽヽヽ豫て望みし地雷の法、炮烙火の仕掛まで、委細に記せし此一卷、我手に入れば一時の大功」悅

顔ふり上げ、「イ、エイナ、わたしが自害は覺悟の前、可愛い夫を先立てゝ、何の生きて居られうぞ。わたしが死ぬれば子と言うては、お前一人の事なれば、その惡道な心を入れかへ、是からどうぞ嚊さんへ、孝行賴み上げます」と、言ふも苦しき息づかひ、兄は淚の聲を上げ、「オオコリヤ妹よ、おれはとうから善人に成つて居るはいやい。最前祕書を奪はんと、忍びて聞けば大友は、父の敵としらずして、一旦主人と賴めども、恩を請けねば義理もなし。今日よりは亡父が名を繼ぎ、井上新左衞門と改め、舊主に仕ゆる我が本心、母に語つて望の祕書、申請けんと思へども、一應では渡されまじと、心に思はぬ僞りも、主人へ盡す忠義ぞ」と、惡にも强き種が島、大善心の勇士なり。「オ、出かした、其の心を聞いたる母が悅び」と、いふに驚き立ちかゝり、納戶の障子押開けば、手下の火蓋を突留めて、其身も手負の母おきは、「コレコレ大藏、最前の惡者共、裏口より忍び込み、此の如く手をおはせ、祕書を奪取立退きし」と、聞くよりも氣は動轉、「それ取られては一大事、いでぼつ付いて取返さん」と、急きにせいて駈出せば、此方の一間に聲高く、「ヤア〱大內二代の忠臣、種が島を改名せし井上新左衞門元晴に、小坂部和三郎見參せん」と呼はりて、立出づる淸助が、姿貌も引きかへて、甲冑に身を固め、鐵砲引提げ欣然と、葉末諸共居ならべば、新左衞門不審顏、「切腹と思ひの外汝が其

絶入りゐたりける。「オヽ其金おれが借してやろ」と、ぬつと出て來る納戸口、「ヤアおまへは兄さん」「コリヤ聲が高い。裏口より忍び込み、樣子を聞けば手詰の難儀、金借してやる其の代り、火薬の祕書を盗んでこい」「エヽ」「エヽとはいらぬか」「サア夫は」「いやか」「サア」「サア、サア〱どうぢや」と難題も、いやと云はれぬ暮六つ前、「ムウなるほど盗んで上げませうが、其詞に違ひは無いかえ」「ハテ知れた事、人の見ぬ内早う〱」「アイ〱〱」慥に有所は鎭守の内、勿體ない事ながら、夫の命にやかへられぬ。オヽさうぢや〱」と帶引きしめ、夫思ひの一心に、神も赦して給はれと、かよわき足を踏みしめ〱歩み寄り、念なう錠前捻ぢちぎり、扉明くればこは如何に、祕書にはあらで火薬の丸がせ、兄は見るより、「ムウコリヤ炮烙火の仕掛玉、是が有つても祕書がなければごくには立たぬ。どうでも祕書は母ぢやめが懐、いつそ奥へ」と駈行くを、止むるおゐん、「エヽ邪魔ひろがずとそこ放せ」と、爭ふ折しも撞出す暮六つ、「ヤア〱〱あの鐘は暮六つ、夫の生死」と、見やる一間に煙立ち、どうと響きし鐵砲に、おゐんは思はず倒れ伏し、わつとばかりに伏沈み、正體なみだばかりなり。思ひ定めて起上り、「アノ鐵砲は夫の最期、私も倶に」といふより早く、兄が指添取る間なく、咽にがはと突き立つれば、兄は驚き、「コリヤおゐんよ、早まつた事してくれたな」と、悔めばおゐんは

に勘當の、詫せんものと思へども、今落ちぶれし素肌武者、武具も無ければ叶はぬ望、武運に盡きし身の覺悟、武士にもあらず町人の、死恥とも成らぬやう、今姉上が賜はりし、此種が島がゑんさらば」と立上る、裾にすがつて、「コレ〳〵、武士の悴がやみ〳〵と、犬死するが口惜しい、お姉御樣が我身のとゞめ。オヽとはいふ物の由緒有る、武具調へる金が有る」「何と」「サアレ早まつて下さんすな」と、當なき詞も身に換へて、夫思ひの眞實は、不便にも又いぢらしさ。「ムヽウ武具調へる金は百兩、誠とは思はねども、暫しの猶豫はそなたへ禮、暮六つまでに合點か」「アイ、命にかへても拵へます。とはいへ日脚も七つ過、一時たらぬ其内に、もしも出來ずば暮六つの、鐘を合圖に鐵砲腹、コレ短氣を出して下さんすなえ」「此筒音が互の別れ」さらばとばかり見かはす目に、雨か涕の種が島、火繩も濕るやれ障子、開けて一間へ入りにける。跡におゑんはうつとりと、胸は幾瀬の物思ひ、「暮六つまでに請合うたが、百兩と云ふ金が、どうして出來るあだてもなし、一寸遁れもお前の命が延したさ、嘘もやつぱりいとしさ故、命で金が買へるなら、縱へ此身をずた〳〵に、刻まれても金が欲しい。夫の命が助けたい。アレ〳〵アレ、段々日脚も傾く空、こりやまあどうせう〳〵」と、立つたり居たり狂氣の如く、泣入り

廻すこなたの種が島、取上げて打眺め、「稀なる武器の最上なれども、内に魂なき時は、火藥のしるしも能なき鐵砲、ム、元の武士に立歸るか、此家で朽果てるか、的はそなたの心の火蓋、切つて歸るか歸らぬか、工夫をしや」と弟へ、姉が心の口藥、殘して奥へ入る跡は、恩と義理との二つ玉、はたと我身に行當る、思案の體におゑんは摺寄り、「ナウおまへは姉御樣の詞に付き、往ぬる心でござんすかえ。コレイナア俯いてばつかり居て、物いはしやんせぬは、女夫に成るはいやかいな。アほんに思へば耻しい、此家へ見えた其日より、目元の張のきつとして、立居物ごし爪はづれ、由ある人と思ひそめ、二世も三世も變らじと、契りし事も皆いたづら、あの奥樣が姉御なら、あなたは知れた御大名、惚れたといふも勿體ない。譬へていはゞ高根の花、賤しい此身と諦めても、思ひ切られぬ戀路の因果、おまへに別れ片時も、生きてはゐるぬ」と取付いて、恨も道の一筋な、娘心ぞいぢらしき。淸助は默然と、暫し詞も無かりしが、「オ、是まで段々そなたの深切、禮は詞に盡されず、さりながら此の入譯、とつくりと聞いてたも。姉にもせよ、女の推擧に勘當を赦されては、某が武士道立たず、又留れば親への不孝、闇に迷ふ此身の上、然るに幸久吉公、當國出馬の先陣に加はり、高名手柄をあらはして、元の武士に返りし上、表向に助太刀して、大友を討取れば、母の賴みも立つ道理、夫を功

り。「是はマァ〱思ひがけない清助が身の上、其又姉御がお賴とはな」「アイヤ餘の儀でもなく弟が身の上、親の不興にしばしの國遠、其の後行方を尋ねしに、此家に奉公いたす由、聞くと早速參りしは、弟を連れ歸り、親の勘當赦させたく、何卒只今お暇を」と、云ひならべたる詞の先折、「申し葉末樣とやら、其事ならば成りませぬ。と申す譯はアノ清助、下人では無い娘が聟がね、夫に隙は遣られませぬ」「ムウさうおつしやれば角が立つ、たとへ弟が契約せうが、此姉が不得心、約束變改女房を、去つて戻るも男のかうけ」「エヽ」「アヽコレ娘御、心强いと思やらうが、連歸らねば埋木と、朽果つる弟が不便さ」「イヤそりやあなたの勝手ばつかり、たとへ娘が緣は切れても、清助は年の中、證文の有る其中は、極めの奉公勤めさす。大名の御威光でも、國の掟は背かれまい。何と〱」と理の當然、返す詞もなよ竹の、葉末は夫と心得て、家來を招き、用意は何か白臺を、おきはが前にとり直させ、「些少ながら此の金子は、清助が奉公の、年を償ふ三百兩」「イヤ尙以て成りませぬ、職人と侮つて、金銀をもつての押付業、お大名には似合はぬさもしい仕方、相手になる隙がない、とつとゝ持つてお歸り」と、突出す白臺山吹色、落花狼藉あらけなく、納戸の内へ入る跡は、どう納るかしら臺を、取直さする姉が氣に、いづれと分けて身にかゝる、血筋の難儀とやかくと、思ひつゞけて立上り、見

育時節を待ち、夫の仇を報はんと思へども、兄は不所存者、一人はかよわき女の事、頼みといふは敵の血筋大友三郎、上方勢の先駈して、古主大内と戰ふ最中、こなたを古主へ味方させ、大友を討ち夫の恨、晴させて貰ひたさ、聟に望むもこの入譯、得心して下さるか」「アイヤ其儀は」「不得心か」「サア夫は」「サア〳〵〳〵」の詞詰、返答何とせいすけが、望有る身の當惑に、暫し詞も無き折から、表に數多の供廻、前後を圍ふ鋲乘物、門口に舁居ゆれば、近習の侍手をつかへ、「井上氏の貴宅は是かな、案內申す」と音なふ聲、とめ木の音もしとやかに、云はねど夫と高家の奥方、乘物出づる裲姿、思はず見やる清助が、「ヤア姉上か」と、云はんとせしが、身を顧みて控ゆる體、見向きもやらずしづ〳〵と、母が手を取り上座に直し、押下れば此方はもぢ〳〵。「イヤ申し見ぐるしき埴生へ、何御用かはしらねども、慇懃なおあしらひ、サヽひらに是へ」と立上る。「アヽイヤ左樣におつしやる者でなし、私事は加藤虎之助正清が奥、葉末と申す者、又あれにゐる清助事は、自が眞實の弟、其儀に付き密々にお賴み申す子細有つて、はる〲是まで參りし」と聞いて悔り、「エヽそんならあなたは久吉方、正淸樣の奥樣か」と、親子が驚き戀聟の、素姓も嘸と訝るばかり、娘は遉あどなくも、「テモ結構な姉御樣、ようこそお出」と茶を汲むやら、槌でにはかの追從に、二人が戀は見えにけ

れまで、送つてやつて下されい」職「ハイ〳〵左樣ならわたしらは、直にお暇申します」「オ
オ大儀でござつた。あしたの仕事も急ぎ物、隨分早うに」「ハイ〳〵畏りました。サア息子
殿歩ましやれ」大「エ、けつたいな行はれ」「サア〳〵」と付け廻され、我身にあたる鐵砲
組、むしやくしや腹の立場さへ、つぶやきてこそ出でて行く。跡はひつそと大水の、出でし
譬や濁り江の、水によるべのつぎほさへ、挨拶すまぬ二人が心、見て取る母は思案を極め、
「コレ二人共こゝへおぢや。淸助、そなたはあのおゑんと不義イヤサ云交して居やらうがの」
「エ、」「ハテ呵るではない、譯有る中を幸に、聟に成つて貰ひたい」淸「エ、スリヤ不義の
お呵りもなう」圓「ハテ女夫にして下さんすかえ」「オ、互に好きあふ若いどし、得心有れば
夫婦の盃、押付業も淸助を、由ある武士の胤と見た故、緣を結んだ其上で賴みたい事、コレ
賴まれて下され」と、樣子有りげな詞のはし、退引ならず言ひかけられ、「コレハ〳〵、御推
量の上は包むに及ばず、成程わたくし武士の果、樣子によつて賴まれませうが、シテ其子細
は」「嬉しうござる忝い、兄は元より妹にも、是まで包みし氏系圖、夫は井上新左衞門とて、
大内島の冠者の家臣、南蠻の傳を以て、始めて鐵砲を作り主人へ獻上、隣國の大友より鐵砲
を賴りの懇望、與へざるを憤り、不意に押寄せ夫の最期、其後爰にかくれ住み、子供を養

人、すべて武士は武士の道、町人は町人と、其業に疎い者は人間の廢り物、天も覆はず、地も是を載せずとやらん、今でも職人に成る心なら、勘當赦すまい物でもない。道に背いた侍、顔見るも淺まし穢らはし」と、誠を攻めし母親の、異見を聞くに淸助が、我身に徹へ骨に沁み、不孝を悔む忍び泣。大藏は大あくび、「エ、そんなしゆんだ事聞きには來ぬはい。勘當赦さねばそつちの損、コレけふ爰へ來たは、火藥の祕書が欲しいばかり、サア出して貰はう、出して下あれい」「イヤそんな物は持つては居ぬぞ」「エ、隱さんすな、親父から傳はつた地雷の法、知りぬいてゐる此大藏、主人大友の懇望、首尾ようしいたら大名に成る代物、出世の種ぢや、出したく。出さねばいつそ手短に、家搜しする」と、二人に目くばせ身構へし、奥を目がけて駈入る氣相、騒ぐ二人騒がぬおきは、「コレ職人衆、さつきに云付けて置いた通り、早うく」とい ふ聲に、裏よりてん手に下職共、鐵砲引提げ走り出で、筒先揃へて取卷いたり。女と思ひ侮つて、奥へと有ればお好みの鐵砲組、念を入れての二つ玉」火「ア、コレめつさうな。いかに商賣柄ぢやとて、斯う澤山に鐵砲を、もて扱うてよい物か。ナア火蓋よ、二つ玉よ」「ム、誰ぞ逝くまいといふにこされ、おいらもとうから逝きたうて、尻がもぢく氣ももぢく」「ホ、、、重ねてから足切込むと何時でも此通り。コレ皆の衆、後へ戻れば面倒な、どうで往ぬ道野はづ

すりで有らうがな、けふよりはお侍のちやきく、夫に付いて母ぢやに急用、逢ひに來たのぢや。母ぢや人く」と、家内に響く乙調聲、もれ聞えてや母は立出で、「ついに見た事もないお侍、何の御用」と外さぬ顏。「エヽまた片意地かい。けふ來たは無心ではない、コレそつちの爲には大豐年。其譯はまあ斯うぢや、きのふ大友様へ抱へられ、れつきとしたお侍、仲間の火蓋や二つ玉もあの通りで。家來共」「ナイく」と畏る。「何とえらいか、斯う出世するに付いては、母ぢやや妹を、喰ふや喰はずの職人では置かれまいと、終にない慈悲の心が起つて來た故、こつちから了簡付けて、勘當赦されに來てやつたのぢや。ナアさうでないか」「さうともく。破れ世帶を取置いて、後室樣よ奥樣と、言はれて出世をなさるといふもの。ナア火ぶたよ」「オヽテヤ。勘當請けた母親の面倒を見てやるとは、近年の大孝行、綿屋其處退けでござります」「母ぢや人聞いてか、あの通りぢや。有りがたいか、本得心か、エヽ嬉しさうな顏付ぢや」と、口から出次第取りじめも、成らず者とは知られけり。母はあわてゝ高笑ひ、「ホヽヽア、おとましや、此のお侍は氣違ひさうな、笑止な事」と顏背け、相人にならねば娘のおゑん、「夫は餘りお氣強い、侍に成つたと有るからは、是までの心でも有るまい、どうぞ是から」「アアコレそりや何を云やる。親の讓りの職を嫌ひ、外を家とする不孝者、勘當したれば他人と他

清助は畏り、「ハイ今日の注文は此通りでござります」と、さし出す書付手にとる母、娘は夫と嬉しさも、飛立つ心を目で知らす、母の手前ぞしんきなる。「秋月の屋敷が貳百挺、菊地が三百挺、こりや鐵砲ばかりぢやの」「ハイ其外に種が島廿挺、是も同じ屋敷の御注文。イヤ申し夫はさうと、上方勢が國境まで攻入つたと、九州の地はきつい騒動でござります」「イヤもう何ぼ騒動しても、氣遣ひのない此の離島、あつちは軍、こつちは金設けの盛、あまりの遽しさにほつとりと草臥れた、どりや此透に一寢入。そなたも休みや」と母親が、立つは娘の勝手口、暖簾の内へ入りにけり。おゑんは跡を打詠め、「テモマアきつい粹な嬶さん、二人を殘して置かしやんしたは、譯有る中を知つての事か、いつそ樣子を打明けて」「ア、コレ申し、それ言うたらわたしはおめあし」「何のマア母樣に限つて、そんな心は無いはいの。私には聟を取ると云はんした事も有り、其樣に言やるのは、わがみは厭かや」「ハテめつさうな、何で私が」「いやでは無いかえ、オヽ嬉し。そんなら斯う」と手を取つて、戀におぼこは媚めきて、抱き合うたる其折から、勘當の息子種が島大藏、大小いかつに差しこはらし、仲間の惡者供に連れ、案内も無くずつと入る。内には悔り飛びのく二人。「ア、コリヤ／＼迯げる事はない、兄は粹ぢや／＼。そして母ぢやは内にか」「アイ嬶樣は奥にぢやが、兄さんおまへの其の形はえ」「是か、えいゆ

其比は絶えて無かりし鐵砲鍛冶、井上何某が後家娘、夫の讓り受繼いで、世渡る業も上の關、店は諸方の注文に、砥いだり磨く鐵砲に、手も放されぬ忙しさ。汗をたら〳〵下職角兵衛、「アアしんどや〳〵、煙草もせずと大方にやり付けたぞ」「オヽおいらも腰がめり〳〵いふ、イヤモなんぼめりついても、お圓樣の顏さへ見ると、とんとしんどい事はない。夫にあの子の名をおゑんとはきつい間違ひ、いつでも顏見るとおへるのにナア」「アヽ又惡口ばつかり、嗅さんが聞いてぢやぞえ」と、顏は赤らむ紅葉ばの、うつらふ色ぞ見まほしき。暖簾押上げ母おきは、「イヤコレ皆の衆、けふの仕業は急ぎ物、まう出來あがりましたかの」「ハイ〳〵磨きは出來ましてござります」「それなら仕立はいつもの通り、裏の細工場」「ハイ〳〵そんなら左樣」と銘銘に、鐵砲抱かへ立つて行く。おゑんは母が傍に寄り、「此間から軍が起ると、此の周防の國は大騷動、夫につけても便少ない女の身の上、かてゝ加へた事ながら、斯ういふ折を幸に、勘當なされた兄樣を」「アヽ又兄が事かいなう。親の讓りの職を嫌ひ、鐵砲組の、イヤ種が島のと、異名を付けての男達、あれが人間の所作かいなう。思ひ出すも面目ない、「イ此後は兄が事、ぶつつり言うてもたもるなや。ほんに夫はさうと、此の淸助は御城下までいきやつたが、連は戻り」と母娘、見やる表へ立歸る、此家の下人淸助とて、色もくつきり白島に、女の惚れる當世男、

取つて參りますが、褒美には違ひなう大名に」一「オヽサ望みさへ叶へば、二ヶ國が三ヶ國でもくれるはさ」「オツトうまいは。何と火蓋も二ツ玉もあれ聞いたか」火「イヤまういつそえらぢや。時にこなんが大名に成らんすと、男作の拵へがむつかしい。マア下駄は蒔繪に頭巾は縫と行かずば成るまい」二「オヽそれ火蓋のいふ通り、褌は虎の皮がよからうかい。ノウ頭」「イヤ申し三郎様、萬事は明日此方より」一「然らば手筈の違はぬ様、上の關の野はづれに、家來を待たせ返事を相待つ、必ず首尾よく。大藏さらば」藏「おさらば」と、欲惡二つ兩方へ、引別れてぞ急ぎ行く。歸る道筋氣もせきやう、おゑんが跡に清助が、息急き歩む向ふの方、のさばり出づる二人の惡者、見るよりおゑん清助も、倶に驚くばかりなり。「ヤイ二才め、ようやりあがつたな。大方この道と思うた故、頭にちやら食はして跡へ戻つたは、さつきの禮を」と兩方より、一度に掛るを身をかはし、左右へどつさり投げられても、直に取付く我武者者、おゑんが氣轉煮賣屋の、茶釜を取つて火蓋が頭、手桶をざんぶり二つ玉、うろ付く二人その隙に、おゑんが手を取り清助は、跡をも見ずして三重逃げ歸る。

四冊目

つて突き退くれば、「ヤァ凊介かよい所へ」と、悦ぶおゑんは地獄にて、佛に逢ひし心なり。「コリヤ二才め、何で邪魔擴ぐ」「イャ邪魔は致しませぬが、この娘御をどう成されます」「ハテどういうたら惚れたに因つて、ナア二つ玉」「オ、二人して本得心にたんのうさすのぢや」「ハテ夫は滅相といふもの、惚れたと思うたら、あつちからも惚れる様にするが色事でござります」「ム、成程さうでは有らうがナウ火蓋、おいらはついど女の方から」火「サアそこが祕密魂膽、何でも惚れさそうと思へば、女の好へ持つて行くが色事の穴、此娘御はきつい身振や踊が」「オット皆まで言ふな込んでゐるは。コリャ二つ玉、娘の好くは雷子や巴江の、唄板子出島はさて色所、容は立派に氣はさつぱ、腰ざし紋羽に中よしの、洒落た顔してよしなさい、夕べも來よとて騙はたの」踊に性根有頂天、二人も此場をだまはたの、透を窺ひ迯げて行く。踊りしまうて其處らを見て、「コリヤとう〳〵おれを騙はたの、憎いやつ」と、呟く折から懐手、のつさのつさと出で來る、種が島大藏、大道に立ちはだかり、「最前より此所へ、大友殿は見えなんだか」と、尋ぬる向ふへ大友三郎、家來引連れ歩みくる。夫と見るより大藏は、土に手をつき敬へば、三郎はあたりを見廻し、「先達て申し付けた、其方が家に傳はる火藥の祕書、いよ〳〵明日」「ハテ御念に及ばぬ。勘當しられても子に違ひのない私、片意地いうても親は女の事、つい

十足りませぬ」「オヽ足らずば、何ぼ有らうと皆借り」と、あつい火蓋が頰の皮、見附けたそぶりこなたの煮賣屋、寄らず障らずあゆみ寄り、すれ違うたる身鹽梅、煮賣屋聲かけ、「これこれ」「おれが事か」「こなさんの事でごんす」「何でありや」「大儀ながら、あの錦帶橋の橋詰へ出て下はれい」「サア橋詰へ來たが何でありや」「イヤ外の事でもない。跡の月の晦日の晚に、拂らうと云はんした蛸の代、サア今貰はうかい」「エヽ何を吐かすぞい、借つた物をついに拂うた事はない。おこせとぬかしや此通り」と、頭ぴつしやり只喰はれ、算用合はぬそろばん橋、出入はこぢけた煮賣屋ども、「こりやたまらぬ」と迯げて行く。「コリヤ二つ玉、皆逭げをつた間に、何にも角も喰うてこまさうかい」「オヽ知れた事、こりや天からのお當てがひ、うまいうまい」と二人ども、そこら探して鍋の蓋、取なりしやんと振袖の、袂に餘る色盛り、裾もほらほら歩み來る、お圓を見るより跡先から、「コレ姉さん、何處へ行かんす、送ろかえ」「オヽ此二つ玉も連になろかえ」と、釣りかけて見る戀の羂。「オヽ滅相な、私はつい其處な氏神樣へ」「オット其氏神込んでゐる、大かた色事の願であろ。神樣を頼まいでも、得心してゐるおれはどうぢやえ」「コレアノ火蓋が厭ならおれになと、私が心が屆いたら、すぐにお前を連れていぬ。返事はどう」と兩方から、無理に引つぱる其所へ、來かゝる淸介走り寄り、二人を取

早う」に是非なくも、躓けつ轉びつ落ちて行く。續いて歩む後より、「曲者捕つた」と取付く捕人、海へばつさり切込んで、跡しら浪と失せにけり。始終の樣子廻廊の、蔭に聞き居る怪しの宮奴、老女が跡を打ながめ、「今のは慥に、ムウ」と、胸に納むる折こそ有れ、何處よりかはばらばらと、諸侯のめん〲立出でて、「久吉公の御迎ひ」と、供奉嚴重に、備はる智仁いう〲と、寛仁大度の御粧ひ、前後左右は綺羅星の、輝く威勢高富氏、旅館をさして三重歸らるゝ。

三冊目

唄せうなら〲、喧嘩をせうなら弱い奴がよいはさ。ぞめく小唄も嘘八百、鐵砲組の惡者ども、火蓋の三に二つ玉、大道一ぱい肩肘を、張込くはすいがみ頬、直に渡らね錦帶橋、煮賣店に腰打ちかけ、「すつぽん屋、夕べのは水臭うて喰はれなんだ」「オヽ火蓋がいふ通り、水臭ういけなんだ。今度は隨分すり込み、一膳持つて來られい」「ハイ水くさうて惡くば、いつそころ煎にせう」と釜の下、炭が無いやら煮えかぬる。火吹竹やら杓子やら、取違へたるあわて者、二人は御機嫌、「味さうな、早う〲」と近飢ゑ、出來るや否や取食ひ、「是で算用しられい」と、投出したるはした錢、亭主は取上げ不承々々、「此間のも一所にして壹貫八百、是では七百八

めかくれば、破れかぶれと三郎が、寶を渡せと組付くを、脇壺ちやうど眞の當、早足に蹴上ぐる疊の下、ひらりと飛込む手練の曲者、四方を圍んで召捕れと、番手を定むる數多の捕人、花壇梁山廣庭を、驅り立て〳〵かり立つる。早日も西に入りうみや、船路擁護の嚴島、前は海水漫々として、實日の本に三つの景、眺に飽かぬ風情なり。神すゞしめの神樂歌、きねが鼓や吹きすさぶ、笛の響もしん〳〵と、音も澄み渡る夕暮時、浪間を潛り舌先より、現れ出づる勅使の曲者、寶を口に引つくはへ、蓬の白髮四方へ亂し、さも物凄き老女の姿、心を配りあたりを眺め、「年來望みし勘合の印、是さへ有れば軍勢催促は心の儘、其上加藤出海ともに、互に疑念を抱くやう、反間を用ひたれば、眞柴大内が軍は治定、其虚を討たば大望成就。エヽ、忝や嬉しや」と、悦ぶ後に窺ふ捕人、「曲者やらぬ」と突出す長柄、心得たりと身をかはし、前後を拂うて渡り合ひ、多勢を屈せぬ手練の老女、祕術を盡し挑みあふ、激しき太刀風に切立てられ、「こりや叶はぬ」と大勢は、一度にばつと迯げちつたり。猶も心を配る内、さまよひ出づる以前の娘、「コレ姫君、狼狽へる所でない。浦手へ廻れば合圖の苫船、サア早う〳〵」とせつかれても、心はそゞろ氣はうろ〳〵、「サア教への所へ行かうと思うても、跡へ心が引かされて、エエつゝとまう、どうぞも一度さつきのお方に」「エヽ何をくど〳〵。生捕られては家の恥、早う

り。斯くと聞くより家中の諸士、「正清歸すな、討取れ」と、矢襖つくつて取卷けば、「ヤレ待て方々、只一人の敵を恐れ、討取りしと沙汰有つては、大内の武勇鈍きに似たり、皆引かれよ」と大度の詞、智勇に其の名出海は、實に大國の執權なり。正清につこと打笑ひ、「數度の軍場に鍛うたる、加藤が五體は鐵石同然、なまくら刃金の矢先は立たぬ」「ホヽ、其廣言を左衞門が、留めるは戰場手練の鎗先」「勝負は互の天運次第」と、並みゐる諸士に目もやらず、出行く勇將見送る義者、別れてこそは立歸る。引違へて庭先へ、駈け來る家來が忙たゞしく、「勅使下向の折も折、又もや絹笠三位なりと、只今是へ」と知らする中、早昇きすゆる乘物の、内より出づる其の勿體、堂上ながら丸裸、立ちはだかつて正笏し、「我こそ絹笠三位光高、路次の狼藉、何者がかゝる仕業を、武士ども哀めよや」とばかりにて、ふるひ聲なる勅使の趣、耳にもかけず以前の勅使、「眞柴大内が再度の確執、歸洛の上にて奏聞せん」と、座を立ち給へば、「ヤア勅使と成つて入込む曲者、そこ動くな」と詰寄る宗貞、寄らば切らんと眼を配る、頭上にふしぎや數多の白鳩、群をなすこそ怪しけれ。左衞門きつと見、「扨こそ〳〵、宇佐八幡の示現によつて、當家に授かる白鳩裂、勘合の印の袋となす、世俗に是を大内裂と、隱れなだかき希代の重器、今目前に顯はす奇瑞、氏神守護有る大内の寶、盗取つて所持する曲者、腕を廻せ」と詰

と」「ヤア表裏とは舌長し、旗を出さずば何時までも、いつかな寶は渡さぬ左衞門」「そりや此方も同然さ。勘合の印落手の上、望みの旗は渡しくれう。併し其印は先達て、陶が反逆露顯の砌、紛失したで有らうがな」「オヽ小田春永沒落より、行方知れざる月日の旗、久吉是を所持せしとは、僞で有らうがな」「イヤ此方に所持してゐる」「イヤサ勘合の印は大内の重器、紛失せし覺はない」「しかと有るかよ」「おんでもない事」「見るぞよ」「見せう」と雙方が、忍びの鯉口切刃の爭ひ、「ヤア勅使の御前も憚らぬ水掛論、此上は兩方の、寶と寶を突出して、取換へめされ」と大友が、うはべに作るお爲顏、「よきに」とばかり光高の、仰にはつと二人の勇士、「ヤアヤア者ども、囚人引け」と呼はれば、承つて兩方より、忍びと見えし黑裝束、めいめい主人が傍近く、引つするてこそ控ゐる。「サア宗貞、此曲者覺えあらん。月日の旗を奪はんと、我旅宿へ忍び込みし大内が家來、旗の代に請取るか」「オヽ此曲者も義廣公の旅宿へ忍び、勘合の印を奪はんとせし眞柴が家來、助け返すを有りがたいと、旗を渡すかさもなくば、西國武士の手並を見せう」「オヽ是非渡さずば、數萬騎の軍勢を以て義廣が、首も寶も請取る正淸」「ホヽヽヽ面白し。取るか遣るかは軍の勝劣、相聟變じて敵同士。一家の因も兩家の和睦も、倶に破斷の敵と敵、軍神への血祭り」と、忍と忍を兩人が、拔く間も稻妻閃めく刀、首は彼處へ落ちてけ

強力、「さ知つたり」と請留むれど、重さに釣られてたぢく、尻居にどつさり、見やりもせず、手を引き合うて二人連、廓をさして出でて行く。「ヤアにつくい二才め遁さじ」と、駈出す後へ、「ヤレ大藏早まるな」と、聲かけ出づる大友三郎、「彼奴こそ正しく大内義廣、容易には討取りがたく、自滅させんず我計略。是こそ大内が家に傳はる勘合の印」「スリヤ先達て其の寶を」「シイ、高いく」と兩人が、密めく奥は樂器の調べ、笙の音色も冴え渡る、廊下傳ひに光高卿、「路次にて喋し合せし如く、其印だに差上げなば、望に任せ眞柴大内征伐の院宣なるぞ、有りがたく頂戴せよ」「ハア、有りがたしく。此上は久吉でも大内でも、宣旨を所持する某に、背かば朝敵、此上ながら禁廷宜しく光高卿」と、印を渡せば裝束の、袖に納むる勅使の底意、善か悪かはしろ書院、響く時計も酉の刻、「ヤア大藏、汝は早く濱手へ廻り、勅使の乘船用意せよ」「畏つた」と駈けり行く。折から騒ぐ奥座敷、追取刀に出海左衛門、苦り切つたる正清も、勅使の御座と見るよりも、思はず左右に平伏す。光高柔和の御氣色にて、「コハけしからざる二人が顔色、仔細いかに」と有りければ、謹しんで手をつかへ、「兩家の重器を取換へよと、勅命に從はざる久吉が我儘。サア正清、勅使も是に御入りなるぞ。今一言云ふて見よ」「オオ其方の寶も出さず、月日の旗な請取らんと、表裏を以て人を欺くへれ股武士と、言うたが何

御意と申し、お屋敷へ係つた御用」「しかと承知な。滿足」と、件の大筒左右の手に、苦も無くぐつとさし上げて、磐石碎けと投付くるを、得たりと請けたる金剛力、さしもの正清横手を打ち、「重さ數斤の其大筒、色も變ぜず請留めし、稀代の勇力驚き入る」「イヤモ是がほんの怪我のはずみ、お目に留つて迷惑千萬。ドレ此樣子御前へ」と、詞少に立つて行く。「ヤア大内島の冠者義廣先づ待たれよ」と呼びかくれば、「アイヤ私は生れの町人、思ひがけない名を云うて、ヘヽお弄りなされて下さりますな」「ホヽ賤しき商人と姿を變ゆるも、危きに近寄らざる、君子の敎を用ゆる名將」「イヤモいかやうに御意なされても、町人の岩國屋と申すに相違はござりませぬ」「ムヽ名を隱す事は易く、德を隱す事は難し。ハテ町人よな」「ハイ／＼是を御緣にお出入を」「申付くる折も有らう」「御緣もござらば重ねて對面。おさらば」「さらば」と詞數、云はねど底意探合ふ、武士町人の汐境、隔てあうたる奥書院、心殘して打通る。其間を待ちかねかけ出る大隅、「わしやお怪我が有らうかと、あぶ／＼思うて居たはいな」「イヤモ怪我の代りに氣惡い相人、ほつこりと退屈。是からわつさり廓酒、サアおぢや太夫」と打ちつれて、行く先向ふを閉切る大藏、「貰ひかゝつた其の大隅、一言事ほざくとしめ上ぐる」と、摑みかゝるを身をかはし、「太夫が代りに請取れ」と、以前の大筒取るより早く、どうど投ければ透さぬ

へ、早うお出」に是非なくも、連れて入る跡式臺より、「加藤正淸參上」と、知らせの聲に大隅は、小蔭へ忍ぶ間もなく、英名千里を走るが如き、虎之助正淸、風切る肩衣故實を正し、優々と打通り、「それに居るは義廣の手廻りの者なるか」「イヤ私めはお出入の町人、岩國屋勇次郎と申す者でござります」「ム、立入り致さば存じつらん、今日この千疊敷において、眞柴大内の寳を取りかへ、兩家和睦をなすべしとの勅命 據なく、主君久吉の名代として、爰に來る加藤正淸、武名に聞きおぢ出向はざる、臆病至極の冠者義廣、但しは大内が國風なるや、失禮なり」と不興の體、「アイヤ憚りながら加藤樣のお詞とも存じませぬ。何ぼ武勇烈しいあなた樣でも、不知案内の敵の國、謀を以て討つ時は、いかな勇者も欺すに手なし。又寳と寳が雙方へ納らぬ其中はまだ敵々、下々で申せば喧嘩の相人、中直りない先は、式作法には及ぶまいかと存じまする」「ム、某に向ひ、左程の事いはんず者覺えない。ハテ町人には惜しい男、器量を見込み用事有り。ヤア〳〵者ども、持參の兵器はや是へ」はつと答へて家來ども、えいや聲して舁き出づる、南蠻流の國崩し、目通りにさし置けば、「ナニ勇次郎とやら、大内が工夫の此大筒、數千の敵を打ちひしぐ火術の徳有るにもせよ、人力の及ばざる久吉公に敵せんとは、いつかな叶はぬ。有つて無用の軍器なれど、和睦のしるし我手土産、取次致してくれまいか」「加藤樣の

れど、身は口なしの色始、何のいらへも無いのが返事。「ム、そちら向くは否か、頭振るは應かいの。とんと分らぬ壬生狂言、獨修羅くら燃さうより、つい一筆」と傍なる、料紙取つて差出せば、恥し顔に散る紅葉、鹿の巻筆喰ひしめし、心の丈をかくとだに、絵に知れかしの判じ物、手に取上げて、「こりや何ぢや。羽根と手鞠に鬼の面を書いたのは、來年の事言や鬼が笑ふといふでも有るまい、エ、聞えた〳〵。嬉しいけれど怖いといふ心ぢやの、ハテ初心な」と引寄せて、抱きしむればしめ返す、袖と袖との振合せ、これぞ他生の緣づたひ、出合頭に大隅が、それと見るより駈寄つて、「今に始めぬ惡性も、殿御は常といひもせう、物さへ言はれぬ瘂の身で、あた徒な。お前を爰に置くからぢや、サアござんせ」と手を取つて、行くを遣らじと隔つる娘、「邪魔さんすな」とやら腹立、悋氣嫉妬にひつしよ無う、振放されて思はずも、「ナウこれ待つて」と縋り付く、聲に驚き、「オ、笑止、物は言はぬの瘂ぢやのと、男を寐取る拵へ事」「イエ〳〵さうした事ぢやない。是には深い譯有れど、白地には言はれぬ時宜、大事の殿御に惚れたかと、嘸憎からう大隅殿。諸譯とやら手管とやら、しらぬ田舍の藪椿、松の位に及びない、戀路とし れど姫ごぜの、切ない心思ひやり、たつた一度の逢瀬をば、赦して給べ」とかきくどく、娘心ぞわりなけれ。折から出づる婢ども、「お勅使樣の召しまする、お娘御樣マアあれ。

なる者」と尋ぬれば、「ホヽ不審は尤、此女は都者なるが、嚴嶋詣の道にて連の女にはぐれし由、いふも分らぬ瘂病、見るに忍びず不便さに、歸洛の砌連歸り、親なる者に渡さんと、是まで召連れ來りし」と、仰に出海頭を下げ、「ハヽアコハ有難き御仁心、感ずるに餘り有り。シテ大内家へ仰下さる勅諚の趣承りたし」と、演説すれば正笏有り、「抑眞柴大内は國家の柱石、虎狼の心を挾まば、民の憂少からず、是によつて兩家共、互に寶を取りかはし、和議を調へ禁庭を守護せよと有る帝の宣命、それに付き心得ぬは加藤正淸、先達て紛失せし、日月の御旗を」「アヽイヤ何と御意なさる、スリヤ彌御旗は」「サア夙くに紛失。春永滅後、行方知れざる御旗をば、有ると云貫く眞柴主從、迂闊に寶は渡されまじ」「ハヽア某も正淸を、合點行かずと存ぜし故、寶の實否を探らん爲、とくより旅館へ忍びを以て」「ホウ拔目なき汝が働、流石は大内の執權、さこそ〳〵。寶取りかゆるは申の上刻、先づそれまでは奥殿にて、休息せん」と御立有れば、出海左衛門勇次郎に打向ひ、「光高卿の御目かけられし此女、御出館まで間も有れば、此浦の名所古跡、誘引有れ」と氣を付けて、勅使に引添ひしづ〳〵と、奥殿さして入りにける。跡には附ほなまめきし、顏に見とれて勇次郎、思はず傍へ差寄つて、「瘂には惜しい品形、田舍に京も及びない、手入らずの初蕾、我等口切致したい。コレどうぢや〳〵」と手を取

扨此次は誰ぢやいな。智慧かそか〳〵」「アヽコリヤ〳〵其様な愚癡合はよしにして、酒に爲い〳〵」と、又呑みかける勇次郎、「イヤモウ旦那の其の丈夫には、如何な權八も大避易、常の酒でも有る事か、泡盛とは、聲でござります」「エヽ埒のあかぬ奴、此酒はおいらが常ぢや。サア注げ〳〵」と、差出す盃、太「アヽコレ申し、其様に醉うても大事ないのかえ。けふは此千疊敷を揚屋にして、殿様の御名代、出海様を饗す役目、それにまあ其様に」「ハテ太夫、大事ないはいなう。…アノ左衞門様の堅藏に合うてゐたら勞痎病、兎角浮世は色と酒。唄これな源太様、此頃に、聞けば軍が有るさうな、件の鎧はどう成さる、だんない〳〵大事ない、鎧も兜もいらばこそ、さを〳〵〳〵竿竹ぢや」騒ぐ折しも次の間より、「勅使のお入」と警蹕の、聲聞ゆれば權八は、見えをして、「お勅使様にはいざ先是へ」勇「ヤイ〳〵あれは本まのお勅使ぢやはやい」「エヽおりや又芝居事ぢやと思うて居ました。そんなら私らは何所ぞへ散りませうかいな」勇「オヽそれ、太夫を連れて奥の間へ、早う〳〵」に大隅も、皆も一間へ立つて行く。跡こなたより出海左衞門宗貞、禮服改め出迎へば、程なく入來る絹笠三位、衣冠の姿氣高くも、儲けの御座に著き給へば、跡に目馴れぬ地下育、譯はしら齒の振袖娘、怖づ〳〵出でて畏る。左衞門女に目を著けて、「見れば賤しきなり形、高貴の前とも憚らず、お次に控へし其女は、いか

一首の和歌、和田藏謹しんで押戴き、「しるしなき、音をも啼くかな鶯の、今年のみ散る花ならなくに。コリャ是れ古今集躬恒が歌、古歌を以てしるしなき心をしらす賜は、ムウ、スリヤ大内家の寶は此歌の言葉の如く、しるしなく紛失せしとの御内意でござるかな」「ホヽウ適明察、勘合の印は大内が家臣陶全姜反逆の砌より、紛失のよし慥に聞置く、其心を以て正清に、取計らうてよからんと傳へよ」「ハヽア重々の御懇情、主人正清も豫々此儀合點行かずと存ぜし故、大内が館へ忍びを入置き候」と、申上ぐれば光高卿、「智勇を兼ねし正清が、拔目なき働、さこそ有るべし。委細は猶も面謁に」と、乘物立てさせ光高卿、千疊敷へ急がるれば、お暇願ひ和田藏は、旅館をさして立歸る。「オット爰らで此のきよが、私の形の前垂に、此燗鍋での繪口合、あかいの町の大銚子」一同「コリャ又しこいえらしこい」「次は差詰此の春野、此土盞をば爰に置き、此取肴で思付、とさん何ぢやと薑で」一同「コリャ又しこいえらしこい。次は差詰太夫樣、智慧貸そかく」「智慧借らぬく、わたしがそこらで代りましよ。此團扇をば爰に置き、又扇をば斯う捨てゝ、福は團扇、扇は外はどうぢやいな」一同「コリャ又えらいえらしこい。さて此次は權八さん」「ヤアおれが、胸惡い、く」「エヽ穢な、八百屋店ぢやないかえ」「イヤ斯うした所を繪面にて、ならすに似て、へどを吐くとはどうであろ」「コリャ又惡いえら穢な。

應へもせぬ、つれない私に恨も無う」「オヽサつれない仇を恩で返すは、色に迷はぬ身どもが潔白、邪魔の無い中、勇次郎とやらを連れ、千疊敷へ早く行けさ」「エヽ嬉しうござんす。さう言ふお心とはつゆ知らず、日頃のお詫は又重ねて、あなたもちやつとお禮を」と、太夫が詞に勇次郎、「どなたかは存ぜねども、先程よりの御懇情、忝し」と手をつかゆれば、「何の〳〵禮には及ばぬ。一刻も早う〳〵」に、牽頭末社はいきり出し、「是からわつさり酒にして、此滅入を取戻さう。サア〳〵お出」と先に立ち、滅多無性にそゞり立て、さゞめき連れて行く跡へ、あたりを窺ひ以前の二人、差寄つて、「大友樣、仰の通りに今の仕打」「オヽ二人共大儀〳〵、斯う情を見せ置いて、大隅めを取入る魂膽、又其外に密事の評定。大藏も待ちをれば、千疊敷で申合さん」「然らば我等も御供」と、皆打つれて歩み行く。當國下向の御勅使、絹笠三位光高卿、衞固の青侍前後を圍ひ、並松原にさしかゝれば、それと見るより木村和田藏、乘物間近く手をつかへ、「御勅使の御迎ひとして、加藤正淸が家來木村和田藏、是まで參上仕る」と、申上ぐれば光高卿、御乘物を開かせ給ひ、「其方は正淸が家來よな、出迎ひ大儀。此度勅命を以て眞柴大内が爭戰を止め、則ち今日千疊敷にて、互の寶を取りかはす約諾、正淸も下向の砌、日月の御旗持參致せしで有らうな」「ハア」「然らば正淸へ光高が土産をくれん」と乘物の、硯引寄せ短冊に、書認むる

夜の、梅にはあらで風薫る、位も松の洒落姿、名も大隅が住み馴れし、廓放れて氣も廣う、千疊敷への揚屋入、拔八文字の傘の內、さす手引く手に氣を付くる、遣手禿に打交る、客は大內へ出入の町人、岩國屋勇次郎、若殿育の浮かれ好、牽頭末社に誘はれ、來かよる跡より二人の惡者、「コレ待つて下んせ、待つて貰は」と、のさばり出れば立止り、「オヽ好かん侍と云はんしたは誰ぢやと思へば、火蓋樣二つ玉樣、何ぞ用かえ」「イヤ太夫主、こなんに用はない。用の有るは此勇次郎、外の事でもない、アノ大隅太夫がおいらが仲間へ貰ひたい」「オヽ火蓋のいふ通り、さる人に賴まれた此せりふ、厭と言はんすりや腕盡。サア返事はどうぢや」と、きめ付けられて勇次郎、「あの樣にいうてぢやが、何と云うてよからうやら、なう太夫」「アイ大事ござんせぬ、譬へ勇次郎樣がアイと言はんしても、わたしが否でござんす。お前方が男盡で賴まれたせりふなら、わたしも勤の意氣地、命に換へても否でござんすぞえ」「エヽ忌々しい引裂かれめ、さう吐かしや一層やけ、われには構はぬ、相人は勇次郎、男づくで貰ふのぢや」と、二人は身構へ立掛る、後に始終立聞く侍、二人を取つて投付くれば、起き上つて頰蹙め、「テモえらい目に大隅め、覺えて居れ」と迯歸る。太夫は思はず見合す顏、「ヤアお前は大友樣」「イヤサ何にも云ふまい。爰は途中、狼藉者の難儀を見かけ、救ひに出たは武士の情」「そんなら是まで

貳冊目

輕業見せ物力持、芝居の太鼓打交ぜて、音はどん〳〵どさくさと、押合ひへし合ふ宮島の、群集は實も人の市、暑さ彌增すばかりなり。參り下向が立留り、「何と今年の市はきつい賑ひでは無いかいの」「オヽ其筈の事、此宮島を取つてござる大內樣と久吉樣と、既に軍に成る所を、禁中樣の挨拶で、何もかも丸う納り、勅使樣が見える故、隨分賑かにせいと、殿樣からのお觸ちやはいの」「オヽ夫で讀めた。そしてマア雛助や新七も下つてるげな、次手に一切見ようかい」「イヤ〳〵おりや芝居より評判の、水豹にせう」と巾著の、底を探つて足早に、思ひ〳〵に走り行く。扨も此頃鳴響く、鐵砲組の男作、先は頭の種が島、つゞいて火蓋二つ玉、めつたに人を投頭巾、下駄も姿も一樣に、思ひ合うたる惡者作り、大道に突つぱだかり、「コレ頭、大友殿に賴まれた勇次郎や大隅に、逢ひたい物でござんすの」「オヽそれ、此二つ玉も道々眼張つて居れど、とんと現れぬぞや」「サアよいて、どうで爰へ出てくる二人、相人は高が町人、おれが爲る程の事も無い、うせたらわいら二人して」「オヽ合點でごんす、頭は先へ」「そんならおれは千疊敷へ行く程に、後からこい」と三人が、心は一つ二道へ、引き別れてぞ步み行く。闇の

せしを、久吉公へ獻上の爲、はる〴〵持參仕る」と、顏眞赤いに噓の皮。右大辨は片頰に笑み、「ハテ扨聞きしに違ふ大內が臆病、いかに迯げるが好ぢやとて、此仰山な大筒を、打捨て置くとは餘りの沙汰」と、嘲哢すれば左衞門聞きかね、「大內の武勇に攻付けられ、久吉公へ助力を賴む大腰拔、それに何ぞや兵器を打捨て、迯げし抔とは奇怪千萬、その大筒は引金挫け、再び用に立たざる故、取更へるも面倒と、退陣の節捨置きしを、拾ひ取つての手柄顏、片はらいたし」と嘲笑へば、「ヤア負けをしみの減らず口、引金は損ねたか、但しは置いて迯げたのか、改め見ん」と立ちかゝれば、實出海が詞の如く、引がね損ねし大筒に、放した噓の當違ひ、しよげり入つてぞ控へゐる。經行卿笏取直し、「兩家の重寶取りかゆるは、則ち大內の領國宮島の千疊敷、下向の勅使は絹笠三位、其旨心得、左衞門も早く歸國、正淸も急いで出立有るべし」と、仰にはつと立上り、かの大筒を家來に引かせ、「此大筒は大內の兵器、他家に置きなば奪はれしと、嘲る者や有りぬらん。此正淸が下向の砌、是を土產」と穩に、納むる胸の智仁勇、出海大友兩人も、此場をたつか弓取の、心和らぐ大內山、風ものどけき 三重。

の歎きを思し召され、無事を計らふ御仁德、出海が所存は存ぜず、此正淸においては主人久吉に申すまでもなく、和睦の儀委細畏り奉る」と、申上ぐれば出海左衞門、「仰を背き寳をば、渡さぬと申せば違勅の科、其方とても得心の上は、此方に別心あらんや、同じく承知仕る」と頭を下ぐれば、右大辨嘲笑ひ、「ハヽヽ、其方どもが妻は、小坂部兵部が姉妹の娘、互に緣者の中とて早却の勅答、云合せが見えすいて、此右大辨は呑込まぬ。和睦を計るは寳の取替、贋物は知らぬ事、誠の寳は眞柴家には無い筈の事」「コハ兼忠卿の詞とも覺えず、先代より傳はる日月の御旗、眞柴の家に無いなどとは、何を證據に、何を以て」「ヤア知るまいと思ふか、春永亡失せし跡、柴田が所持せし日月の御旗、比良が嶽の落城より、勝家が後家小谷、春忠が悴三法師、春姫共に行くへ知れず、必定其手へ渡りし旗、どうして有らう筈がない」と、傍若無人に云ひほぐせば、經行卿座を進み、「寳の詮議は無益の沙汰、受取は大内が役目、此方には構はぬ事」と、詞の理詰に右大辨、口を閉ぢたる其所へ、豐後の守護職大友三郎、家來に目馴れぬ兵器を引かせ、庭上遙に手をつけば、右大辨詞をかけ、「いかに三郎、持參の兵器は何物」と尋ぬれば、「それこそ大内の家にて、專ら用ゆる大筒と申す物、去年以來堺を論じて每度の合戰、それに居る出海なども某に切立てられ、狼狽へ廻つて逃げしなに、此大筒を取落

聟君は源家の類葉
嫁君は平家の落人
蝶花形名歌島臺

序詞

婚禮は禮の本なり、二性の好を合せ、上を以て宗廟に事へ、下を以て後世を繼ぐ、敬愼重正の敎へ宜なるかな。男女別有り夫婦有る、かためは雌雄の蝶花形、相生祝ふ島臺や、變らぬ例久方の、天津御位一百八代、御陽成院の知ろし召す、御代こそ殊に豐なる。時維れ天正十四年五月下旬、宣命の旨を傳へ、紫宸殿に伺公の公卿は、前の中納言經行朝臣、右大辨兼忠公、左右に笏取り坐し給へば、階下には當時武家の棟梁、眞柴大領の臣、加藤虎之助正淸、つゞいて周防の國主大内島の冠者が臣、出海左衞門宗貞、其外百司百僚衞固の士、威儀を守つて並びゐる。經行卿仰せ出さるゝは、「今天下漸くに治り、太平を樂しむ御代なるに、眞柴久吉大内義廣、互に威勢を諍うて、合戰を企つる由、叡聞に達し、宸襟更に穩ならず、これによつて眞柴が重寶、日月の旗、大内に傳はる勘合の印、互に取替へ兩家共、以來は疎意なき心を示し、和議を調へ、朝廷を永く守護致せよとある勅命なり」と述べらるゝ。正淸謹しんで、「コハ有難き御勅諚、民

ひらがな盛衰記 終

は萬々歳、神と君との道直に治る御代こそめでたけれ。

と、一度ならず二度ならず、過言の振廻赦されず」と、太刀に御手をかけ給へば、景時も膝立直し、「御邊が首に景時が太刀は立たぬ物か、サア拔かれよ、相手にならん」と詰め寄れば、秩父は君を押し圍ふ、父は源太が押隔て、「秩父殿、御前のお取なし」「言ふにや及ぶ、大事を前に置きながら、爭は善惡共に皆非なり。景時を引立てられよ」「承はる」と無二無三、連れて御前を立ちにける。此體を見て平治景高、「エヽ生溫い兄の采配、親父の代りに相手に成る、サア義經殿」と詰寄る所を、樋口透かさず飛びかゝり、景高が衿かい摑み、引つ擔いでどうど投付くれば、是はと立寄る番場忠太、首筋摑んで動さず、「コレ〳〵兄弟、父隼人を討つたるは此奴と聞く、親の敵今討て」と、力に任せ打付くれば、兄弟嬉しさ飛立つばかり、「親の敵覺えたか、覺えたか」と、起しも立てず寸々に、「切つたか、出かした〳〵、此奴はおれがさいなまん」と、胴骨踏へて首ふッつと捻切り、「鎌倉殿の寵臣梶原が悴を我手にかけ、生害遂ぐる上からは、我を助け賜ひし義經の御身に後難も無く、誰々に難儀もかゝらず、返す〴〵血を分けぬ悴が事、義經公重忠の御憐愍願ひ奉る」と、云ふより早く太刀取直し、我と我首えい〳〵と掻き落す、忠義の最後ぞ潔き。各々勇士の心を感じ、諸卒を從へ御凱陣、平家の大敵悉く、八島の外へ切靡け、めでたき春に咲榮え、勝色見する箙の梅、源氏は益さかろの松、榮は千年の若綠、竹の節

後主君の爲に仇を報ぜんと思ふ忠臣の道絶え果て、弓矢の道を失ふ道理、樋口が命は助くべし。早繩とけ」と宣へば、「イヤなう義經殿、言はれぬ弓矢の道を云ひ立て、我を助け、豫て中好からぬと聞く梶原などが讒言に遭ひ、鎌倉殿と中違うて、後悔ばし給ふな、よつく分別せられよ」と、死を顧みぬ志、義經打笑はせ給ひ、「天下の政に小鮮をにるが如し、梶原づれが讒言を聞入れ、義經と中違ふ鎌倉殿ならば、夫こそ日本弓矢の破滅、助けよと言はぬばかりの法皇の院宣、殊更義仲内甲に殘されし、謀叛ならぬ最期の一通明らかなれば、汝にかゝる科はなし、彌命助くるぞ。殊に汝が子ならぬ子の槌松、十五歳に成るまで、權四郎とやらん、隨分勞り守育てよ、鎌倉表は此義經が動功に換へても、宜しく事を計らふべし」と、初め番ひし秩父の詞、未前に察する名將の、恩義に繩も打とけて、お筆兄弟樋口が悦び、權四郎有りがた涙、若君抱きいそ〳〵と、福島さして立歸る。梶原平三景時親子三人、番場忠太を引具し、後馳せにかけ付け、「扨こそ樋口が縛とかれしな、勇士は勇士の計らひにせよとの院宣、私に繩を解かれしは、鎌倉殿を踏付くる仕方、但しは我身を勇者と高ぶつての仕業か、大將顏を振舞ての所爲ならば、此景時も侍大將、なぜ談合は召されぬ。忠太寄つて樋口次郎に繩掛けよ」と、言はせも立てず義經公、大きに面色變らせ給ひ、「樋口を助け誤ならば、義經が腹切るまでのこ

なけれども、最重きは君命、そこを辨へざるは武士の若氣、勘當したるも汝が心を勵す爲の母の慈悲、合點がいたか景季、今こそ父が實の子」と、手を取つて引立て、物の具の塵打拂へば、「扨は源太が御勘當御赦免とや」「云ふにや及ぶ。汝が今日此城中に踏みとゞまり、平家の多勢を切靡け、菊池が一黨討取つたるは、宇治川の先陣に勝つたる高名、此勢に乘つて、落行く平家を討ちとゞめん、いざ來い源太。跡に續けや者共」と、親子主從勇みに勇み、汀をさして追うて行く。梶原が二度の駈とは、今此時と知られたる。搦手の大將軍九郎判官義經公、一の谷の大敵を、逆落しの一戰に攻破り、平家の一門或は討たれ、或は四國に落行けば、鎧の袖に勝色見せ、軍の勢を晴さんと、花に屯の名大將、下知に靡かぬ草もなし。かゝる所へ畠山次郎重忠、樋口の次郎を高手に禁め、御前間近く引居ゆれば、跡に續いて梅が枝兄弟、權四郎若君をかき抱き、「道々も申上ぐる通り、樋口殿をお助けある樣にお取なし、秩父樣のお情」と、鎧の袖に取付き縋るを目もやらず、御前に向ひ、「仰に隨ひ、樋口が罪科、法皇の叡聞に達し候へば、主の爲に讐を報ぜんと謀る忠臣の心、强ち罪科とも云ひがたし。さりながら、勇者の法に任せ、ともかうも義經が心の儘に計らふべしとの院宣故、重て召具し候」と、申上ぐれば、「さればこそ、恐れながら法皇の叡慮、我が思ふ所恰も符合を合せたる如し。今彼を罪科せば、此

苗字を盗み、敵を威さん僞なるべし。何にもせよ憎い仕方、景高實否を糺さん」と、駈け行くを暫しと止め、「梶原と名乘るは外ならず、兄の源太と覺ゆるなり、宇治川の恥を雪がん爲、やさしくも先駈せしな。よし誰にもせよ、其頭に乘つて此城郭を打破らん、續けや續け」と逸散に、城中さしていく田の森、梶原源太景季、平家の多勢と打合ひ戰ひ、今を盛の梅の大木、小楯に取つて控ゆれば、平家の軍兵菊池の一黨、「遁さじ、やらじ」と追取卷く。「ヤア物々しや、我には合はぬ敵なれど、菊地と聞けば名に愛でて、花に縁有る草と木の、生田の梅も箙の梅も、散りかゝつて面白や。八騎を相手に早咲の、梅も源太もさきがけに、勝色爰に未開紅、飛鳥の飛梅祕術を盡し、けふの軍の好文木」と、切つて廻れば、白梅變じて紅梅の、血汐流れて、敵も痿まぬやり梅に、甲も打落されて、大わらはの姿と成つて、引くな引かじと春風に、花を散して三重戰ひける。景季は事ともせず、百術千慮の手を碎き、袈裟切堅割腰車、切り伏せ〱鏖、恐れて寄付く敵もなし。汀の方より四五十騎、眞砂を蹴立て駈け來る。すはや敵よと太刀取直し、近付くをよく〱見れば、父の平三景時なり。源太は見るより大地に伏し、恐れ入つたる風情なり。遁義强き景時も、久しぶりの我子の顏、見る目の中に涙を浮め、「やおれ景季、汝が所存も母延壽が物語にて聞きたるが、武士の身に取つては、忠孝の二つ、何れに疎は

術を盡し、譽を取り、其時母のお笑ひ顏、見せうぞいさおれ早お暇」と、勇み勇んでたつか弓、矢筈の紋と景季が、文武は古今に芳ばしく、花有り實有る武士と、語り傳へて其名をば、箙の梅と末の代に、譽を永く留めけり。

第五

源平互に攻戰ふ、生田の大手を打破らんと、梶原平三景時、次男平次景高、無二無三に切つて入り、敵あまた切散らし、太刀の火めきを冷さんと、攻口少し引退き、一息ついで立つたる所に、後陣の方より番場の忠太、逸散にかけ來り、「搦手の大將義經、平家の本陣須磨の城を攻めんと有つて、鐵拐が嶺鵯越、一の谷の逆落し、手ばしかき謀、知らせ申す」と言はせも果てず、父景時、「ホヽよく知らせたり、軍に素敏き義經に、高名させては一分立たず。今一度敵陣へ切つて入り、此大手を打破り、義經に鼻開かせん、氣を弛ますな者共やつ」と、下知の半へ梶原が、物見のさいさく敵陣より驅戻り、「只今平家の城中を窺ふ所に、梶原遣らぬ遁さぬと戰の眞最中、御父子の外に梶原と名乘る者の候ふや、不審なり」と注進す。平次景高眉を顰め、「敵にもせよ味方にもせよ、梶原が名字を名乘るは、我々親子の外には無い筈、鬼神も恐るゝ梶原の

ふは、一筋ならず二筋の此簳、夫を狙ふ兄弟を、此矢で射とめ命を助け、夫婦中よう添遂げて、梶原の家を再び興す此矢なれば、疎かには成りがたし。先祖鎌倉の權五郎景政より、家の紋は三つ大の字に定まれども、今よりは二筋の此簳、梶原が家の定紋、譽を世上に顯はせ」と、義を立て通す詞の張弓、梶原が矢筈の紋、此時よりと知られけり。源太は悦び、「早お暇給はらん」と、つッ立ち上れば、「オヽ夫々、片時も早う出陣の、用意々々」と、皆立寄つて鎧櫃、武運も開くる產衣の、鎧直垂小手脚當、上帶引きしめ梅が枝が、結ぶ妹背の忍びの緒、兜打物夫夫に、箙かき負ひ出立ちたる、骨柄ゆゝしく見えにける。名殘惜しげに梅が枝も、「延壽樣のお詞で、夫婦のかためはたつた今、假へ此身は別るゝとも、我名は夫の影身に添ひ、出陣の御供」と、筒に生けたる紅梅を、一枝手折り箙に挿せば、元來若武者に、相合ふ若木の梅が枝が、互に無事でと目で知らせ、頷く度に散る梅の、匂ひは袖に殘りける。「適武者ぶり類なや」と、母は悅び兩手を上げ、「今度の軍に、花も源太も我先がけん〳〵と勝色見せて、父の勘氣を赦されい。冥加盡きなば討死せよ、生きて歸るは不孝ぞ」と、淚ながら敎訓の、慈愛の詞忝く「我も平家と戰はんに、花箙こそ好き敵と、多勢が中に取込めなば、太刀眞向にかざしの花の、ちりちりばつと追ひちらし、向ふ者を拜打、又廻りあはゞ車切、蛛手加久繩十文字、鶴翼飛行の祕

にもせよ、誰にもせよ、見付次第に討取つたるは、鎌倉殿への忠節、番場忠太が手にかけしは、景時殿へ又忠節、草葉の陰の隼人殿、よも恨とも思すまじ。爰をよう聞分け、延壽が自害で敵討を濟め、一刻も早う源太を出陣さして下され。今度の軍に手柄をして、宇治川の恥辱を雪がねば、最早一生景季は、勘當の身で朽果つる、夫が可愛い不便にござる、武士の夫に連添へば、義によつて命を捨つる、夫はまだも惜しからう、子故には此體、一分だめしにため されても、命はちつとも惜しうない、サア留めずとも死なしてくれ」と、氣を揉み身を揉み聲を上げ、「子は箇程にも思ふまい」と、かつぱと伏して泣居たる。景季は一心不亂、母の慈悲心肝に沁み、我故御心を苦しむる、不孝の罪は子に報い、此身は武運に盡き果てん」と、悔むを聞いて梅が枝、「わたしが心も推量して下さりませ、敵を討たでは不孝と成り、討てば夫婦の緣切るゝ、所詮此身を姉と夫へ引分け、死なうと思ひ定めし」と、歎けばお筆も涙ぐみ、「今のお詞を聞くにつけ、父の古主は鎌倉殿、夫に背く木曾殿の御臺若君、わらはが緣にて圍まひ、夫故に討たれ給ふは古主の罰、不忠させしも自故、殊に番場が所爲と有れば、親子御共に敵でない、道を立て誠を盡す延壽樣に、過させてよい物か。此上の願ひには、今までの通り此妹、御不便頼む源太樣」「オヽ聞分けてさへ下さるれば、梅が枝は嫁、嬉しや〳〵、是で夫も安穩、源太が望も叶ふとい

引受け、世の雜談に云ひふらせし、無間の鐘を撞いてなりとも、源太が望を叶へたいと、我身を捨てゝ勞る心底、母は障子のあちらにて、殘からず聞いて居たはいの。我子に心を盡す梅が枝、何と無間に沈められう、蛭の地獄へ落されう、最前金を三百兩遣つたるも此延壽、勘當の子に貢ぐ金、母が面は合されず、顏も名も包みしが、心は殘らず打明す」と、語りもあへず泣き居たる。「扨は奧のお客といふも、奧樣お前で有つたか」と、驚く妹を突退け、お筆は傍へつゝと寄り、「夫程恩有る梅が枝に、何で矢を射さしやつた。察する所こなた衆親子が云合せ、返り討にする所存で、射止めたと思はしやろが、簳ばかりで射られしは、兄弟が運の强さ、コレ天道樣が明なによつて、非道の劍は身に立たぬ、何と非道で有るまいか」「イヤ非道にもせよ、道にもせよ、現在夫の景時殿を、付狙ふ二人をば、卽座に射留しは自が手柄、夫への忠節、武士の妻に成つた役、鏃を拔いて簳ばかり射かけしは、梅が枝への恩がへし、延壽が心底見られよ」と、胸押しくつろげ二本の鏃、突立てんとする所を、源太かけ寄り、「何故の御自害」と、御手に縋り押し止む。「何故とはそちが可愛さ、景時殿が大切さ、なうお筆兄弟の衆、妾が夫子を思ふに付け、親を討たれ無念に有らう、口惜しからう、親のかはりに景季を討たうとは尤、さりながら、鎌田殿を討つたるは、意趣切闇打の業でもなく、木曾の落人山吹親子を連れて退いたは、鎌田

の鐘の胸さきに、響き渡れば南無三寶、早出陣の刻限と、鎧提げ立上るを、「どこへ〳〵、我々が付け狙ふを、此方に知られた上からは、輙うは討たれまじ。景時の代に不足なれども、親子は一體敵の片破、一寸も動さぬ」と、詰寄れば梅が枝も、一人は姉一人は夫、あなたこなたを思ひやり、うろ〳〵と立つたる所に、いづくよりともしら羽の矢、狙の壺はお筆が胸板、はつしと中ればかつぱと伏す。「なう悲しや」と、あわて立寄る梅が枝が、腰の番を二の矢に射られ、はつとばかり驚きながら、兄弟互に顏見合せ、「姉樣に過ないか」「そなたに怪我無かつたか」是はと驚き取上げ見れば、矢の根も無き二本の簳、何者の所爲ぞと、奥を見入つて立つたる所に、「其射人爰に」と、一間の障子さつと開き、滋籐の弓携へ、しづ〳〵と立出づるは、梶原平三景時が妻の延壽、源太見るより、「ヤア母人、面目もなき御對面」と、疊にひれ伏し蹲る。母は我子に目もかけず、しとやかに座に著き、「珍らしい千鳥、以前は自が召使の婢、今は名も變つて梅が枝といふ流の身、そなたには此母が、段々禮を言はねばならず、そも鎌倉を立退いてより傾城に身を沈め、源太を育む志を聞くより、嫁に勤はさせられず、はる〴〵と難波に上り、そなたを身請せん爲、此揚屋へ來て樣子を聞けば、折しも源太は勘當の詫の綱にもと、一の谷へ出陣、思ひも寄らず產衣の鎧を揚錢の代に取られ、旣に我子も腹を切るべき難儀と成るを身に

の假名實名、妾が言うて聞かさう」と、めつきり切戸引つぱづし、つッと入る姉お筆、「なうよい所へ姉樣、幸あなたとお近付」「妹默りや、近付にならいでも、名はよう聞いたそなたの夫、サア〳〵梅が枝、源太殿に隙取つた」「エ、」「えゝとはどうぢや、親隼人殿を討つたる敵の子には添はれまい」「そんなりやとゝ樣討つたのは」「ハテ知れた事梶原平三」「アノ景時樣かえ。ハア」はつとばかりに詞も無し。「其又父景時殿を親の敵といふ、慥な證跡言へ聞かう」「オヽ有るとも〳〵、木曾殿の御臺若君御供申し、大津の宿にて梶原が討たせしは、兄弟の者が父鎌田隼人清次殿、イヤ驚くまい源太殿、知らぬ顏はしら〴〵しい、後暗いさもしい。サア〳〵妹緣切つた」と、いへど答もないじやくり、「扨は互の戀にからまれ、親を夫に見かへるのか」「イヱさうではなけれども、因果な緣を結び初め、今さら何と成る物」と、かつぱと伏して泣きゐたる。景季もつッ立上り、「父を敵と狙ふ汝等、其方から望まいでも、此方から隙くれた、出くはしたを幸、此場で返り討にすべきを、見遁すは今までの誼、女の業には討たれぬ敵と觀念し、尼法師にも樣をかへ、親隼人が跡弔へ」と、詞尖に云放せば、お筆はくわつと急き上げ、「身不肖なれども鎌田が娘、腰拔と思うてか、但女童の刀で景時は切れまいがの。サア切れぬか切れるか、鹽梅見せう源太殿、イヤ相手にならぬはおくれたか」と、詰寄り〳〵打ち鳴らす鍔音、七つ

くにて、爰に三兩かしこに五兩、「是は夢か現かや、何方か知らぬが此御恩、死んでも忘れぬ忘れぬ」と、嬉しいやら怖いやら、拾ひ集むる心もそゞろ、袖引ちぎり三百兩、包むに餘る悦び涙、鎧代りの此金と、押戴き〳〵、勇み勇んで走り行く。梶原源太景季、首尾か不首尾の二筋を、只一筋に揚屋町、奥はさわぎの最中、禿がな出でよかしと、奥の吉左右聞くまでは、暫し待つ間も千年屋の、首尾を窺ふ姉お筆、今宵の中兄弟一所に敵討たんと思ひ込み、小褄りゝしく鉢巻しめ、梅が枝に逢ふまでと、飛石傳ひ細路次の、間の切戸に身を潜め、今や出づると待居たる。走り躓き梅が枝は、産衣の鎧を持たせ、息を切つてかけ戻り、かしこにどつかと鎧櫃、下せばとつかは立歸る、景季見るより飛立つばかり、「ヤレ出かしたいかい働、源太が武運に盡きざるも、弓矢神の御加護」と押戴き、「出陣の刻限、七つには間も有るまじ、是より直に出陣、めでたう歸り對面せう、無事で勤めや、さらばや」と、立つを引き止め、「奥の客の情にて金を調へ、鎧を取ると暇乞もそこ〳〵、せめて暫しが中なりと、わしにたんのうさせたがよい。殊に又お前の耳へ入れねばならぬ事が有る、マア下に居て聞いて下んせ。けふ久しぶりで姉様にお目にかゝり、話を聞けばとゝ様は大津にて、切られてお果てなされたといな、其敵討相談に姉様も見える筈」と、聞いて源太もはつと驚き、「シテ〳〵其敵の名は何と〳〵」「オヽ其敵

なりと夫婦に成らうと、思ひ思はれた女房をふり捨て、此度の軍に譽を取り、勘當が赦されたいと思召す、男の心はぶんな物ぢや。何かに付けて女程、思ひ切りのない物はない、男故なら勤するも厭はねど、またどの樣な悲しいめを見ようも知れぬ、夫も金故、何をいうても三百兩の金が欲しい」唄「わしや帶解かぬ、二十なら四五の、四五の二十なら一期に一度、わしや帶とかぬ。かへらぬ昔戀ひ忍ぶ。「ほんに夫よ、あの客殺して身請の金盜まう、イヤ〳〵、若し仕損じ殺されては、とゝ樣の敵も討たれず、アヽどうせうな、最早日本國に梅が枝が祈る神も佛も無いか、ハア、オヽ夫よ、夫故には石と成つたる女も有り、我は賤しき流の身なれど、一念は誰に劣らん」巖となれる手水鉢、水結び上げ口すゝぎ、伏拜み〳〵、人に知らせじ聞かせじと、柄杓追取り、「傳へ聞く無間の鐘を撞けば、有得自在心の儘、是より小夜の中山へ、遙の道は隔れど、思ひ詰めたる我念力、此手水鉢を鐘となぞらへ、石にもせよ金にもせよ、心ざす所は無間の鐘、此世は蛭に責められ、未來永々無間墮獄の業を受くとも、だんない〳〵大事ない。海川に廢れる金、一つ處へ寄せ給へ、無間の鐘」と觀念す、面色忽ち紅梅の、花はちりぢり心も髮も逆立ち上り、柄杓持つ手も身も震はれ、既に打たんとふり上ぐる、二階の障子の内よりも、「其金爰に」と三百兩、ばらり〳〵と投出す、深山おろしに山吹の、花吹きちらす如

や、今は悔みて返らず」と、胸押寛け刀を取れば、梅が枝あわて押し止め、「こりやまあどう狼狽へてぢや、死ないでも大事ない」「イヤ〳〵今夜の出陣を外れ、一生埋木と成り、のたれ死せんより、只今切腹、そこ放せ」「サア〳〵其鎧さへ手に入れば、お前の望は叶うでないか。ンテ其金はどうして調へると御不審も立たう、そこがお前と談合づく、奥の客に身を任せ騙しなば、二百兩や三百兩の金は自由」「扨はおれ故身を汚すか」「夫の難儀にや換へられぬ」「不便の者の心やな、たとへ死んでも忘れぬ」と、涙ぐめば、「ア、女房に何の禮、お前が爰にござつては、客をたらすに心が措かれる」「オ、尤々、後に來うぞや首尾よう仕や、が氣を揉んで持病の痞、借錢の代りに癪おこらしてたもんな」と、別れてこそは歸りけれ。跡見送りて梅が枝は、暫し涙にくれけるが、「必ず氣遣なさるゝな、エ、わたしが心當の有るというたは皆噓、お前の命が助けたいばつかりぢやはいな。何の好もない奥の客が、三百兩の金くれうぞ。今宵中に調へねば鎧も戻らず、源太樣の望も叶はず、金ならたつた三百兩で、かはい男を殺すか、ア、金が欲しいなア」唄「二八十六で文付けられて、二九の十八でつい其心、四五の二十なら一期に一度、わしや帶解かぬ。「エ、なんぢやの、人の心もしらず、面白さうに唄ひくつさる。あの歌を聞くに付けても、源太樣に馴染め館を立退き、君傾城に成りさがつても、一度客に帶とかず、一日

なたに云ふ事有り、今夜七つの出汐に父を初め、弟の平次景高、一の谷へ出陣、某も好い時節、軍勢に紛れ下るに付き、そなたに預けた產衣の鎧、請取りに來たはいの」と、聞くにはつと當惑の、色目見て取る景季、「いや〳〵氣づかひ仕やるな、長う別れる事でもなし、ぜひ今度は行かねばならず、お事も豫て知る通り、もと某は賴朝卿の烏帽子子、夫を功に勘當の詫せぬかと、父の思はく世の人口、此度平家と戰はゞ、分捕高名譽を顯はし、今の難儀を昔語、悅んでたも梅が枝」と、何心なく語るにぞ、思ひ設けし事ながら、俄にはつと胸痛み、「其鎧の事聞くと心の苦しみ」「シテ其鎧が何とした」「わたしが方には疾うから無い」「ヤア〳〵」と源太も聞くより狂氣の如く、身を揉みあせり、「樣子が有らう、子細を語れ」と氣をいらてば、「ソレ其樣に浮世の事に疎いのが大名の懷子、浪人の中苦勞させまいと、此の神崎へ身を賣り、突出しの其日より、お前を客の名宛にして、皆わたしが身揚、たとへ世に在る人でも、里の金には詰るも習ひ、まして勤の身なれば、金の生る木は有るまいし、生える土は持つまいし、お主の勘當赦りるまでと、いつもの揚屋に呑込ませ、積り〳〵し揚代三百兩の金の代りに、其鎧は遣つたはいな」「扨は其金が無ければ、鎧は源太が手に入らぬか、ハア」はつとばかりに當惑し、暫し詞も無かりしが、「元此鎧は賴朝卿に拜領、家にも身にも換へざるを、仕爲したり殘念

今宵は延されず、其用意して待つて居や」後に〳〵と約束固め、お筆は旅宿へ立歸る。「サア太夫樣のお出の樣子、お座敷へ注進」と、きほひかゝつて走り行く。「シャほんに何ぢやの、此梅が枝が心も知らず、身請々々と取持顔、厭らしい。夫はさうと源太樣、暮方からお越しなされと、香島まで文やつたに、なぜ遲い事ぢやまで、早う逢ひたや顔見たや」逢へばどうしてかうしてと、たばこ引寄せ薫らする、胸の思ひは日に千度、夜ごと〳〵に通ひくろ、梶原源太景季、心を盡せし身の廻り、大盡小袖長羽織、炮烙頭巾紫の、色に引かるゝ揚屋町、千年が奥を窺へば、「おれを待つのか疊算、ちやうど好い首尾幸」と、ずつと通れば梅が枝は、巨燵にとんと身を背け、煙比べん淺間山と、そらさぬ顔で吹く煙管。「コレ歌どころぢやない來たはいの、何が機嫌に入らぬやら、めつきりと持たせぶり、大名客の襟に付き、御勿體でえすか、我等が樣な浪人の、黴びた衿には好かれまい」と、ずんと立つを、「待たしやんせ、座敷ばかりを勤る筈で、けふ爰へ貰はれたは、文で知らせて合點ぢやないかえ。色も戀も打ち越して、心底盡の二人が中、口舌どころぢやござんすまい。お前と一體かう成つたは、並大抵の事かいな。わしもいふ事たんと有る」と、袖から袖へ手を入れて、しつと引寄せ引きしめて、「遲う來ながら其いぶり、憎い男」と目に脆き、涙ぞ戀の習はしなり。「まうよい、泣きやんな疑晴れた。扨そ

親の事、思はなんだ罰があたつて、命日忌日がいつぢややら、知らずに暮した不孝の罪、姉様こらへて、とゝ様のお位牌へ、詫言をして下さんせ」と、はつと叫べば、「オヽ悔は道理、其上にまた悲しきは、お煩ひでも有る事か、刃にかゝり果て給ふ、其様子は自らが木曾殿に宮仕へ、假初ならぬ御主人の御臺若君諸共、父の方に圍まひしが、桂の里にも居る事叶はず、都を出でて大津の泊、追手の者が寐込へ切り込み、暗がり紛れうろたへて、相宿の順禮の子と若君を取違へた、其麁相が御運の強さ、先の子は殺され若君は恙なく、慥な人に渡せしが、悲しいは母御様、其場でお果て、隼人様も敢なき最期、親の敵が討ちたさに、そなたの行方しるべの人に、聞いて尋ねし此神崎、廻り逢うたは兄弟の緣の深さ、女でこそ有らうずども、兄弟が心を合せ本望遂げう、姉が力に成つてたも、頼むは妹ばかりぞ」と、語るも聞くも涙なる。「なう姉様、悲しい中にも敵を討つが梅が枝がとゝ様への言譯、其マア敵は誰でござんすえ」「アア聲が高い、壁に耳、諸萬人の入込む色里、敵に洩れては一大事」と、呻しの半へ亭主かけ出で、「サア梅が枝早う〳〵、お前の背丈金積んで身請の相談、座敷は金で眩い、そこを不動になさるゝはどうした心底、ぜひにお供」と手を取れば、「アヽまう其處へ行くと云ふに、聞分けない。コレ姉様、今は何も呻されぬ、後に必ず來て下さんせ」「成程々々、今呻した事、是非に

けふのお客は東國のさるお大名、初對面から身請の相談、箱入の駿河小判、づッしりとしたお捌、サア〳〵奥へ」と云ひければ、「東國とおしやんす其客の年ばい、廿ばかりででつくりと、色の黑い髭男かえ」「氣もない事〳〵」「夫で心が落付いた、わたしも爰に待合せ、逢はねばならぬ人が有る」「おつと合點、そこは我等が請込み、禿衆で座敷をくろめん、お前の御用は彼深間の源太樣に」あひの襖を引立てゝこそ入りにける。「此姉樣はなぜ遲い、杉を迎にやつたるに、早う來はなされいで、心急かれやア、しんき」と、待つに程なく姉お筆、千鳥に逢ふが嬉しさに、足もいそ〳〵遣手が案内、梅が枝見るより、「なう待ちかねた姉樣、さつきに道で逢ひし時、言ひたい事の數々も、人目を遠慮」「オヽそりや姉も同じ事、何からかゝら言はうやら、よう健で居てたもつた」「お前も御無事で嬉しい。久々便りも聞きませぬが、爺樣もおまめに在ろ、やつぱり桂の里にお住みなされてござるかえ、御持病は發らぬか」と、問ひかけられてお筆は淚、「まだとゝ樣の事知らずか」「知らぬかとは氣遣ひ、どうぞいな」「アノとゝ樣はお果てなされたはいなう」「エヽ」はつとばかりに梅が枝は、しばし淚に暮れけるが、「アヽ思へばわしは不孝者、とゝ樣は息才な、健でござると思ふから、我身の戀に跡先忘れ、末に面倒見屆けうと、約束せしお人が不慮に勘當受け給ふ、男の爲に此勤、身の徒に

中で遣り付けた」と、夜著を脱捨て汗押し拭ひ、「ア丶仕おほせたと思うたれば、どつかりと氣草臥」「オ丶道理々々、首尾能くいたもそちが蔭、源太は此雜穀物、金の代りに向ふへ束ね、身の廻りを受戻し、片時も廓へ急ぎたし」「實に御尤さりながら、持ちもならはぬ肩仕事、凡是でも一石餘り、お一人ではいかぬ〳〵、時の用には法印も、片端を仕らん。若しも是にて不足ならば、辨慶が脱殼の、夜著も次手に出げませう」と、藁沓叺指荷ひ、一足いては肩をかへ、二足いては息をつぎ、香島の里に馬は有れど、君を思へば徒歩はだし、人は戀ともしらげのよねに、憂身を窶すぞ世なりけり。爰も名高き難波津に、戀の舟著數々の、多かる中に取分けて、酒汲みかはす神崎の、里の色宿千年屋は、客に絶間もなかりける。殊に今宵は晴のお客と、書院座敷のはき掃除、亭主が袴、中居が揃への紅も、園生に植ゑて隱れなき、大名客御入と、表の方賑はしく、人目を忍ぶ旅乘物、御供廻りもかる〴〵と、地に鼻付けて主が答拜、御出を待つやこがれしと、追蹤輕薄切聲の、切戸口より直に舁込む奥座敷、梅が枝樣へ人走らせ、ソレお菓子たばこ盆、釜を沸らす音羽山、馳走ぶりとぞ見えにける。雪や霙や花ちる嵐、かはい男に僞なくば、本の心で淡路島、千鳥も今は此里へ、身をば賣られてやり梅の、名も梅が枝の突出には、名木並ぶ方もなく、ちとせが許に入來り、亭主立出で、「エ丶遲い〳〵梅が枝樣、

煎餅、めり〳〵ひしやり粉微塵」と、強い揃へを言ひ立つれば、山伏も頭に乗つて、強う見せんと拳を握り肘を張り、力めば額に黒汗流れ、腕白な手習子が、晝上り見る如くなり。百姓共は頭を下げ、「其様にお強い事を聞く上は、なう皆の衆、何と思はしやる」「ハテ辨慶様に極つた、とてもの事の念晴しに、今のを問うて見さつしやれ」「オヽ夫々、私共が在所の物知り咄に、辨慶様は書寫にござつて、御紋は輪棒と聞きましたが、見れば御紋は束熨斗、どうした事」と問ひかけられ、源太もほうと行詰り、「イヤ何、物ぢやはい、僅な兵粮米をそち達に無心おつしやる風體、世に連れてりんぼうの御紋も、びんばふに變つた」と、眞顔になつて取りかくれば、「アヽお笑止や、何ぼ力が強うても、錢銀には楯づかれぬ、内證聞いておいとしい」と、藁畚叺米俵、めん〳〵に持つて出で、「おらは白米一斗五升、大豆八升」麥稗小豆、濡手で粟の摑み取り、源太は硯引寄せ、手取早く證文認め、書判しつかとする〻の世に至りても、大物の浦に留まりし、武藏坊辨慶が、借證文とは是とかや。源太は名宛に引合せ、一札渡せば受取つて、「畢竟是には及ばねども、面々の念の爲、軍終らば一倍增を、お忘れなされて下さるな、お暇申す」と打連れ立ち、川中で剝がれた尼が崎、大物さして立歸る。女房は走出で、「さつてもひあいな欺し様、中程からほぐれが來て、わしやあぶ〳〵思うて居た」「一向に此の法印は、始終夢

りも慥な」「そりや百姓等が願ひに任せ、只今是へ」と反古張の、明り障子さつと開き、立出づる辻法印、往生ずくめの辦慶出立、肩から裾まで束熨斗の一枚肩、白上に紺染の大夜著、女房がいつちよら帶、引きしごいて蜻蛉結び、痩せたる頰に鍋炭塗り、處まだらの武藏坊、長刀がはりの金剛杖、竹簀子を踏み轟かす木履の繼足、凄じう見られんと、踏んばたかつたる其有樣、さらに強うは見えざりける。源太は態と兩手をつき、「大物の百姓共お目見え」と披露して、「こりや〳〵汝等、只今下にお居りなさる、其處らあたりへ地響せう、心得て驚くな」ハアハアはつと恐れ敬ひ、ためつすがめつ、見られて術なき辻法印、見せ物に出た心地なり。百姓共口々に、「何と聞及うだより手先なども靑白け、ひがいすな生れ付、お背はきよいと高けれど、からだに似合はぬおつむりが小い、振賣の飯蛸で、天窓に實のない辦慶樣、あれでも兵樣かいの」と、目引き袖引きつぶやけば、「扨は旦那のお顏の窶れで、誠の辦慶樣でないと思ふか、都から段々打續く戰場のお勞、殊に此間はお風を召しておしつらひ、氣むづかしさに態と物もおつしやれぬ。ア丶御病氣でなくば、旦那の力が見せたいな。アレ見よ、あの右の肘に百人力、左の肘に百人力、夫程力持つ者が、辦慶樣で有るまいか、あはれやれ米一粒借すまいというて見よ、お腹が立つと惣身の力がぶつ〳〵と涌出し、千人でも萬人でも、風に木の葉鬼に

が方へ持參せよ、則武藏坊辨慶殿御判居わりし證文を引きかへ、軍終らば一倍增で御返濟と、百姓どもを騙せしが、辨慶樣のお目にかゝり、其上で御用に立つと、追付け爰へ皆來をる、爰が氣の毒、何とぞ急に辨慶を拵へずば成るまい、指詰め賴むは頭役、法印辨慶に成つてたも」「ハレやくたいもない、辨慶は兵、愚僧はよわ者、七尺ゆたかの大の法師と、五尺に足らぬちつくり法印、似ても似付ぬお赦しなされ」「イヤこれ、足を爪立つれば、四寸や五寸は瞞めらるゝ、其上をまだ繼足して、高足駄で背はくろめる、辨慶が身の所作は、仁王の形でして居りやよい。あれ／＼向ふへ百姓ども、隙取つては氣の毒」と、いやがる法印無理やりに、連れて一間へ入りにける。百姓どもはどや／＼と、叺藁畚引つかたげ、「何と太郎兵、彼お山ぶは是かいの」「オオ聞及ぶ辻法印、爰ぢや／＼」と内に入り、「お方樣、是の内に辨慶樣がござるげな、大物の百姓共、お馬の飼料持つて來たと、御家來衆にいうて下され」「成程々々、辨慶樣もお待ちかね、どりや其通り申上げん」と立つて行く。景季は法印を辨慶に拵へ立て、一間を立出で、「ヤア百姓共、約束違へず大儀々々。先程も云ひ聞かす通り、源氏の大將判官殿の、御用に立つは汝等が身の大慶、軍終らば一倍增しにて返さるゝ、御判頂戴するは有りがたいか」「ハア有りがたうはござれども、只證文より手形より、辨慶樣にお目見え致し、お直の詞下さるゝが、御判よ

米薪味噌鹽まで、梅が枝樣から仕送り、お歷々のあなたがそんな事何のいの」「イヤさうでない、贅はしたしちやんは無し、惡氣の付くまい物でもない」と、噂半へ立歸る、梶原源太景季、勘當の身の寄所、辻法印にかくまはれ、見る影もなき素紙子一纏、門口から笠取つて、「やれ〳〵方々かけあるき、存じの外草臥れた。法印嘸待つたで有らう」「何の待ちましよ、急な事で金がいる、才覺頼むと、人にばかり世話やかせ、何處に這入つてござりました」「さればく、其才覺に身もあるいた、急な用が出來てきて、梅が枝に逢はねばならぬ、と云うてから紙子の風體、此形ではどうも行かれぬ」「アノ此比まで召しましたお小袖や羽織はへ」「女房いふな、夫は此法印が頼まれて、七難卽滅と曲げて仕廻つた、おろせ遣手に紙花の借錢濟し成れたはい、お前も言はれぬ贅張らずと、傾城買には紙子がじやうせき」「イヤさうでない、今まで大夫が情にて、見苦しい尾も見せず、此形では行かれぬ、明日へとも延ばされぬ其譯を聞いても。義經公には一の谷の平家を攻めんと、明日未明に御陣立、源太も此度高名せでは、父に再び對面ならず、發足と定めしが、彼産衣の鎧兜梅が枝に預置き、夫が欲しさに右の譯、したが思案も有れば有る物、けさより屁が崎大物の浦をかけ廻り、大將義經公、一の谷へ御出陣、京都より來る兵糧米、馬の飼料遲なはれば、米麥大豆の差別なく、今日中に香島の里、辻法印

し、「コレ信を取りませうぞ、ついべり賭する樣に投げた分ではいかぬぞや」「成程々々、おまへの樣な見通しに、お目に懸るは仕合」と、算木投ぐれば、「オヽよしく\。ナニ年はいくつぢや」「アイ十七八でもござりませうか」「成程十七八と見える、こなたの弟樣ぢやの」「いえく\妹」「ム、成程算木の面に女と見える、何年程逢はしやれぬ」「五六年も逢ひませぬ」「成程五六年も逢はぬと見える、こなたの尋ぬる心當は何處ぢや」「アイ人の噂には神崎に勤奉公」「オ勤ともく\、コレ見やしやれ、占の面には籠の中の鳥の如しと有れば、廓の外へ一足にても、踏みもならはぬと古い書物に記した上は、勤の身は籠の中の鳥、妹樣は神崎に、傾城奉公に疑ひない、何ときつい見通しか」「イエそりや私が口うつしをおつしやるばかり、廓の中でも何處らに居ようと、方角さして下さりませ」「ハテ滅相な、夫が見える程ならば山伏はしませぬ、相場事にかゝるはいの。ナア嗅さうぢやないか、此在外れを眞直に行けば神崎、逗留して尋ねさつしやれ」「ハァ夫なれば是非もない」儀に包錢、譬のふしに陰陽師と、辻風防ぐ笠傾け、お筆はかしこへ急ぎ行く。「ヤ女房ども、此お客は何處へぢや」「イヤどつちへとの先も云はず、今朝からお留守」「コリヤ惡い病が付いたはい、錢なしの手てんがうぢやの」「ハテ麁相いはしやんな、神崎のお傾城梅が枝樣は得意旦那、其よしみで誰有らう、梶原樣の御惣領源太樣を預り、

限菩薩とくだい勢至の金持ばかりを守つて、我等が内には不動樣の火炎の樣な火が降り、福一まんとは名ばかり、下用櫃には虛空藏菩薩、米が無いとせがまれ、天窓の皿は八幡寶藏、割鍋にとぢ蓋のめをとが口を過ぎかね、何とせん手觀世音、文珠菩薩の智慧借つて、ちつと小錢を設けねば、中々身代たよりんく、たゞいをなすなよこちの嬶、敬つて白す」としやべりける。「コレ法印殿、けふは設が有つたやら、仇口を利かしやるの、草臥休めに出端なとこまさう」と、茶釜の下へ挿しくべる、其日の煙もかつぐの、暮しを祈る術もなし。世に憂き事の多き中、お筆は若君駒若殿を、一樋口次郎が手に渡し、妹千鳥に廻り逢ひ、親の敵をねらはんと、上福島より彼方此方と尋侘び、香島の里に著きにけり。「妹が身の上聞く爲には、幸の山伏殿、ちと御免成りませ」と内に入り、「私は旅の者、筮がお賴み申したい」「オヽ能うこそ」と、女房仕事押しやり、「薄くと一ぶくきこしめせ」と、祠の潮に指出せば、しかつべらしく法印、「愚僧が筮は祕傳の投算、或は失物走人、夢合せ夢判じ、相場の高下相性墨色、薪のさつしよ釜の鳴、犬の長鳴鷄の宵鳴烏の行水、親父の夜あるき息子の看經するまでも奇妙な見通し、錢次第」とぞ勸めける。「アイ私はたつた一人の兄弟を尋ぬる者、つい廻り逢ふ手がかりを占うて下さりませ」「フウ夫はよつ程むづかしいが、端的に占ひませう」と、風呂敷より算木取出

留めても留らぬ、ア、悲しや、たとへ死んでも地獄へはやらん、極樂へ遣る弘誓の舟歌、思ひ切つてやつてのけう。唄 汐の滿干に此子が出來たとな、孫が身の上案じるな、ぢいが預りのんえい〱、われが代に大事に育ててえいよほん、ほゝんほ。ほんに何たる因果ぞ」と、正體も無くどうど伏し、涙に咽ぶ腰折松、餘所の千年は知らねども、我身につらき有爲無常、老は留まり若きは行く、世は倒の逆艪の松と、朽ちぬ其名を福島に、枝葉を今に殘しける。

第四

山遠うして雲旅人の跡を埋む。爰も名に負ふ香島の里、西國の往還とて、賤が家居も賑へり。「今日は天道大日如來、未申の年は御一代の守本尊」と、錫杖ふり立て、家々に立つ辻法印、「謹上さんぐ再拜さいへいと敬つて白す、伊勢に神明天照皇太神宮と申奉るは、御本地は大日如來、御眞言にはおんあびりたていぜいから、斯の如く唱へ奉れば」「オ、手の隙がない、通らしやれ、山伏の内へ齋料乞ふは山伏の友喰」と、いひ〱女房表に出て、「コレ嗜ましやれ此方の人」「是は扨うか〱來たればつい内ぢや、機緣直しに錫杖をふり立て〱、「今日の天道大日樣も聞えませぬ、餘まりけふは設が無さに、願は未申の年、一代守るは大きな嘘、分

を深く感じ、著たる所の衣服を脱いで豫讓に與へ、其衣を切らせて彼が忠義を立てさせしは、敵ながらも褒子が情、木曾殿叛逆ならざる事は書置に顯はれ、御最期今更悔むに甲斐なし。主人に科なき樋口次郎、全く恥を與ふるにあらず、忠義武勇を惜み給ふ、大將義經の心を察し、重忠が繩かくる」と、つッと寄つて樋口が肘、捻ぢわぐればにつこと笑ひ、「關八州に隱れなき勇力の重忠殿、力盡には劣らぬ樋口、取られし此腕もぎ放すは易けれど、智仁兼備の力には、及びもない事相手に成られず、ともかくも計らはられよ」と、弓手の腕を押廻せば、「ヤア愚々、忠義厚き樋口殿の力に重忠が及ばんや、大手の大將範賴公、搦手の大將義經公、兩大將の御仁政、文武二つの力を以て警むる此繩ぞ」と、掛くるもかゝるも勇者と勇者、仁義に搦む高手小手、繩付を引立てさせ、「コリヤ女、樋口殿の血こそ分けね、槌松とやらんは大切な子でないか、暇乞を」と有りければ、およしは泣く〳〵納戸に臥したる子を抱上げ、「コレなう暫し假初も、親子と云ひし此世の別れ、コレ顏見せて」と指寄れば、「ハーツア槌松に暇乞とは、四相を悟る重忠の御情、ぢいの願を聞分け給ひ、助けおかるゝ忝なさ、誰彼の情も忘れぬ。コレ槌松、とゝと云はずに暇乞」「樋口々々、樋口さらば」と稚子の、誰れ敎へねど呼子鳥、我は名殘もをし鳥の、番離るゝ憂き思ひ、遣らん〳〵と縋り付く。「娘よ吠えな、何ぼやらん〳〵と商賣の舟歌で

ナ松右衞門が子で、ナ合點がいたか。ほんの親子でござらぬからは、訴人致した代り孫めが命、お助けなされ下されと願うたれば、段々聞し召し分けられ、天下晴れて孫めが命は、オヽ慮外ながら此祖父が助けた。夫に何ぢやと樋口が腹立てた、ヤイ儕が子でもない、主人でもない、若君でもない、大事の〳〵おれが孫を、一所に殺して侍が立つか、若い其の大きな眼にも、祖父が碎く心の數々は見えまいぞ、恨めしいと吐かす儕等が、けつく祖父は恨めしい」と、氣を急上げて曇り聲、よう訴人なされた、有りがたしとも過分とも、云はぬ詞はいふ百倍、嬉し涙にくれけるが、すつと立つて重忠の傍近く、「天晴御邊が梶原ならば、太刀の目釘の續かん程、切死に死なんずれども、粟津の軍、妹巴が身の上まで、志有りしと聞く重忠殿、情に刃向ふ刃は無し、腹十文字に搔き切つて、首を御邊に參らす」と、言はせも果てず、「ヤア樋口、死首を取つて手柄にする重忠ならず、とても叶はぬと覺悟あらば尋常に繩掛られよ」「いや〳〵、運盡きて腹切るは勇士のならひ、繩かゝれとは此樋口に、生恥かゝせん結構な、仁義有る重忠の詞とも覺えず」「イヤこれ樋口、木曾殿の御内に四天王の隨一と呼ばれ、亡君の讐を報はん爲、權四郎が聟と成つて、弓矢に勝る艪櫂を取つて、大將の舟を覆し、鏖にせんず謀、恐しゝ頼もしゝ。晉の豫讓は主の智伯が仇を報ぜんと、御邊が如く姿を窶し、敵襄子を狙ふ其志

く、天を焦せる篝の光、「扨は樋口を洩すまじ、取逃さじとの手配よな、さも有れいかに」と飛んでおり、「女房ども、親父様々々々」と呼立つる。「イエとゝ様は納戸の壁を毀つて、何方へやら行かしやんした」「ヤア壁こぼつて失せたとは、ムウ讀めた、訴人にうせたな。財寶を貪つて訴人する、豫ての氣質では無けれども、槌松が仇を忘れかね、それで失せたか。ハア樋口程の武士が、舟玉の誓言に氣を奪はれ心を赦し、飼犬に手を喰はれた、エヽ口惜しや無念や」と、拳を握り齒を鳴らし、萎れぬ眼に泣く涙、磨き立てたる鏡の面、水を注ぐが如くなり。「お腹立は理ながら、とゝ様に限つて、よもやさうでは有るまい」と、云ひ宥むる折こそ有れ、組の捕手の腰明り、武威輝す高挑燈、畠山の庄司重忠、權四郎に案内させて見えければ、娘は夫と見、「コレとゝ様恨めしい」と、言はせもあへず、「訴人の恨か言ふな〳〵、おれが訴人せいでも、松右衛門を樋口次郎とは、梶原殿が能く御存知なされて、富藏や九郎作に、搦捕らさうとなされたぢやないか。夫ばかりぢやない、四方八方取り圍んで、樋口が命は籠の鳥、何ぼ助けうと思うても助からぬ、おれが秩父様へ訴人したは槌松めが事で」「サア其槌松の事をいうて松右衛門殿が腹立てゝ」「何の腹立てる事が有る、親子といふ名に繋がれて、孫めが親と一所に、彼方者に成りをらうかと悲しさに、あれは樋口が子ではござりませぬ、死んだ前の入聟の、

門、儕木曾か郎等樋口次郎兼光といふ事、梶原殿よく御存知なされ、逆艪の稽古に事寄せて、搦捕り連來れと、我々に仰付けられた。尋常に腕廻すか、打ちのめして繩掛けうか、腕を廻せ」と言つたり。樋口からく／＼と打笑ひ、推量に違はぬ上は何をか包まん、朝日將軍義仲の御内に於て、四天王の隨一と呼ばれたる、樋口の次郎兼光、儕等風情が搦め捕らんとは、まもの付けたる一番碇、蟻の引くに異ならず、成らば手柄に搦めて見よ」「ヤア洒落くさい廣言、跡でいへ」と櫂ふり上げ、擲り立つるを事ともせず、かい潛つて引つたくり、先に進みし富藏が、頭微塵に打碎けば、「一人では叶はぬぞ、二人かゝつて手に餘らば打殺せ」と、立別れはつしと打つ。さしつたりと開く身に、櫂と櫂とは相打に、互の眉間あ痛しこ、ためらふ隙につッと入り、櫂引つたくつて捨てたりける。組んで捕らんとむり無三、取付く二人を引寄せ／＼、力に任せえいうんと、踏み碎く天窓の皿、微塵に碎け死してけり。「サア安からぬ若君の一大事何とせん、我身をいかに」とためらふ胸に、ひつしと響く鉦太鼓、數百人のをめく聲、こはいかに／＼と驚く中に心付き、「究竟の物見櫓ござんなれ」と、かけ上る門の松、顏にべつたり蜘の巢や、松葉の針であいたしと、目ざすばかりは暗からぬ、繁る梢の朧月、四方をきつと見渡せば、北は海老江長柄の地、東は川崎天滿村、南は津村三つの濱、西は源氏の陣所々々、人ならぬ所もな

妻子を養ひながら、恥しいがついぞ逆艪と云ふ事は」「オヽ知らぬ筈〳〵、何事もおれ次第、教へてやる。サア九郎作と又六は、おも梶取梶の艫艪を立てた。富藏是へお出でなされ、おれがする樣に艪を立てた。コレ皆の衆、此樣に舳から艫へ向つて艪を立てる、是を逆艪といふはいなう。惣じて陸の戰は、敵も味方も馬上の働、駈けんと思へば駈け、引かんと思へば引く事も、自由げに見ゆれども、舟といふ物は又格別、知つての通り汐に連れ、風に誘はれ、艪拍子立てて押す時は、行く事も早けれど、乘戻さんと思ふ時は、おも梶とり梶の風波を考へ、取梶つかの手の中、舟をくるりと本の如く、押廻して漕戻す、夫さへさす汐引く汐にもぢかうて、舟に過有る時は、八萬奈落の憂きめを見、いとしかはい妻子に再び逢はれぬぢやないか」「如何にもさうぢや」「其の憂きめを見まい爲の此逆艪、サア其艫の艪を押した〳〵」おつと心得、「やつしつし、しよやつしつし」三段ばかり漕出す、「サアかう舟を漕寄せて、追ッつ捲ッつ戰ふ時、謀に乘せらるゝか、敵に新手が加はるか、スハ負軍と見る時は、舟押廻すまでもなく、コレ此逆艪押立てゝ、富藏合點か」「合點ぢや〳〵、やつしつし、しよやつしつし」元の所へ漕戻す、隙を窺ひ富藏九郎作櫂追取り、松右衞門が諸膝薙いで打倒さんと、右左よりはつしと打つ。心得たりと踊りこえ、陸へひらりと飛上れば、三人續いてかけ上り、「ヤア卑怯なり松右衞

止まらぬ氣、涙に「くれ〴〵若君を」「頼まるゝの頼むのといふ中かいの、本意を遂げて又御出」「さらば〳〵と門送り、見送る袂見返る袖、お筆は別れ出でて行く。「扨て〳〵武家に育つた女中は格別、娘今からあれ見習へよ。こりや爰に七面倒な笈摺が有る、何所へなりとつとゝ捨てゝしまへ」「親父様、夫は餘りな思召切、せめて佛前へ直し香花も取り、逆様な事ながら、御回向なさつて取らさつしやれましよ」「侍の親に成つて未練なと、人が笑ひはせまいか」「何の誰が笑ひましよ」「ハア、嬉しや〳〵、有りやうはさつきにからさうしたかつた。娘納戸の持佛へ火を燈せ」と、手に取上ぐる笈摺の、「千年も生かさうと思うたに、たつた三つで南無あみだ、〳〵、槌松聖靈頓生菩提。聟殿ござれ。娘もこい」と見れば、見かはす顏と顏、倶に涙にくれの鐘、かう〳〵とこそ聞えけれ。早約束の黃昏時、又六を先に立て、富藏九郎作三人連、門口から用捨なく、「松右殿内にか、約束の通り參つた」と高呼はり、「オ、待つて罷居ります」と、身輕に拵へ飛んで出で、「御大儀々々々、這入つて煙草でも參らぬか」「いや〳〵大事の急ぎの御用、一精出して跡でのたばこ、しつぽりと先やりませうぞや。オヽともかくも」と、皆川岸に下り立つて、繋げる手船の渡海作り、纜解き捨て飛乘り〳〵、「ナウ松右殿、舟で

て主殺しの悪名が取られうか、花は三芳野人は武士、末世に殘る名こそ恥かしけれ、御立腹の數數御歎の段々、申上げう樣はなけれども、親と成り子と成り夫婦と成る、其緣に繫がるゝ、定り事と思召し諦めて、若君の御先途を見屆け、まだ此上に私が、武士道を立てさせて下されば、生々世世の御厚恩、聞分けてたべ親父樣」と、身を謙り詞を崇め、忠義に凝つたる樋口が風情、兼平巴が頭を踏まへ、木曾に仕へし四天王、其隨一の武士と、世に名を取りしも理なり。權四郞はたと手を打つて、「さうぢや、侍を子に持てばおれも侍、我子の主人はおれが爲にも御主人、ハヽヽサアく聟殿お手上げられい、舟玉冥理、再び丸額に成つて炊食する法も有れ、恨も殘らぬ悔みもせぬ、泣きもせぬ、娘精出して早う又槌松を產んで見せをれ」「扨は御得心參りしか、ハア忝や嬉しや」と、互の心ほどけ合ひ、千里の灘の漂舟、湊見付けし如くにて、悅び合ふこそ道理なり。お筆嬉しく若君を、樋口の次郞に手渡し、「其許にかくておはすれば、此お子に氣遣なし、浮沈は世のならひ、私が妹、此津の國に勤奉公すると聞く、夫が行方も尋ねたし、大津で討たれし親の敵、討つて亡者へ手向けたし、何やらかやら事繁き私が身の上、早御暇」と立上れば、「さう聞いて留めるも無調法、エヽ殘念ながら我等の身分、力にならうとも得申さぬ、御勝手にお出でなされ」「聟殿、ハテもぎだうな、せめて二三日足休め」「夫々とゝ樣のおつし

の一戰、誤なき御身を閻々と、御生害遂げ給ひし我君の御最期の鬱憤、すぐにかけ入り一軍とは存ぜしかど、思へば重き主君の仇、術を以て範賴義經を討取り、亡君に手向け奉らんと、此家に入聟し、逆艪を云ひ立て早梶原に近付き、義經が乘船の船頭は松右衞門と事極る、追付け本意を遂ぐる樣に成るに付け、此若君の御在所は何處、如何ならせ給ふと心苦しき折も折、最前よりの物語、障子越に聞くに付け、見れば見る程面變れ給へども、紛ひもなき駒若君、扨は思ひ設けず願はずして、所こそ有れ日こそ有れ、其夜一所に泊合せ、取りかへられて助かり給ふ若君は御運強く、殺されし槌松は樋口が假の子と呼ばれ、御身代に立つたるは、二心なき某が忠臣の存念、天の冥慮に相叶ひ、血を分けぬ子が子と成つて、忠義を立てし其嬉しさ、何に類の有るべきぞ。是も誰が蔭親父樣、子ならぬ我を子となされ、親ならぬ我を親とする槌松、恩も有り義理も有り、餘所外の子と取違へての敵ならば、其許に御堪忍なされうが、女房がよしにと申すとも、其敵安穩に置くべきか。親父樣の御歎、我も不便さは身に迫れども、相手に取れぬ主君の若君、弓矢取る身の上には、願うても無き御身代、祖父親の名を揚げた槌松、其名を上げた元はと問へば、私を子と成されし親父樣の御厚恩、千尋の海蘇迷盧の山、夫さへ御恩には中々比べがたけれど、まだ其上に大恩有る主君の若君、孫の敵とて祖父樣に切られうか、我手にかけ

ふまいぞ」と、瞬で知らせば打默き、しづまる女聽かぬ祖父、「松右衞門でかしたりな、さつきにからのもやくや、寐られはせまい聞いたで有らう、そちが爲にも子の敵、其子死人づたく〳〵に切刻んで女に渡せ」「イヤさうは致すまい」「なぜ致すまい」「サア夫は」「サア夫はとは、エヽ水臭い、云はいでも知れた、倖が胤を分けぬ樋松が敵ぢやによつて致さぬな。其根性では祖父が儘にもさしやせまい、まう破れ被れぢや、おれが言ふ樣にせぬからは、親でも子でも無い、娘そこら駈廻つて、若い者大勢呼んでこい」と氣を急いたり。「ヤレ待て女房、人を集むるまでもなし。親父樣、どう有つても樋松が敵、此子を存分になさるゝか」「くどい〳〵」「ハア是非もなし、此上は我名も語り、子細を明かして上の事」と、「若君をお筆に抱かせ上座に直し、「權四郎頭が高い、天地に轟く鳴る雷の如く、お姿は見ずとも定めて音にも聞きつらん、是こそ朝日將軍義仲公の御公達駒若君、斯く申す我は樋口次郎兼光よ」と、いふに親子は新肝取られ、呵れ果てたるばかりなり。樋口お筆に打向ひ、「扨々女のかひ〴〵しく、跡々まで御先途を見屆くる神妙さ、山吹御前も思ひ寄らぬ御最後、御身が父の隼人もあへなく討死したりとな、力落し思ひやる。夫に付けても斯くて在る、樋口が身の上嘸不審、若君の爲には祖伯父ながら、多田藏人行家といふ無道人を誅罰せよとの御意を請け、河内國へ出陣の跡、鎌倉勢を引受け粟津

さうが、尋ねていかうにも、何もしるべの手懸はなし、そつちには笈摺に處書が有る、けふは連れて來て取り換るか、あすは連れて來て下さるか、逢うたら何と禮言はうと、明けても暮れても待つばつかり。コレ此襖を見やれ、かはいや槌松が下向に買ふと言うたを聞き分けず、無理に買うて三井寺三界、持つて歩いて嬉しがつた鬼の念佛に餓鬼、外法殿の頭へ梯子さいて月代剃る大津繪、藤の花のお山も買ひをらず、外法殿の繪を買うたは、あの樣に髭の白髮に成るまで長生しをる瑞相、鬼の樣に達者で金持つて、世界の人を餓鬼の樣に這ひ屈ましをらう吉左右ぢや、めでたい、戻りをつて見をつたら、嘸ぞ悦ばうと張つて置いて待つたに、思へば梯子は外法天窓の下り坂、鬼の傍に這ひつくばふ餓鬼に成つて、お念佛で助かる樣に成りをつたか、思へば思ひ廻す程、身も世も有られぬ、よう大それた目に遭はせたな。ア、夫になんぢや、思ひ諦めて若君を戻して下され、町人でこそ有れ孫が敵、首にして戻さうぞ」とつッ立ち上る。筆な「う悲しや」と取付くお筆を、押退けはね退け納戸の障子、さつと明くればこはいかに、松右衞門若君を小脇にかい込み、刀ほつ込み力士立。お筆驚き「ヤアこな樣は、あの樋口の」「コリヤコリヤ〳〵女、ムウ聞えた、最前歸りがけ、下の樋の口でちらと見た女中よな、若君は身が手に入つて氣遣ひなし、言うてよければ身が名のる、ナ合點か、必ず樋の口を樋口などと麁相い

二世安樂、順禮も充にはならぬ、觀音樣も不甲斐ない、怨めしや懷しや、あはれ此事が夢で有つてくれかし」と、顏に當て抱きしめて、聲をはかりに身悶し、前後不覺に泣きゐたる。「娘吠えまい、泣けば槌松が戻るか、よまい言いや二度坊主めに逢はれるか、豫て愚癡なと祖父が叱るをどう聞いて」と、いふ詞に縋り付き、筆「それ〳〵、かう申す私も女子ぢやが、愚癡では濟まぬ、祖父樣のおつしやる通、いか程お歎きなされたとて、槌松樣のお歸りなされると言ふではなし、再び逢はるゝと言ふではなし、さつぱりと思し召し諦めて、此方の若君をお戾しなさつて下さつたら、アヽ有りがたい忝いと、悅ぶ私が心が何處へいかう、槌松樣の未來の爲には、佛千體寺千軒、千部萬部の經陀羅尼、千僧萬僧の供養なされたより」「女子だまれ、何の頰の皮でがや〳〵願たゝく、恥を知れやい。我子を我が育つるには、少々の怪我させても、不調法が有つても、親だけて濟めども、人の子にはな、義理も有り情も有り、主君の若君のとお言やるからは、其れ知らぬまんざらの賤しい人でも無さゝうな。此おれは親代々梶柄を取つて、其日暮しの身なれども、お天道樣が正直、大事にかけて置いたそつちの子、見せうか、いや見せまい、見やつたら目玉がでんぐりかへらうぞ。人の子を勞はるは、こつちの子を勞はつて貰ふかはり、大抵大事に懸けたと思ふかい。コリャそんなら又なぜ尋ねて來ぬと減らず口ぬか

中もほつたらかし、大事の若君取返さんとかけ廻る、月無き夜半の葉隠れ、尋ね廻る笹垣の陰、サア此方にこそ若君は在れと、取上げて見たれば、悲しやお首がまうか無かつた、よく〳〵見れば若君で無い證據は此笈摺、騷の紛れに取違へしな、扨は若君のお命に恙なかりけりと、一度は安堵せしが、代を戻さねば取返されぬ若君、もと〳〵へ取戻す種になる、人の大事の子を殺し、何を代に若君を取戻さう、悲しい事を仕やつたと、夫を苦に病み、主君の女中も其座ではかなく成り給ひ、悲しみやら苦しみやら、私一人がせたら負うた身の因果、此笈摺をしるべにて尋參りしは、お果て成されたお子の事は諦めて、此方の若君を、戻して下さるゝ樣の御願ひ、大事にかけてお世話なされたと、物語聞くに付け、面目無いやら悲しいやら、あぢきなき身の上を思ひやつてたべ、親子御樣」と、かつぱと伏して泣きければ、祖父は聲こそ立てねども、涙を老に嚙みまぜて、咽につまればむせ返り、身も浮くやうに泣きければ、娘は心も亂るゝばかり、空しき笈摺手に取つて、「やれ槌松よ嗚なるは、夕べの夢にまざ〳〵と、前のとゝ樣に抱かれて天王寺參り仕やると見たは、日こそ多けれ爹御の三年の祥月なり、命日のけふの日に、便聞く告でこそ有りつらん、夫とはじらぬ凡夫の淺ましさ、けふは連れてくるか、あすは戻りやるかと、待つてばつかり居た物を、大きな災難に遭うて、笈摺に書いた詮もない、是が何の

しない、此お禮がちやつきりちやつと、つい云うて濟む事かいな。申し此槌松はなぜ遲い、お連の衆が門違へはなされぬか、此槌松はなぜ遲い、我子は如何に」「孫はいかに」と、立ちかはり入りかはり、門を覗いつ禮云ひつ、そゞろに悅ぶ親子の風情、お筆が胸に燒鐵さす、今さら何と返答も、泣くもなかれずさしうつむき、暫く詞も無かりしが、「お願ひ申さねば叶はぬ譯有つて、耻を包み面目を淩いで尋ね參りしが、さうお悅びなされては、氣が後れて物が申されぬ、マア下に居て下さんせ」と、涙ながらに押ししづめ、「改めて申すもあぢなき其夜の騷、手ばしかう迯隱れなされたお前方は順禮の功德、此方は一人は病人なり、男とては有るに甲斐なき年寄、迯げるも隱れるも心に任せず、取違へた其お子は、其夜にあへなく成り給ふ」と、聞いて悔り、「とは何故に」「とはいかに」と、餘りの事に泣かれもせず、仰天するこそ道理なれ。「人の身の、仇なりと豫ては聞けど其の夜の悲しさ、ようも今日まではながらへし、云譯ながらの物語、聞いて恨を晴れてたべ。高うはいはれぬ事ながら、連の女中と申すは私の御主人、騷に取違へしとは思ひも寄らぬ若君は倘大切と、私がかき抱き、御病人の女中は親が手を引き、一度は旅籠屋の、憂目は遁れ出でたれども、追ひかくる武士の大勢、氣は樊噲と防いでも、何をいふも老人の、云ひがひなく討死し、若君は奪取られ、氣も狂亂の樣に成つて、女

め、松右衛門に逢うて姉ぢやというても悋氣するか、夫程氣づかひなら、呼込んで逢はせぬ先に聞いたがよい。どなたぢや女中、何處からござつた、松右衛門内に居まする、遠慮せずと這入らしやれ」「夫はまあ〳〵お嬉しや」と、笠解き捨てゝ内に入り、「お前が松右衛門樣か、お近付でなければ、お顔見知らう樣はなけれども」「なけれどもなりやなぜござつた」「サア申し何が知方に成らうやら、攝州福島松右衛門子、槌松と書いた笈摺が縁に成つて」「ヤアそんなら此方は大津の八丁で、又跡の月廿八日の夜の」「アイ、お子樣を取違へた者でござんす」「道理で見た樣な顔ぢやと思うた事、是は夢か現かいなう。およし悅べ、槌松を取違へた人ぢやとやい。此方からも行方尋ねて、もと〳〵へ取戻す筈なれども、何を證據に尋ねて行かう手懸りもなく、泣いてばつかり居ました。其の代りには取違へたそつちの子供衆、兎の毛で突いた程も怪我させず、蟲腹一度痛ませず、娘が乳が澤山な故、喰物はあしらひばかり、乳一度あまさせず」「オヽそれ〳〵、風一度ひかさばこそ、親子が大事に懸けたに付いても、此方の息子めも嘸ぞ御厄介、御世話で有らう、よう連れてきて下さつた、忝い〳〵。わるさよ、我内を忘れたか、なぜ這入らぬ」「イヤ門にではござんせぬ」「エヽ連の衆が跡から連れてお出でなさるよか、嘸ぞ御厄介忝い〳〵。ハテ早う逢ひたいな、娘お禮を申しやいの」「アヽとゝ樣せは

の草臥休め、娘、十二文持つて走らぬかい」「イヤ〳〵〳〵、御酒も歸りがけに九郎作が所で下された、一生覺えぬ大名の付合、膝はめりつく氣骨は折れる、播磨灘で南風に逢うた樣なめに遭うて頭痛まじり、草臥れたといふ段ではない、暮まではまだ間も有らう、親父樣御許さりませ、とろ〳〵と一寐入。およしコレ見や、坊主めが居眠るは、幸とゝが添乳せん。ねんねんころゝ」とかき抱き、納戸の内にぞ入りにける。「娘裾に何でも置いたか、出世する大事の體、風ひかすな、祝うて舟玉樣へ燈明もとほせ、御神酒上げたい、買うてくれぬかい」「買ふまでもない、是をお供へなされませ」と、棚からおろす難波燒、「ちろりと用意が有つたな」と、老のじやれ言輕口も、神慮は重き一對の、德利に餘る親心、妻は火燧の石の火に、夫の威光輝けと、油煙も細き燈明に、心を照らす正直の、神や光りを添へぬらん。妻戀ふ鹿の果ならで、なんぎすゞりの海山と、苦勞する墨憂き事を、數書くお筆が身の行方、いつまではてしなには潟、福島に來て事問へば、門の印のそんじよそこと、松を目當に尋ね寄り、「ハア御免なりましよ、松右衞門樣は此方か、お名をしるべに遙々尋ね參つた者、お逢ひなされて下さつたら、忝うござんしよ」と、物ごしのしとやかさ、「アレとゝ樣、松右衞門殿に逢ひたいと女が來た、ろくな事では有るまい」と、跡先知らで女氣の、早悋氣する詞の端、「興がる、嗜

聞受けがたし、脩舟に逆櫓を立てゝの軍、調練したる事や有る、其れ聞かん」と問ひかけられ、此度親父樣に習うて、逆櫓といふ事初て知つた此松右衞門、返答に困るまいか難儀せまいか、ほつとせしが分別致し、御意ではござれども、賣船の船頭風情、軍といふ物は夢に見た事もござらぬ、逆艪の事は我等が家に傳へ、能く存じて罷在りまするなどと申して、間に合を云うたれば、ムヽさも有りなん、然らば汝覺え有る船頭を語らひ、今宵密に逆艪を立てゝ舟の駈引手練して、其上に知らせよ、事成就せば、御大將の召船の船頭は汝たるべし、御褒美は此梶原が取持ち、永く船頭の司として、莫大の財寳を下さりよと有る直のお詞、其嬉しさに初めの術なさ打忘れ、あたふたと歸りがけ、日吉丸の船頭の又六、灘吉の九郎作、明神丸の富藏、こいらは梶原樣のお舟の船頭、幸三人を相手にして、日暮から逆艪稽古に此方へ參る筈、御敎へなされた手際を見せ付け、立身出世はたつた今、是と申すも御指南のお蔭忝い、坊主よ悅べ、結構なべゝ著せて、持遊びに飽せうぞ、女房ども、親父樣、悅んで下され」と、語る聟より聞く嬉しさ、「イヤサ不器用な奴は、千年萬年敎へても埒や明かぬ、まんざら素人のわり樣が、入聟にわせられて、一年も立つや立たず、天下樣の弟御の召さるゝ御舟の船頭する樣に成るといふは、おれが敎へたばかりぢやない、其身の器用がする事でおぢやらしますよ、めでたい〳〵。聟殿

ア皆の衆、あんまりお茶呑んで、結句おなかも晝下り、いざござれお暇」と、打連れ出づる門の口、櫂の先に笠かつ付け打擔げ、立歸る聟の松右衛門、「ホこりや皆お歸りか、けふは前の聟殿の三年忌、内に居て倶々御馳走申す筈を、遁れぬ用事で罷出で、近頃の亭主ぶり、まそつと緩りと話されいで」「まそつとの段かいの、ゆるり鑵子の底叩いて歸ります。餘茶には福が有る、呑んでお休みなされや」と、住家々々に立歸る。「ハア親父樣今歸りました。茶事の間に合はう、釜の下でも焚かうと氣が急いても、相手は急かぬ大名のゆつたり、遲なはつた嘸お草臥、女房ども大儀で有つたの」「何の大儀な事は無い、お前こそ嘸おひもじかろ。坊よ、とゝ樣お歸りなされたかと、なぜお傍へ行きやらぬ、どりや飯上げう」と立上る。「コレ／＼女房、まだ欲しうない、望みな時に此方から言はう。扨申し親父樣、大名の中に梶原殿は、取分の念者と申すが違はない、お召によつて船頭松右衛門參上と奥へ云うて行き、やゝ暫くして御家老の彼番場忠太殿がお出でなされ、先達て指上げた逆櫓の事書、一つ／＼尋ねる程にける程に、問ひ殺した其上で、其通り申し上ぎよ、暫く待て、よう暫で有らうぞ、なゝの三時待たせて置いて、殿が直にお逢ひなさるゝ、是へお出でなさるゝと、其重々しさ物云ひの堅くろしさ、船頭松右衛門とは儕よな、智謀軍術逞しき義經へ、此景時が能く存ぜしといふ逆櫓の大事、疎に

て、初めて背に負うた子の、顔見ればなむ三寶、相宿の摸ごし、宵に咄しもしたわろが、連れた子と取り違へたに極つた、大儀ながら一走行て、もと〳〵へ取り換へて來てくれと娘はせがむ、オヽ尤、取戻して來うと思ふ程先の怖さ、いかな〳〵一足も行かれるこつちやない、今には限らぬ、取り還す折が有らう、先のわろも子を取違へ、人の子ぢやとてとろく〳〵にはて置かぬ筈、此子さへ大事に育てゝ置いたら、三十三所の觀世音のお力、枯れたる木に花さへ咲くぢや無いか、一先内へ戻つて、潰した肝を癒してからの上の事と、晝舟に飛乘つて戻る中、乳呑まうと泣く、持合せたを幸に、娘が乳呑ませたら、夫なりに月日も立ち、名も知らねば呼びつけた槌松々々と言や我名と心得、祖父よ〳〵と馴れなじむ痛々しさ、今ではほんの槌松めも同然に、かはゆうござる」といふ聲も、咽につまらす老心、娘も倶に涙ぐみ、「時の災難とは云ひながら、緣有ればこそ此子が手鹽にかゝり、他人がましうもする事か、嗅樣々々と此乳を、呑みもすりや呑ましもすれ、馴染めば我子も同じ事、此子憎いではゆめ聊か無けれども、けふの亡者の手前も有り、成らう事なら、手取早う、もと〳〵へ取戻したうござんす」と、語るを聞いてばゝかゝ達、「夫で疑ひ今霽れた、大願立てゝの西國廻り、現世未來の觀音樣の引合せ、あつちから槌松を連れて、やがて尋ねて見えましよぞいなう、必ずきな〳〵思はぬがよい。サ

に、いとしや〳〵。南無阿彌陀。皆回向してお茶參りませ、海鹿のおあへ此の蒲公英、扨もうまし」と舌鼓、茶請に咄し嚙交ぜて、あだ口々のやかましさ、皆船頭の女房とて、乘合舟の如くなり。「ヤアよい序ぢや權四郎樣、御尋ね申す事が有る。別の事でもない、此惡さ殿、連れて順禮なさるゝまでは色黑に肥えふとつて、年より丈も大柄に、病氣なうて、ほんの赤松走らかした樣に、門を家と遊びやるを見ては、あやかり者ぢやと羨んだ子が、何として又此樣に色白に痩せこけて、思ひ成しか、顏のすまひも變つて、背も低うよわ〳〵と、外へとては一寸出ず、あれが順禮の奇特か觀音樣の御利生かと、打寄つては是沙汰、めんよな事や」と尋ぬれば、「されば其事、ありや前の槌松ぢやござらぬ、違うた〳〵、違うた譯思ひ出すもなう恐ろしや、聞いて下され、娘よ、何日の夜やらで有つたな」「ハテ廿八日の」「オヽそれ〳〵、又跡の月の廿八日、三井寺の札を納めて、大津の八丁に泊る夜、何かは知らず御上意ぢや、捕つた〳〵と大勢の侍が、コレ見さしやれ、咄するさへ身が震ひます、ほんの世話に言ふうろたへては子を倒さま、どう負うたやら娘が手を引いたやら、走つてやら飛んだやら、漸毒蛇の口を遁れ、迯げて行く先は又狼谷、谷の水音松吹く風も、跡から追手の來る樣に思はれ、扨も命は有る物かな、眞黑の夜に四里足らずの山道を、息一つ吐かばこそ、水一口呑まばこそ、命から〲伏見へ出

舁き上げ乘する笹の葉は、亡き魂送る輿車、長柄も細き千尋の竹、肩に打掛け曳く足も、しどろもどろに定めなき、淵瀨と變る世の憂きを、身一つに降る涙の雨の、小止みもやらで道のべの、草葉も浸す袖袂、泣く〳〵辿り　三重行く空の。難波潟、蘆火焚く家の片庇、家居には似ぬ里の名や、福島の地はおしなべて、世をうみ渡る舟長の、有るが中にも權四郎とて、年も六つを十返りの、松右衞門といふ通り名は、養聟に讓りやる、門に目當の松一木、所に蔓る親仁有り。志す日に、あたり近所の婆嚊達、お茶參れとて招かれて、「ナウ權四郎樣、けふ志の日ぢやお茶呑めと、およし樣の直にお使から伴ひ添い、誘ひ合せて參つた」と、どや〳〵內に入りければ、「ようこそ〳〵、けふは娘が前の連合、此槌松めが本のとゝが三年の祥月命日に當つた故、澁い茶を焚きました、呑んでゆつくりして下され。常なら箸でもとらせます筈なれど、知つての通り足弱な娘や孫を引連れて順禮の長道中、物入の跡何にも仕ませぬ、とはいへ娘何ぞ無いか」「何ぞと申したら、人手は無し此子はせがむ、ほんの心ばかりをば上つて御回向賴みます」と、霰交りの煎豆に、端香持たせて汲出せば、「もう三年に成りますか、アヽ月日に關守据ゑざればぢやの。今の松右衞門殿は、ござつて間もなくしみ〴〵と付合はねば、心入は知らぬが、死なしやつた此槌松の爺御は、ちやうど此人參の太煮の樣に、毒に成らぬ人で有つた

悲しい事はござんせぬ、コレ取違へたのでな、若君のお命に氣遣ない、是卽ち天の惠、御運の強さ、アッア嬉しや〳〵有りがたや。コレお悅びなされませ、コレ申し〳〵、是はしたり、なぜ物をおつしやらぬ、ハア、又眩暈が來たさうな、これは〳〵エ、お氣の弱い、不甲斐ない事では有るぞ。これ〳〵申し」と、いへども弱る身の上に、悲しさつらさ氣を揉み上げ、又嬉しさにがつくりと、引取る息も敢へなき最期、お筆はあわて、うろ〳〵きよろ〳〵、「こりや何とせうどうせう」と、脈取つて見つ耳に口、「これ〳〵申し、山吹樣いなう」といふ聲さへ、「人を憚り、思ひ切つて呼ばれぬか、エ、情ない、エ、鈍な」と、心は千々に碎けども、早色變り、手足は氷と冷え切つて、押動せど其甲斐も、淚先立つ魂も、倶に消入る憂き思ひ、大地にかつぱと伏し轉び、聲の限を泣き盡す、理とこそ聞えけれ。やゝ有つて顏を上げ、「ハア、さうぢやさうぢや、返らぬ事悔むまじ、歎くまじ、一先此場を立退きて、妹千鳥と心を合せ、お主の仇父の敵、逃隱るゝとも天地の間、命限り根限り、やはか助けて置くべきか」と、かけ出でしが、「イヤ〳〵、其れより大事の〳〵若君、片時も早く取返さう、ア、いや待てしばし、死骸を此の儘捨て置かれず、無緣の此子、父の體諸共に、隱さんとは思へども、前後に滿ちたる多勢の追手、隙どらば却て妨、せめてお主の面影を、先々かしこへ葬らんと、あたりに茂る竹切つて、

あ、女でこそ有れ闇々と討たしはせまいに、シテ其切つた奴は何方へ迯げた、顏見知つてござりますか。ア、此暗さでは其も知れまい、名はお聞きなされぬか」「イヤ〳〵顏も名も知らねど、梶原が所爲で有らう、かはいやわつとたつた一聲、泣いたが此世の暇乞、父御といひ子といひ、刃にかゝりはかなき最期、剩さへ、是まで付添ひ忠義を盡す隼人まで、爰で死ねとの約束か、此はそもいかなる前生の、報いか罪か淺ましや」と、御身も絕ゆる叫び泣、お筆も在るにあられぬ思ひ、「父の最期はお主へ忠義、悔む心はなけれども、おいとしさ駒若樣、けふの今まで愛らしう私を廻し、片時離さず抱かれて、泣いつ笑うついたいけな、お顏をやつぱり見る樣な」と、くどき立て〳〵、聲も惜まず歎きしが、淚の中に心付き、せめて一目若君の、お死骸なりとも見ん物と、あたり見廻し、尋ぬる心も空も闇、怪しや血に染む稚きからだ、手に障るをかき抱き、淚と倶に撫廻々々、「ハア、此の著物はどうやら手障も違ふ、そして何やらびら〳〵と、こんな物は召さぬ筈、合點がいかぬ」とよく〳〵透かし見、「ヤア是は違うた。申し〳〵、こりや若君ではござんせぬ」「ヤア何といやる、駒若では無いとは」「ハテ此死骸は笈摺かけて居るはいな」「どれ〳〵、ほんに變つたこりやどうぢや、是は〳〵」と二度恟り、「ム、扨は今の騷動に、相宿の子と駒若と、取り違へたかハア悲しや」「ア、これ〳〵、そりや何おつしやる、

の義仲が悴、敵の末は根を斷つて葉を枯す」「ハア是非もなや、此子一人助けたとて、さまで仇にも害にも成るまじ。生きとし生ける物ごとに、物の哀は知る物ぞ、取りわけ武士は情を知る。自はともかくも、此子が命を助けたい、慈悲ぢや功德ぢや後生ぢや」と、涙と倶に侘び給ふ。「ヤア甘ちこい、成らぬ〳〵、當歳子でも男の餓鬼、生け置いては後日の仇、繰言いはずとサア渡せ」と、飛びかゝつて引取れば、わつと泣く子を放さじと、取著き給ふを捩ぎはなし、突飛ばせば又縋り付き、撥ねのくれば武者ぶり付き、「やらぬ〳〵」と泣き給ふ。「ヤア面倒な女め」と、髃摑んで投付くれば、うんとばかりに息絶えぐ〳〵、其隙に若君を宙に提げ、首はつしと打落し、小脇にかい込み、飛ぶが如くにかけり行く。山吹御前は夢心地、むつくと起きて「ハア悲しや、西も東も辨へぬ、此子に科はなき物を、むごやつらや胴慾や、還せ戻せ」の聲も遙にお筆が聞付け、息を切つて立歸り、はつと驚き抱きかゝへ、「コレお心は慥なか。若君樣はどこにござる、樣子をおつしやれ、サアどうぢや〳〵」と急き切つて、問へば答へもくるしげに、「ホヽお筆か遲かつた、情なやたつた今、追手の者が爰へ來て、隼人も討たれ駒若も殺された。ツレ首切つて迯げたはいの」エヽと仰天狂氣の如く、呆れて詞も出でばこそ、胸も張裂く悲しさの、涙はら〳〵立つたり居たり、身をもがき齒を嚙みしめ、「エヽ口惜しや、今一足早くばな

道もあやなく物凄き、裏は田畑を隔ての大藪、押分け掻き分け、忠義一途にかひ〴〵しく、お筆は片手に若君抱き、山吹御前の御手を引き、駈出でて息をつぎ、「扨もひやいや危い事、とゝ樣は多勢をふせいで跡から追付く、早う迯げよと有りし故、めつたむしやうに走つても、暗さはくらし勝手は知らず、どつちへ迯げてよからう」と、うろつく向ふへ數多の人聲、又むら〳〵とかけ來り、遁さぬやらぬと無二無三、打つてかゝれば叶はじと、山吹御前に若君渡し、一腰拔いてはつし〳〵、てう〳〵翼の早業早足、飛び違へ切り開き、弓手になぐり馬手に受け、痺まず去らず戰へば、さしもの大勢堪りかね、迯げるを遣らじと追うて行く。跡にはあ〳〵山吹御前、「長追仕やんな戻つてたも、此隼人はどう仕やつた、ア、氣遣ひや危なや」と、あせる向ふへ打合ひ切合ひ切り結び、追ッつ捲ッつかけ來る、番場を相手に鎌田隼人、忠義に冴えたる切先刃先、受けつ流しつ上段下段、祕術を盡し戰ひしが、忠太が苛つて打つ刀、受けはづして弓手の肩先、袈裟にすつぱと切り下げられ、心は鬼神とはやれども、腕も弱り目も眩み、足を立てかねたぢ〳〵〳〵、よろ〳〵〳〵とよろめく所を、付け入り付け込み疊みかけ、とゞめの刀一ゑぐり、はつと驚く山吹御前、迯がしも立てず向ふへ突つ立ち、「サア女、其忰渡せ〳〵」「ヤア何者なれば此狼藉、樣子が聞きたい合點がいかぬ」「オ、樣子はそつちに覺有る筈、朝敵謀叛

主内にか」「オット何ぢや」「イヤ何ぢやは、お尋者嚴しい御詮議、委しい事は來て聽かしやれ、サア〳〵今ぢや、ちやつと〳〵」「ホイ、そりや行かざ成るまい、遲くば庄屋のたくら者、又頭から嚙むぢや有ろ」と、氣もわくせきだ片々に、羽織引つかけ出でて行く。既に其夜も更渡り、遠寺の鐘も幽なる、灯火細く影さして、四方に人音しづまりぬ。旅ぞとも、知らぬ稚子隣同士、宵寐惑ひの目をほつちり、乳房離れてそろ〳〵と、這出て一人にた〳〵笑、つむりてん〳〵てうち〳〵あわゝ、間の襖を越え行けば、此方の子も出て這廻り、諾きあうて寄りこぞり、おせおせ小法師が同い年、互に愛するごとくにて、機嫌笑顏のしほの目細目、煙管ぐわた〳〵手ずさびや、菅笠取つて著たは松茸、欲しがる顏で、握めば遣らじと引つぱり合ひ、餘念他愛も無かりしが、悦ぶ先にほつと欠伸も子供の常、又行燈に手を掛けて、こなたが引けばあなたも引き、突き戻せば押しかへし、引きあふ拍子に土器ゆり込み、灯火ばつたり眞暗闇、我と我手に驚きて、わつと泣出す子供の聲、寐耳に㤜り目覺す人々、「こりや何事」とうろ付く中、亭主が注進先に立ち、梶原が家來番場忠太、大勢引連れかけ來り、「それ逃すな」と下知すれば、捕つた〳〵と亂れ入る、音に驚く家内の騷動、震ひわなゝきあつたふた、危さこはさも暗紛れ、行き當るやら轉けるやら、上を下へと立ち騷ぐ、風も烈しき夜半の空、星さへ雲に覆はれて、

れど、却て興も醒めうかと、わざと控へて居ました。今娘がいふ如く、御主人の御病氣、親子の者が御介抱も、旅宿なれば萬事心に任せず、何がなお慰と思へども、口重たき我々では埒明かぬ。正眞の旅は道連、かう打寄るも他生の縁、サア〳〵遠慮なしに何なりとも、お氣の霽るゝ咄しを頼む」「ア、旦那殿こりや迷惑、おらは咄は何にも知らぬに、オ、有るぞ〳〵、たつた一つ咄しましよ。昔々爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯しに」鎌「ア、これ〳〵、そりやあんまり、子供も知つた昔咄し、古い〳〵」鎌「サア古いによつて洗濯しまする、洗うても磨いても、新しうならぬ物は、寄る年と此顔の眞黒なは悉皆牛、もう寐たとよござりましよ」と、蒲團てんでに寐轉びて、咄し半へ亭主がによつこり、「ハア、こりや皆まだお休みなさらぬか、さらば行燈を取りましよかい、此儘置けば油代が十文出まする」鎌「オ、そりや合點ぢや、やつぱり置いたり。爰で一つ談合が有る、兩方兼ねた此行燈、其方も此方も勘定づく、何と三文、まけて貰ほかい」「ヘエ扨も細い虱の皮」「イヤおらが虱より、此蒲團はどうやらうぢ〳〵、千手觀音は居らぬかや」「ハテ勿體ない、順禮が觀音嫌うてよい物か、信有りや德有る奇特には、道中怪我の無い樣に、乗り移つてござりましよ」と、笑うて勝手に入りにけり。跡は互に旅草臥、子供の添乳肘枕、咄のあとも轉寐に、とろ〳〵寐入る折こそ有れ、村中をかけ廻る、歩行がによつと門口から、「御亭

まさるゝ御涙。「アレ聞いたかおよし、あなたも御亭様が無いといやい、そりや悲しいは尤ぢやが、生身は死身、合せ物は放れ物、何ぼ泣いても返らぬ事、さつぱりと諦めて、早う男を持たしやりませ。ハテさう無けりや我も人も、肝心の商賣が成りませぬ、夫でこつちも近い比、幸な者聟に取つたが、此およしが枕の取様がよい故か、何時とも無う帆柱立て、乘りまする押しまする、舟一巻ならござれ〳〵。そこでおらは一助り、大船に乘つた心、外に望は何にもないが、たつた一色、サアいづくの浦でもない物は金と化物、有る物は質の札と借錢、こいつも根繼でござります。見りやお前方はよい衆さうなが、何處元から何方へござる」と、問はれてお筆が取繕ひ、「サア我々は都を離れ、片山里から信濃路へ心ざし」「エヽ聞えた、善光寺参りぢやな」「ヲヽいかにもそれ〳〵、夫に付いて難儀な事は、是にござるお主様が俄の御病氣、お道理でも有ろ、ついに是まで道一里とお拾ひなされた事なければ、お瘻の出るも尤、わしらが足さへ草鞋に食れて」娘「ホヽ豆が出來たでござりましよ」爺「そりや針で突かしやりませ、惣體豆といふ物は、突くとじく〳〵汁が出まする」「アヽこれとつ様、ひよかすかと出放題な、何ぞいの」「イヤひよかすかぢやない、好うなる事をいうて進ぜる」「アレまだいの、オヽ笑止な人や」と袖覆へば、鉄「イヤ〳〵ちつとも苦しうない、最前から手前も出て、挨拶するも合點な

に、よい物進ぜて下さんした。これ〳〵あつか、ホヽ好いのぢや、アレ餘所のやゝ御覽じませ、大人しい事はいの」「オヽあのおつしやる事は、ようおとなしかろぞ、其わんぱくさ意地わるで、どうもかうも成るこつちやござりませぬ。お前のは色白に、美しい好いお子やの、お幾つでござります」「サアこのお子は三つなれど、年弱でござんすはい」「扨も、いや〳〵、そんなりや是と同い年、同じ三つと云ひながら、此坊主は二月生れで年强」「ホンニそれでか大柄にも有り、逞しい子でお仕合、見れば順禮さしやんすさうなが、奇特な事や、所はどこぞい」「アイ所は是から大方十二三里も下」「コリヤおよし、主の臍探る樣に、ぐづ〳〵した物の言ひやう、たつた一口、つい津の國の船頭ぢやというたがよいはい」「エヽ忙しない、ちつと人にも物言はせたがよいはいの。アヽ聞いて下さりませ、此樣に乳呑子を抱へ長旅を致しまするも、私が稚馴染、此子が爺は隨分達者な人で有つたが、ふと風の心地と病み付いたが定業やら、間も無く死なれて、今年がちやうど三年に當りますれど、何を供養施しも、内證の權は廻らず、西國は結構な事ぢやと聞けば、せめて足手を引いてなりと、夫の菩提を弔ひたさに、思ひ立つての順禮」と、語るを聞いて山吹御前、「あの子も三つ我子も三つ、爺親に別れたとは、果報拙なやいとしやなう、自とても殿御に離れ、便なき身の旅の空、世には似た事も有る物」と、身につ

早う」「オ、これとつ様、氣立たましい何ぞいの」「イヤ此飯ごりがさく／＼と洗うて貰うて、あすの出立の殘りを詰める、菜は茄子に大根を取交ぜ香物のこけら鮓、賴んで置こ」と諂はぬ、たつみあがりと頓狂聲、夫と言はねど紛れなき、舟乘とこそ知られたり。同じ浮世に憂き思ひ、人忍ぶ身はおのづから、茅にも心おく座敷、山吹御前は先達て、爰にやどりを假初も、ならはぬ旅に勞れ果て、御心地例ならねば、お傍離れぬ鎌田隼人、娘のお筆諸共に、勞はり介抱する中に、何の頑是もなき出す、駒若君のやんちや聲、襖一重に聞くも氣の毒、「アレおよし、あちらの旅人も子が有るさうなが、さつてもせがむは、わやくいふな、アレ騙してもすかしても、お怒りをると何處にも迷惑。ハア、なんぞ遣りたい物ぢやが、オ、夫よ、童すかしはこんな時、今跡で買うた大津繪、一枚やろ」と取出すを、槌松が摑んで放さばこそ、「厭ぢや／＼」と泣きわめく。「オ、こりや／＼破るなやい、エ、吝い坊主め、コリヤよう合點せい、此繪は座頭の坊が褌を、犬がくはへて引く所、こりや目が無うて面白ない、よその子に遣つてのけ、我にやこれ／＼衣著た、鬼の念佛嚙みくだく、撞木を持つて叩鉦、くわん／＼／＼、イヤくわんくわんくわん」と紛す中に、およしが襖押開けて、「コレ申しお隣の、お少いのがきつい泣きやう、是進ぜましよ」と指出せば、お筆が取つて押戴き、「是は／＼忝い、お前にも子達が有る

三井寺に札納め、爰かそこかとさし覗けば、亭主がかけ出て「コレ親仁様、お泊りなら脇ひら見まい、名代の清水屋、座敷が綺麗な木賃が安い、サアお這入り」と引き留むれば、「これ〳〵滅多に引つぱつて、著物破つて貰ふまい。なんぼ泊めたがりやつても、木賃を聞かにやぼか〳〵と這入らぬ親仁、サアいくらぢや、きり〳〵言うた」「ハイ定りは三十なれど、よい様にして泊めましよはい」「イヤよい様とはよい衆の事、おらはずんど貧乏な西國、道々も杓振つて、順禮に御報謝で、貰ひ溜の米も有れど、たつた今跡の石場で、蕎麥をしたゝか仕てやつたりや、腹袋に足が入つて、あすまで煮焚も何にもいらぬが、ナント二十宛で泊めぬかい」「ハアそりや安けれど、順禮衆の事ぢや物、儘よ負けましよ」「イヤ安うは無いぞや、錢の高いが合點か、しかけて遣へば五分四五厘利が有り過ぎよ。サアそんならおよし草鞋解け、サア坊上ろ、ヤアえい〳〵」と、襖隔てゝ次の間に、打寛いで、「扨歩いたは、けふは大道そちも草臥、おりや尚の事道下手で氣ばかりいらくら、船頭と籠は陸で埒の明かぬ物、やれしんどや腰痛や、ドレ其枕取つてたも。アヽやい〳〵コリヤ槌松よ、其襖開けん物ぢや、こはいぞ〳〵。コリヤ爰へ來い、ぢぢかんでやろ、エヽ穢い鼻垂では有るぞ。オヽあれ〳〵、又飯行李引出すはい、さりとは徒手の無いやつ。ヤほんに夫で思ひ出した、コレ〳〵宿の衆、どれぞちよつと賴んましよ、早う

受けつぎて、生先榮えましませ」と、諸羽の宮に人々は、暫く法施奉り、今辿り行く道芝も、先つ比木曾殿の、鞭打ち給ふ所ぞと、聞けば草木も外ならず、浮世なりけり世なりけり。きのふめでたき人だにも、けふは漂ふうたかたの、あはづが原の討死を、思ひやるさへ悲しやな、矢一つ來つてわが夫の、内兜に射付けしは、天の咎か武運の盡きか、つひに其手で馬上より、をちこちの土と成り給ふ、所はあれよあの雲の、下こそ君の最期場と、見るに付け語るに付け、袖は涙の春雨に、しをれ侘びつゝ山吹も、心地すぐれず見え給へば、立寄り勇め慰めて、いざさせ給へと御手を引く。見渡せば、春の日あしも走井や、ならはぬ旅に身も疲れ、世のうき事をゆふ嵐、さらさらさつと吹きくれば、褄も裔もひらひらひらひら、ひらひらひらひらと吹き分くる、追分過ぎて大津の宿、今宵は爰にかり枕、袖を片敷く旅宿り、つかれを晴らさせ給ひける。東路を上り下りの旅人も、二つと三つに追分や、大津に並ぶ旅籠屋の、棟門多き其中に、名高き關の清水屋が、とくより奥に客泊めて、料理拵へまな板の、音もてきてき亭主が氣配り、下女も男もそれぞれに、茶運ぶ風呂燒く人泊める、門賑はしきたそがれ時、「あらたふと、導き給へ觀世音」運ぶ歩みの順禮姿、背に國名をおひずるの、年は六十に色黑き、達者作りの老人が、娘と孫を打連れて、胸に掛けたるふだらくや、紀の路大和路打過ぎて、けふも暮れぬる鐘の聲、

お筆が背におゝさむこさむ、猿のべゝ借つて著しよ、借つて召したる若君の、危き所を遁れしも、まさるめでたき御運の強さ、亡き我がつまの種よ形見よ萱草、燒野の雉子夜の鶴、子を悲しまぬはなき物を、まして況んや人として、親の別れをしら糸の、ちすぢを分けし父君に、似たりや似たりいたいけ盛り、あれ／＼あれを見や、二つ連れたる雲井の雁、古郷へ歸る我々も、君の古郷へ歸れども、鴛鴦の片羽のとぼ／＼と、子に迷ひ行く小夜千鳥、つまも迷はん三つ瀬川、四つ塚東寺九重の、都の中はおのづから、傾く笠の打しをれ、今落人の身の上も、人に知られし白川の、水も淀みてあはだ山、あはれ父なき稚子を、すかせば肩にすや／＼と、轉寐入りの餘念なき。爰こそうばが懐と、所の名さへ有る物を、お乳も添乳もな泣きそ泣きそ、晝寐の夢は變らねど、かはる姿のアヽ恥かしや、轉寐がちなる我々に、色も有るかと袖袂、引き靡かせし日の岡の、戀の峠も越えわびて、（唄）いやといふのはナ浮世の習ひよさいな、底の心はホンニえ知らいでさいな、それがじよいなまじよいな。遙かに歌ふ聲々は、松を調ぶる春風か、それか有らぬか反響して、やう／＼跡をおいの身の、道におくれて鎌田隼人、娘が肩背休めんと、抱き取りたる駒若丸、「音せでお寢れよい殿、ねん／＼ねんねこせい、いとしい殿よ花やろ、花遣ろ／＼」「花一時と眺めても、君の命にくらべては、盛久しく若君も、父御の武勇を

ふ。「ハヽア重々深き御憐愍、忝し〳〵」と、かけ上つて甲兜を取りのくれば、思ひがけなき具足櫃より、ずつと出でたる娍千鳥、「ヤアそちは爰に何として」「サア是も母御様のお情、不義をした科で此箱に入れ糺明さす、其跡は隙を遣る、いきたい方へ連立つていきをれと、お慈悲深い御了簡」「何母人が、ハツアハヽヽ、有りがたや冥加なや、あだに思はゞ逆罰受けん、恐ろし〳〵。是より直に此源太が、恥辱を雪ぐ合戰の首途、お暇申し奉る」と、母の方を伏拜み〳〵、「おまめでござつて下さりませ」と、いふも盡きせぬ別れの涙、絞りかねたる袖の海、深き御恩を被りしは、身一つならぬ友千鳥、なく〳〵出でしが又立どまり、振返りては親と子の、果しなごりの憂き別れ、うき世にうき身かこつらん。

第三　道行君が後紐

捨つる身を、捨てぬほだしは子ゆゑの闇、空もあやなき曉の、髪も貌も宵の儘、世の憂辛さ悲しさを、言はぬ色なる山吹御前、月さへ西に落人の、桂の里の難儀より、知るべの方に一夜二夜、明し暮せど忍ぶ身は、都ぢかくも物うしと、けふ思ひ立つ俄旅、人目を恥づる取りなりは、身に巾もなき麻衣の、木曾路をさして行く道の、歩みぐるしく眞砂路を、よむばかりなる桂川、

け切付くる、さ知つたりと引つぱづし、かい潜る身のひねり、軍内が諸膝かきのめらす、隙を又切りかくる、平次が刀もひらりと外し、ひつ摑んでもんどり打たせ、二人を踏付け立つたるは、心地よくこそ見えにけれ。「ヤア平次、千鳥が事を根葉に持ち、兄に敵對ふ畜生め、今踏殺すは易けれど、惡い子とても捨てられぬと、母のお詞聞捨てられず助け置く。源太に代つて孝行に仕れ」とけん手に差上げ、くる〳〵とふり廻し、七八間打付ければ、辛き命を助かりて、跡をも見せず逼げて行く、「ヤア軍内、親共からの使なれば、倖もどうも殺されぬ、そこを源太が了簡して、殺してしまふ仕樣はりう〳〵これ見をれ。うぬが刀でうぬが首、ころりと落すは自業自得果、源太は殺さぬ手ばかり動く〳〵」と言ふより早く、首と胴との生別れ、親子の別れ、今一度、母の御目にいや〳〵〳〵、仰に隨ひ平家の戰ひ、四國九國の果までも、ぼつ詰め〳〵高名し、其時お顏を拜まんずと、思ひ諦め立出づる、うしろの障子さつと開く、音に驚きふり返れば、母はすつくと立ちながら、源太が方へは目もやらず、「四國九國の合戰も、素肌武者では手柄が成るまい。勘當した子に持つて行けと敎へはせぬが、賴朝卿より賜はりし、產衣の甲兜、誕生日の祝儀とて、飾らせて爰に有る。我物を取つて行くに、誰が否と言はうぞ、但しはいらぬか。主もない此鎧、早取り置け娺共、女共はどこにゐる、來いよ〳〵」と呼はり〳〵入り給

れて、源太様の御身が何處で立つ。あれ程むごう成された上は、まう勘忍して上げまして、下さりませい」とばかりにて、かつぱとふして泣き詫ぶる。「ヤア此母が采配、小癪な、そちが何知つて、コリャよう聞け、源太めがあのざまは、弟への見せしめ、あの恥を無念と思はゞ、西國へ攻下つて、平家を亡し手柄して、我君の御用に立たば、ナ勘當はせぬ、ナ平次、ナ心得たか、必ず手柄を待つてゐる、母が詞を忘るゝな」と、弟が事に言ひ倣して、兄をはげます詞のなぞ〳〵、とくより母の御慈悲とは、知る程重き源太が額、土に揩付け泣居たる。平次景高仕たり顔、「コリャ千鳥、なんぼ吠えても叶はぬ、是からは分別しかへ、泥坊めが事思ひ切り、おれが言ふ事聞きさへすりや、母へ願うて、コリャ奥樣ぢや、嬉しいか」と、背中撫けば、「エ、穢らはしい、聞きともない。憎まれ子世に憚ると、何所まではどかりなされうが、厭ぢや〳〵わしやいやぢや」「ヤアしぶとい女郎め」と、摑みかゝるを母押しのけ、「何ぢや千鳥と源太が狂うてゐる、エ、年より陳ねた徒者、こいつはおれが仕様が有る、源太めを追ひまくれ」と、千鳥を引立て奥に入る。「コリャ軍内、下部どもに言付け、きやつを早う捲し出せ」「イヤサお急きなさるゝな、母御の仰は兎も角も、某が存ずるは、コレかう〳〵」と、平次が耳に吹きこめば、「オ、さうぢやよい分別」と、二人白洲に飛びおり〳〵、聲をも掛けず拔打に、源太を目が

かいた人でなし、大小振いで阿呆拂ひ、手温い爺御の指圖より、きびしい母が仕置を見しよ。誰ぞ中間共が古布子持つてこい、早う〳〵」と呼ぶ聲に、あつと答へて平次景高、古綿袍提げ出で、「申し母人、此布子どうなさるゝ」「どうするとは知れた事、こいつめに著せかへて、門前からぼつ拂へ」「それこそ望む所よ」と、無法の主從立ちかゝり、手々に捩ぎ取る太刀烏帽子、敲き落されおつぼろ髮、素袍袴の帶紐も、引きしやなぐるやら引切るやら、上著中著の綾錦、古わんばうに著せ換へさせ、腰に食ひ入る繩帶しめ付け、「おれをさつきに投げをつた、禮は平次がお脛で言ふ」と、緣より下へ踏落し、「さつても氣味の好いざまの」と、一度にどつと打笑ふ。源太は變りし我姿の、恥も無念も忍び泣、母は我子を助けん爲、人前作る澁面顏、怒る擬勢も苦口も、詞と心は裏表、「命代りの勘當ぢやと、思うて勘忍してくれ」と、言ひたさつらさ泣きたるを、胸に包めど包まれぬ、悲しい色目覺られじと、「皆の者があのざま見て、をかしがるので母もをかしい、あんまり笑うて淚が出るハヽヽヽ」と高笑ひ、泣くよりも猶哀なり。千鳥はかくと聞くよりも、在るにも在られず走り出で、變りし源太が憂き姿、二目とも見も分かず、「お胴慾な母御樣、勝つも負けるも軍の習ひ、誰しもかうした不覺は有る物、父御樣から殺せと有るを、お詫言は成されいで、あはう拂ひの勘當のと、是が本の父打母打、二人の親御に憎ま

來の子を、兄弟分に思召され、源の氏を賜はり、源太と名のらせ、源氏嫡流の御召有る、產衣といふ鎧まで下された烏帽子子、爰をよう合點しや、今命を捨てゝはな、產の親への孝行は立たうが、烏帽子親の我君へは、どの命で御恩を送る、主なり親なり、忠孝が立たぬとは、爰の事を言ふはいの」「イヤ其御恩を忘れは致さぬ、烏帽子親とは憚あり、主從は三世の契、生きかはり死にかはり、君に仕へる侍の魂」「ヤア情ない、三世の契のお主には、未來でも逢はれうが、親子は一世、此世ばかりで復逢はれぬ。母を置いて死なうといふ子も胴慾、殺せと書いて送られし連合は尙胴慾、惡い子でさへ捨てかぬるは親の因果、まして健氣な子でないか、蟲けらの命でさへ、科ない者は殺されぬに、塵芥か何ぞのやうに、心易そに捨てよとは、父御ばかりの子かいなう、母がためにも子ぢや物を、問談合に及びもせず、軍內を檢使に遣ると、一徹短慮な此文體、見るも恨めし忌まゝゝし」と、ずんゝゝに引裂きゝゝ、口に含んで嚙みしだき、夫を恨み子を歎ち、わつと叫び入り給ふ、母の慈悲心肝に銘じ、六根五臟を搾り出す、淚もあつき恩愛の、親子の歎ぞ道理なる。橫須賀軍內憚なくつゝ通り、「親旦那の御狀御覽の上は、申すに及ばぬ某は檢使の役、ナウ源太殿腹召され」と、苦り切つて言放せば、「オヽ覺悟は豫て極めし」と、身づくろひする所を、母は立寄り取つて伏せ、「ヤアどこへ、腹とはそりや成らぬ。恥

と、御赦もなき的を射損じ、其矢が計らず大將の、御白旗に當りしは、味方の不吉父の不運、申譯立ちがたく、切腹に極りしを、佐々木四郎が情によつて、君の御前を云直し、父の命を助けたり。其場に某在り合さず、跡にてかくと承り、佐々木に逢うて一禮をと、思ふ間もなくはや合戰、宇治川の先陣は我も人も望む所、有るが中にも川を渡すは佐々木と某、なむ三寶、父の爲には恩有る佐々木、此人に乘勝つては、侍の道立たずと、心一つに了簡定め、先陣を彼に讓り、手柄させしは情の返禮、後を取りし某は、元來覺悟の上なれば、恥も命もちつとも厭はず、先陣の高名にをさ〳〵劣らぬ孝行の、高名と存ずれど、白地申されぬは、武士と〳〵の誠の情、父の爲に捨つる命、お暇申す母上」と、指添に手を掛くれば、「やれ待て源太、それ程知れた身の云譯、父御へはなぜ云はぬ」「いや云譯を仕れば、佐々木が手柄を無にする道理、據なく母人へ、申上げしも本意ならず、死後とても此事は、御沙汰なされて下さるな」「いや〳〵夫は若氣の了簡、今死んでは忠孝に成らぬぞよ」「こは仰とも覺えず、義を知つて相果つれば、忠も立ち孝も立つ」「いや立たぬ、なぜといへ、梶原の家は坂東の八平氏、其氏を名に表はす平三殿の惣領のそちなれば、名をば平太といふべきを、源太と付けしは、恭くも征夷大將軍源の頼朝卿、石橋山の伏木隱れ、危き御命助かられし、平三殿を命の親と宣ひて、勿體なくも家

うぢ〳〵めさるゝ其隙に、さつと佐々木が打渡つて、宇多の天皇九代の後胤、近江源氏の嫡流佐々木四郎高綱、宇治川の先陣なりと呼はりしは、天晴手柄こなたは大恥、微塵違は有るまいが」と、倍にかゝつて恥ぢしむれば、源太は默していらへなし。傍からハア〳〵〳〵と、あせる許に女氣の、何とせんかた泣く千鳥、平次景高せゝら笑ひ、「どいつもこいつも吠面、ハテ氣味のよい事の。コレ母者人、惣領の恥かき殿を、仕舞へというて來ませうがの、其狀おれにも見せさつしやれ」と、差出す腕を擲きのけ、「コリヤ此文は母への名宛、何が書いて有らうと儘、そちには見せぬ、母を差置き出しやばるな」と、呵る聲さへおろ〳〵淚、又繰返す文體に、心を痛めおはします。「エヽ、子に甘いも事に依る、生けて置く程親兄弟の面汚し、コレ爰な腰拔殿、せめては親の催促待たず、てこねうと思ふ氣は無いか、夫も成るまい。世間は切腹したにして、其首刎ねて埒明けう」と、ずはと拔いて切りかゝる、刀の鍔際むずと取り、「兄親に對し尾籠の振廻、腰拔の手並腰骨に覺えよ」と、引つかづいてどうど投付け、起しも立てず刀の背打、りうりうはツしとぶちのめせば、あ痛〳〵と顏蹙め、這ふ〳〵逃げてぞ入りにける。「コリヤ〳〵千鳥、源太が母へ申上ぐる仔細有り、次へ參れ」と人を除け、「かく申さば、景季が命惜むに似たれども、ゆめ〳〵助かる所存にあらず。此度宇治の合戰前、父にて候ふ平三殿、軍の勝負を試みん

心に似たるぞや、おぼろ〳〵と白玉の、霞の隙より馳來るは、佐々木四郎高綱、馬は劣らぬ池嘡磨墨、二騎相並んでざんぶ〳〵と打入るゝ」「コレ兄ぢや人、是までは咄しもならう、是から先が勝負のかんもん、自身には云ひにくかろ。兄弟のよしみ、平次が代つて咄さう」と、いふに千鳥が聞きかねて、「兄御樣の高名咄、横合から腰折らずと、默つて聞いて居さしやんせ」「ヤアいやらしい方持つな、我には構はぬ。今の跡はかうで有ろ、佐々木は聞ゆる剛の者、兄君は知れたぬるま殿、つひに佐々木に乘負けて」千「いや〳〵〳〵、何のあなたが負け給はん、知らぬながら千鳥が推量、敵は川を渡さじと、水底に大綱小綱十文字に引き渡し、駒の足を惱せしに、頓智の源太景季樣、太刀をするりと拔き給ひ、大綱小綱切り流し〳〵、なされたでござんせう」「オヽ千鳥がいふに違ひなく、綱を殘らず切拂ひ、佐々木が乘つたる池嘡に、一段ばかり乘り勝つたり」「アレ聞き給へ負けはなされぬ。アヽ嬉しや、夫聞いて痞が下りた」と悅べば、平次頭を打振つて、「某佐々木に成り代り、一問答仕らん。其時高綱大音上げ、コレ〳〵景季馬の腹帶が延び候、鞍反されて怪我有るなと、聲を掛けたで有らうがの」「ホヽ委しくも能く知つたり、某はつと心付き、弓の弦を口にくはへ、馬の腹帶に諸手をかけ、引上げ搖上げしつかと締める」「コレ〳〵夫がうつかり、延びぬ腹帶を延びたといふは、こなたの鼻毛を見ぬいた計略、

し文箱、是見よ封もまだ切らず、心元なや披き見ん」と蓋押明くる其隙に、千鳥は戀しい殿御の顔、守りつめても親子の中、包む戀路の遣る瀬なさ、「申し源太樣、常さへ旅は憂き物に、たんと御苦勞なされしやら、お顔の細つた事はいな、お氣もじ惡うはござりませぬか」「ホヽしをらしい、そちが問ふで氣が付いた、身が發足の時分には、弟平次病氣で有つたが、本復をしめされたか」「アイナ本復やら立腹やら、達者過ぎて迷惑を致します」「夫は一段、どこにお居やる、對面したい」「イヤ兄者人、平次是に罷在る」と、一間の内よりのさばり出で、「先何か差措いて聞きたいは、宇治川の先陣、見事な高名遊ばしたでござらうの」「オヽ此源太が身に取つては、過分なる今度の高名」「何高名とは、コリヤ珍らしい、お咄しなされ承らう」「ホヽ語つて聞さん承れ、さる程に義經の御勢は都合二萬五千餘騎、山城國宇治の郡に押寄する、比は睦月の末つかた、四方の山々雪解けして、水倍增りし彼の大河、宇治橋の中の間引き放し、向ふの岸には亂杭逆茂木透間もなく、甲うたる武者五六千、川を渡さば射落さんと、鏃を揃へて待ちかけたり。かゝる時節に渡さずば、いつか譽を顯はさんと、我君より賜はつたる磨墨と云ふ名馬に、泥障はづしてゆらりと打乘り、名にたちばなの小嶋が崎より、逸散に驅け出せば、續いて跡に武者一騎、春の朝の川風に、誘ふ轡の音はりん〳〵、誰なるらんと見返れば、古歌の

御果報、今度宇治川の先陣、佐々木四郎に高名せられ、源太殿は後れを取り、京中の物笑ひ、何が手ひどい親旦那、御機嫌さん〴〵、京で殺せば恥の上塗、鎌倉で腹切らせ、汝を遣るは檢使同然、必ず手ぬるく致すなと、きつと仰付けられた。惣領殿を仕廻うてやれば、御家督は指詰めお前、めでたうは思さぬか」「めでたい〳〵、結構な吉左右能う知らせた、委しい事は奥で聞かう、先づ其文箱を母人へ」と、打連れてこそ入りにける。時もあらせず表の方、「若旦那の御歸國」とさゞめく聲々、梶原源太景季、鎌倉一の風流男、戰場より立歸る、烏帽子の掛緒古實を正し、大紋の袖たぶやかに、座敷に通れば、「母の延壽、「何源太が歸りしか、いづらや〳〵」と立出で給ひ、「ナウ源太、頼朝卿の御運つよく、木曾殿を亡し給ふ、範頼義經兩大將を初め參らせ、誰々も恙なしと聞きつるが、顏を見て落付きました」「仰のごとく木曾の狼藉早速に切りしづめ、押續いて西國表、平家の大敵攻滅し、法皇の宸襟を休め奉らんと、攻支度の評定取り取り、父にも益御勇健、先は變らぬ母人の御有樣、拜し申して祝著」と、謹しんで述べければ、「いやとよ源太、都は未軍なかば、そなた一人歸されしは心得ず、父御の仰は聞かざるか」「いや何とも承らず、鎌倉へ立歸り、子細は母に尋ねよと、仰も辭みがたければ、ぜひに及ばず罷歸る。母人の御方へは、いかゞ申し參りしやらん、覺束なし」と窺へば、「オヽ、軍内が渡せ

さすれば親の望も叶はず、爰をよう聞分けて」「ヤアだまれ千鳥、赦しが出ねば隨はれぬといふ者が、兄源太とはなぜ寢た」「いやわたしは」「いやとは何處へ、たつた今儕が口から、よい事には寸善尺魔と、ぬかさぬ先から知つてはゐれど、言ひ出しては物が無い、ハテ儕さへ應と言や、兄の分けでも戴く合點。かう底を打割るからは、いやとは言はさぬ、手も足も引つくゝつて、無理行りに抱いて寢る。サア應といふか否というてくゝらるゝか、どうぢや〳〵」と肩口とらへ、手詰に成つて動さねば、「コレ無體な事なさるゝと、平次樣の病は嘘、作病でござりますと、大きな聲で言ひますぞえ」「夫いうてたまる物か」「言ふならこゝ放して」「放しては戀が叶はぬ」「そんなりや言ひます」「いや云はさぬ」と、口に手を當てせり合ふ所へ、「都より急用有つて横須賀軍內、只今下著」と打通れば、平次悔り、「邪魔な所へ」と、うろ付く隙をそつと拔け、千鳥は奥へ逃げて行く。景高居直り、「ヤア軍內、急用とは氣遣はし、樣子いかに」と尋ぬれば、「さん候ふ、御惣領の源太殿、鎌倉へ御返しなさるゝ其儀に付いて、奥樣へ親旦那より御內意の此文箱、先へ參つてお渡し申せ、畏つたと急ぎの道中、川々の水に隙取つて漸只今、源太殿にも追付けお著」「何ぢや兄君が戻る、エ、夫では此方の工面が違ふ、何かに付けて面倒いわろ、何の爲に歸さるゝ、そちや知らぬか」「成程知つて居りまする、其樣子はお前の

說かるゝ其つらさ、わたしは兄御の源太樣にと、さう言はれぬも日比の氣質、こんな氣びらい聞すが否やたまらぬ〳〵、かんまへて沙汰なしに」と、咄の中の間の襖、そつと押明け病の床より、立出づる梶原平次景高、一重帶に大脇差、伊達紙子の大廣袖を打ちかけ、「ヤアあた喧しい女郎さいめら、母人の伽はせないで何をほざく、奥へ失う」ときめ付けられ、あいと一度に立つて行く。「コリヤ〳〵千鳥、そちばかりはこゝに居い」「いや私もお袋樣の傍へ」「と云うて外さうてな、そりや成らぬ。願うても無い上首尾、サアこい寢間へ」と手を取れば振りはなし、「お前には御病氣故、親御樣のお供も成されず、お留守に殘つて御養生の最中、夫にマアお寢間へとは、お傍に居るさへわたしや怖い」「オヽ、病人とは不粹な、藥呑むは假令の見せかけ、鼻も引かぬ達者な平次」「フンすりや煩ひは成されぬか」「オヽ噓ぢや」「そりやなぜに」「なぜにとは餘所餘所しい、そちをおれが手に入れうで、邪魔なわろ達京へ登し、甘い留守事せうでな、作兵衞と出かけた心中男、君よ憎うは有るまいがな」「サイナ、夫程までわたしが事、思召して下さりまするを、忝いと言はれぬは、京に居られますとゝ樣は、鎌田隼人淸次と申して、源氏譜代の家來筋、賴朝樣に歸參の望、御出頭の此お家、御奉公致しまするも、折もあらば右の願、申上げたい下心、お袋樣の赦しもないに、お前の仰に隨へば、いたづら者とお隙の出るは定の物、

な、家は碎かれ家賃は取れず。エヽ儘よ、百貫の方に猿一疋、こいつめに著物きせ、爰をさるとは秀句ちやの、さるとてはよう仕をつた、さるてんがうとは思はれぬ。儕楊枝屋め、力こぶ楊枝出さば出せ、家賃を取らで置くべきか」と、跡を慕うて急ぎ行く。げに武士の習ひとて、夫は跡の軍場に、妻は東の留主住居、梶原平三景時が屋敷には、嫡子源太景季が誕生日の祝ひとて、上段の床に兜鎧を飾り立て、敵にかちんの備へ物、御神酒の三方熨斗昆布、取り〴〵運ぶ其中に、千鳥といふは鎌田隼人清次が乙娘、親の出世の便にと、望有る身の宮仕へ、友朋輩にも憎まれぬ、顔容より心まで、愛敬有つてかはいらし。「サア〳〵奥様の云付の通り、お備物も残らず揃うた。此障子をかうしやんと立て切るとまう仕廻、ア、嬉しや」と云ひければ、「オ、そなたは取分け嬉しい筈、何がな御用聞きたがりやる。若旦那の誕生日、都の軍も勝ちやげな、どうかかうかとお案じなされた母御様より、百增倍心がいそ〳〵千鳥殿」「ハテ此お館に奉公する身、嬉しいにかはりはない」「イヤかはりの有る證據云ひましよ、若旦那のお立ちの時、長い別れに成らぬ樣に、めでたう凱陣遊ばし、お顔見せて下さんせと、涙片手に抱付きやつたを見てゐるに、隱すが憎い、擽つて白状さしよ」と立ちかゝれば、「なう誤つた、こらへて下され、心安い朋輩中、隱したには譯が有る。よい事には寸善尺魔と、弟御の平次景高樣、此千鳥に惚れたとて、口

情なや渡さじ」と、爭ふお筆が手をもぎ放し、若君を奪ひ取り、「偖も共に」といふ聲に、「なう恐ろしやお助け有れ」と、山吹御前の御手を取り、躓けつ轉びつ落ちて行く。「やれ〳〵嬉しや、家主に難儀も掛らず、お手に入つておめでたい。ちつぽけな形をして結構な物著て居る」と、いふに番場も心付き、「こいつごねたか、しやち張り返つて生干の樣な小倅」と、挑燈取寄せとつくと見、「ヤア駒若ぢやないこりや猿松、店晒しで恥さらしたにつくい浪人、踏ん込んでぶち殺せ」と、一度にどし込む門口の、小脇に隼人は隱れゐて、捕人を遣り越し入りかはり、ずつと出て表の戸、外より引立て鎹手早く海老錠おろす。內には手々に疊を上げ簀子の下から長持の、底まで敲けど、「こりやをらぬ、拔道はなし、ム、扨は門へ」と引返す、表の戸口は外から立切、忠太主從家主交り、「コリヤどうぢや〳〵」と、うろ〳〵うろたへ、「爰明けよ」と、內から敲く門の戸の、外に集人が心地よく、「コレ家主、家賃せがむが面倒さに、家を明けて今行くぞ、楊枝屋が猿智慧は、偖等に置みやげ、若君は爰に抱いてゐる」と、內懐よりお顏を出し、「御運强きにこやか顏、見せたけれどもマア成らぬ、ゆるりとそこにけつかれ」と、山吹御前の御跡慕ひ、一散に落ちて行く。「ヤア耄め遁すな」と、番場主從聲々に、門の戸ぶち破り店ふみ碎き、いづくまでもと追つかくる。跡には家主口あんごり、「コリヤさゝぼうさに仕をつた

を渡しましよ。とてもの事に斯う成されて下されぬか」「イヤかうとは細言、願ひ有らば早巻き出せ」「アノ物でござります、假初にも娘が主人、取つて出しては此頬が世間へ出されぬ。私も立ち何れもも立つ了簡は、何か無しに此處には置かれぬ、出て行けと追出します。皆は表に隱れてござつて、此内を出る所、彼若君を引つたくつて、女にはお構ひ有るまい、すりや娘も助かる、何處も彼處もよい様に、御了簡頼入る」と手をつけば、忠太默き、「夫程の儀は宥免をしてくれう、かくまうた者ども早う出せ。家來どもは挑燈片寄せ物音すな」と、其身も小陰に立ち忍ぶ。集人は悦び内に入り、又呼いて親子が談合、わざと表へ聞かする大聲、「ヤイ娘、親を充に思うてと吟味が強い、背中に腹は換へられぬ、主人の供してとつとと失せう」「エヽとゝ様そりや聞えぬ、他人でも義理は知る、娘の主人を出て行けとは、胴欲な事ばかり」と、聲には泣けど目に泣かぬ、親子が狂言表には、すは出るかと待受くる、番場忠太が腕まくり、内には集人が心付き、笠取つてやり杖渡し、「なんぼ吠えても叶はぬ〳〵、出ていきをれ」と、言うては旅の用意の油單、渡しては「ヤレ失せい」と、いうては煙管たばこまで、残る方なく取持たせ、「あれ〳〵しぶとい吠面」と、二人を門へ突き出せば、待ちに待つたる番場忠太、山吹御前を引つ捕へ、「ヤこいつは手振り、次の女郎が抱いてをる、此悴め」と掻い摑む。「こは

う寐てゐる所を誰ぢやいの、用が有るなら明朝ござれ」と、寢覺の體にもてなせば、「いやおれぢや家主ぢや」「オヽ其の家主合點ぢや、夜夜半まで家賃の催促、夜が明け次第誂の楊枝先へ渡し、錢受取つて急度濟す、起きるのが大さうな、明日の事に」と、云ひつゝそつと指足して、戸口の隙間を窺ひ見れば、表に捕手の荒者共、すは打入らん氣相なり。門の戸猶も打ちたゝく。「なむ三寶あの大勢、外に落ちる道もなし、とやせんかくや」と胸も心も砕くるばかり、「オヽ夫よく〳〵よき思案」と、娘が耳に口さし寄せ、「若君のお小袖を、コリヤかうしてな、其道はかう〳〵〳〵」と、知らすれば打默き、破屏風引立てゝ、若君御臺もろともに、身拵へする其中に、隼人は戸を明け、「お家主何事でござります」と、ぬつと出づれば、「それ」とかけ聲番場が家來、十手ふり上げおつ取巻く。「ア、これ〳〵〳〵聊爾なされな」「ヤア聊爾とはのぶといやつ、木曾が女房小悴圍まうたに紛なく、主人梶原の下知を受け、番場忠太が捕りに來た。尋常に渡せばよし、さなくば擲つてぶち据ゆる」家主「コレ浪人殿まう叶はぬ、圍まうた子をあなたへ渡せば御褒美を下さる、意地張らるゝと楊枝の様な其腕が、背中へ廻つて青細引、家主の過怠にそなたの飯を運ばにやならぬ。家賃取らぬ其上に、さう成つては家主滅却、サア早う渡されい」と、齒の根も合はぬ震ひ聲。「いや家主の雑儀より、指當つて此身が可愛い、若君

涙。「ア、勿體ない、私がとつ様に何お禮」「オヽ娘よう言うた、元來某も源氏の譜代、野間の内海にて相果てし、鎌田兵衛政清が弟、鎌田隼人清次と申す者、子細有つて兄政清が不興を受け、義朝卿の御先途も見屆けず、本意を失ふ瘦浪人、古主の源氏へ歸參の望、二人有る我娘、姉のお筆を御前へ指上げ、千鳥といふ姉を鎌倉へ遣はし、出頭の梶原家へ奉公さすも、歸參の便と存ぜし所に、思ひも寄らぬ源氏と源氏の御軍、指當る姉が御主人、見捨てゝ出世の望は致さぬ、年こそ寄つたれ、心一ぱいお力に成り申さん。ヤア夫に付き、木曾殿の御内に四天王の隨一と呼ばれし樋口次郎兼光、討死との沙汰もなし、存命でゐるならば、御臺若君引受けて、世話致すべき樋口が安否、お聞き及びなされずや」「さればいの、樋口次郎は多田藏人を攻めんとて、河内の城へ向ひしが、其後はいなせも聞かず、世に連れる人心、頼みに思ひし樋口にさへ、見捨てられたる親子の者、自が身は厭はぬ、何とぞ若を守り育て、二度世にも在らせて下され、頼むは隼人一人ぞ」と、又泣き沈む御風情、お筆親子も諸共に、絞りかねたる袖袂。げにや至つて悲しきには腸を斷つといふ、猿の楊枝や曲者ぞと、梶原が郎等番場忠太、家主に案内させ、聞耳立つる表はひそ〳〵、内には忍ぶ泣いじやくり、扨こそ知れたと打頷き、門の戸荒く打敲く。隼人驚き是は又家主、這入らせては事やかましと、欠伸交りの聲しはぶき、「熟

たひしすりや、店が損ねて家主の迷惑、エヽ此猿めが守し居るで、賣れぬ楊枝も此奴も内へ取り取り、上店下店上げて、そこで鎌門の戸しめて、家賃の夜なべ精出そぞや」「合點でござります」「お娘の事も」「サア合點、ようお出でなされました。家賃も娘も來次第に、こちから御左右致しませう、お出でには及ばぬ」と、門送して家主が、内へはひるを能く見屆け、立歸つて締むる門の戸の、干破ふし穴釘穴より、若しも覗く人もやと、筵立てかけ古暖簾、店の道具で取繕ひ、「サア是で覗く氣遣ひない、嘸お氣詰り御窮屈」と、長持の蓋明ければ、いたはしや山吹御前、駒若君を抱き參らせ、お筆諸共出で給へば、引さがつて頭を下げ、「移りかはる世の習とは申しながら、朝日將軍の御臺若君、かゝる埴生に隱れ忍び、日影もさゝぬ櫃の中、若君のおとなしう、出たいともおつしやれず、むづかりも成されず、よう御堪忍遊ばした、お氣晴しにハア、何ぞお慰、オヽ夫よ、店守の此の猿、健なにあやかりおはしませ、まさるめでたい御壽命」と、祝ひ申して指出せば、いたいけ顏のにこやかに、猿の頭を叩いつ撫でつ、御機嫌よげに見えければ、山吹御前の御悅び、「何から禮をいはうやら、譜代でも無い主從、お筆に連れて親御まで、いかい世話に成りまする。義仲樣御最期と聞くより、同じ道にと思ひしが、遺言も有り此若を、捨てゝも死なれぬ身のつらさ、思ひやつて」とばかりにて、跡は盡きせぬ御

御遠慮迷惑、御懇意の上お咄とは先づ耳寄、早う聞きたう存じます」「ムウ其氣なら咄しませう、浪人殿にはよい娘持たれて、木曾殿へ奉公ぢやと聞いてゐる。此間の騒動、木曾殿も死にめしたりやお娘は浪人、成らぬ身代に口が殖えては彌行くまい。幸とおれが知つた大金持、器量の好いおてかを欲しがる、捨金の廿両や卅両は此家主が受合、危氣もなう家賃も取れる、重一打出した仕合と、來て見るも充が有る。夕べ八つ過、此處な表を頻に敲き、其跡は内へ這入り、咄したは女の聲と、相借屋の者が知らしたで、扨はお娘と來て見れば、何時も變らぬ古長持と古親仁、破屏風缺竈、鍋洗うて待つてゐるに戻らぬの」「オヽ御存知の上は隱すに及ばぬ、成程奉公致させ置いた木曾殿の沒落に付き、娘が事案じぬでもござらぬ。さりながら軍の法で、女子には指もさゝぬ由、又指す奴が有つても、指されて居る樣な鈍なやつでもござらぬ。親の内は知れて有る此の桂の里、遲いか早いか戻りませう。夕べ門を叩いたは、夜通參りの愛宕の下向、又隣の兩換店と取違へ、こちの戸を割れる程敲く、何ぢやと表明けたれば、錢が欲しいといふた故、おれもほしいと云ひ返し、笑うて仕廻うた」といひければ、「ムヽ夫で聞えた、談合は娘の顏見てから、コレ手に取らぬ咄し充にして、仕事後れて家賃待てといふまいぞ。咄す内に日も暮れた、店の仕廻手傳はう」「夫はお慮外」「慮外ぢやおじやらぬ、一人してぐわ

蝶花形、出合うた敵は三々九度、むら〳〵ぱつと迯げちつたり。猶も進むを引止め、「さのみ長追長柄の銚子、返せ戻せは無益ぞ」と、諌る駒に小角を入れ、時にあふみの船盛や、乗りしづめたる義盛が、二染のひれに相生の、松の榮やえいこの〳〵、〳〵〳〵、この壽をよろ昆布、敵に勝栗のつし熨斗、つれて陣所へ歸りける。

第二

鷹は水に入つて藝なく、鵜は山に在つて能なし、筋目有る侍も、世事には疎き町住居、削るよじさへ細もとで、しんく黒もじ身過ぎ楊枝、商賣磨きやうじの看板、猿も食はねど高楊枝、浪人とこそ知られたれ。此家の家主門口から、「暮れるまで精の出るは、急な誂物でござるか」「コリヤお家主樣、けふは何事が起つてやら、ちよこ〳〵お出、ムヽ聞えた、晦日前なりや家賃の催促、私も油斷は致さぬ、此楊枝仕立てゝ先へ遣れば、其價で家賃は野々山、跡の月の殘りも、受取り次第上げませう」「いや催促ばかりに來るでもおぢやらぬ。楊枝ばかり削つては埒の明かぬ身代、取付きから知つてゐる馴染のそなた、はかの行かぬ世話が笑止さに、思ひ付いた事も有り、咄して見たさ、來事は來ても以前が侍、麁相な事は云ひ出されぬ」「是は〳〵

れば、いかう充の違ふ事」とぶつつけば、「何さ〳〵、義經が爰での我儘は、鳥無い里の蝙蝠、追付け鎌倉殿の御前、見せ付ける所で見せ付ける、何奴らも覺えて居よ」と睨め廻し、次郎を引具し立出づれば、巴すつくと立上り、「待つた〳〵井上次郎、君御存命の内よりも、鎌倉へ内通とはたつた今聞いた。いかいお世話で有つたの、夫はいうて詮ない恨、指當る兄の敵主君の仇、まう臨終に間は無い、旦那寺へ人遣らんせ」と、曲る詞も井上が、頭の上に雷の、落ちかゝるかと凄じく、「ナウ梶原殿、弓矢取る身は相互、今の命をお助け」と、脚腰立たず身もわなわな、賴む人より賴まるゝ、梶原も底氣味惡く、「人遣ひがなくば、旦那寺へは身が行かう」と、云捨てゝ駈け出せば、續いて遁ぐる井上が、綿がみ摑んで引戻され、「扨は道が違うさうな、どちらへ行ても大事ない」と遁出す、先には和田が仁王立、左義盛右巴、一つ巴にくるくると、ぢり〳〵廻する井上次郎、「命お助け〳〵」と、土に平伏し手を合せ、泣くより外の事ぞなき。「エ、腑甲斐なき業さらし、主君の讎、兄の敵には不足ながら」と引きよせて、首ねぢ切らんとせし所へ、井上が郎等ども、主の命を助けんと、一座に拔きつれ切つてかゝる。「オオしをらしや、欲しがる主を得させん」と、鎧の上帶かい摑み、落花微塵に投げちらし、群りかゝるを引き寄せ〳〵、せめては是で色直し、追付け和田と祝言の、印今打つ人礫、身輕き働き

仲の身の上、嚏一つ仕られたまで、犬に成つて告知せし某、是ばかりでも、捨てゝも一ヶ國や二ヶ國が物は有る。其上に又兼平が首取つたる今日の手柄、羨しうてのわんざんならば、此首御邊におまするぞ、勳功解狀に預られよ」と、首取つて投出せば、事を破らぬ重忠も、こらへるにこらへかね、「脩等如きを手に懸くるは、大人氣なしと思へども、弓箭を汚す人非人、微塵になさん」と飛びかゝる。義經暫しと制し給ひ、「井上次郎が忠節は此度初ならず、梶原平三が取次を以て、豫て鎌倉殿へ歸伏せしと申す上は、萬事鎌倉にて鎌倉殿の御裁許有るべし、夫まで互の論は無益、心得たるか。義盛は願ひの儘、巴を汝に預くるぞ。さりながら、平產の子男子ならば朝廷の恐、義仲の名を包み、汝が子とし、和田の家を相續すべし、巴が縛とく〳〵」と、搦めらるゝは義經の、情の詞ばかりにて、繩も解かるゝ氣も溶くる、朝日將軍義仲の、名を象りて生子を、朝比奈三郎義秀と、古今に秀でし兵は、此胎内の子なりけり。「いざや人人、都に入りて勝軍の御奏聞せん。エヽ是非もなき浮世の習ひ、義仲の首今井が首、土中に埋み跡弔はとやと思へども、院の御氣色計りがたし、檢非違使の手に渡さでは叶ふまじ」と、秩父佐々木に取持たせ、道を早めて走非の、軍の備へ九重の、都に蹄をとばせらる。梶原井上手持なく顏見合せ、「アヽ梶原殿、義經と云ひ秩父といひ、大抵では嚙まれぬ相手、鎌倉殿もあれな

にかきくれて居たりしが、御前に向ひ、「ハァ、遉源氏の御血筋とて、驚き入つたる木曾殿の御心底、然れば此女に掛るべき御疑も科もなし。殊に木曾殿の御胤を懐胎せしと傳へ聞く、義盛賜はつて婦妻に具せんと申すはいかゞ、相筵は踏まずとも、御子誕生有るまでは、我等に預け下さるべし」と、云はせも立てず梶原平三、「ヤァ心得ぬ義盛の願、どう書いて有らうがどう云はうが皆嘘々、謀叛人に極つた木曾義仲、其胤を孕んだ女を預り、子を産ませて何にせらるゝ、但しは其子を守立てゝ、又謀叛を興す氣か、夫はともかうも鎌倉殿の御計らひ、先づ差當る拙者が取次の井上次郎、兼平が首取つたる莫大の高名、御褒美の御詞下さるべし」と、遮つて言上すれば、秩父の重忠、「イヤ梶原殿、義經公は惣軍の御大將、細かなる事はしろし召さず。今井四郎兼平は、目前木曾殿討たれ給ひぬと、呼はる聲を聞きしより、太刀を銜へつゝ逆樣に、落ちて貫かれ死したる事、誰知らぬ者もなし。夫を何ぞや井上次郎が高名とは、死首取つたるが高名か、頼まれての取持か、自分の贔屓か。よし夫はとも有れ、重恩の主の討死を餘所に見捨て、命惜しさの降參、僞を文る表裏の武士、取次の梶原殿まで心底疑はし、返答あらば承らん」と、一口にやり込むれば、井上次郎進み出で、「ヤァ淺々しき重忠の仰、主人の討死を見て降參する樣な井上にては候はず、一兩年以前より梶原殿を頼み、頼朝公へ心を寄せ、義

扇を受け、一方ならぬ冥途の御無念、あはれ此身がまゝならば、義經殿、飛びかゝつて恨言はん物、エヽ口惜しや悲しや」と、立つて見居て見身悶えし、こぼるゝ涙を押へんと、すれども繩の強ければ、頭を膝に摺り當てゝ、前後不覺に泣きゐたる。高綱仰を承り、御首に立寄つて、甲を取れば鉢受の、絹に卷添へし一通有り、取出し捧ぐれば、つくぐ〵御覽じ仰天有り、「是見よ方々、巴が申すにちつとも違はず、三種の神器を取りかへさん爲の計略、思ひ設けぬ朝敵に成つたる悔の條々、神明佛陀を誓にかけ、逐一に書殘されたり。扨は反逆にては無かりしな、鎌倉殿こそ御心付かずとも、討手を蒙る此義經、尾張三河の間に軍兵を留め置き、一應も再應も、使を以て事の品を問明らめ、反逆謀叛に極らば、其後こそ討つべきに、其氣の付かざる我無調法、扇を以て首を汚せし我誤、御詫び申す赦してたべ」と座を立つて、義仲の首取上げ、「義經が名はしやな王丸、貴殿の名は駒王丸、鞍馬と木曾の住所はかはれども、再び源氏の世になさんと、恥を凌ぎ憂き目を見し、心遣ひは一つにて、平家を西海へぼつ下せし、源氏再興の軍初の大功は、貴殿こそ立てられし、其功を空しく、謀反人の惡名を取つて果て給ひし、最期の遺恨を翻し、弓矢擁護の神と成り、源氏の武運を添へ給へ」と、押戴きく〵、悲歎の涙に暮れ給へば、伺公の武士を初として、かけ構ひなき下部まで、感涙催すばかりなり。和田も哀

御感斜ならず、雲の末海の果までも、追詰め平家を討亡し、三種の神器を事故なく、都へ還し参らせよとの宣旨、畏つてお請申させ給へども、安からぬ一大事、三種の神器を取り返さんと、直攻に攻めるならば、身の置所ないまゝに、唐高麗へも迯渡らば、勿體なや神より傳はる三種の御寶、永く異國の物とならんは、日の本の國の恥、若し又海底に沈め失はゞ世は常闇、とやせんかくやと御思案有り。義仲朝敵謀叛人の名を取らば、平家心赦して一致せんな必定、折を窺ひ三種の神器を奪取り、跡で平家は鏖、サア此上の分別なしと、心に工まぬ悪逆の謀、それとは知らで諸國の驅武士ども、我儘を働きしは、木曾殿のしろし召されぬ事ながら、まんまと上々の朝敵の名を取り給ひ、スハ鎌倉の討手向ふと聞えしかば、寄せられては後手に成る、御身に誤なき由を、申分けさせ給へといへば、いやとよ、他人より一門は尚恥有り、宰我子貢が辯舌をもつて云ひほどくとも、三種の神器を取り返し、平家を悉く討亡さねば、我本心は顯はれず、卑怯げに言譯はすまじいぞ、かく成り果つる我武運、寄手を引受け潔く、討死せんと御覺悟なされ、夫故にこそ闇々と今度の負軍、申す詞に疑ひあらば、仰置かれし詞の末、召されし甲に子細ぞあらん、御覽有れ。いかに思し明らめても、心の内の御口惜しさはいかばかり、人こそ多けれ石田づれの、名も無き下郎の刃にかゝり、勿體なや御首に義經が

と申す木曾の郎等、主の悪逆を疎み、今井四郎兼平が首取つて、鎌倉殿へ降參の手土産候ふ」と、直垂の袖に包みたる甲首、太刀に貫きたる今井が首、實檢に備ゆれば、「我殿か兄上か」と、巴は繩取引立てゝ、「變り果てたる御姿や、覺悟の上とは云ひながら、思へば〳〵曉の、鷄に互の泣別れ、長い別れに成つたか」と、二つの首に身を寄せて、人目も恥ぢずどうど伏し、聲も惜まず泣きゐたる。梶原怒つて、「めろ〳〵と今に成つて何の吠えざま、尾籠なり」と引立てさせ、「恐れながら首御實檢なされ、井上次郎にも、御褒美の御詞下さるべし」と取持てば、つく〴〵と實檢有り。「エヽ淺ましや、同じ淸和の臺を出で、正しき源氏の累葉として、平家に勝つたる朝敵謀叛の族と成つて、末代源氏の弓矢を汚す一門の面汚し、憎や〳〵」と、持つたる扇ふり上げて、丁々と打ち給へば、巴堪へず、「聞きにくし義經殿、平家に勝る謀叛人とは何が謀叛、其譯聞かん」と詰めかくれば、「オヽ言ふまでもなし、法就寺の御所を燒討し、高位高官の人々を苦めし、是が謀叛朝敵で有るまいか」と、以ての外の御氣色、巴涙をはら〳〵と流し、「されば夫こそ木曾殿の深き御思案、謀叛でない物語、並みゐる人々も聞いてたべ。既に木曾殿、礪並俱利迦羅篠原の合戰に打勝ち、都へ攻上り給ふと聞えしかば、平家一門の人々、三種の神器を守り奉り、西國へ落下る、木曾殿都に入りかはつて、御所を守護し給へば、法皇

を乘飛ばし、熊の子渡し燕の捩り、獅子の洞入なんどといふ、手綱の祕密に聲添へて、四足を土に著けばこそ、宙を斷けらし地を濳らし、蹄に懸けんと透を待ち、暫しあしらふ折こそ有れ、敵の方に聲立てゝ、「朝日將軍義仲を、石田次郎が討取つたり、今井四郎兼平も、一所に最期」と呼はる聲、聞くに驚くたるみを見て、義盛得たりやかしこしと、馬の前脚どうど薙ぐ。薙がれて前脚折るよと見えし、巴も馬上を眞倒、落つるを其まゝ起しも立てず、家の子郎等をり重り、掛くる千筋の縛も、妹背を結ぶ緣の綱、永き夫婦の初とは、後にぞ思ひ知られける。斯くと注進してければ、御大將義經公、秩父佐々木を召具して、泥際を土手にしき皮や、御座に移らせ給ひける。和田義盛罷出で、「女を生捕り、手柄がましく申上ぐるもをこがましく候へども、鎌倉の御前に御沙汰候ひし、木曾殿の　妾、巴と申す女召捕つて候ふ。いかゞ計らひ申さん」と、申上ぐれば、「いしくも仕たんなれ、直に問ふべき子細有り、早いさをれ」と御諚にて、引出す繩取共、返つて宙に引立て、おめず臆せず御大將の膝近く、ふり仰いだる顏ばせに、はら〳〵懸る無念の淚、雪に霰ぞ亂れける。折しも梶原平三景時、武者一人召具し、息を切つてかけ付け、「當手の怨敵は悉く討亡し、鬼神と呼ばれし朝日將軍義仲を、石田爲久が討取り、首を御目に懸けくれよと某を賴み、其身は後陣に罷在る。又召連れし此男は、井上次郎

にもてなし立歸ろ、引矢の情ぞ類なき。後陣に控へし内田三郎、「ちよぶ殿、佐々木殿、敵に會うて勝負せぬは、後を見するか二心か、内田三郎家吉參り候ふ」と、諸鐙かけ合せ、「天晴御器量武者ぶりや、烏帽子が下の亂髪、象では爲けれど此の鼻が繋がり申す、一軍して内田が手並を見せ申さん。鎧の上帶下紐も打ちとけよ、引く手に靡け」と洒落言し、隙を見て組留めんと乘廻す。巴が乘つたる駿足は、數度の軍に合ふ坂の、關吹き越えて名に高き、春風といふ名馬、内田が乘つたる韋駄天栗毛、足疾鬼とて足早き、鬼に劣らぬ足どりは、兩方劣らぬ馬上の達者、駒の足並飛鳥のかけり、行違ひさま内田三郎、鎧の袖を引違へ、巴にむずと引組んだり。「シヤ大膽な、義仲といふ主有る女に抱付いて、オヽこそば、目顔を赤めて強い顔なされても、力の有る體でもなし。聞えた〳〵、女ちやと思うて深洒落か、人にこそ寄れ此の巴には、麻柄で撞く釣鐘、ならぬ事〳〵、未來の爲の折檻」と、前輪にぐつと引附けて、うんともぐつとも云はさばこそ、片手に素頭引摑み、太首ちよいと引抜きしは、子供遊びの紙雛の、首を抜くより易かりけり。「和田義盛是に在り、聞きしに勝る女の働、さりながら、手柄も人による物」と、生ふる手比の並木の松、ぐつと根こじに引抜いて、馬人共に一打と、口にはいへど心には、馬の諸脚薙ぎ倒し、適手捕にせし物と、追ふさま向ふ横腹へ、薙ぎ立つるを事ともせず、巴は馬

につこと打笑ひ、「男勝りと名を立てられ、强身を見するは恥かしけれど、秩父程の人柄で、坂東一の勇者呼はり聞きにくい、成らば手柄に引きおろして見さんせ」と、鐙の鳩胸踏み反らし、引くにちつとも動かばこそ、鞍强にこたへしは、作り付けたる如くにて、廣言放ちし重忠も、大力の女持て餘し、馬人ぐるめにこりや〳〵、雪間を分けて生ひ出づる、春にあはづの草ぞ迷惑、踏みちらし、引戻しては引きずられ、引いつ引かれつ寄るべなき、堅田の浦の釣小舟、涙に揉まるゝ如くにて、こたへもこたへ引きも引き、「草摺三間引つちぎり、尻居にどうど伏したるは、苦々しくも目醒しゝ。跡に續きし佐々木の四郎、「手柄は仕勝ち、御免候へ秩父殿、佐佐木が組んで見せ申さん」とかけ寄れば、「なう〳〵妬たい佐々木殿、强洒落なせられそ」と押隔て、「宇治川の先陣はせられしが、巴女にはいかな〳〵秩父も敵はぬ、今の倒様を見られしか。ヤア女、秩父に尻餅搗かせたを手柄にして、木曾へなりとも何處へなりとも、勝手次第に早歸れ。アレ見られしよ、歸れといふに耳へも入れず、鎧づきして、すはといはゞ勝負せんと待つ大强者、勝つてからが女なり、秩父が樣に尻餅ついて、物笑ひ仕出すか、先づ此陣は引いたがよい、合點か〳〵」と、目で知らせば、「オヽそれ〳〵、勇者の尻餅と、高名の首帳も、筆末ならば付かぬがよい。いかにも此陣引くが勝、なう秩父殿」「なう高綱殿」とうなづき合ひ、餘所

り、見送り見返る恩愛妹背主從の、歎に泥み行きかぬる、駒の足取諸手綱、引別れ行く三重雲の脚、雪吹まじりの朝霞、比良の高根の冴え返り、春めきながら野も山も、雪に紛へて白旗の、八重立つ敵の其中を、心細くも巴御前、「御最期の供は叶はじと、夫なり又主命の、我身に重き唐錦、古郷へ歸る鎧の袖、供をも具せず唯一騎、名殘泪の玉櫛笥、手枕古しねくたれ髪、夕べのまゝに振亂し、烏帽子引立て眉深く、見る目も曇る鏡山、○女とも見えつ又男とも、｝嚴物作の太刀佩いて、思切れども女氣の、跡へ〳〵と心引く、琵琶の海面弓手に見なし、行く先いかにしら月毛、駒に任せて行く道の、手綱よ二世の別れの鞭、打つに力ぞ無かりける。俄に來し方騷がしく、ᇚ「ヤアあの凱歌は敵か味方か、君はいかに、兄はいかに」と覺束な、人の便をまつ蔭に、馬乘りとゞめ立つたる所へ、勝誇りたる鎌倉勢二三十、「落武者返せ」と呼ばはつて追取卷く。ᇚ「何落武者とは舌長し、落ちぬか落ちるか是見よ」と、駒の頭を立て直し、渦く我名巴のごとく、右左に乘廻し、蹴立て踏立て駈けさすれば、詞は主の恥知らず、跡をも見ずして迯げ散つたり。ためらふ間もなく、「暫し〳〵」と呼はつて、歩武者一人、軍兵に先だち大音上げ、「木曾殿の御内に男勝りの去者有りと音に聞く、巴御前と見しは僻目か。坂東一の勇者と呼ばれし、秩父の重忠見參せん」といふより早く、鎧の草摺しつかと取り、引下さんとえいと引く。巴

れば、死に勝る恥おほし、今こそ木曾が最期の門出、巴來れ」と宣へば、はつとは言へど伏沈む、山吹御前お筆が歎、見れば心も打ち萎れ、「君の先途を見屆ける、死出のお供は一思ひ、跡に殘りて便なき、御身の上はいかばかり、悲しうなうて何とせう、おいとしぼや」とかきくどき、しやくり上げたる歎につれ、木曾殿もやゝ急きくる涙、止めかねさせ給ひしが、心弱くて叶はじと、振切つて馬引寄せ、ゆらりと召せば、巴御前も泣く目を拂ひ、片手にしつかと轡面、取つて引立て勇みを付け、「コレ／＼申し山吹樣、死を輕んずるは勇士の道、軍の習ひ、今我君戰場へ打立ち給ふといへども、是又決して討死とも、定めがたきは時の運、此巴が付添ふからは、敵何萬騎有りとても、我命の續かんだけ、片端撫切拜打、蛛手輪違十文字、十方八方打立て追立て捲り立て、ぜひ一方打破つて駈通り、何處いかなる奥山にも、隱れ遁れて時節を待ち、御本意遂げさせ申すべし。先づそれまでは若君諸共、知方の方へ御忍び」と諫むる詞にお筆も嬉しく、「夫はちつとも氣遣ひ有るな、わたしが古鄉桂の里の爺親は、源氏譜代の侍、鎌田兵衛が弟、同名隼人と申す者、年寄りたれども、心は忘れぬ弓矢の家、御主人といひ親子の中、命に懸けて匿まはん」「オヽ夫こそ究竟偏に賴む。隨分御無事で山吹樣、若君樣まうおさらば」「お前も達者で、殿樣さらば」さらば／＼と行く名殘、のこる思ひは果しなき、涕と倶に延上

さらに、止むる方もなきくづをれ、「たつた今まで子の行末、家の榮御身の上、千萬年も添ふやうに、思ひし事も仇し世の、夢か現か悲しや」と、御身を悶え伏沈み、聲も惜まぬ叫泣、見るに身に沁むお筆が思ひ、「お道理さまや」と諸共に、袖を絞るぞ哀なる。かゝる歎の折こそ有れ、間近く聞ゆる轡の音、しやん〳〵りん〳〵さら〳〵さ、さつと吹きくる春風と、名に負ふ名馬に打乗つて、かけ立て蹴立つる馬煙、生付きたる大力に、馬上も勝れし巴御前、色をゆかりの紫縅、鎧輕げの女武者、長刀かい込み鞭うち立て、馳付く門前ひらりと下り、「扨も此たび宇治の戰、楯根井が計らひにて橋板を撤き、岸には垣楯、川には亂株透間なく、大綱小綱を流しかくれば、鴛鴦などの水鳥も、輙く通るべしとも見えざる所に、血氣の大將義經が下知によつて、佐々木の四郎高綱、梶原源太景季、先陣二陣に川を渡せば、秩父足利三浦の一黨、我も我もと打渡つて攻戰ひ、味方敗軍剰へ、楯根井も討死し、士卒もちり〳〵、無念ながら引つ返し、直に追立て勢田の手へ、向はんと存ぜし所、既に宇治の手破れしかば、勝に乘つたる鎌倉勢、或は木幡醍醐深草月見の岡、思ひ〳〵に打越え馳越え、都へ亂れ入ると聞けば、御身の上氣づかはしく、立歸り候ふ」と、云ひもあへぬに人々は、はつと仰天鞆れはて、暫し詞も無かりける。木曾殿少しも動じ給はず、「ホヽウさこそ〳〵、胸にこたへし味方の敗軍、死せざ

腕限り攻戰ひ、潔く討死せん」と、思ひ切つたる御顏色、見るに悲しき山吹御前、「扨はけふの出陣は、とくより覺悟遊ばして、討死なされん爲なるか。さほど科なき御身の上、時節を待つてなぜ申披は成されぬぞ。心易う討死と、お前ばつかり合點して、この駒若や巴樣の胎內の、お子はいとしう思されぬか、あんまり氣強い胴慾ぞや。どうぞお心飜し、お命恙なきやうの、御了簡は無い事か」と、すがり付いて泣き給へば、「ア、おろか〳〵、夫程の事辨へぬ義仲にはあらねども、御所には中納言兼雅、修理大夫親信を初め、百官百司も大半平家に心を寄すれば、中々申し披く時節はなし。分けて多田の藏人行家は某に意趣有る中、義仲こそ木曾の山家に育ちたる不骨者、色に迷ひ酒に長じ、奢の餘り朝家を亂す謀叛人と、讒者の口に掛けらるれば、とてもかくても遁れぬ運命、義仲が胸の鏡、曇らぬ證據は天道ならで誰か知らん。泥中の蓮も汚れぬ花の榮を見ず、我が惡名は後代に殘し、身は戰場の土と消え、首は大路に曝されて、恥に恥を重ねん事、返す〴〵も口惜しよ。さりながら、我こそ命を落すとも、御身は片時も館を立退き、駒若を養育し、時至らば、義仲が罪なき旨を奏聞し、再び家名を雪がれよ。ふびんや何の頑是なく、是今生の別れとも、知らず分らず我顏を、見て餘念なき笑ひ顏、いぢらしさよ」とばかりにて、勇氣に撓まぬ大將も、恩愛父子の憂き別れ、暫し淚にくれ給ふ。山吹御前は今

と、呼はる聲に家中のめん〳〵、地に鼻付けて畏る。叢蘭茂せんと欲すれども、秋風是を破るとかや、朝日將軍木曾義仲、照輝ける物の具も、龍に翼を得る如き、威勢優美の御粧ひ、しづしづと入り給へは、山吹御前出向ひ、「是は〳〵思ひの外早いお歸り、そしてどうやら御顏持も勝れず、早う樣子が聞きましたい」「されば〳〵、豫て御身も存知の通り、鎌倉の討手範頼義經、夜を日について攻登れば、宇治の手は楯の六郎根井の小彌太を差遣し、勢田の手は今非の四郎兼平に固めさせ、猶又巴も跡より打立つとはいへども、折惡う樋口の次郎は、多田の藏人行家を攻めん爲、河内の國へ立越ゆれば味方は小勢、敵の多勢に比ぶれは十分が一、中々輙く防ぐべきとも覺えねば、某も今出陣し、士卒の驅引軍配せんと思ふに付き、御暇乞の爲院の御所へ參りしに、嚴しく門戸をさし固め、物音だに聞えざれば、是非なくすご〳〵歸つたり。エ、口惜しや淺ましや、過ぎつる壽永二年、砥並篠原兩度の戰、平家の大敵を切靡けし動功によつて、朝日將軍に補せられ、高名譽を顯はせしに、今又平家に從つて、朝敵謀叛と呼ばるゝも、皆君の爲天下の爲、心を碎くかひもなく、却て隔て疎んぜられ、剩へ鎌倉へ追討の宣旨を下し賜はり、一門弓箭を合せ、同姓勝負を決する事、偏に君の叡慮淺きに似たれども、普天の下率土の內、王土に非ざる處なければ、是とても是非に及ばず、此上は片時も早く驅け向ひ、

んで打立ち給ふ、寛仁大度の御粧、悠々として勇有り義有り、巍々たる巖石踏みしだき、宇治川さしていづみ川、威勢は輝く光明山、平等院の北の邊、富家の渡りへ著き給ふ。源氏の御代の末長く、榮え榮ゆる時なれや、九重の空ものどけき春の色、霞みこめたる檜皮ぶき、美麗を盡し手を盡す、木曾殿の御館には、御長男駒若君、三つの生先うるはしく、わけて母君山吹御前、御寵愛淺からず、付添ふ女中も御機嫌を、取り〴〵賑はふ其中に、お傍離れぬお氣に入り、お筆と云うて才發者、しとやかに手をつかへ、「此春は珍らしう、お國に變つて都で年をお重ね遊ばし、御祝儀申すも漸ときのふけふ、馬鞍休める隙もなく、又軍の戰ひのと、心よからぬ世の騷、お案じも尤ながら、四天王と呼ばれたる、一騎當千の人々に、巴樣も向はせ給へば、十が九つ味方の勝、お氣遣ひ遊ばすな。したがなんぼ大力でも、殿のお種を身に持つて、切つはツつは危もの、出物腫物處嫌はず、ひよつと其場で氣が付いたら」「サア自も夫が氣遣ひ、殊更左孕と有れば、疑ひもない御男子、何事なう平産あらば、此駒若の弟御、今まで此子をかはゆがつて貰うたかはり、自も心一ぱいいとしほがりたい、早う抱いて見たいはいの」「ホヽそりや知れた事、常さへどちらもお中が好うて、お互に抱合ごくら、お精次第根次第、中に立つた殿樣も、お嬉しからう」と打笑ふ。折から告ぐる先走り、「只今殿樣御歸館」

西に入る日を追詰め〳〵、木曾が胸板射通して、八本の肋骨、ばら〳〵にしてくれん」と、弦打ち番ひし拳のかたまり、よつ引きひやうど放つ手答あやまたず、蟹目射切れば骨ばら〳〵、扇砕けて飛びちるにぞ、今に初めぬ義經の、凡人ならぬ弓勢を、恐れぬ者こそなかりけれ。大將の御弓矢、畠山の重忠受取り、恭しく神前に捧げ奉り、敵に打勝つ柏手も、味方の勝利疑なしと、御悦びは限りなし。「ヤア恥を恥と思はぬ梶原、味方の簇を射通したるも、弓矢の故實か二心か、返答聞かん」ときめ付けられ、面目なげに頭を上げ、「義經公への申譯、只今切腹仕る、何れもさらば。佐々木殿、介錯頼み存ずる」と、鎧の上帶引きほどけば、四郎聲かけ、「ア丶麁忽麁忽、か丶る大事を抱へながら、腹切らんとは同士打も同じ事、但し大將への面當か、今度の軍に高名あらば、申譯は自然と立つ、聊爾有るな」と押ししづめ、威儀を正して御前に向ひ、「梶原が切腹某申し預らん、又白簇を射貫いたるは、凶事にあらず却て吉相、君の御軍慮圖を外さず、敵にはたと當るといふ、瑞相めでたし〳〵」と、秀句に寄せて壽けば、義經御感斜ならず、「高綱いしくも申したり。ヤア梶原、過つて改むるに憚らず、以來をきつと愼むべし」と、物に障らぬ御詞、あつとは言へど義經に、意趣を含みし其根ざし、此時よりと知られける。斯くて時刻も過ぎ行けば、大將采配おつ取つて、「ヤア時移りなば敵の要害惡しかりなん」と、先に進

言つぱ、先祖鎌倉の權五郎景政、敵に左の眼を射られ、其矢も拔かず答の矢を射返し、唐日本に名を上ぐる、見給へ殿原、扇に描きし日の丸は、取りも直さず朝日將軍木曾義仲、此景時が一矢にて、朝日の直中射通さん」と、鷲の羽の尖矢打番ひ、きり〳〵と引きしぼり、暫し固めて切つて放せば、何とかしけん、覘は外れて大將の御白旗、横に縫うて止まつたり。なむ三寶と弓投捨て、まじめになれば、すはや味方の大事ぞと、眉を顰めぬ者ぞなき。大將義經聲高く、「やをれ梶原、義經が下知をも受けず、鎌倉殿の出頭を鼻にかけ、出かし顏の采配立、試の的を射損じ、味方に氣おくれさせつるは、言語道斷の曲者。夫れ戰場に日の丸の扇を用ゐる事、淺々しくも思ふべからず、日の丸は卽ち日輪、日の神の御影を寫す陣扇、敵間近く寄るならば、颯と開いて眞額にさし翳し、神の威光を頭に戴く、此日に敵對ふ不覺の武士、神の御罰に亡す道理、今度の敵木曾義仲、朝日將軍と名乘る事、全く此理に相同じ。扇の的には太占の傳と云ふ事有り、故實を知つたる武士は、日の丸を除けて地紙を射るか、蟹目際を射るものよ。夫に何ぞや梶原が、朝日の直中射通さんと、神に弓引く冥罰にて、却て味方の旗を敗る、旁以て不吉の相、よし此上は義經が、故實を正し一矢射て、軍の勝負を試さん」と、思ひ矯めたる弓の末筈、神の御告を白羽の矢、取つて突立ち上り、「アレ見よ扇は西に在り、朝日は東に在るものを、

御前間近く畏る。義經仰出さるゝは、「山人なれば案内は知ッつらん、是より宇治へ出でんには、近道有りや」と問ひ給へば、「ハア、心やすき事のお尋や、御覽遊ばせ、西に見えたる平岡をばあらた山と申し、夫より先に頭落の瀧といふ所を行かんには、近道にて候ふ」と云ひもあへぬに、「いやコリヤ老人、戰場に向はんに、頭落の瀧とは禁忌なり。まだ其外に道は無きか」「さん候ふ、此の御社を弓手へ廻り、笠置にかゝつてお通り有れ、よき道の候ふ」と、申上ぐれば義經重ねて、「此の御社の御神體は如何なる神ぞ、老人知らずや」と宣へば、「ハア賤しき身なれば委しく存ぜねども、此の御神をいとゞの明神と申して、文字には射手と書き候へ共、云ひ易きが習はせとや、いとゞの明神と申すなり」と、語れば大將御悅喜有り、「いとゞの明神弓手へ廻り、倍にかゝつて攻めよとは、面白し〳〵。それ老人に恩賞せよ」と、仰も重き御褒美あまた賜はりて、「早御暇」と老人は、宿所をさして歸りける。梶原平三進み出で、「いさまし〳〵、武士の運に叶ひ、弓矢神の御前に、暫くも休らふ事、偏に神の御加護なれば、神前にて的矢を射、軍の勝負を試み申さん、見物あれ人々」と、鎧の引合より陣扇取出し、幕串にしつかと結付け、矢比よき場に立てさすれば、有りあふ人々息をつめ、勝負いかにと待つ所に、梶原一世の晴業と、滋籐の弓のまん中取り、廣言してぞ罵つたり。「抑梶原が家に傳はる譽と

逆櫓松
矢箙梅

ひらがな盛衰記

第一

頃は元暦元年正月廿日、朝日將軍木曾義仲、惡逆日々に盛なる、都の騷動鎭めよと、鎌倉殿の下知を請け、大手の大將蒲冠者範頼、勢田をさして攻上る。搦手の大將には、九郎御曹子義經、伊勢路を越えて上洛ある、心ぞ剛に逞しゝ。附從ふ輩には、佐々木の四郎高綱、畠山の次郎重忠、和田の小太郎義盛、侍大將は梶原平三景時、其勢二萬五千餘騎、甲の星を戴きて、夜晝分かぬ旅なれど、勇む驛路の鈴鹿山、去年のゆかりと消殘る、雪の戸ざしの麓の關、八十瀨に續く加太山、川を越えては山路にかゝり、山を越ゆれば川瀨に浸り、西へ〳〵と靡く旗手に、東風が知らする風の森、朱の玉垣見えたるは、いかなる神かしら幣、敵追討を祈らんと、暫く床几立てさせて、皆々休らひ給ひける。眺むれば山より山の山道を、腰も二重の老の杣、杖の便にとぼ〳〵と、岨を傳ひて歩みくる。大將見給ひ、「あの杣召せ」と有りければ、和田の義盛承り、「ヤア〳〵老人、大將の召さるゝぞ、早々是へ」と招かれて、はつとばかりに老人は、

伽羅先代萩　終

く、貝田が帶せし一腰は、亂髪の一腰ならん。系圖の一卷家の重寶、斯く一時に手に入る上は、錦戸刑部は遠流させ、家の榮は萬々歳」と、仰に兩人勇み立ち、祝ひ壽く池の龜、千代の榮を鶴喜代の、威勢は朝日の登るが如く、實に神國の人心、頼もしとともなかく〳〵に、申すばかりは無かりける。

まぬ中、二つに成つて倒れ伏す。血刀引提げ飛鳥の如く、奥の一間へ駈込めば、續く松枝節之助、遁さじものと追うて入る。梶原俄にあわて出し、「貝田めが死物狂ひ、殊に松枝無法者、彼奴があばれ出したらば、我等はお座にたまられず。コレ〳〵武勇自慢の重忠殿、組留めてたべ頼み入る」と、膝もがた〳〵振ひゐる。重忠は脇目もふらず、「鷲き入りし貝田が手の内、伊達治郎明衡が帶する所の刀諸共、速かに切放せしは遖名作、是こそは先達て、紛失せしと略聞きたる、亂髮の一腰ならん。貝田が巧明白に現る其上に、家の重寶出づる事、鶴喜代の運目出たき所」と、劍戟を振る其中に、座席崩さず、優々として坐しゐたる、寛仁大度ぞ見事なる。次の一間は鍔音刃音、手に取る如く聞ゆれば、梶原猶も尻居らず、「アレ〳〵爰へ來るさうな、コリヤどう致さう重忠殿」臯「コハ仰々し梶原殿、何の是しき子細なし、終日の對決に、拙者殆ど疲れ申す、氣を養ふは斯樣の時、足下の手前で薄茶一服」梶「一服やら立腹やら、切腹しやうも知れぬ時宜、薄茶どころで有らばこそ、折節風呂に火の氣は無し、爐の炭もつぎかへず、本の是が冷火燵、緩りとおあたりなされよ」と、尻に帆掛けて走り船、梶原這ふ〳〵逃げ出づる、貝田を中に熊川松枝、いづれ劣らぬ早業は、目覺しかりける次第なり。熊川は薄手を負ひ、貝田を足下に節之助、とゞめをぐつと刺通せば、庄司重忠喜悅の眉、「オヽ出かしたり

よしみ、某介錯してくれん」「オ、過分々々、腹一文字に掻切つて、イザと聲を懸くる迄、必ず早まり介錯すな」と、無念の一言身も震はれ、「ヱ、天惡人に組せずとは僞なるか、エ、奇怪や、たとへ骸は死するとも、魂君の影身に添ひ、佞人原に目に物見せん」と、肩衣はね退け座を組んで、差添に諸手を掛け、既に斯うよと見えたる所へ、「暫く待つた明衡殿、松枝節之助是に在り、貴人出席の其中へ、陪臣の參會御免に預る」と、一卷片手に立出づれば、貝田聲かけ、「尾籠千萬、既に以て事極つた裁許を戻くは恐れ多し、早立去れ」と極め付くれば、から〳〵と打笑ひ、「汝が手足と頼んだる、常陸之助國雄を殺し、家の系圖奪返す、又砂川の屋敷にて、傾城高尾平産の姫君、義綱公と諸共に害せんとする汝が間者、此方へ召し捕つて、うぬらが巧の底叩かす、最早遁れぬ覺悟々々」「ヤア舌長なり節之助、既に以て明衡が差上げたる連判狀、一字一點無き白紙、是ち卽慥な證據」「オ、其一卷こそ子細有り、國雄が幻術蹇く上は、印ぞ有らん明衡殿」實もと傍なる一卷を、開けば姓名有り〳〵と、元の如くに鮮なり。明衡貝田をはつたと白眼み、「禽獸に等しき汝、讀み聞かすに及ばねど、重ねて詞を出さぬ樣、とくと夫にて承れ。此度冠者太郎義綱、幷に子息鶴喜代丸を退け且害せんと謀る事則ち成就せば、一味連判の輩は、其功の輕重に應じ、恩賞高祿宛行ふ者也、錦戸刑部太郎國純、直衡」とまで讀

ては、鶴喜代君のお爲にならぬ」「ぢやと申して」「先々待たれよ、何事も此胸に、先づ〳〵次へ立たれよ」と、老臣の詞是非なくも、しを〳〵次へ立つて行く。梶原聲かけ、「ヤア〳〵者ども、鶴喜代始め一家の奴原、悉く繩を掛け獄屋へ引け」「アイヤ先づ待たれよ梶原殿、貝田勘解由も暫く扣へよ。ヤイ明衡、證據と成るべき一卷の、白紙と成りしと云ふも僞、貝田を科に陥さん爲、汝一人が巧で有らう。「左樣なければ鶴喜代も、筋なき事を台聽に達し、上を恐れぬ科遁れず。其方一人落命せば、主人の身の上別條なし、天誠を照し給へば、死後に汚名は自然と雪がん、とくと思案を廻らし召され」「ハッ今に始めぬ重忠樣の御厚情、粉骨碎身仕るとも、報じ難き御示、斯く成る上は何をか包まん、貝田勘解由に職を超えられ、我威勢を奪はれし其無念止む時なく、斯くまで仕込みし大望も、時至らねば悔みて返らず、此上の御願ひ、切腹御赦免下さらば」「オヽ神妙の詞至極せり、其儀は梶原さし赦す、早く支度を仕れ」「ハッ有難く存じ奉る、跡々の儀は重忠樣」「ホヽ心置なく最期を淸う」「ハヽハット御請も明衡が、無念の泪押隱し、心靜に手を合せ、南無松島大明神、弓矢神正八幡、奥州五十四郡を照し給はゞ、鶴喜代の御武運長久、我こそ武運拙くとも、死後には冥覽明らけく、是非潔白を神國の、印を顯し給へやと、祈念の中に貝田聲かけ、「ヤア明衡、切腹とは武士の冥加、傍輩の

曲者早足の松枝、姿に影の添ふ如く、ぢり〳〵と付け廻せば、うんとのつけに倒れ伏す。「ハテ不思議や、近比下屋に忍び、君を守護する其折から、鼠と化して系圖の一巻、奪ひ取つて立退く曲者、何にもせよお家の系圖、此方へ奪返さん」と、立寄る松枝曲者は、むつくと起きて、「シヤ竪子、汝いかなる强盛なりとも、我又大室九丹金液經の法を行ひ、雲を起し雨を呼び、須彌山を拔き芥子に隱れ、自在を得たる我が幻術、汝も下界の鬼となさん。テレイキヤン、インテレイヒ、カウキヤン、テビイルヒイル」と、責めかけ〳〵唱ふれども、更に奇瑞の見えざれば、節之助稀代の思ひ、「扨は外記左衞門が無念の精血血汐の穢れに、汝が仙術忽ち失せしは天の責、我君を守らせ給ふ氏神の御加護ならん、ハア有難や悅ばしや。サア此上は系圖の一巻、早く渡せ」「縱へ仙術失せたりとも、汝等如きに渡さんや、速にそこ立去れ」「こゝ言いはずと早く渡せ」〇「ヤア〳〵明衡、其方筋無き事を申し、某を科に落さんと謀書を拵へ、剰へ證據なんどと指上げし其一巻、白紙を以て上を欺く、汝ばかりの科に有らず、主人鶴喜代落度と成つて、家の斷絶今此時、覺悟せよ明衡」と、鍔打ち叩いて詰かくれば、源五兵衞むくりを煮やし、「正しく館を出づるまで、紛ふ方なき連判狀、今白紙と成つたるも、汝が胸に深き巧、イデ糺さん」と立ちかゝる、明衡「暫し」と押し止め、「事に猛るは尤なれども、今荒氣を出し

吹き拂ふ、冷風さつと押開く、中には一字一點なく、重忠は唯不審顏、景時怒りの聲荒らげ、「汝等兩人此所を遊所遊山の座席と思ふや、忝くも京都の決斷、事を猥に取計らひ、白紙を以て證跡とは、上を恐れぬ大罪人、謀書を拵へ詞を巧み、貝田を科に落さん爲、明衡一人の所存にあらず、皆鶴喜代の指圖ならん、覺悟せよ汝等」と、一巻取つて投げ付くれば、兩人驚き立寄つて、披き見れば、「コリャ白紙、明衡殿」「源五兵衞」二人「ハア」〇間毎々の結構は、實にも執事の奥座敷、上段の間に座をしめて、テレイキャン、インテレイヒ、コウキャン、テビイルヒイルと、唱ふる仙家の祕密文、鼎に注ぐ潔淨水、棘の黒髮振亂し、天に向つて渇仰し、「明衡貝田が對決に、落著すべき彼の一巻、唐土廬江の水を取つて、是なる鼎の中に湛へ、洗ひ落して白紙となせしも、奥羽二國を覆し、先祖國香の修羅の妄執、散ぜん事は今此時、アラ〱心地よや嬉しや」と、襖に響くうなり聲、疾くより窺ふ外記左衞門、覗ひ寄つて眞二つと、打込む刀曲者は、又も唱ふる祕文につれ、次第々々に手もすくみ、思はず知らず取直し、我と我手に數ヶ所の疵、夢の直路の如くにて、よろぼふ足を踏みしめ〱、爰ぞと切込む刀は反り、眞額二つに血は滴り、鼎の中へ入るより早く、陰陽激して忽ちに、逆巻く水氣燃え立つ炎、折よく松枝節之助、さしもに重き大鼎、片手に差上げ指し付くれば、血汐の穢嫌ふと見え、背ける

出席は、上へ對して恐れ有り、且鶴喜代が後難ともならん、其處立去れ」と白眼付くる。ちつとも臆せず、くつ〳〵と吹き出し、「今に變らぬ立派の口上、併し某出るからは、大言の吐く其頤骨、追付け踏み裂いてくれんず」と、事も無げなる一言に、「緩怠なり浮世渡平、某が工みとは、何ぞ慥な證跡有りや」「ヤア盗人たけ〴〵しいと俗語の如く、其爭ひも今の內、某疾くより入込みしを、熊川とも源五とも得知らぬ空氣ども、隙を窺ひ奪取りし此一卷に、汝を始め一家中も、大半は刑部に一味の連判狀、最早遁るゝ方はなし、夫へ參つて繩掛けようか、但し言譯の筋有るか」「サア夫は」「サア〳〵〳〵どうぢや」と、退引ならぬ證跡に、指しもの貝田口ごもり、返答しどろに控へ居る。庄司重忠威儀繕ひ、「ナニ梶原殿、是にて事は落著せり。去ながら、證據と成るべき其の一卷、改めずんば叶ふまじ。赦す、是に持參せよ」ハツと明衡頓首して、御前へ差出せば、「景時殿、イザ御披見」「イヤサ〳〵、何の是しき見るに及ばず、其儘に捨て置かれよ」「イヽヤイヤ左にあらず、鶴喜代一家の納りは、此一卷の中に在り、佞人どもに唆し欺かされ、梶原殿も一味なされ、其元の御姓名、此中に在らん事を、恐れて披見なされぬか」「サア夫は」「よもや左樣な事有るまじ」梶「然らば一所に見ませう」と、兩人立合ひ紐とく〳〵、貝田は一生懸命と、面色は彌土の如く、明衡熊川兩人の、腕の曇りを

忝くも決斷所に於て、諸役人を蔑にしたる申分、甚以て奇怪なり」と、氣色損じて見えければ、「ハア、御意恐入り奉る、併ながら、國本の面々一列に申上ぐべき事なれども、一味徒黨の後難を恐れ、私一人事を預り申上げ奉る、近年國本へ申遣す仕置等、道ならぬ事ども少からず、心得がたく存ずれども、何時の下知、何れの指圖にも、梶原樣の仰、景時樣の御内意と申越さゞるは是なく、當時一天下の間に於て、梶原樣の御意と有れば、迅雷の如く恐入り奉る儀、刑部貝田の非道を訴へ申す時は、憚ながら梶原樣の貴命を背くに相似たり、さるに依て」「コリヤ〳〵明衡、委細の樣子詳かなりさりながら、梶原殿に限り、左樣の非道有らん樣なし。殊に景時殿は專ら歌人の聞え有り、正直の心を種とする詠歌、ナその歌詠の梶原殿、よも邪に組し給はん、但し覺ばし御座有るや」「何の〳〵、左樣の事予が知る所に有らんや。定めて夫は佞人どもが、此梶原が威勢を借り、諸人を靡かす謀事、某は存ぜぬ事」「左樣なくては叶はぬ所、コリヤコレ刑部貝田が巧ならん、明白に白狀せよ」「ハア御意恐入り奉る、併ながら我々が謀計とは、何を以ての御仰」「オヽ其證人は是に在り」と、貴人高位の恐れもなく、明衡が前にむずと坐す。「ムヽ珍らしゝ浮世渡平、シテ其方が證人とは、こりや明衡と云合せ、某を罪に落さん巧ならん。忝くも御大名の方々、歷々御座の其中へ、其方如きの

もを云ひ掠めんと思ふや、譬へば其方、主人の家に大切なる重寳有つて、汝が方へ預る時、盗賊の爲に奪ひ取られ、イヤ某は存じ申さず、盗賊の業なりと、油斷の云譯立つべきか。サ其方何と心得居る、若き主人を預る事、器財の類の輕きにあらず、往古周公旦成王を補佐し給ひ、淸和の朝に良房の趣、人臣たる者の鑑たり。義綱の心亂れ、行跡正しからざるは、預人の罪誰にか譲らん、返答いかに直勝」と、水を流せる詞の楯板、暗きを照す明察は、實日本の固めなり。貝田は猶も進み出で、「ハヽ御意恐多く候へども、暫くお扣へ下さるべし、明衡に答ふべき儀有り、家の大事を訴ふるに、御身一人引請け、爾餘の面々は一向知らざる體、是れ不審の第一なり。謀書を作り佞人を集め、某を無實の罪に沈めんと計るは、如何なる遺恨有つての儀なるや、是れ不審の二つなり。又諸士の面々何心も無きに、汝一人詞を企て、台聽に達し奉る事、是不審の第三つなり。言譯有りや明衡」と、居長高に詰めかくれば、こなたも膝を立て直し、「汝辯を巧にして專らに非を飾れど、何ぞ明衡を云ひ掠めんや。某一人事を預るは、深き意味有る所にて、其方如きが知る事ならず」と、云ひも果てぬに梶原聲かけ、「ヤイ〳〵明衡、そりや暗い、只今貝田が尋ぬるに、一つとして返答に及ばず、意味有る事と後日に延し、我方に理有る事を只今急に云ひ立つるは、コリヤ是れ汝身勝手過ぎる、貝田一人に申すと心得しか、

解由が逆罪の儀は、先達て訴へ奉る通り、當鶴喜代に限らず、凡そ十ケ年以來の存じ立て、其故は、若き主人は常々に諫言を加へてさへ、我儘さし起り申す事なるに、反つて近習の者どもに申し含め、頻りに婬酒を勸め、奇妙院と申すを頼み、下駄に呪咀の文を書かせ、益々放埓に本心を取亂させるの類ひ、擧げて數へるに暇なし。仰ぎ願はくは、台命の憐愍なし下され、御糺明願ひ奉る」と、恐れ入つて訴へれば、梶原聲かけ、「コリヤ〳〵勘解由、明衡が申す所、一一に相違無きや、其方が返答に依つて存ずる旨有り、定めて覺悟有る事ならん」と、心を付くれば貝田はひれ伏し、「冠者太郎の近臣の内、不身持知らす者有るゆゑ、刑部私申し合せ、度度諫言仕る節は、毎度異議なく得心致し、私など出席の砌は酒宴遊興の沙汰嘗て無く、後々に承れば、法外なる事ども御座有るよし、據なく國本へ申し遣し、一門ども罷上り、義綱を隱居致させしは、老臣ども皆承知の所、私一人の所爲と申し出づる明衡が所存心得がたし」「コリヤコリヤ貝田暫く待て、汝事を左右に寄せ、云譯立つると思へども、爾餘の儀は未だ知らず、最前より廿餘ケ條、悉く其方が罪、其職に居て其事を怠るは大罪に有らざるや」「ハヽ御意恐れ入り奉る、しかし過分の役儀に付き、用事繁多に相勤め罷り在れば、義綱の放埓惰弱、晝夜傍に是れなき故、存ぜぬ事は力及ばず」「ヤア詞多し貝田直勝、汝富樓那の辯を振ひ、役人ど

「サア〱何と〱」「主人鶴喜代幼少にて家督相續仕るに付き、信夫庄司、錦戸刑部、兩人後見仰付けられしを、國本の老臣ども、不快に存じ罷在る上、某儀京都在府に極められ、家中の仕置仕るゆゑ、高木風に憎まるゝの譬、信夫の庄司病死以後、錦戸刑部と私二人、政事專に取計らひ罷在るゆゑ、爾餘の輩その誤有らん事を心掛け、越度有らんにのみ目を付け、耳を傾け伺はゞ、數年の間、何ぞ一兩度の誤無き事や有らん。勿論毒殺に及び、家を奪はんと一味徒黨を催せしなんど、ゆめ〱覺悟仕らぬ儀、然る所麁忽の訴、コリヤ偏執邪推、憚りながら此儀御賢察下さるべし。聊左樣の企せん事、天の冥罰恐ろし」と、辯舌巧に述べければ、梶原顏色快然と、梶「貝田勘解由が申す條、一々に理に當れり、アヽ明衡贔屓の人有らば、嘸赤面を致されん、ハヽヽヽ」と嘲弄に、畠「ホヽ梶原殿の詞とも覺えず、忝くも公の政道を承り、理非明白を決斷し、親疎依怙贔屓に拘はらざるを面々職分の心得、邪を糺す役人として、身に邪を行ひ、或は時の權威に誇りて、己に諂ふ者を助け、疎き者を罪に落す、若しも左樣の者有らば、是ぞ誠の大罪人、誰にもせよ、どなたにも有れ、急ぎ召取り首討つて、獄門の木に曝すこと、政道の本意ならん」と、諂ひ飾らぬ其勇氣、凛々たるに肝拉がれ、「成程々々、左樣々々、重忠殿には氣象人、尤も至極に存ずる」と、座興の體に紛らせば、明衡謹しんで頭を下げ、「貝田勘

暫時も足らず、寄せ來る敵を追立て〱、破竹の如き堅陣なりとも、追詰め追詰め追散し、敵の首をば一方を賜はつて、野白に成つたる敵兵ども、千賀之助も其時は、非の字巳の字に薙ぎ立て〱、此熊川も楯籠らば、二三百、數珠繋ぎにしてくれん物、近頃殘念さりながら、寄手に武功の者有つて、思ひがけなく城外に、勢を伏せ置き不意を討たば」千「オヽ夫こそは傳へ聞く、野に伏勢有る時は、歸雁連を亂すとかや、まつ此通り」と松が枝に、打込む手裏劍栂平が、眞逆樣に無殘の最期。「オヽ天晴々々、手の內と云ひ智謀の程、末頼もしき千賀之助、心置なくはや出立」「ホヽ然らばお暇」再會は、頼みがたなき夢の世や、思ひ數書く文字摺が、「切めて一日宮仕へ」泣いて見送る象潟が、互の心思ひ遣り、こぼるゝ涙押包む、「忠義の誠を顯す時節、かゝる目出度き出立に、涙は不吉」と聲張り上げ、「兵者の交り、頼有る中の酒宴かなハヽ」「ハヽ」二人「ハヽヽヽ」笑ふは武士の別の涙、忠臣なりける 三重。

第九

水上を堰き入れたる故にこそ、地中に籠りし陽氣を失ひ、アレ見よ花は枯れ萎む。草木心無しと申せども、お家の凶事を告知らしむ、凡人ならぬ秀衡公の、惠の程の有り難さ。先君御寵愛のこの名木、今より後は此萩を、先代萩と名付くべし」と、詞に實も大國の、花も實も有る宮城野に、今も其名は世に高し。鷲五郎は死物狂ひ、定倉目がけ切付くるを、かい潛つてもぎ取る刀、其儘はつしと首打ち落し、「鷲五郎を討取る上は、兩家の疑念も晴れ渡る、此上は二人の子供、婚禮を取結ばん。ヤア〳〵象潟、取り敢へず銚子々々」「アイ」といらへて象潟御前、心ばかりの祝儀のまなび、三方土器取持つて、二人が前に並ぶれば、明衡頭打振つて、「源五兵衛の忠節にて、慥の證跡出る上は、晝夜を分かず都へ登り、惡人原を取拉がん。斯ごときの小事に拘はり、暫時の延引暫時の不忠、早お暇」と立出づる。定倉暫しと押止め、「忠臣一途の御老人、早逸り給ふは理ながら、過半刑部に一味の中、御身一人參會有る事、氣遣ふ儀には有らねども、恐るゝに德有りとかや、必々油斷なく」「オヽ尤なる御示、錦戸刑部は取るに足らず、貝田直勝梶原が、威勢を假りて忠節を、覆ひ隱す術ありとも、我亦義心を表に立て、誠を以て押す時んば、神國の奇特などや無けん。若しや彼地に變有らば、若君を竊に守護し、間道より馳歸らん事、十日の外は出づまじきぞ。其間の籠城を、堅固に賴む定倉殿」「ホヽ、其儀はちつとも

定倉殿を親と賴み、萬事の差圖に隨ひて、文字摺と中好く添ひ、子孫の榮を忘るゝな。又母とても無い千賀之助、御不便賴むぞ治郎殿」と、忠義に撓まぬ武士も、流石恩愛捨てがたき、身節に徹へる千賀之助、文字摺も正體なく、歎けば共に定倉も、親子の心思ひやり、忍び淚にくれ居たる。襖くわらりと錦戶五郞、「ヤア始終の樣子とつくと聞く、此上は汝等が、息の根留めん」と懷中より、取出す鐵丸庭の面、投ぐると其まゝ燃え立つ狼煙、倶に盛の萩の花、一度に散つて散亂せり。合圖に馳來る以前の曲者、庭先に突つ立つたり。五郞聲かけ、「狼煙を合圖に味方の軍兵、取懸けたる何と〳〵」「されば候ふ術の如く、狼煙を合圖に寄掛けんと、待ちに待つたる刑部が軍兵、定倉殿の下知によつて、こなたに仕かけし焙烙火矢、切つて放せば一騎も殘らず、微塵に碎けて皆殺し、此上は其方一人、最早最期に間はない、尋常に觀念せよ。汝が忍びと賴みし我は、熊川源五兵衞秀景、逆意一味の連判狀、最前我手に入りし上は、親子諸共逆磔、覺悟々々」と呼はつたり。「ヤァ扨は儕は熊川よな、斯くまで仕込みし我大望、汝ら如きが術に乘り、裏かゝれしか殘念やナア。せめてもの腹癒せに某が豫て、仕掛けし地雷火にて、倶に冥途の供させん、覺悟ひろげ」と云はせも立てず、「ヤァ愚々、地中に陽氣有る故に、時ならぬ萩の返り咲、正しく敵の巧にて、地雷の仕掛と測り知り、熊川に云含め、衣川の

暫し詞も無かりける。明衡は勇みの顏色、「勝負の一矢に射勝ちし上は、京都へ赴く伊達明衡、勘當せし千賀之助、行末賴む小治郎殿」と、詞に文字摺千賀之助、思ひがけなく驚く二人、「ホヽ年月の本望達し、嘸御滿足祭し入る、改め云ふには及ばねども、刑部を始め貝田直衞、徒黨を拵へ、鶴喜代君を害せんとする此時節、貴殿某兩人の內、京都へ立越え台朝に達し、事を糺さんと思へども、今諸士の別當たる、梶原平三景時は、錦戸刑部に內緣あれば、此度の決談は、地獄の上の一足飛、生きては歸らぬ此役儀、勤むべき貴殿と某、互に忠義を爭ひしが、死ぬるも跡に留るも、忠義の決著せん爲に、躮どもが弓矢の勝負、射勝ちし方が都へ出立、命を的の對決も、星をはづさぬ忠臣は、武運に叶ひし明衡殿、ホヽお羨しう存ずる」と、詞に明衡莞爾と打笑み、「貴殿と某兩人が、心を堅むる事を知らば、敵心を赦さずして、短兵急に我君を、殺害せんも計られず、敵よりの術に乘り、不和なる體に成したるも、事を延する互の計略、最前取交したる一腰は、死ぬるも生くるも兩人が、忠義を一つにせん計略、又邪智深き鷲五郎、彌不和に見せかけて、事の樣子を刑部貝田へ告知らさせんと我計らひ、武士の身の上は、人界へ生るゝより、君に捧げる身體髮膚、時日を移さず都に登り、佞人原をこと〴〵く、罪を糺して立歸らん。さりながら、老少不定の世の習ひ、父が顏をも能く見置き、都へ登りし其跡は、

に申しても、御返答も成されぬは、お心に一物有るか、忠義には親をも討つ、誠お家に仇ならば、親子の緣をさつぱりと、お切りなされて下されい。不孝には似たれども、不所存なる父上と、一つで無い主君へ言譯、先祖への我忠義、サアさつぱりと勘當との、お詞願ひ奉る」と、口には云へど心には、子として親へ不孝の惡口、勿體なや恐ろしやと、胸へ急きくる血の涙、押へかねたる風情なり。治郞明衞聲あらゝげ、「ヤア若輩者の云はれぬ諫言、親に勘當してくれとは、他人と成つて某に、またも諫を入れん爲か、但し云號の文字摺に、心迷うて其願ひか、何にもせよ親に向ひ、慮外は我に弓引く同然、幸かざる此弓矢、目當の的は襖の繪、雪持松の下り枝、一矢に射當てば望の通り、勘當をしてくれん」と、投出す弓矢定倉も、「ヤイ文字摺、一旦組んだる夫婦の緣、親に換ゆるは女の操、とは云ひながら只一人の我血筋、捨てるか捨てぬは正八幡の、敎へに任す此弓矢、的は襖の松の枝、射當てばそちが望みの勘當、早く〳〵」と親々が、互に詞かはらぬ願ひ、はつと一度に取上ぐる、親子別れを爭ふ一矢、弓天神の冥慮にも、盡果てたるか悲しやと、思へば共に手も震ひ、目當もくるひ引しぼる、弓弦を傳ふ露涙、覗ひ固めて文字摺が、放す手の內はづるゝ矢先、鋭き羽ひゞき千賀之助、目當違はぬ松の枝、射當つる矢先我胸も、碎くるばかり親と子の、緣の切目と思ふにぞ、弓投捨てゝどうと坐し、

寄つて、「先程より申す如く、貝田と縁有る親人故、主君に背く氣ざし有りと、證據を以て鷺五郎が、定倉殿へ讒言は、却て彼等親子が巧、親人と定倉殿、互に疑念を生ぜさせ、一虎潰えに乘ぜん爲、とは思へども日頃に變り、利欲に迷ひし境論、何角の樣子思ひ合せば、若しや誠の不忠にやと、現在血筋の某さへ、疑ふ心の出づる物、今區々の人心、他人の疑尤も至極、お心を打明けて、定倉殿と心を合せ、お家に逆ふ惡人原、一々に糺明し、忠臣の名を上げてたべ」と、詞を盡し利を盡し、孝と忠との一筋に、涙はちすぢの誠なる。明衡は返答なく、諸手を組んだるこたなの一間、障子開いて小治郞定倉、「ナニ文字摺、最前よりそちが願ひは、勘當をしてくれいとな、女の身に似合はぬ望、サ樣子は何と」と尋ねられ、涙ながらに顏を上げ、「嫐ごぜの身の有られぬお願ひ、嘸や憎しと思召す、不孝の罪も辨へぬは、親と〳〵の云約束、祝言せねど殿御ぢやと、樂しんで居る物を、思はぬ今日の爭故、夫婦の縁も是切に、成つたら私や何とせう、どうせう、どうしやうぞいな〳〵。思ひ切られぬ胸の內、いつそ勘當請けたなら、不和な中でも武士の、義理も意氣地も有るまいと、無理な思案も千賀樣に、添ひたいばかりの私が願ひ、人と思召されずと、犬畜生と思し切り、願ひを叶へて給はれ」と、おぼこ育ちのあやもなく、譯もなみだにくれ居たる。千賀之助は父の顏、やゝ打寄り恨めしげに、「いか程

家育、合す刃に打つ非太刀、流石泉が妻なりし。二人も顔を見合して、定「ム、實にも〳〵、負うた子に教へられ、淺瀬を渡ると譬の如く、今兩人が打果せば、家の斷絶先祖へ不孝、但し汝が巧の次第、急度詮議するまでは、傍を放れぬ定倉」と、納むる刀明衡が、膝元へ投出せば、此方も同じく刀を鞘。明「ホヽ明衡が魂も定倉に付添うて、汝が底意白狀まで、互に離れぬ詮議役」定「オヽ明衡が魂は定倉が急度張番」明「定倉が魂は明衡が急度糺明」定「後程迄に」明「サ仕上を見よ」と、詞の切刃詮議の鍔際、國に目貫の兩家老、別るゝ一間象潟も、暫し休まる胸の中、連れて奥へと入りにける。樣子伺ひ鷲五郎、出づる庭先差足拔足、傍を見廻し以前の忍び、共に木陰を奴の桝平、「鷲五郎樣」「シイ聲が高い、親刑部殿の計ひにて、伊達泉兩人を同士討させんと、忍びの計略圖をはづさず、爰までは仕果せたが」「成程々々、疾くより入込む此の桝平、又國に殘る一味の面々、彌々二心なき血判、コレ此一卷に」と差出せば、「ホヽ出かした〳〵、此連判を明衡定倉に見付けられては事むつかし。コリヤ汝は是を親人へ、右の樣子物語れ、必ず人に見咎められな、早く〳〵」に曲者は、肌にしつかと納むる一卷、「然らば拙者は是より直」「オヽサ〳〵早急げ。ナニ桝平は跡に殘り、某諸共何かの手番ひ、早行け」と、奥と表へ別れ行く。隔つ親子の仕切の襖、明けても明かぬ明衡が、跡に附添ふ千賀之助、父が前に差

な、其方の巧を仕損じ、詮方なさの破れ口、先づ其方から白状なされ」「ヤア舌長し小治郎定倉、某に白狀とは、ナヽ何を以て」「アイヤ鶴喜代君を亡き者にせんと、種々の巧を我能く知る。最前召捕る曲者が、懐中の狀の文體、人知れず定倉を害せん巧の證據の一通、披見せよ」と以前の狀、差出せばとつくと見、「ハテ巧んだり拵へたり、似筆を以て某を、謀らんとは愚愚、遺恨有らば武士らしう、名乘掛けてなぜ勝負はせぬ。腰拔侍を相手とするは、刀の穢と思へども、イザ立上つて勝負々々」「ホヽ何事も露顯すれば、所詮叶はぬ死物狂ひ、狂人同然の明衡なれども、望に任せイザ勝負」サアく\/\と互に鯉口、ちつとも赦さぬ氣配り目配り、とくより此方に立聞く象潟、心を冷す氷の刃、一度にきらめく電光石火、かつしと合うたる刃先と刃先、胸の鎬はこぼるゝ如く、勇士と勇士の一世の晴業、裲ひらりと白刃の刃、「マアマァ待つた定倉殿、明衡様もマア待つて」と、我身をしづにどつさりと、二人も尻居にどつかと坐し、「ヤア武士と武士の爭ひを、女童の知る事ならず」「オヽサ奥方留立して、怪我召さるゝな」と引取る刀、「マアく\まあ云ふ事を聞いてたべ、女童とおつしやれども、先程からのお二人の爭ひ、互に證據は有りながら、夫と分らぬ其内に、打果しなされては、兩家共に滅亡し、先祖へ對して御不孝と云ひ、主君へは不忠不義、とつくりと御思案」と、詞立派に武

てぞ引据ゑたり。定倉封じ押開き、「何々、其方今日屋敷へ忍び入り、小治郎定倉討取りなば、當座の褒美として、金子三百兩遣すもの也、猶恩賞は功に依るべし、伊達の治郎明衡判。ム、さすれば彌々彼が悪心、根深くも巧んだりな。出かした栂平、下郎に似合はぬうい奴うい奴、今日より後日末長く、武士に取立て遣づてくれん」「ハッ〳〵有難く存じ奉る、此上ながら何時々々までも、お目掛けられて下されうなら、忝う存じ申すでごはりまうする」と、悦び勇む折こそ有れ、「明衡樣御出」「ハテ合點の行かぬ、斯くも仕込みし今日の時宜、此頃不和なる我屋敷へ、明衡來るは子細ぞ有らん。栂平、曲者取逃すな」と引立てさせ、座席を改め待ち居たる。早程もなく、伊達の治郎明衡、家に杖突く年ばいや、腰に梓の弓取の、張と意地との岩疊作、袴のひだも角菱有る、不和なる中の中敷居、目禮ばかりつと通る。定倉も一揖し、「珍らしゝ明衡殿、いつぞやより何となく、中絶致せし某が屋敷、忍び寄らぬ只今の入來、サ子細ぞ有らん」「ホヽ成程、伊達泉の當家は、誠に車の兩輪の如く、何れを何れと甲乙なく、國の政事を預る當人、水魚の如く有るべきを、何故に忍びを入れ、某を討たんとは謀りしぞや。證據は忍びが所持の一通、貴殿よりの賴の狀、コレ見られよ」と投出す。定倉取上げ打まもり、「ハヽヽヽヽ年老いぬれば麒麟も駑馬、流石に名を得し明衡も、刃金が棟へ廻りし

に違ひはせじ、イデ逆徒原一々に面白させん」と立上れば、「ヤア何處へ〳〵、案外なる素野郎め、某親子を反逆とは、圖ない事を巻出したな。其はしやいだ頭骨を、切り下げてくれんず」と、鍔打鳴らしつゝ立てば、「オヽさう言ふうぬを」と鯉口くつろげ、詰寄り詰め寄る血氣と勇氣、既に斯うよと見えたりける。定倉押しとめ、「五郎殿お控へなされ、千賀之助も控へてをれ。明衡が明白の上は、君の上意を頭に戴き、討取るに何の手間隙、今兩人刃傷に及び、此事世上に流布有らば、國の騒ぎ大方ならず、事落居するまでは、千賀之助は此方へ人質、最早籠中の鳥同然。五郎殿には大切なる討手の役目、何事もお構ひなく、奥の一間で御休息、御酒一獻召上られよ」「コレハ〳〵某も長途の勞れ、然らば奥にて御馳走に預らん。コリヤ千賀之助、此世に居るも暫しが中、賴寺へ人でも遣り、似合うた樣に念佛でも唱へて待つて居れ。ヤ定倉殿御案内」と、欲惡不道の犬侍、力み詰寄る千賀之助、押へる定倉鷲五郎、打連れ一間へ入りにけり。風かあらぬか萩の本、そよと物音忍びの姿、邊を窺ひ〳〵足、出合頭に栂平が、見るとも知らず曲者は、奥を指して駈入るを、「ヤア忍び入るは何者ぢや」と、聲掛けられ、振返つて物をも云はず、切つて懸るをかい潜り、刀手繰つて擔投、拍子に落つる一通を、疾くより後に定倉が、拾ひ取る間に栂平が、何の苦も無く曲者を、縛し上げ

伊達の治郎明衡さ、承れば梶原殿の御意と僞り、貴殿の領地へ棒杭打たす、是などが佞人原と馴合つて、定倉殿、貴殿に一揆起させ、儕等が館へ引寄せ、手を出さずして討取る術、ナサ御合點が參つたか」と、同士討さする底巧。千賀之助つツと出で、「ヤア聞きにくし鷲五郎、棒杭は君よりの御差圖、父明衡か反逆とは、慥な證跡有つての事か」「ハヽヽ、同じ穴の子狐め、化の皮が顯はれかゝるで、悶くは〳〵。此鷲五郎を誰とか思ふ、當時肩を並ぶる者も無き、錦戸刑部が二番生、女童が使の樣に、イヤサア其證據は抔と、口を閉ぢて歸らうか、アノ戞な大馬鹿者めが、汝ごときの生白けたしやツ頰で知る事でない、頤をたゝかずと、其方らの方へ片寄つて、ちよ〳〵こなつてござい〳〵。イヤ定倉殿、貴公へ見する物有り」と、懷中より一通を取出し、「此一書披見召され」「ム、松枝節之助殿、伊達明衡、ハテいぶかし」と眉に皺、開き見るより恟りし、「明衡妹政岡と心を合せ、鶴喜代君を毒殺に及ぶべし」、定倉事は、某存ずる旨有れば、宜しく事を計らはん。コリヤ是れ明衡自筆の狀、ホイ」「何と御覽じたか、身動きならぬ此一通、ちよつと小口がこんな物さ、迚も遁れぬ明衡親子、可愛や命が宿腐つたか、ヤモ頰を見るも穢らはしい」と、飽くまで惡言嘲哢に、たまりかねて千賀之助、腹に据ゑかね、「ヤア詞が過ぎる、察する所汝等親子、貝田勘解由が巧にて、父を科に落さん爲な、我が推量

尤々、併し儀に依つて一命は塵芥よりも猶輕し、君父に仕へる千賀之助、若し父明衡君に弓引く心有らば」千「ハヽァ仰までも候はず、君の爲國の爲、父明衡を打つて捨て、腹かつさばき父諸共、冥途の魁」「ヤレ其詞が武士の誓言、ハテ逞しや健氣や」と、流石血筋の縁に連れ、千賀之助が心の中、思ひやつたる目に涙、見合す顏の一雫、花も萎るゝばかりなり。折柄下部が手をつかへ、「錦戸鷺五郎樣御入なり」と知らすれば、「ハテ心得ぬ、刑部が躮當國へ來りしとは、何にもせよ是へ通せ。象潟、娘も、次へ立ちやれ」と追立てやり、衣紋繕ひ待つ間、程なく來る錦戸鷺五郎、都育と名にも似ぬ、節くれ立ちし角前髪、疊障りも荒けなく、さも横平なる頰構、上座にどつと押直れば、定倉は威儀繕ひ、「ホヽ珍らしや五郎殿、先以て遠路の所御苦勞千萬、御用の趣承はらん」と手を付けは、「サレバ〳〵、拙者遙々と參る事餘の儀にあらず、當時都には奸佞の者多く、やゝともすれば主君を害し、家國を押領せんとの企、愚父を始め貝田某、日夜を別たず寢食を忘れ、さるによつて間者を入れ聞きたる所、其逆徒の張本といふは當國に在りと、事明白たるによつて、貴殿と某申し合せ、國賊どもを搦捕り、一々に首を並べ、國家の歎きを鎭めん爲、夜を日に續いで參つたり」「コレハ〳〵存じも寄らぬ大變、承つて驚き入る。シテ其反逆人とは何者でござるな」「サレバサ、其逆徒といふは、貴殿と縁有る

しけれども、云號の千賀之助樣、一つ屋敷に居ながらも、まだ祝言もせぬ殿御、父上のお情で、どうぞ今宵夫婦の盃、お許しなされて下さりませ」と、父には願ひ夫には、聞けく\がしも戀の風、胸の結ぼれもつれ糸、只一筋の願ひなり。「ホヽ尤なる願ひなれども、其盃は追つての事、と云ふ其子細は、明衡が此頃の行跡、刑部貝田に合體せしか、先つ頃より不和の中、彼が心底さぐり見て、惡說に極まらば、其時こそ改めて、明衡方へそちが輿入、若し又惡事に組せしならば、言ふまでもなく、叶はぬ緣と諦めよ」と、聞いてがつくり文字摺が、いつ果しなき盃の、延びる思ひの遣瀨なさ、淚隙なき有樣に、母象潟が引取つて、「此頃上使儲の時、明衡樣の御機嫌損じ、夫故自ら伴うて、此館に置く千賀之助殿、折を見合せ、詫言は自が心に有る。其上父御が明衡樣にお逢ひなされたら、祝言もつい出來る、必ずきなく\思やんな。此國にて明衡定倉といへば羽翼の臣、代々忠義を忘れぬ家、明衡樣に限り、よもやさう言ふお心の」「イヤイヤ奧、さうで無い、水は方圓の器に隨ふ、油斷ならざる此時節、移り易きは人心」と、詞の中に千賀之助、定倉が傍に差寄つて、「父明衡が胸中は、定倉樣こそ能く御存し、主君を忘れ非道に組し、同天は戴かず去ながら、如何なる天魔が見入にて、逆徒の氣ざしも候はゞ、一家同友の御誼、御諫言なし下さらば、生々世々の御厚恩」と、淚と共に願ひける。「ホヽ切なる願

れ、九獻でも上げたいと、此子が手づから切り刻み、所變れば品とやら、お氣放じに酒一つ、お上りなされて下さりませ」と、會釋こぼるゝ挨拶に、「オヽ氣が付いて心遣ひ、過分々々、花に心を移し居れば、鬱氣もせず、結句土なぶりは身の養生。ナニ栂平は次へ起つて休息せい」「ナイ〱」と、其儘部屋へ立つて行く。定倉は打くつろぎ、「イザ一獻」と取上ぐる、娘が酌に一つ請け、「此盃は千賀之助、其方へ指さう、一つ呑みやれ。此頃自身庭の掃除を勤むるも、秀衡公寵愛有りし此萩、夫故庭を清くするも、先君に仕へる心、時ならぬ返咲も、お家の吉事を告ぐるならん。此もとあらの木萩に寄せ詠みたる歌は、アヽ何とやら、娘そちや覺えずや」「アイ、成程其歌は、秋萩の古枝に咲ける花見れば、元の心は忘れざりけり」「オヽいかにも〱、ある人萩は一年づつにして枯れ、若葉より花咲くを、古枝に咲けると詠みしはと難ず。此萩草花にあらず、木なり、一名を唐萩といふ、依て弓などに是を作る。武勇に長ぜし秀衡公、寵愛ありしも尤々、花の色も異木に勝り、餘國に雙ぶ方なき名木、先君御祕藏の此木萩、一年に二度の樂しみ、去年と今年を秋と冬、ハテ面白の眺や」と、汲みかはしたる盃の、數々廻る年毎に、斯くぞ有りたき風情なり。父の機嫌に文字摺が、何か願ひの有顏を、見て取る母が、「コレ文字摺、父上へ今の事、ちやつと〱」と敎へられ、面映ゆげに手をつかへ、「徒者と思召すも恥

はいの。家來ども乘物遣れ」と引添うて、歸るは粹の水上や、衣川へと立歸る。

第八

荻の上風浮氣はいやよ、しめて寢る夜はナ、下紐解いて、荻の下露わしや恥かしい。武名は國に綻びぬ、衣川の館には、泉の小治郎定倉、花麗を好まぬ奥座敷、庭は代々經るもとあらの、小萩の花の歸り咲、時を違へし人心、穩ならぬ冬の空、庭には主從三人が、手々に竹杷箒目の、落葉枯葉を取捨てゝ、打水玉に置く露も、紛へて蟲とや見えぬらん。主定倉機嫌好く、「ヤ千賀之助、今日は其方が手傳で、思ひの外早い仕舞、嘸草臥で有らう、休息しやれ」「ハア是は痛入つたるお詞、お前樣こそ嘸お勞れ、モウ何事もお構ひなく、平に御休息なされませ」と、勸めに定倉傍への床几、腰打ち掛けて烟草盆、煙管取上げ薰らする、煙に憂きを吹きはらす、花に餘念は無かりける。飛石傳ひ歩み來る、定倉の奥方象潟御前、跡に付添ふ文字摺御寮、年も二八の振の袖、心ばへなら器量なら、京恥かしき品形、妧はしたが取りぐに、小竹筒組重數々を、床几の元へ持ち運ぶ。奥方はしとやかに、「御祕藏の花の返り咲、いつも盛りの時分と違ひ、寒氣烈しき冬の空、毎日〳〵庭へ下り、御持病でも發つてはと、文字摺に氣を付けら

のが御無念ならば、お相手に成りませうか、サア御返答承はらん」と、懐刀抜きかけて、詰寄り詰寄る柳腰、傍にあぶ〱氣遣ふ娘、明衡は高笑ひ、「ハ、、、、ハテつべこべと喋つたりな、所詮女は相手にせぬ、御自慢なさるゝ御亭主に、泡を吹かせてお目に掛けん。是よりは屋敷へ歸り、不所存なる躮めを眞二つに打放し、内縁をさつぱりと、切つて仕舞へば何處からも、手を入れられん氣遣なし。イザお使者にはお先へ」と、傍に屹度目を付けて、屋敷へこそは立歸る。待つ間遲しと乘物より、飛んで出でたる千賀之助、「日頃には似ぬ父の詞、刑部貝田に荷擔して、お家を奪ふ巧よな。ヤ何にもせよ御異見を」と、駈行く氣相、粂「マア〱待つた千賀之助、今明衡の詞と云ひ、若輩者の意見立、聞入れぬのみならず、却て刃にかゝりなば、サ、お主へ忠義は何の命で、マア急く所ではないはいなう。ガ今日の爲體、明衡殿の心に一物、所存有つてか敵へ一味か、善惡分かる夫までは、千賀之助をこつちへ人質、牢輿がはりの此乘物、娘の部屋へ押込めて、日の目拜まぬ座敷牢、屏風の内の轉責、夜もとつくりと寢さしはせぬ、さう心得て覺悟しや。イヤなう文字摺、假初ならぬ大事の人質、そなたに番を云付ける、取迯さぬ樣相輿に」と、恥かしがるを手を取つて、無理に押込み「オヽソレ〱、いつ駈出さうも知れぬ囚人、肌と肌とを締め合うて、用心堅固に油斷せまいぞ。オヽマアノ嬉しさうな顏

お方ぢやない。さうして常からお達者で、乗物は大嫌ひ、お屋敷にやなど御座りませう。サ早うお歸りなされませ」と、何を云ふやらしども無き。幕の内より羽根川丹下、象潟御前伴ひ出で、「ヤコレハ〳〵明衡殿、先刻よりお待ち申す、が就いては元領分の儀、拙者内外取はからひ、十分の棒杭打ち、漸只今休息の所、嘸御滿悅でござらうの」「ヤコレハ〳〵遠路と申し、御懇切の御計らひ、身に取つていかばかり、某も今朝より早速參る筈の所、先君の廟所へ參詣、心外の不沙汰御宥免に預りたし。が則ち躮千賀之助、御使者儲の其爲に」「ア丶イヤ〳〵其儀はお構ひ御無用、象潟殿の御取持で、種々御馳走に罷成る」「ハテナ、饗應の役人に付置く躮は此場に無く、頼みもせぬに横合よりの取持達、世には物好な者も有る物、ナウお使者」と何處やらに毒有る詞聞咎め、「イヤ申し明衡殿、其お詞は誰におつしやる、最前是に千賀之助殿、病氣の體に見えし故、參りかゝつた氣の毒さ、お世話申すも一家の誼」「ヤア其一家氣にくはぬ、心善からぬ定倉が、娘の緣を幸に、我躮を取込んで、改め給はる領分を、割返させん其爲に、お使者への追從輕薄、其方の猿智慧か、但し定倉が云付か、ア卑怯至極な追從侍」「ヤア聞きにくし明衡殿、緣談は內證事、京都のお使者もござる前、聞捨てには成りがたし。定倉が領分は、先祖の鑓先鈍らぬ所、表裏を以て郡內を貪り、掠める明衡殿、平たく云はゞマア國賊、斯く申す

い者は若い同士、ガ象潟殿には御案内」一「然らば左樣、斯うお入り」と、塗り廻したる追從も、深き心の奥方は、伴ひ幕へ入りにけり。千賀之助は默然と、思案取り〲後には、心もだく〲文字摺が、「イヤ申し千賀之助樣、お心惡いが定ならば、御背中でもさすりませうかえ」「オヽ緣なればこそ深切に、問うて下さる忝い。ガ只心得ぬは父の胸中、此頃はそなたの父定倉殿とも中好からず、さすれば主人へ不忠の基、が但しは深い思召有つての事か、何にもせよ、モどうも思案に落付かぬ」「アレまだあんな餘所事に、紛らす樣な事ばかり、云號ばかりにて、いつ呼迎へなさるゝやら、ほんに出雲の神樣へ、懸けた願の驗にて、思ふ殿御へ嫁入を、今日よ明日よと待つ月日、短い冬の一日を、千年と思ふ心根を、ちつとは推量してたべ」と、娘心の一筋に、思ひつ積りし怨泣。千賀之助も稻船の、いなには非ず穗に出でて、靡く心の向ふへ人音、千「アレ〲あそこへ親仁樣」文「本に私が心も知らず、惡い所へ明衡樣」千「かういふ猥らな體見せたら、直に勘當請くる事、コリヤマアどうせう」木隱も、七熊ならぬ乘物へ、ちひさう成つて屈み居る。伊達の治郎明衡、廟參の下向道、幕際近く立止り、「夫なるは文字摺ならずや、京都の使者は早お入りか、躮千賀之助今朝より此所へ參り居る筈、が其方は知らずや」と、樣子知つたか知らぬのか、氣味惡さうに文字摺が、「サア千賀樣はたつた今まで、私と咄やなどする

人は知らず某へは、逆様に這ひつくばひ、馳走答拜すべき筈」千「不快でござります」「ヤ何とおいやる」千「サア此四五日はきつう病氣が差發り、一向人言も分りませず」粂「モ夫故私は一家の事なり、けふ御馳走の其役に、頼まれました事なれば、モ何事も御遠慮なう、仰付けられ下されよ」と、此場の時宜を夫ぞとも、言はぬ色なる一包、上使の袖へ差入るれば、ちやつと袂でしびいて見、俄に作るほや〳〵笑顔、「ハヽヽヽ、扨はさういふ事で有つたか、夫は近頃御苦勞千萬、ガ千賀殿も病氣と有れば、養生が大事でござる、早く藥を用ゐさつしやれ。ガ粂潟殿が取持なさるれば、マウ其元は是にござるにも及ぶまいさ、身どもとても疳積持、發りさうな其時は、彼の今のナ、ソレ萬金丹か金勝丸、金の字の付く妙藥を、給べると忽ち直ります、が是かう幕の內へ參り、疳癪の養生ながら、御馳走に預りませう」「夫は何よりお嬉しい、イヤナウ文字摺、千賀之助殿のあの病氣も、大體では癒るまい、モそなたは近頃大儀ながら、跡に殘つて介抱頼む、ガ但しは母が殘らうか」「アノマアかゝ樣のおつしやる事、大儀な役を勤めるが、ちとなとお前へ私が孝行」粂「オヽそれ〳〵、申しお使者樣、マ孝行な娘ではござりませぬかいな」玄「イヤハヤ神妙な事でござる、モあれなら娘御の御馳走でも、隨分とよからうが、モどう云うても若いだけ、今のナ、ソレ萬金丹、金花咲く陸奥に、心が付かぬと我等が迷惑、若

最前よりの家來が不禮、御立腹は御尤、慮外の段は幾重にも御了簡下さらば、忝う存じます。イヤなう藤治、御主人様より我夫に、數代預る領分なれども、他家へ上ぐるといふではなし、同家中の明衡様、殊に内縁有る家へ、お預けなさるを其様に、マ何を爭ふ事が有る。御覽じませ、田舍武士と申す者は、面々が勝手ばかり、モ必ずお氣に障へられて下りますなえ。コリヤ其方は此様子、定倉殿へ早く申せ、イヤサコリヤ何事も此胸に、ナ合點がいたか、サア〳〵早う」に是非なくも、主命何と詞さへ、無念を堪へ立歸る。跡打見やり、丹「イヤ何象潟殿とやら、其元は定倉の奥方とな、領分の狭められ、嘸無念にござらうが、主命なれば是非ない事と、早く諦めさつしやるがよい。ヤコレ千賀之助殿、其元親父預り地の外、十分の棒杭打たせ、嘸大慶にござらうの。モ誰しもかやうの目出たい事、あやかる爲に幕の内で、お盃を頂戴致さう。ヤコレサ、モ兎角のいらへもさつしやれぬは、どうでござる、サ其元の御利分に成る事、刑部殿の差圖なれども、一つは拙者の働を以て、サかやうに事を取計らふも、此國に澤山ある、カノ、エ、金花咲く陸奥の、な金花咲く御馳走に預らんと參つたに、不興の體は心得ず、ガ但しは使者を侮るのか」と、氣相變れば象潟は、上使の前に差寄つて、「お氣放じにお茶一つ、召上られて下さりませ」「イヤ其元の馳走は請けぬ、かつふつ構ひ召さるゝな。ガ心得ぬは千賀之助、餘

文字摺」と傍へなる、床几に休らふ程もなく、京都よりの使者羽根川丹下、伊達千賀之助伴うて、しづ／＼と出來れば、夫と見るより萩原藤治、二人が前に兩手を突き、「先以て遠路の御光駕御苦勞千萬、拙者儀は定倉が家來萩原藤治、憚ながら一つのお願ひ、先祖秀衡殿の目鏡を以て、主人定倉代々預る領地の内、今改めて明衡殿の支配地に罷成る事、主命默止しがたけれど、何とも拙者其の意得ず。此儀遺恨の元とならば、終には兩家の不和と成つて、自と忠義を忘るゝ道理、今一應了簡有つて、御割戻し下されかし」と、恐れ入つてぞ願ひける。千「ホウ萩原の願ひ尤至極、定倉殿と親明衡、兩人遺恨を差挾まば、鶴喜代君のお爲もいかゞ、コリヤ丹下殿御思案有つて、御割戻し遣はされまいか」羽「成りませぬ、何事も皆此胸に、サ何にも云はずと控へてござれ。ヤイコリヤ若い者、此の領地の事、主人鶴喜代の指圖ばかりと思ふか、忝くも梶原殿、内意を以て御仰、其方如きの知る事ならず。上使に向つて過言を吐くは、主人定倉の云付ならん。後日の祟りをヤ待つてをれ」と、嵩にかゝれば此方はむつと、「鶴喜代君の仰と有らば、了簡の付くべき品も有らんが、先祖秀衡武功によつて、鑓先にて取つたる此國、他家の指圖を請くる樣な主人で無い」羽「ヤア緩怠なり其頤骨、切下げてくれんず」と、切刃廻せばこなたも身構へ、已に斯うよと見えければ、象潟中へ分け入つて、「マア／＼お待ち下されませ。自は定倉が妻象潟と申す者、

度に、そこらの石を拾つて來て、今の橋でも叩いた〳〵」「おつと合點」と專内是非內、陰を打つ役ぐわたり〳〵、ぐわた〳〵〳〵、先此の如くと踏んばたかる。專是「ヨウ〳〵菊之丞樣〳〵」江「椎の木四五本小楯に取り、赤澤山の山千鳥、本尊かけたか掛千鳥、とんびはとよう烏はかかア、變つたハレマ對面ぢやなア」と、何を云ふやらやくたいも、知らぬが佛雙々が、やつちや〳〵と褒めにける。江戸兵衞ハツト心付き、「かうしてべら〳〵遊んだら、また頭めが叱るであろ。尻の來ぬ內サア〳〵」と、箒かたげて銘々に、とばかは彼處へ急ぎ行く。天さかる、鄙とはいへど風俗は、都に恥ぢぬはけし地の、歩を拾うて象潟御前、娘文字摺伴うて、乘物釣らせしづ〳〵と、とある木陰に立休らひ、「イヤなう文字摺、けふは御先祖秀衡樣の御命日に相當れば、定倉殿廟參の筈なれど、公用繁き中なれば、夫に代つて自が、歩路を行くも君への恐れ、そなたを一所に伴ふも、都より上使の御入、御馳走役はそなたの夫、祝言はまだ爲ねど、云號の千賀之助殿、餘所ながら顏も見せたし。去ながら屋敷からは餘程の道、そなたも定めてしんどかろ」「私よりは母樣の、常からおひろひなされぬ道、嘸お窮れでござりませう。お使者儲けの此床几、ちとマアお休み遊ばしませ」と、親子の中も武家は武家、堅い程尙可愛らし。「コリヤ〳〵家來ども、暫く休息する間、乘物はそこに置き、木陰に休んで歸りを待て。サア

知らぬな」二人「イヤ〳〵知らぬ」江「ほんに知らぬな、知らずばさらば遣つて聞かさう。併し聲色遣ふには、歌が無くては成らぬが、わいら唄つてくれないか」專「ハテ歌というても在郷者」是「臼引歌より何にも知らぬ」江「イヤ〳〵聲色の歌は文句が極つて有る。ア、何とやら、オヽそれそれ、雨の降る夜は一入ゆかし、此文句に何なりとも、節を付けて唄つてくれ」專「そんなら節は何でもよいな。雨の降る夜はナ、一しほゆかし」江「東西〳〵、只今遣ひますが市川團十郎でござります。金ならたつた三百兩で、可愛い男を殺すか、アヽ金が欲しいなア、二八十六で文付けられて、二九の十八でつい其心ぢやはいなア」專「とつともうえらいもんぢやはいなア、ヨウヨウ團十郎樣〳〵」是「ハ、團十郎は女役ぢやな、今のは大方十七八な娘に成つた所と見えて、可愛らしい風俗までが、思ひ遣られて面白いはい。サア〳〵ま一つ所望ぢや〳〵」江「今度はかう金平か金時の樣な、强い事がよかろ〳〵」と、請のよいのに頭に乘つて、江「强い事ならオオそれ〳〵、そんなら瀨川菊之丞」「こいつは又可愛らしい名ぢやが、若し菊之丞は女役ぢやないか」「イヤ〳〵江戸一番の敵役、丈の高さが六尺餘りで太り肉、たとへて見ようなら誰で有らうぞ、オヽソレ〳〵、此國から出られた、丁度谷風と云ふ男、顏を眞赤に塗り散らし、橋懸からぐわたり〳〵と、イヤ聲色ばかりは面白ない、ついでに身振もして見せう。おれが足を踏む

四五反持つておぢや。勘三御覧じたで御座りませう、羽左衛門もきつい評判でござります、エ
エ判取、などとやらかすは」専「ハテ扨夫は賑はしさうな事ぢやな」是「したが其勘三羽左衛門と
は、どのお屋敷の御家老だ」江「エ、コイツハ生得田舎の芋掘だ。コリヤ其勘三羽左衛門といふ
はな、日本一の歌舞妓芝居、イヤ又其繁昌が見せたいなア。役者と云ふ物がたんと有つて、義
經をする時は義經、金平は金平、傾城は傾城と、それ〴〵に分かる所が妙だは。夫をわい等に
見せたいなア」専「見たいなア」是「ぢやが此樣な遠國に生れては、夫も一生得見ずに、仕舞うで
あろ」と雙々が、打萎るれば、江「道理々々、去ながら江戸中に生れても、屋敷方の奥女中、又
町方の奉公人、芝居を見るは一年に、漸と一度か二度、其樣な人には彼聲色でたんのうさす」
専「ナニ聲色とは聞かない染色だな」是「エ、蒲色の事であろ、但は萌黄か花色か」江「ア、イヤ
イヤ其樣な事ぢや無い、今云うた役者の聲柄を、とつと其役者がそこへ出た樣に似せるのぢや。
おれも江戸に居た時は、其聲色を遣ふ事が大名人、聞人が有るなら聞かしたい」と、口から出
儘の太平樂、聞いて皆々舉り寄り、「夫は何より面白かろ、芝居を見る事は成らずとも、せめて
其蒲色とやら聲色とやらが聞きたいなア、どうぞ一口所望ぢや」と、せがみ立てられ、今更に
知らぬとは云はれぬ時宜、高で向ふは田舍者、知らぬを當に押強う、江「そんならわい等は彌々

ど、大方中は蜊の酢和、鮪の刺身きらずの煎上、鱠こはだを魚田にし、夫から段々長じて來たら、湯豆腐などと奢るであろ。コリヤ江戸兵衛、我は其様な料理をば喰つた事は有るまいな」江「テモ扨も此奴はきつい下卑藏、喰物の事ばかり吐かし居る、忝くも此江戸兵衛、水道の水で育つた男、其様な卑劣な事は御存じ無いはい」亭「コイツハ〳〵僭上をぬかすがな、江戸でも、大方裏屋の九尺店、一つ竈に割鍋懸け、此頃は米は高し、其日々々の小買であろ」江「コリヤヤイ〳〵、頤の動く儘、様々と人の店探しするがな。忝くも此男の、住みし所を云つて聞かそか」亭「ドレ聞かうか」江「云ふぞよ」亭「聞くぞよ」江「抑此男の住みたる所は、淺草見附の邊りに於て、島屋といへる現金店、先づ其間口が五十間、奥行が五十五間、土藏作りに家を建て」二人「ヤア」「藤井と書きし暖簾を掛け、番頭手代子供まで、六百人餘の人を遣ひ」二人「ヤア」江「某は其中で」亭「番頭殿か」江「イヤ飯焚殿ぢや。本に人の行末と白水の流れ程知れぬ物は無い、江戸の者が奥州三界、わい等と付合ふも他生の縁、イヤ又江戸の繁昌が見せたいはい。先づ現金店と云ふ物はな、手代衆が二百人ばかり、抹香盛つた様にづらりと並ぶと、店に子供が立つて居て、お這入りなさいやせう、是へ〳〵。時に女中抔來ると、お出でなされませ、今日は長閑にござります、此間の地合を最一度御覽じませ。エ、子供や、ヘノサ位の八丈かはり縞十

まし　三重出でて行く。

第七

専「サア〳〵休め〳〵、おらが旦那明衡殿の、人遣ひが好いと聞き、跡の季から住んで見たが、此頃の閙しさ、是では體が續かない」是「オヽそれ〳〵、専内が云ふ通り、朝から晩まで働き通し、其上に京都から、上使とやら檢使とやら、今日此處へ來ると云うて、あの樣に幕打廻し、饗應ぢやの御馳走のと、酒や肴で交ぜかへす、殘らずあれを喰ふであろ。おいらは素口空腹で、寒晒の此尻を、明六つに御戸帳開き、夜九つに閉帳して、著のみ著の儘轉りとやるは、無便事では無いかいやい」専「コリヤ是非内が云ふ通り、中間の身の上程、打見には美々しくて、無便者の上は無し。さりながら悔むな〳〵、此身の上にも樂しみ有り、最前幕へ運ぶ内、ちよろりと曲めたコレ此樽、三人寄つて呑まうぢやないか」是「是は出かした素早いやつ、肴などとは榮耀の沙汰」と、芝にべつたり毛だらけな、尻かたばみに押直り、指いつ指されつ、食べつ押へつ呑む程に、酒もよい程廻り口、江戸兵衞茶碗下に置き、「ア、何ぞ肴が欲しいなア、アノ幕の内にこそ、肴はたんと有るならん」専「ソリヤ知れた事、此専内が運ぶ内、一々蓋は取つて見ね

事叶はず、態と惡事に一味して、まづ斯う手めを上げよう爲、鶴喜代君と千松を、入替子と云うたも小卷、夫故に榮御前、うま〳〵此場を歸りしも、裏の裏行く匕加減、サア眞直に白狀」と、忠と不忠の喰合せ、毒藥却つて藥と成る、顏に似合ぬ配劑は、類ないぎの手柄なり。モウ是までと八汐が懷劍、心得政岡請流す、互に嗜む太刀さばき、手を盡したる二人の女、我子の恨一心に、突込む懷劍打落し、直に切込む八汐が肩先、ひるむを捉つて突通され、虛空を摑んで悶き死、惡の報いは忽に、心地よくこそ見えにけり。「手柄々々」と沖の井小卷、共に悅ぶ折からに、物音人聲騷がしく、「アノ人音は緣の下、油斷ならざる若君の、御身の上も氣遣なり。ヤア妼中、燭々」はつと答へも銘々手燭、手んでに一腰長刀も、閃めき渡る緣の下、身は鐵石の節之助、寄りくる忍びを人礫、はらり〳〵と投げ散らす。物の文色も暗紛、丈拔群の大鼠、口にくはへし系圖の一卷、飛鳥の如く駈行くを、透さぬ松枝小柄の手裏劍、鼠の頭忽に、ぱつと燃え立つ焰と共、すつくと立つたる異形の姿、「アヽラ不思議や、密に宿直の緣の下、斯く取り圍みし曲者ばら、騷ぎに紛れ現れしは、群に勝れし大鼠、正しく忍びの幻術なるか、ハ、ハヽ、怪しやナア」「此一卷を奪はん爲、大願成就嬉しやなア」と聲は遙に節之助、「曲者待て」と聲より早く、はつしと打つたる以前の小柄、心得松枝忍びを楯、胸先血煙り曲者は、跡を暗

て人らしい者の手に懸つても死ぬ事か、素姓賤しい銀兵衛が、女房連の劒に掛り、なぶり殺しを現在に、傍に見て居る母が氣は、どの樣に有らうどう有らう。思ひ廻せば此程から、唄うた歌に千松が、七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬと、歌の中なる千松は、待つかひ有つて父母に、顏をば見せる事もあろ。同じ名の付く千松の、そなたは百年待つたとて、千年萬年待つたとて、何の便があろぞいの。三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物、喰うなと云うて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ樣な、胴欲非道な母親が、復と一人ある物か。武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや、死ぬるを忠義といふ事は、何時の世からの習はしぞ」と、凝固まりし鐵石心、流石女の愚に返り、人目無ければ伏し轉び、死骸にひつしと抱付き、前後不覺に歎きしは、理過ぎて道理なり。後にすつくと八汐が大聲、「何もかも樣子は聞いた、こつちの工の妨女、己も生けては置かれぬ」と、詞の一間押明けて、「ヤァ不忠不義の銀兵衛夫婦、工の次第白狀せよ」と、立出づる沖の井、「ヤァ此八汐に白狀とは」「オヽ其證人は爰に在る」と、云ひつゝ出づる顏見て愡り、「ヤァそちや小卷」「オヽ好い證人であらうがの、夫道益に云付けて、無理に毒藥調合させ、此事外へ洩らさうかと、よう夫を殺したな。夫の敵と思へども、女の身の討つ

込みしそなたの願望、成就して嘸悦び」「エ、何とおつしやる」「ア丶イヤ、モ隱すには及ばぬ、東西分かぬ内よりも、取替へ置きしそなたの子の鶴喜代が身に恙なう、義綱の誠の躮千松が此最後、嘸本望で有らうなう」「エ丶こ」「オ丶取替子の樣子は先達て知つたれども、若しやと思ひ最前から、窺うて見る所、血筋の子の苦しみを、何ぼ氣強い親々でも、堪へらるゝ物ぢやない。若殿にして置く我子が大事、そなたの顏色變らぬは、取替子に相違は無い。スリャ皆心は同腹中、刑部殿とも内談しめ、諸事我夫の指圖有らん。先今日は立歸り、病氣の樣子申上げん、必ず何事も、人に覺られまいぞや」と、一人呑込み悠々と、館をさして歸らるゝ。跡には一人政岡が、奥口窺ひ〳〵て、我子の死骸抱き上げ、こたへ〳〵し悲しさを、一度にわつと溜涙、せき入りせき上げ歎きしが、「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたな〳〵。そなたが命捨てたゆゑ、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、己が工を打明けしは、親子の者が忠心を、神や佛も憫みて、鶴喜代君の御武運を、守らせ給ふかハ丶丶丶丶、有難や、有難や。是と言ふのも此母が、常々敎へて置いた事、稚心に聞分けて、手詰に成つた毒害を、よう試みてたもつたなう、誠オ丶出かしやつた〳〵。そなたの命は出羽奥州、五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさす、に國の礎ぞや、とは云ふものの可愛やな、君の御爲豫てより、覺悟は極めて居ながらも、せめ

懐釼ぐつと突込めば、わつと一聲七轉八倒、驚く沖の井政岡が、仰天ながら一大事と、若君押し遣る我部屋口、戸口に付添ひ守り居る。「ヤア何をざわ〳〵、騒ぐ事は無いわいの。忝ぐも頼朝公より下されし此折、蹴破りしは上への無禮、小い餓鬼でも其儘には差置かれぬ、夫故に手に懸けたは、お家の爲を思ふ八汐が忠節。ム、、ハ、、ハ、、、、、、オ、可愛さうに〳〵、痛いかいなう、〳〵、他人の私さへ涙がこぼれる。コレ政岡殿、現在の其方の子、悲しうも無いかいの」「何のマア、お上へ對して慮外せし千松、御成敗は御家の爲」「ム、、スリヤ是でも此方は何とも無いか、ヤ是でもか、是でもか」と、嬲殺しに千松が、苦む聲の肝先へ、こたゆる辛さ無念さを、ぢつと堪ゆる辛抱も、只若君の大事ぞと、涙一滴目に持たぬ、男勝の政岡が、忠義はせんだい末代まで、復有るまじき烈女の鑑、今に其名は芳しき。榮は始終政岡が、素振に氣を付け打ほゝ笑み、「オ、出かした八汐、右大將より鶴喜代へ下さるゝ大切の御菓子、小躮めが出しやばつて、すつての事に大事の工、イヤ、アノ大事の菓子を荒した科、殺したは八汐が働、さすが渡會銀兵衛が妻程有る。政岡には自が、云聞かす事も有り、沖の井八汐兩人は、暫く次へ間を隔て、遠慮召され」と榮の詞、何と違變も沖の井が、深き心は和田津海の、汐の八汐も打連れて、伴ひ一間へ入りにける。跡先見廻し榮御前、政岡が傍にすり寄つて、「年頃仕

は、何にもせよお通し申せ。コレ千松、そなたは次べ、常々母が云ひし事、必ず忘れまいぞ早う〳〵」と追ひやつて、衣紋繕ふ其内に、沖の井八汐も出迎ひ、敬ふ襖押し開かせ、梶原平三景時の奥方、夫の權威にさかえ御前、しと〳〵と上座に直り、「オヽ何れ〳〵も出迎大儀、自今日來りしは、右大將の御上使、夫景時承はれども、義綱の一子鶴喜代病氣によつて、男たる者を禁じたると聞きし故、夫に代る此榮、義綱隱居の其後、鶴喜代の所勞、殊に食事も進まぬ由、御心を付けられし此御菓子、賴朝公より下され物、有難く頂戴有れ」と、持たせし菓子箱さし出せば、八汐引取り、「コレハ〳〵有難い大將よりの下され物、サア〳〵申し若殿樣、早う頂戴遊ばしませ」と、蓋押開き、「テモまあ見事な結構な此お菓子、イザ召しませ」と差出す。流石童の嬉しげに、立寄り給ふ鶴喜代君、「アヽ申し御前樣、又其樣なさもしい事、御病氣の御身なれば、お毒に成つたら何と成さるゝ、此方へお越し」と政岡が、詞打消す榮御前、「ヤア賴朝公より下さるゝ御菓子、何疑うて頂戴させぬ、是非此榮が食べさせる」「アヽイヤ夫でも」「ムヽ、但し賴朝公の仰は背いても苦しうないか」「サア」「サア〳〵〳〵」と權柄押、奥より走つて千松が、「其菓子欲しい」と引摑み、何の頑是も只一口、八汐が悔り榮御前、毒の工の顯れ口、忽惱亂目を見詰め、蹴ちらかしたる折は散亂、八汐は透かさず千松が、首筋片手に引寄せて、

羨しがるお詞は、御尤ともお道理とも、云ふに云はれぬ御身の因果、雀や犬に劣つたる、宮仕して忠義ぢやと、云はれう物か」と喰ひしばり、跡も煮立つ風爐先の、屏風にひしと身を寄せて、奥を憚る忍泣。稚けれども天然に、大守の心備はりて、「コレ乳母、何で泣くぞいやい、其方や千松もたべぬ内、おれ一人忙しいと思ふなら、モウ堪忍して泣いてくれな。其方達二人がたべぬ内は、何時までもおれは堪へてゐる。おれがたべても、乳母がたべずに死にやつたら惡いナア。千松、そちが死んでも惡いナア」「ハイ〳〵、ようおつしやつて遣されます、ア丶有難う御ざります。乳母が今泣いたのはな、アリヤ飯の早う出來る呪、何の悲しい事はござりませぬ。コレモウ涙は無い、御覽じませ、ホ丶ホ丶丶丶丶、をかしい〳〵。サア〳〵今の呪で、モウ飯が出來ました、いつもの樣に、握々して上げましよ」と、飯匕取つて手の内に、結ぶを千年と待佗びて、手を出し給へば、「マア〳〵お待ち遊ばせや、吟味の上にも吟味せねば、御辛抱のかひが無い、先御毒味」と千松が、顏を眺めて、「ム丶氣遣ない、サア〳〵御前、御心靜かに召しませ」と、云ふにいそ〳〵御悦び、千萬石を手の裡に、握る御身に引替へて、只一握の握飯を、數の珍味と思召す、御心根の勿體なやと、君を思ひ我子を思ひ、心の奥の忍ぶ山、忍涙の折からに、「梶原樣の奥方御入なり」と呼はる聲、「ハテ心得ぬ、梶原の奥方と

わしはたべたい事は無けれど、御前様がおひもじからうと思うて」「エ、何のお強いお殿様がおせがみ成されう、ソリヤ其方がせがむのぢや」「イエ／＼私はせがみはしませぬ」「サアせがまずば今の歌、聲張上げて唄うて見や」と、云はれて涙の聲張上げ、「ほろり／＼とお泣きやるが、／＼」力なく／＼泣聲を、隠して連れる母親が、「何が不足でお泣きやるぞ、／＼」歌の唱歌も身に當る、涙はお乳が胸の内、子故の闇ぞ遣る瀬なき。若殿小陰を打詠め、「アレアレ千松、狆が來る呼べ／＼」千「狆よこい／＼」呼べば馳けくる縁の上、「オ、よい所へよう來たなア、ほんにわれは仕合せ者、おすべりの此御膳、殿様の御機嫌を、直した御褒美戴け」と、紙折り敷いて並ぶれば、悦ぶ體を見る若君、「乳母、おりやアノ狆に成りたい」と、羨み給ふ御風情、聞く悲しさを堪へかね、「オ、お道理ぢや／＼、日本國の其中に、幾億萬と限無き、人の果報を請け給ひ、五十四郡の御主と、榮耀榮華は上も無き、何暗からぬ御身にて、思ひがけ無い御辛抱、縦へ賤しい下々でも、斯ういふ事が有る物か。ましてや遂に見も聞きも、なみだながらに政岡が、申す事とておとなしう、聞入れ給ふ痛はしや。現在御内の御家來が、邪非道に組み從ひ、殺害せんとの工とは、知つたる故に蔭身に添ひ、おまめな御身を御病氣と、世間を僞り胴欲に、稚い御身に朝夕さへ、思ふ様に上げぬ故、鳥獣の餌ばむをば、

オ上げませいで何とせう、今上げまする。まちつと養立つ其間、お氣に入りの雀の子、モウ親鳥が來る時分、其處へ直してお慰」「アイ〱」と千松が、返事はすれど立ち惱み、歩む姿もたよ〱と、置き直したる小鳥籠、ちうと敎へる親鳥の、軒端の竹に飛びかはす、子は孝行に面瘦せて、はごくみ返す烏羽玉の、涙を隱すうなひ髮、かゝれば直に飯に成る。「ソリヤもう飯ぢや」と悅ぶ子。「コレ千松、何とも無いと云ふ下から、忙しない何の事ぢや。何時も唄ふ雀の歌、唄うて御前の御機嫌取りや、エヽ鈍な兒では有るはい」と、叱られておろ〱涙、しやくりながらの濕り聲、「こちの裏の齊墩の木に、〱、雀が三疋留つて、〱、一羽の雀がいふ事にや、〱、夕べ呼んだ花嫁御、〱」竹の下葉を飛び下りて、籠へ寄來る親鳥の、餌食みをすれば子雀の、嘴さし寄する有樣に、「アレ〱乳母、雀の親が子に何やら喰はし居る、おれもあの樣に、早う飯がたべたい」と、小鳥を羨む御心根、「オヽお道理ぢや」と云ひたさを、紛らす聲も震はれて、「わしが息子の千松が、〱。エヽコレ千松、殿樣の御機嫌を、エヽ何を泣顏する事が有る、ちひさうても侍ぢや。コレ七ツ八ツから金山へ、〱、一年待てどもまだ見えぬ、〱」「乳母まだ飯は出來ぬかや」「オヽもう出來まする。二年待てども、〱」「嗚樣飯はまだかいの」「エヽ忙しない、そなた迄が同じ樣に、行儀の悪い」「イエ〱

には喰ふ物ぢやと云はしやつた故に、わしや何とも云はずに待つて居る。其替り忠義をして仕廻うたら、早うまゝを食はしてや。夫までは、翌日までも何時までも、かう急度坐つて、お膝に手を著いて待つて居ります。」「お腹が空いてもひもじうは無い、何とも無い」と澁面作り、涙は出づれど稚氣に、譽められたさが一杯に、「こちや泣きはせぬはえ」と、額を撫でて泣顔を、隠す心は流石にも、名に負ふ武士の種なりき。母は健氣さいぢらしさ、目に持つ涙心には、御前に聞かす譽詞、「オヽさうぢや〳〵強者ぢや、千松はいかう強う成りやつたはいの」「イヤ千松よりおれが強い。ヤイ政岡、おれはちつとも空腹には無いぞよ。大名といふ者は、飯も何にもたべずに、かう坐つて居る者ぢや。ナウ乳母、おれは強者ぢや」「是は又氣疎い事ぢやは、さうお行儀な所を見ては、まだ〳〵千松などは叶はぬ〳〵。オヽお強い〳〵、さうお強うては、コリヤ早う飯を上げざ成るまい、ドレ拵へう」とかい立つて、傍へに飾る黒棚より、取出す錦の袋物、風爐に掛けたる茶飯釜の、湯の試を千松に、飲ます茶碗も樂ならで、お末が業をしがらきや、いつ水指しを炊ぎ桶、流す涙の水こぼし、心は淸き洗ひ米、釜に移して風爐の炭、直して煽ぐ扇さへ、骨も砕くる思ひなり。「アレまう飯ぢや」と御機嫌の、我子も共に悦顔、見れば胸まで突つかくる、涙呑込み呑込んで、「モウ上げますぞえ」「嚊樣早う上げましてや」「オ

夫でこそ此乳母が、お育て申した若殿様、オヽお出かし成された天晴な」と、譽むればあどなき稚氣に、「ヤイ乳母、ひもじいと云ふ事は、強い武士の云はぬ事と、常に其方が云うた故、おれは云はねど先にから、空腹に成つたはやい」「オヽお道理でござります、今日は思はぬ事故に、御飯の拵へも遲う成り、あなた樣にも嘸お待ちかね、千松もよう辛抱しやつた、モウ拵へて上げます」と立上れば、「ナウ乳母、こゝに在る此膳を、給べるのは惡いかや」「アヽイヤ申し、其御膳を上げる程なれば、乳母も苦勞は致しませねど、此程から怪しい事ども、忠義厚き沖の井殿、差上げられた其御膳、疑ひはなけれども、油斷の成らぬ此時節、上げてよければ此政岡が上げまする。コレようお聞き遊ばせや、今お館には惡人蔓り、御近習小姓膳番まで、ちつとも心は許されず。忠臣の節之助は、不義者とて遠ざけられ、力とする者も無く、朝夕の御膳は皆庭へ捨てさせて、私が手づから拵へて差上ぐるも、若し毒藥の工もと、微塵心はゆるされず。空腹なもお道理ながら、御前のおこらへ遊ばす爲、此千松も四五日前から、三度の食事もたつた一度、忠義故ぢやと堪へて居ります。コレ千松、そなたは云ふ事よう聞いて、何とも云はずに辛抱する。オヽ賢い〳〵、強い〳〵强者ぢや」と、譽むれば千松、「コレ嗅樣、侍の子といふ者は、ひもじい目をするが忠義ぢや。又給べる時には毒でも何とも思はず、お主の爲

夫ばかりでない此願書、願主松枝節之助、政岡と有るからは」沖「イヤ〱夫とても同じ事、かゝる大事を工む者が、有り〱と名を顯はし、證據の種を殘し置かうや。サ若しや其名が八汐と在らば、お前は科を被る氣か。モあんまり工が淺はかで、詮議立するお人まで、底意の程が心得ぬ。曲者めを拷問して、五十四郡を呑まんとする、工の底を白狀させ、惡事に組する方人ども、一々首を並べて見せう。サとつくと見物成されよ」と、此場の善惡明白に、見通す如き辯舌は、實も信夫の後室と、奧ゆかしくぞ見えにける。理の當然に拉がれて、八汐は尙も減らず口、「テモつべこべと能うおつしやるの、ガ所詮分らぬ水掛論、モ何時まで言うても同じ事、マア此儘に差措いて、追つての詮議夫までは、小卷も下つて休息召され」と目くばせし、伴ふ二人に一物の、有りと見拔きし後室の、眼鏡はづさぬ一捌、「曲者引け」と嚴重に、心は隔つ竹の間の、襖押明け入りにける。跡見送りて政岡が、正無き事も身に懸る、科は霽れても晴れやらぬ、養君の行末を、誰に問ふべき樣も無く、心一つの憂き思、物案じある母親の、顏を詠むる千松に、鶴喜代君も打守り、「コレ乳母、モウ何云うても大事ないかや」「アイ〱外に誰も居りませず、何なりとも御意遊ばせ。ほんに先に沖の井殿、若へ御膳を上げた時、豫て乳母が申した事、お聞入れ遊ばして、ようマアお上り遊ばさなんたナア。

ふ、サ證據が有るかな」「サア夫は」「サア〳〵何と」と、詰掛けられて政岡が、覺なき身の云譯も、證據無ければ今更に、無念涙の外ぞ無き。「オヽ云譯は有るまい〳〵、云譯無くば遁れぬ科人、節之助諸共に、牢屋へ打込み急度糺明、今日より若君の御守役は此八汐。ヤア〳〵侍中、政岡を縛り上げ、牢屋へ引け」と呼はるにぞ、若君はおろ〳〵涙、「乳母が牢へ行くなら、おれも付いて行きたいはいやい」「エヽそりやマア何を御意遊ばす、八汐が申す事、ようお聞き遊ばせや。あの政岡はナ、君に敵たふ大科人」「イヤ科人でも大事ない、乳母は何處へも遣る事ならぬ」「デモ伯父樣刑部樣の仰付」「イヤ〳〵其刑部も其方達も、皆おれが家來ぢやないか。夫程牢へ入りたくば、政岡が代りに、そち達から牢へ行け。乳母と放れて居る事は、いやぢや〳〵」と腕白も、自然と備はる仁心に、嬉しさ限り政岡が、身に沁み渡る有難涙、只手を合すばかりなり。流石の八汐も主命に、返答無ければ沖の井御前、「君の仰までもなく、お乳の人に科は無い。朝夕お傍を片時放れぬ政岡殿、サ誠若君を害せんと思はゞ、人手を賴むまでもなく、仕樣も樣も有るべき事。サ夫に何ぞや此曲者、誠政岡に賴まれなば、一旦は隱れ遁るゝ筈、自が長刀の、光に脆く飛び下りしは、ハテ賴もしい賴まれ人、又道益が妻の小卷、必死の脈と云ひたるも、モあまり割符が合ひ過ぎて、此沖の井は呑込めぬ」八「アヽイヤ

と」と、きめ付けられて「ア、コレ申しますく、イヤモ斯う現るゝ上からは、有樣に申します。鶴喜代君を殺してくれと、頼まれたも褒美が欲しさ」沖「ム、シテ其の頼人の名は何と」政「サ何者に頼まれた」沖「サアく〳〵どうぢや」政「サア何と」と、側に詰め寄る政岡が、顏を眺めて「テモ扨も、アノしらぐ〳〵しい顏はいの、其頼人は誰で有らうぞ即此方」政「ヤア何と」「ア、コレコレ、まう隱しても隱されぬ、千松とやらを代に立てたさ、若君を殺してくれと、ナソレ、頼ましやつたぢや無いかいの」「ヤア、コナ下郎めが大それた僞言、コリヤ自を科に取つて落さん爲、己を頼んだ拵事ぢやな」「イヤコレ政岡殿、モいか樣にあらがはれても、こなたの工といふ事は、此八汐が睨んで置いた、とても叶はぬ覺悟召され」「ム、假初ならぬ一大事、とつくりと正しもせず、妾が業とおつしやるには、何ぞ慥な」「オ、證據といふは其曲者、サ現在こなたを傍に置いて、あの通りに言ふからは、モ是に上越す證據はない。がまだ其上にコレ此一通、鶴が岡の神木の本に、埋めて有つた釘付の箱、内に込めたる願書の文言、若君を調伏し、我子を出世させたい望、願主松枝節之助、乳母政岡と、有りく〳〵と書いたが慥な證據、サ何と違ひは有るまいがの」「イヤく〳〵夫も眞赤いな似せ筆、更々此身に覺えは無い、無實を言ひ懸け、跡で後悔なさるゝな」「ム、是程慥な證據が出ても、まだ潔白なあらがひ立て、シテ又覺ないと云

ひ申さんにも、男たいせし者はお嫌、夫故に典薬も」「す、此八汐もそこへ心の付きし故、御典薬大場道益が妻の小巻、女ながらも夫に劣らぬ醫術の譽、御容體窺はせん爲、召連れて參りし、ソレ召出せ」と詞の下、はつとお次へ婢が、やがて伴ふ年輩も、四十に近き二つ髷、褔さばきもしとやかに、遙末座に手をつかへ、「恐れながら、大場道益が妻の小巻、御脈窺ひ奉らん」と、すり寄れば政岡が、いざと進めに鶴喜代君、御手を出させ給ひければ、恐れ愼しみ御脈體、とつくと窺ひ驚く面色、「ヤア、コリヤ是れ只今必死のお脈」と、いふに恟り驚く人々、暫し詞も無かりしが、沖の井御前不審顏、「イヤコレ小巻、御物ごし御顏色、常に變らぬ御樣子、夫に必死の御脈とは」「ハア成程御不審御尤、仰の通り麗しき御容體、夫に引きかへ絶命の御脈は、モ何とも不思議、恐れながら若君樣、是へ御越し遊ばされよ」と、遙こなたへ誘ひて、復も窺ふ御脈に、はたと手を打ち、「ハテ不思議や、あれにて見れば必死の御脈、今又是にて窺へば、常に變らぬ御脈體、ハテ怪しや」と眉に皺。政岡始め人々も、更に心は納らず、何思ひけん沖の井御前、長押に掛けたる長刀追取り、ぐつと突込む天井の、板腰放せば怪しき曲者、落つるを透さず取つて引伏せ、用意の捕繩手ばしかく、高手小手にくゝり上げ、沖「お脈の不審の其根元、サア眞直に白狀せよ。陳ずるに於ては水責火責、憂目を見するがサア〳〵何

で、申込み置いたれば、御保養旁追付け是へお出の筈、何かの樣子とつくりと、心をお付け遊ばせ」と、二人が噂の程もなく、奥より婭走り出で、「殿樣是へ御出」と、知らせの中に、まだ頑是なき鶴喜代君、お傍のお伽も同い年、政岡が子の千松が、舁いて出でたる鳥籠の、エイエイサッサ愛らしき、跡に付添ふお乳の人、はつと二人は頭を下げて、恐れ敬ひ奉る。政岡御前に手をつかへ、「信夫の庄司爲村の後室沖の井、渡會銀兵衛の内方八汐、御病氣の御樣子伺ひのため參上」と、申上ぐれば大人しく、「二人共よう見舞うてくれた、大儀々々」と情有る、仰にはつと恐入り、「誠に存ぜしよりも麗しき御容體、見奉りて我々が安堵、さりながら御食事進み給はぬ由、モ一家中の心遣ひ、恐れながら沖の井が、申付けし今日の御膳、少しなりとも召上られ下さる樣、ソレ〳〵早う」と詞の下、はつと答へてお傍の女中、捧げる膳の目八分、御前に直せば嬉しげに、「そんならモウ、飯食うても大事ないか」と、座に付き給ふを政岡が、尻目に睨まれもぢ〳〵と、「イヤ〳〵、おりやモウ飯は厭ぢや〳〵。アレ見よ千松、雀が飯を食ひたいやら、口を開いて鳴くはいやい、弱い奴ぢや」と乳母が顔、見やる目元に涙ぐむ、御心根のいたはしさ、ぢつと堪へて政岡が、「イヤ申しお二人樣、あの通り御膳をお進め申しても、いやぢや〳〵と御意遊ばす、お傍に付添ふ政岡が心遣ひ、御推量下さりませ。が醫脈を窺

らばたゞけんうどぎやてそはらけいまんきやぎやなうけんそはか、ごくさいしやうかやとんとく如意、寶珠わうたい辨才天、そゝ」こそ〳〵とこそ 三重立歸る。

第　六

いつまでも、變らぬ御代にあひ竹の、よゝは幾千代八千代經る、千代を壽く爪音は、鎌倉山に美を盡す、冠者太郎義綱公の奥御殿、懦弱の聞え隱れなく、砂川へ隱居ありければ、御長男鶴喜代丸、幼稚ながらも御家督定り、近き頃より御病氣とて、お傍には男を禁じ、諸士の對面叶はねば、家中を始め典藥まで、何としあんもせんじ樣、常より館物さびし。諸士頭信夫の庄司爲村の後室沖の井御前、渡會銀兵衛が妻の八汐、襠姿しとやかに、禮儀正しく打通り、「イヤ申し八汐樣、大殿義綱樣御隱居遊ばし、御幼稚ながら御家督の鶴喜代樣、此程より御不快とて、御食事も召上れず、殊更人に逢ひ給ふ事がお嫌ひとて、男を禁じて近習小姓も遠ざけられ、お傍には政岡殿、腰元衆の外叶はず、何卒直に御容體、窺ひ申す私が心」「さればいな、手前夫銀兵衛は御膳部行と云ひ、今後見の刑部樣の御出頭、夫さへ御對面叶はぬとは、コリヤ政岡の胸中に、深い所存が有つての事か、も今日は是非とも御容體、見屆けねば下られずと、奥女中ま

と、吝しがる物を無理無體、引つたくつて此方に向ひ、「靑黃赤白黑、瑠璃紺路孝茶中赤藏、おいてうかふたんぶたうんすん、辰ヤア〳〵」と差出せば、氣味惡さうに手に取つて、兩「かねんをとるんはうれしんが、どうやらしりんがきそんばか、午ヤア〳〵」喜「サア〳〵門兵衛樣〳〵、サア〳〵川童樣の御機嫌が直つた〳〵。神明納受の驗には、各方に悉く、福壽海圓滿樂、天筆和合樂の大福長者に成る結構な文をお授け成さるゝぞ、皆々お請なされませ。我等は其内神前を、拂ひ淸めて參らん」と、何國とも無く出でて行く。「サア〳〵コリャ〳〵家來共、只今お授けなさるゝぞ、うぬらも心を淸淨に。ハヽア有難うござります」兩「ヤレ〳〵皆の衆よ、正直正路に我は愛で、壽福の文を授くべし、龍神詞は分るまじ、日本流に敎ゆべし。皆々信心凝らしつゝ、囃してくれよ凡夫たち、〳〵〳〵、はやしてくれよ凡夫たち、〳〵、左の腰を延べ、其の上に右の手を拳にして、大指を開き、小指の甲を曲け、左の掌の上に置く事しやほんの如く、是を以て則ち七度震動せば、貧所忽福者と成り、寶の藏を並べ立て、無量の財福を充滿する事、雨や霰の降るが如く、金と、銀と、錢と、瑠璃と、硨磲と、瑪瑙と、珊瑚と、琥珀と、眞珠の七寶出生して、大福長者と成る、なむはくじやきやらうかやしやぎやらべいしんたまにひんてんうんそはか、なうまくさらばたゝぎやてい、ひゆびじんばぼくけいびやくさ

も金とやら、龍宮界も有様は、去々年の大飢饉で、米が百に四合五勺、其揚句ゆゑきついつまり、成程路金を皆おこせ、又お前の大事の物を金と一所に上げたら、今のソレ、穴錠往生は赦してやろとの御託宣、サア〳〵早うお上げなされませ」「スリヤ何と云ふぞ、貯へた路銀と、外に大事の物と云ふは、オヽソレ〳〵、主人より賜はつたる此指添、二品さへ差上げれば、御了簡下さるか、忝し〳〵」と、懐中探しこて〳〵と、取出す打違袋有りだけ粉だけ、指添共に一つに掴み、「サヽ是をあなたへ上げてくれ、一時も早いがよいぞ。アヽコレ〳〵浮世々々、マア〳〵お待ちよ、侍の事なれば、腰の物は無くてもよいが、打入つて相談が有る」渡「爰から京へは餘程の路でござんすは」兩「サヽヽマヽヽヽうんと云ひな〳〵、エ承知か〳〵、此金を皆上ては、サヽヽヽマヽヽヽうんと云ひな〳〵、エ承知か〳〵。蕎麥を一膳食ふ事が成らぬは、サヽヽマヽヽヽうんと云ひな〳〵、承知か〳〵。爰はどうぞお情ぢやが、南鐐一片殘されまいかな」渡「エヽけちな、神に物を吝しがると、忽ち罰をお當てなさるゝ」「スリヤ罰をお當てなさるゝか、ハテ是非も無い事ぢやな。そんなら南鐐とは云ふまいが、あなたのお名に象つて、川童六十四文は成るまいかの」「一文も半文も成りませぬ」「スリヤ一文も叶はぬか、ハア」はつとばかりに聲を上げ、かつぱと伏すと云ふ事は、此時よりも始まりける。「エヽぐづ〳〵と、早うお上げなされ」

どうした物で有ろ、コレ、ござりますか」「有る〳〵」「夫をあなたへ差上げ、お詫言をして見ましよ。イヤ申し川童の冠者様、畢竟是は間違ひ事、あの者が申しますは、近頃憚りな事ながら、少々持合せの金も有れば、夫をお前に皆上げます程に、どうぞ御了簡下さります様と、アア氣の毒な物でござります、私を段々頼みます。今申した其金を皆取つて、勘忍しておやりなされませ」「イヤ金銀は人間の寶、川童道には有つて益なし。只金銀の其金の彼の方におはします、彼ソレ、今の情所が所望なり」「ア、悲しや、どうやらおるどがくすぐつたい。コリャ〳〵家來共、ソレ下の帶を急度しめて、裏門口を用心せい。武士の有るまじい、屋敷を餘り急いだで、不斷の儘の越中褌、締りが無うて便がない」と、主も家來も懐へ、手を入れ締める下の帶、下心有る浮世渡平、「彼奴出家だけ欲氣無し、物を云はしては惡からん」と、傍へ立寄り恭しく、「うす〳〵うさすはもふさきか、ちんぶりかくさんきんにやうらい、とらやあ〳〵」と、低頭平身なしければ、譯は知らねど器用者、出たらめせりふの唐詞、「しやうらいにいつうばてれんてう、かすてらやうかんのせたんけい」聞くより渡平は此方へ歸り、「あなた様には龍宮育ち、日本詞をお遣ひ成さるりや、どうでも勝手が違ふ故、御苦勞なだけ腹立もきつい。そこで今の様に、龍宮詞で請答、先づは神慮を宥めて置いた。時に只今おつしやつたは、地獄の沙汰

「ア、申し〳〵、私は何にも存じませぬ、渡平が業でござります、御免々々」と手を合せ、拝み廻りて震ひ居る。「是は〳〵正體なき旦那の有樣、人の見る目も恥ち給へ。コレ申し、家來どもでござります」「何家來ども、さう云うて身共を化すので有らう」「誓文々々、家來共でござります」「ドレ〳〵、ほんに家來だ、ヤイうぬら、言語道斷不屈者、歸つたら歸つたと、そつと云へばよい事を、周章しう吐したで、武士の有るまじい、膽を菜種にして退けた。身が目通には一人も叶はぬ、何國へなりとも立去れと云ふ所なれど、今は云はぬ、餓鬼も人數ぢや、わいらでも力に成る。ソレ最前聞いたソレ、お川童樣のお崇かして、何やらかやら怪しい事だらけ、サア〳〵一時も早う急がん」と、立歸らんとする折ふし、時分はよしと重三郎、浮御堂の時太鼓、しどろ拍子に打立つれば、ワツト皆々腰も拔け、うろたへ廻る目先へずつと、顯はれ出でし兩拳が、「抑〳〵是は浦島太郎十代の後胤、川童の冠者乘好なり。ア、ラ恨めしや腹立や、汝神慮を恐れもせず、血をあへしたる咎に依つて、早々命を召取るなり。貴樣の祕藏の情所、我神變に吸ひ取つて、穴じやう往生さしてやろ」「エ、氣味の惡い、イヤコレ渡平殿、貴樣はあなたの氏子とやら、どうぞお詫をして下され」「成程々々、元はお前の業でも無い、主命故の麁相なれど、かう見た所がよつ程きついお腹立の樣子、つい一通りでは合點は成されまい。ハテ

無妙法蓮花經、浮世氏〳〵、二人の者を仕止めたか」「何の苦もなくざつぶりと、サア〳〵お改めなされませ」「なう厭な事〳〵、まう見ずとよしにせう」「是は又卑怯千萬、夫でも武士と云はれますか」「ム、見ようかの、ア、氣の無い者ぢや、しかし怖い所を見るも主命、さりながら、首實檢には古實有り」と、兩手を顏の覆ひにし、指の間よりさし覗き、「ハツアいか樣なア、生顏と死顏は相格の變る物、今までは二人共、艶やかなる顏なりしが、虚氣味惡う眞青に、少し赤みの見えたるは、血の流れたる所ならん。切口の立派さは、遖勇々しき手の內や。待てよ、待ちなさいよ、いかに切れた首ぢやとて、目鼻も口も何も無う、ずんべら坊主の此首、俄に瘡は搔くまいし、斯くも形の變りしは、ハテ〳〵〳〵合點の行かぬ事ぢやなア」と諸手を組み、暫し見とれて、「コリヤ西瓜ぢや」渡「ヤ何と、ドレ〳〵、ほんに西瓜ぢや。ハテ不思議な、たつた今二人の首打放して間も無う、西瓜に成つたはコリヤどうぢや。門兵衛樣〳〵、コリヤ只事ぢやござりませぬ。浮御堂の近邊で、血をあへした其咎か、そろ〳〵日暮に成つて來る、お川童樣も出やしやる時分、御用心を成されませ」「ヤア扨はさう言ふ事かいやい。夫ぢやによつて首打つ事は、よしてくれろと云うたのに、どうやら空も曇つてゐる。コリヤ〳〵渡平、まちつと此方らへ寄つてくれ」と、そこら眺める其折ふし、追々歸る家來共、「旦那」ワイと飛退き、

はしづ〳〵身拵へ、傍へ立寄り、「重三郎」「ヤア親人」「コリヤ、何にも云ふな、コレ斯う〳〵、ナ、合點か」と二打三打、打合ふ體にて程よき所、「コリヤ捕つたは」と用意の早繩、コレハと立寄る高尾も共に、同じく掛ける三寸繩、二人を引立てつれ立てば、遠目に斯くと大木戸門兵衛、走り歸つて、「ホヽウ手柄々々々々、某程の武士なれど、敵に刀を打折られ、迯げるではない引退く、コリャ是恥に似て恥にあらず。往んじ壇の浦の戰、箕尾谷四郎國俊、景淸に刀打折られ、少し汀へ引退きしを、誰か一人臆病とや言はん、今の代までの美談ならずや」「ア最よござります、お前の恥ぢやござりませぬよ。シテ此二人はどう致しませう」「知れた事都へ引け」「是はしたり仰山な、イヤ申し、此邊に知方の有る奴原、取還されたら詮ない事、いつそ二人を切殺し、首にして歸りましよ」「妙計々々、然らば貴殿御苦勞ながら、アヽイヤ待てよ待てよ、最前も云ふ通り、生者殺すは大きな嫌ひ、ましてや是は人の首、目の前で切るを見たら、忽ち身共持病の癪、イヤ〳〵やはり京での事」「ハテ埒の明かぬ、コレ私がたつた一討、お前樣も夫程怖くば、空向いて目を塞いでござりませ」「妙計々々、然らば仰に任さん」と、兩袖顏に押當てゝ、あちら向いたる其隙に、二人の繩を解きほどき、又も囁きさゝやけば、二人は彼處へ忍ぶ內、傍の畑見廻して、西瓜を二つばつさりの、音にきいやり「南無阿彌陀佛、南

直し、「必ず歎き給ふなよ、頓て御代になし奉り、一つ枕にあひの手の、歌の唱歌も色めきて、味な縁からつい馴染て、末の約束固めの枕、渝らぬ契と思はんせ。オヽそれ夫が本かいな、つとめつとめもつい馴染めて、寐るに寐られぬうたゝね枕、逢ひたさ見たさは皆一つ、オヽそれ夫がほんかいな。ほんに浮世は儘ならぬ、アレ〳〵、日も山の端にをちこちの、落人と人や見とがめん、いざさせ給へ」と手を取つて、急ぐ道筋程もなく、群れ居る鴈の翼さへ、頼まん方も片だより、堅田の浦にぞ著きにけり。近江路は、餘所の國より悲しさの、まさる憂身の浮御堂、こなたに暫し立休らひ、「イヤ申し高尾様、道筋とても油断がならぬ、是から眞野へは程もなし、知邊の方へ急がん」と、皆打連れて行く向へ、とくより待得し大木戸門兵衛、渡平諸共現れ出で、「ヤア〳〵夫へ打たせ給ふは、都島原に隠れなき、三浦屋の全盛太夫、高尾の君と見しは僻目か、正無うも敵に後を見せ給ふか、反し合して勝負あれ。斯く申す某は、關八州に隠なき、大木戸門兵衛臂利なり、しばさせ給へ」と呼はつたり。重三郎は物をも云はず、一腰抜いて切付くれば、請合して丁々、切合ふ後兩拳に、渡平はなにか囁けば、心得傍見廻して、駈入る間もあら笑止や、門兵衛刀打折られ、しどろに成つて、「ヤア〳〵渡平、兩人共に搦捕れ、取逃しては汝が科、詞番うたあらがうな」と、口は達者に雲霞、砂道蹴立て逃げたりけり。渡平

「護國寺山内辨才天建立」辨天坊あじろ笠、鼠の麻衣、生木綿の白布子、手甲股引りゝしげに、建立箱背に負ひ、子供に囃されて餘所目は二本棒、誠は行坊强い坊、鈴打鳴らし町々を、大福長者を授くる利生のそつそ坊、そゝ、そゝくさ來かゝる道筋に、見合はす顔は、「ヤア兩拳様」「ほんにお前は高尾様、袈裟衣から齋非時のと、常住お世話に成りました、私が爲の一旦那、後の月から行方は知れず、方々尋ねに出ましたが、思ひがけない好い所で、是から愚僧もお供する。見れば大分泣いた顔、なぜ浮き〳〵と成されぬぞ、そゝ、それ〳〵覺えてござりませう、お前様と義様と、味な座敷へ此坊主、あたまの様にまん丸う、挨拶をして床の内」高「サイナ、わたしも云ひがかり、背中合して寢て居ても、つい夫なりに張弱う、中直りすりや明の鐘、憎うてならぬ鳥の聲、何の烏が意地悪で、鳴くぢやなけれど後朝の、往なせともない心から」兩「ソレヨちつとも離れかね、身仕舞部屋へよし様を、引きずつていて其時に」高「眉も引かずに鐵漿付けて、よう似合うたか見ておくれ、こつちへ寄りなオヽ嬉しと、傍へ引寄せ引きしめて、二人の顔を一面の、鏡に寫し見た物を、今は夫には引きかへて、いつの月日に逢ふ事も、知らぬ田舍へ知らぬ路、言問ふ人もなつの日に、乾かぬ袖のうき涙、かはいと思うて下さんせ」と、歎く涙は路もせの、小川に水や增しぬらん。二人も倶に露涙、萎るゝ心取

れぬ旅路の旅はどき、草鞋引きしめ〳〵て、登る坂路爪先の、高尾を連れて重三郎、都を夙に起き別れ、心は跡に引かさるゝ、牛石右手に行く末は、何とかならん道草も、泣いてしをれてたど〳〵と、せめて暫しは逢ふと見る、夢路に泊る宿もがな、つもり〳〵し憂き事の、あふみ路さして辿り行く。人目堤をふたり連、樵る童が打群れて、若い女夫と惡口も、何の儘よと聞捨に、山中の宿打過ぎて、峠はるかに見おろせば、誰かしらべん琵琶の湖、操る如き細路を、分けつゝ來つゝ行きがてに、在の女夫が打まじり、中好さゝうな連節に、唄一つくずやに〳〵、四季の花、粋な水仙室咲の梅、いとしかはいと撫子の、よれつもつれつ糸櫻、垣根卯の花杜若、からざを歌の夫婦合、可愛らしいぢやないかいな、此方の贔屓と、二人しつぼり抱柏、返事菊蝶比翼に縫はせ、好いたくわん菊四つ紅葉、行きつ戻りつ香の圖の、戀に戀ひわび瀧登り、笹龍膽の二つ紋、可愛らしいぢやないかいな。鄙も變らぬ妹背中、「アヽ羨し我とても、勤氣はなれ殿樣と、逢夜重る鵲の、橋もとだえて此樣に、つらい別の其上に、妹とてもむごらしい、はかない事もわたし故、嘸かゝ樣も今頃は、泣いてばつかりござんせう。世を忍び住む命さへ、憂事つもる身の上に、又此末はいかならん」と、返らぬ事をくど〳〵と、かこち歎くぞ道理なれ。重三郎も諸共に、過ぎし夜すがの事共を、思ひ續けて倶涙、歩みかねてぞ居たりけり。

一丈餘りの鯰が取れます」門「ハテ扨えらい物が取れるな。其様な魚は、氣味が惡うて喰はれまい」「イヤ又氣味の悪い事を云ふなら、此所は川童原、何時とも無う化けて出て、老若男女の別ちなく、彼裏門を念がけます」門「ヤア、シテ其川童は晝でも出るか」「イエ〳〵日中には出ませぬが、日の暮前からそろ〳〵と」門「エ、是は又ひよんな所へ來合したはい」「イエ〳〵お氣遣ひなされますな、私は爰らの生れ、氏子には手指もせず、其川童の親玉は、卽ち此の浮御堂様」門「スリャ何と云ふ、浮御堂の氏子が居れば、川童、サアノお川童様はお構ひなされぬか、夫でもどうやら氣味が惡い。しかし日暮までは間も有らん、コリャ〳〵家來ども、何をうつかり、其方どもは此近邊、高尾が行方詮議して、日暮前に早う歸れ、早く〳〵。コリャ小人數なりと見こなして、裏門好みの川童殿に、穴取られては叶はぬぞ、急げ〳〵」と權柄に、主と山路へ家來ども、當所も無しに尋行く。「イヤ何渡平、浮御堂へ參詣し、武運長久祈らん間、身に續いて參れ」

道行夏野のさらし井

世の憂き目、見えぬ山路へ入らんには、思ふ人こそほだしなれ。ほだしの種を身に持ちて、馴

る所、貝田殿の計らひにて、冠者太郎義綱も、砂川の屋敷へ押込め隱居、鶴喜代も術を以て自滅さするに間は無し。時に彼高尾が事、定倉が計らひにて、首討たせしと風聞有れども、其沙汰さだかならざる所に、重三と云ふ奴が、高尾を連れて近江路へ立退くと、間者が知らせに某を召され、汝は是より近江路へ立越え、義綱の種を孕んだ高尾、切殺し立歸れ、敵の末は根を枯らすとの仰付、夫故に御覺の一腰を賜はる、ガコリヤコレ主人の御重寶、指添なれども波の平行安、斯くも御恩に預る某、此事屋敷で語らんにも、餘り火急の事なる故、爰までは一跨げ、近江路と聞いたばかり、雲を摑む尋者、何時までかゝらん程も知れず、夫故路金は不斷に蓄へたり。此處までくる道にて、高尾くさい者を見ず、縱へ高尾に逢うたりとも、生物を殺す事、某は大不得手、夫故汝を召連れたり。ヤレ／＼しんどい息が切れる、皆も休め」と大道に、主がすわれば家來ども、同じ座席に居並びて、門「アヽ大きな池ぢやなア、シテまあ爰は何と云ふ處」「ハイ是が彼近江八景の中、堅田の浮御堂でござります」門「スリヤ早爰は近江路な、聞きしに勝る風景々々。堅田の浦の釣小船、浪にもまるゝ、ヨイ如くなりと、古い書物で知つたれども、目前見るは今が始、定めて此湖には、鯉や鮒が澤山ならん。鰻四五本欲しいなア、肴にして一盃呑んだら、風景も一入ならん」「イヤモウ其樣な魚は澤山、時によると八九尺から

忍べ」「ハ、畏り奉る、しかし難儀は高尾殿、若輩の某が一所に連れて立退かば、高尾が誠に語らひしは、重三郎と流布せんか。よし惡説も忠義故、些細な事は顧みず、佞人亡びて其後は、高尾殿の代りに死せし、お幾が爲の初發心、行方定めぬ修行の身、夕べは川に浪枕、朝は土手に身をこらし、名を道鐵と改めて、一宇の寺を建立せん」神「ホヽ實頼もしき志、娘が爲の善智識、我は是より此首を、定倉殿へ持參して、區々なりし一家中の、臍を堅むる忠義の門出、イザお暇」と立出づる、母は引留め、「なう暫し、けふはいかなる日なるぞや、一人の娘に生別れ、一人の娘に死別れ、跡に殘りて老の身は、何とか成らん」浮草の、うき世に秋の紅葉ちる、高尾も共にくど〱と、歸らぬ歎人々も、萎るゝ心取直し、振切る袖や濡るゝ袖、包む涙は身に餘る、義理と恩義と忠義とに、別れ〱て 三重 出でて行く。

第五

王城の、隣に並ぶ上郡は、目出度御代にあふみ路や、蕪川魚渇水に、事缺かぬ國唐崎も、矢橋も比良も目に付かず、錦戸刑部が家來大木戸門兵衞、大勢引連れ濱邊の砂道、「家來ども參れ參れ、云聞かす子細有り。渡平汝もとくと聞け、主人刑部殿大望の御企、コリヤ早わいらも知

尋ぬれば、渡「ホヽ夫こそは此渡平、貝田が行ふ邪術にて、心惑はせ給ふ我君、辰の年月揃ふ女の、肝の臓の血を取つて、熱酒に合し、伽羅にて煎じ是を差上げ、彼術を立所に塞く事は、奇妙院が懐中の一巻にて、我よく知る。此家の娘の血を以て、我君に奉れば、ハヽヽヽ、斯の如く本心に成り給ふ。最前高尾を手込めせしも、過をさせまい偽、暫く身を窶し守護する我は、熊川源五兵衛秀影、以後は互に申合さん」神「ハヽア適忠臣さりながら、某稚き砌より、能く見知つたる熊川氏、似ても似付かぬ顔形」「ホヽヽヽヽ是こそは館にて、數多の組子をささへる折柄、毒に當りて此のごとく、相格變るは一つの方便。傳へ聞く晉の豫讓は、漆をさして形を變ゆる、我は夫には引かへて、敵より注ぐ毒薬は、反つて味方の天の賜物、味方顔して敵の計略、一々に告げ知らさんは、我方寸の内に在り。ハヽヽヽ嬉しや悦ばし」と、勇立つたる有様は、實もゆゝしき忠臣なり。熊「オヽ頼もしゝ方々、さりながら、先祖より傳はる政宗の刀、紛失するも我が誤り、二度代を知る心はなし。松ヶ枝節之助を付置いて、鶴喜代に世を譲り、是よりは程近き、加茂川に隣りたる砂川に屋敷を建て、我と我身を押込め隱居」熊「御尤なる御詞、高尾殿も諸共に、御供をさせ申さんが、一所に置けば諸家中の心揃はず、身替も詮なき事に成り果てん。ヤアヽヽ悴重三郎、高尾殿を同道し、近江路へ立越えて、眞野の知るべに身を

後正體歎きしは、理せめて哀なり。戸棚くわらりと浮世渡平、「奥の一間に冠者太郎、忝なし」と駈け行くを、しつかと取つて、「どこへ〳〵、義綱公の御座在るとは、何を證據」と云はせも果てず、以前の下駄を取出し、火鉢へ投ぐれば炎々と、匂ひは四方に薫じけり。「ソレ其銘は薄紅、日本國中廣しといへど、伽羅にて作れる下駄履かんは、義綱ならで何國に有る。小言いはずとヤ爰放せ」と、裾振切つて駈出せば、「モウ是まで」と切付くる。拔けつ潜ツつ死骸にて、丁ど請くれば血は滴り、流込んだる以前の燗鍋、仕てやつたりと引提げて、一間の内へ駈けこんだり。何國までもと駈行くを、夙くより窺ふ重三郎、走入つて支ゆるを、「己も敵の廻し者、觀念せい」と切付くる。拔合して上段下段、互に手練打合ひしが、重三郎は請太刀も、しどろに成つてたぢ〳〵〳〵、よろめく裾を蹴上げられ、どうど轉ぶを乘かゝり、胸元押へ、只一突の其勢。「ヤア〳〵神浪山左衛門、必ず早まる事なかれ」と、障子をさつと義綱公、敬ひ守護する渡平が有樣、さしもの神浪恂りし、呆れて詞も無かりけり。義綱公は嚴然と、「佞人どもの計ひにて、近頃より心亂れ、晝夜分たず婬酒に溺れ、始めて心付いたる今日、國の爲に汝が娘、殺害に及ぶ事、忠義とは云ひながら、娘が最期不便や」と、仰にはつと頭を下げ、「ハハヽヽ、コハ有難き御仁心、娘を切りしは某が寸忠、恐れながら君の本心、いかなる故」と

卑怯な最期を致しル」「ヤア」文「機嫌を直され、只一遍の御廻向のみ、未來の樂みに致しり〳〵」母「ソレ見やしやんせ神浪殿、是でも臆病者かいなう、卑怯者かいなう〳〵」神「出かしたな〳〵、オヽさう云ふそちが心と知らず、未練者卑怯者と云ふたのが、今では面目ないはい。コリヤ娘よ、こらへてくれい〳〵やい」文「嚊樣へ申殘しり〳〵」母「何と書いて有ぞいの〳〵」文「エヽ西も東も覺えぬ時より、十年に餘る其間、生さぬ中の隔ても無う、可愛がつて下さんした御恩も贈らず、先立つ不孝の程、御堪忍なされ下されル。エヽ未來の嚊樣に逢うたり共、やつぱりわたしはお前樣を、眞實の嚊樣と存じり〳〵」母「オヽさう思うて給るかいの〳〵。コレ何處までも親子ぢや程に、氣を慥に成佛してたもや〳〵」文「取分け心に掛りり〳〵は、高尾樣の御事頼上げり〳〵。只一言申上度事御座ルへども、爺樣の手前恥しく、得書殘し申さず、よきに御推もじ願ひ上ル。申す事は數々なれど、心急かれ候まゝ、惜しき筆留り〳〵」と、讀む內父はそぞろなく、歎けば母は聲を上げ、「恥しいと書いたのは、重三殿の事で有ろ。オヽ此母が呑込んでゐる、コレ〳〵必ず迷うてたもんなや。思へば〳〵可愛やな、貧しい中でしをたらと、何角に付けて苦勞さし、いつ花やかな事も無う、憂身の果は此樣に、親の手にかけ殺すとは、いかなる業か報か」と、親々首に抱き付き、抱き付いて伏し轉べば、高尾も共に泣きくづをれ、前

い了簡、迚も助けぬ彼が命、かばひ立して怪我せまいぞ」と、ぢりゝ〳〵と付廻す。「アレ
アレ堪忍して下さんせ。嬶樣退いて下さんすな」「氣遣しやんな切らしやせぬ」と、母は我子の
覆ひに成り、殺さすまいとかばふ親、忠義の爲に殺す親、思ひは二つ三俣に、水越すばかり
浮く涙、涙々は陸奥の、船も浮めん風情なり。人に知られて詮なしと、思ひ切つても手もたゆ
む。始終の樣子隣から、聞居る高尾は身もよも有られず、走り出でて表の戸、碎けよ破れよ
と打ち敲けば、懸金はづれ開く戸の、としやおそしと我家の内。南無三寶と神浪が、隔つる
母を及び腰、たぶさ摑んで提切に、首をはつしと打落す、死骸に取付き母娘、前後正體なき居
たる、心ぞ思ひやられたり。神浪も恩愛の、胸にせきくる涙を押へ、せめて死顏淸めんと、首
引寄せて取上ぐる、たぶさに結込む一通は、爺樣參る幾よりと、聞くより母は涙ながら、「ヤア
扨は覺悟の有つたのか、但しは何ぞ望事、ドレ其見せて」と取縋る。「アヽイヤ〳〵此樣な未練
者、死んだ後まで恥晒し」と、引裂く手先に取縋り、「なう縦へ未練な事有りとも、是に上こす
形見はない、私に讀まして下さんせ」と、高尾が泣く〳〵押開き、文「松は千とせを盛とし、
朝顏は一時を一期とし、何事も先生よりの定り事と諦めり〳〵。わたしが首を討ち、高尾樣の身
替に成されん由、其場に成つたら歎におくれし、よもや得討ちなされまじと、態と臆病に成り、

に成る事を、暫く延べて下さんせ。其内には嚊様のおひえも仕立てゝ仕廻ひたし、七觀音の其間、清水様へも參りたし、マア一月も四五年も、立つての上のお身替」と、何を云ふやら譯もなし。「ヤア、そりや己何を云ふのぢや、最前より様々と、言を譯けて云聞かすに、コリヤうぬ、命が惜しいのぢやな。エヽ未練者め、卑怯者」と、刀するりと振上ぐる、娘はわつと飛退いて、「コレ〳〵申しお嚊様、アレ爺様が私を切るといなア。切られぬ様に詫言をして下さんせ」と、聲もしどろに震ひ居る。「オヽ氣遣しやんな殺さしやせぬ。コレ神浪殿、可愛さうにアノお幾はの、年端の行かぬ心にも、生さぬ中の義理立てゝ、色々に氣を付けてくれる物、夫を知つて親の身で、繼子ぢやゆゑに殺さしたと、どう夫が見てゐられうぞ。何ぼうでも身替に、殺さぬ〳〵」と、義理に假言つけ有様は、可愛さあまる母の慈悲、「嚊様嬉しうござんする、お前の蔭で助かつた、つれない爺様なう怖や」と、迯行く帶際引戻し、「エヽ情ない根性ぢやな。コリヤヤイ、科有つて殺すなら、我が代りに此骸、一分だめしに刻まれても、見殺しにする物か。親は百倍惜しけれど、殺さにや成らぬは人界の、義理と恩とに責められし、おれが心を推量せよ。何時まで云うても詮なき事、覺悟せよ」と振上ぐる。母はちつとも身を惜まず、「アコレ〳〵神浪殿、必ず聊爾せまいぞや」「ハテ扨お袋、悪

今の異見、よう口答ひろいだな。イヤコレお袋、此娘にさつぱりと、勘當をして仕廻はしやれ。實の親の折檻は、どの樣な物ぢや己見をれ」と、娘を引立て出づる門口、「ア、コレ待つた山左衛門殿、血を分けた高尾が身替り、義理有る娘を殺さしては、此母が世間へどうも濟まぬ」「ヤア何と」「サ斯程ゆゝしい騷動に、些細な者の命をかばひ、似せ首の事顯はれたら、義綱公のお身の上、高尾をころして其首を、定倉殿の御目に掛け、一家中の臍を堅め、義綱公を御代に出さずば、忠有るものとは云はれまいぞや」「尤々、なれども此身の娘といひ、殊に腹には主人のお種、其高尾を殺す時は、主殺しの惡名遁れず。コリヤ娘、そちが命を捨つればな、親は主君へ忠義と成り、義綱公の御身も納る、養親の爲にも古主、コリヤ聞分けて命をくれい、と云ふ物の其方も、たまく逢うて悦びし、其日も去らず手に掛けるも、先生からの定り事、親子の緣も盡き果てゝ、いつそ逢はずに仕廻うたら、殺す心も有るまいに、なま中に緣盡きず、廻り合ふと殺さるゝは、因果の道理と諦めて、堪へてくれよ」と聲を上げ、わつとばかりに泣居たる。娘は始終聞くよりも、父が前に手をつかへ、「勿體ない其悔、お主のお役に立つといひ、姉樣のお身替り、願うても無き身の果報、さりながら一つのお願ひ、どうぞ聞いて下さんせ」「早う言へく」「アノ、其お願ひと云ふのはな、身替

取上げて土打拂ひ、傍に人もないしようの、明いた戸棚を幸と、そつと這入つて内から戸を、仕濟し顔に忍び入る。かくとはいさやしら張の、行燈提げて娘のお幾、裾もはら〳〵立出でて、「此マア重三樣は何してぞ、エ、モ人の思ふ樣にも無い、早う戻つてくれたがよい」と、日にいく度か取上げる、合鏡も引きわくる、母は奧より立出でて、「お幾や、又髪を結ひ直しやつたか、身だしなみをきつう仕やるの。ほんにそなたに云ひたい事、マア〳〵爰へちよつとおぢや。コレ、今までとは違ふぞや、實の爺御の手前も有り、あの樣に育てたかと、思はるゝも耻しい、といふは重三殿とそなたの中、有るまい事ではなけれども、心の知れぬアノ渡平殿、其息子の重三との縁組は、どうもつまらぬ物ぢやぞや。若い時の一盛、面白い程厭きも早い。コレわしが惡い事は云はぬ、マア一旦は退いて仕舞ひ、末ではどうとも成ろぞいの」と、母の意見を聞く悲しさ。「皆最な御事なれど、重三樣と私が中、未來までもと云ひかはし、必ず退くな退くまいと、雛樣までを誓紙に入れ、堅い約束今更に、退かれう物かコレ嚊樣、是ばつかりは堪忍して、どうぞ添はして下さんせ」と、娘心の後や先、つまらぬ樣でも義理は義理、立て通す氣ぞ道理なる。奧より出づる神浪は、母を押退け、お幾が胸ぐら取つて引すゑ、「ヤイ爰な恩知らずの女郎め、最前より始終の樣子は皆聞いた、大恩請けたお袋の、言を分けたる

ソレ我娘のアノお幾、幸年も似合頃、高尾殿の身代に、ム、さうぢや〳〵」と立上り、「思へば思へば因果な娘、生れた年は母に放れ、久しぶりで廻り逢ふ爺親が殺すとは、いかなる業か報か」と、人目無ければどうと伏し、聲を立てかね忍泣。表に人音一寸遁、せめて暫しの命なと、かばふは恩愛合の間の、襖引立て入りにけり。我家の内よりそつと出る、渡平は跡の掛がね締め、傍見廻し隣の内、入るより早う高笑ひ、「ハヽヽヽヽ、コリヤモウお天氣でござります、躮は此方に居りませぬか。お袋樣は看經か、アヽなむまみだ佛、南無阿彌陀佛。ハアコリヤ皆お留守かえ〳〵。そしてお客でも有つたかして、盃や銚子鍋、エヽ何かナ、コリヤ私に呑めと云ふ事ぢやな、是は御馳走でござります、イエ〳〵肴には及びませぬ。エ何ぢや田樂を拵へてくへ、アイ〳〵忝うござります。そんなら此燗鍋も爰へ乘せ、アヽコリヤ火が溫い、炭を一杯取つてこう」と、餘所の勝手の審しいは、何國の浦でも寡の性根、我物いらず十能に、一ぱいの炭打明けて、吹付ける内ぱつちりと、炭のはねるに悔りし、「エヽけたいな炭ぢや、すでに顏を燒かうとした。おれが顏に燒所をしたら、玉子娘に成るで有る。ヤヽ何ぢや美臭い美臭いは、貴い衆の弔の匂がする、何處ぢやの〳〵。ハテ不思議や今此下駄のえならぬ匂ひ、最前使の詞と云ひ、正しく此家に冠者太郎、ムヽ、ヨシ〳〵」と、一人うなづき指足し、下駄

る袖袂、駈け出でんとする後へ、ぬつと出でたる浮世渡平、片手に高尾を鷲掴、我家の内へ放り込み、其身も共に入相時、蚊の泣音さへほそ〴〵と、近所洩れくる夜なべ歌、唄君と逢ふ夜の障りは月夜、月も忍ぶか笠を召す、月も忍ぶか笠をめす。詞「ア、イヤ只今夫に參ります、私はちと内證に用事を仕廻ふと直樣夫へ。お袋の云はるゝ一分始終尤ぢやが、若い女中を只一人、外に置くのは危い物、高尾樣〳〵〳〵。ハアコリヤまう爰に人氣は無い、ア、氣遣ひな〳〵、というて奥には女ばつかり、此家を明けて出られもせず、どう仕た物で有らうなア。いか樣世界は味な物、殿のお傍に附添うて、片時放れぬあの高尾、義理詰に成つたれば、別れねばならぬ時宜、又十六年前に別れた娘、緣有ればこそ廻り合ひ、切つても切れぬ血筋の緣。和泉の小治郎定倉殿、某へ密かの書面、此度秩父の重忠公より御狀到來、其趣は、殿の御身持上聞に達し、御覺宜しからず、されども先祖の戰功に感じ思召し、義綱が放埒の、元は傾城高尾故、此女の首を打ち、一家中の心を堅め、義綱を補佐すべし、大將の御前は重忠宜しく計らはんとの御內意、其方は人知れず、高尾を打つてくれよとの事、おのれやれ、お家の爲と請合ひしが、長の年月我娘を、世話にしてくれたお澤殿、其大恩の有る人の、眞實の娘の高尾、どうマア是が殺されう、というて助け置く時は、定倉殿の詞も無足、ハテ何とした物で有らう。

は、過行かれた幸内殿、先祖へ對し云譯なし。御家中廣き其中に、忠臣の武士有らば、己を殺して悪道の、根を斷つ人の有りもやせんと、母が覺悟はコレ爰に」と、佛壇より取出す位牌、「俗名 高尾と記せしは、けふは娘が殺さるゝか、明日は死骸を送るかと、我子の死ぬるを待兼ぬるも、古主の御家が大切さ。夫もあの世で御主君へ、心ばかりの申譯、片時も殿樣と、御一所に置く事ならぬ。うろたへて爰らに居ば、七生までの勘當ぢやぞ。サア〳〵皆樣奥へ〳〵」と、母の詞は理の當然、押して留めん樣もなく、後に心は殘れども、是非なく奥へ入りにけり。外にしよんぼり枯紅葉、思ひ高尾がとやかうと、思案に心案定まらず、「エヽ胴欲ぢやはいなア嬶樣、殿樣をお主とは、私もよう知つてゐる、逢初めてから二三度は、御異見したけれど、つひ其内にいとしう成り、一日お顏を見ぬ時は、私は人の心も無う、お主も家來も打忘れ、夜每々々に添ひぶしの、あかぬ別れの曉に、往なうと有るを引きとめて、つひ夫なりに居續が、高じ〳〵てお身の仇、皆私からの事なれば、いつそ身を投げ死なうにも、お腹に宿した此のやゝは、私が子でもお主樣、死ぬるにも死なれぬ身、どうぞ夫まで堪忍して、お傍に置いて下さんせ。やいの〳〵」と戸を叩き、悶え焦れて泣居たり。内はひつそと靜まりて、應へなければ涙をとゞめ、「アヽさうぢや、何事も皆先世の業」と、邊見廻し拾ひ取る、小石を入る

て久しき名乘合、問うつ問はれつ憂き事の、つもる數々噺合ふ、樣子聞きゐる娘のお幾、「扨はほんまの爺樣か、お懷しや」と取縋る。別程經し親子の名乘り、流石剛氣の郷助も、親は泣寄目に涙、大つけなうて哀なり。母の聲ぞと聞くよりも、高尾は奥より走り出で、「おなつかしや嚊樣、苦界の身の悲しさは、長の年月音信せず、ようまめで居て下さんした。殿樣のお世話にて、曲輪を出でし程もなう、御身に迫る憂き難儀、暫しの内の御不自由と、大事の殿樣お供して、お前を日當に」「ハァそんなら何と云ふ、殿樣のお供して」「アイ、さつきにから奥の間に」と、聞いて心も落付く郷助。何思ひけん母親は、高尾が手を取り門の口、突出して戸をぴつしやり、「そなたは爰に置く事ならぬ、何方へなりとも勝手に行け」と詞に恂り、高「エヽ、そりや又なぜでござんする〳〵〳〵、縱へどう云ふ事有りとも、殿樣の傍放れ、脇へとては行く事いや、惡い事が有るならば、堪忍して下さんせ〳〵、コレ嚊樣。詫言して給も妹」と、おろおろ涙ぞ道理なり。「妹構ふな、神浪樣もお構ひなされな。ヤイ高尾、科は身に覺有る筈、東國にて誰有らう、肩を並ぶる人もなき、冠者太郎義綱公、お膝を入るゝ所も無う、見苦しい破屋へ、お入りなさるは誰故ぢや。今こそは此身なれども、古へは高橋幸内教俊とて、秀衡公の御扶持人、いかに流浪したればとて、現在の己故、お家を亂し殿樣に、御惡名付けさせて

「爾ながら物問ひませう」と見合す顏、「エヽお前は神浪山左衞門樣ではござりませぬか」「ヤこな樣はお澤樣、テモマア久しぶりでお達者な顏」「お前も御無事でお嬉しや、サア〳〵マアマア此方へ」と我家の內、山左衞門取りあへず、「ヤナニお澤殿、思ひ出せば十六年以前、若氣の至りと女に馴染み、因果と懷胎、生れ落すと女は相果て」譯「アいか樣ナア、若いお人の萎たらと、乳呑子抱へうろ〳〵さつしやる氣の毒さ。しかも辰の年辰の月、辰の日辰の刻の、ほんに珍らしい誕生、幸ひ此方に乳も有り、姉と一所に呑ます內、斷も無うお前は家出、滅相な人ぢやと思うたが、死んだ佛の云はしやるには、餘所の子を世話にするも、一方ならぬ他生の緣、必ず麁末に召さるなと、夫婦して育てる內、其愛らしさ可愛らしさ、何時ともなしに此方の娘」「成程其節我ら旅より歸り、お尋ね申せど行方知れず。不思議な事で今日といふ今日、廻り逢うたも古主の御恩、シテ其娘は何と致したな」譯「サアお腹一つ痛せず、疱瘡麻疹も輕う仕廻ひ、自慢ぢや無いが、此界隈に、まア一人と無いよい娘、シテマアお前は何故に」「アヽイヤ拙者只今仕官の身、稻妻鄕助と名を改め、お主の供して此邊に、傾城高尾の親里尋ね」譯「何とおつしやります、傾城高尾の親里を尋ねてか」「イカニモ〳〵」「オヽ其高尾と云ふはわしが娘のお種ぢやはいの」「エヽさうとは知らいで是はしたり」「コレハしたり」「ヨレハしたり」と、絕え

湯、お足に障る和らかな、手先にふつと、「ムヽ穢い内に似合はぬ奇麗な娘、一夜の情をかけてくれやう。悦べ〳〵、今の褒美に何をがな、オヽ幸々、今まで履いたソレ其下駄、あたゝまりの有るのを使はすぞ。是が妹脊の固めの記、後日に否と云はさぬ樣に、太鼓どもが常にいふ、下駄をしつかり預けたぞ。コリヤ誰か有る、案內せい」と、上座へ直るも千鳥足。門より高尾が、「コレ妹、久しぶりの姉が顏、見忘れはしやらぬか」「何のマア忘れませう、姉樣よう來て下さんした。此間からお前の噂、とやかう聞いて案じたが、お前の事を言出すと、嚊樣の不機嫌、モウ何處にどうして居やんすぞと、案じぬ日はござんせぬが、嚊樣はさつきにから、南禪寺の方丈樣へ、往かしやんして留主なれば、お戾り次第よいやうに、私がいはう。必ず案じさしやんすなえ」「オヽよう云うてたもつた。曲輪へ往て逢はぬ中、テモマア大人しう成りやつたの。夫なら嚊樣はお留主かや、イヤコレ此お方は大事のお身、跡からお供も來る程に、ちつとの間なりと奥の間で、御休息さしましたい」と、どうやら譯も有る體を、見て居るお幾は手をつかへ、「見苦しけれど奥の間へ、イザ御入」とすゝめられ、「オヽ行かう〳〵、サア高尾もおぢや」と打連れて、一間の內へ入り給ふ。道におくれて稲妻が、息急き尋ぬる黃昏時、南禪寺の門前は、爰かと人にとうふ屋の、門をそこゝ行迷ふ。戾りかゝりし主のお澤、「アヽイヤ申し、卒

あんな固くろしい、他人の様な事ばかり、お前の心に懸子が在る」「かけごも何にもござりませぬ、ほんにかはゆうござりまする」「其ござりますがわたしやいや」「そんなら可愛女房ども、私が心は此燒豆腐、たとへ火の中水の底」「そりやほん〳〵でござんすか。幸酒も爰に有る、改めて内祝言、必ず嘘を云はしやんすな」「何の嘘を誰がいほ」「そんならほんまに此方の人」「女房ども」「オヽ嬉しや」と抱き付き、締めからみたる若藤や、若紫の若女夫、面白盛花盛。耳「イヤ晝日中このやうに、引ついても居られまい、お袋様は今朝から南禪寺の方丈様へ、アア雨もどうやら止みさうな、幸豆腐も出來て有る、お迎ひがてら往て來う」と、あぢに世話をば燒豆腐、提げていそ〳〵出でて行く。日影はつらく忍ぶ身は、薄におぢて菅の蓑、御笠と申せみさむらひ、賤の姿にしよんぼりと、高尾を先に義綱は、とある小陰に立休らひ、「ヤコレ高尾、冠者太郎義綱ともいはるゝ身が、鳥おどしの様な形をして、そなたと斯うして道行は、此頃で無い大當、今日の趣向を皆に見せたい、呼んでこい〳〵」「アイ〳〵、イヤ申し殿樣、モウ爰が私が内、サア〳〵お入り遊ばしませ。又此鄕助殿は何してぞ」と、云ひつゝ寄つて蓑笠を、ぬがせ申せば義綱公、すつと通つて「誰ぞ居ぬか〳〵、爰へ來て足洗へ。つひは仕て見ぬ世話事で、今日は大分草臥れた。サア〳〵早う」も夢現、恟りしながら娘の幾、手盥に汲む豆腐の

「ちつと寢て見やしやんせ」「イヤ〳〵、ト一寢入見知らつゝ錢無しぢや、ちつと負けると小言ばかり、エ、あつたら夢を覺された、ま一寢入見知らそ」と、入るよりはやく高鼾、著のみ著の儘氣散じなり。「サア〳〵申し重三樣、大分仕事のはかが往た、ちつと休んでくださんせ」「イエ〳〵お構なされますな、女氣の無い私が內、湯ぢやの茶ぢやのと親子とも、每度お世話に成りまする、コリャそのお禮でござります。七兵衞殿は病氣で、宿へさがつてゐられるげな、その間は御遠慮無う、お遣ひなされて下さりませ。まだよつ程此豆腐、手序にみな片付けませう」「そんならさうして下さんせ、私も串を刺いて仕舞ほ。イヤ申し重三樣、斯うしてお前とかう並んで、此樣に精出すも、世帶の稽古して見ると、ほんに嬉しうござんする。初めて見初めた其時に、いとしらしいと思うたが、癪を覺えた始にて、廻らぬ筆の跡や先、譯の無いのが緣の端、夜すが求めて寐てそして、寐る度每に可愛さの、十寸鏡取る其隙も、寐た間も忘れた事は無い」「ア、コレ〳〵豆腐を其樣に振廻すと、私が身內は眞白に、人の白あへが出來まする。ホンニ嬉しいお志、ちつとも仇には存じませぬ。元私は小い時、餘所へ養子に參りましたが、先が皆死果てゝ、此頃親仁を尋ねて參り、一月餘り京都の住居、近所に馴染と云ふは無し。南無三豆腐を眞黑にした。マウ親身といふは親仁ばかり、御存じの通りのあゝ云ふ氣性、ャ申しお幾樣え、此上ながらお賴申します」「あれまだ

自他共に御意得たし」「是非逢ふ氣か、そんなら其戸をぐつと押した、ア、コレ／＼靜かに仕やうぞ、こぼれ物がごんすぞや。アリヤこそ溲瓶引くり覆した、麁相な人」とぬつと出す、顔はをかしく惡光り、素人の燒いた樂燒の、中にぎろ付く目を擦り／＼、「エ門兵衛樣、扨悽じい降でござります。そしてマア何ぞ用でもござりますか」「オヽサ／＼密々の用事も有れば、内へ這入つて其樣子」「イエ／＼内は雨がだゝ拔け、外の方が增しでごんす」「然らば是で申付けん、主人錦戸刑部殿、其方へお賴みなされたきは餘の儀でもない、隣の豆腐屋は、傾城高尾が親里なれば、冠者太郎諸共に、尋來たらんは必定、其時には折を窺ひ、人知れず二人共に刺殺し捨てられよ、此儀首尾よう仕おほせなば、某が吹擧して、侍に取立てる。斯樣の事を申付けるも、先日屋敷で博の節、二三度の出會に、汝が魂見拔きし故、偏に奉公勵まれよ」「畏りました。スリヤ鄰の豆腐屋は」「オヽ高尾が親里、若しも尋ねて來まい物でもなし、來た時には」「ハテ氣遣ひさんすな、貧乏動ぎもさせませぬ」「ハテ扨小氣味のよい男、然らば隨分手ぬかり無う、萬端貴殿を賴入る、近日ゆる／＼御意得ん」と、詞は適萬石取、腰に二腰さしこなす、銀拵へも胡散なる、なまり散らしてかへりける。渡「ようお出でなされました、コレ屋敷によいのが出來たら、かならず知らして貰ひましよぞえ。沙汰無しにしよまいぞえ。アしかしあい

がみ、「エヽ口惜しや殘念や、やみ〳〵と毒藥に、命を果すか奇怪や。此上は何千萬、日本國が寄せくるとも、死物狂ひのあばれ死、敵の屋敷に我屍、いつかな殘さぬ人種の、有らん限り」と氣を固め、踏出す足もたぢ〳〵〳〵、弱る兩足踏みしめ〳〵、支ゆる奴原張退け蹴殺し踏殺し、人無き原を行くごとく、萬夫不當の豪傑も、運つきの輪や熊川が、武勇の程こそ　三重ゆゝしけれ。

第四

姫氏國と書きし寶誌こそ、四百餘州の粹ならん。何國は有れど取分けて、都の水で磨き上げ、娘盛の品者が、前垂たすき掛けまくも、かみ形さへ手品さへ、和らかさうな豆腐屋の、内を手傳ふ小息子が、水の垂るのを燒立てる、おかべ一重の隣には、何する人としら浪か、しかとは見えぬ男振、されども此人、晝をば何と烏羽玉の、夜ならで目覺め給はぬは、いと不審多きすぎはひなり。中間とも侍とも、わからぬ腰付せいひつ合羽、あたりうそ〳〵立留り、「浮世渡平は此宅な、在宿ならば御意得たし」「アヽ誰ぢや喧ましい、用が有るなら明朝ござれ。ムヽ夕べの義理を取りに來たのか、晩には是非とも行く程に、其時に一所に濟す」「イヤ〳〵左樣の用事でなし、

れば、死しても見ゆる我悲しみ、せめて暫しが内なりとも、父の命を延べてたべ。コレ、今はの際の願ぞや、コレ手を合す源五殿、お情お慈悲」と身を投伏し、歎けば共に松島が、合す兩手も弱々と、今を限りの二人が體、孝心貞女の節義には、さしもに荒き熊川も、目を數叩き居たりしが、「佞惡邪智の貝田が躮に、斯くも忠孝揃ひたる、適健氣の若者よな。親は子故に迷ひもせで、子は親故に迷ひしよな。赦しがたき勘解由なれども、汝が孝心厚きに免じ、けふの樣子は何事も、知らず覺えぬ」氣違ひの、目にはこぼさぬ一雫。「ハア、ハ、、、、」有難涙末期の水、引取る息も一時に、哀はかなき最期なり。ほろりとこぼす勇者の涙、しをるゝ熊川庭先へ、貝田が下知にて數多の家來、ばら〳〵と追取卷き、「ヤア贋氣ちがひの源五兵衞、遁すな、行らじ」と呼はつたり。「ム、ハ、、、、常の力に百倍增、氣違力の源五兵衞、成らば手柄に留めて見よ」と、庭へひらりと右左、「捕つた」と掛るを引寄せ〳〵、ばらり〳〵と人礫、强力手練の働きに、「コリャ叶はぬ」と皆ちり〴〵、思ひがけなき後より、頭目當に打付くる、釜の熱湯毒氣に咽び、思はず尻居にどつかと伏す、透へ切込む貝田が刀、請けたる强力手水鉢、微塵に成さんと振上ぐる。遉の貝田氣を呑まれ、逃入る跡へ又むら〳〵、出合ふ大勢打付くる、石に打たれて人の鮨、我身もどうとふし〴〵に、沁込む毒氣に眼も眩み、勇氣も碎け無念の齒

に、思ひ込んだる孝の道、心の迷ひをふッつと切り、悪事を思ひ留つてたべ」と、孝と忠義と二つ三つ、よわり行く身の松島が、「扨はさうしたお心か、さうとは知らず今までも、御病氣故の現言、どうぞ本復有る様と、烏の鳴かぬ日は有れど、泣いて祈らぬ神様や、佛様まで御苦勞を、懸けぬ願ひもなかりしに、今の立派なお詞を、悦ぶ甲斐も情ない、コレ此のお姿は何事ぞ。此世の縁は薄くとも、未來はやつぱり夫婦ぞや」と、痛手も厭はず縋り付き、いたはる息も絶え〴〵に、賴すくなき其風情、強惡不敵の貝田勘解由、「ハヽヽヽハテほざいたり不孝者、子が死なうが親が死なうが、思ひ込んだる心の大望、いつかな〳〵翻さぬ。親に逆らふ天罰にて、くたばるは不孝の罰、思ひの儘に苦痛をひろげ」と、二人をはつたと踏飛し、見返りもせず入りにける。様子とつくと物陰より、ぬつと出でたる源五兵衞、「貝田が胸中合點行かず、事を謀らん其爲に、狂氣の體に何も角も、聞拔いたれば遁れぬ勘解由、イデ一摑」と駈行く勢ひ、「ヤア〳〵待つた源五兵衞殿」と、苦しき骸取縋り、「忠義に凝つたる貴殿とは、知つたる故に法印が、工の次第あど打つて、白狀させしも我父の、百分が一の罪亡し、我も少しの忠義ぞや。主に叛く父勘解由、果は刃の錆屑と、成り給はんとは思へども、眼前親の憂き目をば、何と見て居られうぞ。相果つるとも魂は、四十九日が其間、此土を去らぬと聞くな

アサア〳〵」と追廻され、悲しさつらさ一世の瀬戸際、襖ぐわらりと源之助、抜手も見せず松島が、肩先ずつぱと切下ぐる、ウンとばかりにかつぱと伏す。血刀逆手に取直し、ぐつと突込む弓手の肋、日比に變る利發の覺悟、强氣の勘解由も恟り仰天、手負は苦しき顏振上げ、源「日比愚鈍の私がかゝる有様、父上の御不審は御尤、錦戸殿としめし合せ、勿體なくも主君を失ひ、國を奪はん御企も、子孫を榮華に有らせん爲、其きざしを鎭めん爲、いつぞやの大病を、是幸と作り阿呆、現なき身の行作も、主人を掠める冥罰は、駒に忽ち報いしと、先非を悔いて本心に、お成りなさるゝ事もやと、心を付くれど此比は、彌募る惡事の企、父は子の爲に隱し、子は父の爲に隱すと、古語に引きかへ親と子の、心々に隱しあふ、不忠不義の御心、諫言せんにも情なや、明衡が娘松島、某が妻とすれば、女に引かされ大望の、妨なすかと思さんかと、不便ながらも此のごとく、手に掛けたるは女房の、緣に迷はぬ心の潔白、仕込みに仕込みし御企、思ふ圖の外れしは、天道誠を照し給ふ、是目前の徵ぞや。近き手本は舟岡にて、鳥を取らんと眼前の、欲に迷ひて山深く、難に逢うたるまつ其の如く、國郡の欲に耽り、我身を忘れ深入し、終には御身を亡し給はん、淺間しや、父の惡事の根本は、私と云ふ子故の闇、其迷ひの根葉を斷つ、我が生害は先祖代々、傳はる貝田の家の苗字、汚さじ物と一心

たふ涙の瀧津浪、岩に堰かるゝ風情なり。かゝる所へ渡會銀兵衛、色眞青に馳來れば、勘解由きつと見、「ヤア合點の行かぬ貴殿の顔色、首尾よく毒害仕おほせしか、ア、心元なし、何と〳〵」「されば〳〵、直樣館へ馳付き膳番にしめし合せ、膳部に殘らず毒を入れ、サア仕濟せしと思ふ所に、イヤマウよい事には、寸善尺魔、若殿の御手遊、枝珊瑚樹の鉢植が、微塵に割れしは心得ずと、乳母政岡あやしめば、カノ强力者の節之助、正しく毒に紛ひなし、其頼人を白狀せよと、膳番川崎軍八が、首筋摑んで手詰の場所、遉老功の刑部殿、急きにせいたる風情にて、軍八を眞二つ、傍に居並ぶ近習小姓、婢茶道に至るまで、十人ばかり卽座に手討、白狀すべき手筋も切れ、只今評議眞最中、いかゞ計らひ申さんや」と、靑息吐息訴ふれば、さしもの貝田も溜息つぎ、「エ、十が九つ仕おほせしに、殘念々々さりながら、す敏き刑部の計ひにて、詮議の根を斷つたるは、適の働、しかし政岡松が枝なんど、鶴喜代が傍を離れねば、事を計るに便なし。ガ其毒藥を見出せしは、外に逆意の者有りと思はせん計らひなりと、返つて彼等に難題を云ひかけ、遠ざける謀計は、刑部と兩人謀らはれよ。暫時も猶豫なりがたし、早く〳〵」に渡會は、復引かへし馳けり行く。貝「嫁々、コリヤ松島、斯く仕おほせねば猶の事、彌命は助けられぬ、覺悟して早く呑め」「アイ」「サア呑め」「アイ」「くらはぬか死女郎、サ

ば、鶴喜代は卽時に落命、ハヽヽ心地よや」と高笑、聞いて悔り松島が、心は千々に浮島や、水に漂ふ思ひなり。「コリヤ松島、とてもの事に此薄茶、其方そこにて獨服せば」「エヽ」「イヤサ驚く事はない、其方が父伊達明衡は義綱の一族、忠義立する老惚め、鶴喜代を毒害しても、刑部殿へ國の政道仰付けられなき内に、事露顯せば大望の妨、現在明衡が娘の其方、ヤモ生けて置いては夜が寢られぬ。樣子聞かうが聞くまいが、どうで助けぬそちが命、其毒藥を試みて、死んで見せるが舅へ孝行」サア呑め、くらへと舅の詞、思ひがけなき松島は、暫し途方に暮れけるが、漸くに顏を上げ、「明衡が娘の私、若君樣への毒害を、とゞ樣へ洩さうかと、思召してのお疑ひ、道理とはさら〳〵存じませねど、姬御ぜの身は生れてより、三界に家無しとやら、夫を神とも佛とも、大事にするが世の敎へ、其夫の父上樣、眞實本の爺樣より、御大切に思ふ物、たとへどうした事にもせよ、お身の御難に成る事を、何の人に洩さうぞ。未練に命惜しいとも、微塵思ひはせぬけれど、心に懸かるは我夫の、愚かしいお心故、女夫といふは名ばかりに、つひに一度の添寢さへ、馴染む程猶頑是ない、氣にも私を女房ぢやと、思うてござるがおいとしい、離れともない死にともない。何々の誓文で、人には言はぬ申しませぬ、命を助けて給はれ」と、口說いつ泣いつ伏しをがみ、伏拜む手に露雫、づ

も忠義は忘れぬ大場道益、知行にほだされ非義非道に組せんや。穢はしき奴原と、暫時も同席勿體なや」と、つッ立上るを銀兵衛が、立ち塞がつて、「どこへ〳〵、大事を聞かせ歸さうや」と、留めてもいつかな一徹老人、貝田が拔打後げさ、すぐに留めの一刳ぐり、「アヽ時代に合はぬ忠義立、たとへ得心したとても、打放さでは後日の難」と、懷中さがし取出す包、「コレサ銀兵衛、此一包は貴殿に渡す、豫てしめし合せし通り、ソレ早く〳〵」「ハア委細承知仕る、追付け吉左右お知らせ」と、館をさして歸り行く。後に勘解由は血押拭ひ、死骸片手に蹴上げる疊、さあらぬ體に傍なる、臺子の釜へ打込む毒藥、元の如くに蓋取繕ひ、「ナニ松島、それにお居やるか、松島々々」と呼ぶ聲に、あいと返事も合の間の、襖押明け手を突けば、「ホヽ嫁、そちや先程よりそこに居るか、何ぞ樣子を聞いたか見たか」「イヽエ何にも」「ムヽ知らぬぢやまで、イヤナニ松島、今朝より何かと用事繁く、ほつとりと退屈した。幸の釜のたぎり、そちが手前で薄茶一服、立てゝくりやれ」と底意有る、舅の詞松島が、立寄る振の紅の、朱を奪ふや紫の、服紗さばきもしをらしく、立つる茶筌の泡よりも、先へ消え行く命とは、心も付かず氣も付かず、行儀正しく差出す、茶碗取上げ貝田勘解由、とつくと詠め、「ムヽ色も變せず、ちつとも怪しき體もなきは、ハテ奇妙の祕法、ハアヽ嬉しや、此毒藥を膳部に加へ進めな

「譬尋ねても〳〵、此上嵐の雲に在りて、龍女は南方に飛去り行けば、龍神は猿澤の、池の青波蹴立て〳〵て」めつたむしやうに踏付けられ、目口を張つて奇妙院、其儘息は絶えにけり。

熊「サア〳〵是からはおれが居間、其山伏を人形にして、遊ばうでは有るまいか」と、云ふ内よりも死骸をさし上げ、「唄中の〳〵小法師は、なぜ背が低いぞ、まつかう高いは〳〵」氣の抜けたのと氣違と、誰に心もおくの間の、襖押明け入りにけり。斯くと様子もしろ書院、入來る渡會銀兵衛、大場道益作ひて、座敷へ直れば、夫と案内に貝田勘解由、「ホヽ渡會殿御大儀千萬、シテ彼の一品は調ひましたかな」「ハアいかにも〳〵、委細とつくと此道益老に相頼む、事成就の後には新地千石、證人は此銀兵衛、則證文も渡し置く。ナニ道益老、最前お頼み申した通り、調合の彼毒藥、勘解由殿へお渡し有れ」と、差圖に道益近く摺寄り、「お頼みの彼毒藥は、我等が家に傳はる祕法、醫の道は仁術にて、人の命を斷つ事は、醫家には固き禁なれども、國の爲との御事故、調合は致せども、先何人に此藥御用ひなさるゝや、承つて上の事」と、いぶかる顔色、具「ホ尤の尋、國の爲家の爲、其毒藥を用るは、若殿鶴喜代君」大「エヽ」とは又何故」具「オヽ錦戸刑部殿に此國家を押領させ、我も諸共に國郡の主と成り、榮耀榮花をせん計略、スリヤ銘々が國の爲さ」大「ナニ鶴喜代君に毒藥とは、お國を亂さん國賊ども、長袖なれど

盡かし、「エヽ鈍な山伏ぢや、二人面白う遊ぶのに、己が邪魔を仕居るので、伯父様もつい寢入つた。サア〳〵とつとと歸れ〳〵」「イヽヤ歸るまい、貝田殿の頼によつて、此病人を本性にする。若輩者の知る事ならず、默つてをろ」と睨め付ける。「ワァイ病人を直すはお醫者様ぢやはい、わいらがそんな事したてゝ、一つも利く事ぢやない。邪魔に成る、早う歸れ」「シャ小癪なる素丁稚め、某が術を以て、空飛ぶ鳥も祈り落す、世事に分らぬ大馬鹿に、云ひ聞かすには及ばねど、刑部殿の頼により、義綱の曲輪通ひ、伽羅の下駄に呪咀の文を書き、履かせたる故にこそ、眞心蕩けて本性なし。まつた是を直さんには、懐中したる祕書の一卷、此中に一つの良藥、是を呑ませば義綱が、元の通りに正しく成る。イデ〳〵驗を見せん」とて、又いら高を押しもめば、源之助もつて大地を打つよりいと易し。かく萬事に亙る某、魑魅魍魎を退けんは、掌をは撥押取り、「謡今の蛇身を祈る上は、何の恨かあり明の、鐘こそ、すは〳〵動くぞ祈れたゞたゞ、引くや手々に千手の陀羅尼、不動の慈救の偈、明王の火焰の、黑煙を立てゝぞ祈りける」祈りいのられ源五兵衛、「謡恐しや幣帛に、三十番神まし〳〵て、魍魎鬼神は穢はしや。出でよ出でよと責め給ふぞや、詞アラ腹立ちや苦しや」と、奇妙院が首筋摑み、座敷へどうど投付けて、覆ひ重る肥滿のからだ、大山を負うたる如く、指を屈めん様もなく、苦しむ内に聲高く、

お前がお迎へ遊ばせば、私が爲には大事の姉樣、どなた樣へもお前から」「いかにも〳〵、誰々へも宜きに傳へん、源之助殿にも御堅固に」と、いへどうつかり氣の毒を、紛らす松島勝手口、連れて見送り出でて行く。「サア是からおれが一人遊び、鼓も太鼓も爰に在る」と、習うた事は奇特にも、鼓取上げ聲張り上げ、「謡抑是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽靈なり。詞ハア、わしが好の強い伯父樣が出てござつた、コリャ面白い〳〵。謡打物業にて叶ふまじと、數珠さらさらと押し揉んで」跡より出づる奇妙院、「謡いかなる天魔鬼神なりとも」祈りふせんず眼付。きよろ〳〵目して熊川が、何を聞いてか高笑ひ、熊「ハヽヽ、コリャをかしい〳〵、日頃堅い顏してゐる、六條の左近殿が、聖護院のお辰女郎を嫁に取る、コリャ取持に行かずば成るまい、唄先盃は三々九度、祝儀も濟んで床の内、しめてからみし藤の森、松の千年と契りしを、小女郎が聞いて悋氣の燒餅、一つ參れ兵衞殿、ま一つ參れ兵衞殿」「詞ヤア伯父樣、其餅くたか、エヽ汚な」「唄北野を過ぎて柏野や、思ひ内野に有ればこそ、つめつた跡の紫野、後は互に睦言の、未來を契る蓮臺野、小褄引上げ引きしめて、裾はひら〳〵平野の宮へ、思ひなん〳〵七野の社、緣を切れとはエヽ胴欲ぢやナ。わしや何ぼでも放りやせぬ、殺して置いて行かしやんせ」と、泣いつ笑ひつ現なく、とんと倒れて高鼾。奇妙院は一心不亂、祈れど驗有らざれば、源之助は精

く。褄明けると摺足し、脇目もふらず源之助、屋敷の内もあぶ〳〵と、苦は色かへぬ松島が、跡に付添ひ立出づれば、源「隱れも無い大名、太郎冠者在るかやい〳〵、來たか〳〵、コレお前にと言ふのぢやわいなう。エヽ覺の悪い人、マア一度初手から仕直さう、サア〳〵早う立ちやいなう」松「アイ〳〵、そんならあとを致しませう。夕お前が行方なうお成りなされた其時に、はつと思うた悲しさと、お歸りなされた嬉しさと、何やら彼やらで持病の癪、ちつとの間お待ちなされ、お氣が盡きたらお菓子でも」「イヤ〳〵欲しうない構やんな。きつう癪か痛むなら、灸をすゑてやらうかや、熱いが辛抱しやるか」と、云ふ顏つく〴〵打詠め、「嬉しい今の其お詞、夫婦と思し召せばこそ、愚しいお心にも、たんと案じて下さんす、思ひ出すも味氣ない、お爺様と爺様が、云約束の無い先から、私が心に極めた殿御、女冥加に叶うたのぢやと、思ふ內早睦び月、祝言をして程もなう、健忘とやら云ふ病、神や佛のお力で、御本復は遊ばしても、御一門のお出會に、つまらぬ事をおつしやる度、おいとしいやら悲しいやら、此後とても侮られ、住むかひも無いお身の上、思ひやられて悲しい」と、悔涙の折からに、奥よりしづ〳〵出來るは、明衡が一子千賀之助、立派に出立つ旅裝束、松島見るより、「是は〳〵直様お立ち遊ばすか、此頃何かに取紛れ、問はせの文も認めず、國では兄弟同然に、中の好かつた文字摺様、

謀計は一旦の利潤、神明町に一構は、貝田勘解由直勝が屋敷、義綱公の館の内、分けて目に立つ花麗の作り、手を盡したる奥の間は、浮べる雲の金襖、龍に翼の出頭は、誰並ぶべくも見えざりけり。ちよつと掃くのも四五人が、草臥れる程廣い間に、狭い女氣陰の間の、奉公箒持ちながら、「コレお綱、此様に朝から晩まで閙がしいお屋敷が、廣い京にも有りやせまい。爰から近い北野様へ、一寸と參る事さへ叶はぬ」「ソレイノ、忙しい中へ心も無う、錦戸刑部様が三日に上げずお出なされ、旦那様と圍の内、何やら二人さし向ひ、人にお隱しなさるゝは、どうでろくな事では有るまい」「オヽろくでないと云ふなら、お館様はうか〱と、傾城を買過し、此間から行方が知れず、お大名の駈落でも、鑓長刀の持人は無し、お供の衆は有るまいし、マア危ない事ぢやないかいなう」「ホンニソレ、あぶない次手にこちの若旦那、船岡山の歸りがけ、松島様におはぐれなされ、蓮臺野の片傍で、狼に取りまかれてござつたを、漸連れましてお歸りなされた。しかし狼で仕合、アノマ美しい若旦那、狐などが取卷いたら、跡が疵物に成るナウおむつ」「サレバイノ、どこに思ひ入れが有るか、熊川とやら云ふ怖い顔な人に、狐が付いてそゞろ言、夫を祈り鎭めると、狸の様な山伏が、憎てらしい高慢顔、狐やら狸やら、狼やらであへかへす、狼より恐しい旦那様のお目玉を、貰はぬ様」と段々に、掃除しながら次へ行

も、ひつそとしづまり音もなし。人々案に相違して、心をいたむる其中に、寐ぼれ聲なる義綱公、「御家老衆の例の堅み、大切がる此門も、島原の大門程には我等嬉しう思はぬ〳〵。イヤ又出口は和らかみが格別、されば廓中先生達の御託宣に、都島原出口の柳、かそやれ〳〵此柳、サツサかそやれ此柳なぞと、やつた所はたまらぬ〳〵」と、現たわいも無かりけり。隙を窺ひ荒灘が、義綱目がけ抜く刀、目早く稲妻引ずりのけ、「ハテ心得ぬ風之助、大恩の御主君を、討奉る極悪人、コリヤうぬ誰ぞに頼まれたな」「オヽ知れた事頼まれたが、それを己にいふものか、打殺した跡でいうて聞かさう。先うぬから」と切込む刀、まつかせ合點と抜き合せ、打合ひ打合ふ白刃と白刃、電光石火稲妻が、手練に刀打落され、迯行く荒灘後袈裟、二つに成つて死してけり。「ホヽ適手柄」と小治郎定倉、「當座の褒美」と投げこす一通、「委細は夫に、早行け」と、詞は何かしら刃の血しほ、「一先爰を高尾様」「アイ〳〵〳〵」とかいしよげに、こづま引上げ我夫の、御手を引くもなまめける、姿の盛り花紅葉、我にたわいも現なき、君を伴ふ稲妻が、忠義は今に（三重）

第　三

て置く。ヤア〳〵者ども、御門を厳しく相守れ」と、聲諸共に締める戸の、貫木入れたか詞の錠、稻妻は氣をいため、「コレ〳〵荒灘、何にもせよ我君を、館へ御入れ申さずば、事の樣子が氣遣ひな、裏門から御供せん。イザ御出」と御手を取る。高尾も共に氣もそゞろ、裾もほよ〳〵踏みかへす、裏の御門へ急ぎ行く。廻れば道も遠目から、星をあざむく高提灯、晝かとばかり人々は、只うつとりと詠めゐる。鄕助は詮方なさ、御門の扉にひそ〳〵聲、「此御門はどなたのお固め、義綱公御歸館なれども、表門は明衡殿御固め、殿御入り叶はず、何卒密に此門より御入り有る樣賴入る」と、聲より早く高塀より、ずつと見越すは名も高き、和泉小治郎定倉、「ヤア義綱公の御歸館とは心得ず、此定倉が主君と申す、冠者太郎義綱公は、五十四郡の御主、西に津島の冠者、東には伊達冠者、靜謐の御代には國の固め、戰場に出馬の時は、百萬騎の大將たり。夫に何ぞや女童を引連れて、ムヽコリヤ我君を放埒なりと世間へ流布させん爲、惡人共のはからひよな。錦戶貝田が知らせにて、お家の重寶亂髮の刀紛失と追々知らせ、必定逆意の者共が、騷に紛れ我君の、御身の程も覺束なし、君は館に有るとも無きとも、知れざるも又佞人原の、心を探る一方便と、御門を固め此通り、見れば足弱を連れし旅人と見ゆる、門前にうろついて、人に見咎められぬ樣、早く立去れ〳〵」と、子細有りげな定倉が、詞と共に門内

心嚴しき拍子木の、音さへ澄みてしん〳〵たり。色と酒とに現なき、身は空蟬のもぬけ殼、高尾が肩に義綱公、もつれもつるゝ千鳥足、跡に付添ふ稻妻荒灘、門外近く立留り、高尾「申し殿樣、爰がまうお屋敷、現ないお姿では、御家來中の見る目も氣の毒、心をお付け遊ばせ」といへどたわいもぶら〳〵眠り。荒「アヽイヤ申し高尾樣、其樣に氣の毒がる事はない。縱へどう成されうが、皆殿の御家來ばかり、怖い者は一人もない、ドレ御門を開かせん」と、荒灘は門の戸びら、割れるばかりに打ちたゝき、「殿樣只今御歸館なるぞ、御門を早く開かれい」と、言へどひつそと靜まつて、答ふる人もなかりける。荒灘はむくりを煮やし、「コリヤヤイ是程にわめいても、返事もせぬは寢入りて居るな。うぬらが役は何だと思ふ、御門の開閉するばかりで、御扶持を食つて居るではないか、其殿のお歸館に、たわいもない寢とぼけめ等、ど性根付けずば荒灘が、門打碎いて御供せうか、ごくだうめら」とどつてう聲、俄に騷ぐ御門内、さつと一度に高提灯、はせ違ふ人音足音、思ひがけなく表は愕り、門内より聲高く、「御門番は伊達治郎明衡、子細有つて相勸むる所に、理不盡に門を開けなんどとは何者なるぞ、眞直に名を名乘れ」と、詞に仰天荒灘が、暴風に逢ひし心地にて、皆々答へもなかりけり。「ム、聞えた、京 童のざれ深く、田舍武士とて嬲るよな。急度詮議もすべきなれど、大事の評議最中、其儘に打捨

る我術にて、おびき寄せしも心を合せ、秀衡が末孫を、討つて亡父へ手向けん爲、勇猛智謀は汝に有り、我が妙術を添ふるならば、龍に翼を生ずる如し、大望成就疑ひなし」と、胸中見拔きし稀代の曲者、「ホ、適なる汝が詞、我が大望を見透かす上は、何をか包まん、錦戸が工に組するは、彼が權威を借らん爲、事成就せば打殺し、五十四郡を手に摑らば、一天四海も一摑、冠者太郞が家に傳はる亂髮といふ一刀、疾くより奪ひ身を放さず、刀紛失の次第惰弱の身持、歸つて國へ通達すれば、館の騷の虛に乘つて、事を謀る方便は樣々」「ハヽヽ、面白や」と猛惡に、悅ぶ國雄も勇立ち、「ホヽヽ、心地よき剛勇豪傑、返し與ふる源之助、子孫の榮請取られよ」と、引立て出づる源之助、親の工も夢現、別れ散つたる家來ども、追々尋ね見付ける人影、「ヤアお旦那是に、若旦那」と、立寄る下部を拔打に、右と左へ踏飛し、「怪しめられては事の破れ、只狼の難に遭ひしと云ひふらすも密事の血判、やがて再會々々」と、立別れたる深山路や、能はぬ望は童べに、花咲きまじる躑躅山、我家へこそは立歸る。

第二

夜目にきらめく門構、磨き立てたる金物の、紋も羽を伸す竹の丸、冠者太郞義綱の上屋敷、用

は白狼の革衣、眉毛漏れ來る眼の光、「ム、扨は家來を害し、躮源之助を奪ひしは汝が仕業よな。サア躮か生死白狀せよ」と、はつたと白眼めばにつこと笑ひ、「ホヽ竹の林に住む虎は、勢ひ猛き物なれど、我子の別を悲しみては、千里に功有る足痿えて、一歩を成す事能はずとや。さしもに勇なる貝田なれども、恩愛の道捨てがたき、心を計つて一子を取り、此山中へ釣り寄せしは、大望の片腕とも、頼まん爲の我はからひ。元某は常陸の大掾國香が末子、常陸之助國雄と云ふ者、汝が主人義綱は、陸奥守秀衡が嫡孫、我父國香は隣國にて、互に武威を爭ひて、數度の合戰軍慮を磨き、軍に勝利の時も有り、又は敵の方便に乘り、味方追はるゝ折も有り、火牛の角の爭も、天の成せる運命は、いかなる猛將勇者なりとも、叶はぬ時節か闇々と、秀衡が謀に思はぬ深入、伏兵ども一度に起つて亂戰に、父を始め兄國光、宗徒の郎等一騎も殘らず討死と、聞いたる時の我無念、馳せ付けて父の仇、弔軍せん物と、心ははやれど幼稚の某、頼みがたなき人心、恩顧の家來も皆散り〴〵、時節謀つて秀衡を、一太刀恨みん其爲に、跡を晦まし國を立退き、六十餘州を遍歷し、深山幽谷に身を凝らし、習ひ覺えし妖術幻術、四疑の孟德を惱ませし、左慈が傳ふる稀代の妙術、隱るゝ時は芥子にも入り、また現せば天地に跨り、心の儘に身を變じ、神變希代心の儘、錦戸刑部と心を合せ、國を奪はん汝が胸中、計り知つた

て、人知れず討放せ。コリヤ必ずぬかるな」「合點」と風之助、道を早めて追うて行く。かゝる所へ貝田が若黨有村金助、色眞青に馳來り、「若旦那を御供し、歸る麓の岨傳ひ、羽色餘鳥に異なる山鳥、人も恐れず岩の上、元よりあどなき若旦那、手取にせんと成されしに、ぱつと立つたる跡を追ひ、山路へ追駈け御入有れど、かいくれに行方知れず、松島樣の御歎き、過有つてはいかゞぞと、熊川殿にお頼み申し、數多の下部は手分して、尋ぬる隙に右の樣子、御知らせ申さん爲、暮に及ばゞ氣遣はし、お旦那にも御出あれ」と、云ひ捨てゝ馳けり行く。刑部も悁り貝田勘解由、「心愚な我躮、古狼野干の所爲なるか、何にもせよ捨置かれず、刑部殿には義綱の、有無の音連相待たれよ」と、馳出す心もせき陽の、日影を追うてぞ馳けり行く。岩間谷陰咲揃ふ、花踏みちらす韋駄天走り、我子を尋ぬる氣はそゞろ、馳け行く坂中物こそ見ゆれと、立寄り見れば若黨金助、のたれ伏したる骸は血まぶれ、見るよりくわつと怒の眼、「ヤア主に忠無き卑怯者」と、死骸を谷へはつたと蹴込み、「必定猪狼の仕業ならん、たとへ天狗の所爲なりとも、大丈夫の一心に、何ぞ求め得ざるべき。峯を崩し水を穿つても、我子の敵微塵になさで置くべきか」と、眼血走り氣は半亂、馳け行くこなたの洞穴より、「ヤア暫く貝田勘解由、汝を待つ事やゝ久し、對面せん」と聲を掛け、立出づる其形相、葎の髮を振亂し、身

詞、心ならねど松島が、「イザ御案内、サア源之助樣」「ムヽまう往ぬのか、ヤレ〱ほつと退屈した。シタガあの強い人が出たので、どうやらちつと氣が晴れた、サア〱往なう」と先に立つ。熊「ムヽ、然らば貴殿のお屋敷へ」「委細はあれで」と勘解由が式禮、熊川は皆打連れて出でて行く、跡に錦戸不思議の顏色、「コレサ勘解由、かね〲某と心を合せ、義綱を空氣に仕込み、忠臣の奴原に、愛想つかさせ取つて押籠め、鶴喜代に跡目を願ひ、後見と成つて一家中を味方に附け、其上で鶴喜代を亡き者にせんと日頃の計略、大概に出來上つた所、忠義立するアノ熊川、ホヽウ取込んだ我心は、殿の爲と賺しこみ、國に在る伊達泉兩人を片付けさせば、跡に氣ぶさいな者は無い。五十四郡は心の儘、只何事も我胸に、ちつとも氣遣あられな」と、惡事に固まる詞の下、宙を飛んで稻妻辨助、息をはかりに驅來り、斯と見るより兩手を著き、「ヤア御兩人共是に御入、殿樣の御用有つてお館へ參りし所、何かは知らず國元より、早馬早駕籠上を下、何分殿樣が御座なくてはと存じ、息を切つて立歸る」と、云ふもひい〲〲すたすた息。「ホヲ出かした〱、我々が御供は、人の目立つは御爲ならず、汝は館へ裏口より、片時も早く御供申せ、早く〱」に稻妻が、はつとばかりに奥の方、折から歸る鳳之助、錦戸見るより、「コリャ荒灘、日比云付け置きしは爰、外に供なき冠者太郎、跡より追付き道中に

られな」と、夙くより戸口に貝田勘解由、二人が中に分入つて、「委細一々承る、熊川殿の忠節も適々、其方國元を出られてより、某竊に御諫言申せども、情なや御聞入れなく其の元は、國に殘る明衡定倉、此貝田を忌み嫌ひ、御前を遠退けん爲奢を勸め込み、用金を主君に當てがひ、稻妻鄕助といふ筋無き者を御傍に付置き、御惰弱を勸むるは、兩人が心に一物有らん。某御傍を放れなば、いかなる珍事も出で來らん。兎角時節を見合さんと、御心に入る事のみ、御諫言も申さぬは、御傍を放れまい爲、心を盡せども、モ誰有つて片腕とする忠臣なく、樣々心を痛める此時節、思はずも熊川殿、此處へ來られしは、某が身の大慶此上や有るべき。是より兩人心を合せ、佞人逆臣の奴原一々追ひ退けんは我方寸の内に有り。ハア、忝なや嬉しや」と、誠を表す忠義の詞、源五兵衞も納得し、「ム、忠義の爲とお言やれば、何國までも立て貫く熊川、定倉にもせよ明衡にもせよ、逆意と有れば國へ立越え、摑み殺すに何の手間隙、いで此のまゝに國元へ」と、つゝ立ち上る性急者。「ア、イヤ〳〵、急いては却てお爲にならず、一先づ我家へお越しあれ、諸事の密談」「ア、イヤ、コレ〳〵勘解由、そりや何事、向ふ見ずのアノ熊川、こなたの屋敷へ連れ歸り、密談とは、此の刑部は呑込めぬ」「イヤサ此の貝田が御家の爲に、心を碎く仕上げは跡にて。ヤア悴、松島も諸共に、熊川殿を御供申せ、早く〳〵」と諫の

買うて下んせ」と、云ふも一曲有る頬付、錦戸きつと見、「ヤア己は先年義綱公に諫言して、用ひなきを憤り、白晝に國を立退きし熊川源五兵衛、ム、聞えた、浪人の糧に盡き、家々をゆすり商賣、古への主とも知らず、百姓町人と心得慮外千萬、錦戸刑部が前とも云はず、狂氣同然の尾籠者」と、きめ付くれどびくともせず、くつ〳〵と咲ひ出し、「ヤア、ぬかしたり腹の皮、三千世界に主君がなければ、怖い物のない此熊川、慮外と云はるゝ事はないぞ。三度諫めて身退くと古語に引きかへ、百度千度の諫言も、傍に付添ふ侫人ばらめが、さゝいこさい云廻し、剰へ御前を遠慮、やゝ腹立に妻子を連れ、四年以來浪人住居、聞くまいと思ふ程、彌々聞える殿の放埓、其の元は傾城め故、コレ此紅葉は高尾の名物、コレ、眞此樣に打切つて仕舞ふが主君の目覺しお家の爲、寵愛の女を手にかけしと、殿が腹を立たれうが、とんぼう反りしられうが、そこらは構はぬ源五兵衛、國に殘る明衡定倉兩人が、知らず顏は知行が惜しさ、ヤモどいつもこいつも祿盜人めら、渇しても盜泉の水、儕等と一つに飮まぬ某、サア傾城めを此處へ出せ、留めだてすると相伴に、此鉞で枯竹割、病の根を切る一療治」と、不忠の良藥熊川が、苦い利目ぞ手ひどけれ。「ヤア云はして置けば樣々のたは言、早立歸れ」と引立つる、手先を摑んで引かづき、眞逆樣にづでんだう。刑「まう赦されぬ」と刀の鯉口、「ヤレ、暫く待たれよ刑部殿、熊川氏も早ま

之助樣、刑部樣へ御挨拶、ソレ早うおつしやりませ、申し〳〵」と氣を揉めば、「ヤア挨拶とは何の事ぢや」「エヽほんにしん氣な事では有るぞ、マア下へおすわりなされませ。ソレナ、行儀に兩手を疊へ著いて」「オヽ呑込んだ〳〵」と、かしこまつて手をつかへ、「エヽアノ何とやら、エヽオヽそれ〳〵思ひ出した」と懷より、以前の書付取出し打詠め、「エヽ一殿樣の事」
刑「ムヽ殿樣が何と致した」「エヽさうしてからアノ、御放埒の事」「何御放埒とは、シテ〳〵サ其跡は」「ムヽ何やらで有つたが、オヽソレ〳〵、覺えぬ〳〵、あゝ〳〵斯の如くなり。ナウ松島」と譯もなき、傍には獨り氣をもむ松島、錦戸刑部苦笑ひ、「ハヽヽヽ、親に似ぬ發明人、何の事やら分らねど、御放埒といふからは、殿へ御諫言との事ならん。こりや松島の付智慧で有らう。其方の實父伊達明衡、國家老を鼻にかけ、申越したに違ひはない。此刑部は別腹故、家臣の列に加はれども、正しく義綱公の爲には現在の伯父、異見してよければ某が諫言する、いらざる女の忠義立、早歸りやれ」と傍若無人、橫紙破りに松島も、何と詞もなき折から、荒くれ男の天窓付、仰反鬢も鉞に、くゝり付けたる夏紅葉、遠慮會釋も門の口、ずつと這入つて上り口、「今日は爰に大金持の宿這入が有つて、榮耀榮華のほたえ次第、奢次第と聞いた故、どうで薪でもついした物では賣れまいと、思ひ付いたコレ此紅葉、賣りに來た此男、サア買うて貰ひましよ、

よと竊の文、舅御様へ申上げても聞入れなく、御諫言もなされぬは、どう思召すお心やら、あんまり心ならぬ故、及ばずながら殿様へ、御異見を申し上げうと思うても女の身、お前を楯に云ふ爲、最前から申した事、よう覺えなされましたかえ」「ヤア、ムウ、イヽヤ、先にから云やつた事、餘り長うて一つも覺えぬぞや。マウ大概な事なら、覺えさせずとよしにしやいなう」「エヽつんとマウ譯も無い事ばかり、コレ最前から申した通り」「ア、待ちやく、むつかしい事ぢや故、宙では覺えぬ。コレたしなみ持つて居る」と、鼻紙袋の石筆に、「サア今一遍云うて聞かしや」「サア殿様のお身持御放埓」「アヽコレくく其様に長ういふ事はない、筋ばかりで後はおれが胸に在る。マア、一殿様の事、さうしてから」「サア館へもお歸りなく、晝夜を分かぬ御放埓」「ムヽよしく御放埒の事、まう是でよいく、大概心覺えは書いて置いた、サアサア早う内へ往なう」「エヽ又何をおつしやるぞいなう、殿の御目にもかゝらぬ先、内へ歸つてよい物かいな」「アヽほんにさうぢやなう」「コレ申し、必々行儀やう、何にもお忘れなされな」と、伴ひ這入る門の口、「誰ぞお取次頼みましよ」と、音なふ聲に奥よりも、立出づる錦戸刑部、「ムヽコレハく貝田の子息源之助、松島との夫婦連、扨は殿の御機嫌伺ひ、お出での樣子某が、後程宜しく披露せん」と、いへど答へもうつかりひよん。松島は氣の毒さ、「コレ源

殿の身請、いか程と極めては世間の聞え、夫に積んだる千兩箱、其方が力次第、持たれるだけは持つて歸れ」と、云ふに才助猶悄り、夢では無いか夢にでも、こんな嬉しい有難い、うまい事が有る物か、たとへ肱は折れるとも、存分取らいで置くべきかと、薪の繩切これ幸、金箱手早に七つ八つ、しつかとくゝり肩腰入れ、上げてもく\いつかなく\、爰らが男の辛抱と、總身の力を肩に入れ、心は矢竹とはやれども、次第々々に精根盡き、息切れ目廻ひ汗だらく\、「エヽ扨もく\此樣な、因果な事が有る物か、寶の山へ入りながら、持つ事ならぬは金持に、ならぬといふ印か」と、涙ながらにこつてこて、取りへぐ箱のうらめしく、殘多げに漸と、一つ擔げる獨言、ひよろく\く\く\してぞ立歸る。「ハヽヽヽても扨も弱いやつ、アヽ是では又減らし樣を工夫せずば成るまい。刑部も奧へ。太夫もおぢや」と、うつかりおんくわの御大將、金花咲く陸奧を、心がけたる錦戶が、「いざ御入」と打連れて、奧の一間に入りにけり。山道も、都なればや和らかに、育がらなる風俗は、十七八の角額、貝田勘解由直勝が一子源之助、立派作の大小も、角菱立たぬのつとり顏、跡に付添ふぼつとりは、伊達明衡が娘松島、夫婦といふは名ばかりの、まだ盛り見ぬ躑躅山、妼家來はかたへに殘し、打連れ來る庵の戶口、「申し申し源之助樣、道々も申す通り、殿樣の惰弱の御身持、國にござる嬶樣から、御異見申し上げ

「ヤ義様も夫にござるか」義「ホヽ高尾が親方、何と思うて」「エヽ何と思うてとは、お前は〳〵滅相なお方ぢや。此親方にも心得させず、禿遣手まで引連れて、大門へも断無し、行方が知れぬ故、こちの内は上を下へとまぜかへす中に、去方から高尾を身請、云うて來ても肝心の、玉が知れぬで方々へ、尋歩く此才助、サア〳〵高尾早う來い。但しは高尾が身請金、今請取れば云分なし、あちらへ遣らうか金渡すか、サア〳〵どうぢや」と高聲は、お定なるせりふなり。「コリヤ才助、わが云ふ事はとんと分からぬ、高尾はおれと宿這入したれば、どつこいも遣る事ならぬ」「サアそんなら身請なさるゝか」「ヤ其身請とは何の事ぢや」「身請といふは太夫が身の代」「サア其身の代とは」「エヽ合點の悪い、コレ太夫を爰に置きたくば、金を此才助にお渡しなされと申す事」「ムヽ金か、初からさういへば濟む事を、ソレ其積んで有る金を、望次第に持つていね」と、仰に見附ける千兩箱、「ヤア〳〵〳〵、世は末世に及んでも、有る處には有る物ぢやな。したがあんまり金過ぎて、直の云ひ出し様がない。エヽ斯うつ、ソレヨ三百兩では、イヤイヤあんまり安い、六百兩かい、六百兩ではまうけが少い。いつそ飛んで千兩か、エヽ夫でもどうやら安さうな。エヽコリヤどう云はう」と目もうろ〳〵、金に噎せるぞ道理なり。刑部聲かけ、「ヤイ〳〵才助とやら、何をうろ〳〵、誰有らう冠者太郎義綱公の御臺所に定る高尾

呑込ませ、先千兩箱一ツ二ツ、先々へ預けて置き、夫からお二人差向ひで、遊んでは食ひ、食ひては遊び、うか〳〵とする内に、三十日といふ恐しい物が來ると、書出しと云ふ物を持つて、常は笑顔のよい親仁が、其日は急にこはい頰、其時にアレアノ金箱、其儘では遣はれぬ。四文錢と云ふ物に取りかへて、さらり〳〵と拂うてしまふ。又金がない時には、質といふ物を置かねばならぬ、是が又重寶な物、代物を持つて行くと、錢でも金でも二朱銀でも、望次第に換へておこす」「ア、まて〳〵荒灘、大概は承知したが、今の質の所が大分面白い、アノ金を早う皆無にして、其質が早う仕て見たい。が又何にもなう成つたりや」「イヤ其時は此刑部が掛屋方へ申付け、何萬兩でも差上げる」「ハテナ、金といふ物は澤山に有る物ぢやなア、モウ遣ひやうは覺えた〳〵。マア今云つた米や薪、そして味噌鹽とやらいふ物、荒灘ちよつと買うて見せい」「ハヽ畏り奉る、ハヽ白米壹斗薪四五把、和らか炭一俵、此直段が斯うと千兩ぐらゐで有るで有ろ。イザ家來中手分して、追付け買つて參らん」と、金箱かたげ立出づる、家來が締める草鞋の、はるかの里へと出でて行く。すれ違うたるまかい道、夫者と見える本田わげ、一つに合はす裏襟も、黑い顏付三浦屋才助、うろ〳〵見廻す門の口、「ちと物がお尋ね申したい、もし此處らに冠者太郎義綱樣といふお大名の店越しはござりませぬか。ヤア太夫か」高「オヽ才助樣ようお出」

入の御壽、刑部樣より御家見、車に積みしは金子の箱、お心付いたる御音物、ソレ〳〵內へ舁き入れよ」はつと皆々立寄つて、數も限らぬ千兩箱、積み上げ〳〵上板も、しわるばかりに並べ置く。義綱公は打詠め、「ム丶粹な刑部が進物なら、何ぞ面白い器物で有ろと樂しんで居たに、金子の箱とは、ム丶マア見た所が面白うもない物、アリヤマア何の役に立つ物ぢや」と、不興に刑部兩手を突き、「ハ御誕生有つてより外を御存じなき御身、御不審は御尤、某がお勸め申し、今日只今百姓とお成りなさるれば、只今までとは違ひ、殿と高尾樣とお二人にて、世帶方をなされねばならぬ。其世帶と申すには、いかで叶はぬ物は金、掛屋方へ申付け、アノ箱の中に千兩づつ、金高は三萬兩」「サア其樣に云うても、其金とやらいふ物を、どうするのぢや合點が行かぬ」荒「イヤ其儀は荒灘めが申上げ奉らん、何事も御存じなき御殿樣、今までは御家老方、お小姓近習用人なんど、あまた役人承り、何から何まで致せども、是からは御自身に世帶方をなされにやならぬ。先第一の立物は米、是も今日より米屋と申す者の方へ、太夫樣でもお出でなされ、彼の米屋より五升でも一斗でも、かますといふ物に入れて持つて參る、夫を食に拵へるには、薪と申す物を遣はにやならぬ。其薪屋にて和らか炭一俵、是は早く火がおこり、女中方には調法な物、夫より味噌鹽醬油、現金では扱せはしいもの、そこで是を置替と申す物に

わいらをお客におれが料理、太夫も今朝から精出して、米洗うたり粥焼いたり、ヤモ大體面白い事ぢやない。こんな事なら遠から百姓に成る物を、何の因果で大名に生れた事ぢや。マア第一何を云付けても、ハア〳〵といふて、何一つ無いといふ事のない其不自由さ、女子どもは女子どもで、曲輪の張とは違うて、爰へこい、ハア帯解け、ハア、足上げい、ハアと、此樣に思ふ樣に物事が行ては、モ世に生きてゐる甲斐はない。ヤほんに客人達も嘸退屈、ソレ太夫、家渡りがゆが出來たら、お客方を奥の間へ、おりや膳立」と何事も、珍らし盛りたわいなく、頓、夏二人「そんなら奥でお祝ひ申さう」殿「サア〳〵こちへ」と打連れて、奥の座敷へ入りにける。折から表賑ひて、唄 彼船岡の〳〵、アレハサノ宿這入の門に彳みて、アレハサノお目出たい、ヤンラお目出たい、ヨオイヨイヨオイヨイ〳〵、ヨオイ〳〵アレハサノエ、ヨオイトコナ、アレハサノエ、コレハサノエ、〳〵、ヨイコノエイヤラナ、〳〵、もしも山の手の、天から大事の小娘が、落ちたら喧嘩に成るまいか、ヨオイヨイトコナ、よい〳〵よいやな。聲も揃への染頭巾、坂道を押す大八車、門口に引付けて、「御新宅の御祝儀に、一つしめましよ。ヨイ〳〵、モ一つせい、ヨイ〳〵、祝うて三度、ヨイ〳〵〳〵」滅多無性に目出たがる、顏は錦戸、殿「ヤア刑部か、珍らしいしやれ姿、跡なは荒灘風之助、車に乘せたはアリヤ何ぢや」「今日殿樣高尾樣、御宿這

ら、嘸お嬉しうござりませうな」「サア此樣にお目出たう、宿這入の御祝儀に呼ばれるといふ事は、ほんに〳〵此頓吉、太鼓冥加に叶うたといふ物、なうお夏」「アイ私も大勢の太夫樣方を廻したれど、此樣に內方へ來るといふは是が始、だん〳〵とお居黑めなされて、お二人の中に和子樣も出來る樣、アヽイヤ申し太夫樣、釜の下がきつう熅るぞえ、そして何ぢややら無性に好い匂ひが。トレ〳〵、どうでよう燒きはさんすまい、ソレ其火吹竹といふ物を、テモ堅い木ぢや、コレ頓吉樣見やしやんせ」「ヤアこりや堅い筈ぢや、伽羅の節木ぢや。ハヽどうでも大名の宿這入は違うた物ぢや、極樂世界と喜見城、彼の唐土の阿房宮、三千世界に有るとあらゆる結構づくしを集めても、又と有るまい指向ひ、大方粥は金色の、菩薩の世話事床がため、御新宅の地形がため、唄ヤア目出たた〳〵の若松樣よ、枝も榮える葉も茂る、お目出たいよのお目出たい、千秋萬歲〳〵萬々歲。「ハヽヽ、コリヤ頓吉目出たい〳〵、皆知つてゐる通、此の高尾が突出しから逢ひかよつて、每晚々々通ひ詰める此の義綱、せまい廓の居續にとんと氣がつまり切り、どうぞ氣の替つた事がしたいと思ふ內、アノ錦戶刑部といふは、誠はおれが伯父なれど、今では家老同然、流石血筋程有つて、顏に似合はぬ粹親仁、此樣に家を建て、太夫とおれとたつた二人、百姓と云ふ者の眞似をして、大名事は忘れてしまへと、おれが勸めに此處へ引越し、

伽羅先代萩

天地の開け始めし昔より、今にかはらぬ妹と背の、契の末の樂しみは、女夫暮しの世帶事、手鍋提げるが眞實の、誠の戀の睦言や、五十四郡の御主、冠者太郎義綱公、今日吉辰の宿這入、都離れし舟岡の、山の麓に手を盡し、綺羅を磨きし葛屋ぶき、勝手賑ふ客まうけ、島原に名も高尾とて、盛あらそふ太夫職、手づから炊ぐ白水も、流の粹な襷がけ、御大將はまな板に、きざむ鱠も五分切の、國分煙草を禿の楓、「お氣が盡けう」と長ぎせる、「ホヽコリヤよう氣が付いた。コレ太夫、イヤこちの女房ども、そなたもさつきにから米洗うて、定めて肩がつかへう、マア〱一休したがよい」「アイ〱、私より殿樣の、仕付けもなされぬ切りきざみ、嘸お肩が痛みませう、よつ程久しう洗うたりや、是で大方よいで有ろ、是からお粥をしかけう」と、いふに楓が小利口に、二人して舁く米炊桶、二つ竈に金の釜、玉をのべたる玉だすき、伽羅割よりも持たぬ手に、割木の刺もいた〱し。奥より太鼓遣手の夏、「ヤレ〱、お二人樣なが

浄瑠璃名作集 下 目録

天明二年春、江戸市村座にて大當りを取りたる狂言を淨瑠璃に作れるなり

壇浦兜軍記　享保十七年九月九日　竹本座

作者　文耕堂、長谷川千四

加賀見山舊錦繪　天明二年正月二日　外記座

作者　容揚黛

大正四年三月　校訂者　松山米太郎

緒言

本巻収むる所のもの七篇、其の外題、作者、年代次の如し。

伽羅先代萩　天明五年正月　結城座

作者　松貫四、高橋茂兵衛、吉田角丸

逆櫓松矢箙梅　ひらがな盛衰記　元文四年四月十一日　竹本座

作者　文耕堂、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲

聟君は源家の類葉嫁君は平家の落人　蝶花形名歌島臺　寛政五年七月十六日　豐竹座

作者　若竹笛躬、中村魚眼

御所櫻堀川夜討　元文二年正月二十八日　竹本座

作者　文耕堂、三好松洛

あしゆん傳兵衛　近頃河原達引　天明五年五月五日

作者　爲川宗輔、筒井半二、奈河七五三助

浄瑠璃名作集

下